

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第522集

ほろたい
袈帯遺跡発掘調査報告書

一般国道340号和井内地区道路改築事業関連発掘調査

2008

岩手県宮古地方振興局土木部
(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

褰帶遺跡発掘調査報告書

一般国道340号和井内地区道路改築事業関連発掘調査



巽帯遺跡遠景（南から）



18号住居跡



縄文土器集合写真



斧状土製品集合写真

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を越す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財の保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、一般国道340号和井内地区道路改築事業に関連して平成18年に行われた宮古市豊帯遺跡の調査成果をまとめたものです。今回の調査で縄文時代中期後葉～末葉の竪穴住居跡36棟を検出し、本遺跡が縄文時代中期の大きな集落遺跡であることが分かりました。宮古市域には同時代の集落遺跡が幾つかみつかっていますが、またその一つとして新たに本遺跡が加えられ、周辺地域の縄文時代を知る大きな手がかりとなることが期待されます。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました岩手県宮古地方振興局土木部、宮古市教育委員会に感謝いたします。

平成20年2月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 武 田 牧 雄

例 言

- 1 本報告書は、岩手県宮古市和井内第21地割字二十划30-4ほかに所在する装帯遺跡の発掘調査成果を収録したものである。
- 2 装帯遺跡の岩手県遺跡登録台帳による遺跡番号と遺跡略号は、以下の通りである。
遺跡番号・・・L F 19-2060
遺跡略号・・・H T-06
- 3 本遺跡の調査は、一般国道340号和井内地区道路改築事業に伴う緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課の調整を経て、岩手県宮古地方振興局土木部から委託を受けた財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 調査期間・調査面積・調査担当者は以下の通りである。
調査期間 平成18年5月1日～11月10日
調査面積 8,698㎡
調査担当者 須原 拓・戸根貴之
- 5 室内整理期間と整理担当者は以下の通りである。
室内整理期間 平成18年11月1日～平成19年3月31日
整理担当者 須原 拓・戸根貴之
- 6 本報告書の執筆は須原と戸根が行い、文末にそれぞれ名前を記した。また編集は須原が担当した。
- 7 出土遺物の鑑定、分析は次の機関に依頼した。
石 質 鑑 定：花崗岩研究会
炭化材の同定：木炭協会
火山灰の同定：(株)バリノサーヴェイ (第Ⅶ章)
炭化物の年代測定：(株)古環境研究所 (第Ⅶ章)
- 8 基準点測量および航空写真撮影は次の機関に委託した。
基準点測量：(株)釜石測量設計
航空写真撮影：(株)東邦航空
- 9 本文中に表記する国家座標値は世界測地系によるものである。
- 10 野外調査では、岩手県宮古地方振興局土木部、宮古市教育委員会、並びに遺跡周辺の住民の方々にご協力いただいた。深く感謝いたします。
- 11 調査成果の一部は、現地説明会資料や「平成18年度調査報告書」においても公表しているが、本書との記載事実が異なる場合は、すべて本報告書を優先するものとする。
- 12 本遺跡の出土遺物及び諸記録等については、岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

凡 例

1 遺構について

(1) 本文中の図版縮尺

以下を原則とし、各図版にはスケールを付している。

平面・断面：1/50 如の平面・断面：1/30

(2) 遺構断面の上層注記

野外調査の際、土層の観察記録については以下の項目を基本とし、記録した。

色調（「標準土色帖」（農林水産省農林技術会議局監修）を基準とする）

粘性（4段階表示：強い、やや強い、やや弱い、弱い）

しまり（4段階表示：密、やや密、やや疎、疎）

混入物の有無（混入量は5段階表示：微量 1～10%・少量 11～20%・

中量21～30%・やや多い31～40%・多量41～50%）

2 遺物について

(1) 本文中の図版縮尺

以下を原則とし、各図版にはスケールを付している。

縄文土器：個体（1/3）・破片資料（1/4）

石器：2/3・1/3

古銭：1/1

(2) 遺物の各部位の呼称について

土器の各部位の呼称については次ページ「凡例図（遺物）」に示したものを基準とした。

また石器の各部位の呼称についても凡例図に示したものを基準とし、観察表に表記した質量もこれに準拠し、計測を行った。

(3) 観察表の表記項目について

層位・器種・残存部位・分類・外面（文様、縄文、手法）、内面調整・色調（外・内面）・混入物・焼成について観察し、記載している。

また文様については、できる限り、口唇部（「唇」と表記）、口縁部（「口」と表記）、胴部（「胴」と表記）、底部（「底」と表記）に分けて記載している。なお、無文の場合は特に記載していない。

胎上は土器の表面、断面を観察し、含まれる砂粒（「砂」と表記）・石英（「石」と表記）・雲母（「雲」と表記）・白色粒子（「白」と表記）といった混入物を記載した。

焼成は土器の断面を観察し、断面にみられる黒色層を基準としてA、B、Cの3段階に分類し、記載した。分類基準は以下の通り。

A→断面に黒色層がみとめられないもの。焼成が良好なものと思われる。

B→断面の中央部のみ黒色層がみとめられるもの。焼成は良好であるが、Aほど土器に火が回っていないもの。

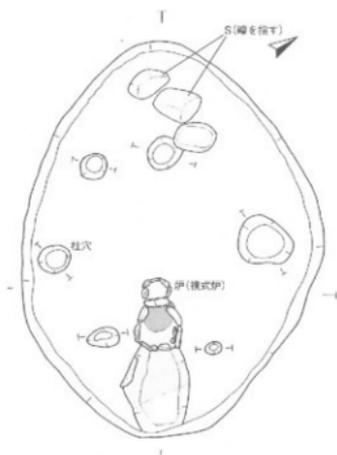
C→断面の半分以上が黒色層であるもの。焼成の際の火回りが悪く、焼成が悪いもの。

色調は外内面について記載した。観察に際しては「標準土色帖」（農林水産省農林技術会議局監修）に示される色調を基準とし、土色名のみを観察表に記した。

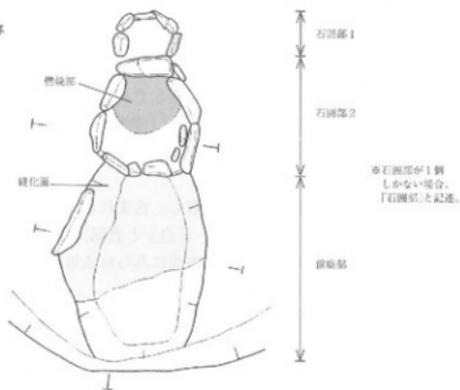
(4) 遺物の出土量について

土器は重量（g）、土製品・石器は点数（点）で表記している。土器については出土したものが完形から小片まで様々であり、点数で表記するのは難しいので重量を用いた。

竪穴住居跡



複式炉の部位呼称



目 次

| | | |
|------|------------------------|-----|
| I | 調査に至る経過 | 1 |
| II | 遺跡の立地と環境 | |
| 1 | 遺跡の位置と地理的環境 | 1 |
| 2 | 周辺の遺跡 | 3 |
| III | 調査の経過と方法 | |
| 1 | 野外調査について | 5 |
| 2 | 室内整理について | 6 |
| IV | 遺物の分類基準 | |
| 1 | 縄文土器、土製品 | 8 |
| 2 | 石器 | 10 |
| V | 基本層序と調査区内の地形について | 11 |
| VI | 検出した遺構と遺物 | |
| 1 | 概 要 | 16 |
| 2 | 縄文時代の遺構と遺物 | |
| (1) | 縄文時代前期の遺構 | 18 |
| (2) | 縄文時代中期の遺構 | 20 |
| (3) | 縄文時代晩期の遺構 | 188 |
| (4) | 遺構外から出土した遺物 | 189 |
| 3 | 中・近世の遺構と遺物 | 195 |
| VII | 自然科学分析 | |
| 1 | 放射性炭素年代測定結果報告書 (AMS測定) | 200 |
| 2 | 火山灰分析 | 206 |
| VIII | ま と め | 211 |
| | 報告書抄録 | 372 |

図版目次

| | | | | | |
|------|------------------|----|------|---------------|----|
| 第1図 | 岩手県図 | 2 | 第43図 | 12号住居跡(2) | 55 |
| 第2図 | 遺跡位置図 | 2 | 第44図 | 12号住居跡(3) | 56 |
| 第3図 | 新里地区の遺跡分布 | 5 | 第45図 | 12号住居跡(4) | 57 |
| 第4図 | グリッド図 | 7 | 第46図 | 12号住居跡(5) | 58 |
| 第5図 | 遺構配置と基本層序 | 12 | 第47図 | 12号住居跡出土遺物(1) | 59 |
| 第6図 | 遺構配置図(1) | 13 | 第48図 | 12号住居跡出土遺物(2) | 60 |
| 第7図 | 遺構配置図(2) | 14 | 第49図 | 13号住居跡(1) | 61 |
| 第8図 | 遺構配置図(3) | 15 | 第50図 | 13号住居跡(2) | 62 |
| 第9図 | 1号住居状遺構、1号土坑 | 18 | 第51図 | 13号住居跡出土遺物 | 62 |
| 第10図 | 1号住居状遺構、1号土坑出土遺物 | 19 | 第52図 | 14号住居跡(1) | 64 |
| 第11図 | 1号住居跡(1) | 21 | 第53図 | 14号住居跡(2) | 65 |
| 第12図 | 1号住居跡(2) | 22 | 第54図 | 14号住居跡出土遺物(1) | 66 |
| 第13図 | 1号住居跡出土遺物(1) | 22 | 第55図 | 14号住居跡出土遺物(2) | 67 |
| 第14図 | 1号住居跡出土遺物(2) | 23 | 第56図 | 14号住居跡出土遺物(3) | 68 |
| 第15図 | 2号住居跡 | 24 | 第57図 | 14号住居跡出土遺物(4) | 69 |
| 第16図 | 2号住居跡出土遺物 | 25 | 第58図 | 15号住居跡 | 70 |
| 第17図 | 3号住居跡、2号土坑 | 27 | 第59図 | 15号住居跡出土遺物 | 71 |
| 第18図 | 3号住居跡 | 28 | 第60図 | 16号住居跡(1) | 72 |
| 第19図 | 3号住居跡出土遺物 | 29 | 第61図 | 16号住居跡(2) | 73 |
| 第20図 | 4号住居跡 | 30 | 第62図 | 16号住居跡(3) | 74 |
| 第21図 | 4号住居跡出土遺物 | 31 | 第63図 | 16号住居跡出土遺物(1) | 75 |
| 第22図 | 5-A・B号住居跡 | 33 | 第64図 | 16号住居跡出土遺物(2) | 76 |
| 第23図 | 5号住居跡出土遺物 | 34 | 第65図 | 16号住居跡出土遺物(3) | 77 |
| 第24図 | 6号住居跡 | 35 | 第66図 | 16号住居跡出土遺物(4) | 78 |
| 第25図 | 6号住居跡出土遺物 | 36 | 第67図 | 17号住居跡 | 79 |
| 第26図 | 7号住居跡 | 37 | 第68図 | 17号住居跡出土遺物 | 80 |
| 第27図 | 8号住居跡(1) | 38 | 第69図 | 18号住居跡(1) | 81 |
| 第28図 | 8号住居跡(2) | 40 | 第70図 | 18号住居跡(2) | 83 |
| 第29図 | 8号住居跡出土遺物(1) | 41 | 第71図 | 18号住居跡(3) | 84 |
| 第30図 | 8号住居跡出土遺物(2) | 42 | 第72図 | 18号住居跡(4) | 86 |
| 第31図 | 9号住居跡出土遺物(1) | 43 | 第73図 | 18号住居跡拡張変遷図 | 87 |
| 第32図 | 9号住居跡出土遺物(2) | 44 | 第74図 | 18号住居跡出土遺物(1) | 88 |
| 第33図 | 10号住居跡(1) | 45 | 第75図 | 18号住居跡出土遺物(2) | 89 |
| 第34図 | 10号住居跡(2) | 46 | 第76図 | 18号住居跡出土遺物(3) | 90 |
| 第35図 | 10号住居跡出土遺物(1) | 47 | 第77図 | 18号住居跡出土遺物(4) | 91 |
| 第36図 | 10号住居跡出土遺物(2) | 48 | 第78図 | 18号住居跡出土遺物(5) | 92 |
| 第37図 | 11号住居跡(1) | 49 | 第79図 | 19号住居跡 | 93 |
| 第38図 | 11号住居跡(2) | 50 | 第80図 | 19号住居跡出土遺物 | 93 |
| 第39図 | 11号住居跡出土遺物(1) | 51 | 第81図 | 20号住居跡 | 95 |
| 第40図 | 11号住居跡出土遺物(2) | 52 | 第82図 | 20号住居跡出土遺物 | 96 |
| 第41図 | 11号住居跡出土遺物(3) | 53 | 第83図 | 21号住居跡(1) | 97 |
| 第42図 | 12号住居跡(1) | 54 | 第84図 | 21号住居跡(2) | 98 |

| | | | | | |
|-------|-------------------------|-----|-------|-------------------------|-----|
| 第85回 | 21号住居跡出土遺物 (1) | 99 | 第130回 | 34号住居跡出土遺物 | 146 |
| 第86回 | 21号住居跡出土遺物 (2) | 100 | 第131回 | 35号住居跡 | 147 |
| 第87回 | 22号住居跡 | 101 | 第132回 | 35号住居跡出土遺物 (1) | 148 |
| 第88回 | 22号住居跡出土遺物 | 102 | 第133回 | 35号住居跡出土遺物 (2) | 149 |
| 第89回 | 23号住居跡 | 103 | 第134回 | 36号住居跡 | 150 |
| 第90回 | 23号住居跡出土遺物 | 104 | 第135回 | 36号住居跡出土遺物 | 151 |
| 第91回 | 24・25号住居跡 (1) | 105 | 第136回 | 2号住居跡遺構 | 152 |
| 第92回 | 24・25号住居跡 (2) | 106 | 第137回 | 2号住居跡遺構出土遺物 | 152 |
| 第93回 | 24・25号住居跡出土遺物 (1) | 107 | 第138回 | 3号住居跡遺構 | 153 |
| 第94回 | 24・25号住居跡出土遺物 (2) | 108 | 第139回 | 3号住居跡遺構出土遺物 | 153 |
| 第95回 | 26号住居跡 | 110 | 第140回 | 4号住居跡遺構 | 154 |
| 第96回 | 26号住居跡出土遺物 | 111 | 第141回 | 4号住居跡遺構出土遺物 | 154 |
| 第97回 | 27号住居跡 (1) | 112 | 第142回 | 5号住居跡遺構 | 155 |
| 第98回 | 27号住居跡 (2) | 113 | 第143回 | 6号住居跡遺構 | 156 |
| 第99回 | 27号住居跡出土遺物 | 113 | 第144回 | 6号住居跡遺構出土遺物 | 156 |
| 第100回 | 28号住居跡 (1) | 115 | 第145回 | 7号住居跡遺構 | 157 |
| 第101回 | 28号住居跡 (2) | 116 | 第146回 | 7号住居跡遺構出土遺物 | 157 |
| 第102回 | 28号住居跡 (3) | 117 | 第147回 | 8号住居跡遺構 | 158 |
| 第103回 | 28号住居跡 (4) | 118 | 第148回 | 8号住居跡遺構出土遺物 | 158 |
| 第104回 | 28号住居跡出土遺物 (1) | 119 | 第149回 | 9号住居跡遺構 | 159 |
| 第105回 | 28号住居跡出土遺物 (2) | 120 | 第150回 | 10号住居跡遺構 | 160 |
| 第106回 | 28号住居跡出土遺物 (3) | 121 | 第151回 | 10号住居跡遺構出土遺物 | 160 |
| 第107回 | 28号住居跡出土遺物 (4) | 122 | 第152回 | 11号住居跡遺構、3号土坑 | 161 |
| 第108回 | 29号住居跡 | 123 | 第153回 | 11号住居跡遺構群出土遺物 (1) | 162 |
| 第109回 | 29号住居跡出土遺物 | 123 | 第154回 | 11号住居跡遺構群出土遺物 (2) | 163 |
| 第110回 | 30号住居跡 (1) | 125 | 第155回 | 11号住居跡遺構群出土遺物 (3) | 164 |
| 第111回 | 30号住居跡 (2) | 126 | 第156回 | 12号住居跡遺構 | 165 |
| 第112回 | 30号住居跡 (3) | 127 | 第157回 | 12号住居跡遺構出土遺物 | 165 |
| 第113回 | 30号住居跡 (4) | 128 | 第158回 | 13号住居跡遺構 | 166 |
| 第114回 | 30号住居跡出土遺物 (1) | 129 | 第159回 | 14号住居跡遺構 | 167 |
| 第115回 | 30号住居跡出土遺物 (2) | 130 | 第160回 | 14号住居跡遺構出土遺物 | 167 |
| 第116回 | 30号住居跡出土遺物 (3) | 131 | 第161回 | 4～13号土坑 | 169 |
| 第117回 | 30号住居跡出土遺物 (4) | 132 | 第162回 | 14～22号土坑 | 170 |
| 第118回 | 30号住居跡出土遺物 (5) | 133 | 第163回 | 23～31号土坑 | 172 |
| 第119回 | 30号住居跡出土遺物 (6) | 134 | 第164回 | 32～38号土坑 | 173 |
| 第120回 | 30号住居跡出土遺物 (7) | 135 | 第165回 | 39～48号土坑 | 175 |
| 第121回 | 31号住居跡 (1) | 136 | 第166回 | 49～57号土坑 | 176 |
| 第122回 | 31号住居跡 (2) | 137 | 第167回 | 58～64号土坑 | 177 |
| 第123回 | 31号住居跡出土遺物 (1) | 138 | 第168回 | 土坑出土遺物 | 178 |
| 第124回 | 31号住居跡出土遺物 (2) | 139 | 第169回 | 1号掘立柱建物 | 181 |
| 第125回 | 32・33号住居跡 (1) | 141 | 第170回 | 2号掘立柱建物 | 182 |
| 第126回 | 32・33号住居跡 (2) | 143 | 第171回 | 3号掘立柱建物 | 183 |
| 第127回 | 32号住居跡出土遺物 | 144 | 第172回 | 掘立柱建物出土遺物 | 184 |
| 第128回 | 33号住居跡出土遺物 | 144 | 第173回 | 柱穴状土坑出土遺物 | 185 |
| 第129回 | 34号住居跡 | 145 | 第174回 | 包含厩籠面図 | 186 |

| | | | | | |
|-------|----------------|-----|-------|----------------|-----|
| 第175回 | 包含層出土遺物 | 187 | 第188回 | 放射性炭素年代測定結果(2) | 205 |
| 第176回 | 37号住居跡 | 188 | 第189回 | 火山灰同定分析結果(1) | 209 |
| 第177回 | 37号住居跡出土遺物 | 188 | 第190回 | 火山灰同定分析結果(2) | 210 |
| 第178回 | 遺構外出土遺物・前期 | 190 | 第191回 | 卑・前期土器 | 212 |
| 第179回 | 遺構外出土遺物・中期(1) | 191 | 第192回 | 中期後葉～末葉土器(1) | 214 |
| 第180回 | 遺構外出土遺物・中期(2) | 192 | 第193回 | 中期後葉～末葉土器(2) | 215 |
| 第181回 | 遺構外出土遺物・後晚期 | 193 | 第194回 | 後・晚期土器 | 216 |
| 第182回 | 遺構外出土遺物・石器(1) | 194 | 第195回 | 遺構変遷図(1) | 218 |
| 第183回 | 遺構外出土遺物・石器(2) | 195 | 第196回 | 遺構変遷図(2) | 219 |
| 第184回 | 中、近世墓位置図 | 196 | 第197回 | 遺構変遷図(3) | 220 |
| 第185回 | 中、近世墓 | 197 | 第198回 | 縄文土器属性分析 | 224 |
| 第186回 | 中、近世墓出土古銭 | 198 | 第199回 | 石器属性分析 | 226 |
| 第187回 | 放射性炭素年代測定結果(1) | 204 | | | |

表 目 次

| | | | | | |
|-----|--------------|-----|------|--------------|-----|
| 第1表 | 周辺の遺跡一覧 | 4 | 第8表 | 放射性炭素年代測定結果 | 203 |
| 第2表 | 遺構名新旧対応表 | 7 | 第9表 | 参考資料：暦年較正川年代 | 203 |
| 第3表 | 遺構別出土遺物一覧(1) | 16 | 第10表 | 土器観察表 | 230 |
| 第4表 | 遺構別出土遺物一覧(2) | 17 | 第11表 | 土製品観察表 | 249 |
| 第5表 | 上坑一覧表(1) | 179 | 第12表 | 石器観察表 | 251 |
| 第6表 | 土坑一覧表(2) | 180 | 第13表 | コハク観察表 | 253 |
| 第7表 | 柱穴状土坑一覧表 | 184 | 第14表 | 占隴観察表 | 253 |

写真図版目次

| | | | | | |
|--------|--------------|-----|--------|-----------|-----|
| 写真図版1 | 調査区全景 | 256 | 写真図版18 | 14号住居跡 | 273 |
| 写真図版2 | 基本層序、1号住居状遺構 | 257 | 写真図版19 | 14・15号住居跡 | 274 |
| 写真図版3 | 1号住居状遺構、1号上坑 | 258 | 写真図版20 | 15・16号住居跡 | 275 |
| 写真図版4 | 1号住居跡 | 259 | 写真図版21 | 16・17号住居跡 | 276 |
| 写真図版5 | 2号住居跡 | 260 | 写真図版22 | 17・18号住居跡 | 277 |
| 写真図版6 | 3号住居跡・2号上坑 | 261 | 写真図版23 | 18号住居跡 | 278 |
| 写真図版7 | 4号住居跡 | 262 | 写真図版24 | 19号住居跡 | 279 |
| 写真図版8 | 5号住居跡 | 263 | 写真図版25 | 20号住居跡 | 280 |
| 写真図版9 | 6号住居跡 | 264 | 写真図版26 | 21号住居跡 | 281 |
| 写真図版10 | 7号住居跡 | 265 | 写真図版27 | 22号住居跡 | 282 |
| 写真図版11 | 8号住居跡 | 266 | 写真図版28 | 23号住居跡 | 283 |
| 写真図版12 | 9号住居跡 | 267 | 写真図版29 | 24・25号住居跡 | 284 |
| 写真図版13 | 10号住居跡 | 268 | 写真図版30 | 25・26号住居跡 | 285 |
| 写真図版14 | 11号住居跡 | 269 | 写真図版31 | 26・27号住居跡 | 286 |
| 写真図版15 | 12A・B号住居跡 | 270 | 写真図版32 | 27・28号住居跡 | 287 |
| 写真図版16 | 12・13号住居跡 | 271 | 写真図版33 | 28号住居跡 | 288 |
| 写真図版17 | 13号住居跡 | 272 | 写真図版34 | 29・30号住居跡 | 289 |

| | | | | | |
|--------|---------------------------|-----|---------|-----------------------------------|-----|
| 写真図版35 | 30号住居跡…………… | 290 | 写真図版78 | 16号住居跡出土土器(2)…………… | 333 |
| 写真図版36 | 31号住居跡…………… | 291 | 写真図版79 | 16号住居跡出土土器(3)…………… | 334 |
| 写真図版37 | 32号住居跡…………… | 292 | 写真図版80 | 17・18号住居跡出土土器…………… | 335 |
| 写真図版38 | 33～35号住居跡…………… | 293 | 写真図版81 | 18号住居跡出土土器(1)…………… | 336 |
| 写真図版39 | 35・36号住居跡…………… | 294 | 写真図版82 | 18号住居跡出土土器(2)…………… | 337 |
| 写真図版40 | 36・37号住居跡…………… | 295 | 写真図版83 | 18～20号住居跡出土土器…………… | 338 |
| 写真図版41 | 37号住居跡、2号住居状遺構…………… | 296 | 写真図版84 | 20・21号住居跡出土土器…………… | 339 |
| 写真図版42 | 2・3号住居状遺構…………… | 297 | 写真図版85 | 22・23号住居跡出土土器…………… | 340 |
| 写真図版43 | 4・5号住居状遺構…………… | 298 | 写真図版86 | 24・25号住居跡出土土器…………… | 341 |
| 写真図版44 | 6・7号住居状遺構…………… | 299 | 写真図版87 | 24～27号住居跡出土土器…………… | 342 |
| 写真図版45 | 7・8号住居状遺構…………… | 300 | 写真図版88 | 28号住居跡出土遺物(1)…………… | 343 |
| 写真図版46 | 9・10号住居状遺構…………… | 301 | 写真図版89 | 28号住居跡出土遺物(2)…………… | 344 |
| 写真図版47 | 10・11号住居状遺構・3号土坑…………… | 302 | 写真図版90 | 28～30号住居跡出土遺物…………… | 345 |
| 写真図版48 | 12・13号住居状遺構…………… | 303 | 写真図版91 | 30号住居跡出土遺物(1)…………… | 346 |
| 写真図版49 | 13・14号住居状遺構…………… | 304 | 写真図版92 | 30号住居跡出土遺物(2)…………… | 347 |
| 写真図版50 | 4～7号土坑…………… | 305 | 写真図版93 | 30号住居跡出土遺物(3)…………… | 348 |
| 写真図版51 | 8～12号土坑…………… | 306 | 写真図版94 | 30号住居跡出土土器(4)…………… | 349 |
| 写真図版52 | 13～16号土坑…………… | 307 | 写真図版95 | 30号住居跡出土土器(5)…………… | 350 |
| 写真図版53 | 17～20号土坑…………… | 308 | 写真図版96 | 30号住居跡出土土器(6)…………… | 351 |
| 写真図版54 | 21～24号土坑…………… | 309 | 写真図版97 | 31号住居跡出土土器…………… | 352 |
| 写真図版55 | 25～28号土坑…………… | 310 | 写真図版98 | 31～34号住居跡出土土器…………… | 353 |
| 写真図版56 | 29～32号土坑…………… | 311 | 写真図版99 | 35・36号住居跡出土土器…………… | 354 |
| 写真図版57 | 33～36号土坑…………… | 312 | 写真図版100 | 1～11号住居状遺構出土遺物…………… | 355 |
| 写真図版58 | 37～40号土坑…………… | 313 | 写真図版101 | 11号住居状遺構出土土器…………… | 356 |
| 写真図版59 | 41～44号土坑…………… | 314 | 写真図版102 | 11～14号住居状遺構・ 土坑出土土器…………… | 357 |
| 写真図版60 | 45～49号土坑…………… | 315 | 写真図版103 | 土坑出土土器…………… | 358 |
| 写真図版61 | 50～53号土坑…………… | 316 | 写真図版104 | 土坑、掘立柱建物、包含層、 37号住居跡出土土器…………… | 359 |
| 写真図版62 | 54～58号土坑…………… | 317 | 写真図版105 | 包含層、遺構外出土土器…………… | 360 |
| 写真図版63 | 59～62号土坑…………… | 318 | 写真図版106 | 遺構外出土土器(1)…………… | 361 |
| 写真図版64 | 63・64号土坑…………… | 319 | 写真図版107 | 遺構外出土土器(2)…………… | 362 |
| 写真図版65 | 1～3号掘立柱建物…………… | 320 | 写真図版108 | 遺構外出土土器(3)…………… | 363 |
| 写真図版66 | 1～5号墓(近世墓)…………… | 321 | 写真図版109 | 1～9号住居跡出土土器…………… | 364 |
| 写真図版67 | 1号住居状遺構、 1号土坑出土土器…………… | 322 | 写真図版110 | 10・11号住居跡出土土器…………… | 365 |
| 写真図版68 | 1～3号住居跡出土土器…………… | 323 | 写真図版111 | 12～14号住居跡出土土器…………… | 366 |
| 写真図版69 | 3～8号住居跡出土土器…………… | 324 | 写真図版112 | 14～18号住居跡出土土器…………… | 367 |
| 写真図版70 | 8・9号住居跡出土土器…………… | 325 | 写真図版113 | 21～36号住居跡、 8・11号住居状遺構出土土器…………… | 368 |
| 写真図版71 | 10号住居跡出土土器…………… | 326 | 写真図版114 | 遺構外出土土器、 中・近世墓出土古銭…………… | 369 |
| 写真図版72 | 10・11号住居跡出土土器…………… | 327 | 写真図版115 | コハク(1)…………… | 370 |
| 写真図版73 | 12号住居跡出土土器…………… | 328 | 写真図版116 | コハク(2)…………… | 371 |
| 写真図版74 | 13・14号住居跡出土土器…………… | 329 | | | |
| 写真図版75 | 14号住居跡出土土器…………… | 330 | | | |
| 写真図版76 | 14・15号住居跡出土土器…………… | 331 | | | |
| 写真図版77 | 16号住居跡出土土器(1)…………… | 332 | | | |

I 調査に至る経過

曇帯遺跡は、「一般国道340号和井内地区道路改築事業」道路改良工事の実施に伴い、その事業区域内に位置することから、発掘調査を実施することとなったものである。

一般国道340号和井内地区は、宮古市（旧新里村）の西北部に位置する。本路線は陸前高田市を起点とし、青森県八戸市に至る幹線道路であるにもかかわらず、河川沿いの地形的制約から1車線しかなく、大型貨物車両のみならず、一般車両のすれ違いにも支障をきたしている。また、歩道が設置されている区間もごく一部であり、歩行者・自転車と混在し、安全で円滑な交通が確保されていない状況にある。

このことから、これらの交通障害を解消し、交通の安全と円滑化、地域の生活改善を図るとともに、災害に強い道づくりと地域間交流を促進するため事業着手したものである。

当該事業の実施に係る埋蔵文化財の取扱いについては、宮古地方振興局土木部から平成17年9月13日付け宮地土第329号「道路改築事業における埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」により岩手県教育委員会に対して試掘調査を依頼した。

依頼を受けた岩手県教育委員会は、平成17年9月26、27日に試掘調査を実施し、工事着手するには曇帯遺跡の発掘調査が必要となる旨を平成17年10月17日付け教生第1041号「道路改築事業における埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により当土木部へ回答してきた。

その結果を踏まえて当土木部は岩手県教育委員会と協議し、調整を受けて平成18年4月3日付けで財団法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

（宮古地方振興局土木部）

II 遺跡の立地と環境

1 遺跡の位置と地理的環境

曇帯遺跡は岩手県宮古市和井内第21地割字三十四30-4ほかに所在する。北緯39度41分50秒、東経141度43分20秒に位置し、国土地理院発行の2万5,000分の1地形図「和井内」(NJ-54-13-6-2)の図幅に含まれる。

本遺跡は閉伊川の支流にあたる、刈屋川の西岸に形成された河岸段丘上の低位から中位段丘面（砂礫段丘Ⅰ）に立地し、標高188～194mを測る。刈屋川の現河床面との比高差は20m前後である。刈屋川は北西から南西へと流れ、閉伊川に合流する。刈屋川の南西両岸すぐそばまで、標高500～900mの山々がほぼ南北方向に連なっており、刈屋川によって形成された河岸段丘面も幅500m程度の平坦面にすぎない。曇帯遺跡はそのような狭小な場所に立地している。

また刈屋川は、北から南へと緩やかに傾斜し、閉伊川と合流しており、そのため河岸段丘面も北から南へと緩やかに傾斜している。

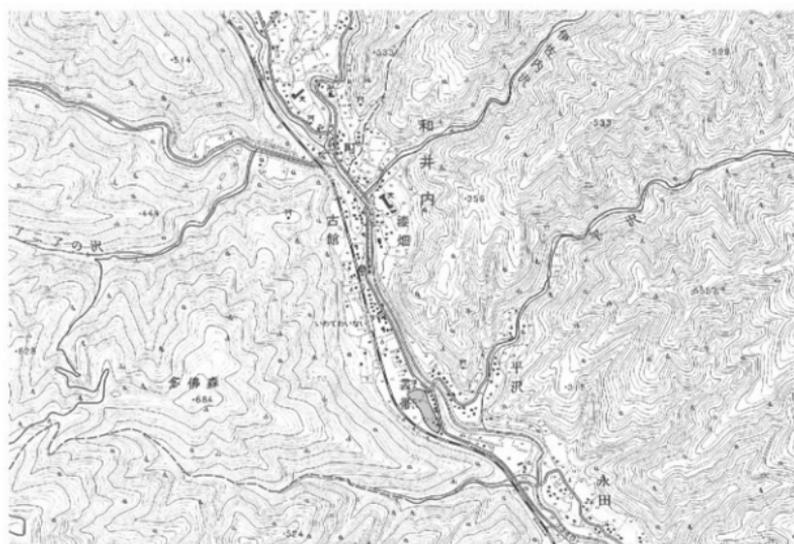
刈屋川周辺の地質は、主に古生層の堆積岩類（角岩、砂岩、粘板岩）からなり、上流の一部には花崗岩の貫入が見受けられる。

調査前の状況は畑地であった。

（須原）



第1図 岩手県図



第2図 遺跡位置図

2 周辺の遺跡 (第3図、第1表)

岩手県教育委員会のまとめによると、県内には12072箇所の遺跡が確認されている(平成18年3月末現在)。宮古市内には578箇所の遺跡が所在し、このうち、新里地区には46箇所が登録されている。

新里地区の遺跡を概観すると、多くは刈屋川および閉伊川に沿って形成された狭小な河岸段丘及び谷底平野上に分布するが、刈屋川および閉伊川に注ぐ小河川及び沢沿いに分布する遺跡もある。第3図、第1表で新里地区に所在する遺跡の位置及び一覧を示した。なお、新里地区では、旧新里村時代を含めて遺跡詳細分布調査は行われていない。このため、未登録の遺跡も多くあると思われる、今後新たに発見される可能性も考えられる。

時期別に見ると、約7割にあたる33箇所は縄文時代の遺跡である。刈屋川沿いに顕著な分布が見られ、閉伊川沿いの分布と比べると対照的である。発掘調査が行われている遺跡が少ないこともあり、縄文時代の中でも時期がはっきりしている遺跡は少ない。草創期・早期の遺跡は確認されておらず、上松森(1)や和井内金堀場(7)、腹帯A(46)の各遺跡でようやく前期の土器が出土する。中期以降になると和井内東遺跡や永田I遺跡、永田III遺跡のように、遺跡数は前期と比べて増加してゆく。

弥生時代から奈良・平安時代に帰属する遺跡は新里地区では少ない。しかし、和井内東遺跡や刈屋道の角遺跡のように、弥生土器や土師器が出土する遺跡も数は少ないが存在する。

中世になると、藁日・茂市・刈屋地域に城館跡が多く存在する。腹帯・和井内地域にも城館跡は存在するが、藁日・茂市・刈屋地域と比べると少ない。佐々木四郎高綱という源氏の武将の館と伝えられる腹帯館(44)では鎌倉期の武具(兜)が発見されている。

ところで、新里地区で埋蔵文化財調査が実施されたのは、平成元年の腹帯配石遺構群が最初である。以降、腹帯・刈屋・和井内地域の計5遺跡で調査が行われている。うち、永田III遺跡は当センターで調査したが、その他は旧新里村教育委員会が調査している。以下で調査された遺跡の概要を記す。

〈腹帯地域〉腹帯配石遺構群(45)では、国道106号道路改築に伴う内容確認調査が行われ、縄文時代中期及び後期の配石遺構、立石遺構、平安時代の堅穴住居跡などが見つかり、土器・土製品・石器などが出土した。

〈刈屋地域〉刈屋道の角遺跡(28)では、給食センター整備に伴う発掘調査が行われ、縄文時代の土坑、配石遺構、炭土遺構が見つかり、縄文時代中期以降の土器、弥生土器、石器、土製品類が出土した。また、刈屋道の角遺跡に調査が入るまで、新里地区の遺跡のほとんどは縄文時代のもと考えられてきたが、土師器が出土したことから、新里地区において古代の人々の生活が窺われるきっかけとなった。

永田I遺跡(14)、永田III遺跡(16)では、国道340号の道路改築に伴う発掘調査が行われた。永田I遺跡では、縄文時代中期末～後期の堅穴住居跡や土坑、縄文土器が、永田III遺跡では、石垣跡をもつ住居や土坑、縄文土器(中期～晩期)、弥生土器、石器などが見つかった。

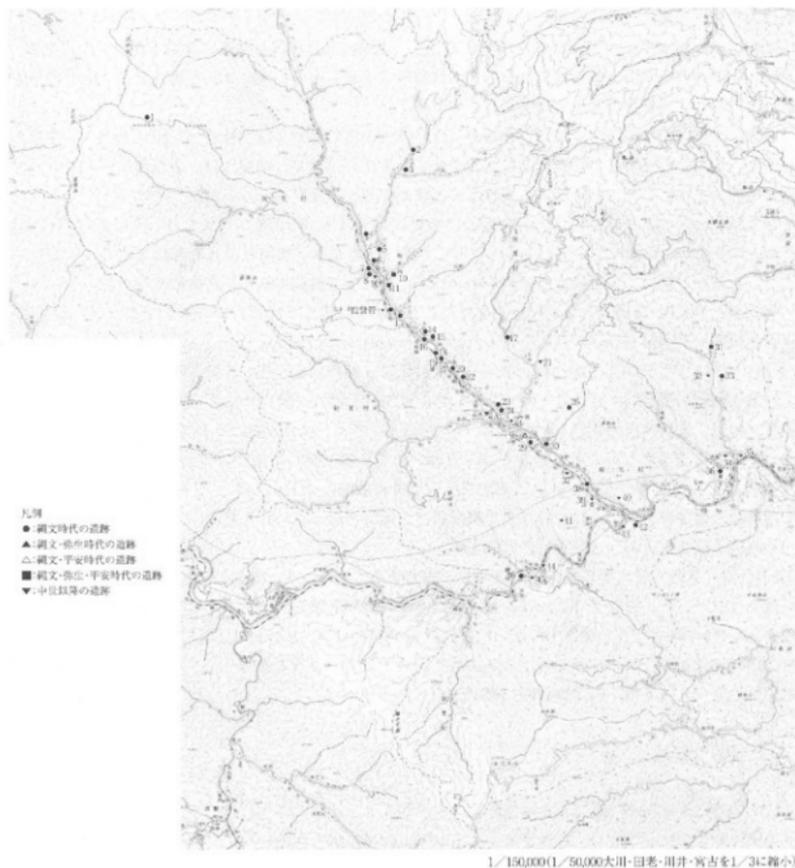
〈和井内地域〉腹帯遺跡の北約1.2kmに位置する和井内東遺跡(10)では、ふるさと団地宅地造成に係る発掘調査が行われ、縄文時代中期～後期、弥生時代、平安時代の遺構・遺物が見つかった。なお、和井内東遺跡では1976年にパレオパラドキシアの円筒とともに縄文時代晩期から弥生時代にかけての土器が出土したことも知られている(小田野 1985)。(戸根)

第1表 周辺の遺跡一覧

| No | 遺跡名 | 時代 | 種別 | 検出遺構・出土遺物 | 所在地 (宮古市は省略) | 調査経緯 調査主体 |
|----|---------------|----------|-----|---|-----------------|--------------|
| 1 | 上松森 | 縄文 | 散布地 | 縄文土器(前期) | 和井内字松森 | |
| 2 | 岩穴人家 | 縄文 | 散布地 | 縄文土器 | 和井内字岩穴 | |
| 3 | 戸塚跡合 | 縄文 | 散布地 | 縄文土器 | 和井内字戸塚 | |
| 4 | 和井内清水 | 縄文 | 散布地 | 縄文土器 | 和井内字清水 | |
| 5 | 和井内平片 | 縄文 | 散布地 | 土器、鉄片 | 和井内字平片 | |
| 6 | 和井内西 | 縄文 | 散布地 | 土器、石鏃、石錐、石斧 | 和井内字西 | |
| 7 | 和井内全廻場 | 縄文 | 散布地 | 縄文土器(前期) | 和井内第5地割 | |
| 8 | 和井内水呑田 | 縄文 | 散布地 | 縄文土器(晚期) | 和井内字水呑田 | |
| 9 | 和井内館 | 中世 | 城跡跡 | 菅蓑、空堀 | 和井内字水呑田 | |
| 10 | 和井内東 | 縄文・弥生・平安 | 城跡跡 | 竪穴住居跡、縄文土器(中～後期)、弥生土器、土師器、銅片、鉄滓 | 和井内字大森立 | H12 村教委 |
| 11 | 和井内茶場 | 縄文 | 散布地 | 縄文土器 | 和井内字津御 | |
| 12 | 奥帯 | 縄文 | 集落跡 | 竪穴住居跡、土坑、縄文土器(前・中期)、石鏃、石錐、石鏃、磨製石斧、舟形土製品ほか | 和井内第23地割 | |
| 13 | 平川新沼 | 縄文 | 散布地 | 縄文土器 | 和井内 | |
| 14 | 永田Ⅰ | 縄文 | 集落跡 | 竪穴住居、土坑、縄文土器(中～後期) | 刈屋第2地割 | H13、H14 村教委 |
| 15 | 永田Ⅱ | 縄文 | 散布地 | 縄文土器 | 刈屋第2地割 | |
| 16 | 永田Ⅲ | 縄文 | 散布地 | 竪穴住居(縄文)、縄文土器(中～晚期)、弥生土器、石鏃、磨石 | 刈屋第3地割 | H14 町歴史文 |
| 17 | 北山曲沢 | 縄文 | 散布地 | 縄文土器 | 刈屋字北山 | |
| 18 | 刈屋中里 | 縄文 | 散布地 | 縄文土器、銅片 | 刈屋字中里 | |
| 19 | 刈屋中里Ⅱ | 縄文 | 散布地 | 縄文土器 | 刈屋第4地割 | |
| 20 | 刈屋丹野 | 縄文 | 散布地 | 縄文土器(中期) | 刈屋字七ヶ清水 | |
| 21 | 刈屋館 | 中世 | 城跡跡 | 菅蓑、空堀 | 刈屋字北山 | |
| 22 | 刈屋一の波 | 縄文 | 散布地 | 縄文土器 | 刈屋字丹野 | |
| 23 | 刈屋惣石 | 縄文 | 散布地 | 縄文土器 | 刈屋字日向 | |
| 24 | 刈屋日向 | 縄文 | 散布地 | 縄文土器(晚期)、石鏃、石斧他 | 刈屋字日向 | |
| 25 | 刈屋館(高松館) | 中世 | 城跡跡 | 菅蓑、空堀 | 刈屋字稻場 | |
| 26 | 刈屋敷 | 縄文 | 散布地 | 縄文土器 | 刈屋字打手ヶ割 | |
| 27 | 刈屋古館 | 中世 | 城跡跡 | 郭、菅 | 刈屋字稻場島野 | |
| 28 | 刈屋道の角 | 縄文・平安 | 散布地 | 配石、土塚、弥生土器、石鏃、石錐、石斧、土師器 | 刈屋字上野 | H8 村教委 |
| 29 | 清水野 | 縄文 | 散布地 | 縄文土器(中期)、礫石 | 刈屋字上野 | |
| 30 | 下刈屋A・B | 縄文 | 散布地 | 縄文土器、石鏃、石錐、石斧 | 刈屋字打手ヶ割 | |
| 31 | 二又島野 | 縄文 | 散布地 | 縄文土器 | 藤目字二又 | |
| 32 | 荒矢館 | 中世 | 城跡跡 | 主郭、二の郭、腰郭、空堀 | 藤目字日向目苗 | |
| 33 | 奥堂館(草刈館・二又奥堂) | 中世 | 城跡跡 | 主郭、二の郭、腰郭 | 藤目字日向橋次 | |
| 34 | 藤目館(二塚口館・赤坂館) | 中世 | 城跡跡 | 菅蓑、空堀、鉄滓 | 藤目字日向永田 | |
| 35 | 丹波館(藤目吉館) | 中世 | 城跡跡 | 主郭、腰郭、空堀 | 藤目字日向丹敷 | |
| 36 | 藤目A・B | 縄文 | 散布地 | 縄文土器、石鏃、石錐、石斧 | 藤目字上野 | |
| 37 | 香多門館 | 中世 | 城跡跡 | 主郭、腰郭、空堀 | 藤目字日向和美 | |
| 38 | 和美美久屋 | 縄文 | 散布地 | 縄文土器 | 茂市字和美美 | |
| 39 | 茂市古館 | 中世 | 城跡跡 | 主郭、腰郭 | 茂市字日向岸角地 | |
| 40 | 茂市館 | 中世 | 城跡跡 | 菅蓑、空堀 | 茂市字日向 | |
| 41 | のろし地 | 中世 | 城跡跡 | 堀、土器、竪穴 | 茂市字日向岸角地 | |
| 42 | 茂市雲南 | 縄文 | 散布地 | 縄文土器、石鏃、石錐、磨石他 | 茂市字獨立 | |
| 43 | 茂市新郷 | 縄文・弥生 | 散布地 | 縄文土器、弥生土器 | 茂市字獨立 | |
| 44 | 茂市館 | 中世 | 城跡跡 | 空堀、鎌倉期武具(奥) | 茂市字館 | |
| 45 | 茂市配石遺構群 | 縄文・平安 | 集落跡 | 竪穴住居(平安)、立石、配石、土器、石鏃、石斧 | 茂市字下野 | H元、H2 村教委 |
| 46 | 茂市A | 縄文 | 散布地 | 土器、石鏃、石錐、石斧他 | 茂市字下野 | |

調査経緯・調査主体の略号

H：平成 村教委・新屋村(現宮古市)教育委員会(～H17) 県組文：若手県文化振興事業団組織文化財センター



第3図 新里地区の遺跡分布

Ⅲ 調査の経過と方法

1 野外調査について

〈方法〉平面直角座標（第X系）（世界測地系）に合わせ、調査区全体を覆うように碁盤目状のグリッドを設定した。グリッドは、100m四方の大区画に区分後、大区画を4m四方の小区画に細分し、大区画・小区画それぞれ北から南へ算用数字、西から東へアルファベットを付す。この組み合わせにより、1 A 1 aのように名称を付した（詳細は第4図遺構配置図のマス目参照）。グリッド設定に係る杭の打

設は、笠石測量設計(株)に委託した。

試掘・表土除去では、任意にトレンチを設定し、土層の堆積状況と遺構の存否を把握した。遺構・遺物が確認されなかった範囲はこれをもって調査終了とする一方、確認された場合は、その上面を面的に広げるように重機で表土を除去した。

表土除去後、遺構検出・精査にとりかかった。遺構名称については、種別毎に記号を定め、番号を付した。検出した遺構は、規模に応じて2分法と4分法を選択し、精査した。各遺構については、平面、断面、また、必要に応じ遺物出土状況の実測図作成・写真撮影を行った。

写真撮影は、主に35mm判カメラを用い、必要に応じ6×7cm判カメラを用いた。撮影時には、35mm判カメラに撮影状況を記したカードをその都度写し込み、現像後これを元に整理できるようにした。これとは別に、10月10日に東邦航空(株)に委託して遺跡の航空写真撮影を行った。

実測は、平面図・断面図とも縮尺1/20を基本とし、必要に応じて縮尺1/10の図を作成した。この他、遺構配置図・現況地形図等の作成を行った。

〈経過〉平成18年1月23日付け教生第1490号文書による調整に基づき、5月1日から9月15日の予定で、調査面積8,698㎡^(註)を対象として開始した。調査は、調査区南側から北に向かって順次試掘・表土除去の後、遺構検出・精査に着手した。うち、当センターによる試掘で、JR岩手県和井内駅寄り2,100㎡については遺構がないことが分かり、5月18日に委託者・岩手県教育委員会(以下県教委と表記)立会いのもと部分終了確認を行い、調査終了とした。調査の進展につれ、残り6,598㎡の部分で大幅な遺構数の増加が判明し、11月10日まで調査期間が延長となった。11月2日に委託者・県教委立会いのもと終了確認を行い、11月10日に撤収した。

〈普及活動〉10月7日に現地説明会を開催し、調査成果を公表した(参加者54名)。この他、北上市立埋蔵文化財センター職員(7月16日)、宮古地方振興局土木部職員(7月27日)、岩手県出納局職員(9月5日)、宮古市立薮日・茂市・刈屋・和井内の各小学校児童(9月19日、21日)、宮古市立新里中学校生徒(10月16日)による現地見学があった。また、和井内小学校児童(6月26日)、岩泉町立小本中学校生徒(9月1日)の発掘体験に対応した。

2 室内整理について

室内整理は平成18年11月1日から開始し、平成19年3月30日に終了した。

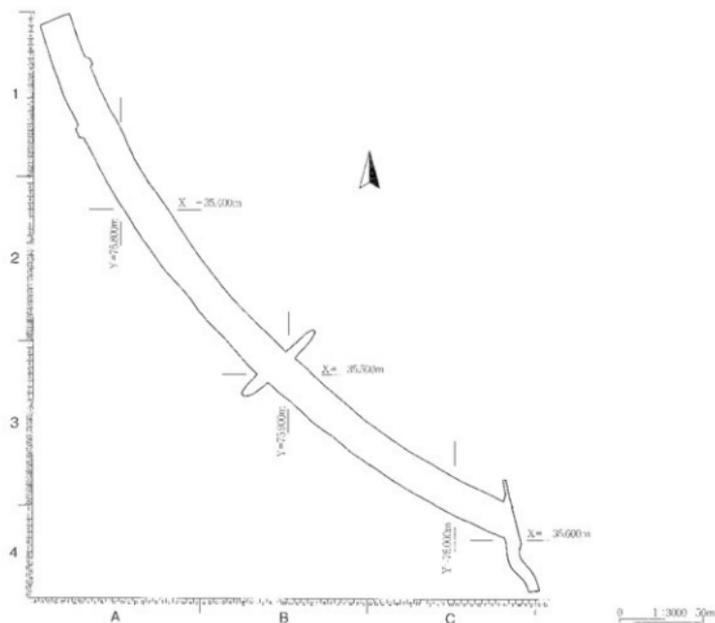
遺構は第2原因図を作成し、これをもとにトレースの後図版を作成した。図には縮尺を示すスケールを付し、また、方位マークにより座標北を示した。

遺物は当センターにおいて、水洗、注記、接合・復元、写真撮影、実測・拓影作成、トレース、図版作成の作業を作業員が分担して行った。

調査員は上記作業統括と並行し、掲載資料選別、第2原因図・遺物観察表作成、原稿執筆等を行った。

(註)当初調整面積は8,400㎡であったが、細部の計算をしたところ8,698㎡あることが判明した。なお、面積変更については、平成18年11月20日付け教生第1113号として県教委から通知があった。

(戸根)



第4図 グリッド図

第2表 通橋名新旧対応表

| 橋 名 | 旧橋名 | 橋 名 | 旧橋名 | 通 橋 名 | 旧通橋名 | 通 橋 名 | 旧通橋名 |
|---------|--------|----------|----------|-------|-------|-------|-------|
| 01号住居跡 | S 143 | 28号住居跡 | S 102 | 06号土坑 | S K84 | 35号土坑 | S K15 |
| 02号住居跡 | S 141 | 29号住居跡 | S 114 | 07号土坑 | S K77 | 36号土坑 | S K46 |
| 03号住居跡 | S 142 | 30号住居跡 | S 101 | 08号土坑 | S K76 | 37号土坑 | S K62 |
| 04号住居跡 | S 146 | 31号住居跡 | S 103 | 09号土坑 | S K75 | 38号土坑 | S K42 |
| 05号住居跡 | S 150 | 32号住居跡 | S 104 | 10号土坑 | S K89 | 39号土坑 | S K01 |
| 06号住居跡 | S 136 | 33号住居跡 | S 109 | 11号土坑 | S K90 | 40号土坑 | S K18 |
| 07号住居跡 | S 138 | 34号住居跡 | S 106・10 | 12号土坑 | S K79 | 41号土坑 | S K19 |
| 08号住居跡 | S 133 | 35号住居跡 | S 105 | 13号土坑 | S K92 | 42号土坑 | S K21 |
| 09号住居跡 | S 134 | 36号住居跡 | S 115 | 14号土坑 | S K69 | 43号土坑 | S K25 |
| 10号住居跡 | S 113 | 37号住居跡 | S 140 | 15号土坑 | S K67 | 44号土坑 | S K22 |
| 11号住居跡 | S 135 | 38号住居跡 | S 118 | 16号土坑 | S K80 | 45号土坑 | S K08 |
| 12号住居跡B | S 116b | 02号住居跡遺構 | S 147 | 17号土坑 | S K65 | 46号土坑 | S K09 |
| 12号住居跡A | S 116a | 03号住居跡遺構 | S 148 | 18号土坑 | S K61 | 47号土坑 | S K17 |
| 13号住居跡 | S 112 | 04号住居跡遺構 | S 144 | 19号土坑 | S K60 | 48号土坑 | S K11 |
| 14号住居跡A | S 119a | 05号住居跡遺構 | S K72 | 20号土坑 | S K63 | 49号土坑 | S K16 |
| 14号住居跡B | S 119b | 06号住居跡遺構 | S 145 | 21号土坑 | S K83 | 50号土坑 | S K13 |
| 15号住居跡 | S 122 | 07号住居跡遺構 | S 149 | 22号土坑 | S K68 | 51号土坑 | S K14 |
| 16号住居跡 | S 121 | 08号住居跡遺構 | S 111 | 23号土坑 | S K66 | 52号土坑 | S K15 |
| 17号住居跡 | S 130 | 09号住居跡遺構 | S 137 | 24号土坑 | S K88 | 53号土坑 | S K29 |
| 18号住居跡 | S 124 | 10号住居跡遺構 | S 131 | 25号土坑 | S K85 | 54号土坑 | S K12 |
| 19号住居跡 | S 128 | 11号住居跡遺構 | S 129 | 26号土坑 | S K48 | 55号土坑 | S K36 |
| 20号住居跡 | S 123 | 12号住居跡遺構 | S 108 | 27号土坑 | S K55 | 56号土坑 | S K34 |
| 21号住居跡 | S 125 | 13号住居跡遺構 | S 117 | 28号土坑 | S K86 | 57号土坑 | S K27 |
| 22号住居跡 | S 139 | 14号住居跡遺構 | S 120 | 29号土坑 | S K87 | 58号土坑 | S K28 |
| 23号住居跡 | S 127 | 01号土坑 | S K35 | 30号土坑 | S K53 | 59号土坑 | S K30 |
| 24号住居跡 | S 132a | 02号土坑 | | 31号土坑 | S K52 | 60号土坑 | S K31 |
| 25号住居跡 | S 132b | 03号土坑 | S K57 | 32号土坑 | S K47 | 61号土坑 | S K37 |
| 26号住居跡 | S 136 | 04号土坑 | S K82 | 33号土坑 | S K44 | 62号土坑 | S K38 |
| 27号住居跡 | S 107 | 05号土坑 | S K81 | 34号土坑 | S K41 | 63号土坑 | S K39 |
| | | | | | | 64号土坑 | S K40 |

IV 遺物の分類基準

1 縄文土器、土製品

本遺跡からは縄文時代早期から晩期の土器がみつまっている。主体となるのは縄文時代中期後葉～末葉の土器である。また中期後葉～末葉のものと思われる土製品もみつまっている。整理作業に際しては、以下のような分類を行った。まず時期毎に大別（Ⅰ～Ⅴ群）し、さらに各群について、主に文様を基準として細分している。（Ⅰ群～）

Ⅰ群

早期の土器に比定されるもの。Ⅰ点出土している。尖底土器で、器面には条痕文が施文される。

Ⅱ群

前期に比定されるもの。主に初頭から前葉の範囲に含まれる。破片資料のみで形態が復元できたものはない。文様から5分類した。

1類：口縁部に縄文圧痕による渦巻き文が描かれるもの。

2類：口縁部にS字状連鎖糸文が巡り、胴部には非結束の羽状縄文が施文されるもの。

3類：胴部片で羽状縄文が施文されるもの。

4類：斜縄文が施文されるもの。縄文原体により、4細分できる。

a種：無節（L、R） b種：単節（LR、RL） c種：複節（LRL、RLR）

d種：副々節

5類：紐紐が施文されるもの。

Ⅲ群

中期の土器に比定されるもの。すべて後葉から末葉の範囲に含まれる。文様から6分類した。本遺跡から出土したもののうち、最も多い。当然文様から時期幅があることが考えられる。なお各細分類の時期的な変遷については、第Ⅷ章において詳しく述べることとする

1類：口縁部文様帯と胴部文様帯をもつ。断面が三角形を呈する隆帯が口縁部に沿って、横位に巡り、また枝分かれして胴部へと垂下する。胴部隆帯には隆帯による渦巻き文を伴う。どちらの文様帯にも隆帯による楕円形や方形の区画文が形成され、区画内には磨消技法による縄文が施文される。

2類：1類と比べ、口縁部文様帯と胴部文様帯の境界があいまいだったり、口縁部文様帯の幅が狭いもの。口縁部には隆帯による渦巻き文が付き、その一端は胴部へと垂下するが、胴部上半で消失する。胴部には沈線や垂下する隆帯による楕円形、「 \cap 」字形などの区画文が描かれ、区画内には磨消技法による縄文が施文される。

3類：口縁部と胴部の文様帯の区別がなく、口縁部から胴部にかけて文様が縦に描かれる。沈線による楕円形、「 \cap 」字形などの区画文が形成され、区画内には、磨消技法による縄文が施文される。

4類：区画文が横どうしで結びつき、逆「 \cap 」字形などのモチーフを形成するもの。

5類：口縁部から胴部上半にかけて曲線を描く区画文が描かれる。区画内には磨消技法あるいは充填技法による縄文が施文される。胴部のほぼ中央には口縁部からの区画文に沿って波状の沈線が横位に巡り、胴部上半と下半とを区画する。胴部下半には斜縄文が施文される。

6類：口縁部、胴部の文様帯の区別なく、器面に斜縄文のみが施文されるか、あるいは無文のもの。

IV群

後期の土器に比定されるもの。主に前葉に含まれる。破片資料のみで器形が復元できるものはない。文様から4分類できる。

- 1類：細い沈線によって曲線的、あるいは幾何学的なモチーフの区画が描かれる。区画内には細かい縄文が施文され、いわゆる帯縄文を形成する。帯縄文が二段になるものも見受けられる。また口縁部に円形の刺突文がみられるものもある。
- 2類：竹管状工具による条痕文が施文されるもの。
- 3類：口縁部下に縄文圧痕が横位に巡り、胴部には斜縄文が施文されるもの。
- 4類：斜縄文を施文し、その上から、細い沈線文を直線や波状に施すもの。
- 5類：器面に斜縄文のみが施文されるもの。中期のもの(Ⅲ群6類)との区分は縄文原体で分けた。すなわち縄文原体を鑑察し、原体が細かいものを本分類とした。

V群

晩期の土器に比定されるもの。見つかったのは2点のみで前葉に含まれるものが1点と、あともう1点は斜縄文のみの深鉢であり、細かい時期は特定できない。便宜的に文様要素から2細分したが、時期などを反映したものではない。

- 1類：口縁部にいわゆる羊歯状文が描かれ、胴部に斜縄文が施文されるもの。
- 2類：口縁部は無文、胴部には斜縄文が施文されるもの。

ミニチュア土器

高さが5cm程度のもの、あるいはその程度の大きさになると推定される土器片を便宜的にミニチュア土器とした。

土製品

土製円板、斧状土製品、土製耳飾りがある。他に小片で形状から識別できないものを「不明土製品」とした。また、所謂「粘土塊」も土製品としている。いずれも中期後葉～末葉に比定される。

土製円板

深鉢などの土器片を転用したもので側面を磨滅し、整形しているもの。

斧状土製品

長方形を呈し、側面は狭く、板状の形状で文様が施文され、端部の正面か側面に穿孔が施される。それぞれ穿孔の位置や形状に特徴がある。

土製耳飾り

1点のみ出土で、全体の3分の1程度しか見つかっていない。

不明土製品

どこかしらが欠損し、小片で形状の全容が分からないものを一括した。土偶の可能性も考えられるものがあるが、決定づける点がない。

粘土塊

形状が不定形で、また不規則に工具などを刺したり押しつけた痕跡のあるもの。

2 石 器

本遺跡から、212点、11種の石器が見つかった。以下、各石器の認定基準と多く出土したものは細分類しており、その分類基準を示した。

石鏃

扁平で、二次加工により鋭角な先端部が作り出され、長さ5cm以下のもの。

石錐

二次加工により錐状の端部が作出されるもの。

石匙

突出した握み部を作出し、また二次加工により幅広い刃部が作出されたもの。3分類した。

スクレイパー

定形化した形状をもたず、縁辺部に刃部が作出されているものを一括した。刃部角度から2分類した。

1類：縁辺の半分以上に刃部が作出され、扁平で、刃部の角度が60°以下のもの。所謂、「削器」。

2類：縁辺の半分以上に刃部が作出され、刃部の角度が60°以上のもの。所謂、「搔器」。

磨製石斧

平面形が楕形、長方形を呈し、剥離や敲打によって整形された後、研磨を施して仕上げられた石斧。

磨石

大きさは長軸あるいは長径が10cm以下で、磨痕、凹痕が確認できた礫石器。

石皿類

平面形の長軸、短軸ともに10cm以上のもので、磨痕、凹痕が確認できる礫石器。

リタッチドフレイク（以下、Rフレイクと表記）

上記の分類項目からはずれた剥片石器で、刃部以外の二次加工が施されているもの。

フレイク

上記の分類項目全てからはずれた剥片石器。打面と背面の形状から以下のように分類した。

まず打面の調整具合で3分類した。

1類：自然面を打面とするもの

2類：1回、剥離作業が行われた面を打面とするもの

3類：2回以上、剥離作業が行われた面を打面とするもの。

また、背面にみられる自然面の残存状況により3分類した。

a類：背面の全てが自然面（剥離なし）

b類：背面の一部が自然面（一部のみ剥離作業が行われている）

c類：背面に自然面が見られないもの（面全体で剥離作業が行われている）

そして、これらの1～3類とa～c類とを組み合わせて9分類とした。

また打面が欠損しているものなど、分類不能なものも多く、それらについては、以下のように2分類した。

1a類：いずれかの面に自然面が残るもの。

4b類：自然面が全く残らないもの。

（須原）

V 基本層序と調査区内の地形について

裝帯遺跡の調査区は道路幅分という制約があり、北西から南東方向にかけて約400 m、幅20 mの細長い形状を呈している。遺構検出面での標高は最高値194.8 m (2 A 1 | グリッド付近)、最低値189.2 m (4 C 1 u グリッド付近)を測り、北西から南東へと傾斜している。

土層の堆積状況は調査区の数カ所を深掘りし、確認した。Ⅲ層上面が遺構検出面で、遺構の底面はⅥ層およびⅦ層になるので、したがって深掘りによる土層確認はⅦ層まで行っている。

基本層序

- I 10YR 3/1 黒褐色粘質シルト 粘性やや強 しまり密 耕作土
- II a 10YR 2/2 黒褐色粘質シルト 粘性強 しまりやや密 炭化物少量、
土壌粒子は緻密、土器多量含む
- II b 10YR 2/3 黒褐色粘質シルト 粘性強 しまりやや密 炭化物少量、
土壌粒子は緻密、土器少量含む。II a、Ⅲ層の斬移層
- III a 10YR 3/4 暗褐色粘質シルト 粘性やや弱 しまりやや密 土壌粒子は緻密
下部に火山灰ブロック偏在
- III b 10YR 4/6 褐色粘質シルト 粘性やや強 しまり密 土壌粒子は緻密
- IV 10YR 2/1 黒褐色粘質シルト 粘性やや弱 しまりやや密 土壌粒子やや緻密
層上面に火山灰ブロック偏在。
- V 10YR 4/4 褐色粘質シルト 粘性弱 しまりやや疎 土壌粒子やや粗い
IV、Ⅵ層の斬移層で砂質シルトブロックが混入する
- VI 10YR 5/6 黄褐色砂質シルト 粘性弱 しまり疎 土壌粒子粗い
- VII 10YR 4/3 黄褐色粗砂 粘性弱 しまり疎 粒径10～30mmの礫多量含む

I層は現地表面から約70cm堆積している。現在の耕作土である。

II層は縄文時代中期後葉から末葉の遺物を包含する層である。今回の調査区では「包含層」とした調査区中央部の3B8r～3B9sグリッド付近でのみ確認できた。III層との斬移層が認められ、その層も含め、二分した(II a、II b層)。なお、本遺跡の縄文時代中期の遺構埋土はII層土に類似する。

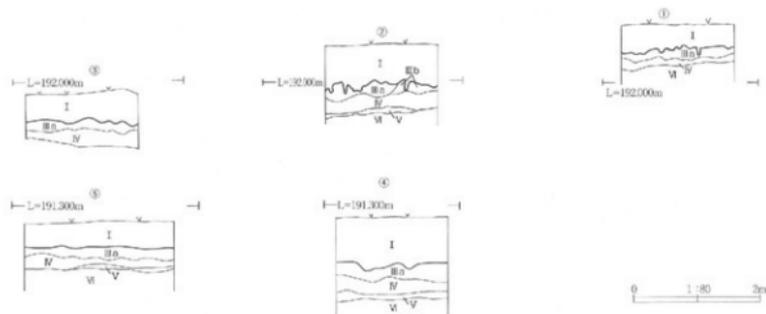
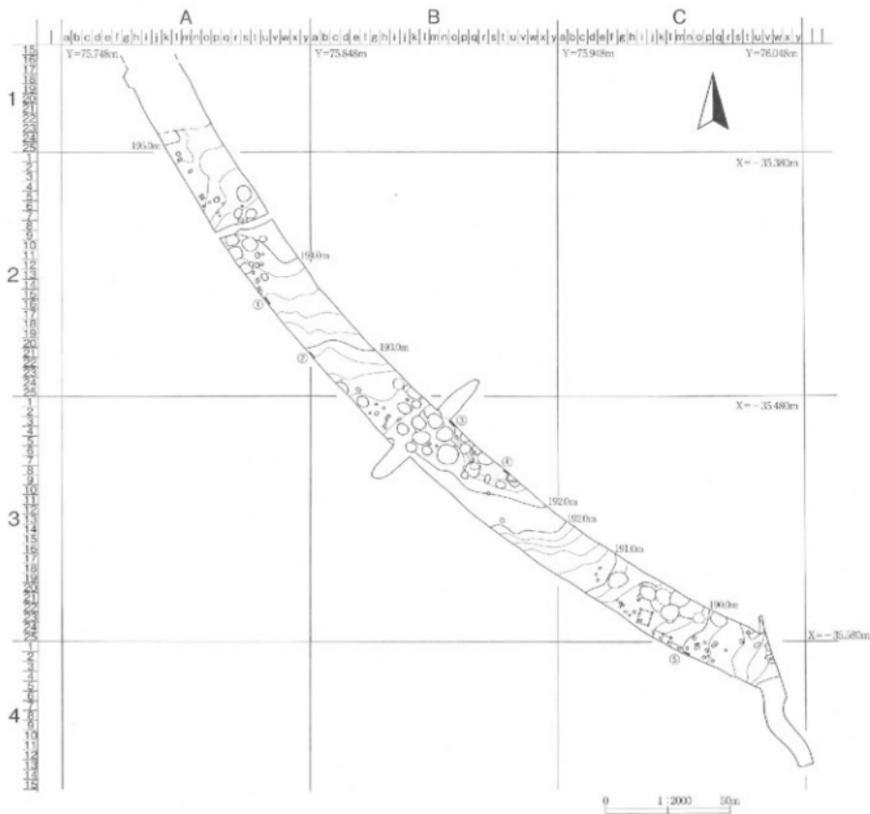
III層は遺物の混入は認められない。上面が遺構検出面である。層下部には火山灰がブロック状に混入する。なお、この火山灰については同定をおこなっている(Ⅵ「自然科学分析」を参照)。色調から2分できる(III a・III b層)場所もあるが、III a層が主体である。

IV層は土壌粒子が緻密で、また混入物は小礫の他に認められない。層上面にはIII層中に含まれたものと同じ火山灰がブロック状で混入する。主に遺構の壁面で確認されたが、浅い遺構はこの層を底面とする。色調はII層に類似しており、III層を挟んでほぼ同じ土色の土壌が堆積する。

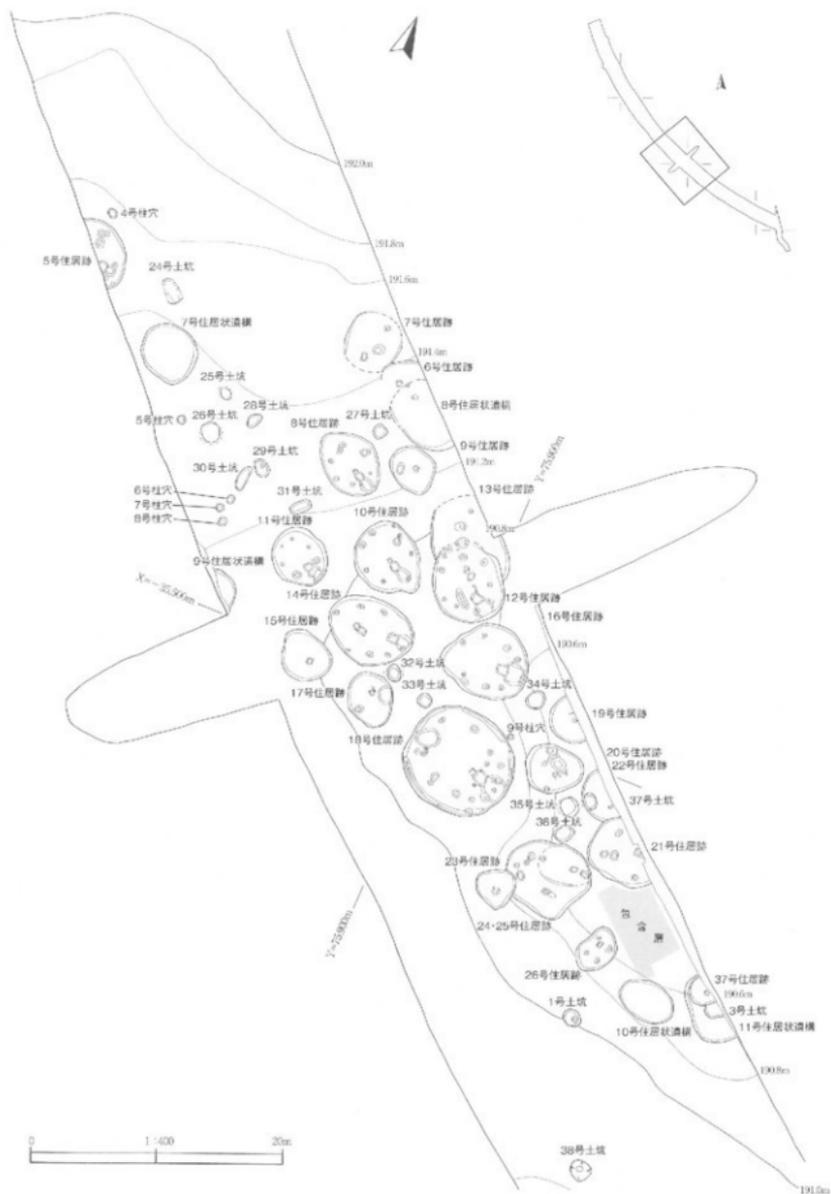
V層はIV層とⅥ層との斬移層で、土壌粒子がやや粗く、黄褐色砂質シルトが混入する。

Ⅵ層は土壌粒子が粗く、小礫が少量堆積する。遺構の多くが床面、底面とする層である。

Ⅶ層は土壌粒子が非常に粗く、10～30cm大の礫を多く含む。Ⅵ層の堆積が薄い場所では、Ⅶ層が遺構の床面、底面となる。(須原)



第5図 遺構配置と基本層序



第7図 遺構配置圖(2)



第8図 遺構配置図(3)

VI 検出した遺構と遺物

1 概要

今回の調査で検出された遺構は、縄文時代では前期前葉の住居状遺構1棟、土坑1基、中期後葉～末葉の竪穴住居跡36棟、住居状遺構14棟、貯蔵穴7基、その他の土坑57基、掘立柱建物跡3棟、柱穴状土坑14個、晩期中葉～後葉の竪穴住居跡1棟を検出しており、また他に近世墓5基も見つかった。

遺物は大コンテナ(40ℓ)で27.5箱分出土している。そのうち縄文土器は大コンテナ箱25.5箱分である。中期後葉～末葉に比定されるものが主体を占め、他に早期、前期前葉、後期前葉、晩期の土器も見つかっている。また中期後葉～末葉の土製品(斧状土製品8点、土製耳飾り1点、土製円板50点

第3表 遺構別出土遺物一覧(1)

| 遺 構 名 | 縄文土器(重量:g) | | | | | | |
|----------|------------|---------|---------|--------|--------|--------|---------|
| | 掘上中位 | 掘上中位 | 掘上中位 | 床 上 | 研 内 | 掘上中 | 合 計 |
| 1号住居跡 | 1532.2 | 0.0 | 339.7 | 397.1 | 0.0 | 12.5 | 2301.5 |
| 2号住居跡 | 33.4 | 0.0 | 19.7 | 0.0 | 55.9 | 261.9 | 370.9 |
| 3号住居跡 | 871.6 | 179.7 | 845.5 | 69.6 | 30.0 | 0.0 | 1994.3 |
| 4号住居跡 | 694.4 | 0.0 | 184.5 | 735.4 | 0.0 | 0.0 | 1614.3 |
| 5号住居跡 | 61.4 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 208.9 | 319.2 |
| 6号住居跡 | 6.0 | 0.0 | 7.7 | 1359.4 | 0.0 | 31.0 | 1459.5 |
| 7号住居跡 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 |
| 8号住居跡 | 1681.5 | 1221.1 | 644.4 | 177.6 | 0.0 | 0.0 | 3724.6 |
| 9号住居跡 | 187.4 | 192.7 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 42.0 | 422.1 |
| 10号住居跡 | 1930.8 | 2107.1 | 865.8 | 4312.4 | 628.9 | 1078.4 | 10923.4 |
| 11号住居跡 | 1118.4 | 784.0 | 970.3 | 205.7 | 0.0 | 113.6 | 3192.0 |
| 12号住居跡B | - | - | - | - | - | - | - |
| 12号住居跡B | 1739.7 | 2695.6 | 1519.6 | 94.5 | 50.5 | 994.0 | 7033.9 |
| 13号住居跡 | 433.0 | - | 1754.3 | 726.4 | - | 1214.2 | 4127.9 |
| 14号住居跡A | 6084.3 | 11460.5 | 3733.8 | 46.4 | 893.4 | 212.2 | 22970.6 |
| 14号住居跡B | - | - | - | - | - | - | - |
| 15号住居跡 | 279.9 | 367.9 | 9.2 | 0.0 | 0.0 | 1300.6 | 1957.6 |
| 16号住居跡 | 1084.2 | 1020.1 | 11556.8 | 747.9 | 10.7 | 14.2 | 40102.9 |
| 17号住居跡 | 446.6 | 951.3 | 87.1 | 187.3 | 0.0 | 76.5 | 2638.7 |
| 18号住居跡 | 7817.9 | 17380.8 | 6747.7 | 3672.9 | 1167.7 | 77.8 | 36901.8 |
| 19号住居跡 | 53.1 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 375.5 | 1360.0 | 1788.6 |
| 20号住居跡 | 1593.4 | 1106.8 | 523.3 | 12.3 | 26.4 | 392.5 | 3651.7 |
| 21号住居跡 | 2036.4 | 3536.7 | 1673.1 | 1568.2 | 0.0 | 0.0 | 9416.4 |
| 22号住居跡 | 164.3 | 950.2 | 30.1 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 1144.6 |
| 23号住居跡 | 1319.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 59.8 | 1378.8 |
| 24号住居跡 | 1635.3 | 1297.8 | 4050.3 | 871.0 | 396.7 | 1575.2 | 9826.3 |
| 25号住居跡 | - | - | - | - | - | - | - |
| 26号住居跡 | 814.4 | 225.3 | 20.4 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 1060.1 |
| 27号住居跡 | 0.0 | 0.0 | 1109.8 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 1109.8 |
| 28号住居跡 | 3.5 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 249.4 | 252.9 |
| 29号住居跡 | 14482.6 | 12976.2 | 483.6 | 21.2 | 228.5 | 53.5 | 33248.6 |
| 30号住居跡 | 0.0 | 0.0 | 48.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 48.0 |
| 31号住居跡 | 22855.7 | 32430.4 | 4184.2 | 1983.6 | 3132.2 | 1591.2 | 69882.3 |
| 32号住居跡 | 2618.5 | 4977.4 | 572.1 | 1327.2 | 0.0 | 0.0 | 9495.0 |
| 33号住居跡 | 2373.5 | 210.6 | 116.0 | 9.6 | 57.1 | 539.3 | 3306.1 |
| 34号住居跡 | 0.0 | 0.0 | 6.5 | 0.0 | 0.0 | 52.6 | 59.1 |
| 35号住居跡 | 492.0 | 460.4 | 12.8 | 0.0 | 0.0 | 120.6 | 1085.8 |
| 36号住居跡 | 1744.6 | 220.1 | 5031.3 | 7.5 | 5.9 | 2079.2 | 9988.6 |
| 37号住居跡 | 11.2 | 0.0 | 0.0 | 32.8 | 0.0 | 18.7 | 62.7 |
| 1号住居状遺構 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 4.3 | 0.0 | 342.8 | 347.1 |
| 2号住居状遺構 | 44.5 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 44.5 | 89.0 |
| 3号住居状遺構 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 315.8 | 315.8 |
| 4号住居状遺構 | 51.9 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 51.9 |
| 5号住居状遺構 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 |
| 6号住居状遺構 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 18.0 | 18.0 |
| 7号住居状遺構 | 214.7 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 214.7 |
| 8号住居状遺構 | 4.6 | 0.0 | 0.0 | 95.9 | 0.0 | 0.0 | 100.5 |
| 9号住居状遺構 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 |
| 10号住居状遺構 | 42.2 | 0.0 | 39.5 | 0.0 | 0.0 | 447.2 | 528.9 |
| 11号住居状遺構 | 4542.6 | 3600.0 | 627.5 | 1178.2 | 0.0 | 25.7 | 9974.0 |
| 12号住居状遺構 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 156.2 | 156.2 |
| 13号住居状遺構 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 |
| 14号住居状遺構 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 336.6 | 0.0 | 548.2 | 884.8 |

の遺物についてはグリッド位置と出土層を確認し、取り上げを行っている。

2 縄文時代の遺構・遺物

(1) 縄文時代前期の遺構

1号住居状遺構（第9・10図、写真図版2・3・67）

〈位置〉調査区東端、3C23uグリッドに位置する。

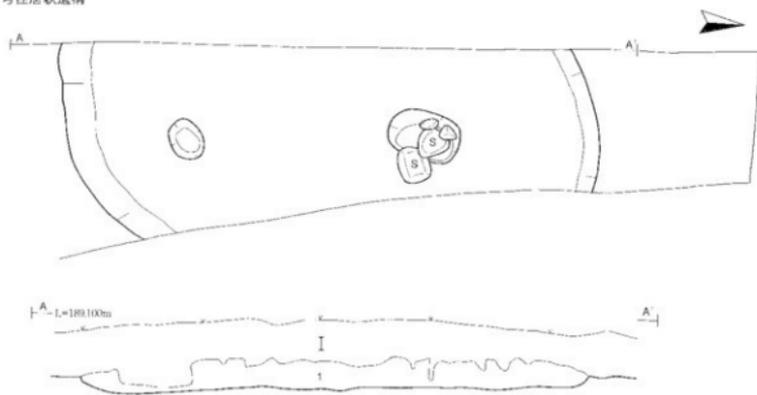
〈検出状況〉Ⅲ層上面で暗褐色のプランを検出した。本遺構は調査区東端に北側へと突出した調査区内でのみ検出した。掘り下げたところ縄文土器片が出土し、調査区壁の上層で壁の立ち上がりを確認し、遺構と判断した。検出できた部分で伊が検出しなかったため、住居状遺構とした。

〈重複関係〉なし。ただし、本遺構は調査区外で13号住居状遺構と重複しているものと推定される。

〈形態・規模〉本遺構は遺構外に及んでおり、全容は不明である。残存する部分から不整な円形を呈するものと推測される。検出できた部分は5.3×2.0mを測る。

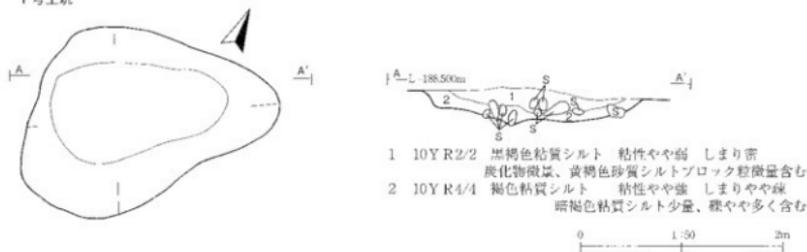
〈埋土〉黒褐色粘質シルトを主体とする単層である。

1号住居状遺構



1 10Y R2/3 黒褐色粘質シルト 粘性強 しまりやや密 炭化物中量含む

1号土坑



第9図 1号住居状遺構、1号土坑

〈床面・壁〉Ⅶ層面を床面とする。ほぼ平坦であるが、礫が露出しており、細かい凹凸がある。硬化面は認められない。壁は緩やかに外へと広がりながら立ち上がる。

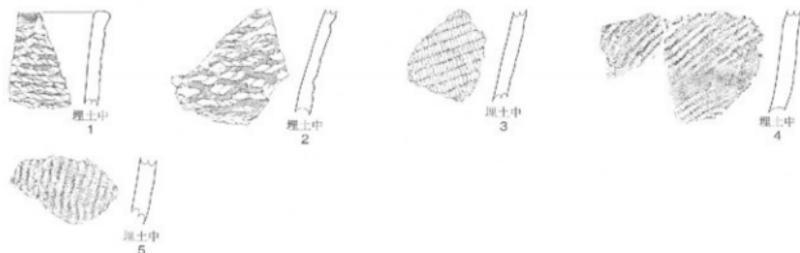
〈その他〉柱穴2個を検出した。

〈出土遺物〉縄文土器347.1gが出土した。若干底面上から出土したものがある他は全て埋土中出土として取り上げている。小片が多く、遺構に伴うものとは言い難い。

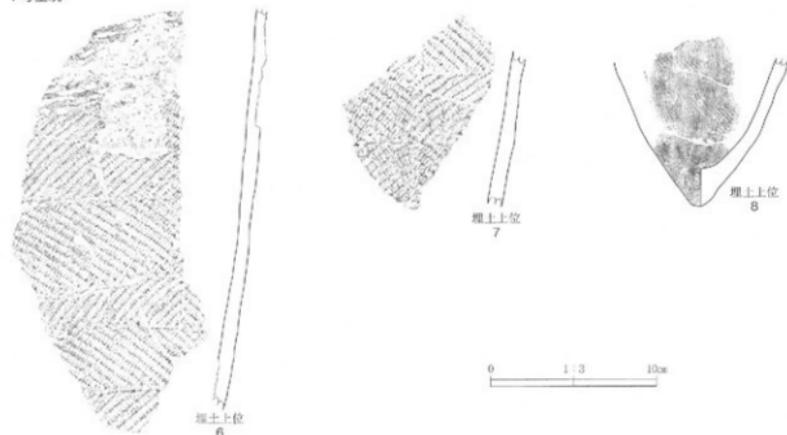
1～5は本遺構の埋土中から出土した。いずれもⅡ群に含まれる土器群である。1・2はⅡ群3類に相当する深鉢の口縁部片で、横位の結節回転縄文が施文されている。肉眼で観察した限りでは、1には繊維の混入が見受けられなかったが、2は混入しているので、時期的な差ではないと思われる。3～5はⅡ群4類a種に相当する深鉢の胴部片で単節LRが施文され、胎土には繊維が混入する。3は2と胎土が類似するのでⅡ群3類に含まれる可能性が高い。4は横位の縄文が二段認められ、間には縄文が施文されない空白域がある。5は繊維が多量に混入されている。

〈時期〉出土遺物から縄文時代前期前葉に比定される。

1号住居状遺構



1号土坑



第10図 1号住居状遺構、1号土坑出土遺物

1号土坑 (第9・10図、写真図版3・67)

〈位置〉調査区東端4C1tグリッドに位置する。

〈検出状況〉Ⅲ層上面で暗褐色のプランを検出した。

〈重複関係〉なし。

〈形態・規模〉北西隅が突出する不整な楕円形を呈する。規模は254×192cm、深さは検出面から34cmを測る。

〈埋上〉黒褐色粘質シルトを主体とし、2層に分けられる。層中には、黄褐色砂質シルトや暗褐色粘質シルトのブロックや小礫が多く混入する。

〈底面・壁〉Ⅶ層面を底面とする。底面上には礫が露出しており、凹凸がある。壁は緩やかに外へと広がりながら立ち上がる。

〈出土遺物〉縄文土器872.3gが出土した。ほとんどがⅠ層中から出土している。いずれも破片で、また早期の土器と前期前葉の土器が混在している。

6はⅡ群3類に相当する深鉢の口縁部から胴部にかけての大型破片で、口唇部が欠損する。口縁部に横位の結節回転縄文が巡り、胴部には単節LRによる非結束羽状縄文が横位に巡る。7は深鉢の胴部片で、非結束羽状縄文の施文のみが認められるが、6と胎土が類似しており、同類のものと思われる。6・7いずれにも胎土に繊維が混入する。8は早期に比定されるⅠ群に相当し、尖底土器の底部片である。器面には浅い条痕文が施文される。

〈時期〉本遺構の出土土器は早期の土器と前期前葉の土器とが認められる。出土量からみて前期前葉と判断した。

(2) 縄文時代中期の遺構

今回の調査で最も検出数の多い時期である。以下、遺構ごとに見ていく。

① 竪穴住居跡

1号住居跡 (第11～14図、写真図版4・68・109)

〈位置〉調査区西側、2A4rグリッドに位置する。3m北側には、2号住居状遺構、3号住居状遺構が位置する。

〈検出状況〉Ⅲ層上面で暗褐色のプランを検出した。不明瞭なプランであるが、検出面上に炭化物や土器片が分布していた。掘り下げたところから検出し竪穴住居跡と判断した。

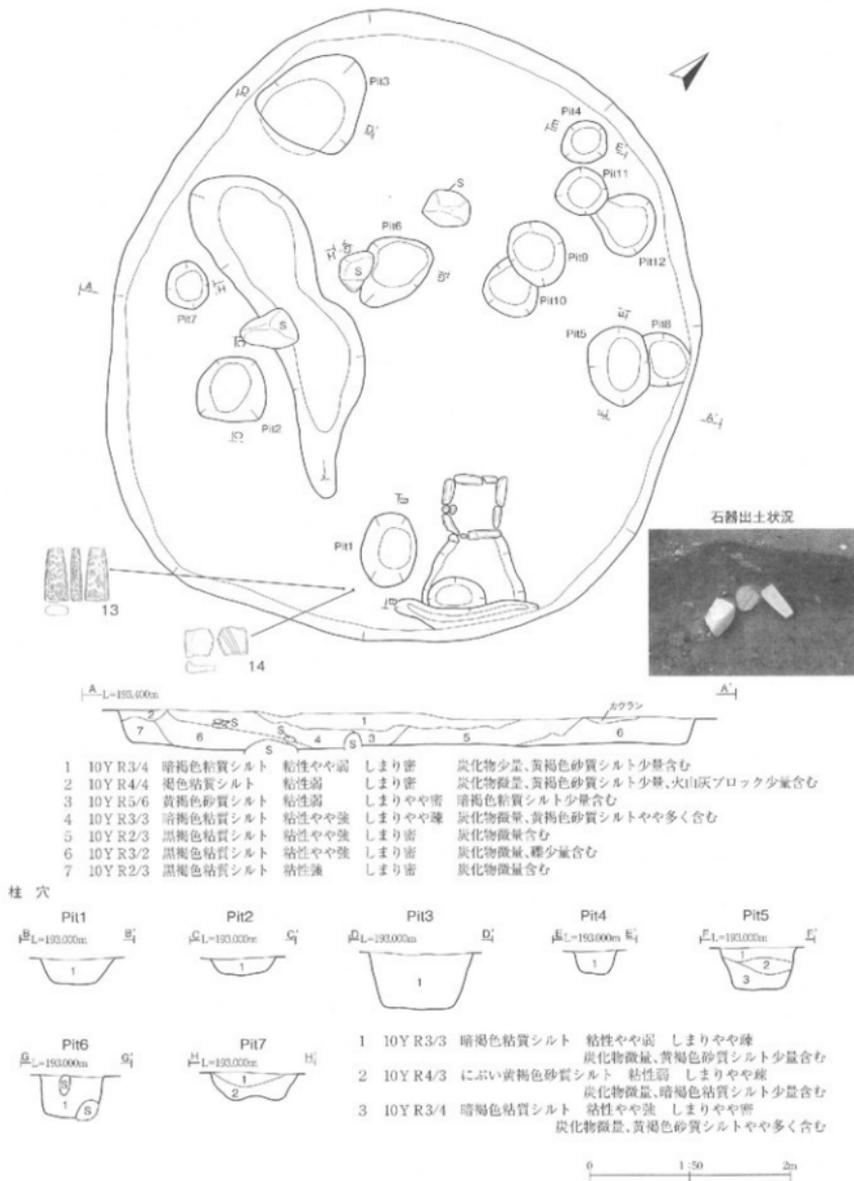
〈重複関係〉なし。

〈形態・規模〉不整な円形を呈し、径6.4m、深さは検出面から最深34cmを測る。柱穴どうしで切り合っているものも見受けられるので、本住居跡は重複か拡張を行っている可能性が高いが、その痕跡を確認することはできなかった。

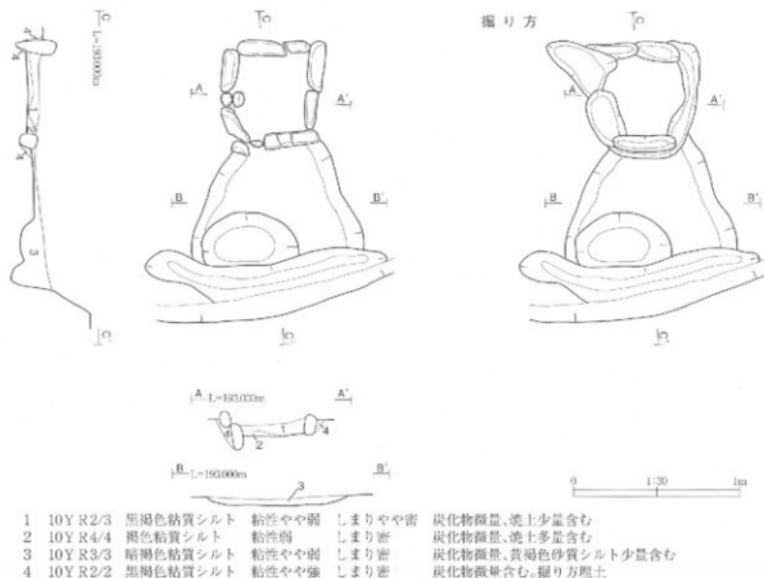
〈埋上〉黒褐色～暗褐色粘質シルトを主体とし、10層に分けられる。壁際には流れ込みと考えられる火山灰がブロック状に混入するが、この火山灰は基本層序Ⅲ～Ⅳ層中に混入していたものと同じものである。

〈床面・壁〉炉が検出したⅦ層面を床面とする。ほぼ平坦であるが硬化面は認められない。壁はほぼ直立気味に立ち上がる。

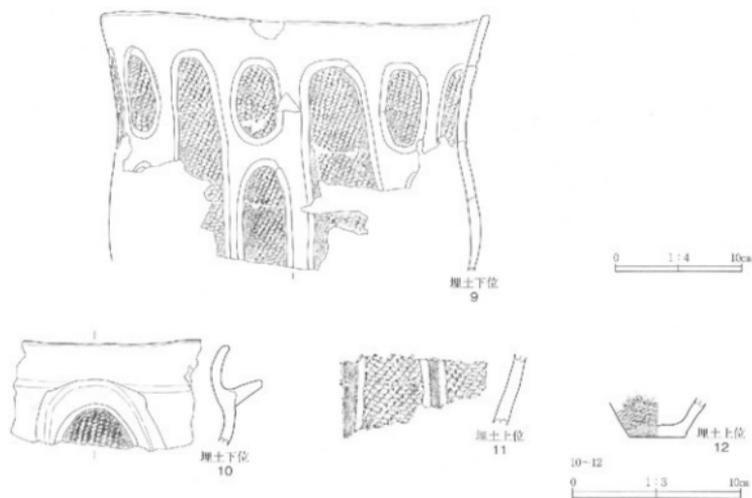
〈柱穴・壕溝〉柱穴12個を確認した。柱穴の位置をみると、炉軸線に対し、Pit 2とPit 5、Pit 3とPit 4が左右対称に位置する。したがってこれらの4個の柱穴が主柱穴である可能性が高い。柱



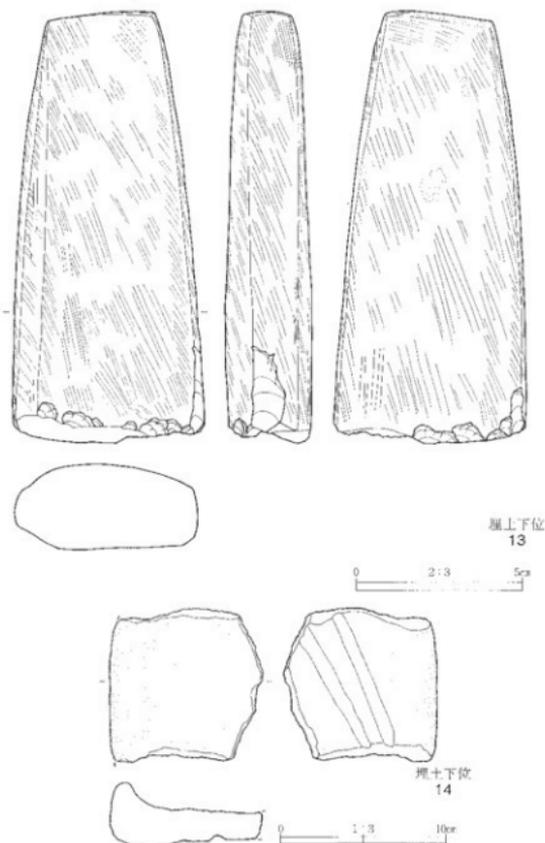
第11図 1号住居跡(1)



第12図 1号住居跡 (2)



第13図 1号住居跡出土遺物 (1)



第14図 1号住居跡出土遺物(2)

住居絶後の埋没し始めの段階に廃棄された遺物群と考えられる。目立ったものとしては第14図9が炉の北西側の床面上より約5cm程度上から横倒しの状態で出土した。ただし、胴部下半から底部はみつかっていない。したがって9は遺構に伴うものというより、住居廃絶時に上半だけ廃棄されたものと思われる。

9はⅢ群3類に相当し、沈線による楕円形区画文を縦位に配する。10は深鉢の口縁部片でⅢ群2類に含まれる。口縁部と胴部との間に浅い稜が巡り、胴部には区画文に沿うように突起が垂下する。沈線による「 \square 」字形の区画文が施文される。11は深鉢の胴部片であるが、10と同様の文様が施文されると考えられる。12はミニチュア土器の底部片で深鉢を模したものである。

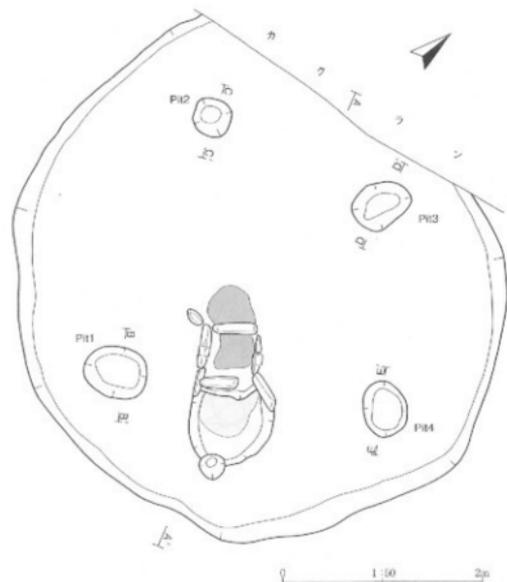
石器は磨製石斧(13)1点、砥石(14)1点である。2点とも東壁際の埋上下位から隣合うように

穴の深さは20～60cmと一定ではない。柱穴の埋上は暗褐色粘質シルトを主体とする単層で、柱痕跡は認められない。また壁溝は認められなかった。

〈知〉南東壁付近に位置する。石囲部+前庭部で構成される複式炉である。石囲部は正方形を呈し、規模は一辺70cm、深さは床面から最深8cmを測る。炉石は扁平な棒状の自然礫を用い、炉掘り方に立てかけるようにして据えられている。石囲部内は埋土中に焼土や炭化物が混入する程度で、燃焼部は認められない。ただし、底面付近には焼土粒が多量に堆積する。前庭部は床面から10cm程度下の浅い掘り込みで、幅は約100cmを測る。前庭部内は溝と柱穴状の掘り込み1個があるが、硬化面は認められない。

〈出土遺物〉縄文土器2337.51gと石器2点が出土している。出土状況をみると埋土下位からの出土量が大部分を占めており、住

- 1 10Y R2/3 黒褐色粘質シルト 粘性強 しまり密
 2 10Y R3/3 暗褐色粘質シルト 粘性やや弱 炭化物微量、黄褐色砂質シルト少量含む
 3 10Y R2/2 黒褐色粘質シルト 粘性やや弱 炭化物微量、黄褐色砂質シルトやや多く含む
 4 10Y R3/2 黒褐色粘質シルト 粘性やや弱 しまり密 炭化物微量含む
 5 10Y R3/4 暗褐色粘質シルト 粘性やや弱 黄褐色砂質シルトやや多く含む
 6 10Y R3/4 暗褐色粘質シルト 粘性やや強 しまり密 炭化物微量含む

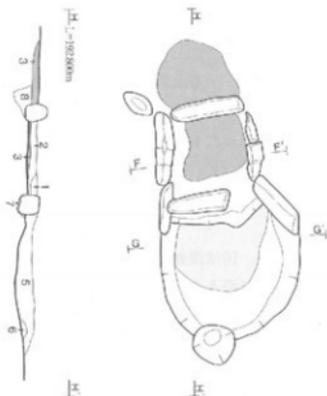


柱穴



- 1 10Y R3/3 暗褐色粘質シルト 粘性やや弱 しまり密 炭化物微量、黄褐色砂質シルト中量含む

竈



- 1 10Y R3/4 暗褐色粘質シルト 粘性やや弱 しまりやや密 炭化物少量、焼土中量含む
 2 10Y R3/3 暗褐色粘質シルト 粘性やや弱 しまりやや疎 炭化物微量、焼土少量含む
 3 10Y R2/2 黒褐色粘質シルト 粘性やや弱 しまり疎 炭化物多量含む
 4 10Y R5/8 黄褐色砂質シルト 粘性弱 しまり疎
 5 10Y R3/3 暗褐色粘質シルト 粘性やや弱 しまりやや密 炭化物少量、黄褐色砂質シルト少量含む
 6 10Y R2/2 黒褐色粘質シルト 粘性やや弱 しまりやや密 焼土多量含む
 7 10Y R3/3 暗褐色粘質シルト 粘性弱 しまり密 掘り方漂土
 8 10Y R3/3 暗褐色粘質シルト 粘性弱 しまりやや密 掘り方漂土、炭化物微量、焼土少量含む



第15図 2号住居跡

出土しており（第11回写真）、セット関係にあるものと思われる。13は丸部が欠損している。欠損部分に新たな二次加工の痕跡が認められるので、再度加工して使用しようとした可能性が高い。14は石皿を転用している。表面に2条の溝が認められる。

〈時期〉出土遺物から縄文時代中期後葉（大木9式新段階）に比定される。

2号住居跡（第15・16図、写真図版5・68）

〈位置〉調査区西側、2A9qグリッドに位置する。1m北側には、6号住居跡遺構、2m北東側には3号住居跡が位置する。

〈検出状況〉Ⅲ層上面で暗褐色のプランを検出した。不明瞭なプランであるが、検出面上に炭化物が分布していた。掘り下げたところ、炉が検出し、堅穴住居跡と判断した。

〈重複関係〉なし。

〈形態・規模〉北側は現代の水路によって削平されており、検出できなかった。よって全容は定かではないが、円形基調を呈すると推測される。規模は約5.2m、深さは検出面から最深24cmを測る。

〈埋土〉6層に分けられる。埋土上位は、黒褐色粘質シルトを主体とし、下位は暗褐色粘質シルトが主体となる。

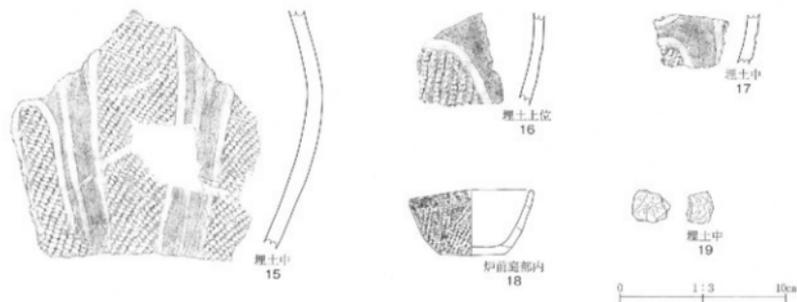
〈床面・壁〉炉を検出したⅥ層を床面と判断した。ほぼ平坦である。硬化面は認められない。壁は外へと緩やかに広がりながら立ち上がる。

〈柱穴・壁溝〉柱穴4個を確認した。位置関係から4個全て主柱穴と思われる。柱穴は規模は60cm大、深さが14～30cmで浅く、埋土は暗褐色粘質シルトを主体とする単層で、柱痕跡は認められない。

また壁溝は認められなかった。

〈炉〉南東壁付近に位置する。石囲部+前庭部で構成される複式炉である。石囲部はほぼ正方形を呈し、規模は一辺40cm、深さは床面から最深6cmを測る。炉石は扁平な棒状の自然礫を用い、床面に差し込むようにして据えられている。石囲部内の燃焼部には、炭化物が多量に分布しているが、焼土は認められない。またこの炭化物を多量に含む範囲（3層）は複式炉の外側にも広がっており、床面下に4cmほど堆積している。前庭部は浅い掘り込みで、規模は70×84cm、深さは床面から最深10cmを測るが、南東側は床面とほとんど比高差がない。前庭部の北側には石囲部に連結して棒状の自然礫が設置されている。ただし前庭部の南側に礫はなく、また抜き取り痕跡も認められないので、元々設置されていないものと思われる。前庭部の底面は石囲部側が広い範囲で硬化していた。

〈出土遺物〉縄文土器400.07g、粘土塊1点、石器2点が出土している。他の住居跡と比べ、遺物の出土量は非常に少ない。出土状況を見ると埋土上位からの出土量が大部分を占める。



第16図 2号住居跡出土遺物

15は深鉢の胴部片で、沈線による区画文が施文されている。区画文に平行して沈線が垂下する。16・17は深鉢の胴部片で、Ⅲ群3類に相当する。18は小形の鉢で口縁部が欠損する他はほぼ完形である。口縁部が水平ではなく、傾斜する。

土製品は粘土塊(19)1点が出土している。

石器はRフレイク、フレイクが1点ずつ出土しているが、図示していない。
(時期) 出土遺物から縄文時代中期後葉(大木9式新段階)に比定される。

3号住居跡(第17～19図、写真図版6・68・109)

〈位置〉調査区西側、2A11sグリッドに位置する。2m北西側に2号住居跡、1.5m東側には6号住居状遺構、2m西側に4号住居状遺構が位置する。

〈検出状況〉Ⅲ層上面で黒褐色のプランを検出した。不明瞭なプランであるが、検出面上に炭化物や土器片が分布していた。掘り下げたところ、Ⅳ層上面で炉石と思われる礫の並びとその周辺に焼土が多量に分布していたので、竪穴住居跡と判断した。

〈重複関係〉2号土坑と重複している。上層の観察から本遺構の方が古いと判断した。

〈形態・規模〉北西側が突出する不整な楕円形を呈し、6.4×5.5m、深さは検出面から最深50cmを測る。
(埋土)10層に分けられる。7・8層には、流れ込みと思われる火山灰が混入する。これは基本層序Ⅲ・Ⅳ層の火山灰と同じものである。

〈床面・壁〉炉検出したⅣ層面を床面とする。ほぼ平坦であるが粗砂が全面に露出している。壁は外へと緩やかに広がりながら立ち上がる。

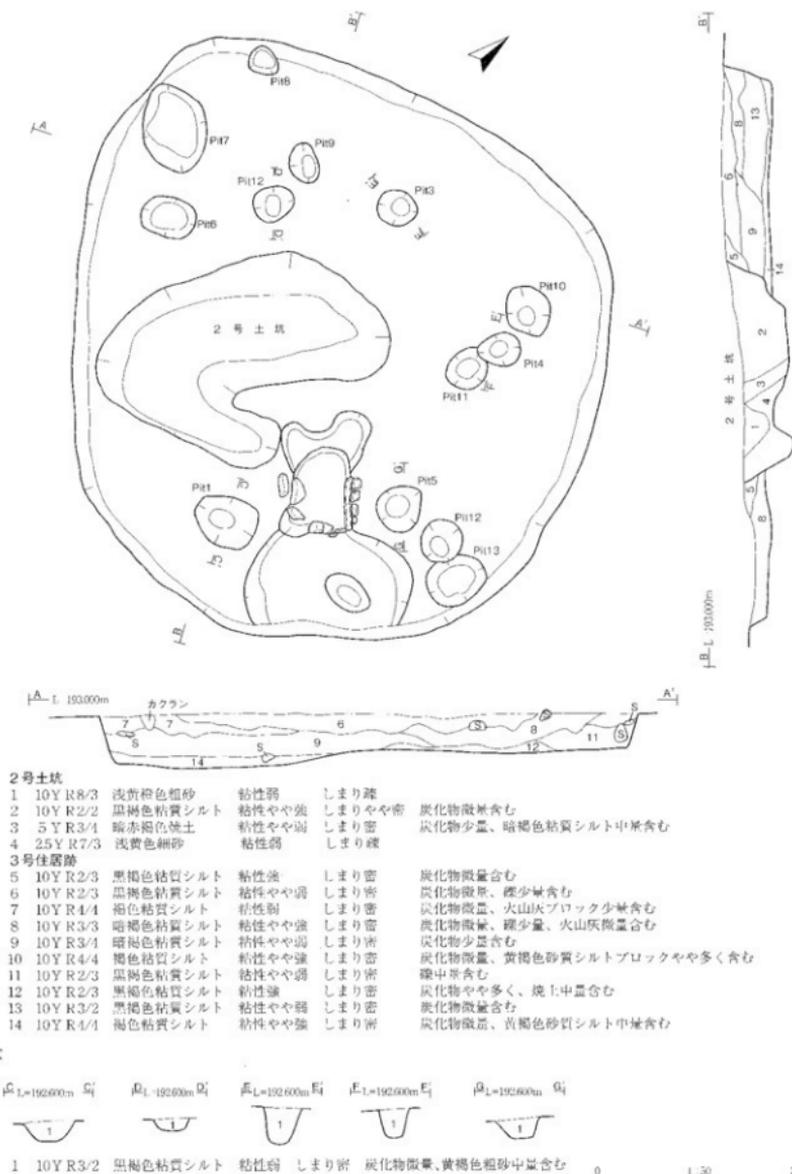
〈柱穴・壁溝〉柱穴13個を確認した。柱穴の位置をみると、炉の主軸線に対し、Pit 1とPit 5、Pit 2とPit 3が左右対称に位置する。また本住居跡は2号土坑に壊されており、Pit 4と対になる柱穴が2号土坑の位置にあったと予想される。したがって6本柱の正柱であったと考えられる。柱穴は規模30～60cmで、深さ20～40cmを測る。柱穴の埋土は黒褐色粘質シルトを主体とする単層で、柱痕跡は認められない。壁溝は認められなかった。

〈炉〉南東壁付近に位置する。炉石が東側と南側で検出できたが、他のは取り除かれている。残存部から石囲部+前庭部で構成される複式炉であったと推定される。検出した掘り方から石囲部は方形を呈していた可能性が高い。掘り方の規模は90×60cmを測り、石囲部もこの範囲に収まると思われる。燃焼部は検出できなかったが埋土中に焼土や炭化物が多量に含まれており(炉3層)、炉石も一部被熱を受けていた。前庭部は90×172cmを測る。石囲部よりもやや横に広がる形状を呈する。浅い掘り込みで深さは床面から最深8cm程度である。前庭部の中央やや東寄りから柱穴1個を検出した。

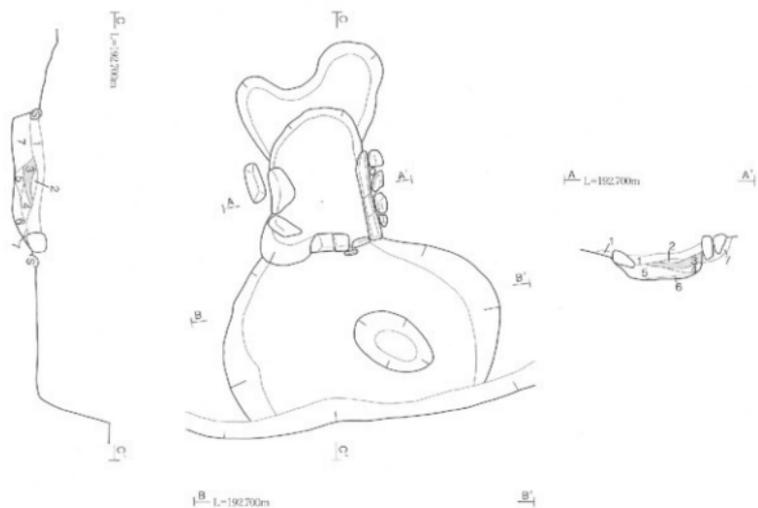
〈出土遺物〉縄文土器1996.25g、石器12点が出土している。他の住居跡と比べ、石器の出土量が多いのが特徴である。出土状況を見ると、土器は埋土上位と埋土下位からの出土量が多い。日立ったものとしては埋土下位から第19図20が比較的まとまった状態で出土した。一方、床面上からの出土量は非常に少なく、また出土したものはほとんど小片である。ただし石器は床面上から出土するものが多い(27～29)。

20は深鉢でⅢ群6類に相当する。複節R L Rが横位に施文される。22は深鉢の口縁部片である。Ⅲ群2類に相当する。U字形の微隆帯が2個一対で縦位に付く。23はⅢ群6類に相当する小形深鉢である。25もⅢ群6類の小形深鉢で底部付近で膨らむ器形である。

石器はスクレイパー1点、磨石1点、Rフレイク2点、フレイク9点が出土した。そのうちフレイク2点と磨石1点を図示した。いずれも床面上から出土している。27は3c類、28は2b類に相当す



第17図 3号住居跡、2号土坑

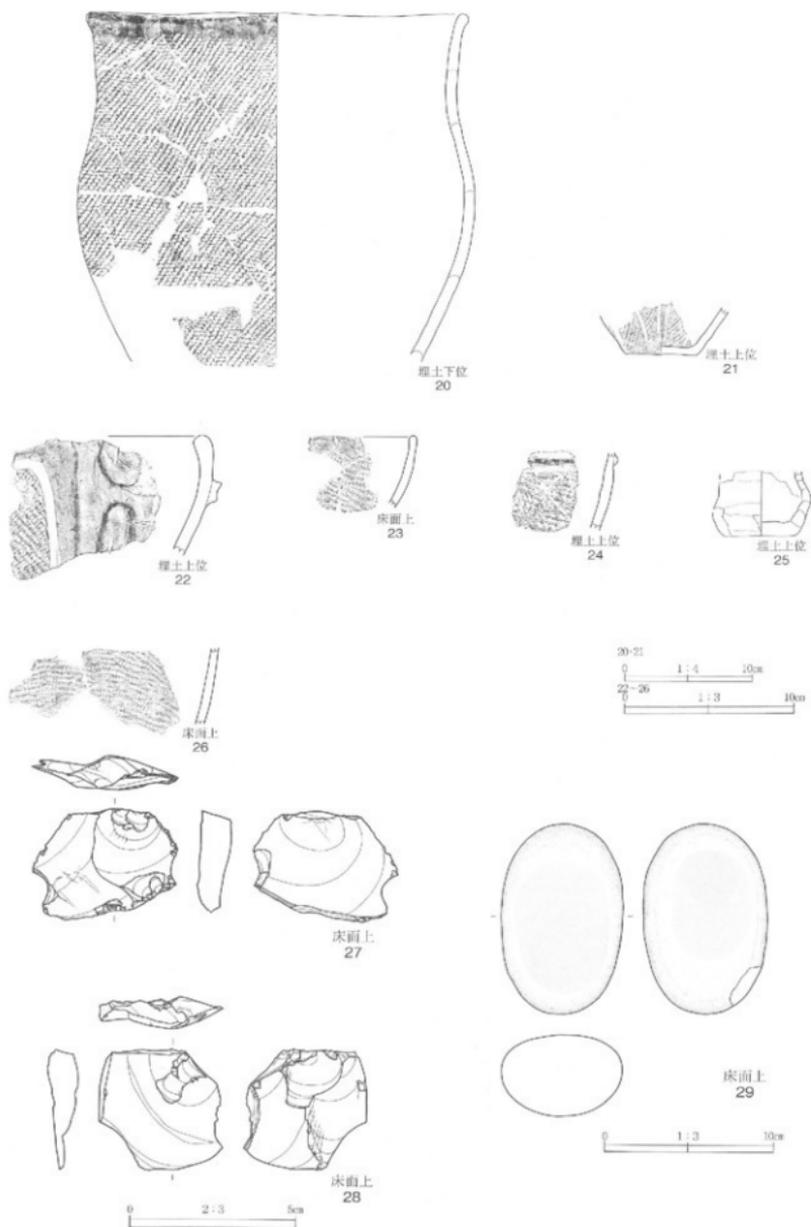


- | | | | | | |
|---|-----------|----------|-------|--------|------------------|
| 1 | 10Y R2/2 | 黒褐色粘質シルト | 粘性やや強 | しまり疎 | 炭化物微量、焼土少量含む |
| 2 | 10Y R2/1 | 炭化物集中範囲 | | | |
| 3 | 5 Y R5/6 | 明赤褐色焼土 | 粘性弱 | しまりやや密 | 炭化物微量含む |
| 4 | 7.5Y R2/2 | 黒褐色粘質シルト | 粘性やや強 | しまり疎 | 炭化物多量、焼土少量含む |
| 5 | 10Y R4/4 | 褐色粘質シルト | 粘性やや強 | しまり疎 | 焼土多量含む |
| 6 | 10Y R4/6 | 褐色粘質シルト | 粘性強 | しまりやや密 | 炭化物微量、焼土多量含む |
| 7 | 10Y R3/4 | 暗褐色粘質シルト | 粘性やや弱 | しまりやや密 | 炭化物・焼土微量含む。掘り方埋土 |

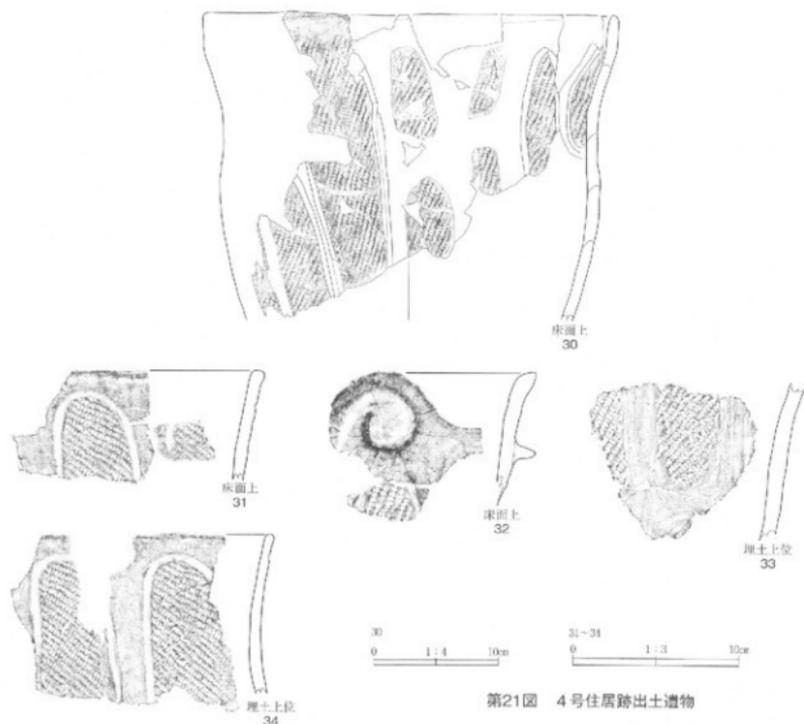
第18図 3号住居跡

る。29は両面に磨痕が認められる。

〈時期〉出土遺物から縄文時代中期後葉（大木9式新段階）に比定される。



第19図 3号住居跡出土遺物



第21図 4号住居跡出土遺物

4号住居跡（第20・21図、写真図版7・69）

〈位置〉調査区西側、2 A12q グリッドに位置する。2.5 m北西側に6号住居跡遺構、1.5 m東側に18号土坑、南東側に20号土坑が位置する。

〈検出状況〉Ⅲ層上面で暗褐色のプランを検出した。検出段階では大形の土坑であるものと思い、精査を行っていたが、掘り下げたところ、複式炉を検出し住居跡と判断した。

〈重複関係〉16号土坑と重複しており、本住居跡の

方が古い。

〈形態・規模〉本遺構は西側の一部が調査区外に及んでおり、全容は定かではないが、検出できた部分から円形を基調とするものと推定される。規模は径4.5 m、深さは検出面から最深25 cmを測る。

〈埋土〉断面ベルトを上層確認前に掘りすぎてしまい、円化出来るものも一部にすぎない。残存した土層から暗褐色粘質シルトを主体としていることが分かる。2層に分けられる。

〈床面・壁〉炉を検出したⅣ層面を床面とする。ほぼ平坦である。硬化面は認められない。壁は外へ

と緩やかに広がりながら立ち上がる。

〈柱穴・壁溝〉柱穴3個を確認した。炉の主軸線上にPit 2が位置し、その主軸線に対し、Pit 1とPit 3が左右対称に位置している。したがってこの3個が主柱穴と思われる。柱穴は規模は径60cmで、深さは15cm程度で浅い。柱穴の埋土は暗褐色粘質シルトを主体とする単層で、柱痕跡は認められない。

壁溝は認められなかった。

〈炉〉南東壁付近寄りに位置する。石囲部+前底部で構成される複式炉である。石囲部はほぼ正方形を呈し、一辺55cm、深さは最深で9cmを測る。炉石は扁平な棒状の自然礫を用い、浅い掘り方に立てかけるよう据えられている。石囲部内のほぼ中央に32×25cmの燃焼部を確認した。焼土は4cm堆積している。前底部は114×102cmを測り、浅い掘り込みで、深さは床面から最深13cmである。石囲部との境の南側に礫1個を検出したが、礫は置かれただけである。また前底部の底面は特に石囲部との境側に60×46cmの範囲で硬化面が認められる。

〈出土遺物〉縄文土器1619.29g、石器1点が出土している。出土状況を見ると埋土上位からの出土量が最も多いが、ほとんど小片である。一方、床面上出土も少なくない。目立ったものとしては第21回30のように器形の分かる大形破片が床面上からまとまった状態で出土している。床面上出土は住居廃絶時に、埋土出土のものは住居廃絶後の埋没段階で廃棄されたと考えられる。

30は深鉢の大形破片でⅢ群3類に含まれる。沈線による「∩」字形や円形の区画文が施される。沈線は区画を全周しなかったり、磨消のみで沈線が施文されない区画文も認められる。31・34は、30と同様に沈線による区画文が施される。32はⅢ群2類に相当し、口唇部が波状を呈する深鉢で、口縁部に隆帯による渦巻き文が付く。33は深鉢の胴部片である。単筋RLを施文とし、沈線は施文せず、楕円形状に施文を磨消することで区画文にみせている。

石器はスクレイパー1点(35)のみで、床面上から出土している。側縁部の片面のみに二次加工が施されている。

〈時期〉出土遺物から縄文時代中期後葉(大木9式新段階)に比定される。

5-A・B号住居跡(第22・23回、写真図版8・69)

〈位置〉調査区中央、2B25cグリッドに位置する。

〈検出状況〉調査区西際沿いにⅢ層上面で暗褐色のプランを検出した。不明瞭なプランであるが、検出面上に炭化物が分布していた。掘り下げたところ、炉を検出し、竪穴住居跡と判断した。

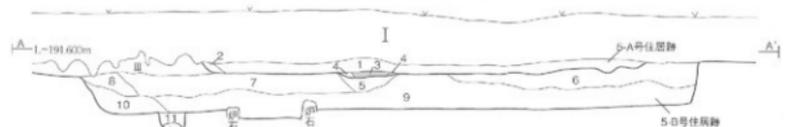
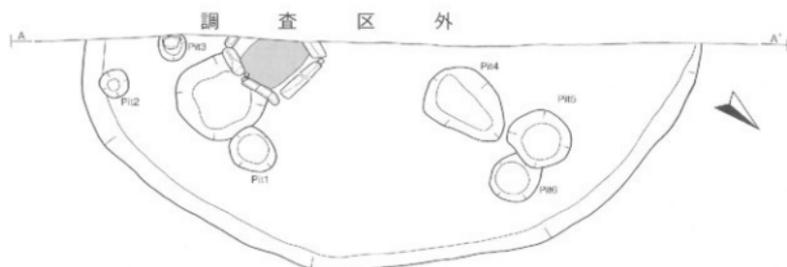
〈重複関係〉本遺構を掘り下げる際、本遺構の埋土上位に別の竪穴住居跡が入れ子状に重複しているのを、調査区壁の土層を観察して確認した。埋土上位の住居跡を5-A号住居跡、その下の住居跡を5-B号住居跡とした。5-A号住居跡が新しい。

〈形態・規模〉5-B号住居跡は西側が調査区外に及んでおり、全容は定かではないが、残存部から、円形を呈すると推定される。規模は径6m、深さは検出面から最深40cmを測る。

〈埋土〉6層に分けられる。埋土上位は暗褐色粘質シルトを、埋土下位は黒褐色粘質シルトを主体とする。

〈床面・壁〉炉が検出したⅥ層面を床面とする。ほぼ平頂であるが硬化面は認められない。壁はほぼ直立気味に立ち上がる。

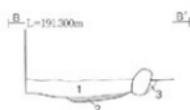
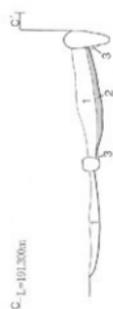
〈柱穴・壁溝〉柱穴6個を確認した。全ての柱穴を検出したわけではないので、主柱穴の配列については不明である。炉の両脇に並ぶPit 1とPit 3やPit 5、Pit 6が主柱穴となる可能性が高い。柱穴は規模は40～60cm、深さが20cmである。柱穴の埋土は黒褐色粘質シルトを主体とし、柱根痕は認め



5-A号住居跡

- | | | | | | |
|---------|----------|----------|-------|--------|----------------------|
| 1 | 10Y R2/2 | 黒褐色粘質シルト | 粘性强 | しまりやや密 | 炭化物少量、焼土微量含む |
| 2 | 10Y R3/3 | 暗褐色粘質シルト | 粘性强 | しまり密 | 炭化物中量含む |
| 3 | 5Y R6/8 | 暗赤色土 | 粘性やや弱 | しまり密 | 燃焼部 |
| 4 | 10Y R3/4 | 暗褐色粘質シルト | 粘性やや強 | しまり密 | 炭化物微量、焼土中量含む |
| 5-B号住居跡 | | | | | |
| 5 | 10Y R3/2 | 黒褐色粘質シルト | 粘性やや弱 | しまり密 | 炭化物微量、焼土微量含む |
| 6 | 10Y R3/4 | 暗褐色粘質シルト | 粘性やや弱 | しまり密 | 炭化物少量、黄褐色砂質シルト中量含む |
| 7 | 10Y R3/3 | 暗褐色粘質シルト | 粘性やや強 | しまり密 | 炭化物少量、黄褐色砂質シルト少量含む |
| 8 | 10Y R3/4 | 暗褐色粘質シルト | 粘性やや強 | しまり密 | 炭化物微量、黄褐色砂質シルトやや多く含む |
| 9 | 10Y R3/2 | 黒褐色粘質シルト | 粘性やや弱 | しまり密 | 炭化物微量、黄褐色腐砂ブロック少量含む |
| 10 | 10Y R2/2 | 黒褐色粘質シルト | 粘性强 | しまり密 | 炭化物微量、暗褐色腐砂ブロック少量含む |
| 11 | 10Y R2/3 | 黒褐色粘質シルト | 粘性やや強 | しまりやや密 | 焼土ブロック少量含む |

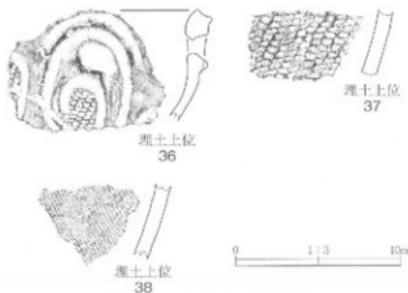
0 1:50 2m



- | | | | | | |
|---|----------|----------|-------|--------|------------------------------|
| 1 | 10Y R2/2 | 黒褐色粘質シルト | 粘性强 | しまりやや密 | 炭化物・焼土微量含む |
| 2 | 5Y R6/8 | 明赤褐色土 | 粘性强 | しまりやや弱 | 燃焼部 |
| 3 | 10Y R3/3 | 暗褐色粘質シルト | 粘性やや強 | しまりやや密 | 暗褐色粘質シルト中量含む しまりやや密 掘り方埋土 |

0 1:50 1m

第22図 5-A・B号住居跡



第23図 5号住居跡出土遺物

として取り上げたもの以外はすべて埋土上位から出土している。したがって出土した遺物の多くは住居廃絶後の埋没段階で廃棄されたものと考えられる。36は波状口縁を呈する深鉢の口縁部片である。Ⅲ群2類に含まれる。波頂部下に円孔が施され、その周囲に隆帯が弧状に巡る。37・38はⅢ群6類に相当する深鉢の胴部片である。

〈時期〉出土遺物から縄文時代中期後葉に比定される。時期の分かる土器片は36のみであるが、36は大木9式古段階に相当する土器である。ただし、本住居跡の周辺は新段階の遺構が多く、新段階のもの判断の方が妥当と考える。

〈その他〉5-A号住居跡は見つけたときには、既に5-B号住居跡の床面まで掘り下げてしまっており、断面のみで確認できた程度である。5-A号住居跡は断面から4.5m規模の住居跡と推定され、床面のほぼ中央に地床がが付きされる。また断面上では柱穴は認められない。壁はほとんどをI層土(耕作土)によって壊されており、10cm程度残っているだけであるが、残存部からは緩やかに立ち上がる。埋土は黒褐色粘質シルトを主体とする。出土遺物は確認できなかったので時期判断は難しいが、5-B号がほぼ埋没した段階で構築されていることや、本遺跡では他に地床を伴う堅穴住居跡がないことから考えて、5-B号住居跡より新しい時期(大木9式新段階)以降の遺構と考えている。(須原)

6号住居跡(第24・25図、写真図版9・69)

〈位置〉調査区中央北側、2B25jグリッドに位置する。

〈検出状況〉8号住居跡遺構精査中に、8号住居跡遺構の炉としては想定し得ない地点に炉が現れた。このため、改めて検出を行ったところ、周辺で黒～暗褐色土の広がりを確認した。観察用ベルトを残してさらに下げたところ、ベルトで壁の立ち上がりの様子が観察されたことから8号住居跡遺構とは別の堅穴住居跡として認定した。なお、北東側は調査区外に広がっている。

〈重複関係〉8号住居跡遺構、7号住居跡と重複する。7号住居跡より新しいが、8号住居跡遺構より古い。

〈形態・規模〉平面形態は重複及び調査区外へ広がっているため、不明である。深さは検出面から10cmである。周辺遺構の規模を考えると、削平を受けている可能性が高い。

〈埋土〉暗褐色粘質シルトを主体とする単層である。

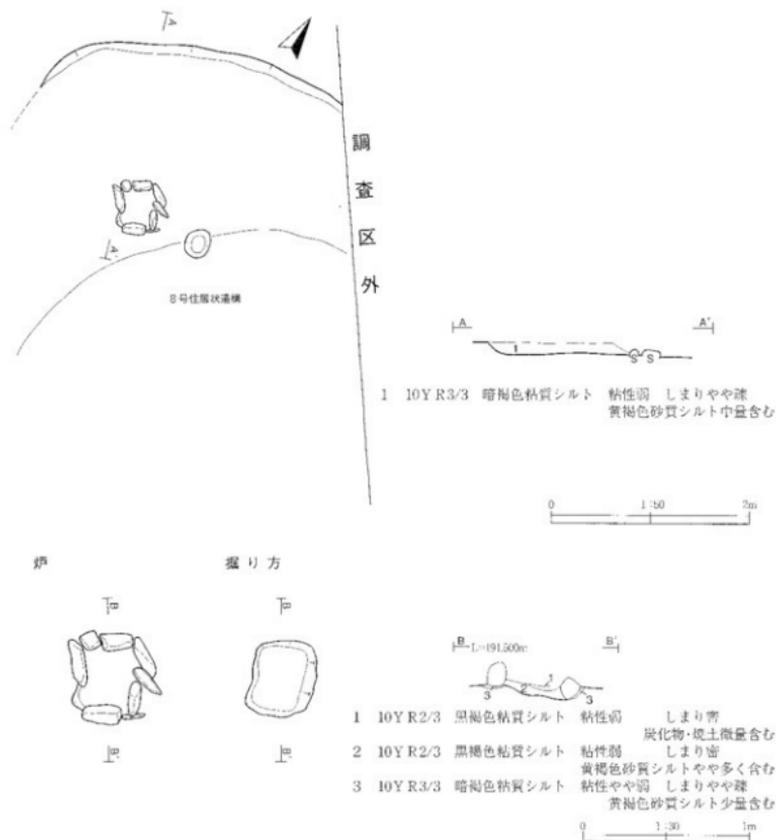
〈床面・壁〉炉を検出したVI層面を床面とする。礫の露出が多く、凹凸がある。壁は遺構の認定段階ですでに掘り過ぎの部分があり、一部分しか確認できなかった。やや外へと広がりをながら立ち上がる。

〈柱穴・壁溝〉床面上で1個確認した。深さ10cm程度、住居埋土1層を主体とする単層で柱痕跡は認

られない。また壁溝は認められなかった。

〈炉〉東壁付近に位置する。一部調査区外に及んでおり、全容は定かではないが、石囲部+前庭部で構成される複式炉と考えられる。石囲部は正方形を呈し、規模は一辺80cm、深さは床面から最深10cmを測る。石囲部内には燃焼部が認められ、焼土が4cmほど堆積する。前庭部は90×70cmの楕円形を呈し、浅い掘り込みで深さは床面から最深6cmである。

〈出土遺物〉縄文土器214.72gが出土している。いずれも小片である。出土状況をみると、埋土中



められない。壁溝は確認することができなかった。

〈炉〉石囲炉である。住居の中央からやや西側に位置する。長軸56cm、短軸50cmの規模を有する。炉石に被熱の痕跡は認められなかった。炉内には微量の焼土・炭化物が堆積する。掘り方は認められるが、礫が入った状態の炉の大きさよりも小さいため、押し込むようにして礫を据えたものと考えられる。

〈出土遺物〉縄文土器が1459.58g出土している。出土状況を見ると埋土上位と床面上からの出土量が大部分を占める。特に床面上からは39が炉の北西脇から、横倒しの状態で出土している(写真図版9)。意図的に置かれた可能性も考えられるが、胴部下半から底部がみつからないので、完形の土器を埋置したものとは考えられない。その他は住居廃絶後の埋没段階に廃棄されたものである。

39はⅢ群6類に相当する深鉢で単節LRを縦位に施すが、縄文原体がややゆるく、単位がやや不明



第25図 6号住居跡出土遺物

瞭である。40もⅢ群6類に相当する。

〈時期〉出土遺物から縄文時代中期後葉に比定される。図示できた39も40も文様は縄文のみで、細かい時期の判断が出来ないが、周辺の遺構はほぼ大木9式新段階に比定されるので、本住居跡も大木9式新段階に含まれる可能性は高い。(戸根)

7号住居跡(第26図、写真図版10)

〈位置〉調査区中央、2 B 24 i グリッドに位置する。南東側に6号住居跡が重複するが、その他の住居群とはやや離れた位置にある。

〈検出状況〉6号住居跡を精査する際、その北側にトレンチを入れたところ、石囲炉を検出した。位置関係からみて6号住居跡の炉とは考えられず、別の住居跡の炉と判断した。本住居跡は、後世の削平が

激しく、全体を検出できず、北壁と南壁部分を検出できなかった。

〈重複関係〉6号住居跡と重複する。本遺構の方が古い。

〈形態・規模〉本遺構は一部を検出できなかったため、全容は不明であるが、残存部から楕円形を呈するものと思われ、規模は推定で5.0×4.4 m、深さは検出面から最深12cmを測る。

〈埋土〉暗褐色粘質シルトを主体とすることを確認しているが、調査の際、土層断面を図化せず掘り下げてしまったため、図示していない。

〈床面・壁〉炉が検出したⅦ層面を床面とする。ほぼ水平であるが、礫が露出しており、若干凹凸がある。硬化面は認められない。壁は緩やかに外へと広がりながら立ち上がる。

〈柱穴・壁溝〉柱穴2個を確認した。いずれも浅く、主柱穴とは考えにくい。壁溝はみつかっていない。

〈炉〉床面の南寄りに位置する。石囲炉である。五角形を呈し、規模は70×48cm、深さは床面から最深12cmを測る。炉石は扁平で細長い自然礫を用いている。北側の炉石は二列になっている。掘り方は少し広めに掘られており、炉を設置してから黒褐色土で隙間を埋めて補強していた。また、焼成を示す痕跡はほとんど無く、埋土中に炭化物が混入する程度である。

〈出土遺物〉なし。

〈時期〉本遺跡は出土遺物が無いが、6号住居跡より古いので、縄文時代中期後葉に比定されると考えられる。周辺の遺構の時期を考えると、大木9式新段階の可能性が高い。

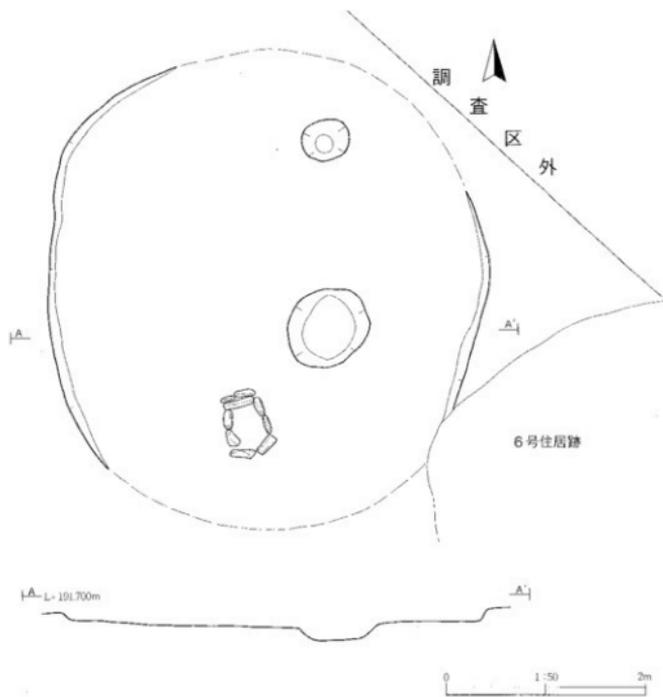
8号住居跡(第27～30図、写真図版11・69・70・109)

〈位置〉調査区中央、3 B 1 i グリッドに位置する。1～2 m東側には27号土坑、8号住居状遺構、9号住居跡が位置する。

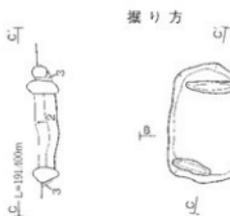
〈検出状況〉Ⅲ層上面で黒褐色のプランを検出した。不明瞭なプランであるが、検出面上に炭化物や土器片が分布する。掘り下げたところ、炉を検出し、竪穴住居跡と判断した。

〈重複関係〉なし。

〈形態・規模〉北東側がやや張り出す不整な楕円形を呈する。規模は5.9×4.5 m、深さは検出面から最深で36cmを測る。



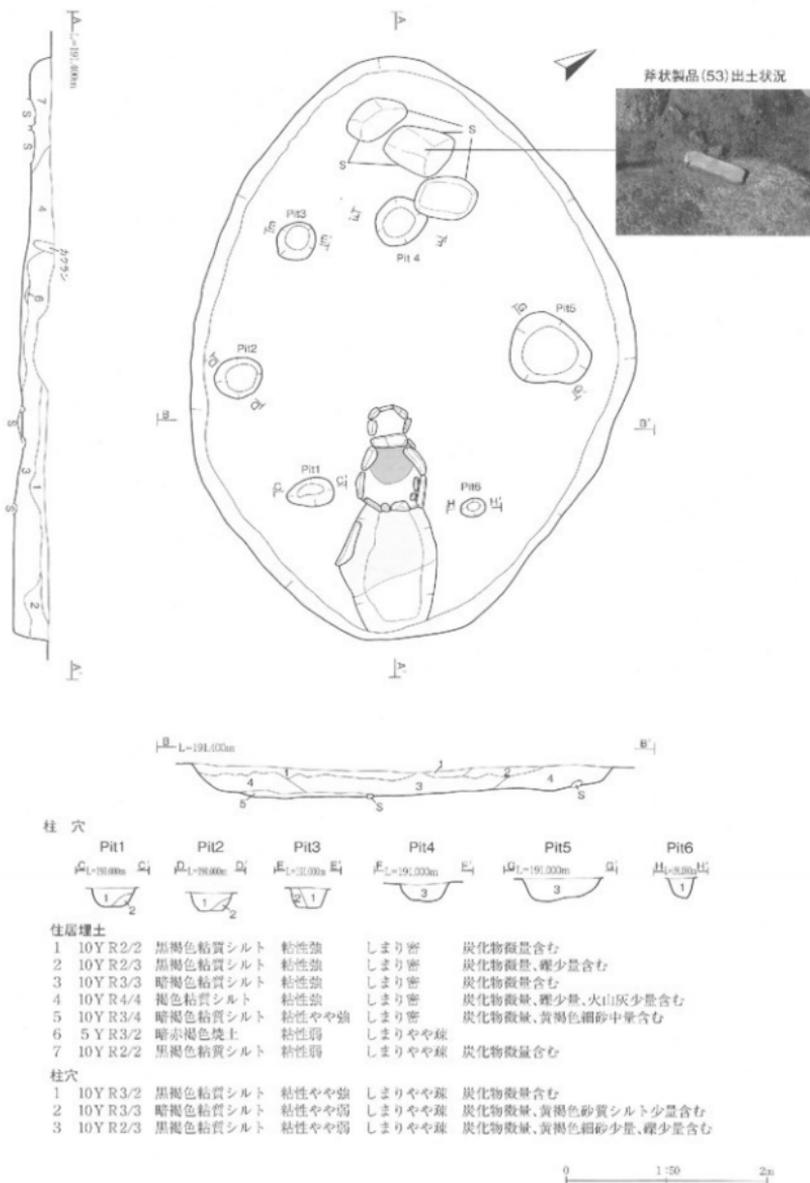
採



- 1 10Y R2/2 黒褐色粘質シルト 粘性やや弱 しまりやや密 炭化物少量含む
- 2 10Y R3/3 暗褐色粘質シルト 粘性やや弱 しまりやや疎
- 3 10Y R2/3 黒褐色粘質シルト 粘性やや弱 しまりやや疎 掘り方屋上
炭化物微量、黄褐色砂質シルト少量含む



第26図 7号住居跡



第27図 8号住居跡(1)

〈埋土〉7層に分けられる。4層中には流れ込みによるものと思われる火山灰が混入する。この火山灰は、基本層序Ⅲ、Ⅳ層に混入するものと同じである。

〈床面・壁〉炉を検出したⅥ層面を床面とする。ただし一部はⅦ層に達しており、粗砂が露出していた。ほぼ平坦であるが、硬化面は認められない。壁はほぼ直立気味である。

〈柱穴・壁溝〉柱穴6個を確認した。やや重むが炉の主軸線に対し、Pit 1とPit 6、Pit 2とPit 5、Pit 3とPit 4が左右対称に位置する。したがって主柱穴はこれら6本柱と考えられる。柱穴の径はやや小さく、Pit 5以外は、径40cm前後である。Pit 5はやや歪な楕円形を呈し、84×72cmを測る。深さはいずれも浅く、床面から20cm程度である。柱穴埋土は単層か2層に分けられるが柱痕跡は認められない。また壁溝は認められなかった。

〈炉〉南東壁付近に位置する。石囲部+石凹部+前庭部で構成される複式炉である。石囲部は列状に並ぶ。ここでは先端側を石囲部1、前庭部側を石囲部2と仮称する。

石囲部1は楕円形を呈し、30×50cmを測り、主軸方向に対し横に長い。炉石は扁平な棒状の自然礫を用い、掘り方に置くように据えられている。燃焼部は認められず、また石囲部内の埋土には炭化物が分布するのみで、焼土の堆積は認められない。

石囲部2は楕円形を呈し、規模は80×70cmで石囲部1より大きい。深さは床面から最深8cmを測る。炉石は扁平な自然礫を用いるが、石囲部1の炉石より大きい。炉内には燃焼部が認められる。掘り方は石囲部1と同様で、炉石を掘り方に据えているのみである。前庭部は120×98cmを測り、炉主軸方向に長い形状を呈する。浅い掘り込みで床面から最深8cmを測る程度である。前庭部の南側には扁平な自然礫が縦に設置されているが、北側にはなく、また抜き取り痕跡も認められないので、元々南側のみ設置されていたものと思われる。前庭部底面には広い硬化面が認められる。

〈出土遺物〉縄文土器3734.32g、土製品2点、石器6点が出土した。出土状況を見ると、埋土上位～中位の出土量が大部分を占める。特に埋土上位が多く、42～44のような大形破片が見つまっている。一方、床面上からの出土量は少なく、小片がほとんどであるが、斧状土製品(53)が住居西側の人糞上に置いたかのような状態で出土した(第27図写真)。出土遺物については床面上出土は住居廃絶時、その他は住居廃絶後の埋没段階に廃棄されたものと思われる。

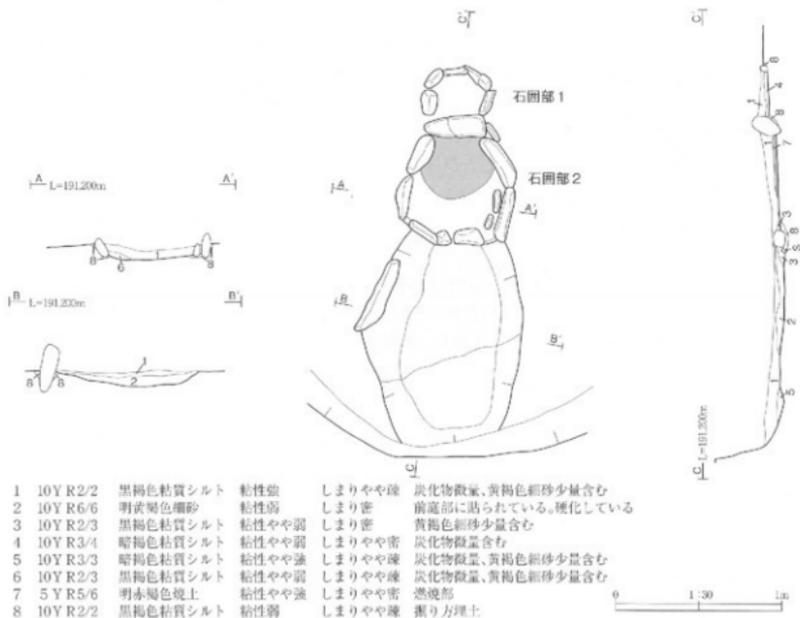
41はⅢ群6類に相当する深鉢の大形破片である。単節RLが施文される。42も深鉢の大形破片で器面には沈線による楕円形区画文と曲線的な区画文が施文され、楕円形区画内には縄文や刺突文が充填される。Ⅲ群4類に相当する。44は深鉢の胴部片で器面には曲線的なモチーフの区画文が描かれる。45・46はⅢ群3類の深鉢口縁部片である。49は深鉢の胴部片で、細い棒状工具により区画文が描かれ、51はⅢ群2類の深鉢胴部片で、縦位に垂下する隆帯が付く。

土製品は2点とも斧状土製品である。52は兩丸長方形を呈し、全体の1/3のみが残存する。53は先端部をやや欠損しただけでほぼ完形である。どちらも両面に沈線による区画文が描かれ、区画内には縄文が施文されている。また端部には、側面から穿孔が施される。

石器はスクレイパー3点とフレイク3点である。スクレイパー3点を図示した。54は縦長の形状で、正面の全周に直接打撃による二次加工が施されている。55は正面の左側縁部には二次加工が施され、刃部を作出している。もう片面は一部のみ二次加工が施される。56は2類に相当し、縁部のはほぼ全周に二次加工が施される。

〈時期〉出土遺物から縄文時代中期後葉(大木9式新段階)に比定される。

(須原)



第28図 8号住居跡(2)

9号住居跡(第31・32図、写真図版12・70・109)

〈位置〉調査区中央部北側、3B1kグリッドに位置する。

〈検出状況〉Ⅲ層上面において、略円形を呈す黒褐色の不鮮明な広がりを確認した。観察用ベルトを残してさらに下げたところ、ベルトの縦面で壁の立ち上がりが見られたこと、炉が発見されたことから竈穴住居跡と認定した。

〈重複関係〉8号住居跡、8号住居跡遺構に隣接するが、重複関係はない。

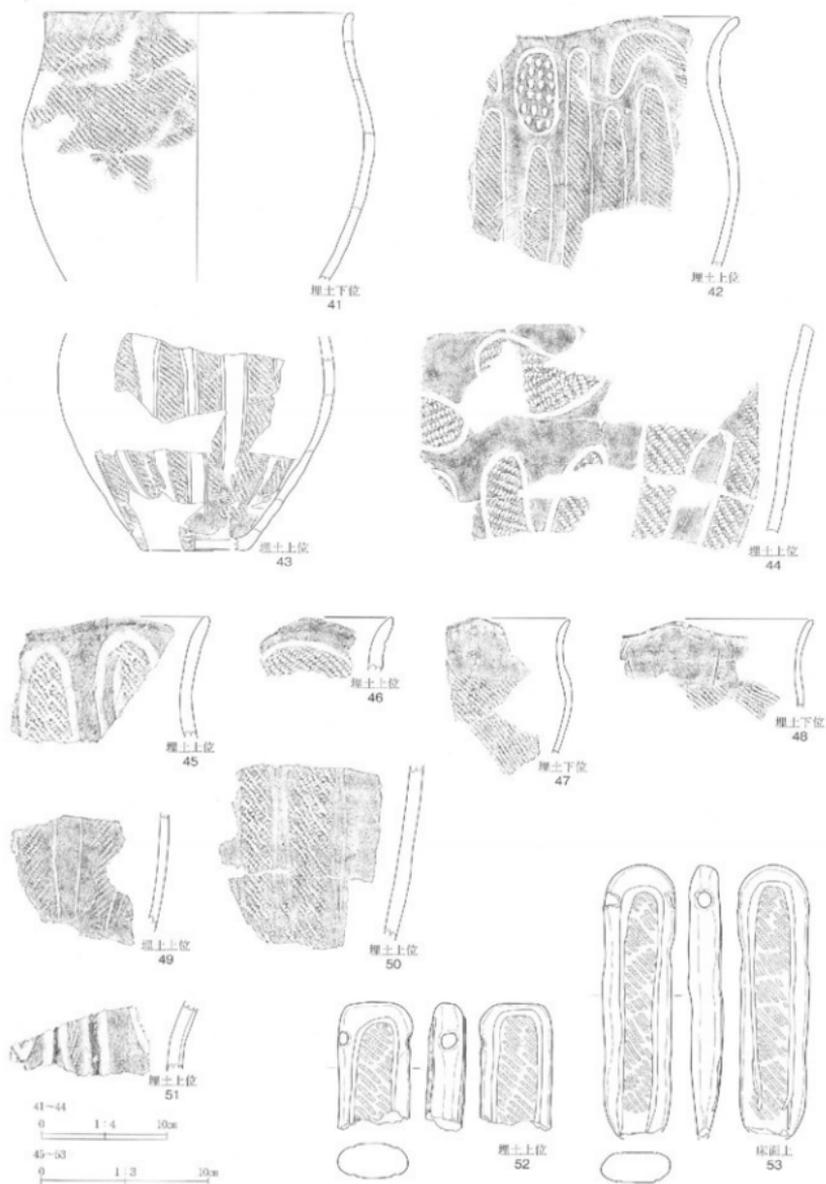
〈形態・規模〉略円形を呈し、長径4.1m、短径3.5mを測る。深さは検出面から10～20cmである。周辺遺構の深さから考えると、後世の削平を受けている可能性が高い。

〈埋土〉黒褐色粘質シルトを主体とし、3層に分けられる。2・3層は礫を含んでいる。

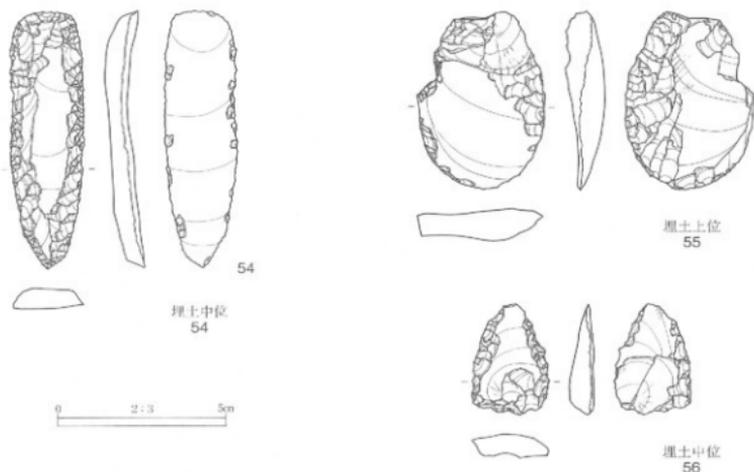
〈床面・壁〉砂礫まじりの黄褐色土層を床面と判断した。ほぼ全面に礫が露出しているため、やや凹凸がある。南東及び南西側に巨礫が露出する。壁はほぼ全周を確認した。やや外へと広がりながら立ち上がる。

〈柱穴・壁溝〉柱穴、壁溝ともに認められなかった。

〈炉〉石間炉である。ほぼ中央部に設けられている。規模は長軸54cm、短軸40cmを測る。南側が丸みを帯びた略方形を呈し、炉石には被熱の痕跡が認められない。炉内に炭化物は確認できたものの、焼土は確認できなかった。掘り方は認められるが僅かである。底面に炉とほぼ同じ大きさの礫があり、掘削できる部分が限られていたことから、石を据える分だけを掘り、埋め込んだものと考えられる。



第29図 8号住居跡出土遺物(1)



第30図 8号住居跡出土遺物(2)

〈出土遺物〉縄文土器442.1g、石器1点が出土した。出土状況を見ると、埋土中として取り上げたものを除き、全て埋土上位～中位から出土しており、遺物は住居廃絶後の埋没段階に廃棄されたものと捉えられる。

57はⅢ群3類に相当する深鉢で、単節RLを地文とし、沈線で楕円形や「 \cap 」字形の区画文を描く。区画外側は地文を磨り消すが、胴下半部には地文の磨り消しが弱く、地文が残る。58も同様の器形の深鉢である。59はⅢ群6類に相当する深鉢の口縁部片で、口縁部は無文になり、胴部には地文の複節RLRのみが施文される。

石器はスクレイパー1点(61)である。縦形の剥片を素材とし、長辺方向の両縁辺部の片面に二次加工を施し、刃部を作出している。二次加工は片面で顕著で、もう片面は縁辺の一部のみ二次加工が施される。

〈時期〉出土遺物から縄文時代中期後葉(大木9式新段階)に比定される。

10号住居跡(第33～36図、写真図版13・71・72・110)

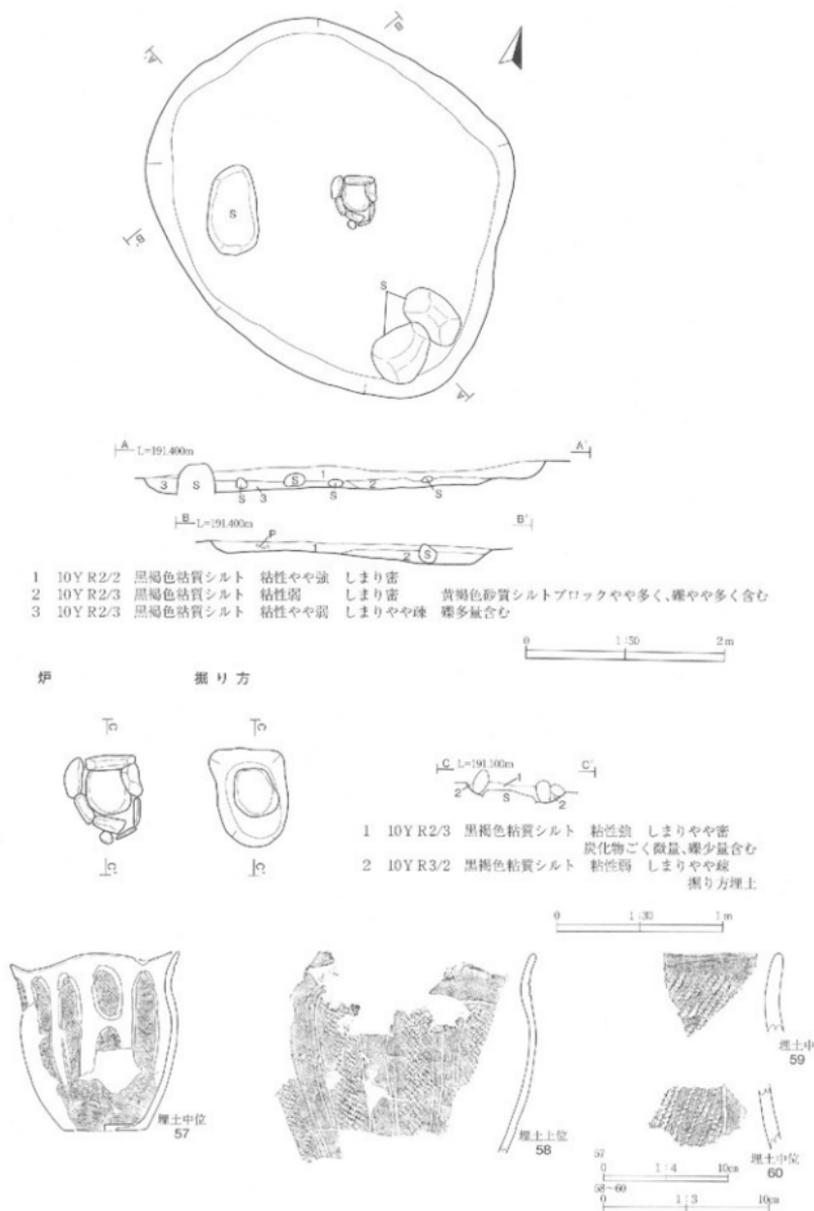
〈位置〉調査区東側、3B3kグリッドに位置する。

〈検出状況〉Ⅲ層上面で、黒褐色の不鮮明な広がりを確認した。観察用ベルトを残してさらに下げたところ、ベルトで壁の立ち上がりの様子が観察されたこと、炉石を確認したことから、竈穴住居跡と認定した。

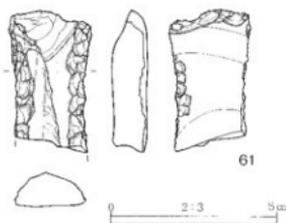
〈重複関係〉13号住居跡、12号住居跡、14号住居跡に隣接するが、重複関係はない。

〈形態・規模〉東側が張り出した円形を呈し、長径6.4m、短径5.2mを測る。深さは検出面から30～45cmである。

〈埋土〉黒褐色粘質シルトを主体とし、6層に分けられる。底面に層状に暗褐色粘質シルトが堆積する。レンズ状堆積を呈しており、自然堆積と考えられる。



第31図 9号住居跡出土遺物(1)



第32図 9号住居跡出土遺物(2)

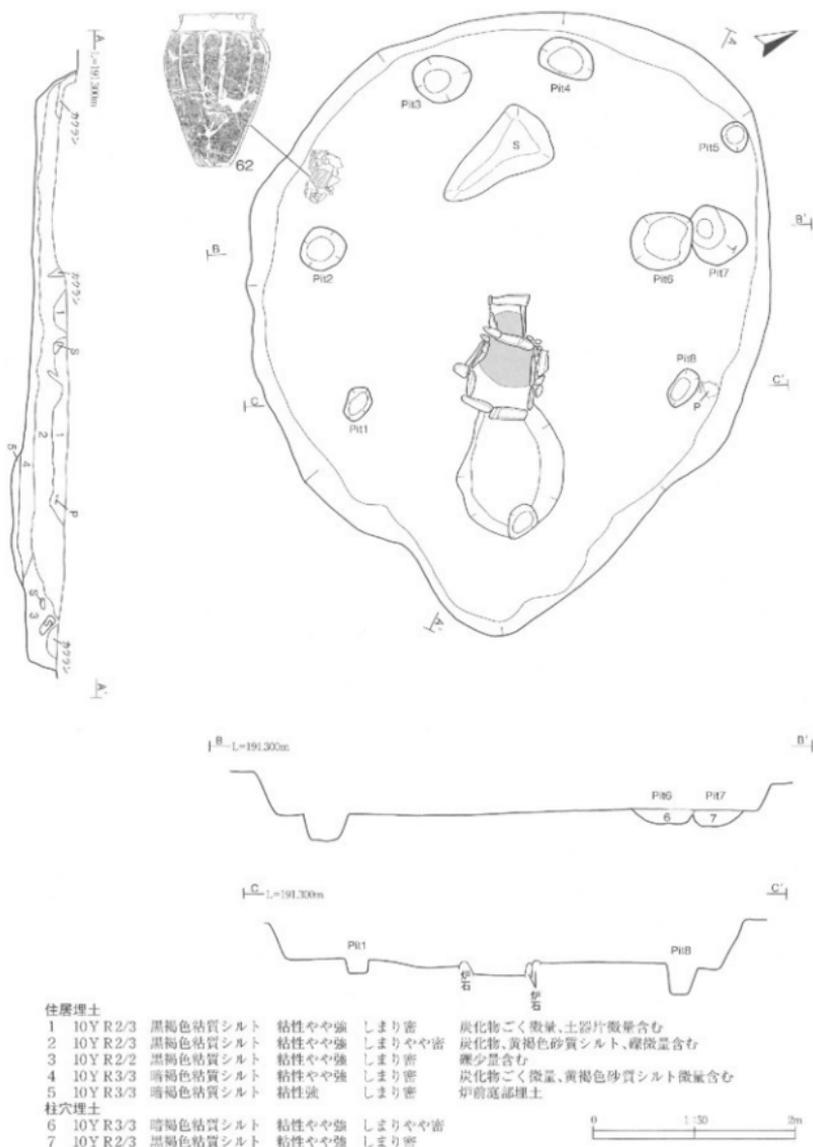
角形状の主柱穴配列の竪穴住居跡と考えられる。壁溝は確認することができなかった。

〈炉〉複式炉である。住居の中央からやや東側に位置する。炉は石囲部+土囲部+前庭部の構造を持ち、長軸2.5m、短軸1.1mの規模を有する。石囲部は一辺が30～40cmと70～90cmの不整形を2つつけた形を呈する。炉石には被熱の痕跡が認められ、炉内には焼上りが堆積する。但し、大きな石囲部の前庭部側では焼土は確認できなかった。掘り方は認められるが、礫を据える最低限のみを掘削し、据えたものと考えられる。前庭部は長径123cm、短径105cmの楕円形を呈し、全体的に硬化していた。

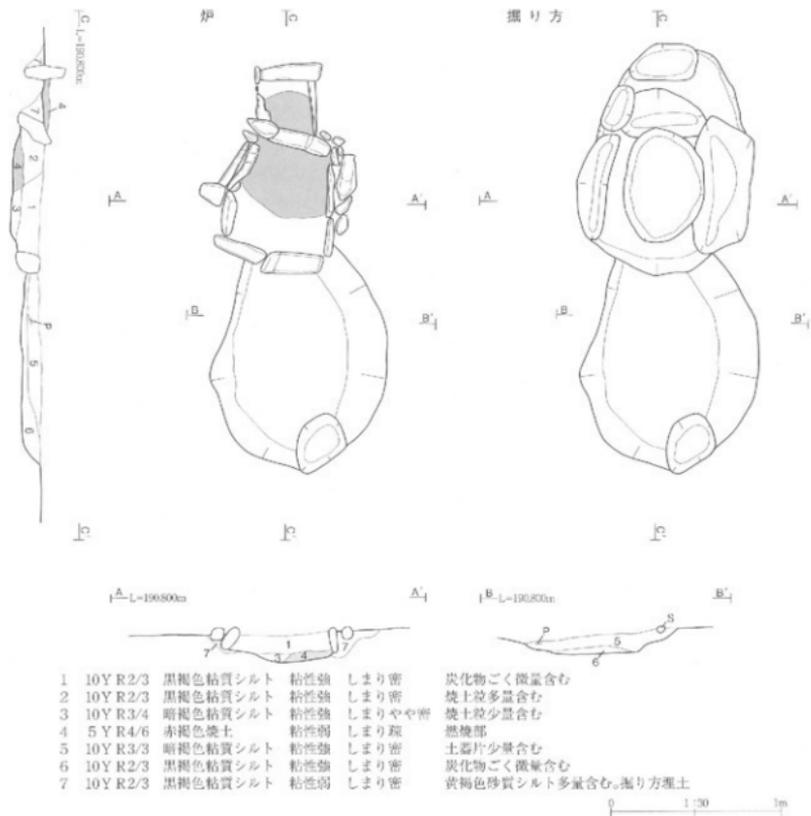
〈出土遺物〉縄文土器10923.4g、石器9点が出土した。出土量を重量比で比べると、床面上からが大部分を占めている。これは62が床面上で含まれるためである。62はほぼ完形で、床面上の南壁付近から横倒しの状態で出土している。また炉の埋土中からも比較的多くの上器片や石器が出土している。一方、埋土から出土する遺物は特に埋土上位～中位が多い。ただしいずれも小片である。遺物は住居廃絶時と廃絶後の埋没段階で廃棄されたことが窺えるが、本住居跡は住居廃絶時に廃棄されたものの方が多いことが窺える。

62はほぼ完形の深鉢である。頸部に隆帯が横位に巡り、口縁部と胴部とを区画する。口縁部は無文である。胴部は頸部下に4単位の弧状の突起が付き、その突起に沿うように「 \cap 」状に沈線が区画文が施される。63は鉢の大形破片で4単位の波状口縁を呈し、胴上半で大きく膨らむ器形である。口縁部から胴部下半にかけては「 \cap 」字形の区画文が描かれる。64は4単位の波状口縁を呈し、胴上半で大きくふくらみ口縁部は内湾する器形の深鉢である。Ⅲ群4類に相当し、楕円形区画文が連結し、横に向けた「C」字形のようなモチーフの区画文が施文される。65は3群6類に相当する深鉢の口縁部片で、4単位の波状口縁を呈する。66はⅢ群3類に相当する。残存部が少なく、全容が定かではないが、胴上半からすぼまりながら立ち上がる壺と思われ、器面に磨消手法を用いて区画文が描かれている。区画文は「 \cap 」字形の区画文であるが、胴部下半で区画文が二重に描かれている。68はⅢ群3類に相当する深鉢の口縁部片で、幅の広い沈線によって楕円形区画文が描かれる。区画を形成する沈線は粗く、二重になるところも認められる。76は深鉢の口縁部片でⅢ群6類に相当する。器面には無節Iが施文されるが、縄文の施文が浅い。69～75、77～79は、おおむねⅢ群3類に相当するものが多いが、70はⅢ群4類に相当し、口縁部から胴部にかけて楕円形区画文が描かれ、そのうち2つは連結する。71は口縁部には横位に展開する楕円形区画文が描かれ、区画文内には刺突文が充填される。78・79はⅢ群6類に相当する。

石器は石鏃2点、スクレイパー3点、Rフレイク1点、フレイク3点が出土した。石鏃2点とスクレイパー1点を図示した。80・81は石鏃である。80は先端部を欠損している。81は炉の埋土中から出土した石鏃で、先端部と基部の一部を欠損する。82はスクレイパーで1類に相当する。正面右側の縁辺部に直接打撃による二次加工を施している。上部にも細かい二次加工を施し、深い抉りを作成する。



第33図 10号住居跡(1)



第34図 10号住居跡(2)

その向かい側には掘りのような加工痕がないので、石匙ではなく、スクレイパーと判断した。

〈時期〉出土遺物から縄文時代中期後葉(大木9式部段階)に比定される。

(戸根)

11号住居跡(第37～41図、写真図版14・72・110)

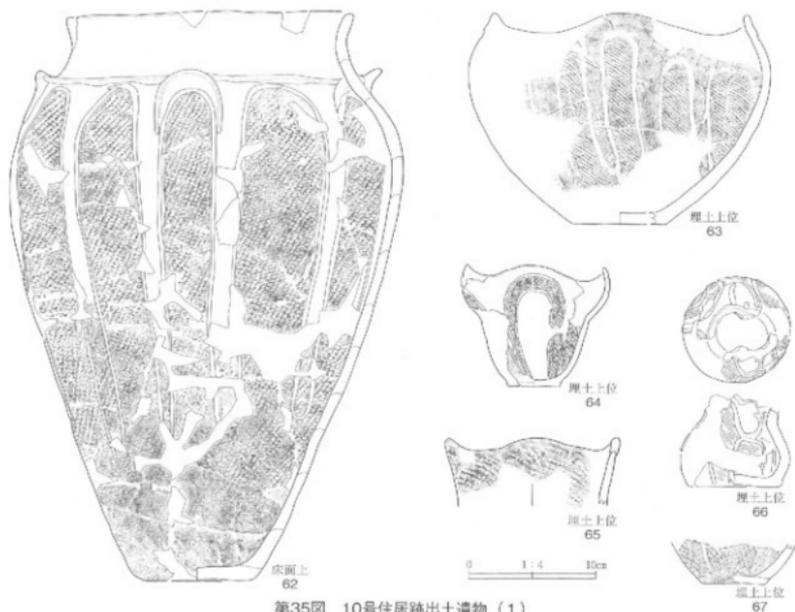
〈位置〉調査区中央、3B3 i グリッドに位置する。2m北側に31号土坑、3m東側に10号・14号住居跡が位置する。

〈検出状況〉Ⅲ層上面で暗褐色のプランを検出した。不明瞭なプランであったが、検出面上に炭化物が分布しており、掘り下げたところ、炉を検出し、竪穴住居跡と判断した。

〈重複関係〉なし。

〈形態・規模〉不整な楕円形を呈し、規模は4.8×4.3m、深さは検出面から最深42cmを測る。

〈埋上〉9層に分けられる。埋土上位は黒褐色粘質シルト、埋土下位は暗褐色粘質シルトを主体とする。



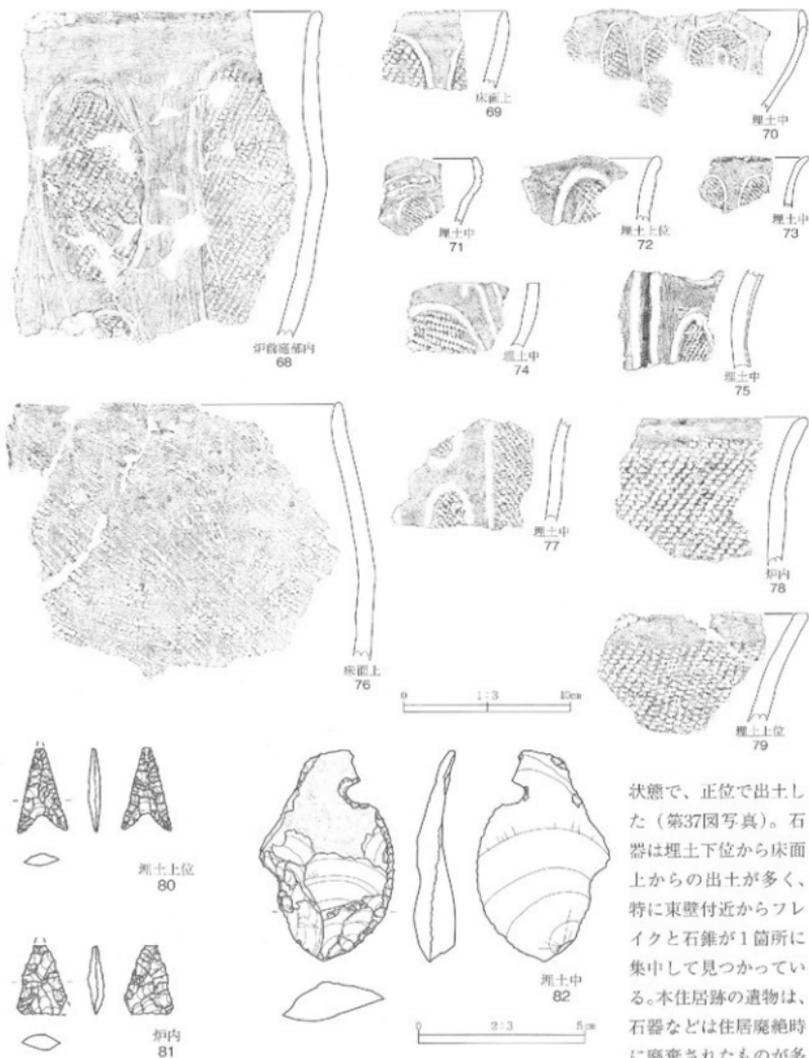
第35図 10号住居跡出土遺物(1)

〈床面・壁〉 炉を検出したVI層面を床面とする。ほぼ平坦であるが、硬化面は認められない。また床面上の東側で3ヶ所から巨礫が露出している。それぞれに掘り方などは認められないので、自然に露出しているものと思われる。壁は緩やかに外へと広がりながら立ち上がる。

〈柱穴・壁溝〉 柱穴6個を確認した。やや北へと傾くが、炉の主軸線からみて、Pit 1とPit 6、Pit 2とPit 5、Pit 3とPit 4が左右対称に位置する。したがってこれらを主柱とする6本柱であったと思われる。柱穴の規模は、Pit 1が径80cmと比較的大きいが、その他は径20cmでやや小さく、深さはいずれも床面から20cm程度である。埋土は褐色粘質シルト(10層)を主体とする単層が多く、柱痕跡は認められない。また壁溝は認められなかった。

〈炉〉 東壁付近に位置する。石囲部+前庭部で構成される複式炉である。石囲部は正方形を呈し、規模は一辺70cm、深さは床面から最深6cmを測る。炉石は扁平な自然礫を用いているが、炉石は被熱により破損が著しい。掘り方は浅く、炉石は掘り方に立てかけ、隙間を土で埋める程度だが、西部と東部の炉石は設置する際、炉石が埋まる程度深く掘り込んでいる。石囲部内は特に手前側が焼けており焼土が約2cm堆積する。前庭部は浅い掘り込みで、規模は70×112cmを測り、主軸線に対し、横に広い楕円形を呈する。また前庭部の中央には硬化面が認められる。また住居壁と前庭部との間に100×60cm大の礫が露出している。この礫には掘り方が認められないので、人為的に設置したのではなく、床面上に元々露出していた自然礫と考えられる。

〈出土遺物〉 縄文土器3192.0g、石器32点が出土した。他の住居跡と比べて石器の出土量が多いのが特徴である。出土状況を見ると、埋土上位からの出土量が最も多く、埋土下位出土がそれに次ぐ。一方、床面上からの出土量は少なく、やはり小片が目立つ。目立ったものは84が床面上よりやや浮いた

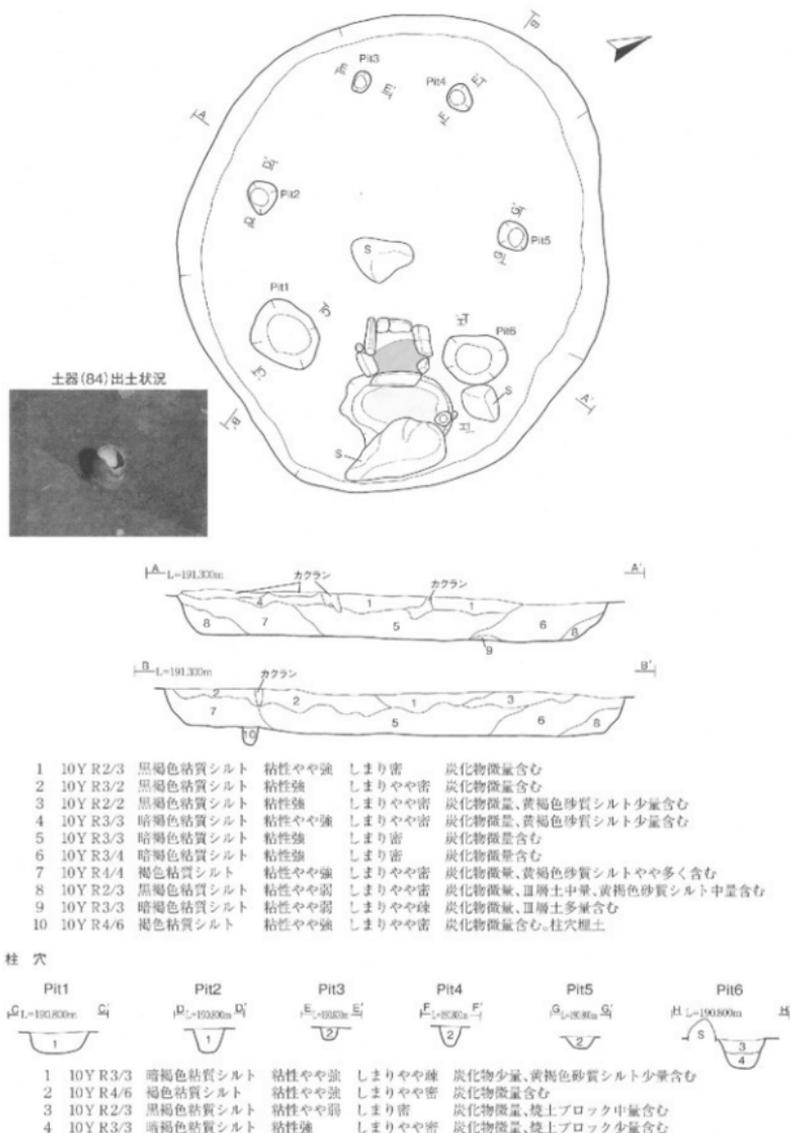


第36図 10号住居跡出土遺物（2）

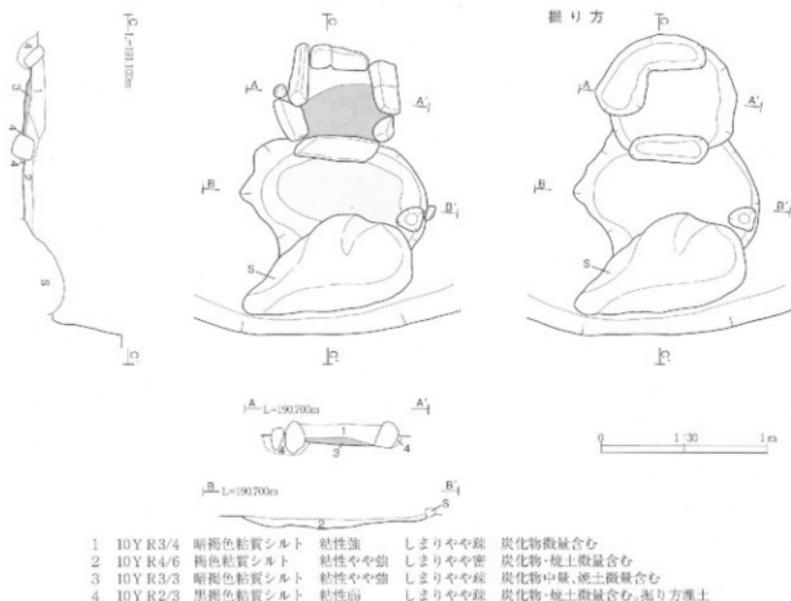
れたものが多いことが窺える。

83は深鉢の大形破片で胴部下半から底部にかけて残存する。地文である複節RLR以外に文様が認

状態で、正位で出土した（第37図写真）。石器は埋土下位から床面上からの出土が多く、特に東壁付近からフレイクと石錐が1箇所に集中して見ついている。本住居跡の遺物は、石器などは住居廃絶時に廃棄されたものが多いが、土器は住居廃絶後の埋没段階に廃棄さ



第37図 11号住居跡(1)



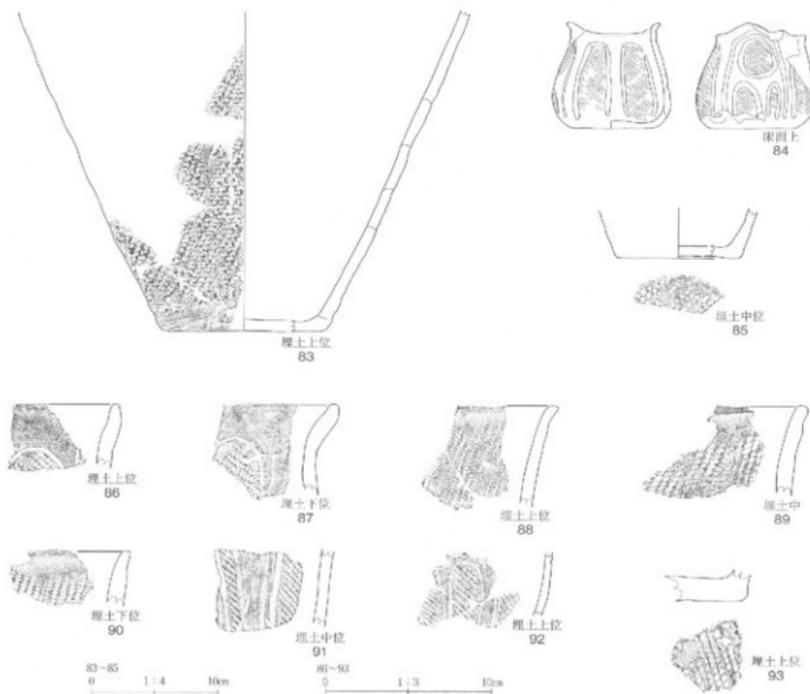
- | | | | | | |
|---|----------|----------|-------|--------|------------------|
| 1 | 10Y R3/4 | 暗褐色粘質シルト | 粘性強 | しまりやや疎 | 炭化物微量含む |
| 2 | 10Y R4/6 | 褐色粘質シルト | 粘性やや強 | しまりやや密 | 炭化物・焼土微量含む |
| 3 | 10Y R3/3 | 暗褐色粘質シルト | 粘性やや強 | しまりやや疎 | 炭化物中量, 焼土微量含む |
| 4 | 10Y R2/3 | 黒褐色粘質シルト | 粘性弱 | しまりやや疎 | 炭化物・焼土微量含む。掘り方埋土 |

第38図 11号住居跡(2)

められないのでⅢ群6類に含まれると思われる。15号住居跡の埋土中から出土した破片と接合している。84は小形の深鉢で、コップ状の形態で口縁部は外反し、口唇部は2単位の波状を呈する。器面には「 \cap 」字形や円形の区画文が施され、区画文を覆うように「 \cap 」字形の沈線文も施される。86、87はⅢ群3類に相当する深鉢の口縁部片で楕円形（あるいは「 \cap 」字形か）区画文が描かれている。88・89・90はⅢ群6類に相当する。85・93は深鉢の底部片底面に縄文が押しされる。

石器は石鏃2点、石錐1点、スクレイパー1点、石皿1点、軽石製品1点、Rフレイク2点、フレイク24点が出土している。フレイクの出土量が多い。そのうち石鏃2点、石錐1点、スクレイパー1点、Rフレイク1点、フレイク2点を図示した。石器の出土状況で特徴的なのは、フレイクが東壁際の埋土下位から一括して出土したことである。また出土したフレイクのほとんどが、石質鑑定の結果北上山地系の頁岩であった（図示したものは奥羽山脈系の頁岩）。本遺跡から出土したフレイク類のほとんどは奥羽山脈系の頁岩であり（第Ⅶ章参照）、にもかかわらず本住居跡からは北上山地系の頁岩のフレイクが多量に一括出土している。

94・95は石鏃である。どちらも無茎鏃である。96は集中してみつかったフレイクの中からいっしょに出土した石錐である。石材は奥羽山脈系の頁岩であるので、同じ地点から出土したフレイクが北上山地系の頁岩が多いことを考えると、同じ母岩のものではない。したがってフレイク類はこの石錐を製作する際に排出されたものではないことが窺える。97はスクレイパーで片面のみに二次加工により刃部を作り出し、もう片面には挟りのような二次加工が両側から施されている。98はRフレイクである。正面の両側面に二次加工が施されている。角度が鈍く、刃部であるか定かではないのでRフレイクと



第39図 11号住居跡出土遺物(1)

した。99・100はフレイクでどちらも背面に自然面が残る。101は石皿で、全体の4分の1ほどしか残存していないが、底面に円形の脚が付き、また使用面には縁がある。102は軽石製品で半円形に成形され、片面には溝が1条認められる。

〈時期〉出土遺物から縄文時代中期後葉（大木9式新段階）に比定される。

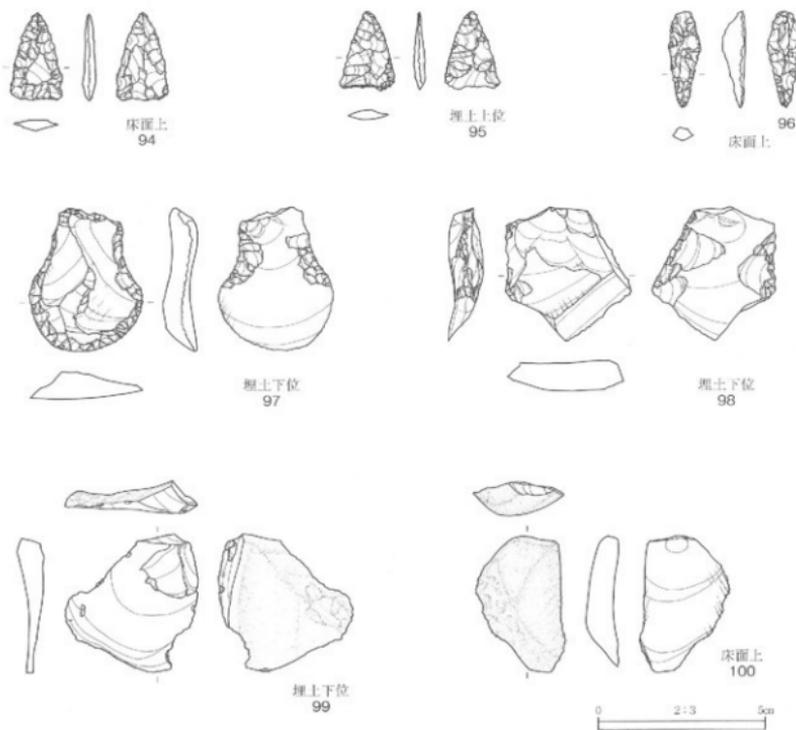
12-A・B号住居跡（第42～48図、写真図版15・16・73・111）

〈位置〉調査区中央、3B21グリッドに位置する。北東側に13号住居跡が重複し、1m南東側には16号住居跡が、2m西側には10号住居跡が位置する。

〈検出状況〉皿層上面で暗褐色のプランを検出した。プランは不明瞭であるが、検出面上に炭化物と土器片が分布する。掘り下げたところ、炉を検出し、壑穴住居跡と判断した。

〈重複関係〉13号住居跡と重複する。検出段階で13号住居跡よりも本遺構の方が新しいことを確認していたが、精査の作業工程上の理由から13号住居跡の方を先に精査し、重複関係を示す土層断面などは記録できなかった。また本遺構は石囲炉を伴う住居（12-A号住居跡）と複式炉を伴う住居（12-B号住居跡）が入れ子状に重複している。土層観察から12-A号住居跡の方が新しい。

〈形態・規模〉本住居跡は精査の途中まで2棟が重複しているものとは気づかず掘り下げてしまい、



第40図 11号住居跡出土遺物(2)

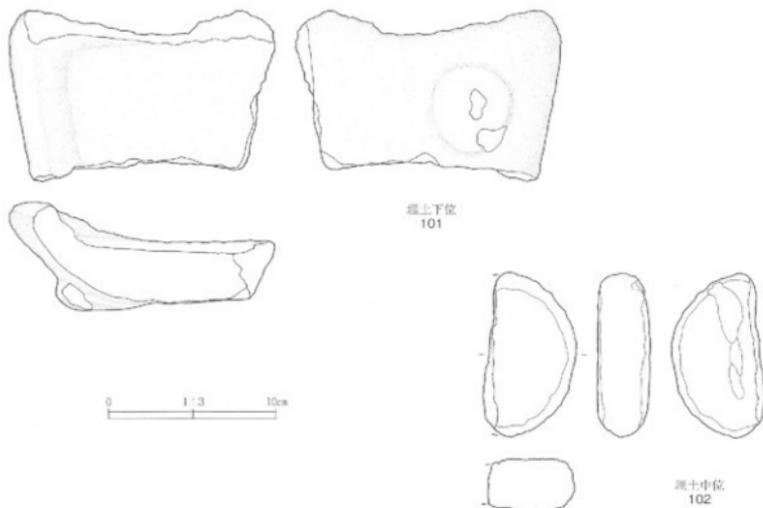
したがって12-A号住居跡の壁やなどはベルト断面以外は確認できていない。12-A号住居跡はベルト断面で確認した立ち上がりから第44図のような楕円形状になる。規模は推定で4.4×3.0 m、深さは検出面から最深42cmを測る。12-B号住居跡は不整楕円形を呈し、規模は6.8×5.7 m、深さは検出面から最深54cmを測る。

〈埋土〉11層に分けられる。3～6層が12-A号住居跡、7～11層が12-B号住居跡の埋土に相当する。1・2層については、2層が12-A号住居跡の壁を壊しており、12-A号住居跡が埋没した後に堆積したものである。

〈床面・壁〉12-A号住居跡と12-B号住居跡とでは床面の高さが異なり、12-A号住居跡の方が高い。12-A号住居跡は石間碁が検出した面、すなわち12-B号住居跡の8層上面を床面とした。ほぼ平坦であるが、東側がやや高く傾斜する。壁は緩やかに外へと開きながら立ち上がる。

12-B号住居跡は複式碁を検出したVI層面を床面とする。ほぼ平坦であるが、硬化面は認められない。壁は緩やかに外へと広がりながら立ち上がる。

〈柱穴・壕溝〉12-A号住居跡は柱穴1個と溝状の掘り込み1個が認められる。



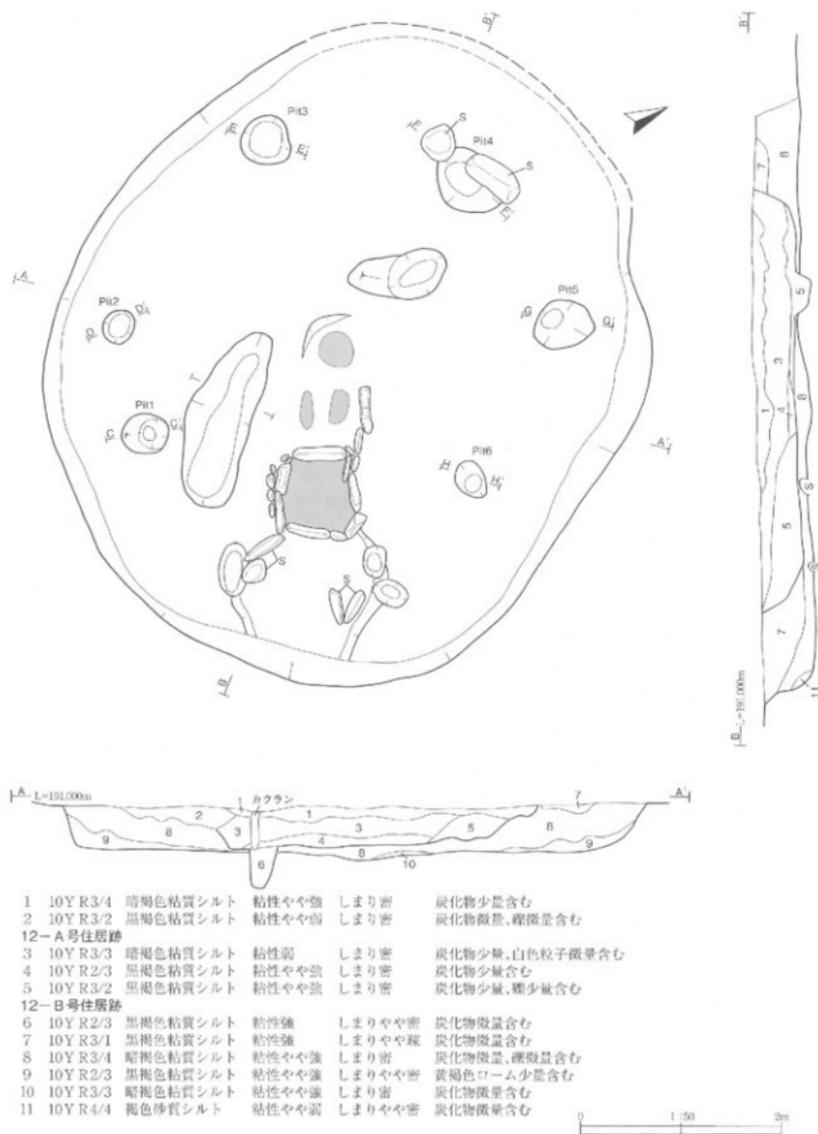
第41図 11号住居跡出土遺物(3)

12-B号住居跡は床面上から6個確認した。炉の主軸線に対し、Pit 1とPit 6、Pit 2とPit 5、Pit 3とPit 4が左右対称に位置する。したがってこれらが主柱となる6本柱と考えられる。柱穴は径20～40cmで、埋土は1～3層で、柱痕跡は認められない。また壁溝は認められなかった。

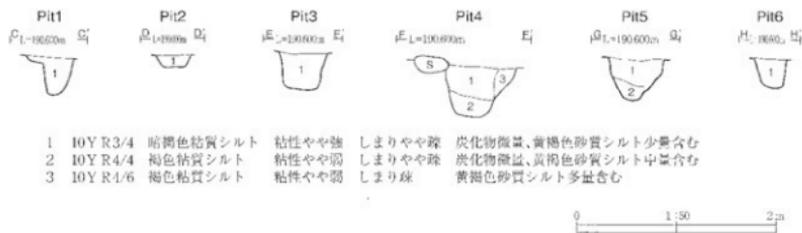
〈炉〉12-A号住居跡の炉は床面のほぼ中央に位置する。石囲炉である。不整な五角形を呈し、規模は50cm×46cm、深さは床面から6cmを測る。炉石は扁平な自然礫を用いる。ただし、炉石の大きさや形状に規則性は認められない。炉内には燃焼部は認められず、また埋土には炭化物が堆積するが、焼土は認められない。ただし炉石の一部は被熱しており、炉自体は使用されていたことが窺える。

12-B号住居跡の炉は南東壁付近に位置する。石囲部+前庭部で構成される複式炉である。石囲部の先端側は床面よりもやや下がっているが、断面(C-C')を記録したところ以外は緩やかな立ち上がりで、上端・下端が認められなかった。また石列が認められ、その内側には焼土が3個堆積する。この部分は石囲部とするには礫が全周せず、焼土の堆積もまばらである。また石囲部は正方形を呈し、規模は一辺90cm、深さは床面から最深14cmを測る。炉石は扁平な棒状の自然礫を用い、掘り方内に設置し、炉石の隙間や外縁部に小礫を埋め、根固めとしている。石囲部内はよく焼けており、全体に5cm程度の焼土が堆積している。前庭部は、規模が114×150cmを測る。浅い掘り込みで、床面から10cm程度である。また前庭部の南側に棒状の礫が設置されている。北側には礫は並ばず、また抜き取り痕跡も認められないので、元々設置されていなかったものと思われる。前庭部の阿庭には3個の柱穴が認められる。

〈出土遺物〉縄文土器7033.9g、石器28点、土製品1点が出土した。前述の通り、本遺構は2棟の住居跡が重複してことに気づかず掘り下げてしまい、12-A号、12-B号住居跡別々に遺物をとりあげることができず、一括している。出土状況を見ると、埋土上位～中位からの出土量が大部分を占める。一方、床面上からの出土量は少なく、また出土したのも小片が多い。したがって住居廃絶時や廃絶



第42図 12号住居跡(1)



第43図 12号住居跡(2)

後の埋没段階で廃棄され、中でも埋没段階に多く廃棄されたものであることが窺える。

土器は出土量が多い割に、器形を復元できたものは103のみであった。ただし103も残存部分は少なく、ほとんどが推定である。103は壺で胴中央部が大きく膨らみ、頸部から口縁部にかけて小さくすぼまる器形である。胴部には2単位の把手が付く。文様は幅広い沈線による曲線の区画文で、区画の外側に沿って微隆帯が付く。Ⅲ群5類に相当する。106は小形の鉢で完形である。無文である。107・108はⅢ群3類に相当する深鉢で楕円形の区画文が施文される。109～111・115はⅢ群6類に相当する深鉢である。109～110は口縁部が無文化する。114はⅣ群に相当し、沈線による三叉状の曲線的な区画文が施文され、区画内には充填手法による縄文が施文される。116は単筋RLが施文される深鉢胴部片で縄文原体が粗く、他の土器に施文された縄文原体とはやや異なるが、土器の胎土は他のものと類似しているため、Ⅲ群6類に含めた。104・105・117は深鉢の底部片である。底面には114・117は縄文が、105は木葉痕が認められる。

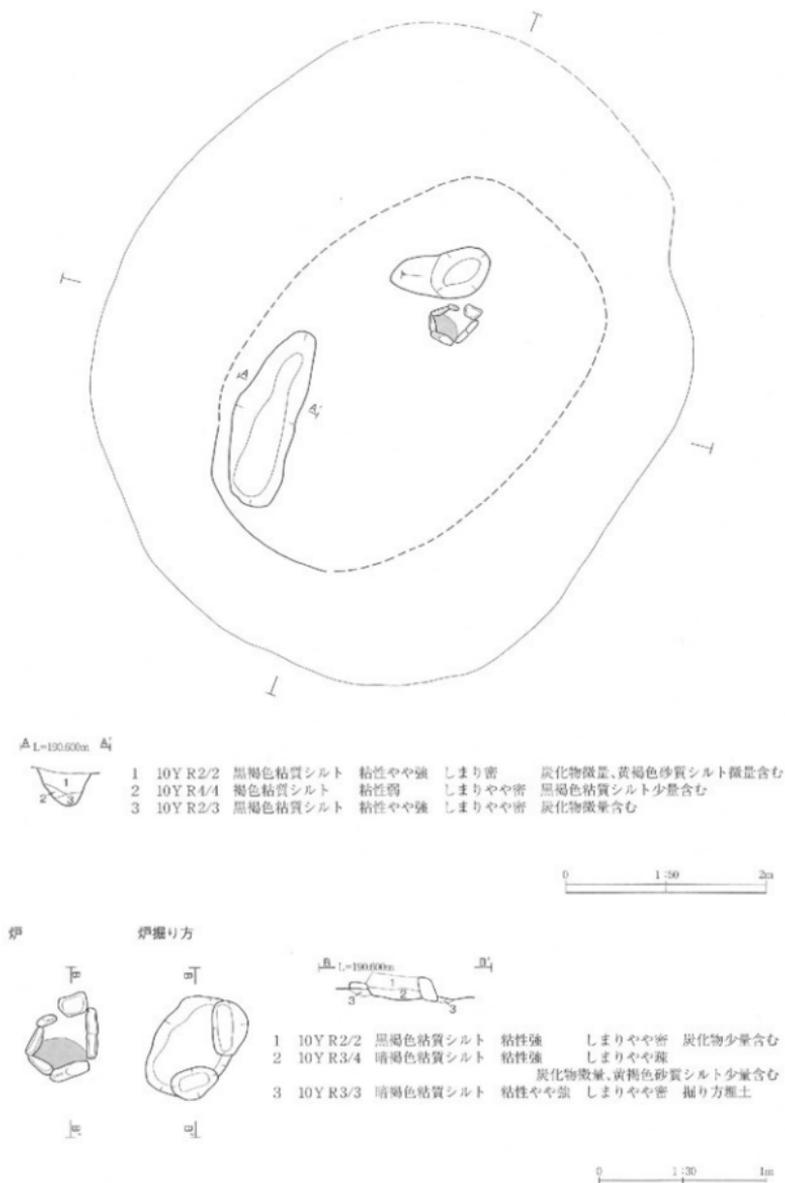
土製品は土製門板が1点(118)である。無文である。円形に整形され、側面が激しく磨滅している。

石器は石鏃4点、石錐1点、スクレイパー3点、磨石1点、石皿1点、Rフレイク3点、フレイク15点が出土した。石鏃3点、石錐1点、スクレイパー2点、Rフレイク1点、磨石1点、石皿1点を図示した。119～120は石鏃である。119は完形であるが、他の2点は基部を欠損している。122は石鏃で鋒部を欠損している。鋒部に厚みがあるのが特徴である。123・125はスクレイパーである。123は両面に二次加工を施し、刃部を作出している。125は片面のみの全周に二次加工を施し、刃部を作出している。124は片面の縁辺部に二次加工を施しているが、刃部には粗いので、Rフレイクとした。126は磨石で全体の2分の1が欠損している。両面に磨痕が認められた。127は石皿の縁辺部片で、加工を施し縁辺がつくられている。内部に磨痕は認められず、使用されたかは定かではない。(時期) 出土遺物から縄文時代中期後葉(大木9式新段階)に比定される。(須原)

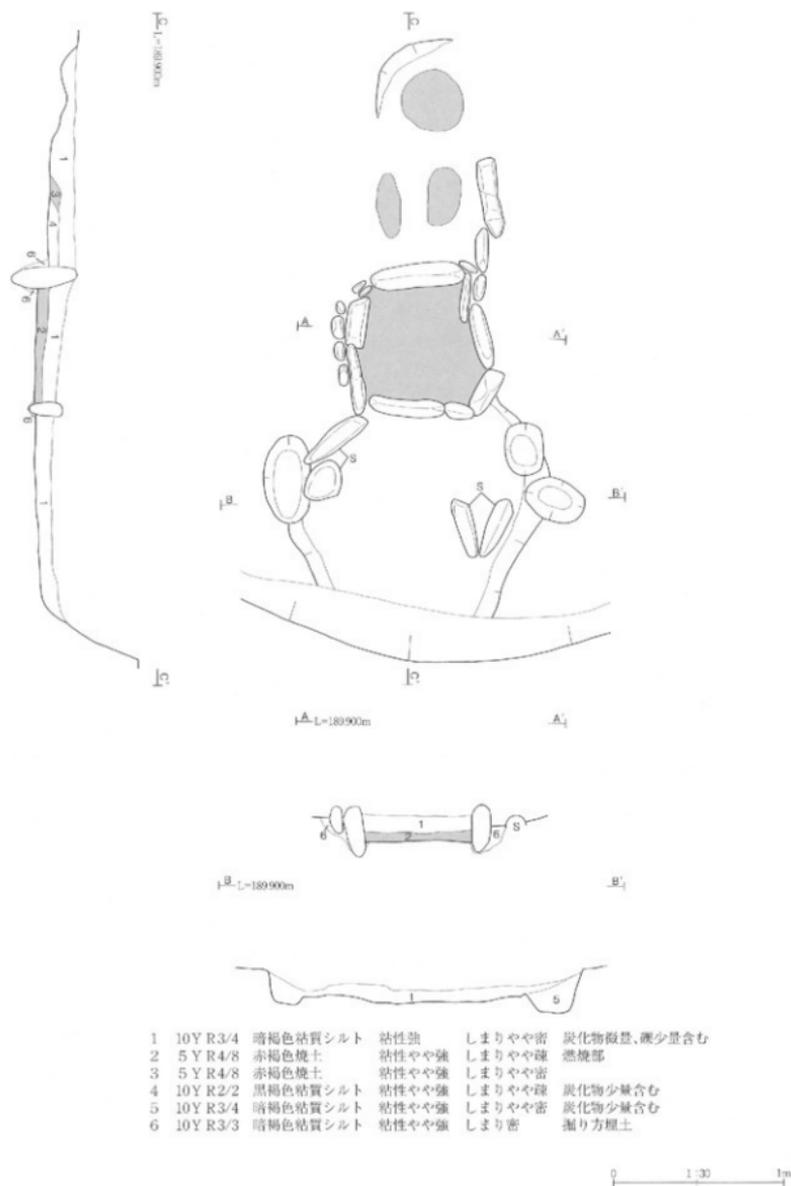
13号住居跡(第49～51回、写真図版16・17・111)

〈位置〉調査区中央付近北側、3B2mグリッドに位置する。

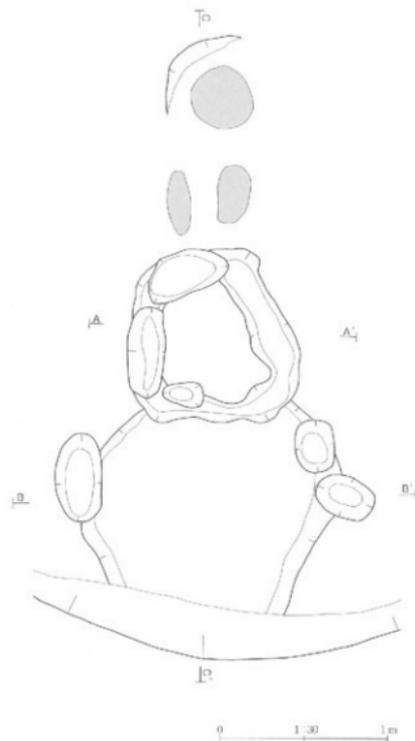
〈検出状況〉Ⅲ層上面で扇形をした黒褐色の不鮮明な広がりを確認した。観察用ベルトを残してさらに下げたところ、ベルトで壁の立ち上がりの様子が観察されたこと、埋設土器が確認されたことから、堅穴住居跡と認定した。なお、調査区周辺に田畑への進入のため、3B2mグリッド付近に調査区を横断するための道路を残しており、本遺構はその道路の下にも及んでいた(断面写真などは道路がまだある時に撮影している)。道路撤去後、残りの範囲の検出作業を行ったところ、楕円形状のプランであることを確認した。また本遺構の北側の一部は調査区外へ広がっている。



第44図 12号住居跡(3)



第45図 12号住居跡(4)



第46図 12号住居跡(5)

95cm、深さ20cm程度の平面が楕円形を呈する掘り込みがある。埋設土器の掘り方には礫を多量に含む。埋設土器を伴う複式炉の可能性もあるが、埋土に焼土が確認できないこと、埋設土器の底部と比べて掘り込みの底面が高いこと、本遺跡における複式炉を伴う他の竪穴住居跡と比較して炉の設置位置が著しく異なることから、複式炉とするには躊躇せざるを得ない。

〈出土遺物〉縄文土器4127.9g、石器4点が出土した。出土状況を見ると埋土下位～床面上の出土量が最も多いが、ほとんどが小片であり、住居廃絶後の埋没段階に廃棄されたものと捉えられる。

128～130は深鉢の口縁部片である。128・129はⅢ群2類に、130はⅢ群3類に相当する。128は楕円形状の肥厚部が縦位に付く。肥厚部に内側には沈線による二重の区画が施文され、区画内には刺突が充填される。12号住居跡の埋土中位から出土した土器片が接合している。129は口縁部と胴部とが横位の隆帯により区画される。口縁部には縦位の粗い沈線が巡る。胴部は浅い沈線による方形の区画文が施文される。131は埋設土器で、深鉢の底部である。器面にはわずかに単節RLが施文されるのみである。

石器はRフレイクとフレイクが2点ずつ出土したのみで、ツール類はみつからない。Rフレ

〈重複関係〉南東側で12号住居跡と重複する。埋土の堆積状況から本遺構が古いと判断される。

〈形態・規模〉円形を呈し、長径7.5m前後、短径5.8m前後を測る。12号住居跡との重複、掘り過ぎ及び調査区域外の部分があるため、正確な平面規模については不明である。深さは検出面から30～40cmである。

〈埋土〉黒褐色粘質シルトを主体とし、8層に分けられる。レンズ状堆積を呈しており、自然堆積と判断される。

〈床面・壁〉Ⅵ層を床面と判断した。北東側が礫層で、南西側が黄褐色粘質シルトである。このため、床面には凹凸がある。床面は南西方向に向かって下り傾斜がある。中央付近に埋設土器及び掘り込みがある。壁は重複や掘りすぎ等の為、ほぼ1/2の確認にとどまる。やや外へと広がりながら立ち上がる。

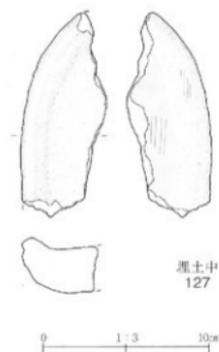
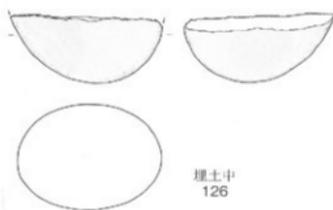
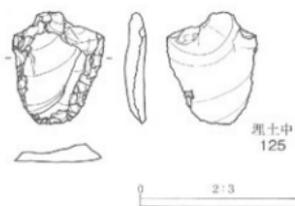
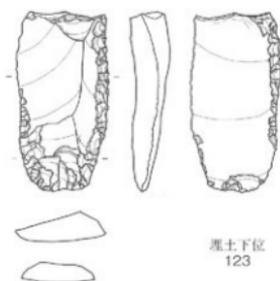
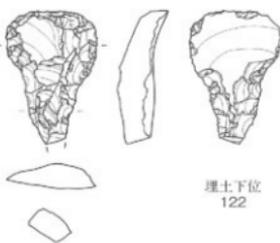
〈柱穴・壁溝〉柱穴は床面上で5個確認した。住居埋土3・4層を主体とした単層である。柱穴は不規則に配置されており、支柱穴として使用されたものの判断は難しい。壁溝は認められなかった。

〈炉〉明確に炉と判断できるものは確認できなかった。

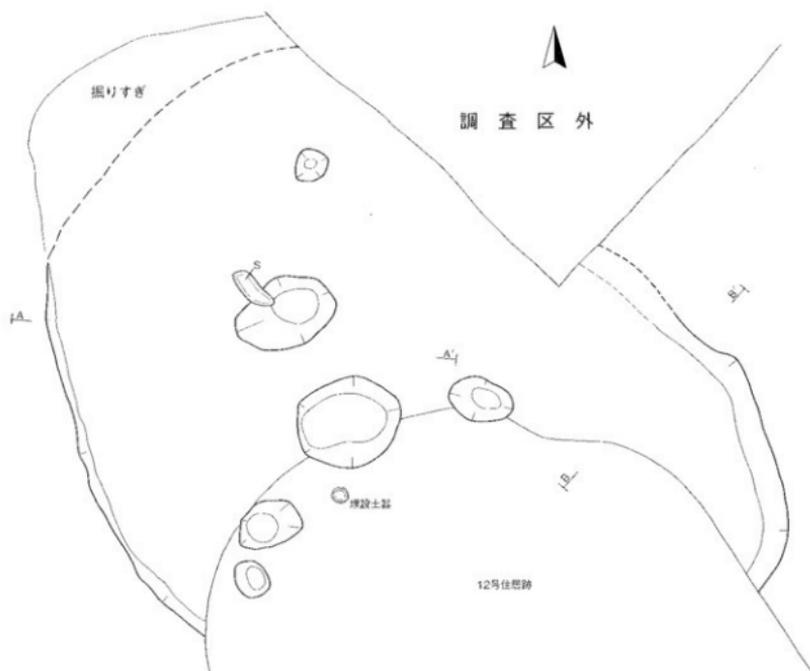
〈その他〉中央付近に直立の埋設土器が見つかり、この北側に長軸110cm×短軸



第47図 12号住居跡出土遺物 (1)



第48図 12号住居跡出土遺物(2)



- | | | | | | |
|---|----------|----------|-------|--------|----------------------|
| 1 | 10Y R2/2 | 黒褐色粘質シルト | 粘性強 | しまりやや密 | 炭化物ごく微量含む |
| 2 | 10Y R2/3 | 黒褐色粘質シルト | 粘性強 | しまりやや密 | 火山灰(?)微量含む |
| 3 | 10Y R2/3 | 黒褐色粘質シルト | 粘性やや強 | しまり密 | |
| 4 | 10Y R2/3 | 黒褐色粘質シルト | 粘性やや弱 | しまりやや密 | 礫少量(2,3層より暗め) |
| 5 | 10Y R2/3 | 黒褐色粘質シルト | 粘性やや弱 | しまりやや密 | 黄褐色砂質シルト多量(2,3層より暗め) |
| 6 | 10Y R2/2 | 黒褐色粘質シルト | 粘性強 | しまり密 | 礫多量含む |
| 7 | 10Y R2/3 | 黒褐色粘質シルト | 粘性やや弱 | しまり密 | 礫多量含む |
| 8 | 10Y R2/3 | 黒褐色粘質シルト | 粘性強 | しまり密 | 炭化物ごく微量、礫微量含む |



第49図 13号住居跡(1)

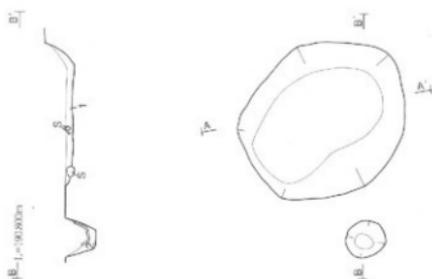
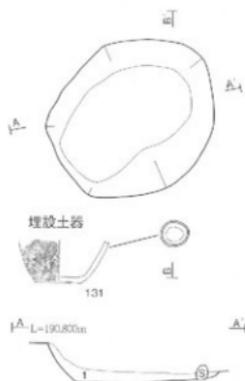
イク1点を図示した。片面の縁辺部に一部連続する二次加工が認められる。また一部にアスファルトのような付着物が確認できた。

〈時期〉出土遺物から縄文時代中期後葉(大木9式新段階)に比定される。

(戸根)

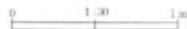
14号住居跡(第52~57図、写真図版18・19・74~76・112)

〈位置〉調査区中央、3B3kグリッドに位置する。周囲1~2mには遺構が密集しており、10~13



- 1 10Y R3/3 暗褐色粘質シルト 粘性やや強 しまり密
黄褐色粘質シルトブロック微量含む
- 2 10Y R3/3 暗褐色粘質シルト 粘性やや弱 しまりやや密
炭化物散見、塵多量含む、埋設土器掘り方

第50図 13号住居跡 (2)



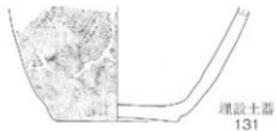
埋土中
128



埋土上位
129



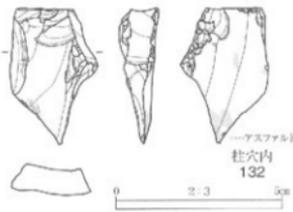
埋土下位
130



埋設土器
131



第51図 13号住居跡出土遺物



柱穴内
132

号住居跡、15～17号住居跡、32号土坑が位置する。
 〈検出状況〉Ⅲ層上面で暗褐色のプランを検出した。不明瞭なプランであるが、検出面上に炭化物が分布していた。ベルトを残して掘り下げたところ、複式炉（以下、炉A）が検出し、堅穴住居跡と判断した。ただし、その後複式炉の西側で別の複式炉（以下、炉B）を見つけた。
 〈重複関係〉なし。
 〈形態・規模〉南側がやや突出した不整な楕円形を呈し、規模は7.1×5.6 m、深さは検出面から最深42cmを測る。

〈埋土〉7層に分けられる。主体は、2、5層の暗褐色粘質シルトである。2層は、住居の中央に集中しており、その周辺に5層が堆積する。この点と炉が2基検出した点から、2棟の住居が重複している可能性も考えられる。すなわち、炉Bを伴う住居跡は2～4層に、また炉Aを伴う住居跡は5～

7層に相当することが考えられる。ただし1層は両方の住居跡にまたがって堆積していること、2、5層どちらとも土質や混入物に大きな差違は認められず、類似しており、可能性に留めたい。

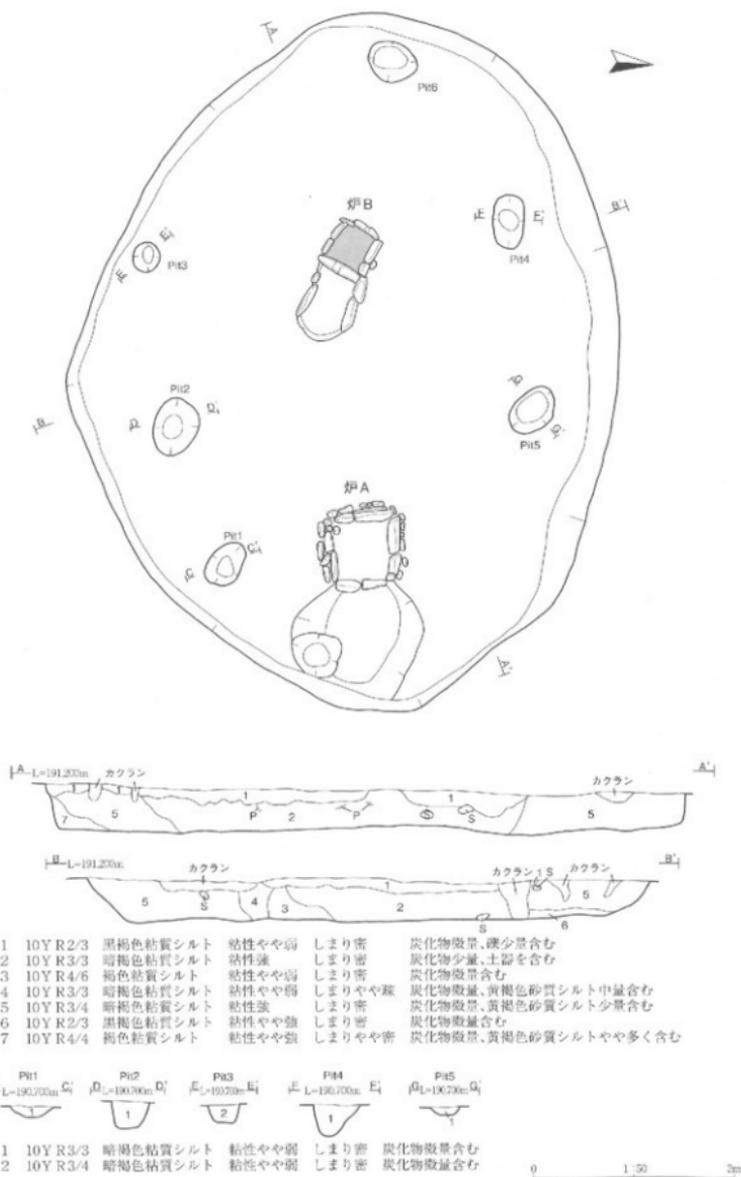
(床面・壁) 炉が検出したVI層面を床面とする。また床面の一部には、VII層面が露出している。硬化面は認められない。壁は東西方向の壁はほぼ直立に立ち上がり、南北方向の壁は緩やかに外へと広がりながら立ち上がる。

(柱穴・壁溝) 6個確認した。炉Aの主軸の延長線上西壁際にPit 6が位置し、その主軸線に対し、Pit 2とPit 5、Pit 3とPit 4が左右対称に位置する。したがってこれらが主柱となる5本柱であった可能性が高い。また炉Aの南側にPit 1が位置するが、炉を挟んで対になる柱穴がみつからない。柱穴はやや小さく、径20～60cmを測る。埋土は単層で柱痕跡は認められない。これらの6個の柱穴が炉Aに伴うとすれば、炉Bに伴う柱穴はないことになる。また壁溝は認められなかった。

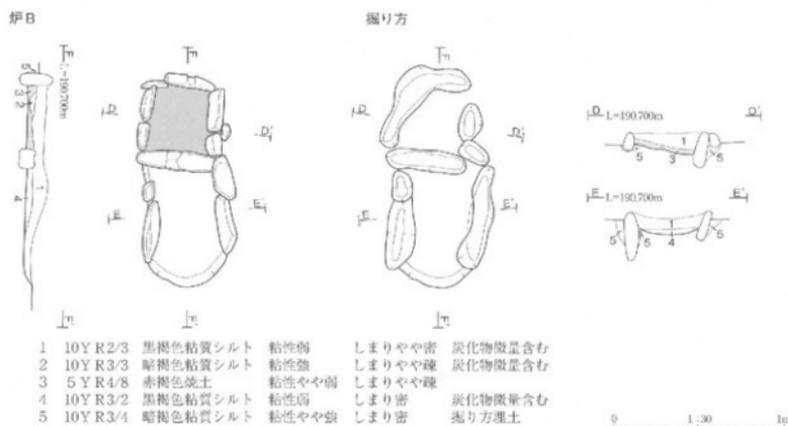
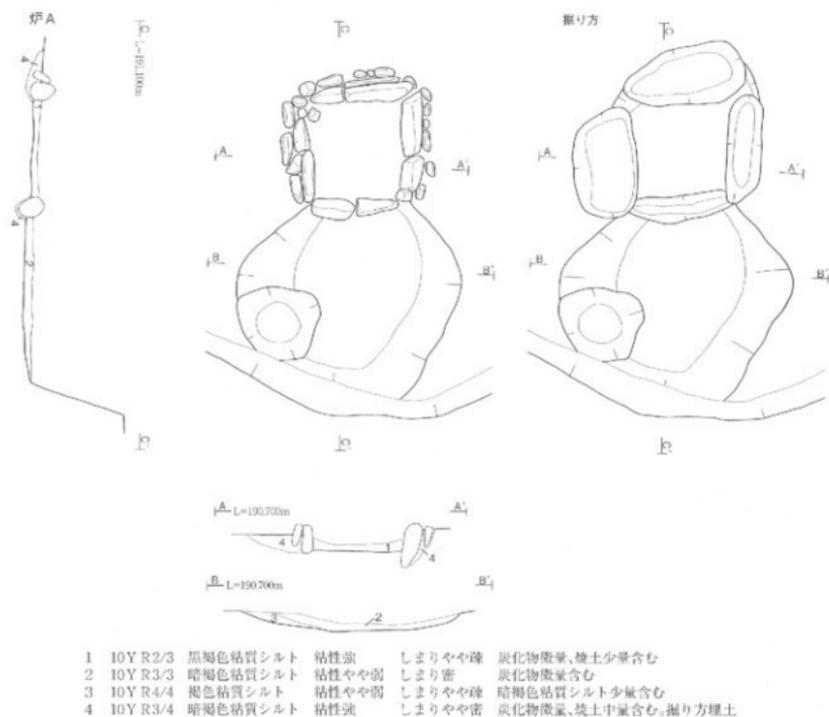
(炉) 同一床面上から2基検出した。炉Aは東壁付近に位置する。石囲部+前庭部で構成される複式炉である。石囲部は正方形を呈し、規模は一辺80cm、深さは床面から最深4cmを測る。炉石は扁平な棒状の自然礫を用い、炉石の隙間や掘り方外縁には10cm大の小礫を満たし、根固めをしている。石囲部内に燃焼部は認められず、焼土は埋土中に少量堆積するのみである。ただし炉石は激しく被熱を受けており、一部ぼろぼろになっている。前庭部は楕円形を呈し、100×134cmを測る。浅い掘り込み状で、床面から5cm掘り込まれた程度である。また前庭部の北東側には、柱穴状の掘り込みが1個認められる。炉Bは床面のほぼ中央に位置し、主軸方向は炉Aより北へ24°傾斜する。石囲部+前庭部で構成される複式炉で、炉Aより小さい。石囲部はほぼ正方形で、規模は一辺60cm、深さは床面から最深6cmを測る。石囲部内はよく焼けており、内部全体に4cmほどの焼土が堆積する。前庭部は規模は71×50cmの楕円形を呈する。浅い掘り込みで、床面から4cm掘り込まれた程度である。前庭部の両脇には主軸方向に礫が設置される。礫は扁平で大きな礫を縦にし、床面下に深く差し込んでいた。

(出土遺物) 本住居跡からは縄文土器22970.6g、石器25点が出土した。比較的石器の出土量が多いのが特徴である。出土状況を見ると、埋土上位～中位からの出土量が最も多い。一方、床面上から出土するものは少ない。したがって遺物の多くは住居廃絶後の埋没段階に廃棄されたものであることが窺える。また他の住居跡から出土した土器片と接合したものも見受けられた。133・134・162は18号住居跡、142は17号住居跡、143は20号住居跡から出土した土器片と接合している。

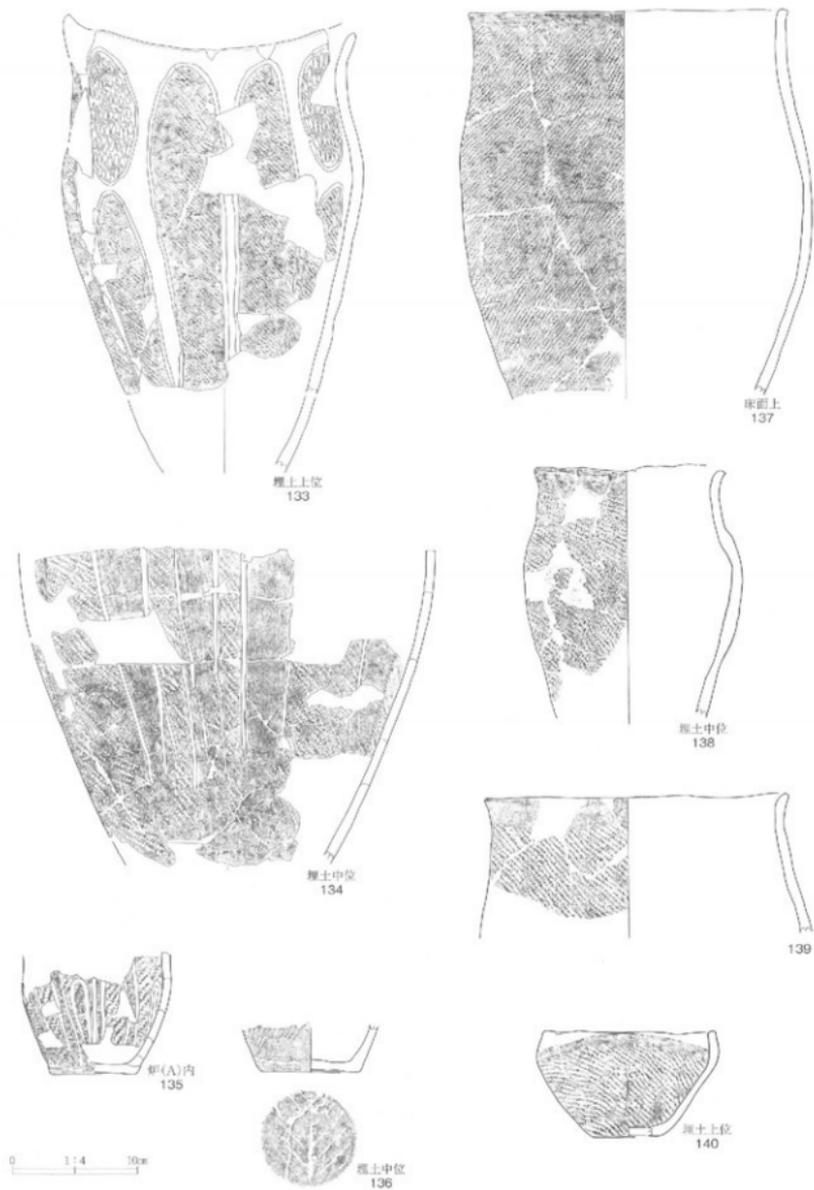
133はⅢ群3類に相当する深鉢で、「 \square 」字形と円形の区画文が描かれている。口縁部の円形の区画文内は、縄文を施文した後、その上から棒状工具による刺突文が充填されている。135は深鉢の胴部片である。単節R Lを地文とし、縦位の沈線により「 \square 」字形の区画を施す。ただし区画外の地文は磨消されず残存する。137～139はⅢ群6類に相当する深鉢で、いずれも口唇部下は無文化する。140はⅢ群6類の鉢で、やはり口唇部下は無文化し、胴部には、単節R Lが施文される。141は口縁部に4単位の把手が付く鉢である。胴中央部が大きく膨らみ、口縁部で屈曲してから緩やかに立ち上がる器形である。内外面の色調は黒色で、丹念に磨かれている。またわずかだが、朱が塗られていた痕跡が器面のいたるところで認められた。おそらく、外面全面に朱が塗られていたと思われる。頸部に付く把手はその上下で鐮状の隆帯と連結している。胴部は単節L Rを地文とし、沈線による弧状の区画文が二個一対で縦位に施される。沈線の外側には微隆帯が沿い、文様を浮き彫り状にみせている。図示できた部分以外はほとんど残存していないため、文様の単位については不明である。148は小形だが、141に類似する文様をもつ鉢である。142は口縁部がすぼまる鉢である。「 \square 」字形や円形の区画文が施文される。143は胴部に2単位の把手が付く鉢の胴部片である。単節R Lを地文とし、沈線による



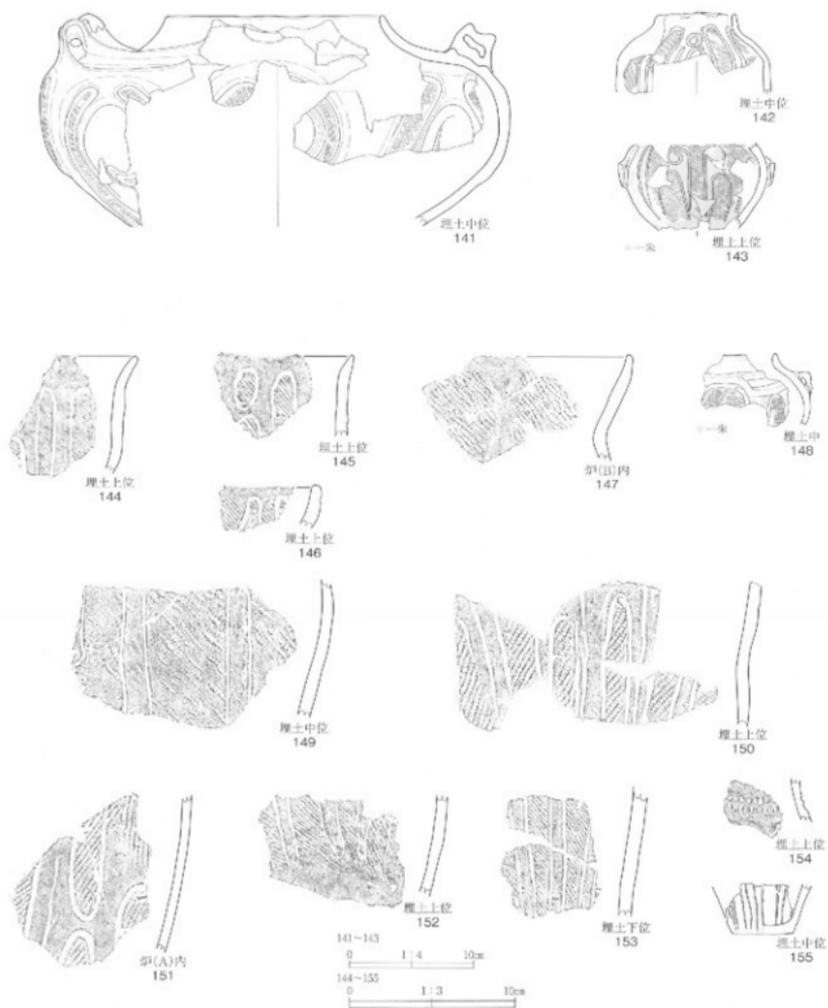
第52図 14号住居跡(1)



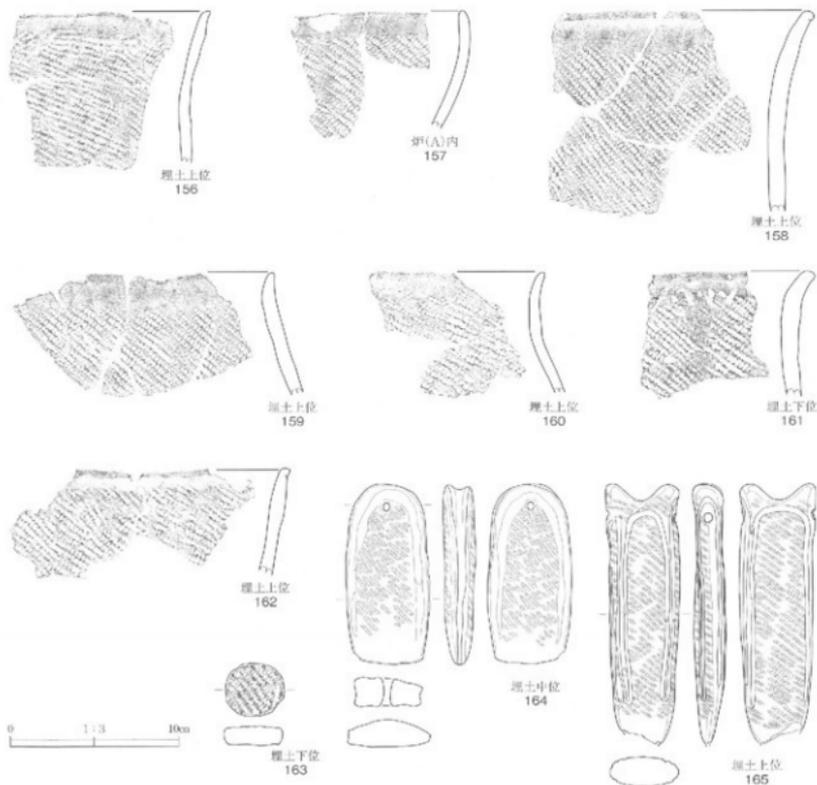
第53図 14号住居跡(2)



第54図 14号住居跡出土遺物(1)



第55図 14号住居跡出土遺物(2)

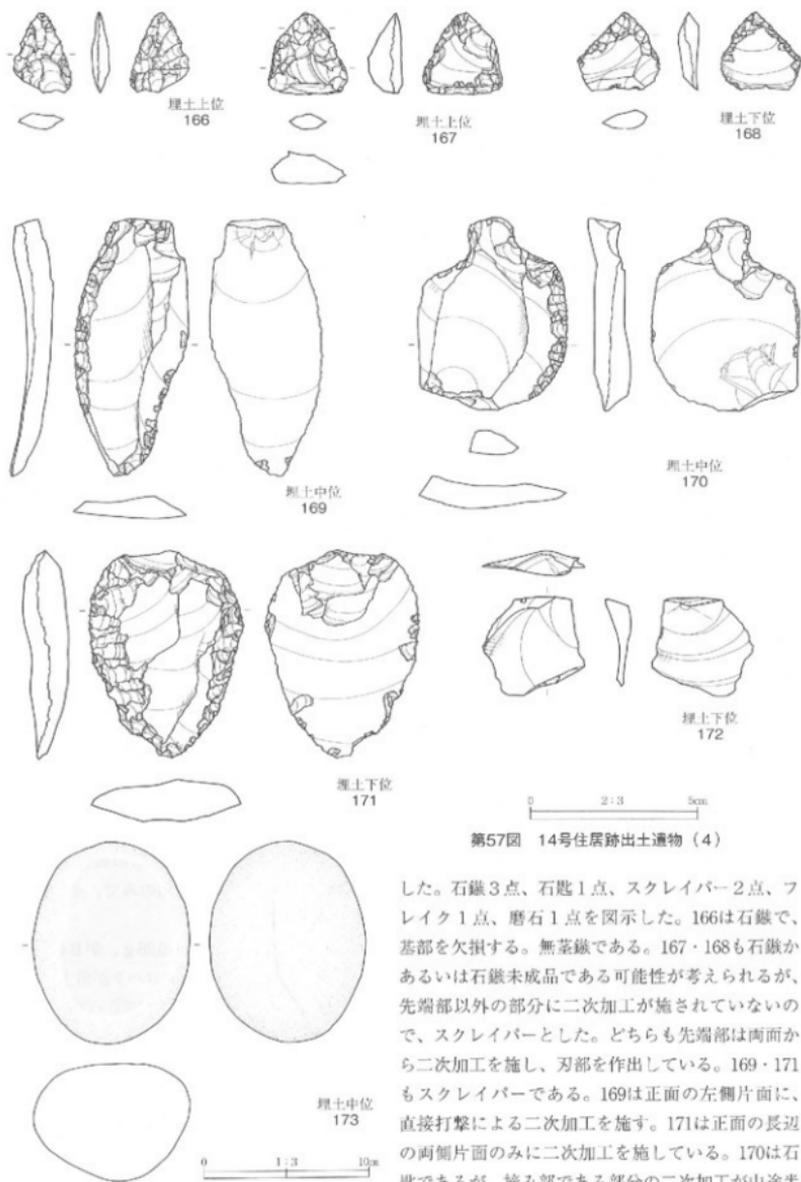


第56図 14号住居跡出土遺物(3)

渦巻き文と「 \cap 」字形の区画文が施文され、渦巻き文の一部に磨消が認められる。外面全面に朱が塗られている。147は単節RLを地文とし、楕円形のモチーフ状に地文を磨り消すことで、楕円形区画文にみせている。154は壺の頸部片で、刺突文が2段に巡っている。155はミニチュア土器の底部片で、線刻状の細い沈線が縦位に巡る。

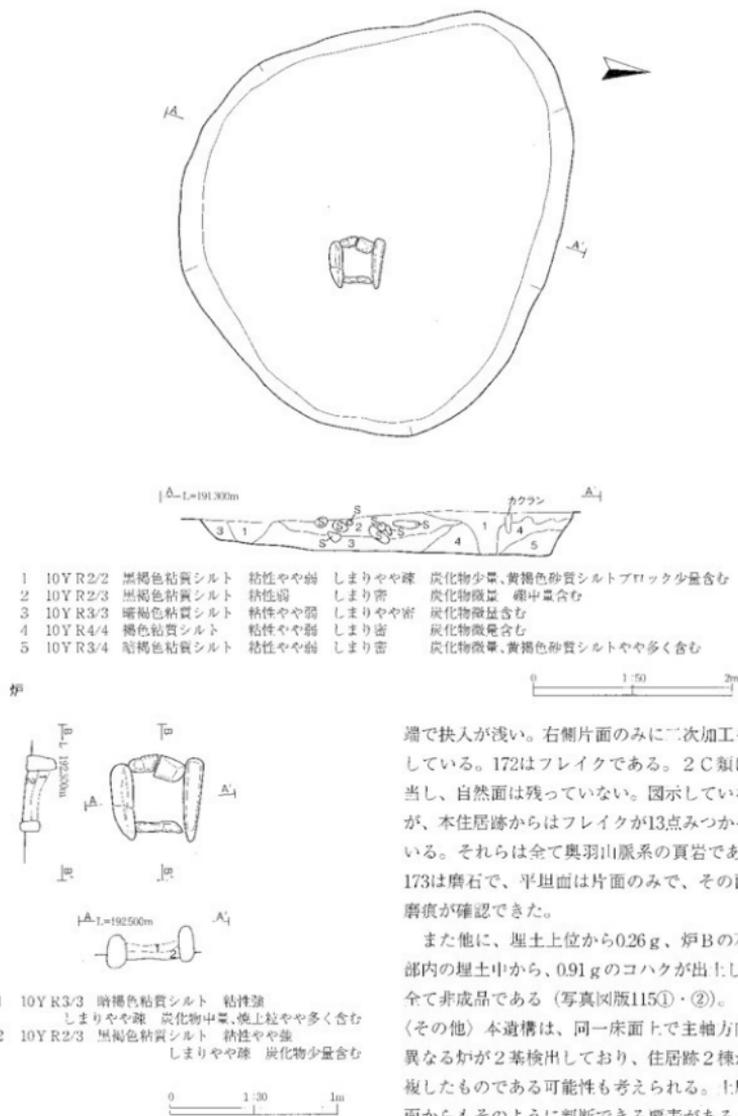
土製品は土製円板1点、斧状土製品2点が出土した。163は土製円板で、縄文が施文されている。164、165は斧状土製品である。164は遺構の埋土中位の別々の地点から出土した破片が接合し、完形であることが分かった。広い面の端部に穿孔が施される。単節LRを施文し、浅い沈線が広い面に沿うように施される。側面は溝状に窪んでいる。165は先端部を欠損するのみである。長軸方向の一端は耳状に突出し、もう一端の先はやや細く尖る。ほぼ全面に単節LRが施文され、その上から沈線文が施される。穿孔は側面に施される。

石器は石鏃1点、石匙1点、スクレイパー4点、磨石1点、Rフレイク2点、フレイク13点が出土



第57図 14号住居跡出土遺物(4)

した。石鏃3点、石匙1点、スクレイパー2点、フレイク1点、磨石1点を図示した。166は石鏃で、基部を欠損する。無茎鏃である。167・168も石鏃かあるいは石鏃未成品である可能性が考えられるが、先端部以外の部分に二次加工が施されていないので、スクレイパーとした。どちらも先端部は両面から二次加工を施し、刃部を作出している。169・171もスクレイパーである。169は正面の左側片面に、直接打撃による二次加工を施す。171は正面の長辺の両側片面のみに二次加工を施している。170は石匙であるが、握み部である部分の二次加工が中途半



第58図 15号住居跡

端で挟入が浅い。右側片面のみに二次加工を施している。172はフレイクである。2C類に相当し、自然面は残っていない。図示していないが、本住居跡からはフレイクが13点みつかっている。それらは全て奥羽山脈系の頁岩である。173は磨石で、平坦面は片面のみで、その面に磨痕が確認できた。

また他に、埋土上位から0.26g、炉Bの石圍部内の埋土中から、0.91gのコハクが出土した。全て非成品である（写真図版115①・②）。

〈その他〉本遺構は、同一床面上で主軸方向が異なる炉が2基検出しており、住居跡2棟が重複したものである可能性も考えられる。土層断面からもそのように判断できる要素がある。ただし本遺跡では複式炉は常に住居の壁際に設置されるので、炉Bの位置は単独の住居跡のもの



第59図 15号住居跡出土遺物

のとしては考えられない場所である。また、本住居跡周辺を何度か確認し、トレンチも入れてみたが他の住居跡は重複していない。そして今回の調査で見つかった炉の中で、本遺構の炉Bに類似するものは見受けられない。こういった点を踏まえていくと、炉Bは本遺構の「副炉」に当たる可能性も考えられる。そこで本文中においては炉Bを所謂「副炉」と考え、遺構図を作成している。

〈時期〉出土遺物から縄文時代中期後葉（大木9式新段階）に比定される。

15号住居跡（第58・59図、写真図版19・20・76）

〈位置〉調査区中央、3 B 6 j グリッドに位置する。1 m北東側に14号住居跡、2 m東側に18号住居跡が隣接する。

〈検出状況〉Ⅲ層上面で暗褐色のプランを検出した。ただしプランが不明瞭なので、任意にトレンチを入れ土層を確認した。トレンチは一部Ⅵ層まで下げたが、それより上の黒褐色粘質シルト層（Ⅳ層）面から石囲炉を検出し、Ⅳ層面を床面とする竪穴住居跡と判断した。

〈重複関係〉なし。

〈形態・規模〉北西側がやや突出する不整な楕円形を呈し、規模は4.4×3.8 m、深さは検出面から最深44cmを測る。

〈埋土〉5層に分けられる。また、1層土は上層から下層へと入り込んでいるが、他の埋土と類似しており、また床面下には認められないので、攪乱土ではなく、遺構埋土として扱った。

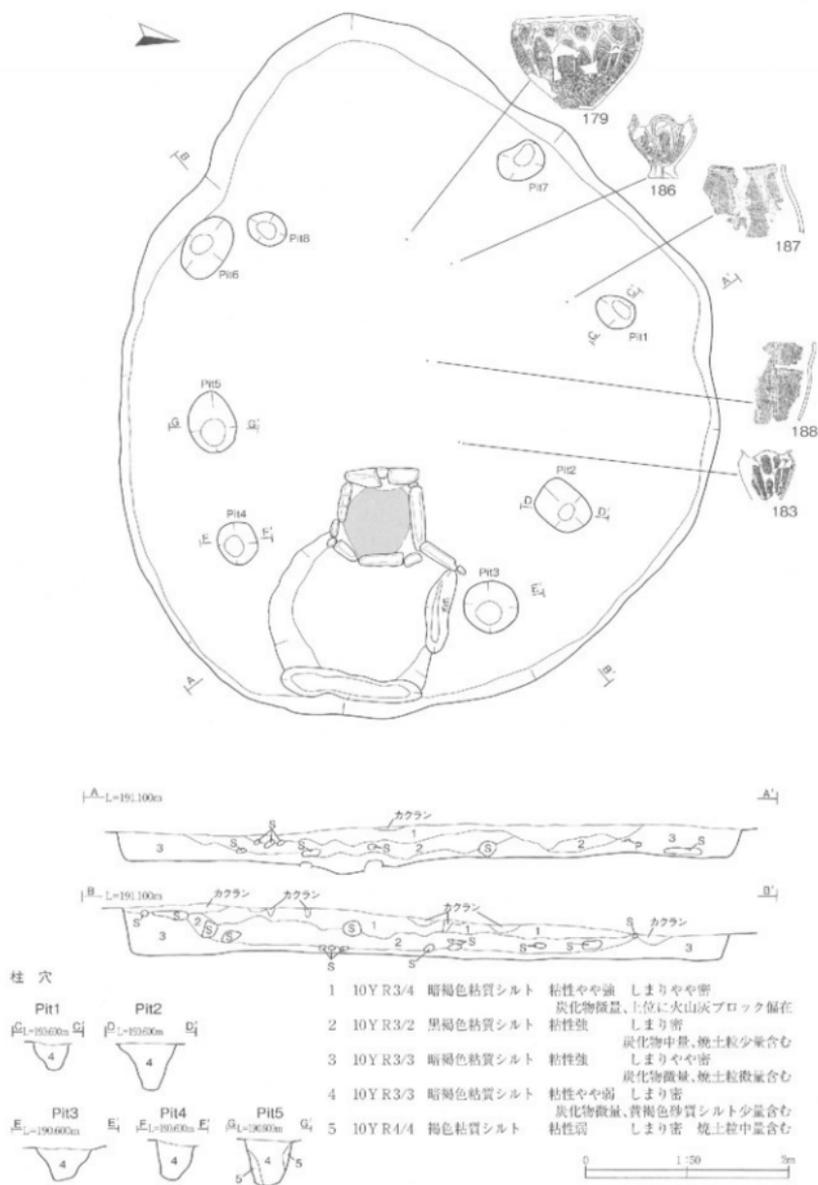
〈床面・壁〉炉が検出したⅣ層面を床面とする。ほぼ平坦であるが、南から北にむけてやや傾斜する。硬化面は認められない。壁は緩やかに外へと広がりながら立ち上がる。

〈柱穴・壁溝〉なし。

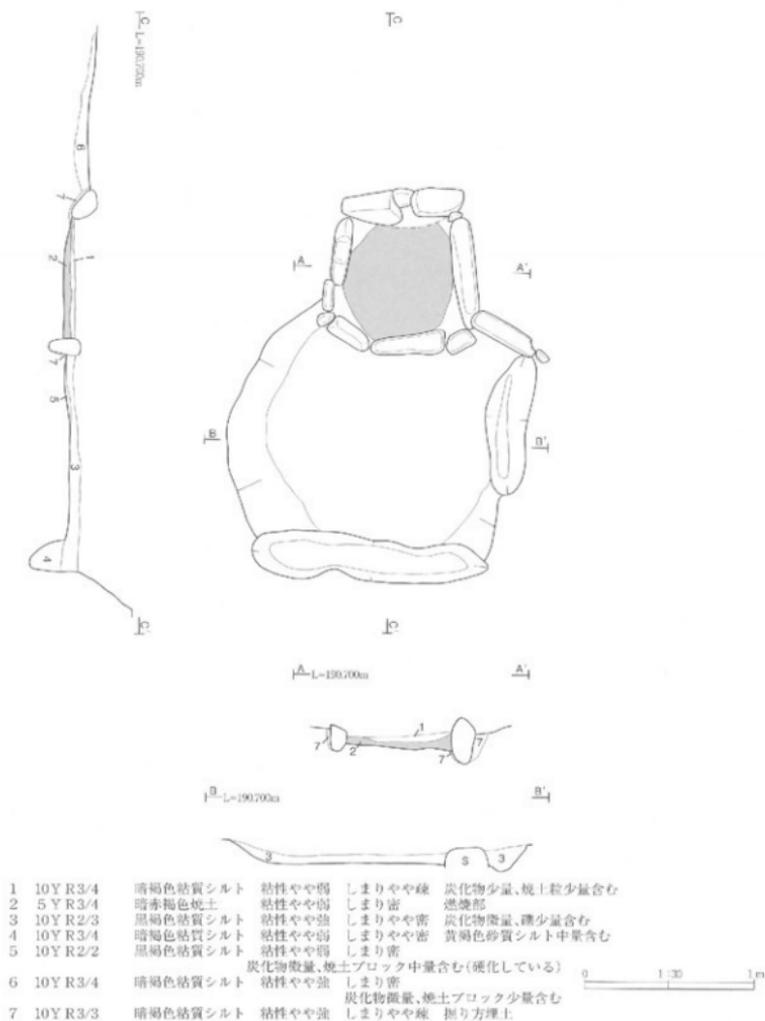
〈炉〉床面のほぼ中央に位置する。石囲炉である。方形を呈し、規模は66×48cm、深さは床面から最深4 cmを測る。炉石は南北側は棒状に長い自然礫を、東西側は比較的小さい自然礫2個を並べて設置する。炉石はほとんど床面に浅く差し込むのみである。炉内には燃焼した痕跡は認められないが、炉の埋土1層中には焼土粒が混入していた。

〈出土遺物〉縄文土器1957.6 gが出土した。出土状況を見ると埋土上位からの出土量が特に多い。一方、床面上から出土した土器はない。出土した土器は住居廃絶後の埋没段階に廃棄されたものと捉えられる。

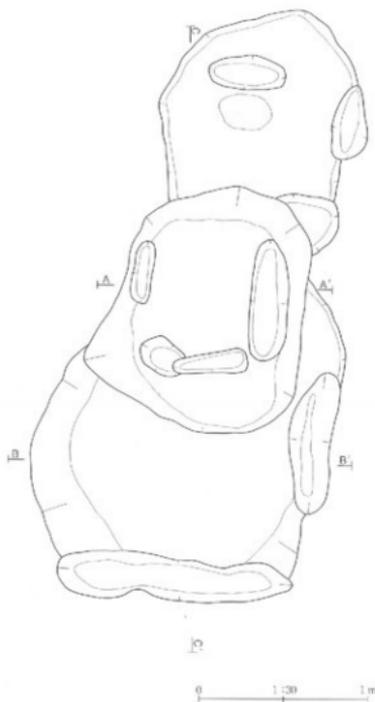
174は深鉢の大形破片で、Ⅲ群3類に相当する。16号住居跡の埋土中位から出土した土器片が接合



第60図 16号住居跡(1)



第61図 16号住居跡(2)



第62図 16号住居跡(3)

〈柱穴・壁溝〉柱穴8個を確認した。炉の主軸線に対し、やや歪むがPit 2とPit 4、Pit 1とPit 5、Pit 7とPit 8が左右対称である。したがってこれらが主柱となる6本柱と思われる。柱穴は径40～60cmで、深さは床面から30～50cmを測る。柱痕跡は認められない。また壁溝は認められなかった。〈炉〉住居の東壁付近に位置する。石囲部+前庭部で構成される複式炉である。石囲部は100×90cmの方形を呈する。石囲部内は非常に焼けており、前庭部側から見て奥側の炉石は被熱により砕けて一部消失していた。炉石は扁平な自然礫を利用し、広い面を縦にして、掘り方よりもさらに深く差し込むようにして設置している。前庭部は138×180cmを測り、不整な楕円形を呈する。浅い掘り込みで、床面から4cm程度である。北側には礫が設置されているが、南側には礫は並ばず、また抜き取り痕跡も認められないので、元々設置されなかったものと思われる。住居壁との間には溝状の掘り込みがある。また石囲部よりも奥側には床面よりも8cmほど掘り込んだ形跡が認められた。規模は115×110cmで、石囲部の掘り方とはほぼ同規模である。また底面には、地面が焼成を受け赤色化している部分が認められた。この掘り込み部分は、石囲部の炉石の掘り方埋土に切られており、複式炉構築時にはすでに埋まっていたものと思われる。これらの点から、この掘り込みは、元々石囲部がこの位置にあり、その掘り方であったと思われる。すなわち炉は構築し直したものと考えられる。

した。沈線により「 \square 」字状や楕円形の区画文が施文される。区画外は磨消手法により無文化するが、胴部下半では一部地文が残る。175はⅢ群F6類に相当する深鉢の口縁部片である。単節LRが施文される。

〈時期〉出土遺物から縄文時代中期後葉(大木9式新段階)に比定される。

16号住居跡(第60～66図、写真図版20・21・77～79・112)

〈位置〉調査区中央、3B4mグリッドに位置する。

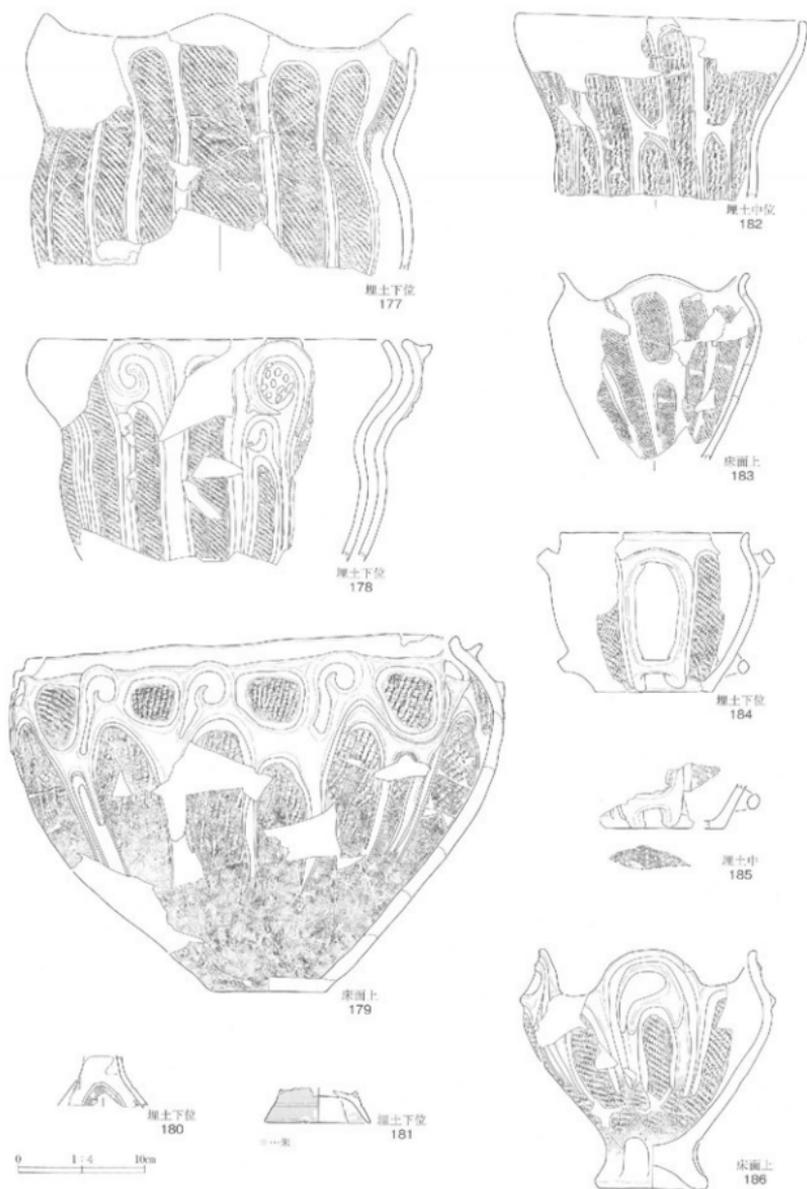
〈検出状況〉Ⅲ層上面で暗褐色のプランを検出した。不明瞭なプランであるが、検出面上に炭化物や土器片が分布していた。掘り下げたところ、灰を検出し、堅穴住居跡と判断した。

〈重複関係〉なし。

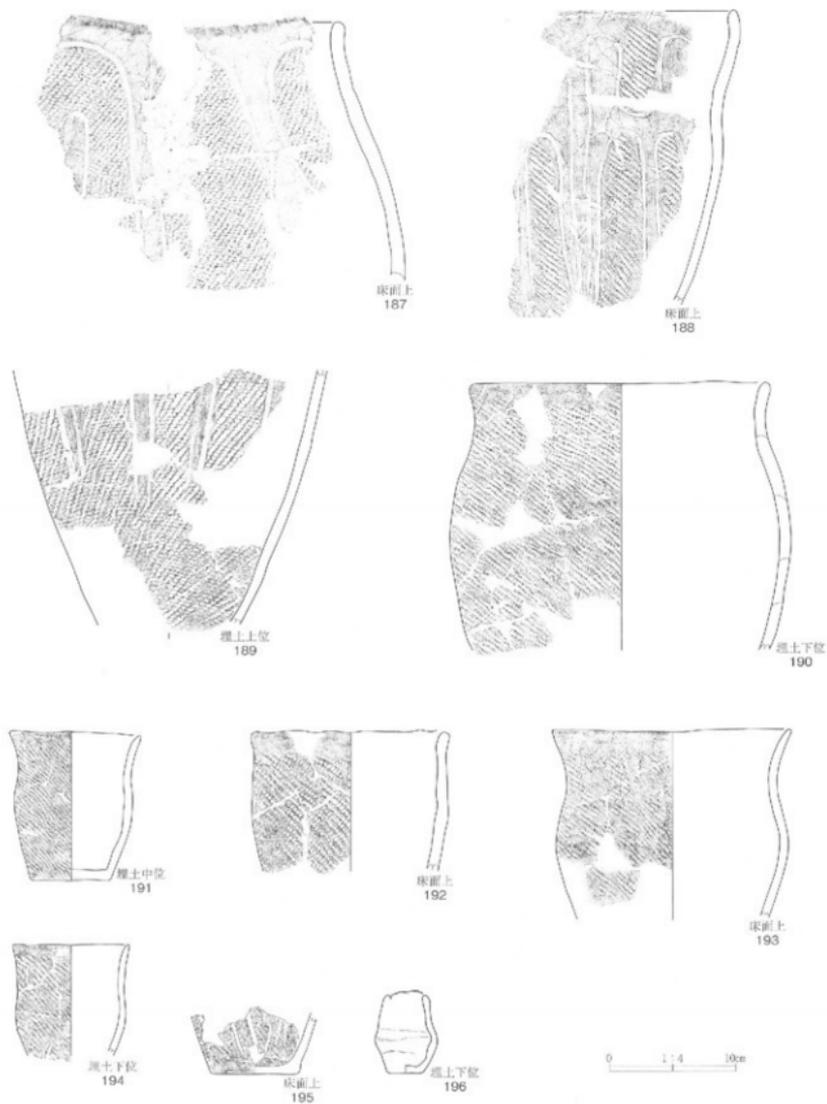
〈形態・規模〉不整な円形を基調とし、西側がやや突出した形状を呈する。規模は7.1×6.0m、深さは検出面から最深48cmを測る。

〈埋土〉黒褐色～暗褐色粘質シルトを主体とし、3層に分けられる。

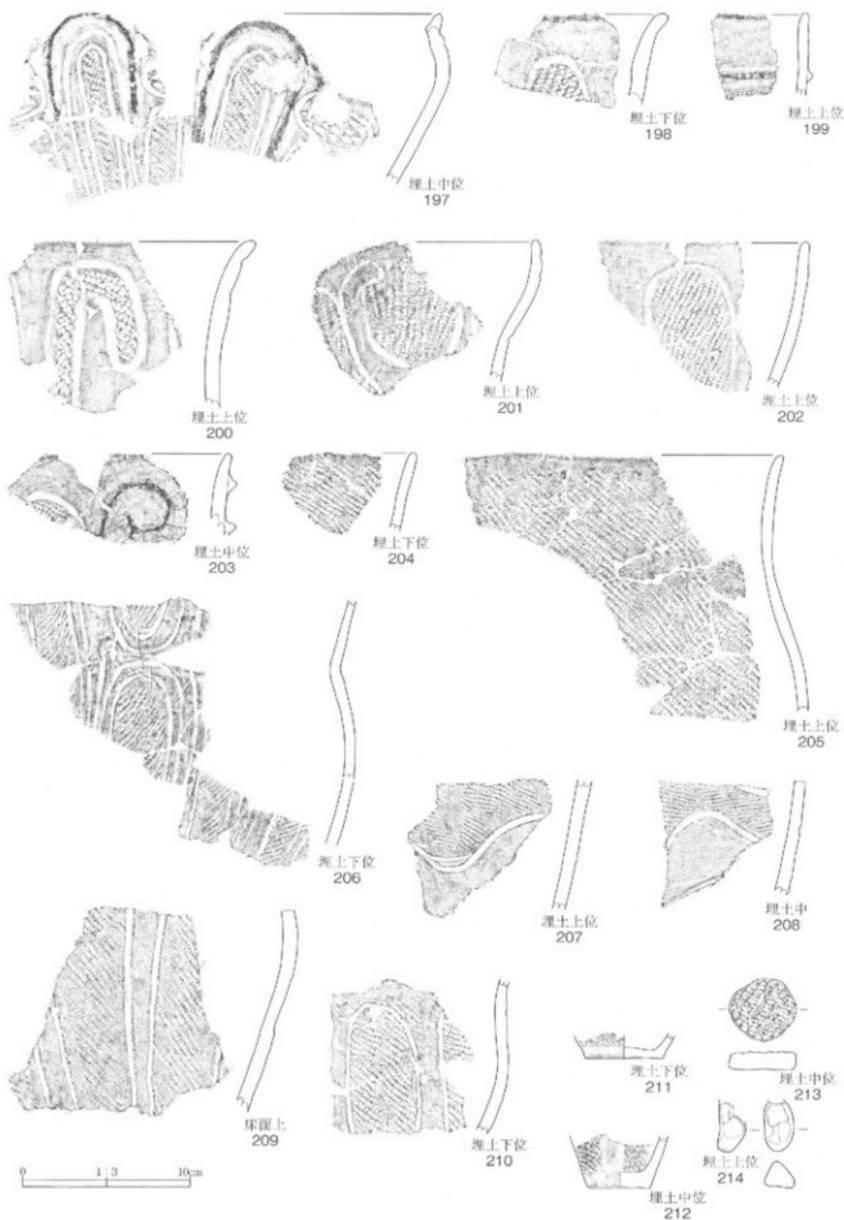
〈床面・壁〉灰を検出したⅥ層面を床面とする。ほぼ平坦であるが、南側の一部でⅦ層が露出している。また硬化面は認められない。壁はほぼ直立気味に立ち上がる。



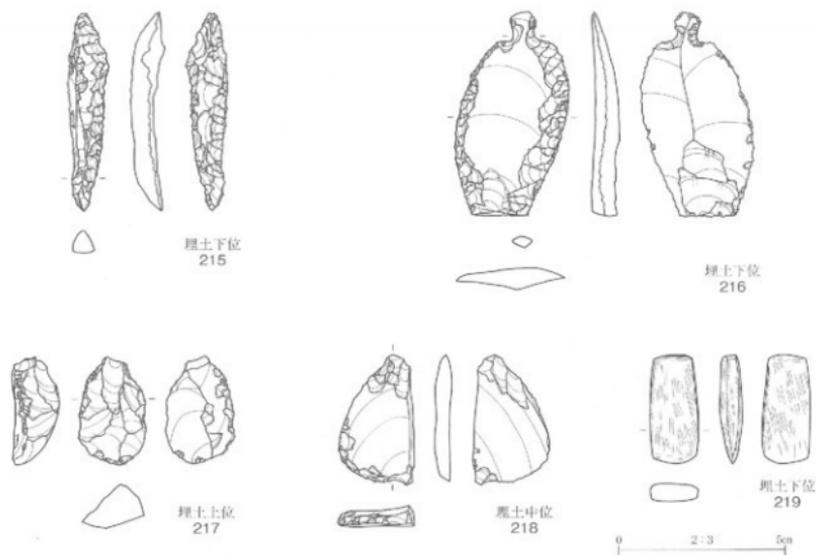
第63図 16号住居跡出土遺物(1)



第64図 16号住居跡出土遺物(2)



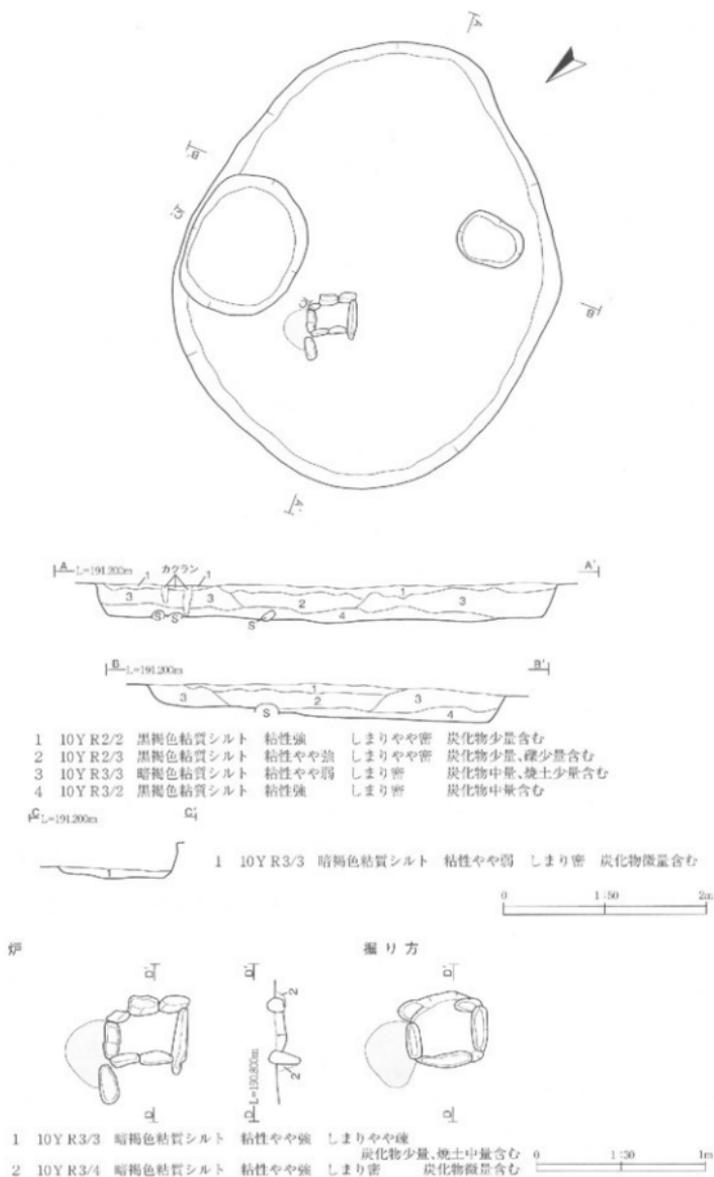
第65図 16号住居跡出土遺物(3)



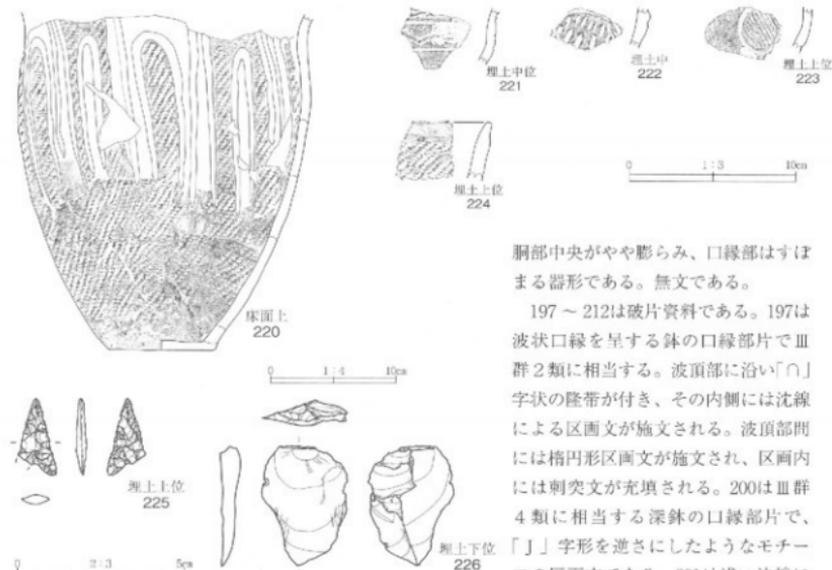
第66図 16号住居跡出土遺物(4)

〈出土遺物〉本住居跡から縄文土器40100.9g、石器30点が出土した。出土状況を見ると、埋土から出土するものは、各層位でほぼ同じぐらいの出土量が認められる。一方、床面上からも多くの遺物が見つかっている(第60図)。ただし、どの土器も完形ではないので、住居跡機能時に伴うものではなく、住居廃絶時、廃棄されたものと思われる。また他の遺構から出土した土器片と接合したのも多く、177は32号土坑、179は14号住居跡と32号土坑、181・185・194は18号住居跡、182は12号住居跡から出土した土器片と接合した。

177はⅢ群3類に相当する深鉢で、胴部下半から底部を欠損する。波状口縁を呈し、胴部上半がくびれる。縦位に楕円形区画文が並ぶ。178はⅢ群2類に相当する深鉢で、胴部下半から下が欠損する。口縁部に隆帯による渦巻き文が施文され、渦巻き文の内側には刺突文が充填される。179は鉢でⅢ群2類に相当する大形の鉢である。底部から直線的に外へとひろがり胴部上半で内湾し、口縁部はやや直立気味に立ち上がる。口縁部と胴部とは横位の隆帯により区画され、口縁部は無文である。胴部上半には隆帯による渦巻き文と隅丸方形の区画文が交互に並んでいる。180は小形の壺の頸部片で頸部から胴部にかけて沈線による区画文が施文される。181は鉢の台部片である。器面全体に朱が塗られており、一部内面にも及んでいる。182・183はⅢ群3類に含まれる深鉢で楕円形や「 \square 」字形の区画文が施される。184は図示できたものが全てである。樽形の深鉢で、胴部上半と底部に縦位の把手が付き、隆帯で連結している。186は台付の鉢で4単位の波状口縁を呈する。波頂部下には曲線的なモチーフの隆帯が付き、胴部へと垂下する。胴部は沈線による「 \square 」字形区画文が隆帯に沿うように施される。台部は楕円形状に窪ませている。187はⅢ群4類に相当し、縦に長い区画文どうしが連結する。188はⅢ群3類に相当する深鉢の大形破片で、沈線の施文がやや稚拙である。196はミニチュア土器で



第67図 17号住居跡



第68図 17号住居跡出土遺物

胴部中央がやや膨らみ、口縁部はすぼまる器形である。無文である。

197～212は破片資料である。197は波状口縁を呈する鉢の口縁部片でⅢ群2類に相当する。波頂部に沿い「∩」字状の隆帯が付き、その内側には沈線による区画文が施文される。波頂部内には楕円形区画文が施文され、区画内には刺突文が充填される。200はⅢ群4類に相当する深鉢の口縁部片で、「J」字形を逆さにしたようなモチーフの区画文である。201は浅い沈線による曲線的な文様と円形の区画文が施文されている。203は深鉢の口縁部

片で、区画文と隆帯による渦巻き文が施される。207、208は深鉢の胴部片で曲線的なモチーフの区画文が施され、区画内には充填手法により縄文が施文される。いずれもⅣ群に含まれる。

土製品2点は土製円板と不明土製品である。

213は土製円板で、縄文が施文される。214は不明土製品で、整形の痕跡が認められる他は無文である。土偶の腕の部分である可能性も考えられるが、定かではない。

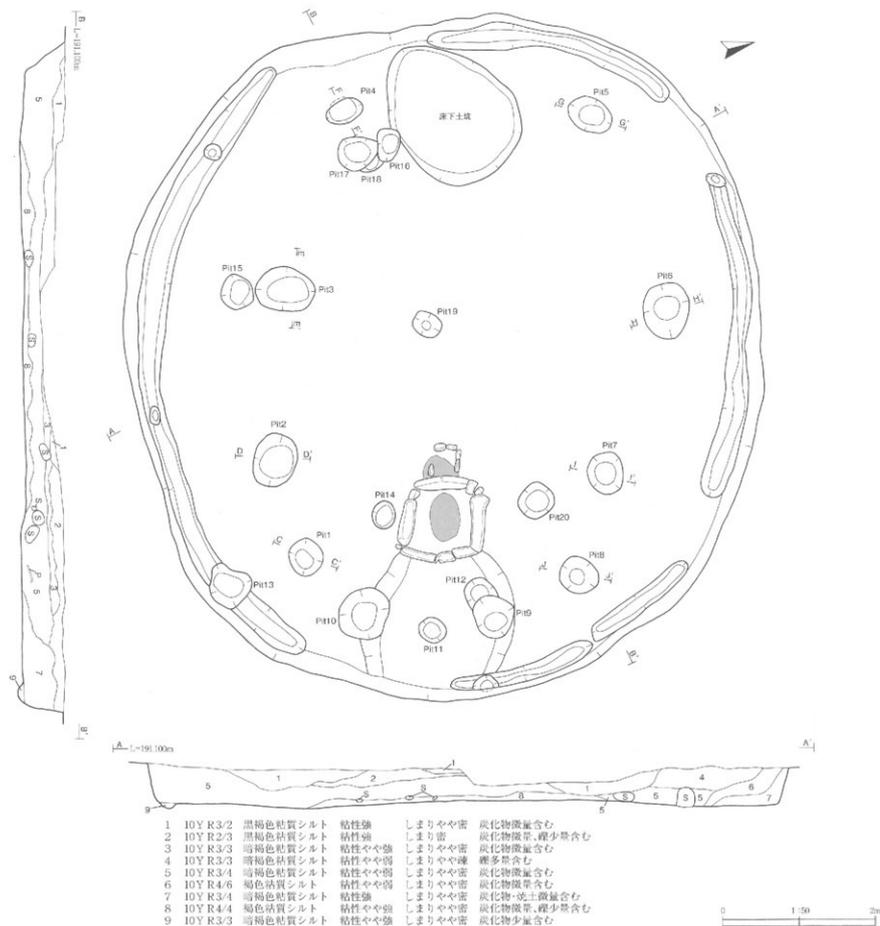
石器は石匙1点、石錐1点、磨石1点、磨製石斧1点、Rフレイク1点、フレイク20点が出土した。東端壁際付近でフレイクが集中して見つまっている。なおフレイクは20点出土しており、それらの石材は1点が北上山地系の頁岩であったのを除き、残りは奥羽山脈系の頁岩である。215は石錐である。棒状の形態で、両側に二次加工を施している。216は石匙で片面の両側に直接打撃による二次加工を施している。217・218はRフレイクである。いずれも片側縁部に二次加工を施すが、不規則で刃部が定かではないのでRフレイクとした。219は小形の磨製石斧である。全面に磨って整形した痕が認められる。

〈時期〉出土遺物から縄文時代中期後葉（大木9式新段階）に比定される。

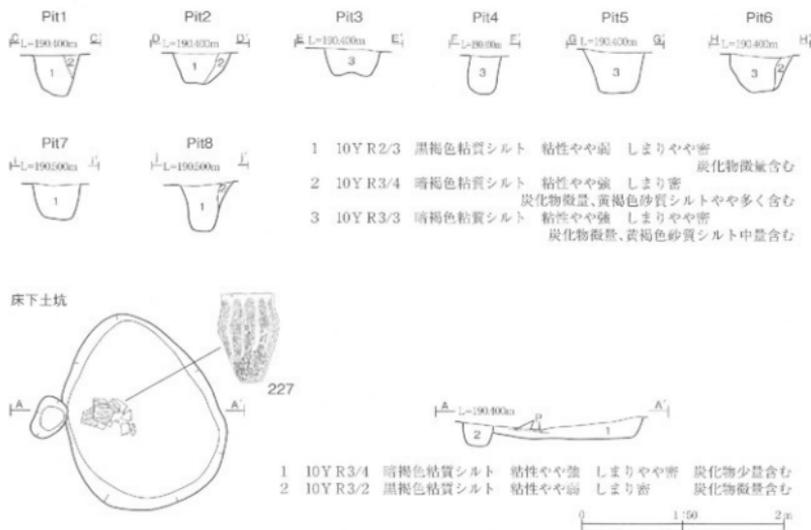
17号住居跡（第67・68図、写真図版21・22・80・112）

〈位置〉調査区中央、3B61グリッドに位置する。

〈検出状況〉Ⅲ層上面で暗褐色のプランを検出した。プランは不明瞭であるが、検出面上に多量の炭化合物が分布していた。掘り下げたところ、Ⅳ層面で灰を検出し、竪穴住居跡と判断した。



第69図 18号住居跡 (1)



第70図 18号住居跡(2)

〈重複関係〉なし。

〈形態・規模〉不整な楕円形を呈し、規模は4.6×3.9 m、深さは検出面から最深36cmを測る。

〈埋土〉4層に分けられる。黒褐色粘質シルトと暗褐色粘質シルトとが交互に堆積している。また埋土中には、炭化物や焼土粒を含む。

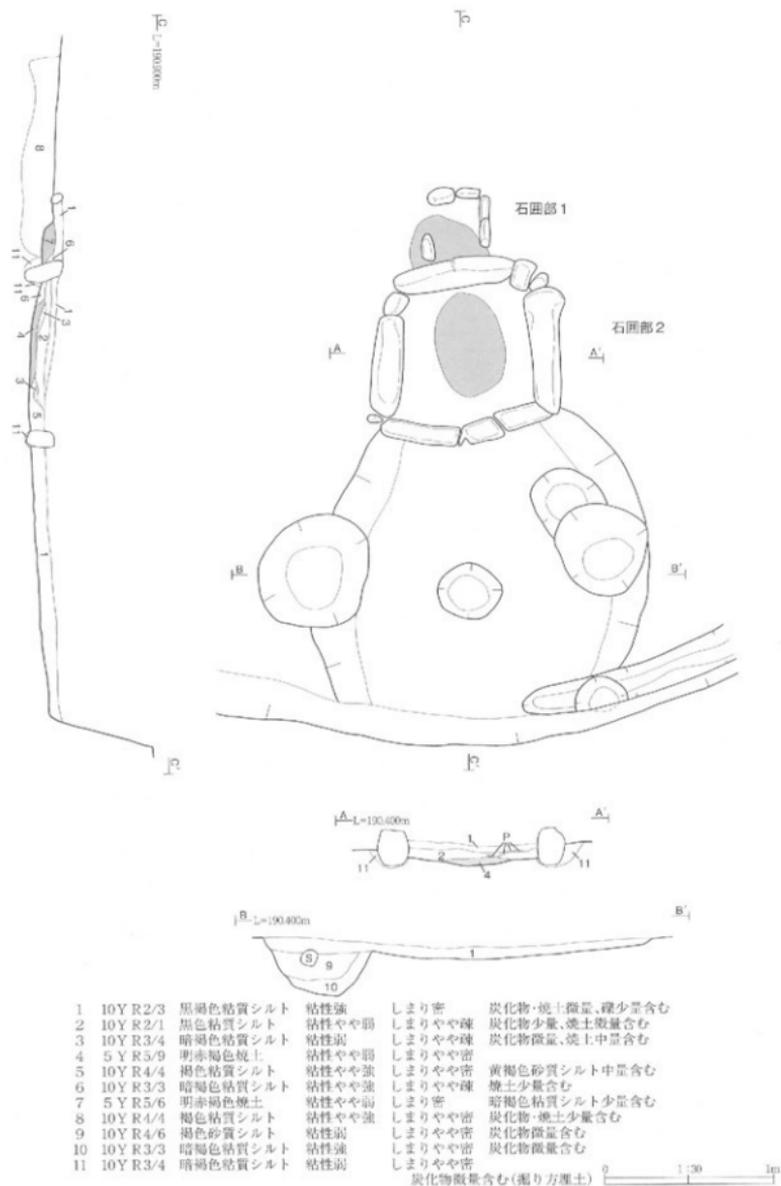
〈床面・壁〉炉を検出したIV層面を床面とする。ほぼ平坦であるが、硬化面は認められない。壁は緩やかに外へと広がりながら立ち上がる。

〈柱穴・凹溝〉柱穴1個を検出した。また東壁に隣接して1.4×1.1 mの楕円形を呈する土坑状の掘り込み1個を検出している。掘り込みは浅く、埋土は暗褐色粘質シルトを主体とした単層で、埋土中には炭化物を含む。

〈炉〉床面の中央やや北西寄りに位置する。石囲炉である。方形を呈し、規模は50×40cmである。北側の角から炉石1個が突出している。その外側20cmの範囲で硬化面が確認できた。炉石は大きさ、形状に規則性が無い。炉の掘り方自体は、炉の規模とほぼ同じであるが、炉石は深く差し込まれて設置され、隙間を暗褐色粘質シルトで埋めている。炉内には燃焼の痕跡は認められない。ただし、炉の埋土中には焼土粒が混入していた。炉の外側の北東側が広く硬化している。

〈出土遺物〉縄文土器2938.7 g、石器2点が出土した。重量比較では、床面上からの出土量が最も多い。ただし、これは220が含まれるためで、220以外は小片である。

220は深鉢で口縁部から胴部上半を欠損している。単節R Lを地文とし、一部縦に伸びる区画文どうしが横に連結したものが交互に並ぶ。2条の沈線により鋸歯文が施文されるIV群に含まれる土器で、流れ込みによって混入したものと思われる。222は沈線による区画文が描かれ、区画内に棒状工具による刺突が充填される。



第71図 18号住居跡(3)

石器は石鏃1点、フレイク1点が出土した。225は石鏃で、無茎鏃である。基部の片方を欠損する。226はフレイクで3c類に相当する。

〈時期〉出土遺物から縄文時代中期後葉（大木9式新段階）に比定される。

18号住居跡（第69～78図、写真図版22・23・80～83・112）

〈位置〉調査区中央、3B6mグリッドに位置する。北東側には8号柱が位置する。北側には遺構しており、16号・18号・20号住居跡や、33号・34号土坑が位置する。

〈検出状況〉Ⅲ層上面で黒褐色のプランを検出した。不明瞭なプランであるが、検出面上に炭化物や土器片が分布する。掘り下げたところ、炉を検出し、竪穴住居跡と判断した。精査の最終段階で、本住居跡は東側に大きく拡張した住居跡であることが分かった。

〈重複関係〉なし。

〈形態・規模〉楕円形を呈し、規模は9.0×8.4m、深さは検出面から最深112cmを測る。

〈埋土〉8層に分けられる。埋土上位は黒褐色粘質シルトを、埋土下位は暗褐色粘質シルトを主体とする。

〈床面・壁〉炉を検出したⅥ層面を床面とする。ほぼ平坦である。また硬化面は認められない。

壁は直立気味に立ち上がる。

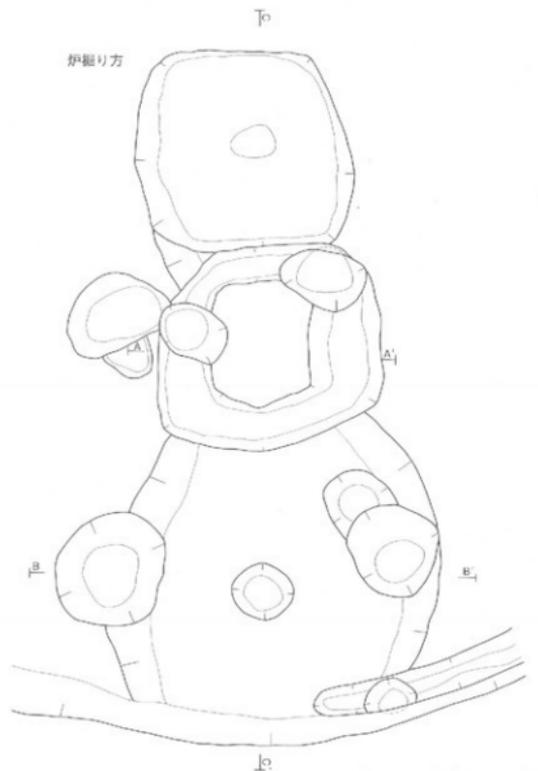
〈柱穴・壁溝〉柱穴19個を確認した。炉の主軸線に対し、Pit 1とPit 8、Pit 3とPit 6、Pit 4とPit 5が左右対称に位置する。したがってこれら6本が主柱と考えられ、また前庭部両脇の柱穴Pit 9と10も含めると、8本柱と思われる。他にPit 2と7、Pit 14と20があり、これらも主柱穴に含まれる可能性も考えられるが、Pit 1、8～10とは位置関係が似ており、また後述する通り、炉の掘り方から炉が一度大きく作りかえられていることから、炉の作りかえの前の柱穴であるものと判断した。そしてPit 2と7、14、20も炉の主軸線に対し、左右対称に位置するので、拡張前も8本柱であったと思われる。柱穴の規模は径50cm大で、深さは比較的深く、床面から30～50cmを測る。柱痕跡は認められない。また壁溝が認められ、ほぼ全周する。深さは床面から2～3cmで一部で小柱穴が認められる。(炉) 東壁際に位置する。石囲部+石囲部+前庭部で構成される複式炉である。石囲部は列状に並び、ここでは仮に先端側を石囲部1、前庭部側を石囲部2として説明する。

石囲部1は方形を呈し、50×42cm、深さは床面から6cmを測る。炉石は全周せず、南側の炉石が抜けている。石囲部内には焼土が堆積しているが、炉石の外側にも燃焼部が広がっている。

石囲部2は正方形を呈し一辺110cm、深さは床面から10cmを測り、石囲部1よりも大きい。炉石は大きく、炉石の周辺を深く掘り込んでから炉石を埋め込み、また暗褐色粘質シルトを隙間に埋めて、補強している。石囲部内の中央には60×40cmの燃焼部が認められ、約4cm焼土が堆積している。前庭部は浅い掘り込みで、床面から8cm程度で、規模は165×190cmを測る。前庭部底面はⅤ層が露出しているが、やや硬化している。前庭部の両脇と中央部から柱穴がみつまっている。

石囲部2の下には、一辺120cmの方形を呈する掘り方が認められ、掘り方の底面には20cm大で地面が焼成により赤色化しているのが認められた（第72図）。この点から複式炉は作り替えられており、すなわち、複式炉は最初もつと西側に位置していたと思われる。したがって、元々の複式炉の炉石を抜き、この部分を埋め石囲部2を構築したものと思われる。そのように考えると、柱穴Pit 2、7、14、20も元々の石囲部掘り方との位置関係が合ってくる。したがって、本住居跡は炉の作り替えに伴い、柱（穴）の移動すなわち住居の拡張を行ったと判断した（第73図）。

〈その他の付属施設〉西壁際の床面から土坑状の掘り込み1基検出した。楕円形を呈し、規模は200×



第72図 18号住居跡(4)

統して巡る。228は深鉢の大形破片で、227に近い器形である。沈線による「 \cap 」字形区画文や楕円形区画文が巡る。229は口縁部が5単位の波状口縁を呈する。230は鉢で口縁部が内湾しながら外へとひらく器形である。楕円形区画文と「 \cap 」字形区画文とが交互に巡る。231は胴部中央でくびれ、口縁部は直線に外へと拓く器形の深鉢で、228と同様な文様が施文される。232～235は深鉢の底部片で、口縁部のあり方が定かではないが、いずれもⅢ群2～4類に含まれる。232は沈線による区画の部分より下には縄文がほとんど施文されないのが特徴である。236は小形の深鉢で、胴部が膨らみ口縁部でくびれる器形である。口縁部は無文であり、胴部上半から「 \cap 」字形区画文が施文される。237はⅢ群6類に相当する小形の深鉢である。底部から口縁部に向け、緩やかに広がりながら立ち上がる器形である。238・239も小形深鉢の胴部下半～底部片で、Ⅲ群6類に相当する。

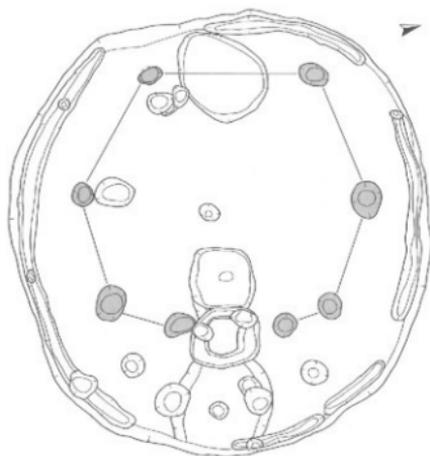
240～251は破片資料である。240～249はⅢ群3類に相当する土器群である。243は口縁部下が屈曲する器形で、横位に巡る微隆帯により、口縁部と胴部とが区画され、隆帯は枝分かれして胴部へと

152cmを測る。深さは床面から最深18cmである。埋土上位から縄文土器(227)が横倒しの状態で出土し、また埋土中からは磨石がみついている。

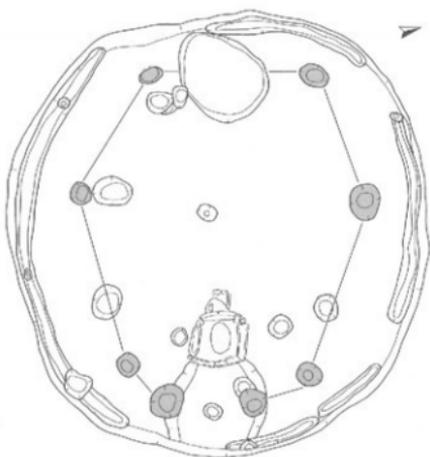
〈出土遺物〉本住居跡から縄文土器36901.8g、石器8点、土製品3点が出土した。遺物の出土状況を見ると、埋土中位からの出土量が大部分を占め、特に土器は230～231などの器形が復元できるものが出土している。一方、床面上からの出土量は少ないものの、炉内からは深鉢の大形破片(228)や軽石製品(269)が出土しており、また床下土坑内からは深鉢(227)や磨石(267)1点がみついている。特に床下土坑出土の遺物は遺物は本住居跡機能時に伴うものの可能性が高い。その他は住居廃絶時か住居廃絶後の埋没段階に廃棄された遺物と捉えられる。

227は床下土坑から出土した深鉢である。横倒しでつぶれた状態であったが、接合したところ、ほぼ完形であった。沈線による「 \cap 」字形区画文が縦に連

古

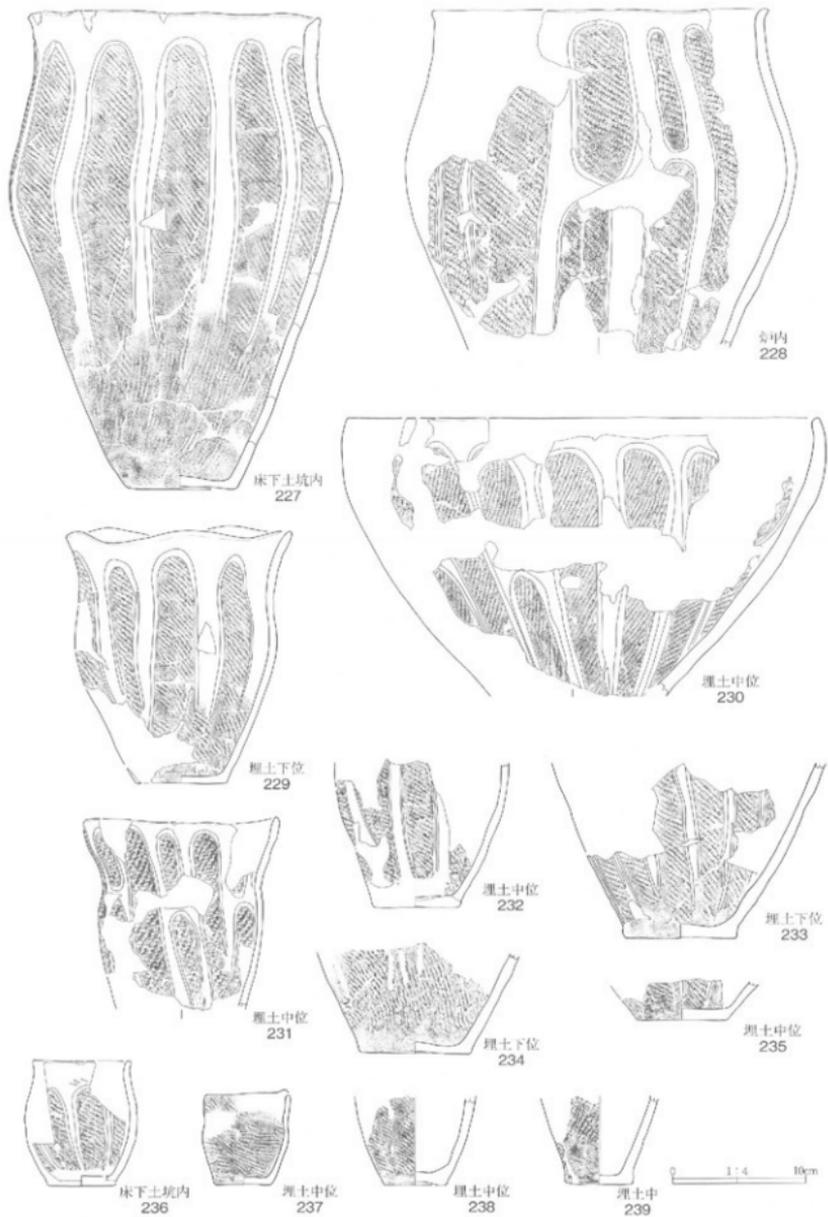


新

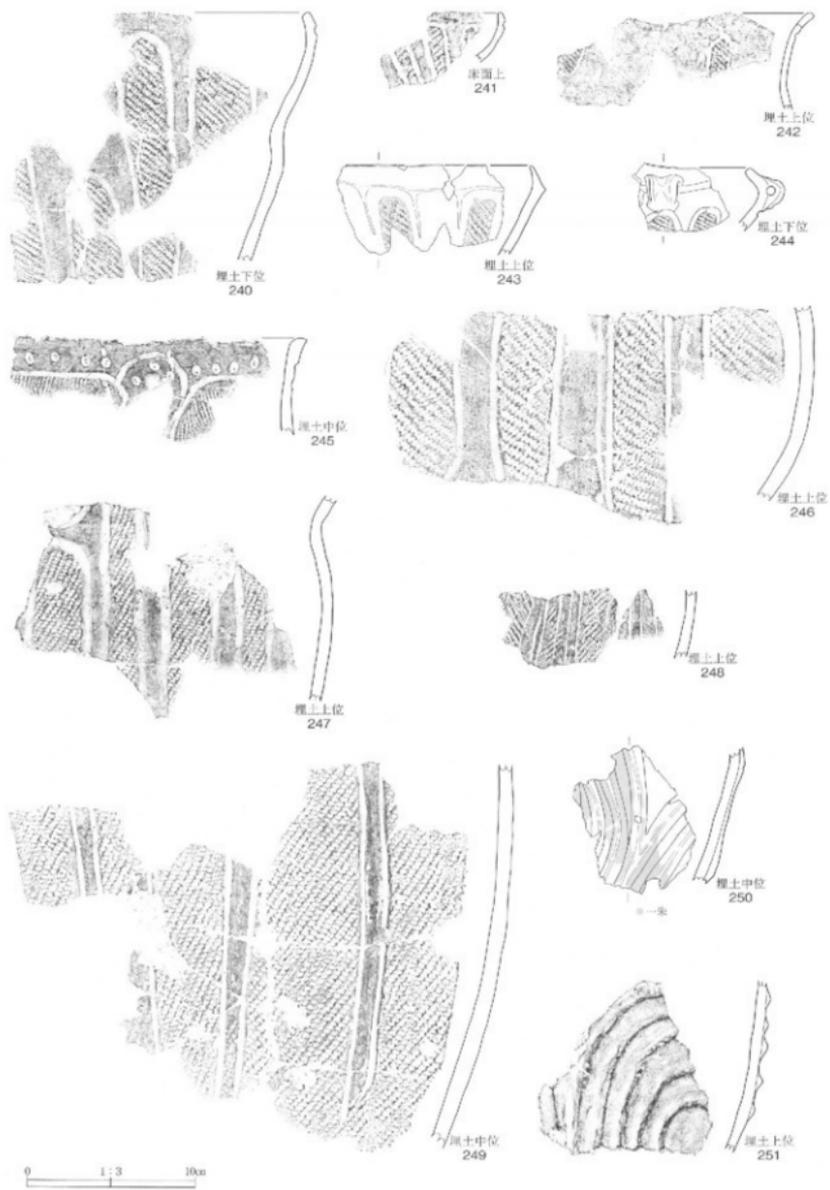


0 1.00 5m

第73図 18号住居跡拡張変遷図



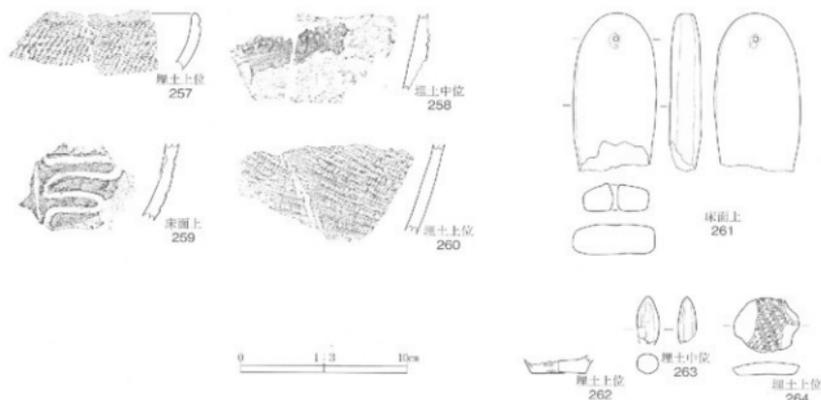
第74図 18号住居跡出土遺物 (1)



第75図 18号住居跡出土遺物(2)



第76図 18号住居跡出土遺物(3)



第77図 18号住居跡出土遺物(4)

垂下する。胴部には磨り消し技法のみで、楕円形区画文を形成している。244は口縁部下が屈曲する器形で横位の把手が付く。245は深鉢の口縁部片で、胴部には区画文が施文され、口縁部は竹管状の工具による刺突文が巡る。250・251は鉢の胴部片であるが、沈線による区画文は施文されず、隆帯による渦巻き文が何重にも巡り、外面には朱が塗られている。252・253はIV群に相当する。252は胴部下半がやや下ぶくれ状にふくらむ器形の深鉢である。口縁部から胴部上半に沈線による曲線的なモチーフの区画文が施されている。253は深鉢の胴部下半から底部にかけての大形破片で、横位に巡る波状沈線により胴部下半と底部を区画している。胴部には沈線による「s」字状の区画文が横位で施文されている。254～256はIII群6類に相当する深鉢である。255は口縁部に補修孔が1箇所見受けられる。262はミニチュア土器の底部片である。縄文が施文される。

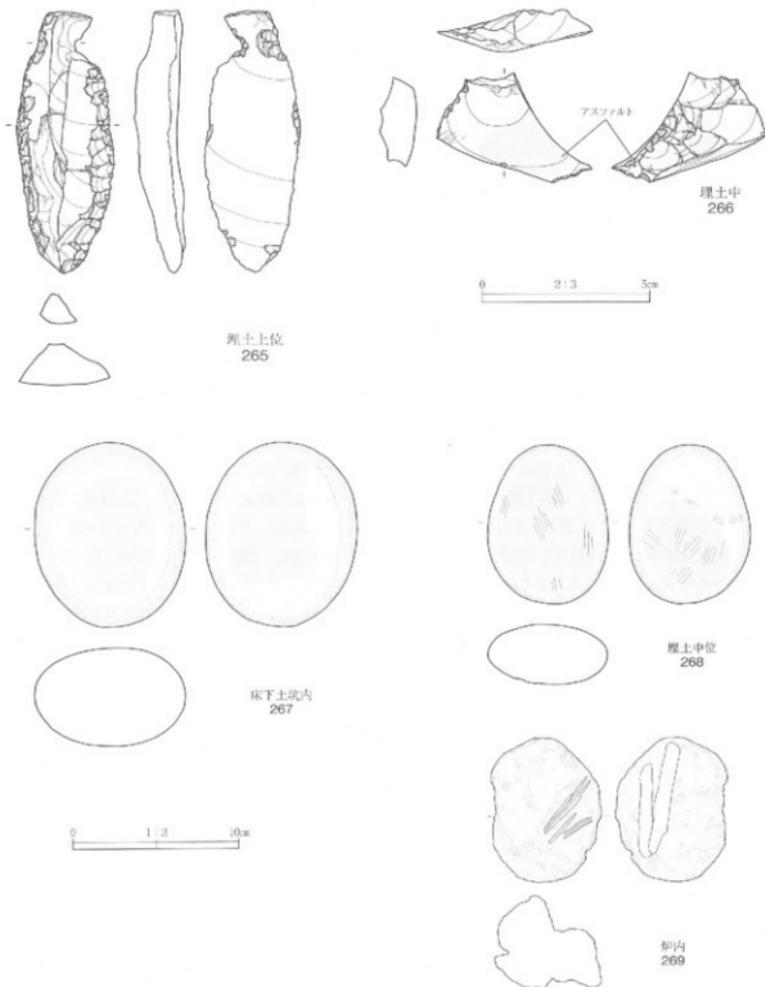
土製品は斧状土製品、土製円板、不明土製品の各1点である。261は床面上から出土した斧状土製品で、先端部を欠損している。器面は無文である。広い面の端部に棒状工具による穿孔が認められる。穿孔は非常に稚拙で、穿孔部は整形されていない。263は不明土製品で、一部欠損している。残存する先端は尖っている。264は土製円板である。粗雑な縄文が施文されるが、剥離が激しい。

石器は石匙1点、フレイク2点、磨石2点、軽石製品1点が出土した。石匙1点、フレイク1点、磨石2点、軽石製品1点を図示した。265は縦型の石匙である。正面の両側面に二次加工を施している。266はフレイクである。2c類に比定される。両面に黒色の付着物が認められ、アスファルトの可能性が高い。267・268は磨石である。267は床下土坑内から出土している。どちらも両面に磨痕が認められた。269は軽石製品で、表面に溝状の痕跡が認められる。

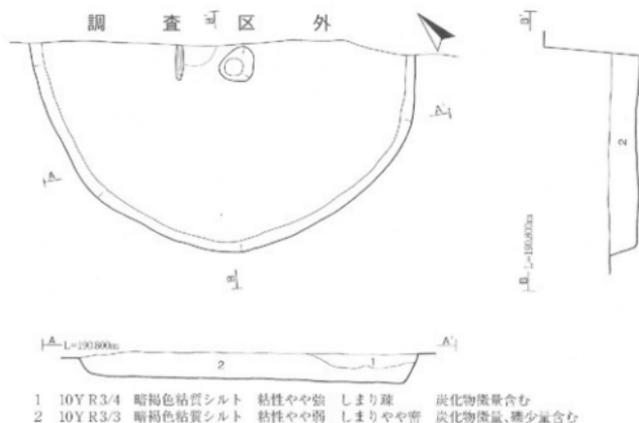
(時期) 床下土坑や炉内から出土した227や228から縄文時代中期後葉(大木9式新段階)に比定される。

19号住居跡(第79・80図、写真図版24・83)

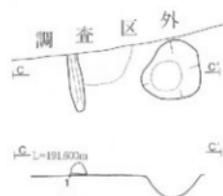
(位置) 調査区中央、3B5pグリッドに位置する。1m西側に34号土坑が、1m南側に20号住居跡が位置する。



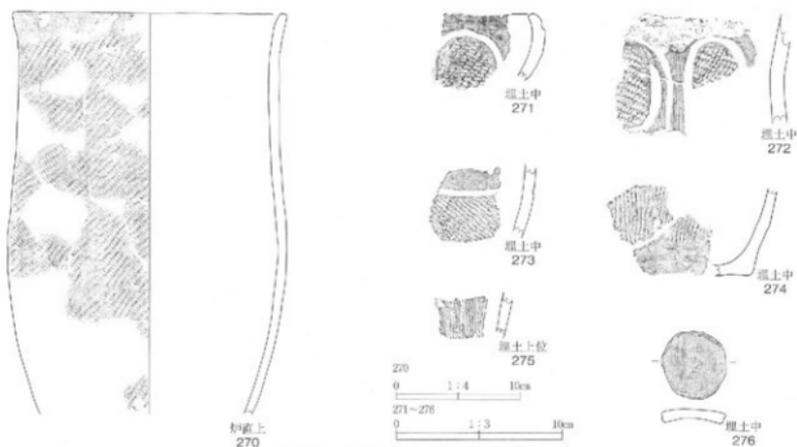
第78図 18号住居跡出土遺物(5)



炉



第79図 19号住居跡



第80図 19号住居跡出土遺物(1)

〈検出状況〉Ⅲ層上面で暗褐色のプランを検出した。プランは不明瞭であるが、検出面上に炭化物が分布している。掘り下げたところ、細長い鏝を検出し、その周辺に焼上の分布が認められたので炉と判断し、竪穴住居跡とした。

〈重複関係〉なし。

〈形態・規模〉本住居跡は東側半分が調査区外に及んでおり、全容は定かではない。検出した部分から、径約4.0 mを測る円形を呈するものと思われる。深さは検出面から最深30cmを測る。

〈埋土〉暗褐色粘質シルトを主体とし、2層に分けられる。

〈床面・壁〉炉が検出したⅥ層面を床面とする。ほぼ平坦であるが、硬化面は認められない。

壁は緩やかに外へと広がりながら立ち上がる。

〈柱穴・壁溝〉柱穴、壁溝は認められなかった。

〈炉〉床面のほぼ中央に位置する。棒状の自然礫が床面上に据えられており、その南東側の床面上は燃焼部や焼土粒の分布はないが、焼成により赤色化している。焼成により赤色化した床面範囲は径30cmに及ぶ。これらのことからこの棒状礫の周辺に石囲炉があったものと判断した。焼成範囲を挟んで東側には柱穴状の掘り込みが見受けられる。掘り込みの埋土中には混入物は認められない。

〈出土遺物〉縄文土器1788.6g、土製品1点が出土した。出土状況を見ると埋土中取り上げのものを除くと、埋土上位と炉上出土に分けられる。炉上からは270が出土している。270以外は小片が多い。遺物は住居廃棄時あるいは、住居廃絶後の埋没段階に廃棄されたものと思われる。

270はⅢ群6類に含まれる深鉢の大形破片である。床面が焼成で赤色化した範囲の上から出土している。胴部下半でやや膨らみ、また口縁部でやや外へと広がる器形で、地文である単節R Lのみが施文される。271～275は破片資料である。271は内湾する深鉢の口縁部片でⅢ群3類に相当する。274は深鉢の底部片で、燃糸文が施文されている。275は小形深鉢の胴部片で細い条線文が縦位に巡る。

土製品は土製円板1点(276)である。無文である。

〈時期〉270は住居跡機能時から住居跡廃絶時に廃棄されたものと思われるが、文様は縄文のみで時期判断の材料とするのは難しい。埋土中から出土した土器(271～275)から縄文時代中期後葉(大木9式新段階)に比定されると判断した。

20号住居跡(第81・82図、写真図版25・83・84)

〈位置〉調査区中央、3B5pグリッドに位置する。1m北側に19号住居跡、2m西側に18号住居跡、1m南東側に22号住居跡、35号土坑が位置する。

〈検出状況〉Ⅲ層上面で暗褐色のプランを検出した。プランは不明瞭であるが、炭化物や土器片が分布する。掘り下げたところ、炉を検出し、竪穴住居跡と判断した。

〈重複関係〉なし。

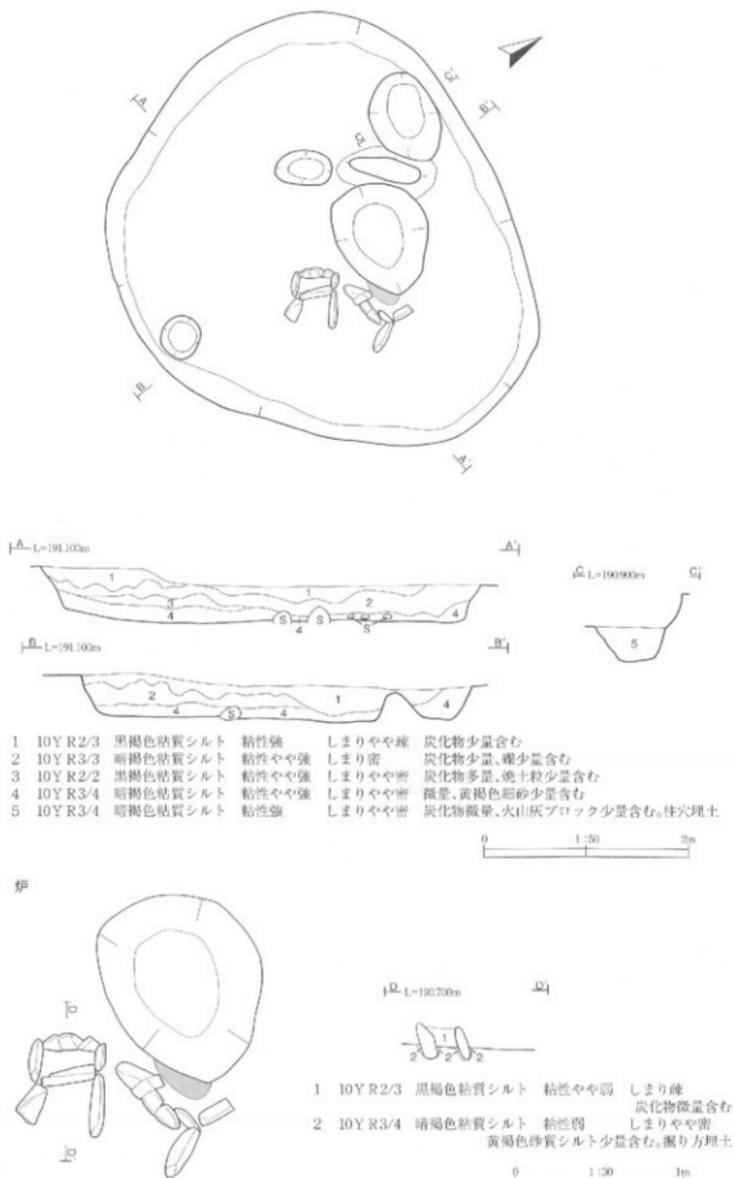
〈形態・規模〉不整な楕円形を呈し、規模は4.4×4.1 m、深さは検出面から最深42cmを測る。

〈埋土〉5層に分けられる。埋土上位は黒褐色粘質シルトが、埋土下位は暗褐色粘質シルトが主体となる。

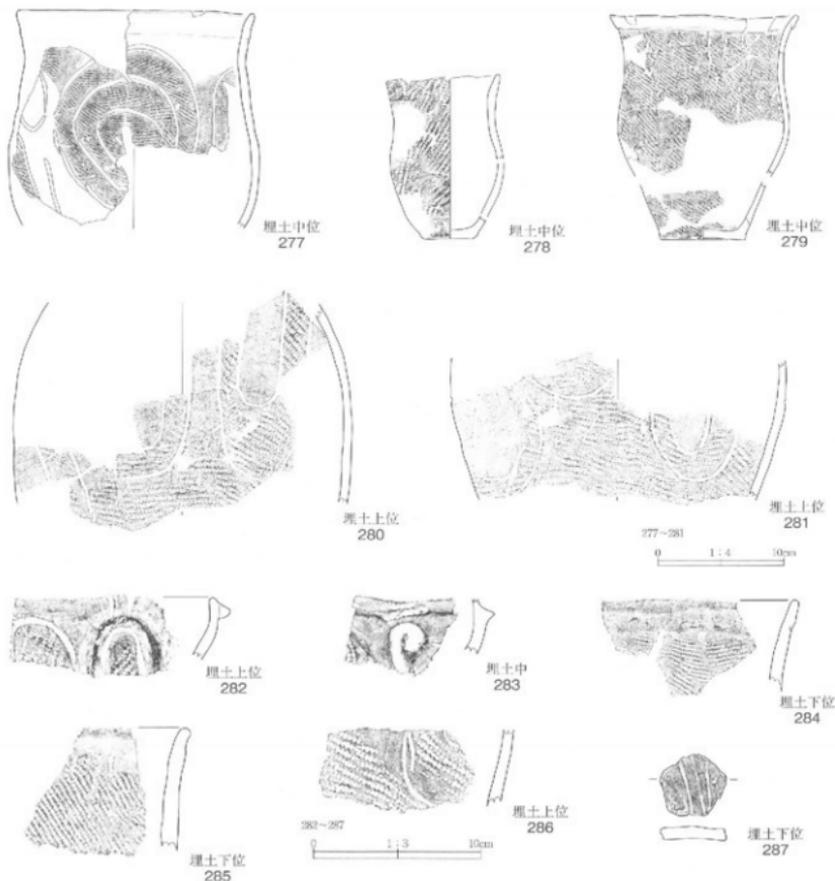
〈床面・壁〉炉を検出したⅥ層面を床面と判断した。床面の一部は、Ⅶ層が露出している。ほぼ平坦であるが、硬化面は認められない。壁は緩やかに外へと広がりながら立ち上がる。

〈柱穴・壁溝〉柱穴は3個検出した。南北方向に直接的に並ぶが、配列上は主柱穴とは思えない。深さは約30cmを測る。埋土は単層で火山灰が混入する。壁溝は認められなかった。

〈炉〉床面のほぼ中央に位置する。石囲炉である。本体と思われる部分には、「コ」字状に石が設置さ



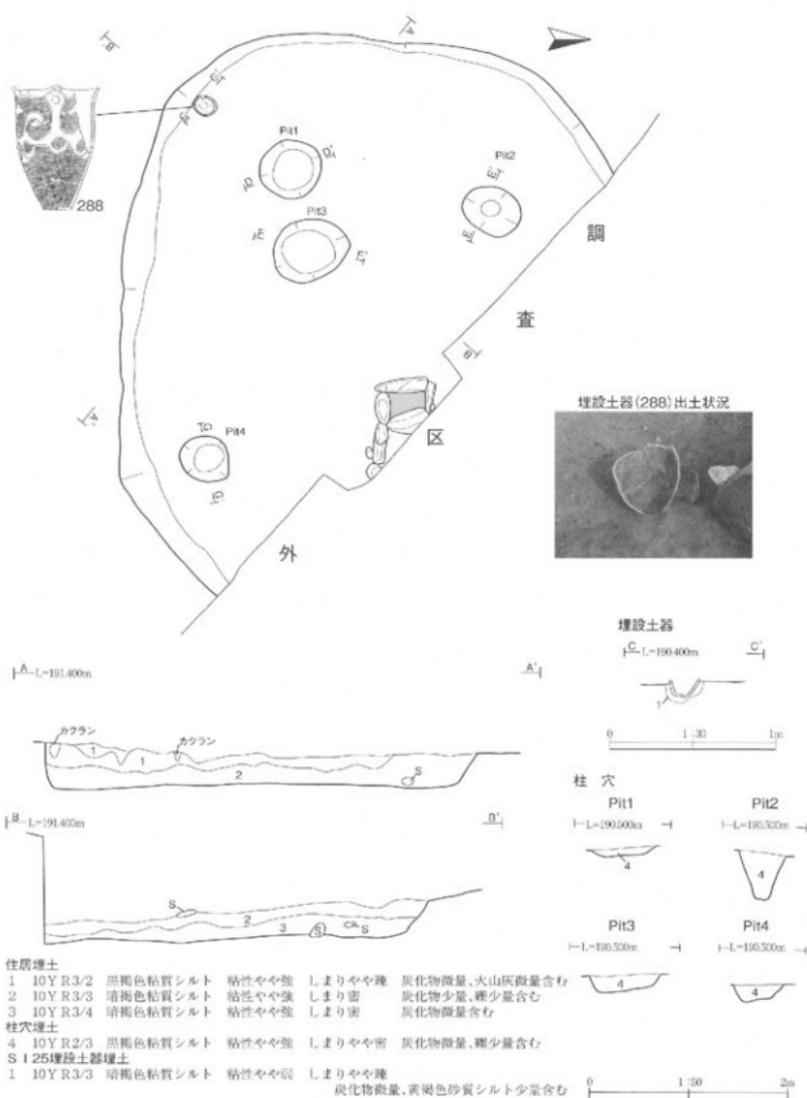
第81図 20号住居跡(1)



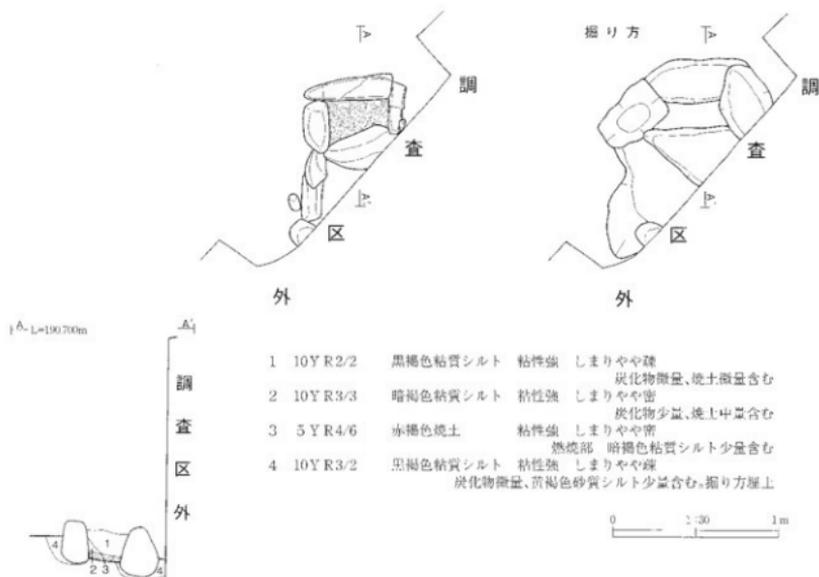
第82図 20号住居跡出土遺物

れ、内側に間仕切りの石が設置されている。規模は長軸62cm×48cmを測る。奥側の炉内は被熱のため、炉石がもろくなっているが、炉内の埋土中には炭化物が混入するのみである。間仕切りの炉石の手前側は被熱を受けていない。

炉の東側にまた竈が並んでいる。石の並びから石囲部+前底部の構造をもつ複式炉の可能性が考えられるが土坑状の掘り込みによりほとんどが壊されており、一部しか残存しない。ただし住居跡の平面形や規模は、他の複式炉を伴う住居跡とは異なるので、複式炉と考えていいかは定かではない。〈出土遺物〉縄文土器3654.7g、石器2点、土製品1点が出土した。出土状況を見ると、埋土上位～中位からの出土量が多い。一方、床面上や炉内から出土するものは少なく、出土した土器も小片であ



第83図 21号住居跡(1)



第84図 21号住居跡(2)

る。したがって遺物の多くは住居廃絶後の埋没段階で廃棄されたものと捉えることができる。

277はⅢ群5類に相当する深鉢の大形破片で口縁部から胴部上半が残存する。口縁部はやや肥厚し、無文である。胴部には沈線により、三重の円文が描かれ、その間を半節LRが充填する。沈線間の縄文は磨消されない。278はⅢ群6類に含まれる小形の深鉢である。279は胴部下半を一周分欠損し、復元した上・下が繋がらず、正確には全体的な器形が定かではないが、胴部半ばで膨らみ、口縁部が外反するものと考えられる。口縁部が肥厚し、無文となり、胴部には結節縄文が縦位に施文される。280・281は深鉢胴部の大形破片で、同一個体と思われるが、接合点がみつからず、別々に掲載した。沈線による「J」字状の区画文が施文され、区画内には縄文が充填される。282～286は破片資料である。282・283はⅢ群3類に、284・285はⅢ群6類に相当する深鉢の口縁部片である。

287は土製円板である。浅い沈線文が3条認められる。

また石器はフレイクが2点出土しているが、図示していない。

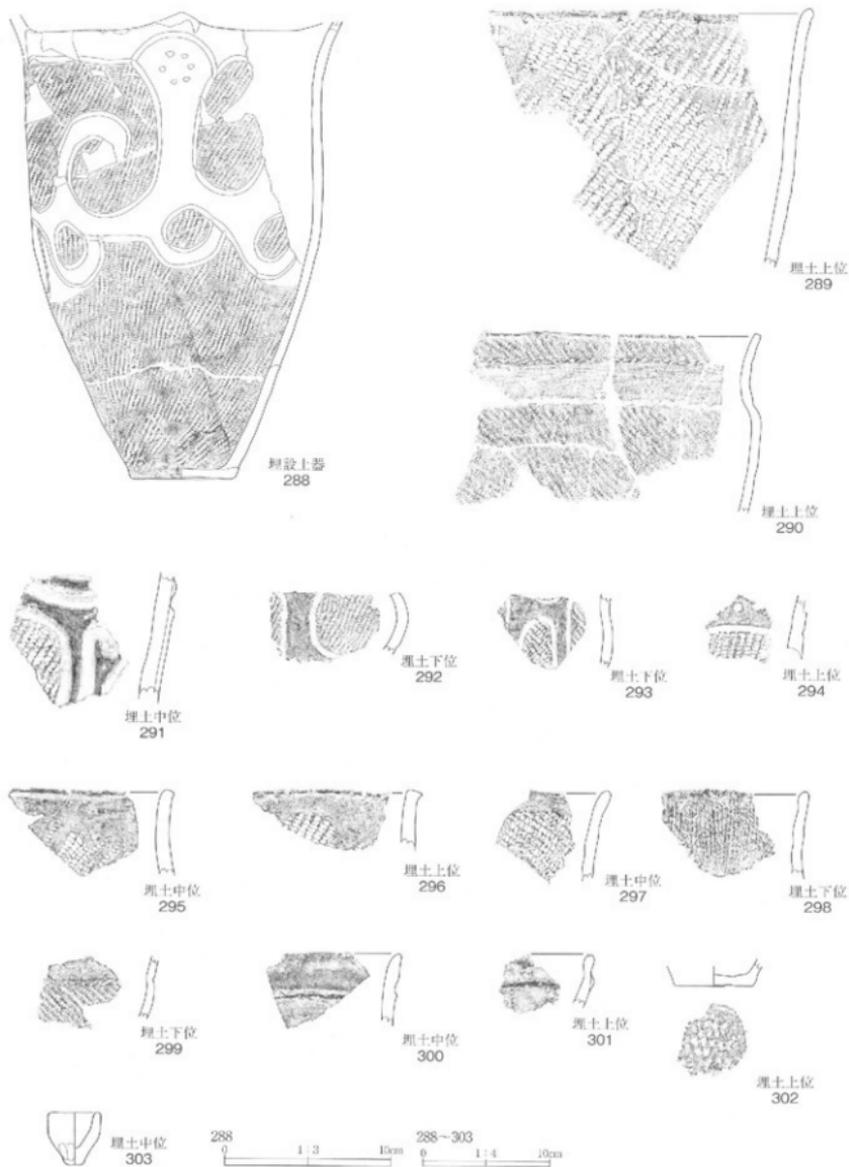
〈時期〉埋土中位から出土した277などから縄文時代中期末葉に比定される。

21号住居跡(第83～86図、写真図版26・84)

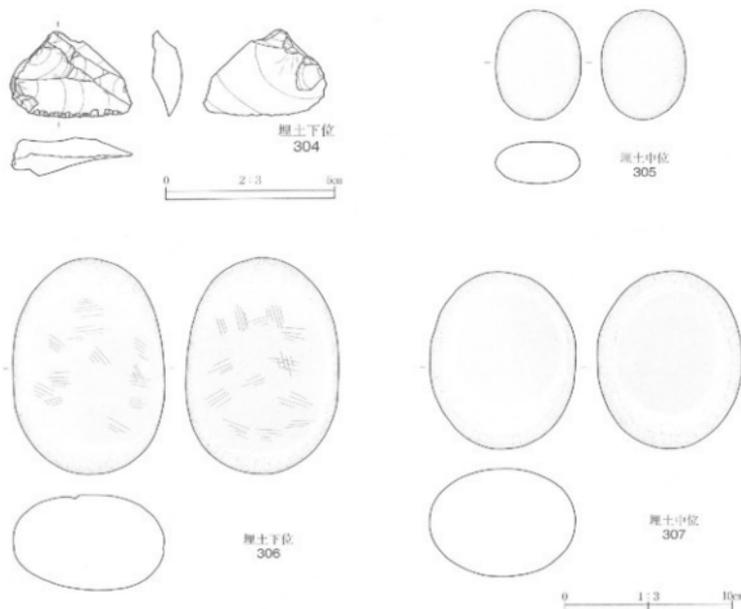
〈位置〉調査区中央、3B6qグリッドに位置する。本住居跡の北側は調査区外に及んでいる。北西側で22号住居跡と重複し、また西側には24・25号住居跡、35・36号土坑が位置する。

〈検出状況〉Ⅲ層上面で暗褐色のプランを検出した。プランは不明瞭であるが、炭化物や土器片が分布していた。掘り下げたところ、炬を検出し堅穴住居跡と判断した。

〈重複関係〉22号住居跡と重複する。本遺構の方が新しい。



第85図 21号住居跡出土遺物(1)



第86図 21号住居跡出土遺物(2)

〈形態・規模〉本住居跡は北側の一部が調査区外に及んでいるため、全容が定かではないが検出できた部分から不整な楕円形を呈するものと思われる。規模は検出できた部分で5.7×4.7m、深さは検出面から最深48cmを測る。

〈埋土〉暗褐色粘質シルトを主体とし、3層に分かれる。1層中には流れ込みと思われる火山灰がブロック状で堆積する。火山灰は、基本層序Ⅲ・Ⅳ層中に混入するものと同じである。

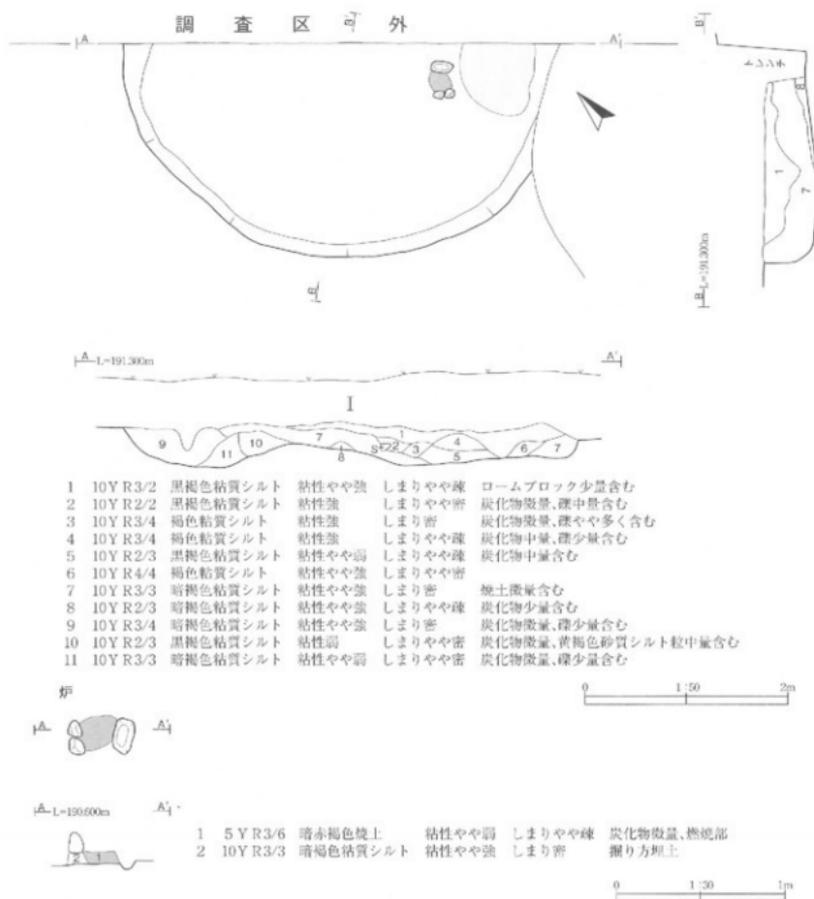
〈床面・壁〉炉を検出したⅥ層面を床面とする。ほぼ平坦であるが、硬化面は認められない。

壁は緩やかに外へと広がりながら立ち上がる。

〈柱穴・壁溝〉柱穴4個を確認した。炉の主軸線に対し、Pit 1と2が左右対称に位置し、また炉の南側にはPit 4が位置する。これらの位置関係からPit 1・2・4が主柱穴と思われる調査区外にPit 4に対応する柱穴がある可能性が高い。柱穴は径40～50cmで、深さはPit 2が床面から50cmを測るが、他は浅い。埋土は暗褐色粘質シルトを主体とする単層で柱痕跡は認められない。

〈炉〉東側寄りに位置し、一部は調査区外に及んでいる。石囲部+前庭部で構成される複式炉である。石囲部は方形を呈し、100×60cmを測る。石囲部内は非常に焼けており、焼土が4cm堆積している。炉石はいずれも大きく、設置する際に床面を深く掘って設置している。前庭部は東側が調査区外に及んでおり、定かではないが、両脇に大きい礫が設置されている。前庭部は検出できた部分が狭いが、石囲部の燃焼部の深さまで掘り下げられている。

〈その他〉南西壁際から埋設土器1個を検出した。埋設土器(288)は住居床面下に底部から胴部上半

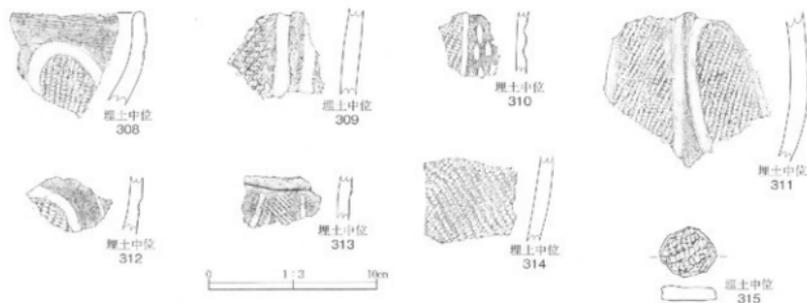


第87図 22号住居跡

のみを埋め、その上は床面上に露出している。

〈出土遺物〉縄文土器94164g、石器11点が出土した。出土状況を見ると、埋土上位～中位の出土量が大部分を占める。ただし、ほとんどが第85図に図示したような小片である。一方床面上から出土するものには、288のような埋設土器が含まれる。したがって住居跡機能時に伴う遺物としては埋設土器（288）が考えられる。その他は住居廃絶後の埋没段階に廃棄されたものが多いことが窺える。

288は検出した状態では胴部下半から底部にかけてのみであり、口縁部は埋土中から出土した破片が接合した。ただし口縁部片は図示できた部分のみしかみつからず、全周しない。Ⅲ群5類に相当する。



第88図 22号住居跡出土遺物

289～303は破片資料である。289はⅢ群6類に相当する深鉢の口縁部片である。290はⅣ群3類に相当し、流れ込みによるものと思われる。頸部に無文帯をもち、その上下端には縄文押圧が施文される。口縁部、胴部ともに単節R Lが施文される。291～294はⅢ群2～3類の胴部片である。295～298はⅢ群6類に相当する深鉢の口縁部片である。298は口唇部下から捺糸文が縦位に施される。299はⅣ群3類に相当し、290と同じ文様である。300・301は無文の口縁部片であるが、微隆帯が横位に巡る。302は深鉢の底部片で底面に縄文の押圧痕が見受けられる。303はミニチュア土器である。器形を復元して図示したが、全体の4分の1しか残存していない。底部がややすぼまる器形で底部付近にナデのような調整痕が認められる。無文である。

石器はスクレイパー1点、磨石3点、フレイク7点が出土した。スクレイパー1点、磨石3点を図示した。304はスクレイパーで、片面の側縁のみに二次加工が施される。305～307は磨石で、いずれも扁平な両面に磨痕が認められる。

(時期) 埋設土器(288)から縄文時代中期末葉に比定される。

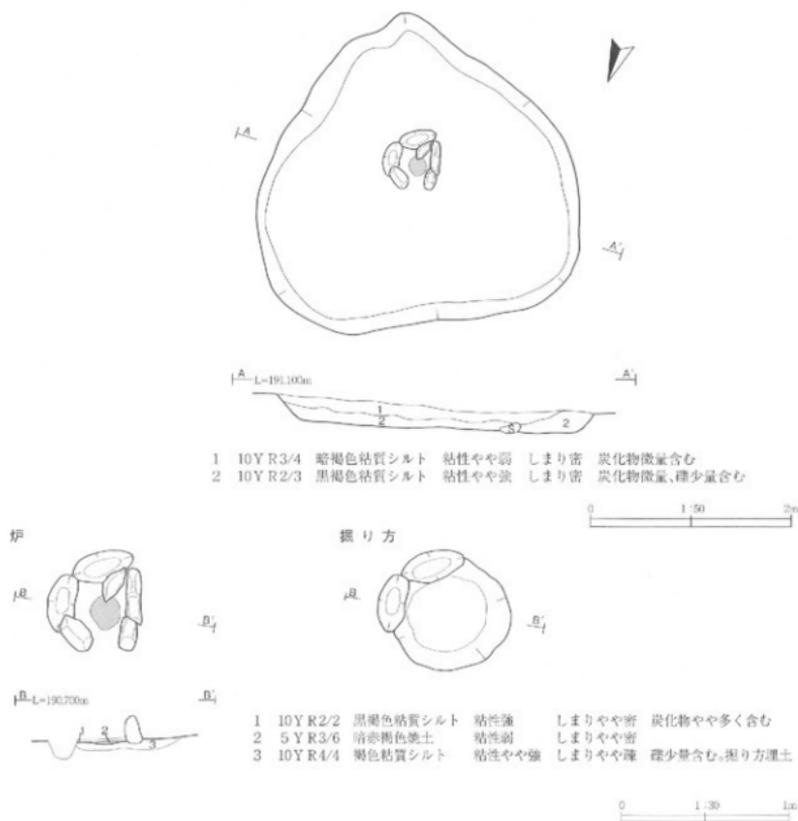
22号住居跡(第87・88図、写真図版27・85)

(位置) 調査区中央、3B5qグリッドに位置する。南東側で21号住居跡と重複し、1m西側で20号住居跡、35号、36号土坑が位置する。

(検出状況) Ⅲ層上面で暗褐色のプランを検出した。プランは不明瞭であるが、掘り下げたところ、土器片の混入が認められ、また焼土範囲とそれに並ぶ礫を検出し、炉と判断して、堅住居跡とした。(重複関係) 21号住居跡、37号土坑と重複する。本遺構は21号住居跡よりは古く、37号土坑より新しい。(形態・規模) 本遺構は北東側半分が調査区外に及んでおり、また南東壁の一部は21号住居跡によって壊されており、全体の形態・規模は定かではないが、残存部から平面形は円形を呈し、規模は径4.2mを測るものと思われる。深さは検出面から最深34cmを測る。

(埋土) 11層に分けられる。埋土上位は黒褐色粘質シルトを、埋土下位は暗褐色粘質シルトを主体とするが、一様ではなく、他に褐色粘質シルトが入り込んでおり、複雑な様相を呈している。層中には比較的炭化物が多く含まれ、また、7層中には焼土粒が混入する。

(床面・壁) 炉が検出したⅥ層面を床面とする。床面は中央部が約20cm隆起しており、やや凹凸が激しい。炉と住居東壁との間に70cm範囲で硬化面が認められる。壁は緩やかに外へと広がりがながら立ち上がる。

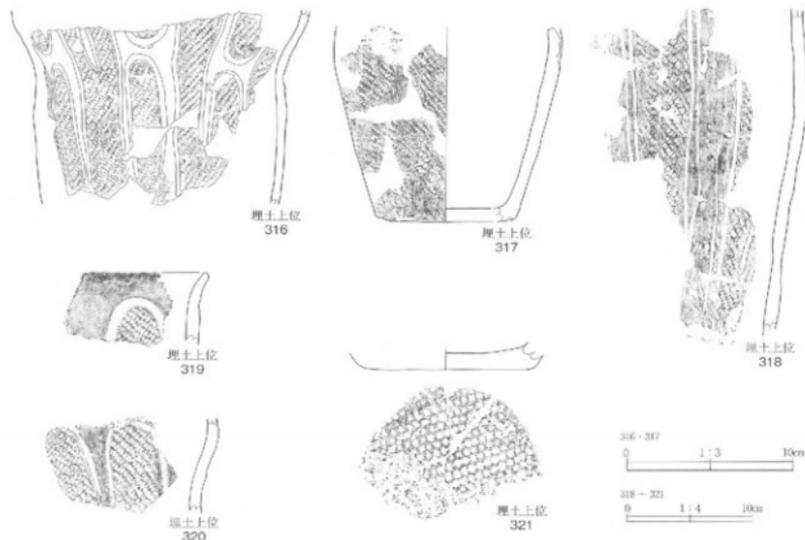


第89図 23号住居跡

〈柱穴・壁溝〉柱穴、壁溝は認められなかった。

〈炉〉住居の南東側に位置する。石囲炉と思われ、炉石と考えられる礫2個と燃烧部、また炉石の抜き取り痕を検出した。炉石と燃烧部の規模は約30cmを測る。精査の際、掘り下けすぎてしまっているが、本来は焼上が10cm堆積したものと思われる。炉石は方形の自然礫を利用し、床面上に据えるだけである。住居壁との間に硬化面が広がる。

〈出土遺物〉縄文土器1144.6g、石器1点、土製品1点が出土した。出土状況を見ると、埋土上位から埋土下位からで、床面上から出土する遺物はない。割合としては、埋土中位からの出土量が特に多い。本住居跡は、石囲炉の炉石がほとんど残存していないことから、住居跡機能時あるいは廃絶時の遺物は一掃されている可能性が考えられる。したがって、本住居跡に伴う遺物は全て、住居廃絶後の埋没段階に廃棄されたものと考えられる。



第90図 23号住居跡出土遺物

出土した土器はすべて小片で器形が復元できるものはない。308～313はⅢ群3類に相当する深鉢である。310は区画外に棒状工具によるやや押し引きした刺突文が縦位に並ぶ。313は微隆帯が横位に巡り、胴部には区画文が描かれる。区画文内は単筋L Rを充填させている。

315は土製円板で縄文が施文される。

石器はフレイクが1点出土しているが、図示していない。

〈時期〉埋土中から出土した土器片から縄文時代中期後葉（大木9式新段階）に比定される。

23号住居跡（第89・90図、写真図版28・85）

〈位置〉調査区中央、3 B 8 o グリッドに位置する。北東側に24・25号住居跡が位置する。

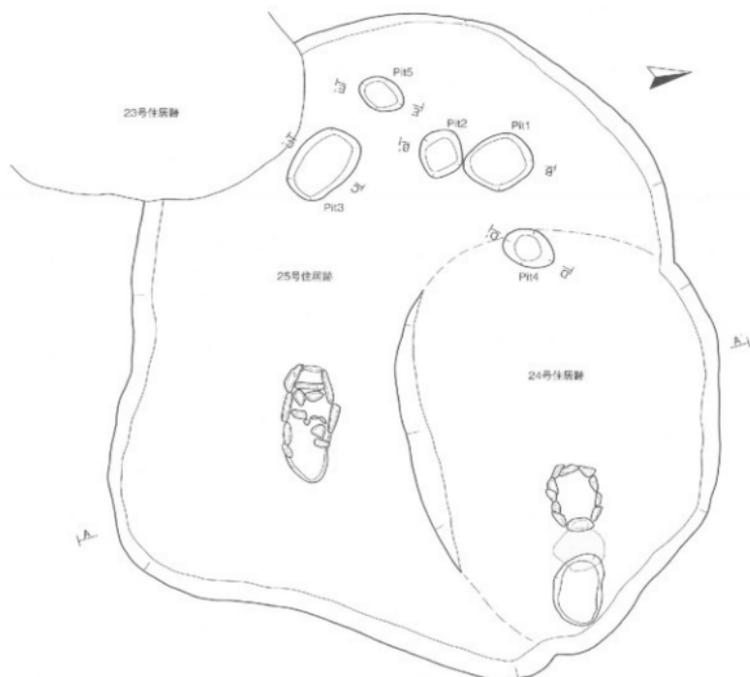
〈検出状況〉Ⅲ層上面で暗褐色のプランを検出した。プランは不明瞭で、検出面が西から東へと傾斜しているため、遺構と判断しづらかった。任意にトレンチを入れたところ、礫が「L」字状に並び、その周辺に焼土の分布が認められたので炉と判断し、竪穴住居跡とした。

〈重複関係〉24・25号住居跡と重複する。本住居跡が最も新しい。

〈形態・規模〉南東側が突出する不整な楕円形を呈する。規模は3.2×3.2 m、深さは検出面から最深24cmを測る。

〈埋土〉2層に分けられる。埋土上位は暗褐色粘質シルト、埋土下位は黒褐色粘質シルトを主体とする。

〈床面・壁〉炉が検出したⅣ層面を床面とする。ただし床面の一部はⅢ層に達しており、礫が露出している。ほぼ平坦であるが、やや東から西へと傾斜している。壁は緩やかに外へと広がりがながら立ち上がる。



24号住居跡

- | | | | | | |
|---|----------|----------|-------|--------|---------------|
| 1 | 10Y R2/3 | 黒褐色粘質シルト | 粘性やや弱 | しまりやや疎 | 炭化物少量、礫少量含む |
| 2 | 10Y R3/2 | 黒褐色粘質シルト | 粘性弱 | しまりやや疎 | 炭化物微量含む |
| 3 | 10Y R3/3 | 暗褐色粘質シルト | 粘性弱 | しまり密 | 炭化物微量、火山灰微量含む |

25号住居跡

- | | | | | | |
|---|----------|----------|-------|--------|-------------------|
| 4 | 10Y R2/1 | 黒色粘質シルト | 粘性やや強 | しまりやや疎 | 炭化物微量含む |
| 5 | 10Y R3/3 | 暗褐色粘質シルト | 粘性やや強 | しまりやや密 | 炭化物微量、礫少量含む |
| 6 | 10Y R2/3 | 黒褐色粘質シルト | 粘性やや強 | しまり密 | 炭化物微量、礫少量、火山灰微量含む |

柱 穴

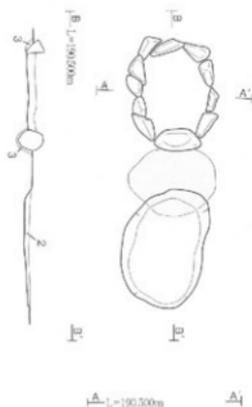


- | | | | | | |
|---|----------|----------|-------|------|-------------|
| 1 | 10Y R2/3 | 黒褐色粘質シルト | 粘性やや強 | しまり密 | 炭化物微量、礫少量含む |
| 2 | 10Y R3/3 | 暗褐色粘質シルト | 粘性強 | しまり密 | 炭化物微量含む |



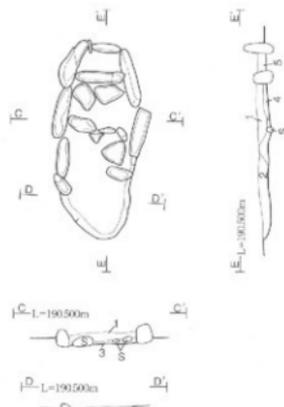
第91図 24・25号住居跡(1)

24号住居跡炉



- 1 10Y R3/4 暗褐色粘質シルト 粘性やや強
しまりやや疎 炭化物・焼土少量含む
- 2 10Y R3/4 暗褐色粘質シルト 粘性強
しまりやや密 炭化物・焼土少量含む
- 3 10Y R2/3 黒褐色粘質シルト 粘性強
しまりやや疎 炭化物微量含む。掘り方埋土

25号住居跡炉



- 1 10Y R5/8 黄褐色砂質シルト 粘性弱
しまりやや疎 暗褐色粘質シルト多量含む
- 2 10Y R2/2 黒褐色粘質シルト 粘性やや弱
しまり密 黄褐色砂質シルト少量含む
- 3 10Y R3/4 暗褐色粘質シルト 粘性やや弱
しまり疎 黄褐色砂質シルト中量含む
- 4 10Y R3/3 暗褐色粘質シルト 粘性やや強
しまり疎 黄褐色砂質シルト中量含む
- 5 10Y R2/3 黒褐色粘質シルト 粘性やや弱
しまりやや疎 黄褐色砂質シルト少量含む
- 6 10Y R2/3 黒褐色粘質シルト 粘性強
しまりやや疎 炭化物微量含む。掘り方埋土

0 1:30 1m

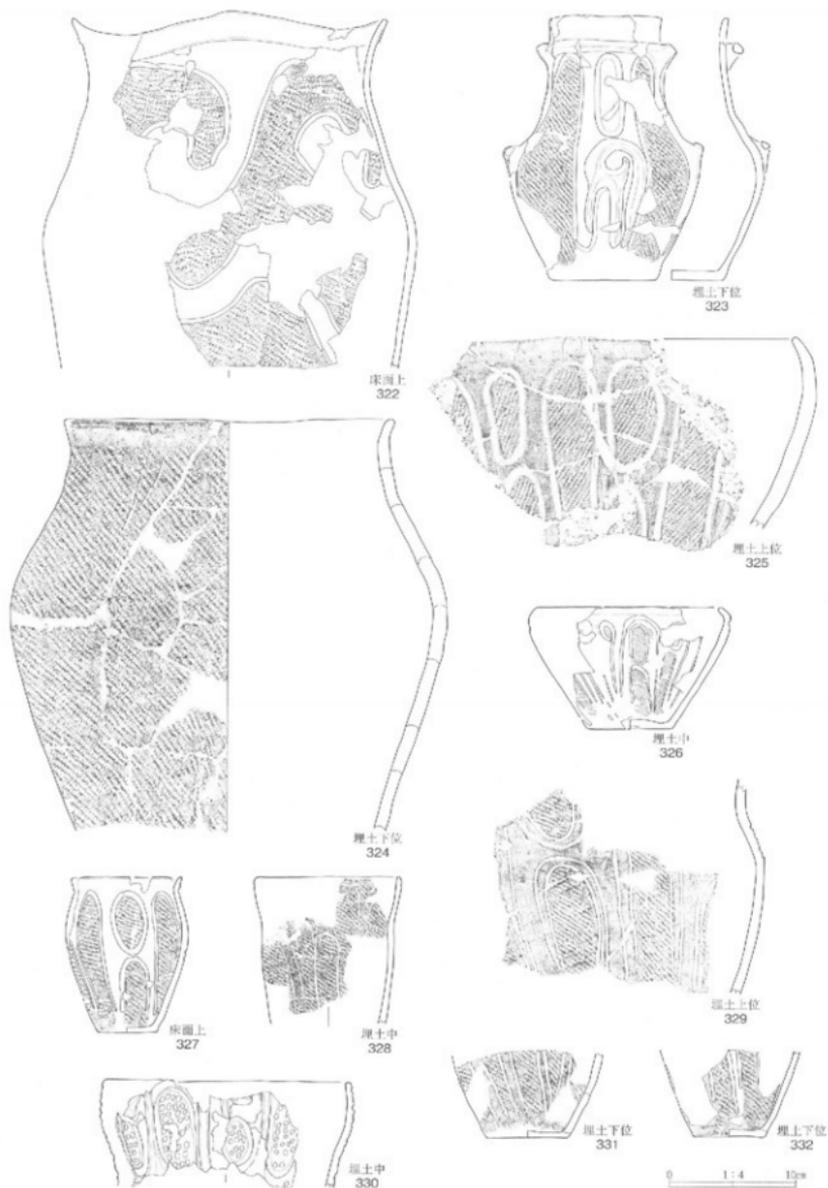
第92図 24・25号住居跡 (2)

〈柱穴・壁溝〉柱穴、壁溝は認められなかった。

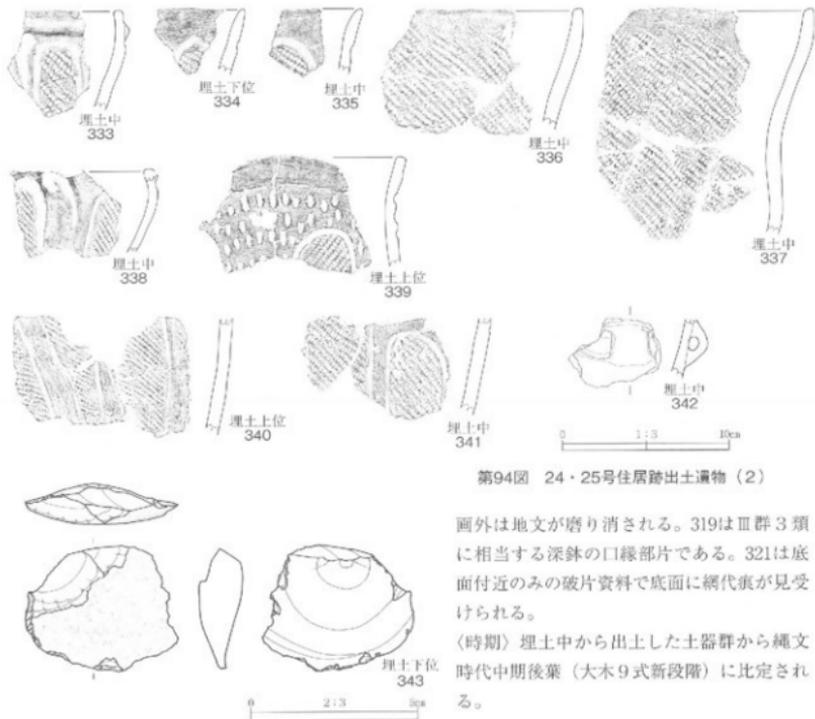
〈炉〉床面のほぼ中央に位置する。石囲炉である。炉石は西側と北東側の一部のみ検出した。他は掘り込みが認められるので、一部の炉石は抜き取られたものと思われる。炉の平面形は不明である。ただし、検出した炉石と掘り方から不整な方形を呈するものと思われる。規模は残存部で50×50cm、深さは検出面から4cmを測る。炉石は扁平な自然礫を用い、床面上に据える程度である。ただし、炉自体の掘り方は更に深いので、一度埋めてから炉石を据えたものと思われる。燃焼部は炉内のほぼ中央に位置し、焼土は2cm程度堆積している。

〈出土遺物〉縄文土器1378.8gが出土している。出土状況を見ると、埋土中として取り上げてしまったものを除き、すべて埋土上位から出土しており、床面上から出土するものは見受けられなかった。本住居跡は炉石が一部抜き取られていることから、住居跡機能時の遺物群が一掃されている可能性が考えられる。したがって遺物は住居跡絶後の埋没段階に廃棄されたものと考えられる。

316は深鉢の胴部片で、胴部上半でくびれ、口縁部にかけて内湾しながら外へとひろがる器形である。単節RLを地文とし、沈線による楕円形や「 \cap 」字状の区画文が施文される。区画外は地文が磨り消される。317は深鉢の胴部下半から底部でⅢ群6類に相当する。318は単節LRを地文とし、沈線による区画文が施文される。区画文を描く沈線は2条一対で縦位に垂下する。沈線はやや種插である。区



第93図 24・25号住居跡出土遺物(1)



第94図 24・25号住居跡出土遺物(2)

画外は地文が磨り消される。319はⅢ群3類に相当する深鉢の口縁部片である。321は底面付近のみの破片資料で底面に網代表が見受けられる。

〈時期〉埋土中から出土した土器群から縄文時代中期後葉(大木9式新段階)に比定される。

24号住居跡(第91～94図、写真図版29・86・87・113)

〈位置〉調査区中央、3B7qグリッドに位置する。

〈検出状況〉Ⅲ層上面で暗褐色のプランを検出した。プランは不明瞭で、任意にトレンチを入れ、壁の立ち上がりを確認し、掘り下げを行ったところ、炉が2基検出し、再度ベルト断面の上層を観察し、2棟の住居跡が重複したものであることが分かった。そこで新しい住居跡を24号住居跡、古い住居跡を25号住居跡とした。

〈重複関係〉25号住居跡と重複する。本遺構の方が25号住居跡より新しい。

〈形態・規模〉本住居跡は、25号住居跡と同時に掘り下げられており、精舎の段階で壁のほとんどを消失させてしまった。したがって、全容は定かではないが、残存する壁から、不整な楕円形を呈し、4.0×3.2mを測るものと思われる。深さは検出面から最深35cmである。

〈埋土〉黒褐色粘質シルトを主体とし、3層に分けられる。炭化物や流れ込みと思われる火山灰(基本層序Ⅲ、Ⅳ層中に混入するものと同じ)がブロック状に混入する。

〈床面・壁〉炉を検出したⅣ層面を床面と判断した。ほぼ平坦である。壁は25号住居跡と同時に掘ってしまい、一部消失しているが、検出できた北壁は緩やかに外へと広がりながら立ち上がる。

〈柱穴・壁溝〉柱穴1個が検出した(第91図Pit 4が相当する)。50×40cmの楕円形を呈し、深さは約

30cmを測る。埋土は2層に分けられるが、柱痕跡は認められない。壁溝は認められなかった。

〈炉〉東壁付近に位置する。石囲炉である。65×35cmの楕円形を呈し、深さは床面から4cmを測る。炉石には角ばった礫が利用されている。他の住居跡の石囲炉は比較的偏平な自然礫を炉石として用いているので、本住居跡の炉石は様相が異なる。炉内は埋土に炭化物や焼土粒が混入するのみで焼部は認められない。掘り方は炉石を設置するために大きく掘り込んだ形跡は認められなかった。

炉の東側には40cm範囲の硬化面が認められ、その東側には70×50cmの浅い掘り込みがある。硬化面は掘り込みの一部にも及んでいる。

〈出土遺物〉前述の通り、本住居跡は25号住居跡と同時に掘り下げたため、両住居跡の出土遺物を一括して取り上げてしまっている。したがってここでは25号住居跡分も含めて報告する。

両住居跡合わせて縄文土器9826.3g、石器1点が出土した。出土状況を見ると、埋土下位からの出土量が大部分を占める。一方、床面上からの出土量は少なく、322のような器形が復元できる大形破片を除けば小片が目立つ。したがって、遺物の多くは住居廃絶後の埋没過程、それらはいずれ段階に廃棄されたものと捉える。

322はⅢ群5類に相当する深鉢の口縁部から胴部上半にかけての大形破片である。口縁部は折り返り状に肥厚し、無文帯となる。無文帯の下は沈線により曲線をモチーフにした区画文が横位に巡る。区画内は縄文が充填手法で施文される。323は壺で、胴部上半と下半に縦位の把手が2個一対で付く。また胴部下半には隆帯による渦巻き文が付く。324はⅢ群6類に相当する深鉢で、器形は322に類似する。325は鉢の大形破片で口縁部から胴部にかけて、楕円形区画文と「∩」字形区画文とが交互に並ぶ。326も鉢で単節LRを地文とし、沈線による楕円形、「∩」字形の区画文が施文される。沈線は細く、区画外は地文の一部が残る。区画間には沈線による渦巻き文が描かれる。327は小形の深鉢で単節LRを地文とし、沈線による区画文が施文される。330は深鉢の口縁部片である。隆帯により区画文が施文され、隆帯に沿って沈線が施される。区画内には刺突文が充填される。

333～342は破片資料を掲載した。333～335・338～341はⅢ群3類に相当する土器群である。339は区画間に押し引きの刺突文が充填される。336・337はⅢ群6類に相当する深鉢の口縁部片である。342の胴部片は小片で器形は定かではないが、把手が付く。

石器は図示したフレイク(343)1点のみで、埋土下位から出土している。2b類に比定され、背面に自然面が残る。

〈時期〉出土遺物は縄文時代中期後葉から末葉と時間幅がある。前述の通り、本住居跡は25号住居跡と重複しており、また両住居跡の出土遺物を一括して取り上げている。したがって、新しい方である本住居跡は、中期末葉に比定される可能性が高い。

25号住居跡(第91～94図、写真図版29・30)

〈位置〉調査区中央、3B8pグリッドに位置する。

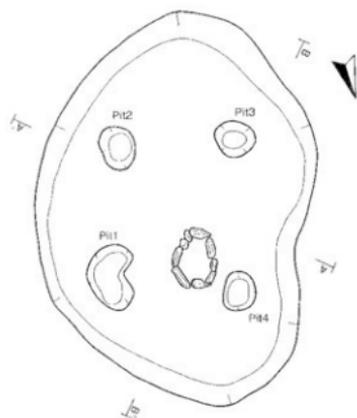
〈検出状況〉24号住居跡を精査中、その西側で、別の炉を検出し、土層を確認したところ、24号住居跡に切られる別の住居跡であることが判明し、25号住居跡とした。

〈重複関係〉23号・24号住居跡と重複する。本遺構が最も古い。

〈形態・規模〉不整な楕円形を呈する。規模は6.9×6.2m、深さは検出面から最深30cmを測る。

〈埋土〉黒褐色粘質シルトを主体とし、3層(第91図4～6層が相当する)に分けられる。炭化物や流れ込みと思われる火山灰(基本層序Ⅲ、Ⅳ層中に混入するものと同じ)がブロック状に混入する。

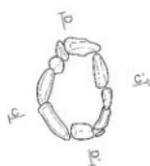
〈床面・壁〉炉が検出したⅣ層面を床面とする。ほぼ平坦であるが、硬化面は認められない。壁は緩



- | | | | | | |
|---|----------|----------|-------|--------|-------------------|
| 1 | 10Y R2/2 | 黒褐色粘質シルト | 粘性やや強 | しまりやや疎 | 炭化物微量含む |
| 2 | 10Y R4/6 | 褐色粘質シルト | 粘性強 | しまりやや密 | 炭化物微量、火山灰ブロック微量含む |
| 3 | 10Y R2/3 | 暗褐色粘質シルト | 粘性やや強 | しまりやや密 | 炭化物微量、礫少量含む |
| 4 | 10Y R3/4 | 暗褐色粘質シルト | 粘性やや強 | しまりやや密 | 炭化物微量、礫少量含む |
| 5 | 10Y R1/4 | 褐色粘質シルト | 粘性強 | しまりやや密 | 火山灰ブロック少量含む |



炉

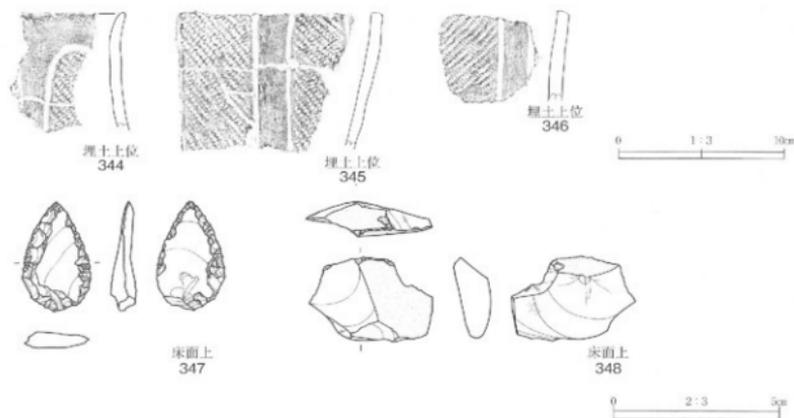


掘り方



- | | | | | | |
|---|----------|----------|-------|--------|--------------|
| 1 | 10Y R2/3 | 黒褐色粘質シルト | 粘性やや強 | しまりやや疎 | 炭化物少量、焼土中量含む |
| 2 | 10Y R3/3 | 暗褐色粘質シルト | 粘性強 | しまりやや密 | 炭化物微量、焼土少量含む |
| 3 | 10Y R3/3 | 暗褐色粘質シルト | 粘性やや強 | しまり密 | 掘り方埋土 |





第96図 26号住居跡出土遺物

やかに外へと広がりながら立ち上がる。

〈柱穴・壁溝〉柱穴は5個検出した。床面西側に集中し、配置に規則性は感じられないので支柱穴ではないと考えられる。柱穴の深さは10～20cm程度で、埋土は黒褐色粘質シルトを主体とする、ほぼ単層で柱痕跡は認められない。壁溝は認められない。

〈炉〉東壁付近に位置する。方形を呈し、間仕切りの石も設置され、また前庭部のような浅い掘り込みが付く。複式炉に含まれるかもしれないが、他の住居跡のものとは様相が著しく異なるので、石囲炉とした。炉の主軸方向は、24号住居跡の石囲炉の主軸方向とほぼ同じである。規模は掘り込みまで含め、118×58cm、深さは床面から2cmを測る。炉石は扁平な自然礫を用いるが、大きさや形状には規則性が無い。炉内は埋土に炭化物が微量に混入するが、焼土は検出していない。主軸方向と直交する間仕切りの石が設置され、また扁平な礫が水平に置かれている。掘り方は炉石を設置するために大きく掘り込んだ形痕は認められなかった。

〈出土遺物〉24号住居跡の項に記載した。

〈時期〉出土遺物は縄文時代中期後葉～末葉に比定されるもので、24号住居跡と出土遺物が含まれている。24号住居跡よりは古いので、中期後葉に相当する可能性はある。

26号住居跡（第95・96図、写真図版30・31・87・113）

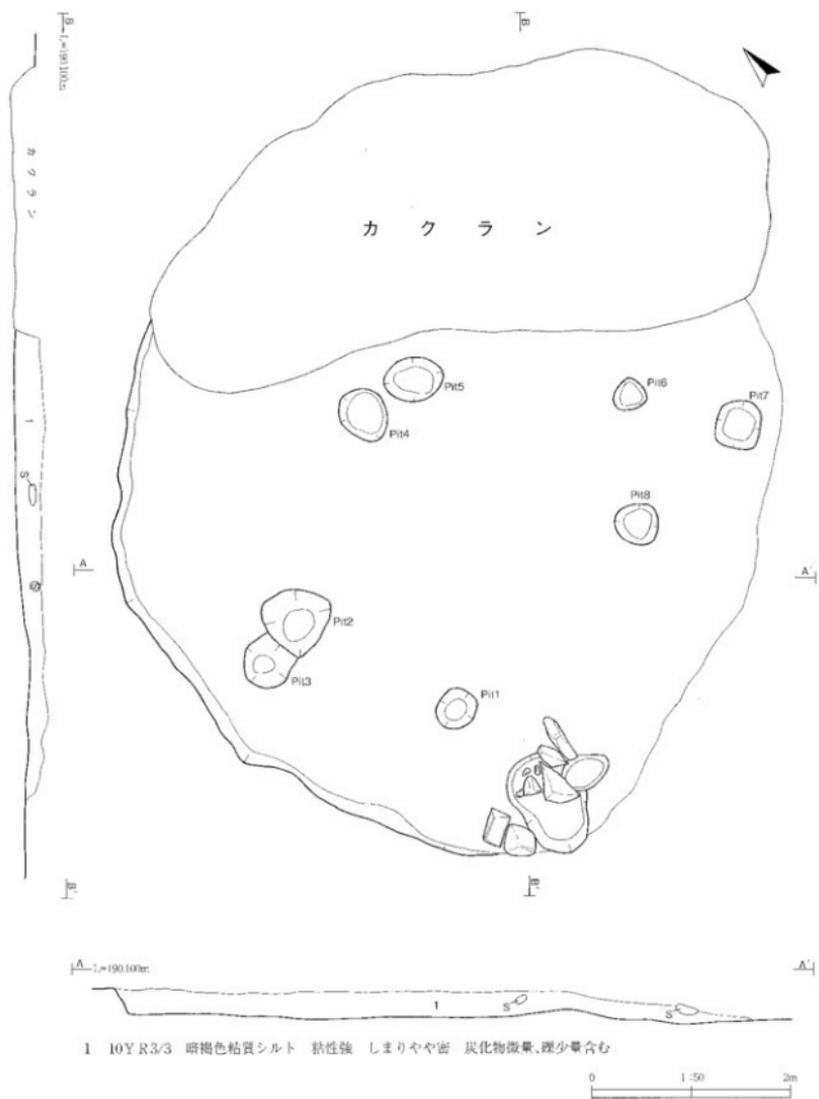
〈位置〉調査区中央、3B7rグリッドに位置する。

〈検出状況〉Ⅲ層上面で暗褐色のプランを検出した。プランが不明瞭であるが、検出面上に炭化物が分布する。掘り下げたところ、石囲炉を検出し、堅穴住居跡と判断した。

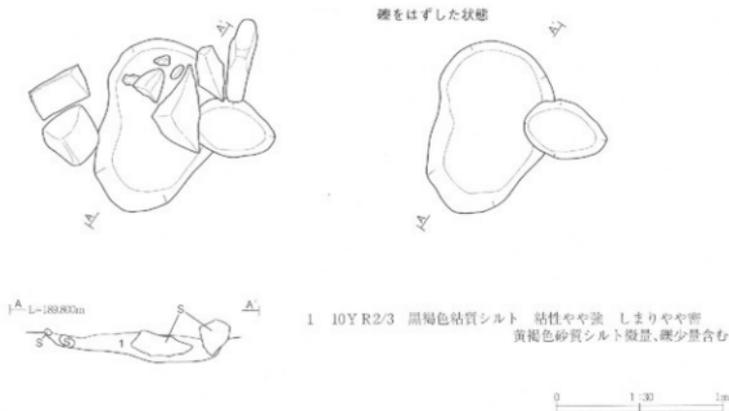
〈重複関係〉なし。

〈形態・規模〉不整な楕円形を呈し、規模は4.1×2.7m、深さは検出面から最深48cmを測る。

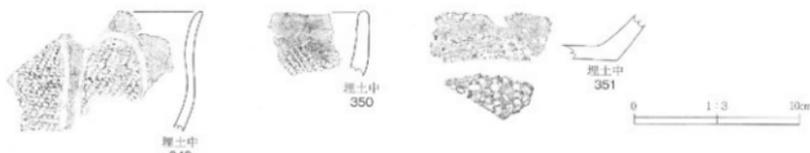
〈埋土〉5層に分けられる。炭化物や礫を含み、壁際にみられる2、5層中には流れ込みの火山灰（基本層序Ⅲ、Ⅳ層中に混入するものと同じ）がブロック状に混入していた。



第97図 27号住居跡(1)



第98図 27号住居跡(2)



第99図 27号住居跡出土遺物

〈床面・壁〉が検出したIV層面を床面とする。ほぼ平坦であるが、硬化面は認められない。壁は緩やかに外へと広がりがながら立ち上がる。

〈柱穴・壁溝〉柱穴は4個確認した。炉の主軸方向に対し、Pit 1とPit 4、Pit 2とPit 3が左右対称に位置する。したがって、これらを主柱とする4本柱と考えられる。ただし柱穴はいずれも浅い。また壁溝は認められなかった。

〈炉〉床面の中央やや北側に位置する。石囲炉である。楕円形を呈し、規模は60×40cm、深さは床面から7cmを測る。炉石は扁平な自然礫を利用し、掘り方に立てかけるように設置している。炉内に燃焼部は認められず、埋土中に炭化物や焼土が少量堆積する程度である。

〈出土遺物〉縄文土器1060.1g、石器4点が出土した。出土状況を見ると、土器は埋土上位からの出土量が大部分を占める。一方、床面上から出土するものはない。したがって出土した住居廃絶後の埋没段階に廃棄されたものと考えられる。ただし石器は4点とも床面上から出土しており、住居跡機能時に伴うか廃絶時に廃棄されたものと捉えられる。

土器は全て小片で、器形が復元できたものはない。344は深鉢の口縁部片でⅢ群3類に相当する。単節LRを地文とし、沈線による区画文が描かれ、区画外は磨消手法により無文化する。

石器は石鏃1点とフレイク3点が出土した。347は石鏃で円基鏃である。348はフレイクで1b類に比定され、打面と背面に自然面が残る。

〈時期〉埋土中から出土した土器群から縄文時代中期後葉（大木9式新段階）に比定される。

27号住居跡（第97～99図、写真図版31・32・87）

〈位置〉調査区東側、3C20eグリッドに位置する。比較的、他の遺構と離れている（近世墓は除く）。4m南側に9号柱穴状土坑、6m東側に39号土坑が位置する。

〈検出状況〉Ⅲ層上面で黒褐色粘質シルトのプランで検出した。検出面上に炭化物が分布する。掘り下げたところ、壁の立ち上がりを確認し、堅穴住居跡と判断した。

〈重複関係〉なし。

〈形態・規模〉本遺構は削平と撓乱により、北西から西壁の一部しか検出できていないので、全容は定かではない。検出できた部分から、6.5m×5.4m不整な楕円形を呈するものと推測する。深さは検出面から最深約22cmを測る。

〈埋土〉暗褐色粘質シルトを主体とする単層である。炭化物や小礫が混入する。

〈床面・壁〉Ⅳ層面を床面とする。ほぼ平坦であるが、砂礫が露出しており、硬化面は認められない。

壁は北～東壁のみを検出した。緩やかに外へと広がりながら立ち上がる。

〈柱穴・壁溝〉8個確認した。柱穴の配列に規則性はない。壁溝は認められなかった。

〈炉〉はっきりとした炉は検出していないが、南西側に掘り込みが認められ、人形の礫が周辺に集中しており、炉の掘り方の可能性が考えられる。掘り込みは楕円形を呈し、規模は107×70m、深さは床面から14cmを測る。埋土内に焼土は堆積しておらず、焼けた形跡も認められなかった。

〈出土遺物〉縄文土器252.9gが出土した。本住居跡は削平が激しく、ほとんどの土器を埋土中出土として取り上げた。土器はいずれも小片である。

349は深鉢の口縁部から胴部片で、Ⅲ群3類に相当する。350は深鉢の口縁部片でⅢ群6類に相当する。351は深鉢の底部片で底面に網代痕がみられる。

〈時期〉出土遺物から縄文時代中期後葉（大木9式新段階）に比定される。

28号住居跡（第100～107図、写真図版32・33・88～90・113）

〈位置〉調査区東側、3C21iグリッドに位置する。本住居跡から35号住居跡まで密集しており、その西端部に位置する。

〈検出状況〉Ⅲ層上面で黒色土のプランとして検出した。

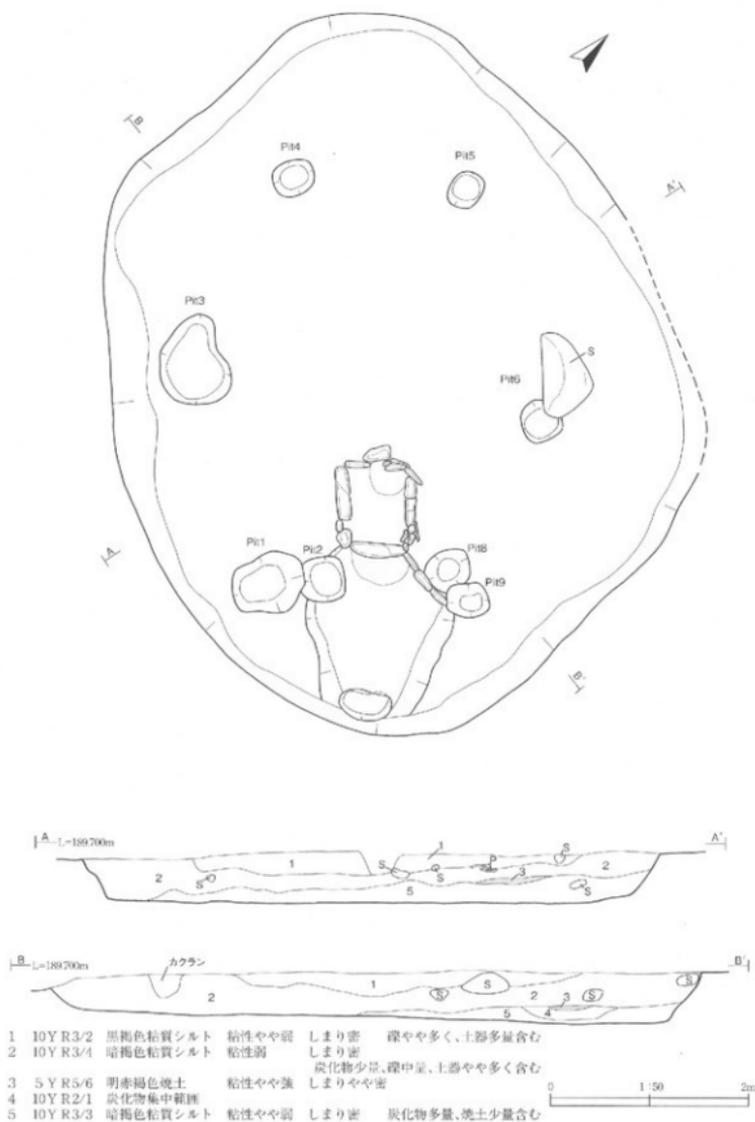
〈重複関係〉32号住居跡、39号土坑が重複している。32号住居跡とはトレンチの土層断面から本遺構の方が新しいことが分かっている。また39号土坑は本遺構の検出段階では認められない遺構であり、本遺構の方が新しいと判断した。

〈形態・規模〉楕円形を呈し、規模は7.3m×5.9m、深さは検出面から最深50cmを測る。炉の両脇に位置する柱穴が重複していることから、住居の重複や建て替えの可能性が考えられるが、その痕跡は見つけられなかった。

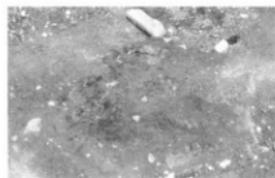
〈埋土〉5層に分けられる。埋土の中位には、炭化物集中層（3層）が認められる。

〈床面・壁〉Ⅳ層面床面とする。ほぼ平坦であるが、硬化面は認められない。壁はやや外へと広がりながら立ち上がる。

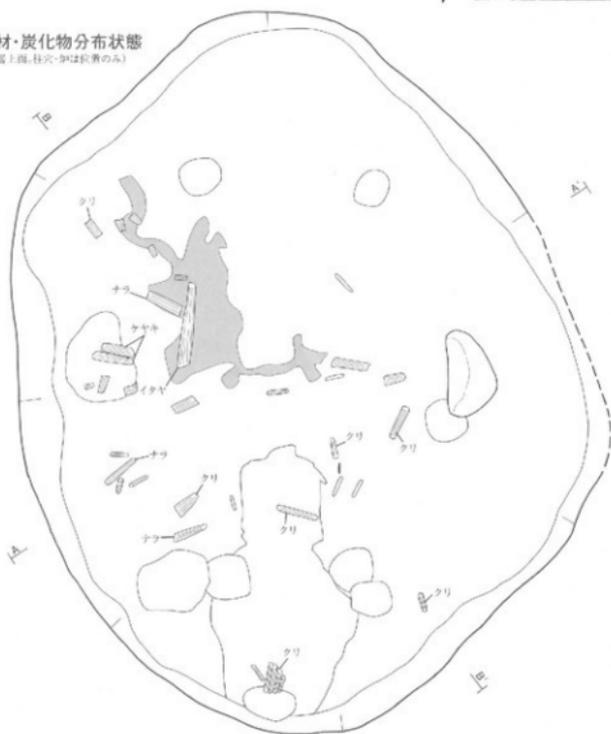
〈柱穴・壁溝〉8個確認した。炉の前庭部に隣接する柱穴（Pit 1と2、Pit 7と8）が重複する。炉の主軸線に対しPit 1とPit 2、Pit 7とPit 8、Pit 3とPit 6、Pit 4とPit 5が左右対称に位置する。したがってこれらを主柱穴とする6本柱である。柱穴の規模はPit 1、3が大きく径60cmで、他は



第100図 28号住居跡(1)



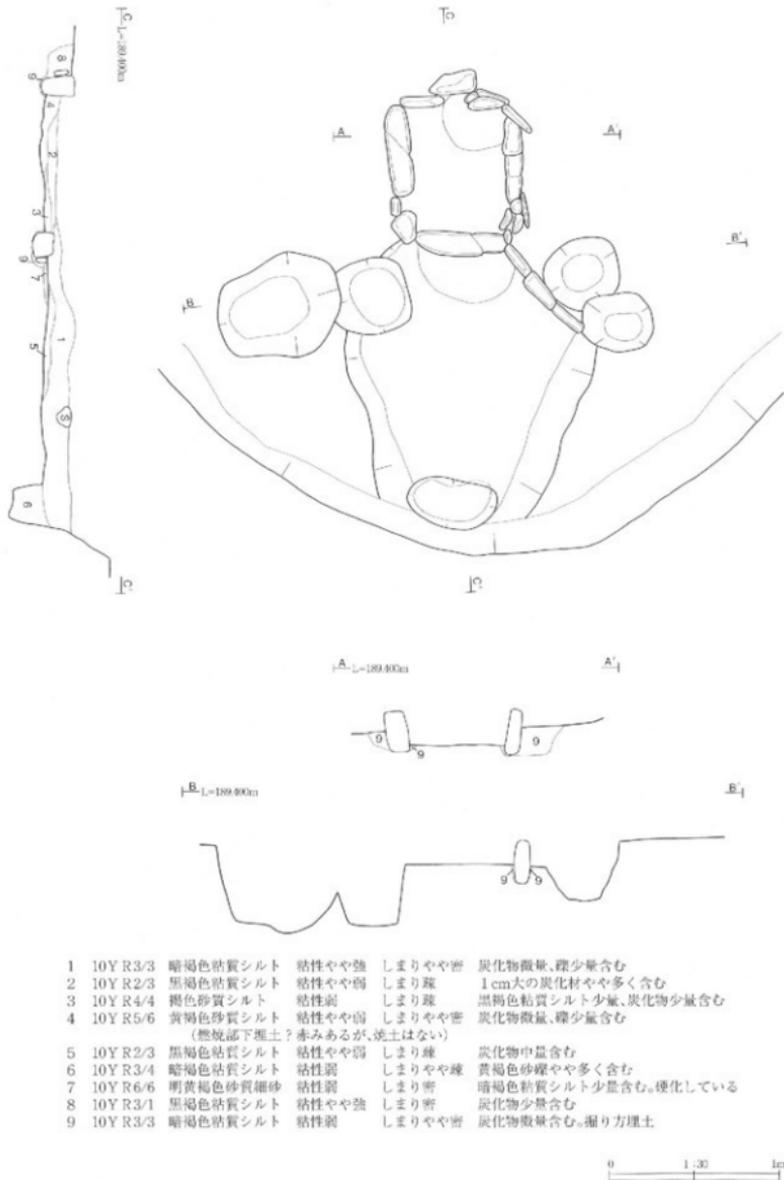
炭化材・炭化物分布状態
(期1.5層上面、柱穴・92位置のみ)



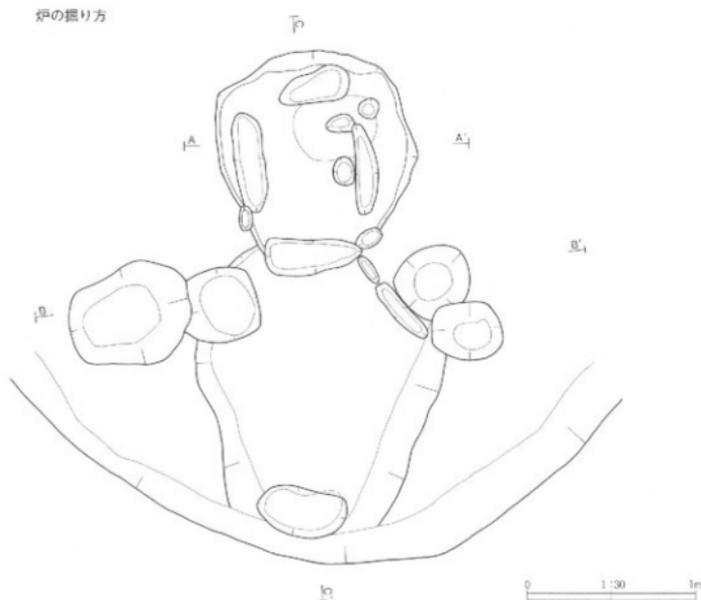
●…炭化物集中範囲

0 1.50 2m

第101図 28号住居跡(2)



第102図 28号住居跡 (3)



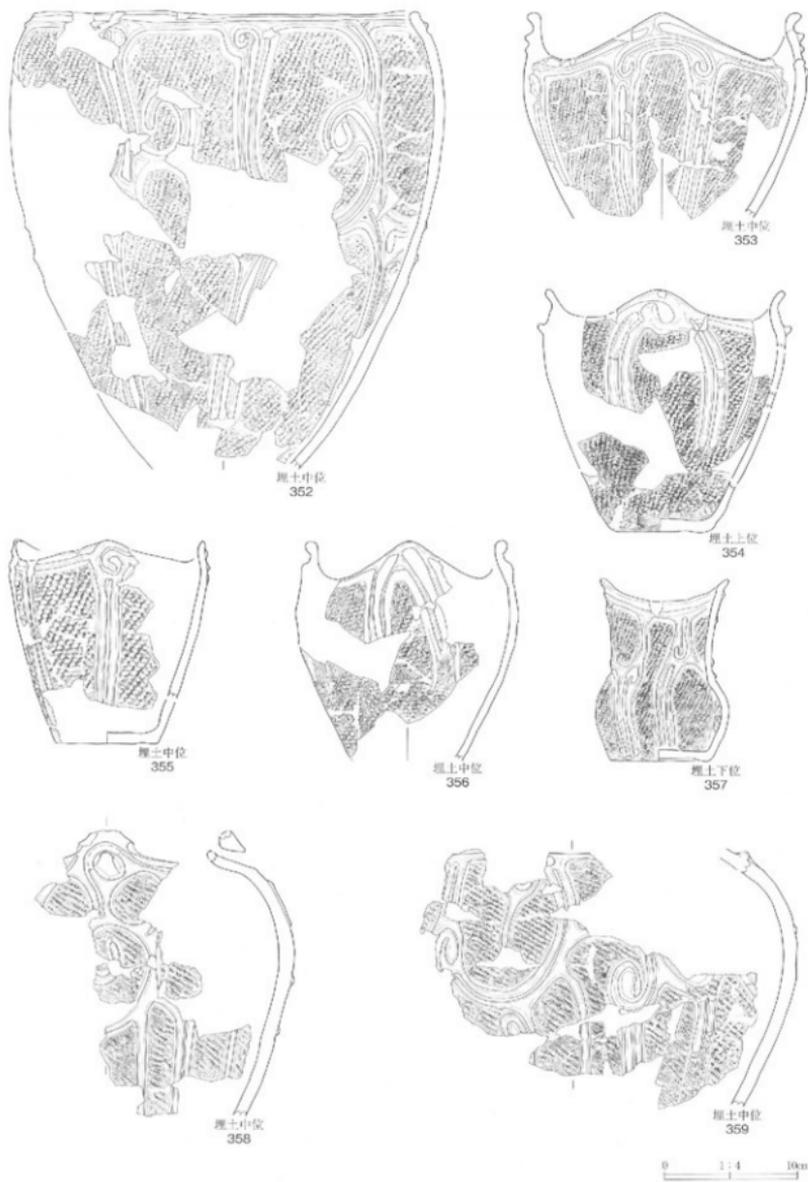
第103図 28号住居跡(4)

40cmを測る。埋土断面図は図示していないが、黒褐色粘質シルトを主体する単層で、柱痕跡は認められない。また、壁溝は認められない。

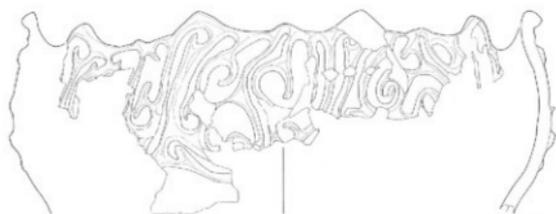
〈炉〉南東壁付近に位置する。石囲部+前庭部で構成される複式炉である。規模は2.8m×1.5mを測る。石囲部は方形を呈し、規模は一辺100×90cm、深さは床面から最深12cmを測る。石囲部内に焼土は堆積していないが、北西隅の地山土が焼成により赤色化している。炉石は大きく扁平な棒状の自然礫を利用している。掘り方は石囲部より20～30cm外側に広く掘り込まれ、炉石を設置してから暗褐色粘質シルトや小礫を埋めて補強している。前庭部は160×150cmを測る。深さは床面から最深14cmである。北側のみには礫が据えられている。南側には礫はなく、また抜き取り痕跡も認められないので、元々北側のみを設置されていたものと思われる。住居の壁との間に柱穴を1個確認した。この柱穴の深さは前庭部底面から約20cmである。また石囲部との境界付近で硬化面を確認した。

〈出土遺物〉縄文土器33248.6g、石器8点、土製品6点が出土した。出土状況を見ると、埋土上位～中位からの出土量が大部分を占め、器形復元が可能な土器が多い。一方床面上や炉内からの出土量は非常に少なく、土器は小片が目立つ。したがって遺物は住居跡廃絶時よりも、住居廃絶後の埋没段階に多く廃棄されたものであることが窺える。

352はⅢ群1類に相当する深鉢の大形破片で、口縁部が内湾する器形である。口縁部には隆帯が横位に巡り、胴部には口縁部の隆帯と連結する隆帯による方形区画文が施文される。353～356は4単位の波状口縁を呈する深鉢で、口縁部には横位に隆帯が付き、波頂部で縦位の隆帯で連結する。隆帯



第104図 28号住居跡出土遺物 (1)



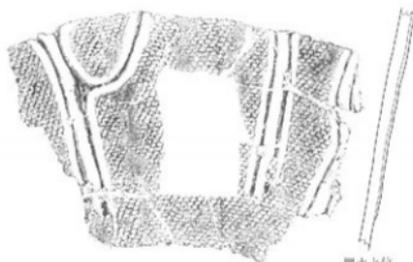
埋土上位
360



埋土上位
361



埋土中位
362



埋土上位
363



埋土上位
364



埋土中位
365



埋土上位
366



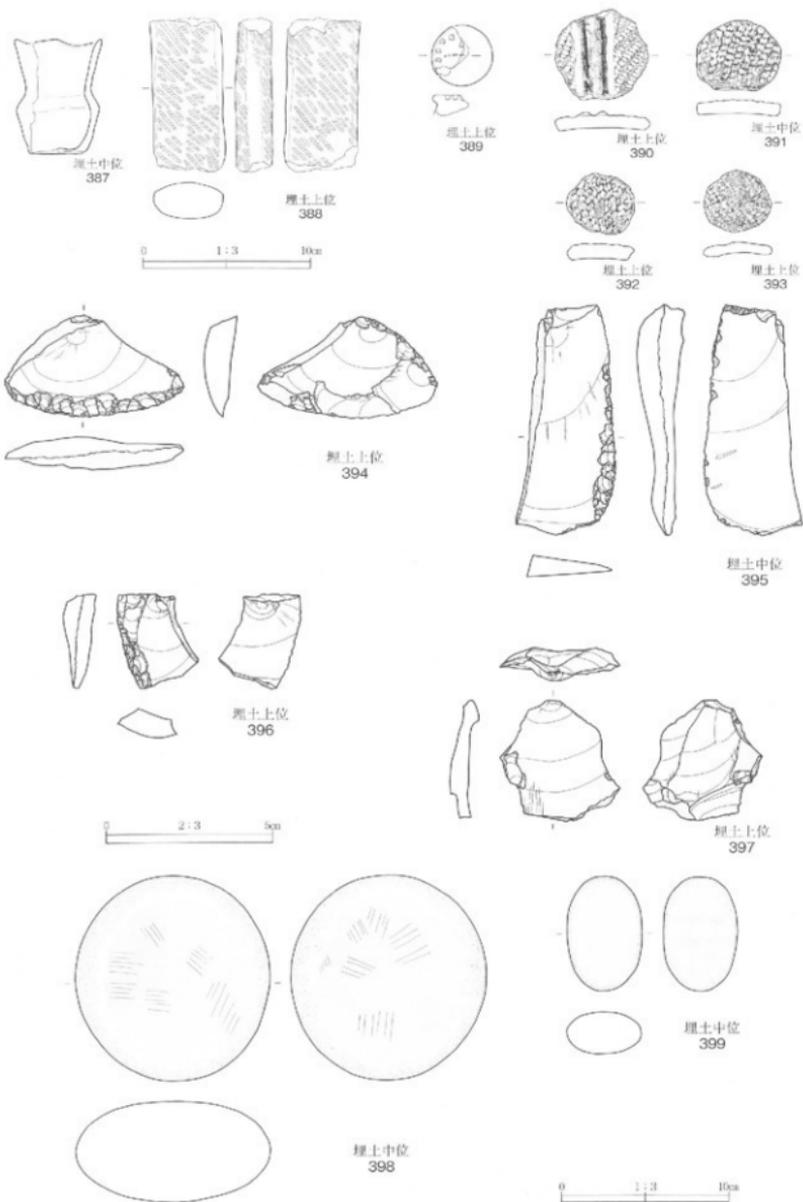
埋土上位
367

0 1:4 10cm

第105図 28号住居跡出土遺物(2)



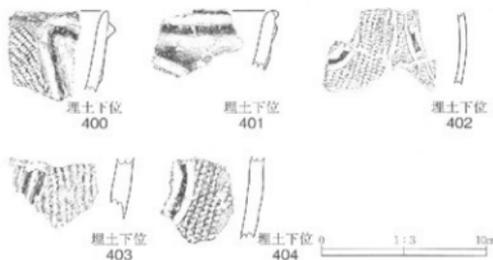
第106図 28号住居跡出土遺物(3)



第107図 28号住居跡出土遺物(4)



第108図 29号住居跡



第109図 29号住居跡出土遺物

は胴部へと垂下する。357は埋土下位からはほぼ正位の状態で出土している。ほぼ完形である。胴部下半が大きくふくれ、胴部上半は直立気味の深鉢で、2単位の波状口縁を呈する。横位の隆帯により区画された口縁部は無文となり、胴部は隆帯による楕円形や方形の区画文が縦位に垂下する。358・359は同一個体と考えられるが、接合せず、別々に図示した。口縁部が急激に内湾し、把手が付く。隆帯による楕円形や曲線的な区画文が描かれる。360は大形の深鉢の口縁部のみで、器形は所謂「キャリパー形」を呈する。口唇部に

は小突起が連続する。口縁部は隆帯による渦巻き文が縦位に連続するが、隆帯間には縄文が施文されない。361は口縁部に2段の隆帯が横位に回り、下段の隆帯上には刺突が連続する。364も同様の文様が施文される深鉢の底部で底面には庄痕文が見受けられる。365は深鉢胴部片で、胴部はややくびれ、そのくびれ部分に把手が付く。朱が塗られている。368～371はⅢ群6類に相当する深鉢である。368は口縁部が折り返し口縁となる。

372～386は破片資料である。主にⅢ群2類に含まれる(372～380・382)。375・376は胴部に把手が付く。把手の外表面には沈線で渦巻文が描かれている。377は375・376と同様の器形の胴部片で、外面の剥離が激しいが、朱が塗られている。382・383～385はⅢ群3類に相当する土器群で本住居跡からは少量であるが、埋土上位を中心に出土している。387はミニチュア上器とした。器面は無文である。

388～393は土製品である。388は斧状土製品で、両端を欠損している。幅の広い両面に縄文が施文される。389は土製の耳飾りであるが、全体の3分の1程度しか残存していない。扁平な面の縄文に

は刺突が巡り、中央に向かい細い刻みが列状に並ぶ。390～393は土製円板である。いずれも深鉢の胴部片を転用したものである。

石器はスクレイパー2点、Rフレイク1点、フレイク2点、磨石2点が出土した。スクレイパー2点、Rフレイク、フレイク各1点、磨石2点を図示した。394・395はスクレイパーで、どちらも1類に相当する。394は横型で正面下側の縁辺部に直接打撃による二次加工を施している。395は縦型で正面右側の縁辺部のみに二次加工が施されている。396はRフレイクで、縦に長いフレイクの縁辺の一部に二次加工が不連続に施されている。397はフレイクで3b類に比定される。398・399は磨石で扁平な両面に磨痕が認められた。

〈その他〉本住居跡は焼失住居であり、5層上面を中心に多量の炭化材、炭化物が堆積していた(第101図)。また炉直上から出土した炭化物について年代測定を行ったところ、4070±40yrBPの年代値を得た(第Ⅶ章参照)。

〈時期〉出土遺物から縄文時代中期後葉(大木9式古段階)に比定される。

29号住居跡(第108・109図、写真図版33・34・90)

〈位置〉調査区東側、3C20iグリッドに位置する。南側に28号住居跡と重複し、西側に39号土坑と重複する。

〈検出状況〉28号住居跡の北壁面でプランを認め、本遺構を確認した。調査当初、28号住居跡の拡張部分かと思ったが、検出できた部分の形状や位置から、別の住居跡と判断した。

〈重複関係〉28号住居跡、39号土坑と重複する。本遺構が最も古い。

〈形態・規模〉28号住居跡、39号土坑により削平され、北壁の一部しか検出できていない。したがって全容は不明である。深さは検出面から約20cmである。

〈埋土〉2層に分類できる。埋土上位は褐色粘質シルト、埋土下位は暗褐色粘質シルトを主体とする。

〈床面・壁〉Ⅶ層面を床面とする。ほぼ平坦であるが、礫が露出しており、やや凹凸がある。硬化面は認められない。壁は緩やかに外へと広がりながら立ち上がる。

〈柱穴・壁溝〉なし。

〈炉〉本遺構からは炉は検出していない。重複する29号住居跡により削平された可能性が高い。

〈出土遺物〉縄文土器448.0gが出土した。すべて埋土下位から出土している。いずれも小片である。

400は深鉢の口縁部片で、単節LRを地文とし、縦位に隆帯が付く。401は深鉢の口縁部片で横位に数段の隆帯が巡る。402～404は深鉢の胴部片でいずれも縄文を地文とし、隆帯が縦位に垂下する。

〈時期〉埋土下位から出土した石器から縄文時代中期後葉(大木9式古段階)に比定される。

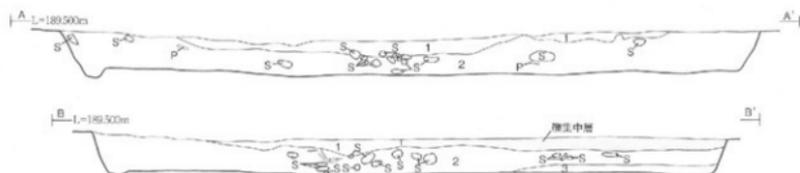
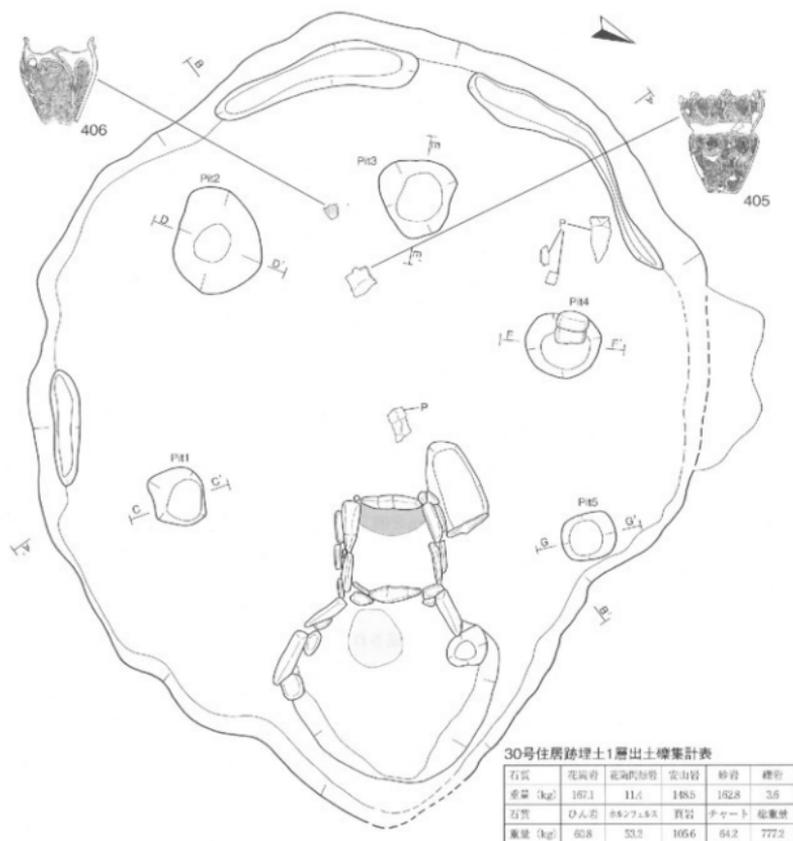
30号住居跡(第110～120図、写真図版35・36・90～96・113)

〈位置〉調査区東側、3C22iグリッドに位置する。本住居跡より北側に31～34号住居跡が重複し、南側には12号住居跡遺構が重複する。

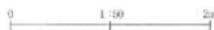
〈検出状況〉Ⅲ層上面で黒色土のプランを検出した。掘り下げたところ、炉を検出し、竪穴住居跡と判断した。なお検出面上には多量の礫が露出しており、多量の礫はサイズや形態が一様ではなく、また断刺を入れて下部を調べたところ、住居の床面にはほとんど礫はなく、埋土上位にのみ集中していることがわかり、遺構に伴うものではなく、自然礫と判断した。

〈重複関係〉31～34号住居跡、12号住居跡遺構と重複している。本遺構が最も新しい。

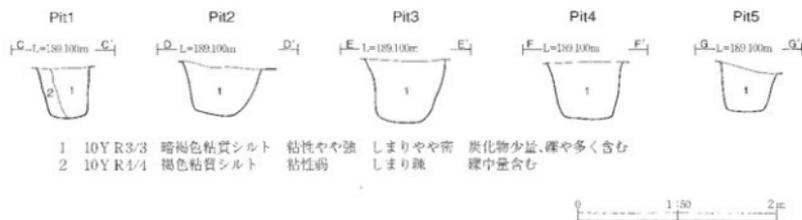
〈形態・規模〉北東側がやや突出する不整な楕円形を呈し、規模は8.5m×6.9mを測る。深さは床面



- 10Y R3/2 黒褐色粘質シルト 粘性やや弱 しまりやや密 炭化物微量、礫少量、土器片少量含む
- 10Y R3/4 暗褐色粘質シルト 粘性やや弱 しまりやや密 炭化物微量、礫多量、土器片やや多く含む
- 10Y R3/3 暗褐色粘質シルト 粘性やや弱 しまり密 炭化物多量、砂質シルト下部に偏在



第110図 30号住居跡(1)



第111図 30号住居跡(2)

から最深40cmである。

〈埋土〉2層に分けられる。1層中には、礫が多量に含まれる(礫集中層)。

〈床面・壁〉Ⅱ層面を床面とする。ほぼ平坦であるが、砂礫が露出している。

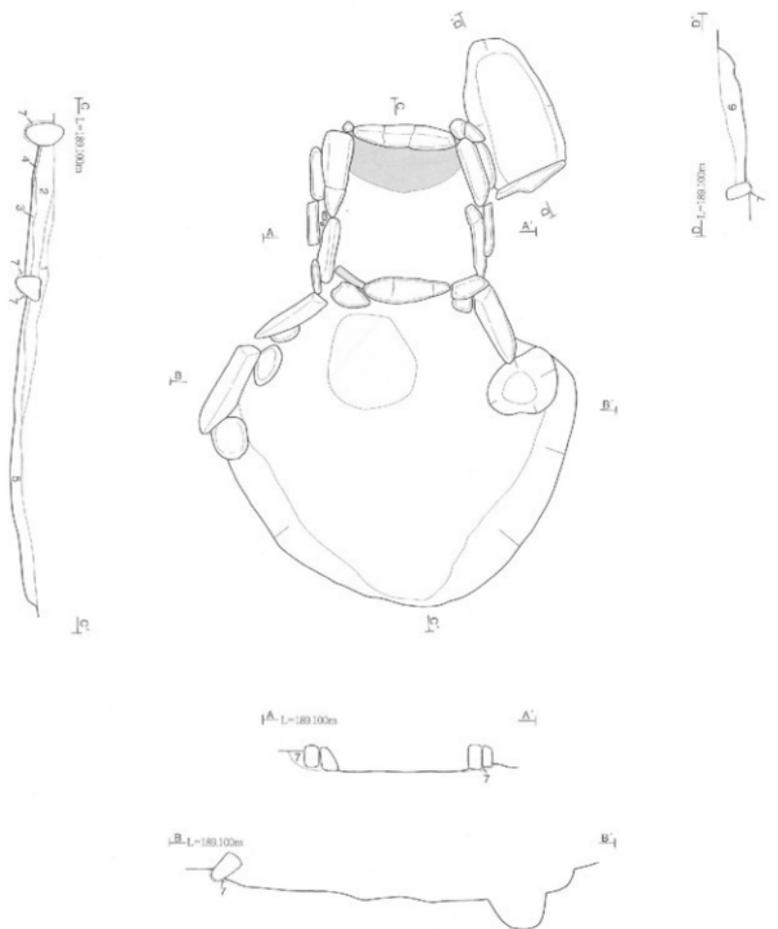
壁はほぼ全周を確認しており、やや外へと広がりながら立ち上がる。

〈柱穴・壁溝〉5個確認した。炉主軸線上にPit 3が位置し、それに対し、Pit 1とPit 5、Pit 2とPit 4が左右対称に位置する。したがってこれらが主柱穴となる5本柱である。また炉の前庭部から検出した柱穴(1個は掘り方内から)も炉を挟んで左右対称であり、主柱穴であった可能性がある。柱穴の大きさは径60～90cm、深さは床面から60cmを測り、埋土は暗褐色粘質シルトを主体とし、柱痕跡は認められない。柱の埋土中には礫の投げ込みも確認できたので、柱は廃絶時に抜かれた可能性がある。またPit 4は柱穴の西壁際に大形の礫が立ちかけられ、根固め石としている。壁溝は認められるが、全周しない。

〈炉〉北東壁付近に位置する。石囲部+前庭部で構成される複式炉である。規模は3.0m×2.3mを測る。石囲部は略正方形を呈し、規模は一辺110cm、深さは床面から10cmを測る。石囲部内は特に西側にのみ燃焼部が認められ、1～2cmほどの焼土が堆積している。炉石は偏平で棒状の自然礫が利用され、どれも大きい。炉石は掘り方に据えられただけのものや、差し込んで設置されたものもある。前庭部は、180×220cmの不整な楕円形を呈し、主軸に対しやや幅広である。深さは床面から8cmを測る。石囲部側には「ハ」字状に石が据えられる。また石囲部との境界付近で硬化面を確認した。

〈出土遺物〉縄文土器65982.3g、石器3点、土製品19点が出土した。出土状況を見ると、埋土上位～埋土中位の出土量が大部分を占め、特に埋土中位からの出土量が多い。器形が復元できた土器も多くは埋土中位から出土している。一方、床面上から出土するものは少ない。わずかに405・406がみつまっている程度である。405は床面上に比較的バラバラの破片で出土した。406は底部を欠損している他は壊れてない状態で、横倒しで出土している。石器は少ないものの、壁溝内からフレイク2点が出土している。したがって遺物群の多くは住居廃絶後の埋没段階に廃棄されたものと考えられる。

405はⅢ群2類に相当する深鉢で、所謂「キャリバー形」で、口唇部は隆帯の渦巻き文が連続し、波状を呈する。頸部は上下端に横位の隆帯が巡り、その内側は無文となり、口縁部と胴部には隆帯による区画文と渦巻文が施文される。底面はやや上げ底になっており、側縁にのみ圧痕が残る。406は底部を欠損する他はほぼ完形の深鉢である。口唇部は2単位の大突起が付き、その間に曲線をモチーフにした小突起が付く。胴部には沈線による「U」字形区画文が施文される。409は深鉢の口縁部片がすまる器形で、口縁部に隆帯が横位に巡り、その下には隆帯による区画文と渦巻文が施文される。410は口縁部には横位の隆帯が2段に巡る。また胴部に垂下する隆帯には渦巻文が付く。Ⅲ群



- | | | | | | |
|---|----------|----------|-------|--------|----------------------|
| 1 | 10Y R3/3 | 暗褐色粘質シルト | 粘性やや強 | しまりやや密 | 炭化物微量、礫少量含む |
| 2 | 10Y R4/4 | 褐色粘質シルト | 粘性弱 | しまり密 | 炭化物少量、礫中量含む |
| 3 | 10Y R3/2 | 黒褐色粘質シルト | 粘性弱 | しまり密 | 炭化物中量、礫少量含む |
| 4 | 5 Y R3/4 | 暗赤褐色焼土 | 粘性やや強 | しまりやや密 | 炭化物多量含む |
| 5 | 10Y R3/2 | 黒褐色粘質シルト | 粘性やや強 | しまり密 | 炭化物微量、黄褐色細砂少量含む |
| 6 | 10Y R3/2 | 黒褐色粘質シルト | 粘性やや強 | しまり密 | 1cm大の炭化材少量、黄褐色細砂中量含む |
| 7 | 10Y R3/3 | 暗褐色粘質シルト | 粘性やや強 | しまり密 | 掘り方廻土 |

0 1:30 1m

第112図 30号住居跡(3)



第113図 30号住居跡(4)

1類とした。415は深鉢で、口縁から胴部にかけての大形破片で、胴部上半で大きく膨らむ器形で、口縁部には隆帯が2段に巡る。胴部には沈線による楕円形、「 \cap 」字形区画文が施文される。420は深鉢の胴部片で口縁部に鈎状の隆帯が横位に付く。胴部には曲線的なモチーフの区画文が施文されている。Ⅲ群5類に相当する。421～424はⅢ群3類に相当するが、埋土上位に集中して出土する。

425～474は破片資料である。425～439、447～458はⅢ群2類に相当する土器群である。441～447・461～466・472はⅢ群3類に相当する土器群である。472は壺の頸部片で鈎状の隆帯が横位に巡り、その下に沈線による区画文が施文される。471・473はどの土器群に類するか定かではないが、深鉢の胴部片で、大形の橋状把手が付く。467～469はⅣ群に比定される土器群であり、主に埋土上位から混入した。475～481はⅢ群6類に相当する深鉢である。481は深鉢の底部片で、底面には匠痕が認められる。481～487はミニチュア土器である。481は全体的に内湾し、ボール状の器形で、縄文のみ施文される。483～486は器形が不明であるが縄文を地文とし、沈線による区画文が施文される。

土製品は19点全て土製円板である。本住居跡は今回検出した住居群の中で、土製円板の出土量が非常に多い。隆帯や沈線が付くものはⅢ群2、3類に相当する深鉢の胴部片を転用したものと思われる。

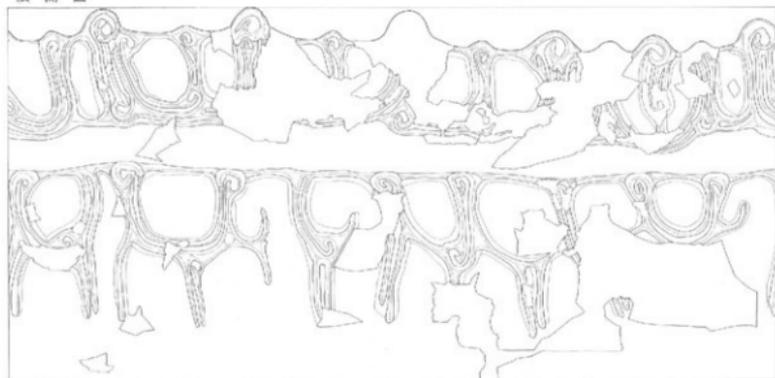
石器は壁溝の埋土中からスクレイパー2点(507・508)が出土した。507は剥片の背面縁辺部に二次加工を施し、刃部を作出している。刃部の角度はやや鈍く、2類とした。508は縦長のフレイクを



床面上
405

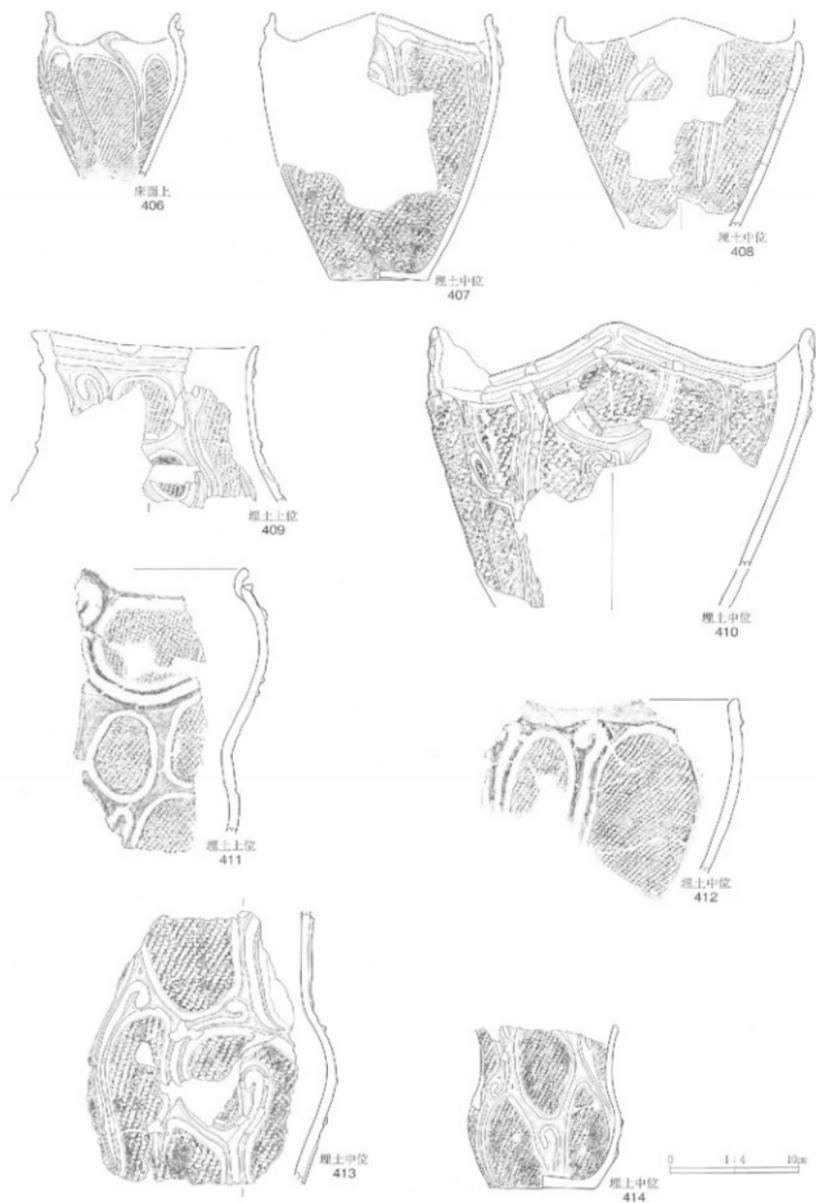
0 1:4 10cm

展開図

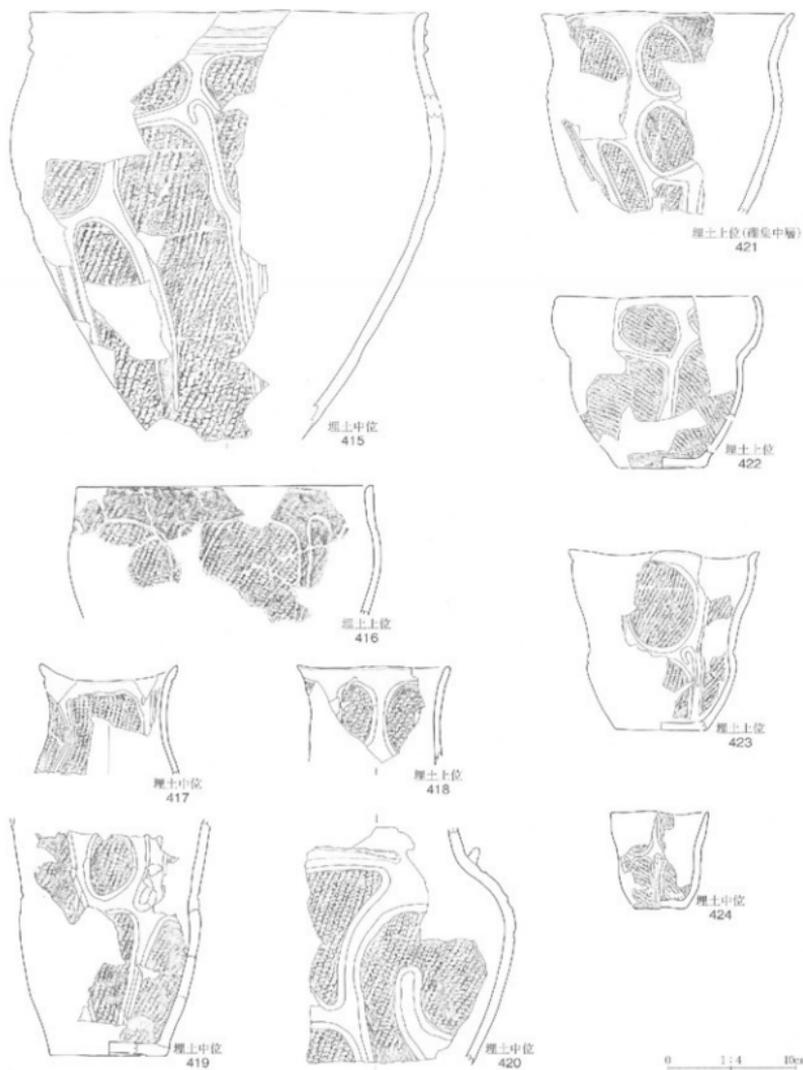


0 1:6 20cm

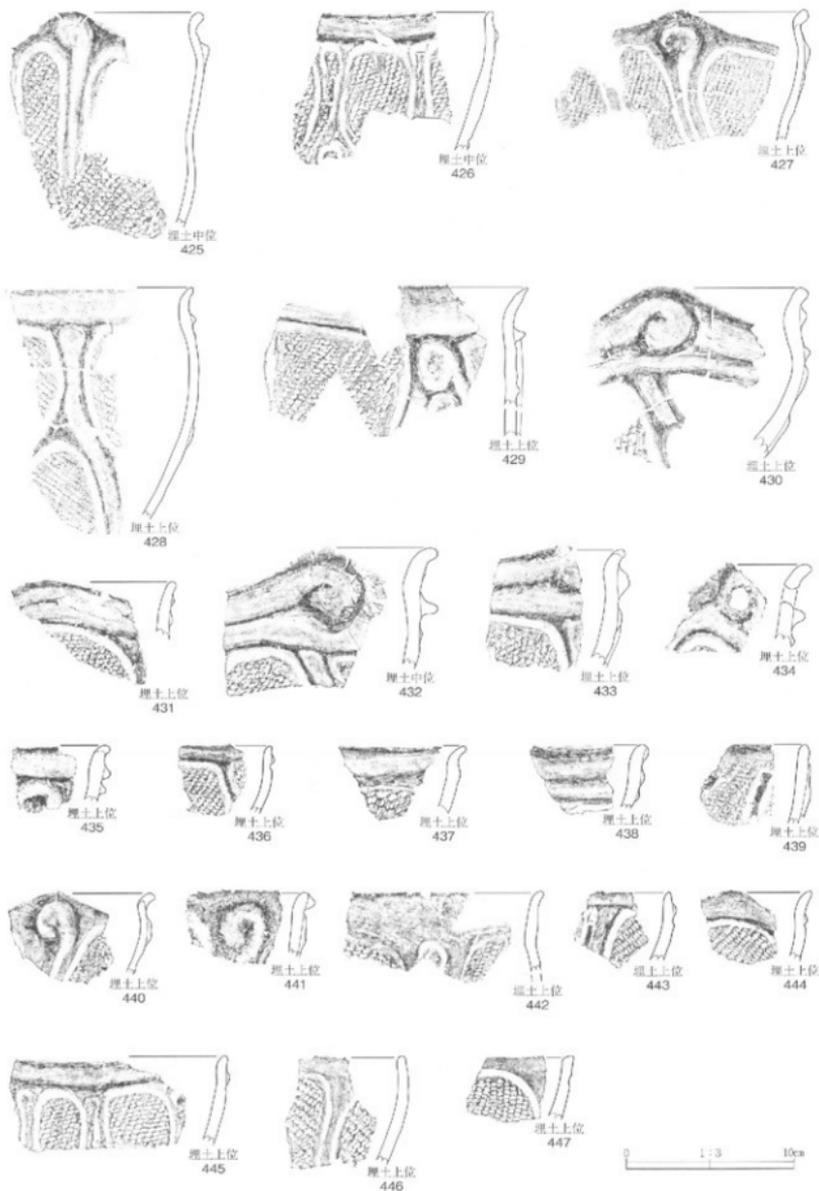
第114図 30号住居跡出土遺物(1)



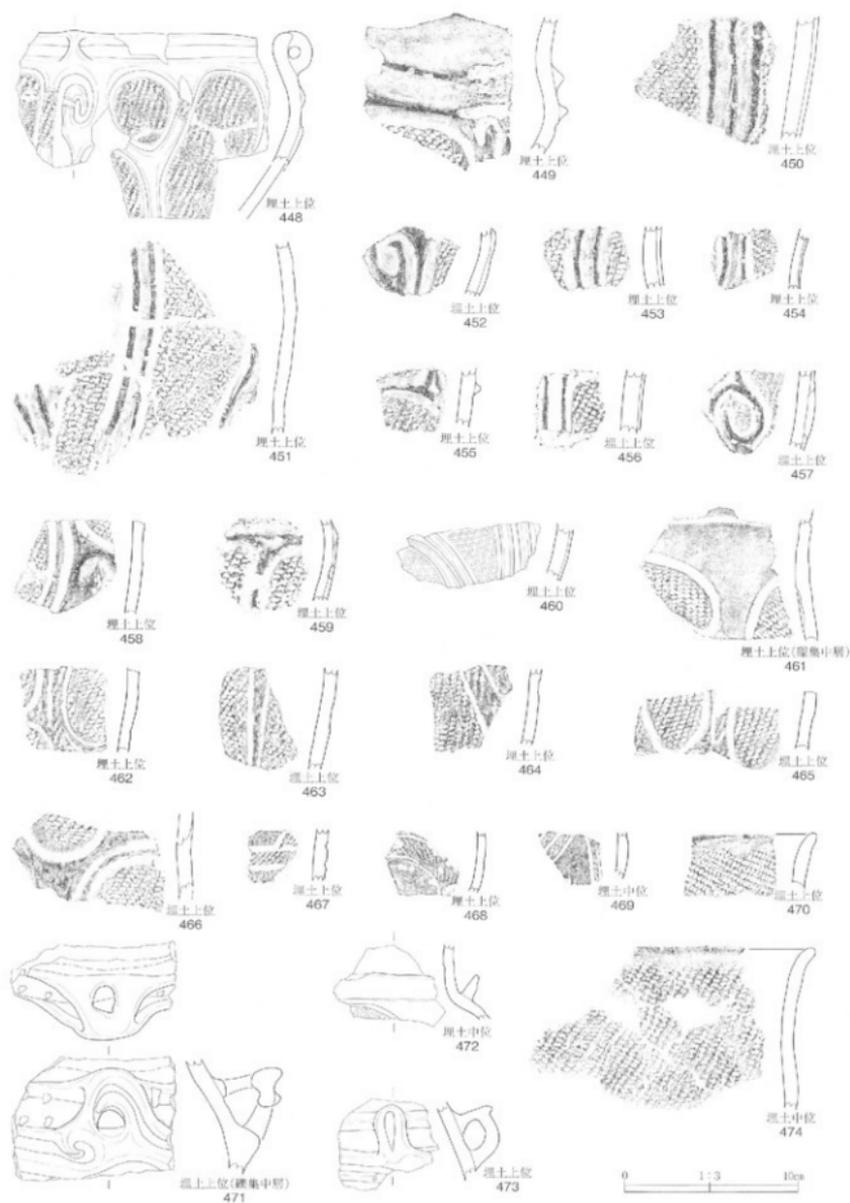
第115図 30号住居跡出土遺物(2)



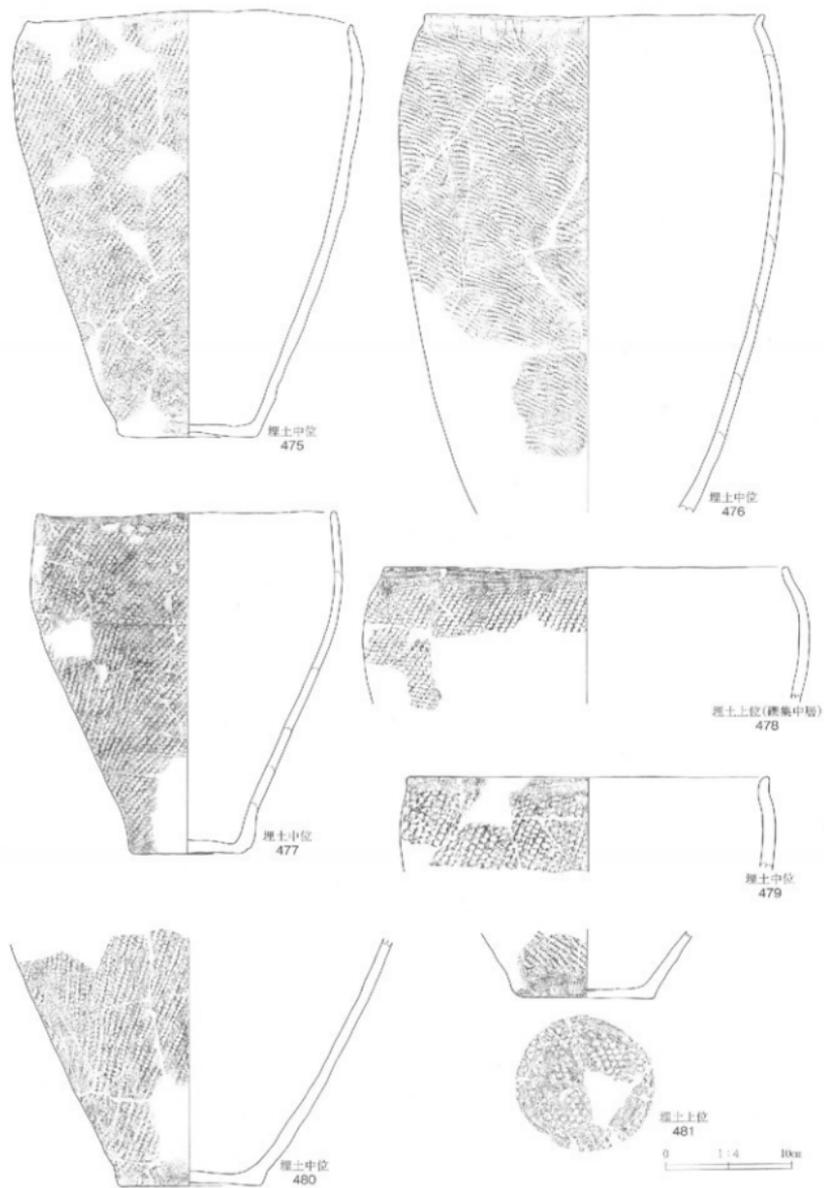
第116図 30号住居跡出土遺物(3)



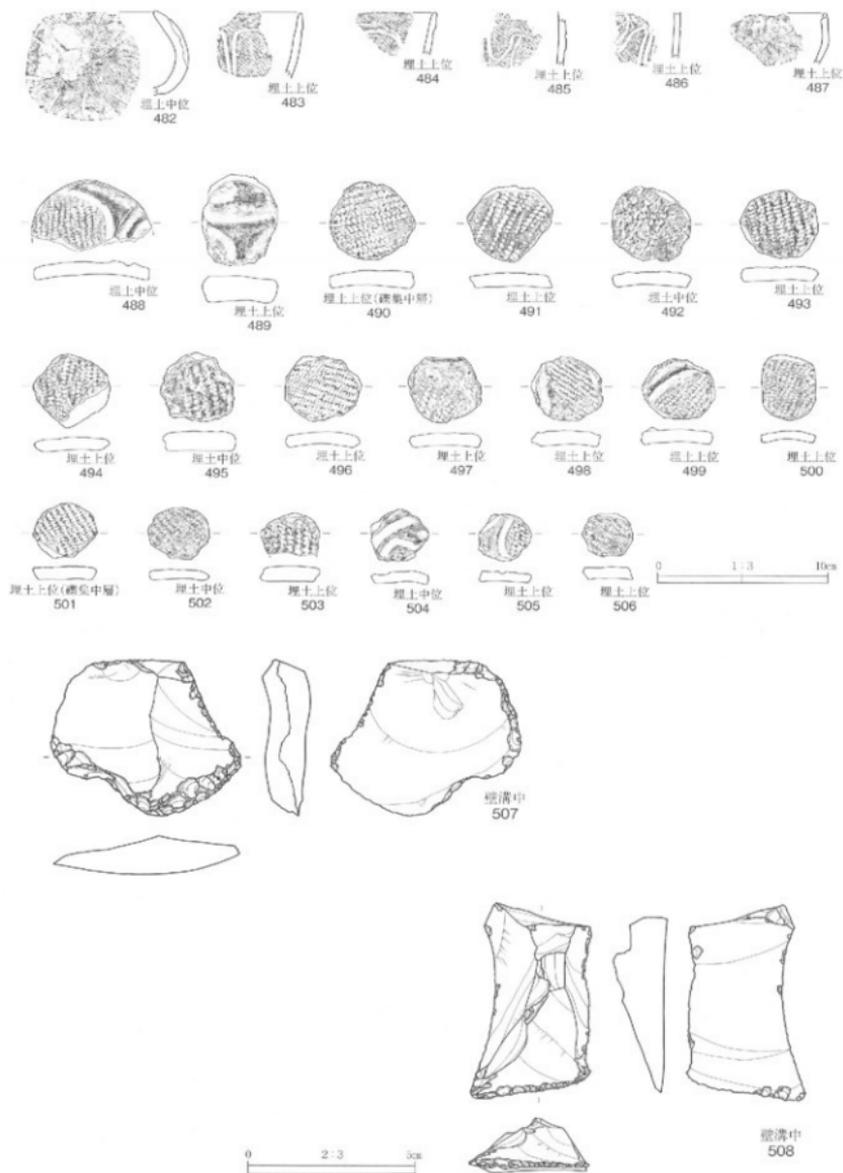
第117図 30号住居跡出土遺物(4)



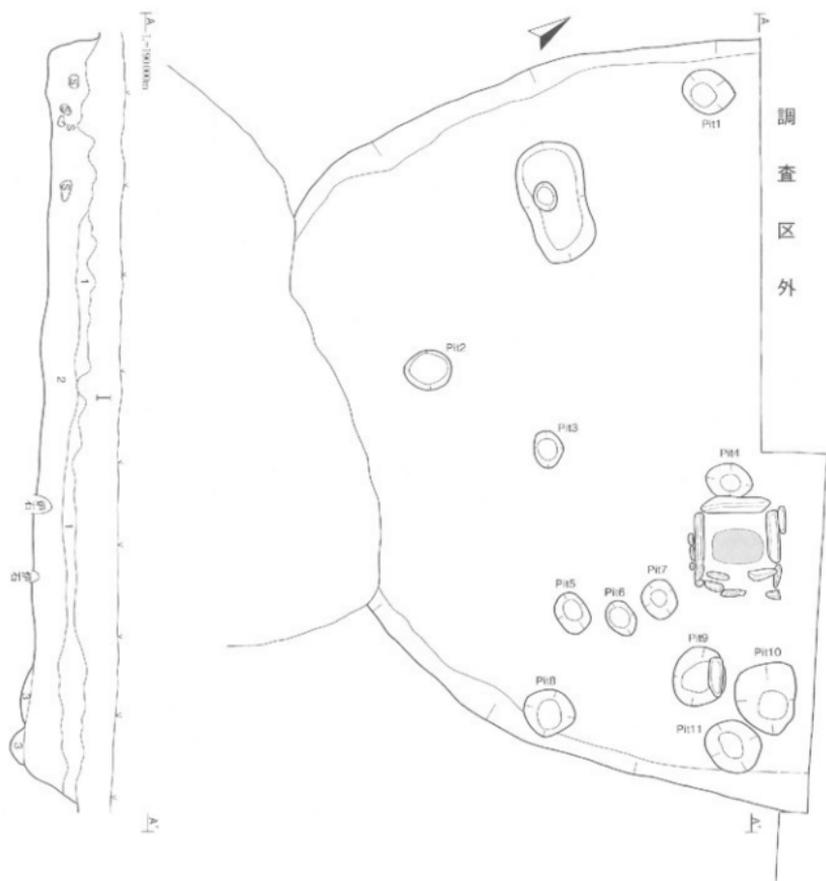
第118図 30号住居跡出土遺物(5)



第119図 30号住居跡出土遺物(6)



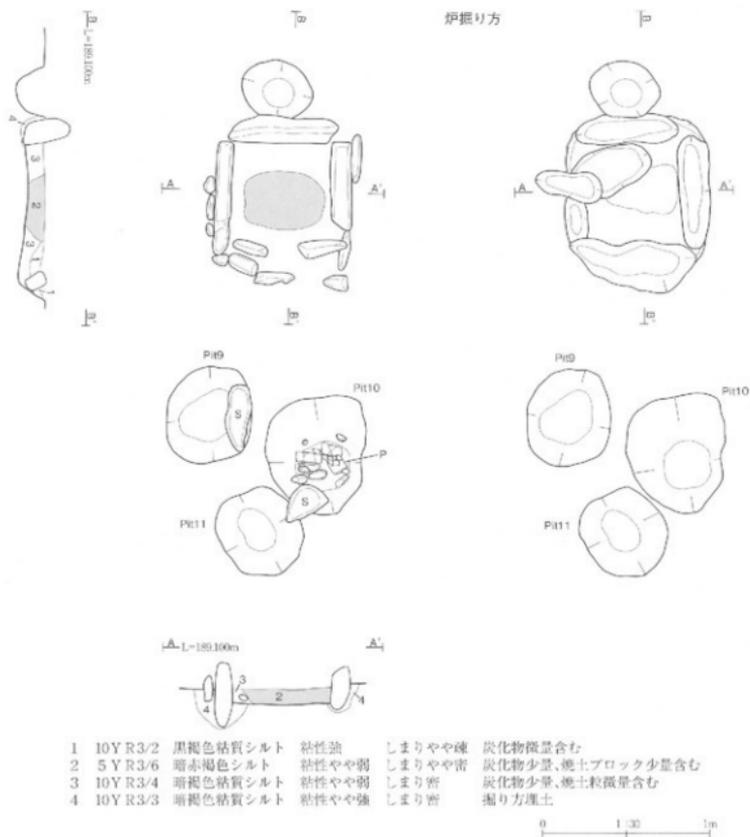
第120図 30号住居跡出土遺物(7)



- | | | | | | |
|---|----------|----------|-------|--------|-------------|
| 1 | 10Y R3/2 | 黒褐色粘質シルト | 粘性強 | しまりやや密 | 1層土少量、礫中量含む |
| 2 | 10Y R3/4 | 暗褐色粘質シルト | 粘性やや強 | しまり密 | 炭化物少量、礫少量含む |
| 3 | 10Y R3/1 | 黒褐色粘質シルト | 粘性弱 | しまりやや密 | 礫少量含む |

0 1:50 2m

第121図 31号住居跡(1)



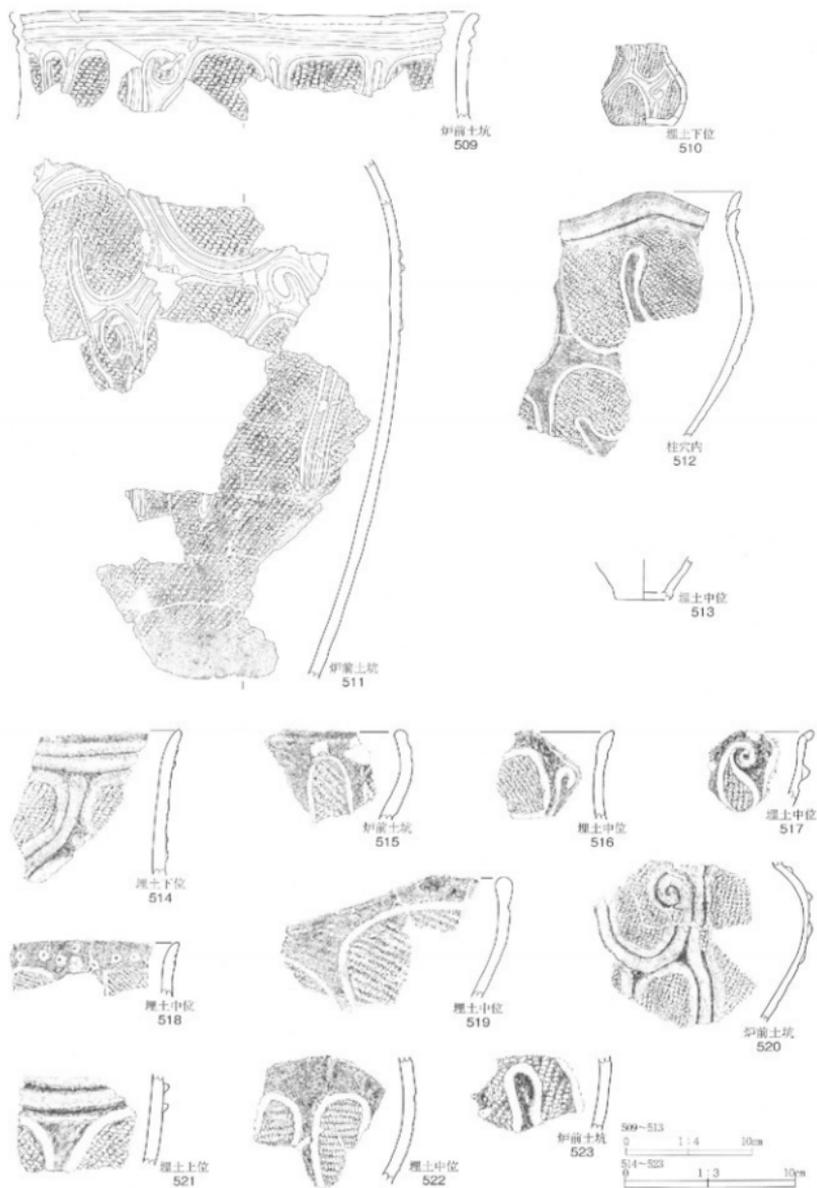
第122図 31号住居跡(2)

素材とし、短辺の片面のみに二次加工を施し、刃部を作出している。

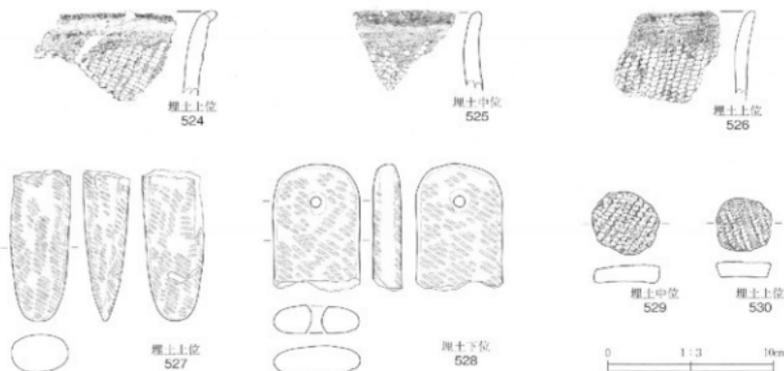
また前述の通り、本住居跡の埋土1層中には多量の礫が混入していた。礫は取り上げたものだけでも総重量777.2kgを測る。石質を鑑定したところ、第110図右下に示した9種の石質があることが分かった。いずれも北上山地系の石質で、基本層序Ⅵ層以下にも含まれる礫群であると思われる。(時期)埋土から出土した土器群から縄文時代中期後葉(大木9式古段階)に比定される。

31号住居跡(第121～124図、写真図版37・97・98・113)

〈位置〉調査区東側、3C20kグリッドに位置する。密集する28～35号住居跡までの住居群のほぼ中央に位置し、南側には30号、32～34号住居跡が重複する。



第123図 31号住居跡出土遺物(1)



第124図 31号住居跡出土遺物(2)

〈検出状況〉調査区域に土層を確認するためトレンチを入れたところ、炉を検出したので、再度調査区壁の土層を観察し、竪穴住居跡を確認した。

〈重複関係〉30号・32号・34号住居跡と重複する。30号住居跡の1層中にみられた礫群が本遺構の埋土中にも混入することから、本遺構の方が古いと判断した。また32号住居跡は土層断面の観察から本遺構の方が新しいと判断した。〈形態・規模〉本遺構は北側半分が調査区外に及び、また南側の一部は30号住居跡に壊されている。したがって全容については不明であるが、残存する部分から円形を呈するものと思われる。径7.7mを測る。深さは検出面から50cmを測る。

〈埋土〉2層に分けられ、暗褐色粘質シルトを主体とする。

〈床面・壁〉VI層面を床面とする。ほぼ平坦であるが、硬化面は認められない。

壁は西壁と南東壁を検出したにすぎない。やや外へと広がりがながら立ち上がる。

〈柱穴・壁溝〉本遺構はほぼ半分が調査区外に及んでおり、したがって実際の柱穴数は定かではない。床面上から8個(Pit 1～8)、また炉の前庭部に3個(Pit 9～11)確認した。また壁溝は認められなかった。

〈炉〉南東壁付近に位置する。方形の石囲部とその南東側に柱穴3個が見受けられる。前庭部が認められないが、石囲部の形状は31号住居跡のものと類似しており、複式炉の一種と考えられる。柱穴は3個密集しており、前庭部の役割をなすとも考えられる。石囲部は110×80cmの方形を呈する。炉石は、扁平な自然礫を利用し、幅平な面を縦にして深く地面に差し込んで設置されている。石囲部内にほぼ中央に焼土が約10cm堆積している。前庭部がある部分は床面とほぼ同じ高さで、柱穴が3個密集するのみである。柱穴の埋土上位から土器片が多量に出土している。柱穴の埋土は黒褐色粘質シルトを主体とする単層で、深さは約15cmを測る。

〈出土遺物〉縄文土器9495.0g、石器1点、土製品4点が出土した。出土状況を見ると埋土上位～中位の出土量が大部分を占め、特に埋土中位は多い。一方、床面出土は炉の南東側の柱穴の上からが多

い。ただし、破片であり、接合しても完形にはならない。遺物は住居廃絶時、あるいは埋没段階で廃棄された遺物であるものと捉えられる。

509は口縁部のみが復元できた深鉢で口縁部には三段の隆帯が横位に巡り、隆帯による区画文が施文される。510は胴部下半が下膨れ状に膨らむ小形の深鉢で、口縁部を欠損する。複節R L Rを地文とし、隆帯による楕円形区画文が縦位に並ぶ。511は深鉢胴部の大形破片で、隆帯による区画や渦巻き文が描かれている。512はPit10の埋土中から出土した深鉢の破片で、口縁部は無文で胴部とは微隆帯で区画されている。胴部は単節L Rを地文とし、沈線による曲線的なモチーフの区画文が施文される。

514～526は破片資料である。Ⅲ群1類に相当する土器(514・520)、Ⅲ群2類に相当する土器(521)とⅢ群3類に相当する土器(515～519・521～523)、またⅢ群6類に相当する土器(524～526)とが見受けられる。全体的にはⅢ群1類の土器群は埋土下位～床面上の出土が目立ち、Ⅲ群3類の土器群が埋土上位～中位から出土する傾向が認められる。

土製品は斧状土製品2点(527、528)と土製円板2点(529、530)である。527は2分の1ほど欠損している。端部が尖る形態である。器面全体に縄文が施文される。528は2分の1ほど欠損している。幅広い面の端部に穿孔が施される。両面に縄文が施文されるが、側面は無文のままである。

石器は石鏃1点(531)のみである。床面上から出土しており、住居跡廃絶時に廃棄された遺物と考えられる。完形である。

(時期) Pit10の埋土上位から出土した土器から縄文時代中期後葉(大木9式古段階)に比定される。

32号住居跡(第125～128図、写真図版38・98)

(位置) 調査区東側、3C20jグリッドに位置する。密集する28～35号住居跡のほぼ中央に位置し、周辺は北側を除き28・30・31・33号住居が重複する。

(検出状況) 28号住居跡と30号住居跡の新旧関係を確認するため、両住居跡をまたぐトレンチを入れたところ、両遺構に切られる本住居跡を確認した。そこで、検出面から暗褐色のプランを見つけたが、当初、北東から南西方向に長い住居跡を想定し、精査を進めたがベルト土層断面や出土した炉の位置から2棟の住居の重複と判断し、新旧関係での新しい住居跡の方を32号住居跡とした。

(重複関係) 28・30・31・33号住居跡と重複する。土層から本遺構は28・30・31号住居跡より古く、33号住居跡より新しいと判断した。

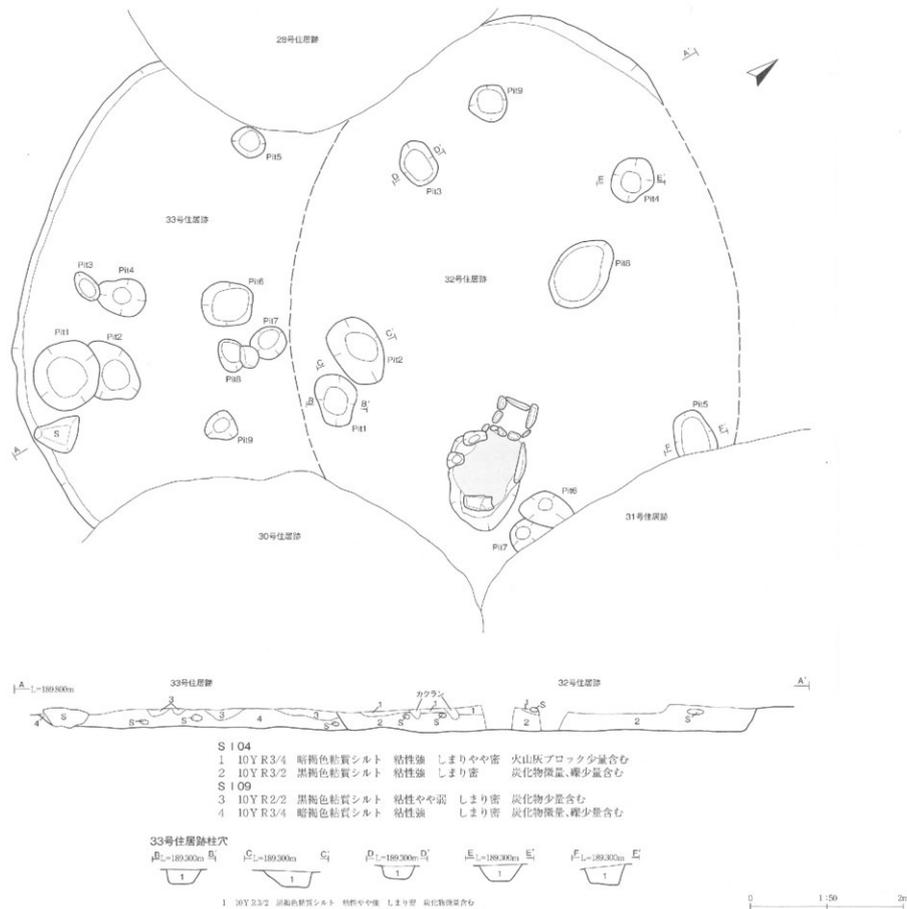
(形態・規模) 本住居跡は南側の一部が30・31号住居跡に壊されている。また北側は掘りすぎのため壁が消失してしまった。したがって全容については不明であるが、残存する部分から楕円形を呈するものと推定される。規模は16.2×推定4.7m、深さは検出面から最深22cmを測る。

(埋土) 2層に分けられる。ほぼ黒褐色粘質シルトを主体とし、炭化物や小礫が混入する。

(床面・壁) VI層面を床面とする。ほぼ平坦であるが、硬化面は認められない。また一部VII層に達しており、砂礫が露出している。壁は重複する遺構や掘りすぎのため北西部の一部しか検出できなかったが、ほぼ直立気味に立ち上がる。

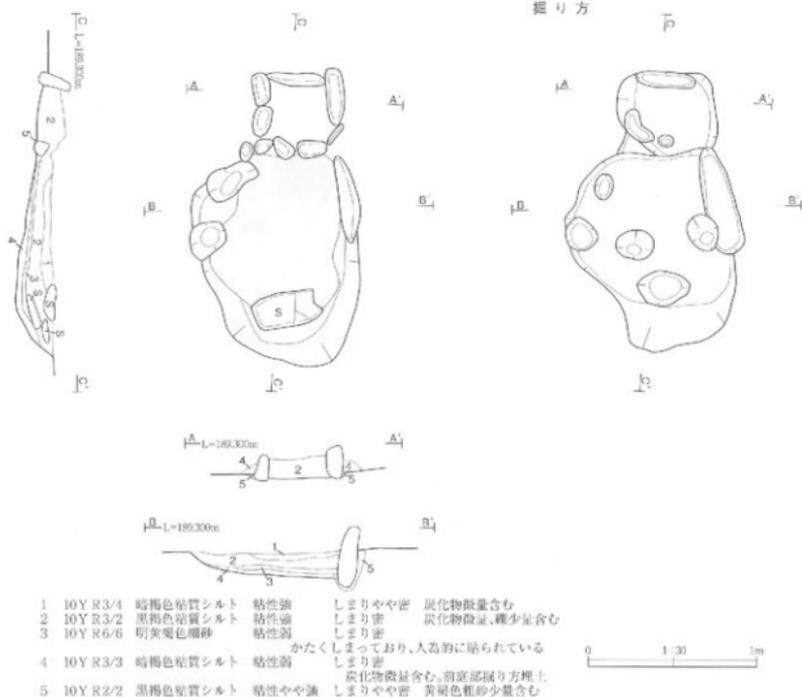
(柱穴・壁溝) 7個確認した。やや歪んでいるが、炉の主軸線上にPit 4が位置し、その線に対し、Pit 2とPit 6、Pit 3とPit 5が左右対称に位置する。したがってこれらを主柱とする5本柱の可能性が考えられる。壁溝は認められなかった。

(炉) 南東壁付近に位置する。石囲部+前庭部で構成される複式炉である。規模は長軸1.8m、短軸1.0mを測り、他の住居跡で見られる複式炉と比べ小さい。石囲部は略正方形を呈し、規模は一辺50cm、



第125図 32・33号住居跡 (1)

33号住居跡・炉

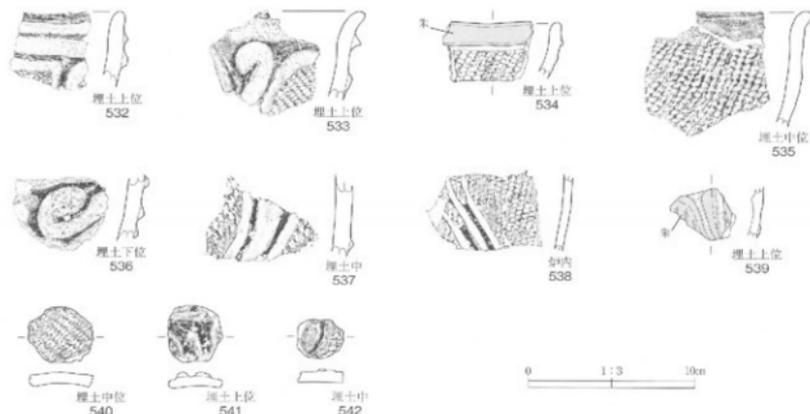


第126図 32・33号住居跡(2)

深さは床面から2cmを測る。石圍部内に焼土は堆積しておらず、焼けた形跡も認められなかった。炉石は扁平な自然礫を利用する。掘り方は浅く、炉石はほとんど地面に据え置く程度である。前庭部は楕円形を呈し、130×100cm。深さは床面から14cmを測る。東側のみに石1個が設置されていた。西側は小柱穴が認められるが、石の抜き取り痕跡とは考えられないので、元々設置されていなかったものと思われる。設置された礫は大きく、床面を深く掘り込んで差し込まれていた。また前庭部全体に明黄褐色細砂(複式炉埋土4層)が人為的に貼られ、踏み固められている。

〈出土遺物〉縄文土器3365.2g、石器2点、土製品3点が出土した。出土状況を見ると、埋土上位～中位の出土量が大部分を占める。一方、床面出土は炉内や炉付近からまとまって出土している。ただしいずれも小片のみである。遺物は住居廃絶後の埋没段階に廃棄されたものと捉えられる。

532は深鉢の口縁部片でⅢ群2類に相当する。533もⅢ群2類に含まれ、隆帯による楕円形区画文が施文される。隆帯上には幅広の沈線で渦巻き文が描かれている。534はⅢ群6類に相当する深鉢である。口縁部は無文であるが朱が塗られている。537・538は胴部片で複節RLRを地文とし、隆帯が貼られ



第127図 32号住居跡出土遺物



第128図 33号住居跡出土遺物

ている。一部隆帯が剥離し、地文が露出している。539は外面には朱が塗られている。隆帯が剥がれて地文が露出している部分には朱は塗られていない。

土製品は土製円板3点(540～542)である。541・542は隆帯が付くのでⅢ群1か2類の深鉢胴部片を転用したもの

と考えられる。

石器はフレイク2点出土しているが図示していない。

(時期) 埋土から出土した土器から縄文時代中期後葉(大木9式古段階)に比定される。

33号住居跡(第125～127図、写真図版39)

〈位置〉調査区東側、3C20 i グリッドに位置する。密集する28～35号住居跡のほぼ中央に位置し、北側には28号・30号・32号住居跡が重複する。また2m南西側には1号掘立柱建物跡が隣接する。

〈検出状況〉32号住居跡を精査する際、土層断面を観察し、2棟の住居跡が重複したものであることが分かった。古い方が本住居跡に相当する。

〈重複関係〉28・30・31号住居跡と重複する。本住居跡が最も古い。

〈形態・規模〉本遺構は28・30・31号住居跡により削平され、南東側の一部しか検出できていない。したがって全容が定かではないが、検出できた部分は5.0×2.9mで、楕円形を呈すると思われる。深さは検出面から10cmを測る。

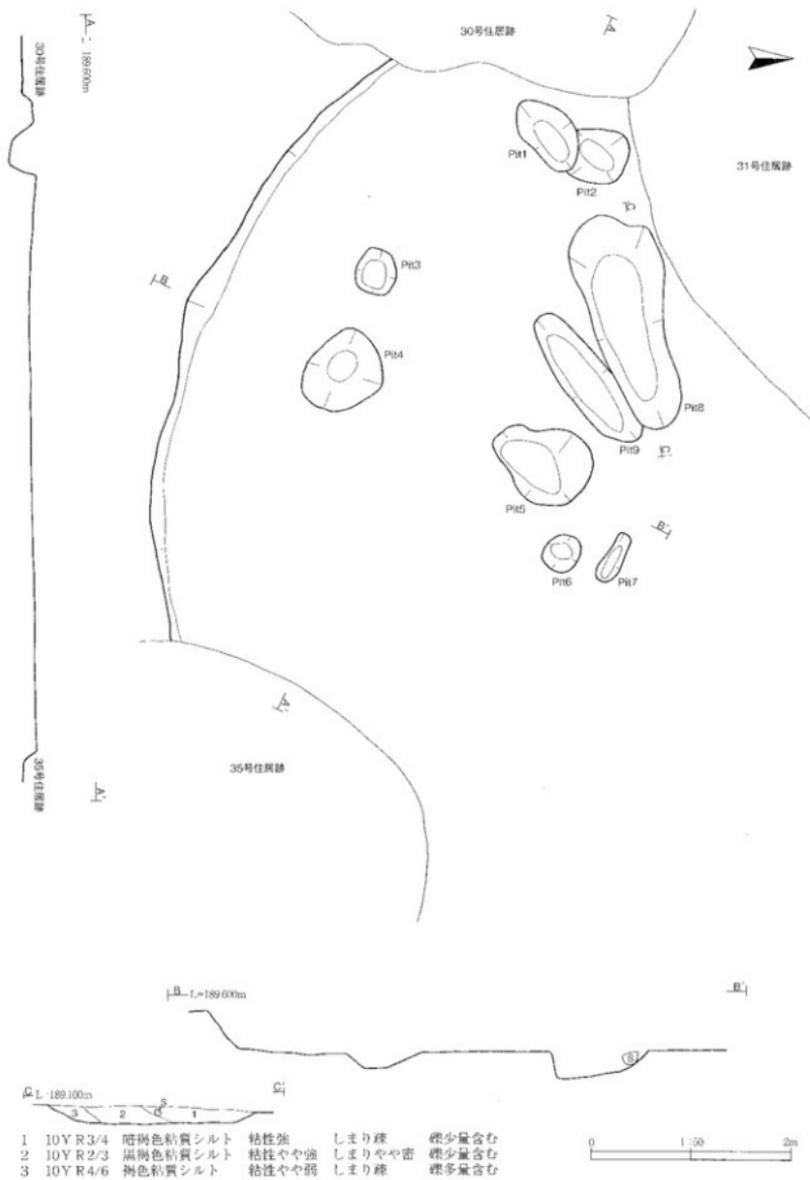
〈埋土〉2層に分けられる。暗褐色粘質シルトを主体とする。

〈床面・壁〉Ⅴ層面を床面と判断した。ほぼ平坦であるが、砂礫が露出しておりやや凹凸がある。壁は南東壁しか残存していない。緩やかに広がりながら立ち上がる。

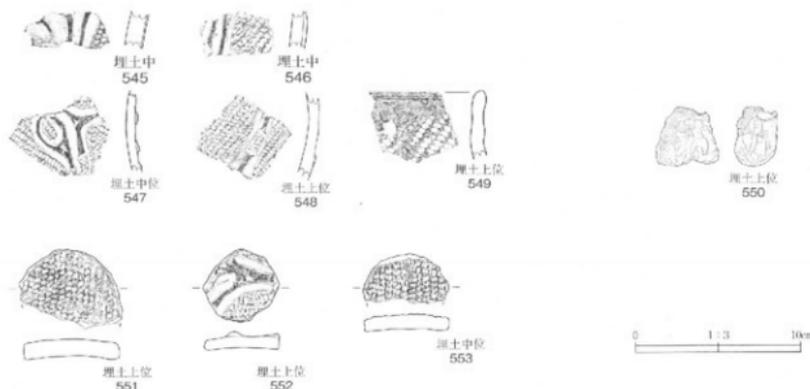
〈柱穴・壁溝〉9個確認した。柱穴の配列は推定できなかった。壁溝は認められない。

〈炉〉本遺構からは炉は検出していない。重複する33号住居跡により削平された可能性が高い。

〈出土遺物〉縄文土器59.1gが出土した。重複する33号住居跡に壊されていることもあり、出土量は



第129図 34号住居跡



第130図 34号住居跡出土遺物

非常に少ない。また遺物のほとんどを埋土中一括で取り上げている。

543・544は深鉢の胴部片で、544は単節LRを地文とし隆帯が付く。Ⅲ群1か2類に相当する。
 〈時期〉出土遺物から縄文時代中期後葉（大木9式古段階）に比定される。

34号住居跡（第129・130図、写真図版39・98）

〈位置〉調査区東側、3C21mグリッドに位置する。

〈検出状況〉31号住居跡の東壁面に、別の壁の立ち上りを検出し、本遺構を確認した。炬は見つからないが規模が他の堅穴住居跡と類似し、柱穴を検出したことから、堅穴住居跡と判断した。

〈重複関係〉30・31・35号住居跡と重複する。本住居跡が最も古い。

〈形態・規模〉本住居跡は30・31・35号住居跡により削平され、南東壁の一部しか検出できていない。したがって全容が定かではないが、残存する部分は3.8×3.3m、深さは検出面から50cmを測る。

〈埋土〉本遺構は精査の段階で、断面図を作成していないが、精査の際、観察した限りでは暗褐色粘質シルトを主体としていた。

〈床面・壁〉Ⅵ層を床面とする。ほぼ平坦であるが、礫が露出しており、凹凸がある。壁は緩やかに広がりがちで立ち上がる。

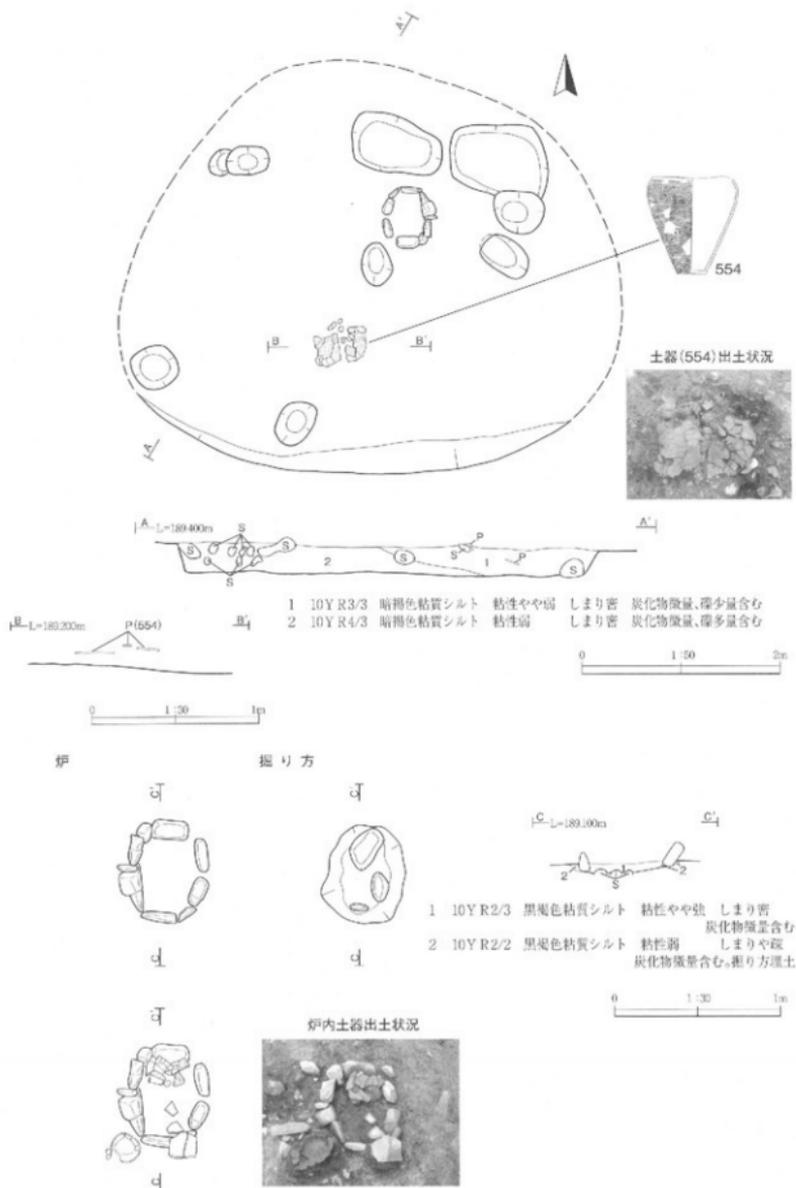
〈柱穴・壁溝〉7個確認した。柱穴の配列は推定できなかった。壁溝は認められない。

〈その他〉床面の北側に溝状の掘り込みが2個（Pit 8・9）認められた。主軸方向はほぼ同じで、北東～南西方向に長い。北側の方が大きく、230×90cmを測る。深さは床から18cmである。南側の方はやや小さく、また北側の掘り込みに一部壊されている。規模は158×47cmを測る。

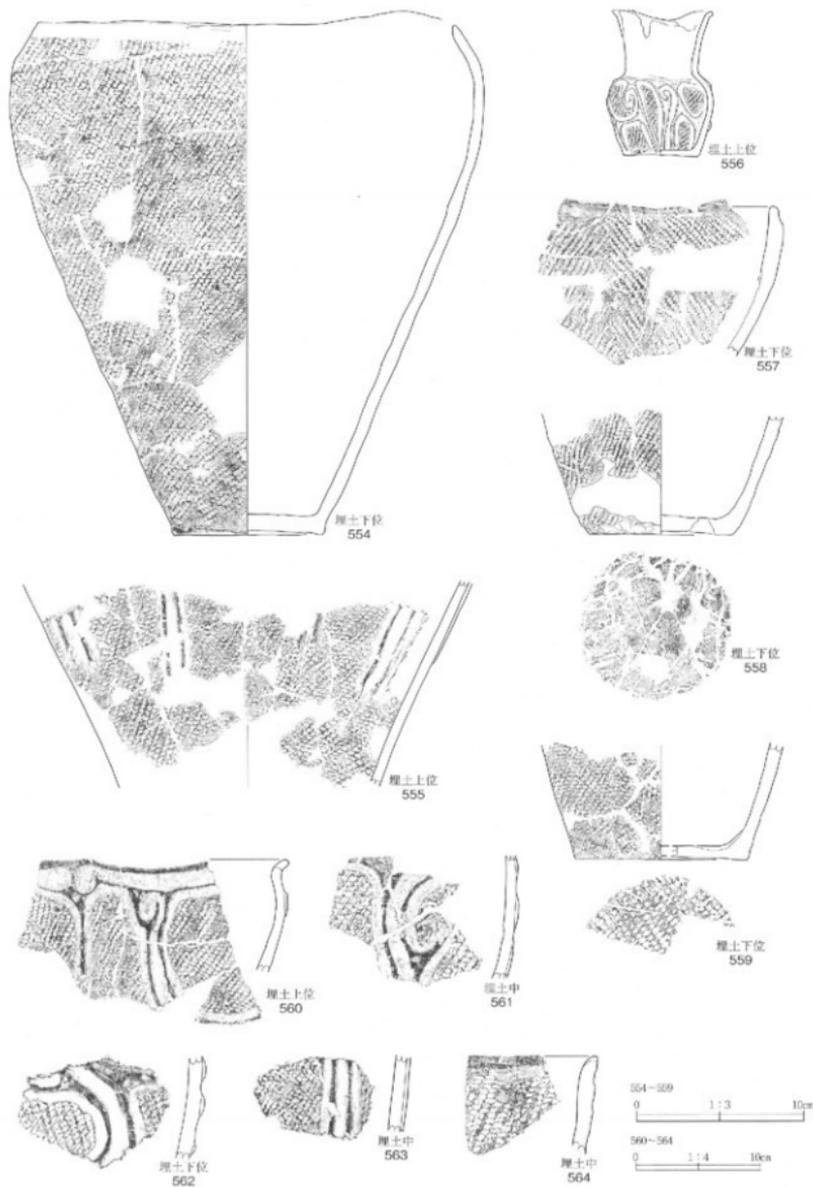
〈炬〉本遺構からは炬は検出していない。重複する住居群により削平された可能性が高い。

〈出土遺物〉縄文土器1085.8g、土製品4点が出土した。重複する住居跡に壊されていることもあり、出土量は少なく、いずれも小片である。出土状況を見ると埋土上位～中位の出土量が大部分を占め、住居絶後埋没段階に廃棄された遺物群であることが窺える。

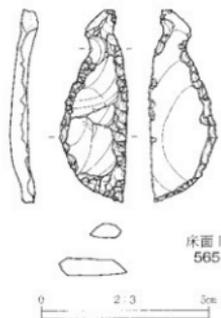
545～548は深鉢の胴部片である。いずれも縄文を地文とし、その上に隆帯が付く。547は隆帯によ



第131図 35号住居跡



第132図 35号住居跡出土遺物(1)



第133図 35号住居跡出土遺物(2)

り渦巻き文が付く。Ⅲ群1類に相当する。549は深鉢の口縁部片でⅢ群6類に相当する。

土製品は粘土塊1点(550)と土製円板3点(551～553)が出土した。粘土塊(550)は4cm大で、表面に棒状工具により刺突された痕跡がある。土製円板は552に隆帯が付いておりⅢ群1か2類の深鉢胴部片が転用されたものと考えられる。

〈時期〉出土遺物は少ないが、出土した土器から縄文時代中期後葉(大木9式新段階)に比定される。

35号住居跡(第131～133図、写真図版39・40・99・113)

〈位置〉調査区東側、3C23nグリッドに位置する。

〈検出状況〉黒褐色のプランで検出した。精査当初、東西に長い遺構と考え掘り下げたところ、検出段階で想定したプランの主軸方向

とは別の位置から炉が検出した。土層断面を観察し、2棟の住居跡の重複したものであると判断し、新しい方を本住居跡とし、古い方を34号住居跡とした。ただし本住居跡は後世の削平を受けており、また一部掘りすぎてしまい南側の一部しか検出できなかった。

〈重複関係〉34号住居跡と重複する。土層から本遺構は34号住居跡より新しいと判断した。

〈形態・規模〉後世の削平や掘りすぎのため、南側の一部を検出したにすぎず、住居全容については不明であるが、検出できた部分から楕円形を呈するものと推定される。残存する壁は長さ4.3mで、本遺構の規模は径4～5mになると推定される。深さは検出面から最深30cmを測る。

〈埋土〉暗褐色粘質シルトを主体とし、2層に分けられる。炭化物や小礫が混入する。

〈床面・壁〉Ⅴ層面を床面とする。ほぼ平坦であるが、礫が露出しており、凹凸がみられる。壁はほぼ直立気味に立ち上がる。

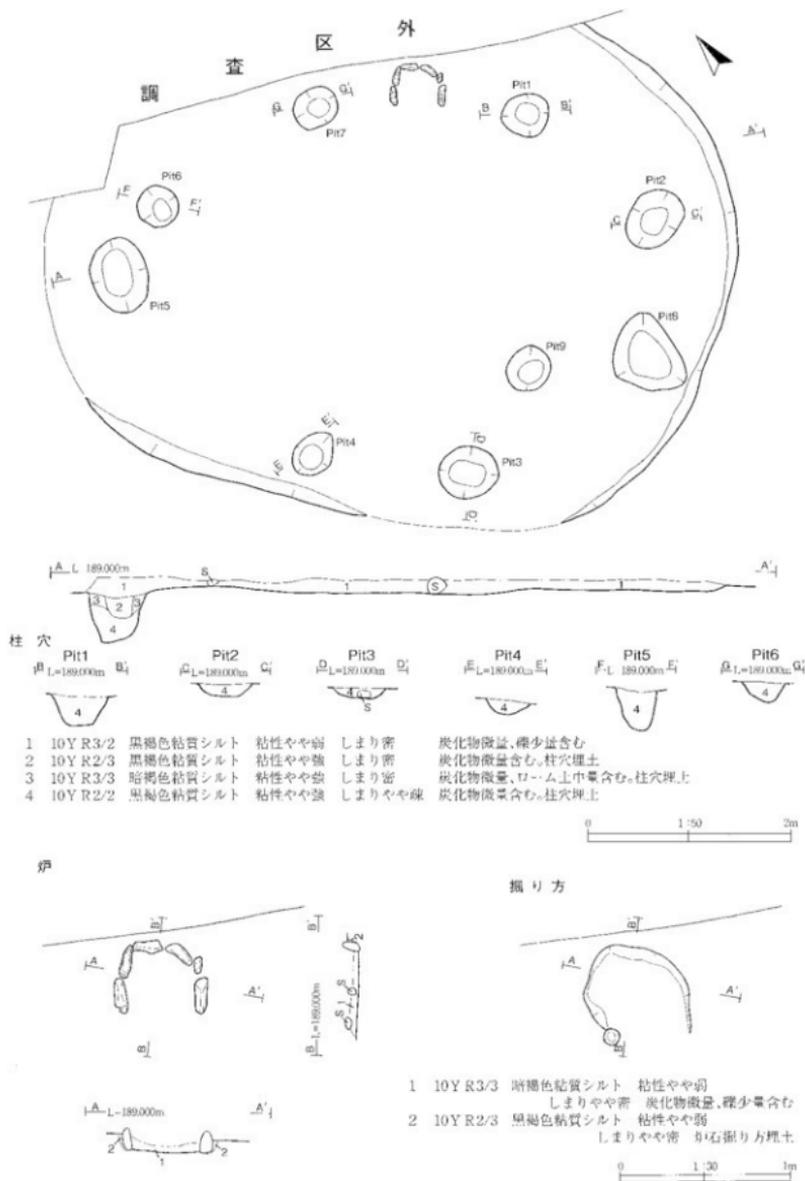
〈柱穴・壁溝〉6個確認した。柱穴の配列は推定できなかった。壁溝は認められなかった。

〈炉〉床面のほぼ中央に位置する。石囲炉である。楕円形を呈し、規模は62×54cm、深さは床面から5cmを測る。炉内に焼土は堆積しておらず、焼けた形跡も認められなかった。また炉の北側に浅い掘り込みが認められる。炉石は偏平な自然礫を利用しており、掘り方に据えるのみの設置で、隙間には黒褐色粘質シルトを埋めて補強している。

〈出土遺物〉縄文土器9988.6g、石器1点、土製品1点が出土した。出土状況を重量比で見ると、埋土下位が多い。これは住居の南側からまとまって出土した土器(554)が多くを占めているからである(第131図上の写真)。一方、炉内の北側炉石付近からも土器片が出土している(第131図下の写真)が、いずれも小片で、図示できる土器はなかった。また炉の北側の床面上で石匙1点が出土している。遺物群は炉内出土土器や石匙は住居廃絶時に廃棄された遺物である可能性があり、またその他は住居廃絶後の埋没段階に廃棄されたものであると考えられる。

554は深鉢である。Ⅲ群6類に含まれ、口縁部は無文で胴部には複筋RLRが施文される。556は小形の深鉢で口縁部を欠損する他は定形である。口唇部はゆるい波状を呈し、口縁部は無文で、胴部には隆帯による区画文が施文される。隆帯上には沈線による渦巻き文が施文される。558は深鉢の底部片で底面の縁辺に穿孔が施されている。559も底部片で底面には斥痕が認められる。560～562はⅢ群1類に相当する土器群である。564はⅢ群6類に相当する深鉢の口縁部片である。

石器は石匙1点(565)である。片面は縁辺部のほぼ全周に、もう一方の面には弧状の縁辺部のみ



第134図 36号住居跡



第135図 36号住居跡出土遺物

二次加工が施される。

〈時期〉埋土から出土した土器から縄文時代中期後葉（大木9式古段階）に比定される。

36号住居跡（第134・135図、写真図版40・41・99）

〈位置〉調査区東側、3 C 23 p グリッドに位置する。4 m 西側に35号住居跡が位置する。

〈検出状況〉調査区壁にトレンチを入れたところ、石囲炉を検出し、竪穴住居跡と判断した。

〈重複関係〉なし。

〈形態・規模〉本遺構は北側の一部が調査区外に及びた後世の削平のため、東壁の一部を消失している。したがって住居の全容は不明であるが、検出できた部分から楕円形を呈するものと推定される。規模は6.7×4.8 m、深さは検出面から約14 cmを測る。

〈埋土〉黒褐色粘質シルトを主体とする単層である。炭化物や小礫が混入する。

〈床面・壁〉Ⅶ層面を床面とする。ほぼ平坦であるが、礫が露出しており、凹凸がみられる。壁は外へと緩やかに広がりながら立ち上がる。

〈柱穴・壁溝〉9個確認した。北側は調査区外に及ぶので、全容は定かではないが、炉の主軸（炉が両端に並ぶ方）線に対し、Pit 1とPit 7、Pit 2とPit 6、Pit 5とPit 8、Pit 3とPit 4が左右対称に位置するので、これらを主柱とする8本柱の可能性が考えられる。壁溝は認められなかった。

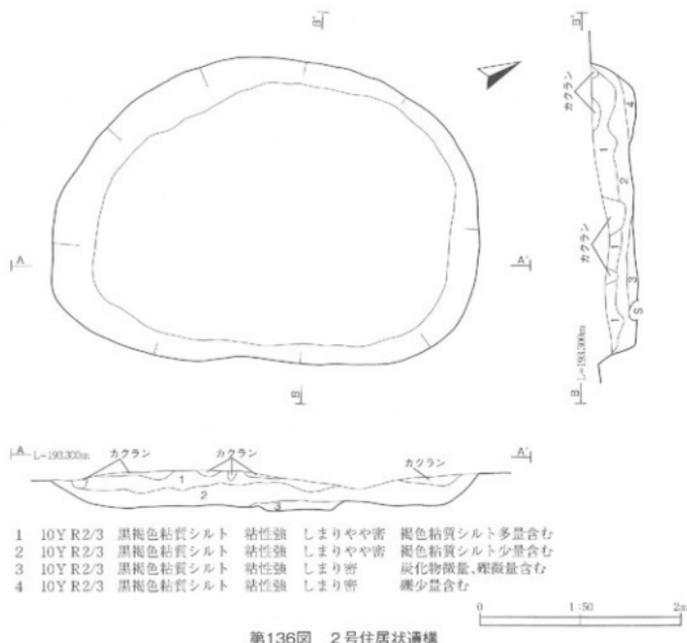
〈炉〉北東壁付近に位置する。石囲炉である。「コ」字状に炉石が配され、南西側には炉石が設置されていない。規模は44×56 cmを測り、深さは床面から10 cmである。炉内に焼土は堆積せず、埋土中に炭化物が混ざる程度である。炉石は個平な自然礫を利用し、掘り方に据えるのみである。

〈出土遺物〉縄文土器62.7 gが出土している。本住居跡は削平が激しく、したがって残存する遺物も非常に少ない。

566は深鉢の口縁部片で横位に沈線が連続する。567は深鉢の胴部片で単筋LRを地文とし、沈線による区画文が施文される。

また西側床面上からコハクが5.73 g出土している（写真図版115④）。いずれも非成品である

〈時期〉柱穴内出土の土器から縄文時代中期後葉（大木9式古段階）に比定される。（須原）



② 住居状遺構

形態・規模が竪穴住居跡に類似しているが、炉や柱穴などの付属施設がみられない遺構を住居状遺構とした。今回の調査で13棟の住居状遺構が見つかった。

2号住居状遺構（第136・137図、写真図版41・42・100）

〈位置〉調査区北側、2A7 r グリッドに位置する。

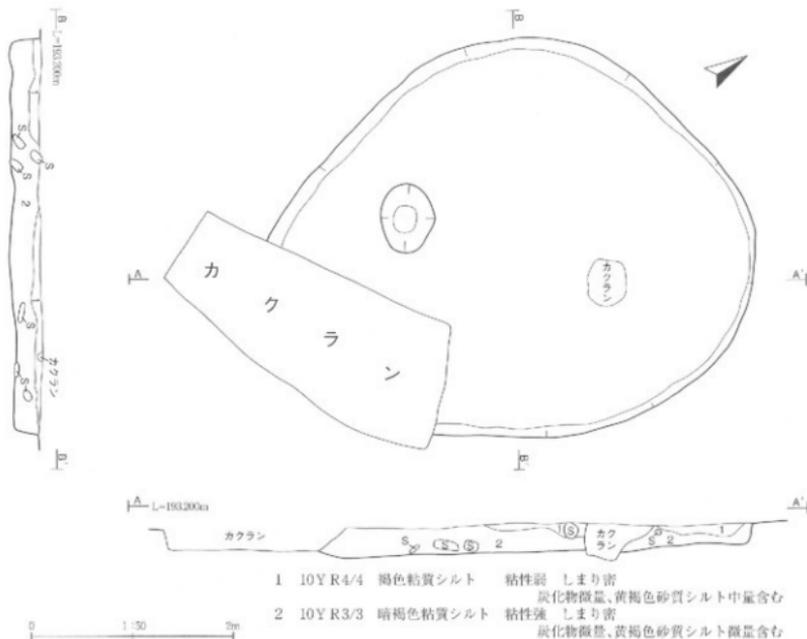
〈検出状況〉黄褐色土及び黄色火山灰混じりの黒褐色土を主体とした地山面上において、楕円形状の褐色粘質シルト及び炭化物を僅かに含んだ黒褐色の不鮮明な広がりを確認した。観察用ベルトを残してさらに下げたところ、炉は確認できなかったが、ベルトで壁の立ち上がりの様子が観察されたことから、住居状遺構と認定した。

〈重複関係〉3号住居状遺構、14号土坑に隣接するが、重複関係はない。

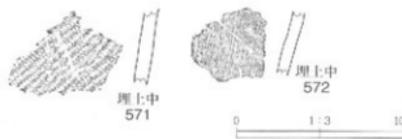
〈形態・規模〉楕円形を呈し、長径4.3 m、短径3.1 mを測る。深さは検出面から30～45cmである。

〈埋土〉黒褐色粘質シルトを主体とし、4層に分けられる。レンズ状堆積を呈しており、自然堆積と考えられる。

〈床面・壁〉Ⅵ層面を遺構底面と判断した。ほぼ平坦であるが、礫の部分では凹凸がある。壁はほぼ全周を確認した。やや外へと広がりながら立ち上がる。



第138図 3号住居状遺構



第139図 3号住居状遺構出土遺物

〈出土遺物〉縄文土器が89.0gが出土した。出土状況を見ると、埋土中として取り上げたものの他は、埋土上位から出土するものが多い。570は深鉢の胴部片で単節LRが施文される。〈時期〉出土した土器から縄文時代中期後葉に比定される。(戸根)

3号住居状遺構(第138・139図、写真図版42・100)

〈位置〉調査区西側、2A6sグリッドに位置する。

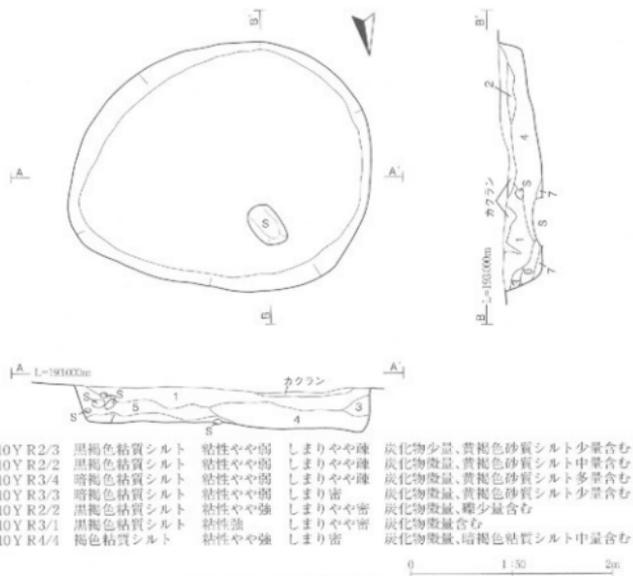
〈検出状況〉Ⅲ層上面で暗褐色のブランを検出した。ブランは不明瞭であるが、炭化物が分布する。掘り下げたところ、壁の立ち上がりを確認した。かが検出しないので、住居状遺構とした。

〈重複関係〉なし。

〈形態・規模〉本遺構は南側の一部が攪乱により壊されている。検出できた部分は不整な楕円形を呈し、4.5×4.2m、深さは検出面から30cmを測る。

〈埋土〉2層に分けられる。暗褐色粘質シルトを主体とし、埋土上位に褐色粘質シルトが層的に混入する。埋土中には炭化物や黄褐色砂質シルトが多く含まれる。

〈床面・壁〉Ⅵ層面を遺構底面とする。ほぼ平坦であるが、礫が露出しており、凹凸がみられる。壁はほぼ直立気味に立ち上がる。



第140図 4号住居状遺構



第141図 4号住居状遺構出土遺物

〈出土遺物〉縄文土器が315.8gが出土した。出土状況はいずれも埋土中からの出土である。

571・572は深鉢の胴部片で、571は単節R L、572はハケ状の工具による条直文が縦位に施文される。

〈時期〉埋土出土の土器から縄文時代中期後葉に比定される。

4号住居状遺構（第140・141図、写真図版43・100）

〈位置〉調査区西側、2A9 r グリッドに位置する。

〈検出状況〉Ⅲ層上面で暗褐色のプランを検出した。炉が検出せず、また規模も比較的小さいので、住居状遺構とした。

〈重複関係〉なし。

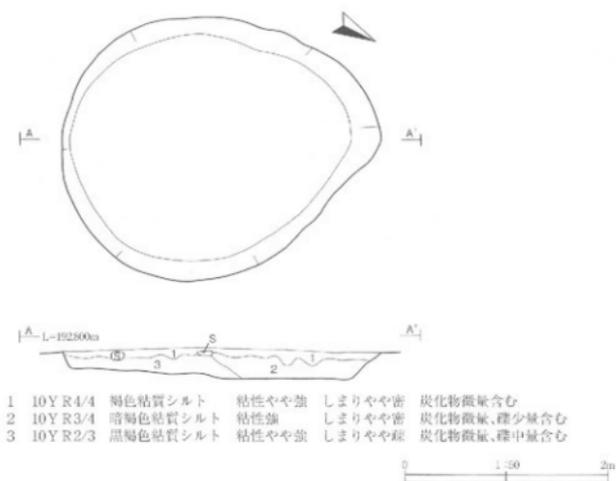
〈形態・規模〉不整な楕円形を呈し、3.1×2.6 m、深さは検出面から45cmを測る。

〈埋土〉7層に分けられる。埋土上位は黒褐色粘質シルトを、埋土下位は暗褐色粘質シルトを主体とする。また黄褐色砂質シルトが多く含まれるので、埋土は人為堆積の可能性が高い。

〈床面・壁〉Ⅵ層面を遺構底面とする。ほぼ平坦である。壁はほぼ直立気味に立ち上がる。

〈出土遺物〉縄文土器が51.9gが出土した。出土状況を見ると、埋土上位から出土しており、遺構埋没段階に、本遺構内に廃棄されたものである可能性が高い。

573・574は深鉢の胴部片で、どちらも沈線による区直文が施され、Ⅲ群3類に相当する。



第142図 5号住居状遺構

〈時期〉出土した土器から縄文時代中期後葉に比定される。

5号住居状遺構（第142図、写真図版43・44）

〈位置〉調査区西側、2 A13 t グリッドに位置する。2 m西側に21号土坑が隣接する。

〈検出状況〉Ⅲ層上面で暗褐色のプランを検出した。炉が検出しないので、住居状遺構とした。

〈重複関係〉なし。

〈形態・規模〉不整な楕円形を呈し、3.2×2.6 m、深さは検出面から最深28cmを測る。

〈埋土〉3層に分けられる。暗～黒褐色粘質シルトを主体とする。

〈底面・壁〉Ⅵ層面を遺構底面とする。ほぼ平坦であるが、硬化面は認められない。壁は外へと緩やかに広がりながら立ち上がる。

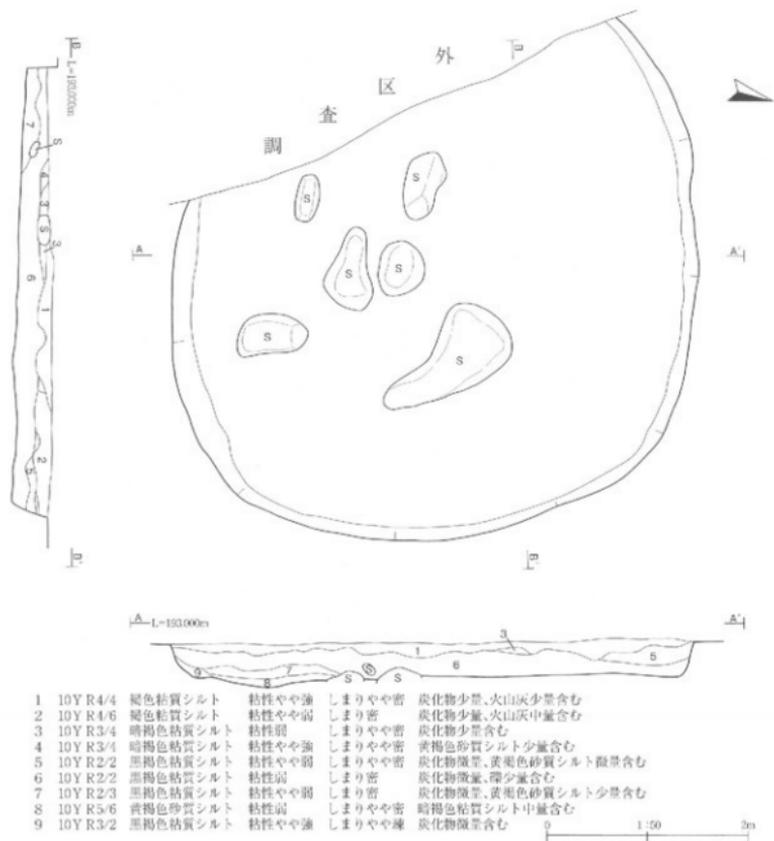
〈出土遺物〉なし。

〈時期〉出土遺物がないので定かではないが、埋土の様相から縄文時代中期後葉～末葉に比定されるものと思われる。

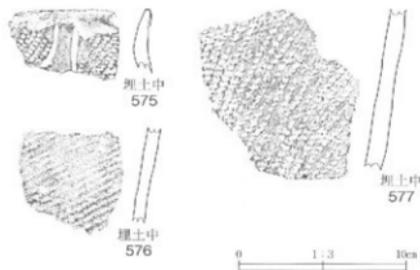
6号住居状遺構（第143・144図、写真図版44・100）

〈位置〉調査区西側、2 A10 q グリッドに位置する。西側の一部は調査区外に及んでいる。1 m北側に2号住居跡、2 m東側に2号土坑・3号住居跡が隣接する。

〈検出状況〉Ⅲ層上面で暗褐色のプランを検出した。炉が検出せず、また柱穴もないので、住居状遺構とした。



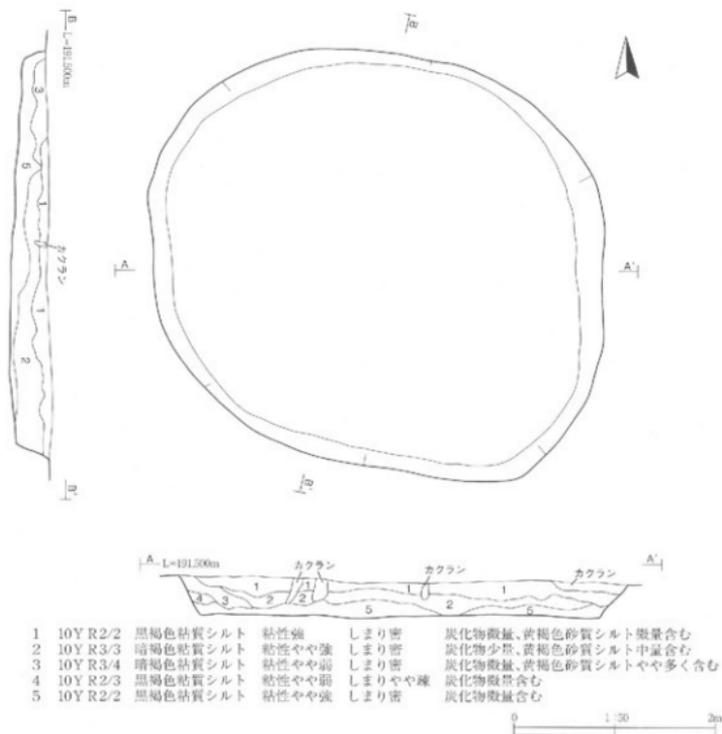
第143図 6号住居状遺構



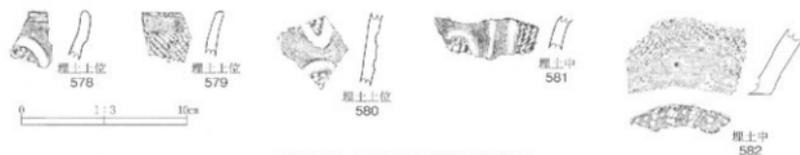
第144図 6号住居状遺構出土遺物

〈重複関係〉なし。

〈形態・規模〉本遺構は南西の一部が調査区外に及んでおり、全容が定かではない。検出できた部分是不整な隅丸方形を呈し、規模は一辺が5.2 m、深さは検出面から35cmを測る。〈埋土〉9層に分けられる。黒褐色粘質シルトを主体とする。炭化物や黄褐色砂質シルトが多く含まれる。また1・2層には流れ込みの火山灰（基本層序Ⅲ、Ⅳ層と同じもの）が



第145図 7号住居状遺構

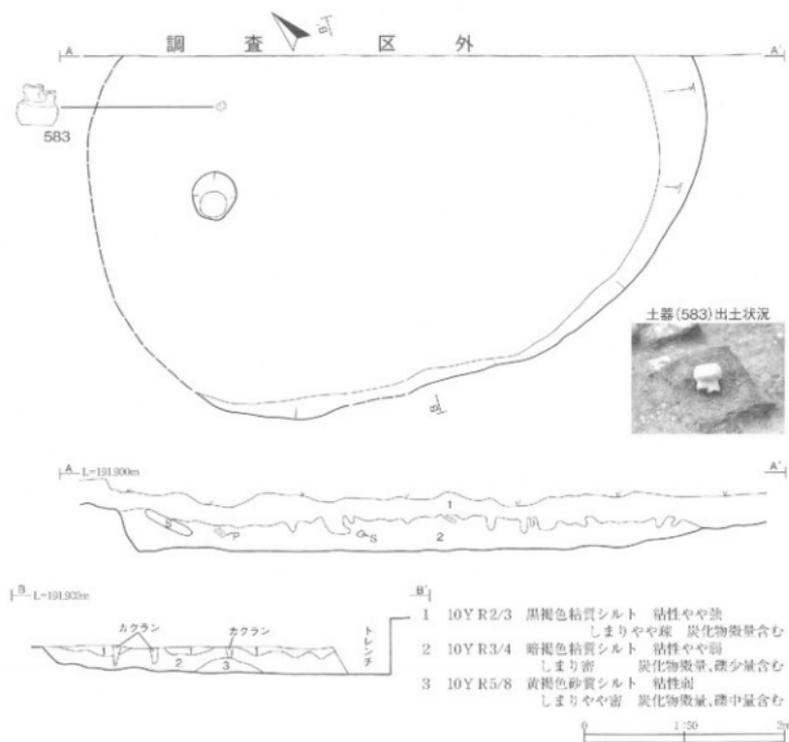


第146図 7号住居状遺構出土遺物

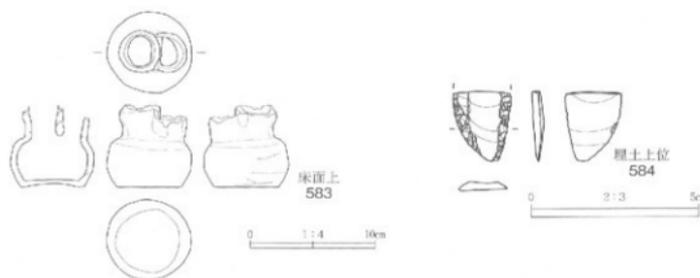
ブロック状で混入する。

〈床面・壁〉VI層面を遺構底面とする。ほぼ平坦であるが、50～100cm大の礫が露出し、やや凹凸がある。露出する礫には掘り方が認められないので、基盤層（Ⅷ層）に混入する自然礫が遺構底面上に露出していたものと思われる。また硬化面は認められない。壁はほぼ直立気味に立ち上がる。

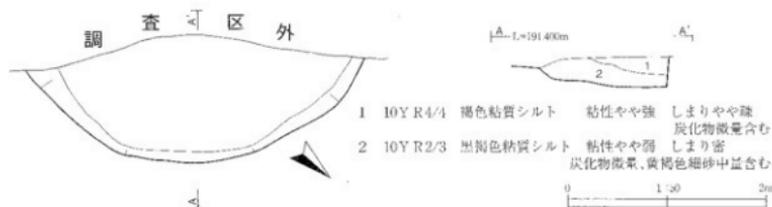
〈出土遺物〉縄文土器が180gが出土した。出土状況を見ると、埋土中から出土している。



第147図 8号住居状遺構



第148図 8号住居状遺構出土遺物



第149図 9号住居状遺構

575は深鉢の口縁部片で口唇部が剥離している。沈線による楕円形区画文が施文される。576・577は深鉢の胴部片で地文の縄文のみが施文される。

〈時期〉出土遺物から縄文時代中期後葉に比定される。

7号住居状遺構（第145・146図、写真図版44・45・100）

〈位置〉調査区中央、3 B 1 e グリッドに位置する。2 m北東側に24号土坑、3 m東側に25号土坑が隣接する。

〈検出状況〉Ⅲ層上面で暗褐色のプランを検出した。プランは不明瞭であるが、掘り下げたところ、壁の立ち上がりを確認した。ただし炉は検出しないので、住居状遺構とした。

〈重複関係〉なし。

〈形態・規模〉不整な楕円形を呈し、規模は4.3×5.0 m、深さは検出面から35cmを測る。

〈埋土〉5層に分けられる。黒褐色粘質シルトと暗褐色粘質シルトが互層を形成する。

〈床面・壁〉Ⅵ層面を遺構底面とする。ほぼ平出であるが、硬化面は認められない。壁はほぼ緩やかに外へと広がりながら立ち上がる。

〈出土遺物〉縄文土器が315.8 gが出土した。すべて埋土上位から出土しており、遺構埋没階のかなり遅くに本遺構内に廃棄されたものと捉えられる。

578は深鉢の口縁部片でⅢ群3類に相当する。579はⅢ群6類に相当する深鉢の口縁部片である。580・581は深鉢の胴部片で、Ⅲ群3類に相当する。582は深鉢の底部片で底面には圧痕が認められる。

〈時期〉出土遺物から縄文時代中期後葉に比定される。

（須原）

8号住居状遺構（第147・148図、写真図版45・100）

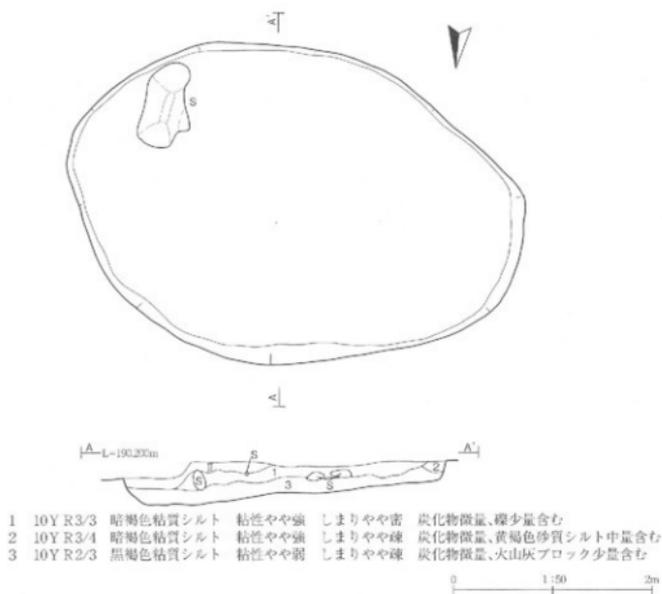
〈位置〉調査区中央部北側、2 B 25 k グリッドに位置する。

〈検出状況〉Ⅲ層上面で、半楕円形をした、炭化物をわずかに含む黒～暗褐色の不鮮明な広がりを確認した。土層観察用ベルトを設定するとともに、調査区壁面にトレンチを設定してさらに下げたところ、炉は確認できなかったが、壁の立ち上がりが認められたことから住居状遺構と認定した。なお、北東側約3分の1は調査区外へ広がっている。

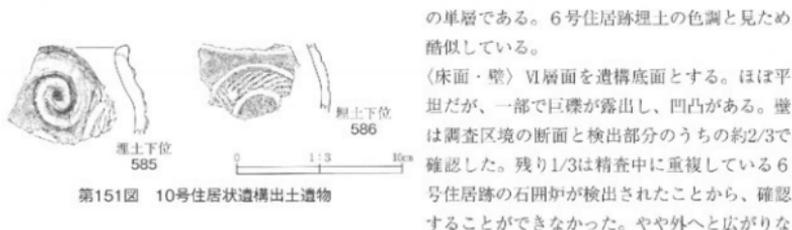
〈重複関係〉北西側に6号住居跡と重複する。埋土の堆積状況から、本遺構が新しいと考えられる。

〈形態・規模〉楕円形を呈し、長径6.2 m前後、短径3.5 m以上を測る。深さは検出面から25～35cmである。調査区外へ遺構が広がっていることから、正確な規模は不明である。

〈埋土〉炭化物をわずかに含む暗褐色粘質シルトを主体とし、3層に分けられるが、ほとんどは2層



第150図 10号住居状遺構



の単層である。6号住居跡埋土の色調と見ため酷似している。

〈床面・壁〉VI層面を遺構底面とする。ほぼ平坦だが、一部で巨礫が露出し、凹凸がある。壁は調査区境の断面と検出部分のうちの約2/3で確認した。残り1/3は精査中に重複している6号住居跡の石囲加が検出されたことから、確認することができなかった。やや外へと広がりが

がら立ち上がるが、地点により立ち上がりの傾斜角度が異なる。

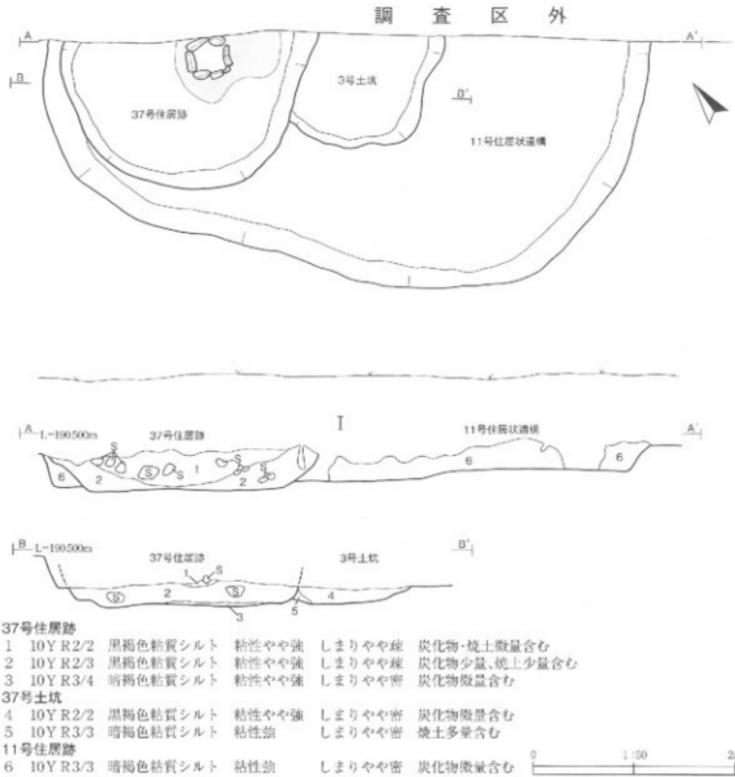
〈その他〉柱穴状の掘り込みを床面上から1個確認した。径45×50cm、深さは15cm程度、埋土2層を主体とする単層で、柱痕跡は認められない。

〈出土遺物〉縄文土器が315.8g、石器1点が出土した。遺構底面上に583が横倒しの状態で出土している(第147図写真)。

583は小形の双口土器で、口縁部が欠損しているほかは完形である。口縁部は2つに分かれており、長い方は上面から見ると円形を呈し、短い方はそれに連結する半円形である。連結部分は短く、胴部内では1つになる。器面は無文であるが、内面も含めた全面に朱が塗られている。

石器はスクレイパー1点(584)が埋土上位から出土している。一部が欠損しており、片面の両辺に二次加工を施し、刃部が作出されている。

〈時期〉出土土器(583)は時期判断が難しい。本遺構と重複する6号住居跡からは、縄文時代中期後



第152図 11号住居状遺構、3号土坑

葉の土器が出土しているので、本遺構もそれに近い時期に比定されると考える。

(戸根)

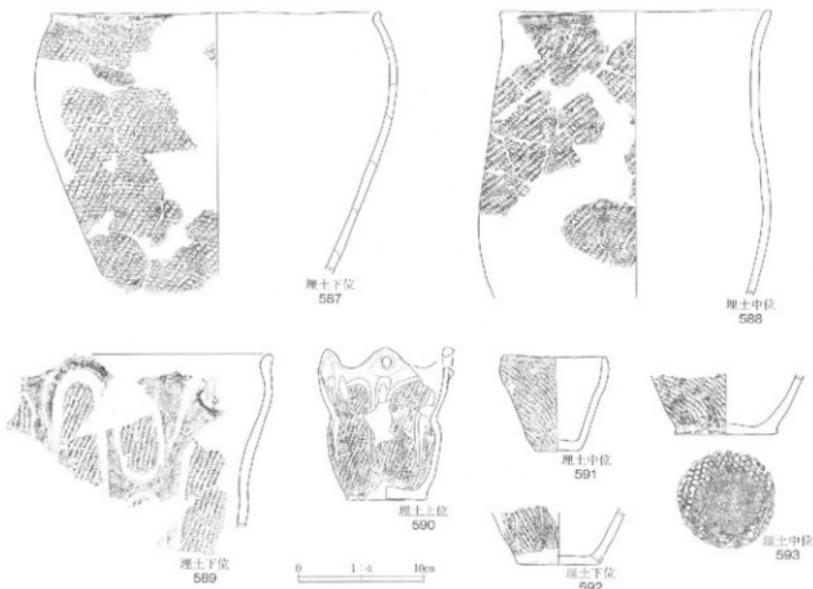
9号住居状遺構 (第149図、写真図版46)

〈位置〉調査区中央、3 B 5 h グリッドに位置する。4 m 北東側に14号住居跡、5 m 南東側に15号住居跡が隣接する。

〈検出状況〉Ⅲ層上面で暗褐色のプランを検出した。ただし炉が検出せず、また規模も比較的小さいので、住居状遺構とした。

〈重複関係〉なし。

〈形態・規模〉本遺構は西側の半分以上が調査区外に及んでおり、北東側の一部を検出できたにすぎない。したがって遺構の全容が不明であるが、検出できた部分は不整な楕円形を呈し、規模は35×13 m を測る。深さは検出面から31 cm である。



第153図 11号住居状遺構出土遺物(1)

〈埋土〉2層に分けられる。黒褐色粘質シルトを主体とする。

〈床面・壁〉Ⅵ層面を遺構底面とする。ほぼ平坦であるが、硬化面は認められない。壁は緩やかに外へと広がりがながら立ち上がる。

〈出土遺物〉なし。

〈時期〉出土遺物が、埋土の様相から縄文時代中期後葉に比定されるものと思われる。

10号住居状遺構(第150・151図、写真図版46・47・100)

〈位置〉調査区中央、3B9sグリッドに位置する。

〈検出状況〉Ⅲ層上面で黒褐色のプランを検出した。掘り下げたところ、壁の立ち上がりが認められ、遺構と判断した。ただし炉が検出せず、また底面が西から東へと傾斜しているので、住居状遺構とした。

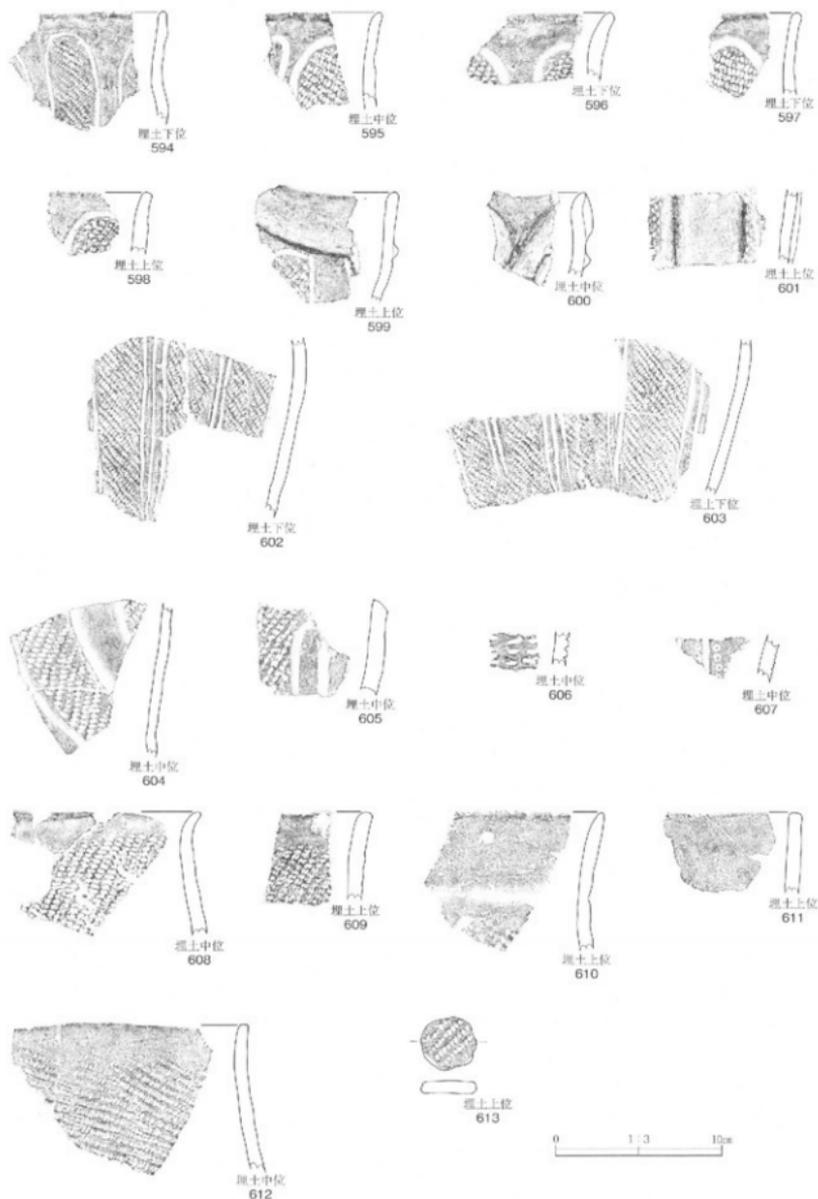
〈重複関係〉なし。

〈形態・規模〉不整な楕円形を呈し、規模は4.6×3.9mを測る。深さは検出面から最深44cmである。

〈埋土〉3層に分けられ、埋土上位は暗褐色粘質シルト、埋土下位は黒褐色粘質シルトを主体とする。

〈床面・壁〉Ⅵ層面を遺構底面とする。ほぼ平坦であるが、西から東へとやや傾斜している。硬化面は認められない。壁は直立気味に立ち上がる。

〈柱穴・壁溝〉なし。



第154図 11号住居状遺構出土遺物(2)



第155図 11号住居状遺構出土遺物(3)

〈その他〉南東壁際の底面上に大きな礫が1個露出している。礫には掘り方が認められないので、人為的に置かれたものではなく、基盤層に混入している自然礫が遺構底面上に露出したものと思われる。

〈出土遺物〉縄文土器が548.9g、石器1点が出土した。出土状況を見ると、埋土上位か埋土下位から出土している。したがって、遺構埋没段階に本遺構内に廃棄されたものと捉えられる。

585は深鉢の口縁部片で、隆帯による渦巻き文が付く。586は深鉢の胴部片で、沈線による曲線的なモチーフの区画文が描かれ、区画内には単筋LRが充填手法で施される。

〈時期〉出土した土器から縄文時代中期後葉に比定される。

11号住居状遺構(第152～155図、写真図版47・100～102・113)

〈位置〉調査区中央、3B9tグリッドに位置する。1m西側に10号住居状遺構が隣接する。

〈検出状況〉Ⅲ層上面で暗褐色のプランを検出した。掘り下げたところ壁の立ち上がりを確認したので遺構とした。ただし、埴が検出されないので住居状遺構とした。

〈重複関係〉37号住居跡、37号土坑と重複する。本遺構が最も古い。

〈形態・規模〉本遺構は東側半分が調査区外に及んでおり、遺構の全容が定かではないが、平面形は不整な楕円形を呈し、規模は長軸6.0m、短軸は残存部4.2m、深さは検出面から25cmを測る。

〈埋土〉暗褐色粘質シルトを主体とする単層である。

〈床面・壁〉Ⅵ層面を遺構底面とする。ほぼ平坦である。硬化面は認められない。壁は緩やかに外へと広がりながら立ち上がる。

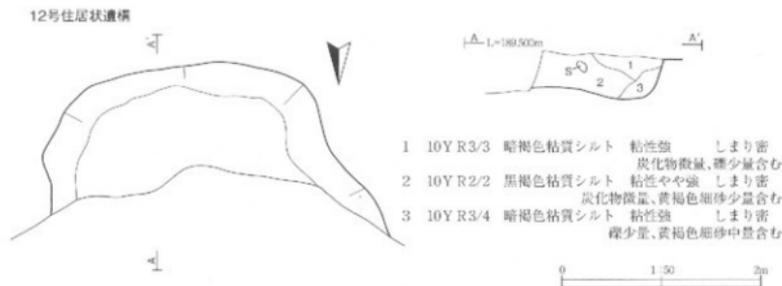
〈出土遺物〉縄文土器9974.0g、石器1点、土製品1点が出土した。出土状況を見ると、埋土上位～中位の出土量が大部分を占める。一方遺構底面から出土する遺物はなく、したがって出土した遺物はいずれも本遺構廃絶後の埋没段階に廃棄されたものと考えられる。

587は深鉢の大形破片で、破片がばらばらの状態で出土したが、口縁部から胴部下半までが復元できた。Ⅲ群6類に相当し、口縁部は無文で胴部には複筋RLRが施文される。588もⅢ群6類に相当し、胴部下半が膨らみ、口縁部で外反する器形である。589はⅢ群3類に相当する深鉢で波状口縁を呈し、口縁部から胴部にかけて沈線による楕円形区画文が並び、区画外は磨消手法により無文化する。590は4単位の波状口縁を呈する深鉢で、波頂部に円孔が施される。沈線による「∩」字形の区画文が施文される。区画外には沈線による渦巻き文が描かれている。591はⅢ群6類に相当する小形の深鉢である。593は底部のみで底面に圧痕が認められる。594～612は破片資料である。594～598・602～603はⅢ群3類に相当する土器群である。599は深鉢の口縁部片で、口縁部と胴部との間に隆帯が横位に巡る。604・605は深鉢の胴部片で、沈線による曲線的なモチーフの区画文が施文される。606は深鉢の胴部片で、押し引きの刺突文が連続する。607は棒状工具の先端を利用した刺突文が縦位に連続する。608～612はⅢ群6類の深鉢の口縁部片である。610は口縁部と胴部との間に、浅い沈線が横位に巡る。

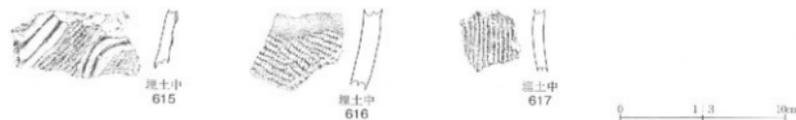
土製品は土製円板1点(613)である。縄文が施文される。

石器はスクレイパー1点(614)が出土している。先端部の両面から二次加工を施し刃部を作出している。

〈時期〉出土した土器(589)から縄文時代中期後葉(大木9式新段階)に比定される。



第156図 12号住居状遺構



第157図 12号住居状遺構出土遺物

12号住居状遺構（第156・157図、写真図版48・102）

〈位置〉調査区東側、3 C 23 k グリッドに位置する。北側に30号住居跡が重複する。

〈検出状況〉30号住居跡の壁に黒褐色の壁の立ち上がりを検出し、30号住居跡とは別の遺構と判断した。ただしかがみ検出せず、また規模も比較的小さいので、住居状遺構とした。

〈重複関係〉30号住居跡と重複する。本遺構の方が古い。

〈形態・規模〉本遺構は30号住居跡に北側を壊され、遺構の全容が不明である。検出できた部分は不整な隅丸方形を呈し、規模は3.2×1.0 mを測り、深さは検出面から42cmである。

〈埋土〉3層に分けられる。黒褐色粘質シルトを主体とする。

〈床面・壁〉Ⅶ層面を床面とする。ほぼ平坦である。壁は直立気味に立ち上がる。

〈出土遺物〉縄文土器156.2 g が出土した。いずれも埋土中から出土している。

615は深鉢の胴部片でⅢ群1類に相当する。616は深鉢の口縁部片で口唇部を欠損している。Ⅲ群6類に相当し、甲節R Lのみが施文される。617は深鉢の胴部片で、絡条体縄文が縦位に施される。

〈時期〉出土遺物から縄文時代中期後葉（大木9式古段階）に比定される。

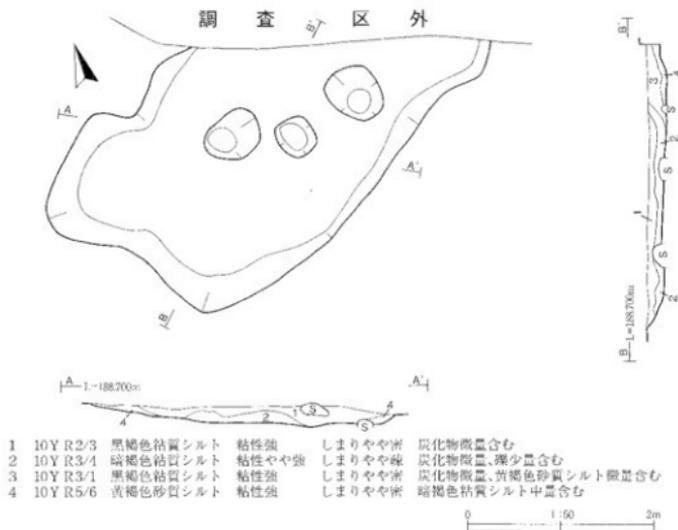
13号住居状遺構（第158図、写真図版48・49）

〈位置〉調査区東側、3 C 25 t グリッドに位置する。北東側に62号土坑が隣接する。

〈検出状況〉Ⅲ層上面で黒褐色のプランを検出した。掘り下げて、壁の立ち上がりを確認し、遺構と判断した。ただしかがみ検出せず、また規模も比較的小さいので、住居状遺構とした。

〈重複関係〉なし。ただし、本遺構は調査区外で1号住居状遺構と重複しているものと思われる。本遺構の方が新しい。

〈形態・規模〉本遺構は遺構外に及んでおり、遺構の全容が不明である。検出できた部分は不整な方



第158図 13号住居状遺構

形を呈し、規模は3.2×2.7 mを測り、深さは検出面から最深20cmである。

〈埋土〉4層に分けられる。黒褐色粘質シルトと暗褐色粘質シルトが互層を形成する。

〈床面・壁〉Ⅲ層面を遺構底面とする。ほぼ平坦であるが、礫が露出しており、やや凹凸がみられる。壁は緩やかに外へと広がりながら立ち上がる。

〈出土遺物〉なし。

〈時期〉出土遺物がないが、埋土の様相から縄文時代中期後葉に比定されるものと思われる。

14号住居状遺構（第159・160頁、写真図版49・102）

〈位置〉調査区東端、4 C 1 u グリッドに位置する。1.5 m南側に63号土坑が隣接する。

〈検出状況〉Ⅲ層上面で黒褐色のプランを検出した。掘り下げたところ、壁の立ち上がりを確認したが炉が検出せず、また規模も比較的小さいので、住居状遺構とした。

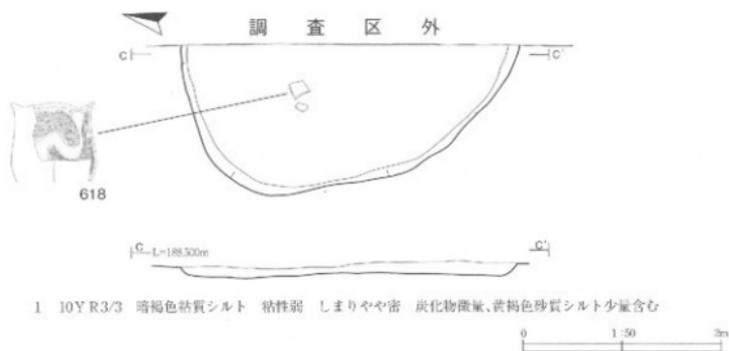
〈重複関係〉なし。

〈形態・規模〉本遺構は遺構外に及んでおり、遺構の全容が不明である。検出できた部分は径3.5 mの円形を呈し、深さは検出面から12cmを測る。

〈埋土〉暗褐色粘質シルトを主体とする単層である。炭化物を含む。

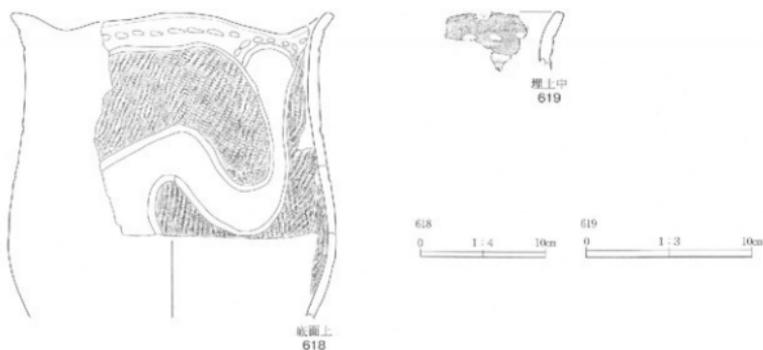
〈床面・壁〉Ⅳ層面を遺構底面とする。ほぼ平坦であるが、硬化面は認められない。壁は緩やかに外へと広がりながら立ち上がる。

〈出土遺物〉縄文土器884.8 gが出土した。出土状況を見ると、遺構底面のほぼ中央部から深鉢の大形破片（618）が出土しており、その他は、埋土中から小片が出土する程度である。



1 10Y R3/3 暗褐色粘質シルト 粘性弱 しまりやや密 炭化物微量、黄褐色砂質シルト少量含む

第159図 14号住居状遺構



第160図 14号住居状遺構出土遺物

618はⅢ群5類に相当する深鉢の大形破片で、波状口縁を呈する。口縁部には押し引きの刺突が横位に連続し、沈線による曲線的なモチーフの区画文が描かれる。619は深鉢の口縁部片で小片だが、618とはほぼ同じ文様と思われる。

〈時期〉遺構底面から出土した土器（619）から縄文時代中期末葉に比定される。

（須原）

③ 土 坑

調査区のはほぼ全域から検出している。ただし、一定範囲に集中して分布する傾向が認められる。そこで各土坑個々の属性については第5表に記し、便宜上土坑の分布する場所を6箇所に分け、それぞれの傾向についても記載する。

4～13号土坑（第161・168図、写真図版50～52・102）

〈位置〉調査区北側の3号住居状遺構の南端よりも北に所在する一群である。15号土坑のみ2号住居状遺構、3号住居状遺構に近接するが、その他は竪穴住居跡・住居状遺構より離れたところに位置する。

〈検出状況〉Ⅵ層面において、黒褐色シルトの不鮮明な広がりを確認している場合が多い。

〈重複〉10・11号土坑は相互に重複するが、その他については、重複は認められない。

〈形態〉円形を呈するものも若干ある（11・12号土坑）が、楕円形を呈するものが多い。

〈埋土〉黒褐色粘質シルトを主体とするものが多い。埋土中に炭化物を含むものがある。単層もしくはレンズ状堆積を呈していることが多く、自然堆積と考えられる。

〈用途〉不明である。深さの浅いものが多く、貯蔵の用途はなさそうである。

〈出土遺物〉12号土坑で99g、13号土坑で51.7gの土器片が出土した。いずれも埋土中に混入した小片である。

13号土坑出土の土器1点（620）を図示した。深鉢の胴部片でⅢ群2類に相当する。複節RLRを地文とし、沈線による区画文が施され、区画外は磨消手法により無文化する。

〈時期〉出土遺物がほとんどないため断定はできないが、埋土の特徴から縄文時代中期の可能性が高い。
（戸根）

14～23号土坑（第17・162・163・168図、写真図版52～54・102）

〈位置〉調査区西側、2A1u～2A15tグリッドに位置する。周辺には2～4号住居跡が位置する。

〈検出状況〉Ⅲ層上面で主に暗褐色のプランで検出した。またプランが不明瞭なものでも、炭化物が分布しており、その範囲にトレンチを入れ、壁の立ち上がりや水平な底面を確認し、遺構と判断した。〈重複関係〉19号土坑が4号住居跡と重複し、19号土坑の方が新しい。他に重複する土坑は認められない。

〈形態〉楕円形を呈するものがほとんどである。2号土坑は不整形な形状を呈する。2基の土坑が重複している可能性も考えられるが、土層を確認した限りでは、1基である。

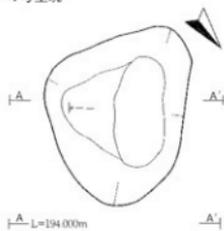
〈埋土〉黒褐色～暗褐色粘質シルトを主体とする。

〈用途〉形状などからは不明である。15号土坑はフラスコ状土坑であり、貯蔵穴であると考えられる。住居跡や住居状遺構が分布する場所であり、それらに伴う用途が考えられる。

〈出土遺物〉21号土坑で35.6g、23号土坑で42.0gの土器片が出土した。いずれも埋土中に混入した小片である。

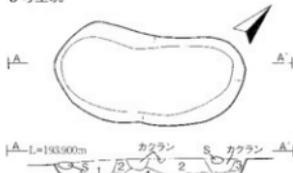
21号土坑出土2点（621・622）、23号土坑出土1点（623）を図示した。621は深鉢の胴部片で、断片的であるが、沈線による区画文と区画内に縄文が施文されているのが認められる。622は深鉢の胴部片で、複節RLRを地文とし、縦位の沈線による区画文が施される。区画外は磨消手法により無文化する。623は単節LRの地文のみが施文された深鉢の胴部片であるが、原体が細かく、Ⅳ群（後期）の可能性もある。

4号土坑



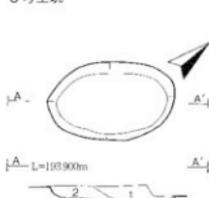
- 1 10Y R2/3 黒褐色粘質シルト 粘粒層
しまり密 礫少量含む
- 2 10Y R2/3 黒褐色粘質シルト 粘粒層
しまり密 礫少量含む

5号土坑



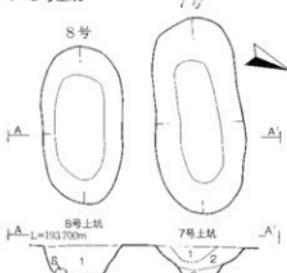
- 1 10Y R2/3 黒褐色粘質シルト 粘粒層
しまり密 礫少量含む
- 2 10Y R2/3 黒褐色粘質シルト 粘粒層
しまり密 礫少量含む
- 3 10Y R2/3 黒褐色粘質シルト 粘粒層
しまり密 礫少量含む
- 4 10Y R2/3 黒褐色粘質シルト 粘粒層
しまり密 礫少量含む
- 5 10Y R2/3 黒褐色粘質シルト 粘粒層
しまり密 礫少量含む
- 6 10Y R2/3 黒褐色粘質シルト 粘粒層
しまり密 礫少量含む

6号土坑



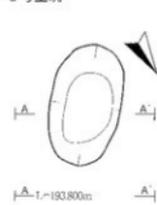
- 1 10Y R2/3 黒褐色粘質シルト 粘粒層
しまり密 礫少量含む
- 2 10Y R2/3 黒褐色粘質シルト 粘粒層
しまり密 礫少量含む

7・8号土坑



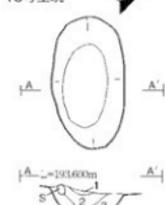
- 7号土坑
- 1 10Y R2/3 黒褐色粘質シルト 粘粒層
しまり密 礫少量含む
 - 2 10Y R2/3 黒褐色粘質シルト 粘粒層
しまり密 礫少量含む
 - 3 10Y R2/3 黒褐色粘質シルト 粘粒層
しまり密 礫少量含む
- 8号土坑
- 1 10Y R2/3 黒褐色粘質シルト 粘粒層
しまり密 礫少量含む

9号土坑



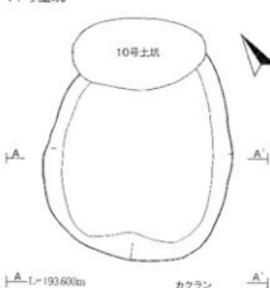
- 1 10Y R2/3 黒褐色粘質シルト 粘粒層
しまり密 礫少量含む

10号土坑



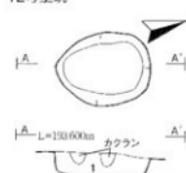
- 1 10Y R2/3 黒褐色粘質シルト 粘粒層
しまり密 礫少量含む
- 2 10Y R2/3 黒褐色粘質シルト 粘粒層
しまり密 礫少量含む
- 3 10Y R2/3 黒褐色粘質シルト 粘粒層
しまり密 礫少量含む

11号土坑



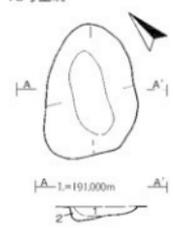
- 1 10Y R2/3 黒褐色粘質シルト 粘粒層
しまり密 礫少量含む
- 2 10Y R2/3 黒褐色粘質シルト 粘粒層
しまり密 礫少量含む

12号土坑

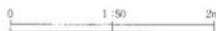


- 1 10Y R2/3 黒褐色粘質シルト 粘粒層
しまり密 礫少量含む

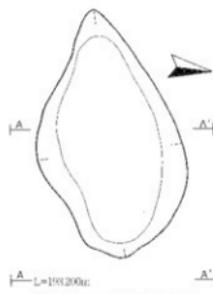
13号土坑



- 1 10Y R2/3 黒褐色粘質シルト 粘粒層
しまり密 礫少量含む
- 2 10Y R2/3 黒褐色粘質シルト 粘粒層
しまり密 礫少量含む

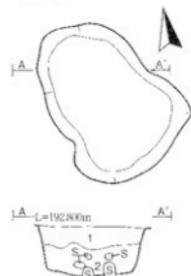


14号土坑



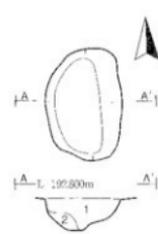
- 1 10Y R3-3 黒褐色粘質シルト 粘性やや強
しまりやや弱 炭化物少量、炭化物粘質シルトやや多く含む

17号土坑



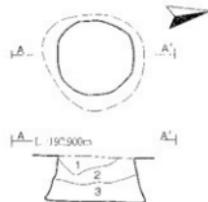
- 1 10Y R2-2 黒褐色粘質シルト 粘性やや強
しまりやや弱 炭化物少量、稀少含む
- 2 10Y R3-4 黒褐色粘質シルト 粘性強
しまりやや強 炭化物粘質シルトやや多く含む

20号土坑



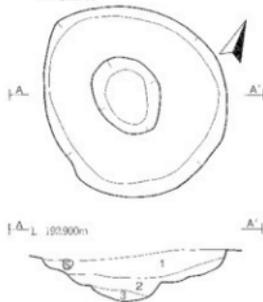
- 1 10Y R4-6 灰褐色粘質シルト 粘性強
しまり弱 炭化物少量、炭褐色粘質シルト少量含む
- 2 10Y R4-8 黒褐色粘質シルト 粘性強
しまり強 炭化物少量、炭褐色粘質シルトやや多く含む

15号土坑



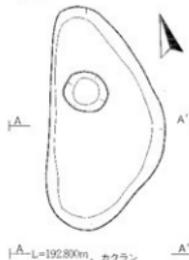
- 1 10Y J2-2 黒褐色粘質シルト 粘性やや強
しまりやや弱 炭化物少量含む
- 2 10Y R3-3 黒褐色粘質シルト 粘性やや強
しまり強 炭化物少量、炭褐色粘質シルトやや多く含む
- 3 10Y R3-4 黒褐色粘質シルト 粘性強
しまり強 炭化物少量含む

18号土坑



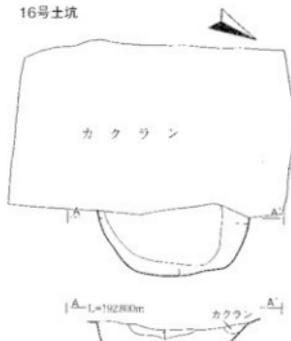
- 1 10Y R2-3 黒褐色粘質シルト 粘性やや強
しまり弱 炭化物少量、稀少含む
- 2 10Y R2-8 黒褐色粘質シルト 粘性やや強
しまりやや強 炭化物少量、稀少含む
- 3 10Y R3-4 黒褐色粘質シルト 粘性やや強
しまりやや強 炭化物少量、炭褐色粘質シルトやや多く含む

21号土坑



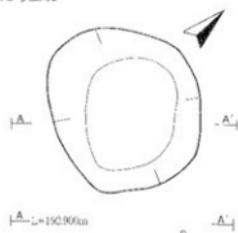
- 1 10Y R2-3 黒褐色粘質シルト 粘性強
しまりやや弱 炭化物少量含む
- 2 10Y R3-3 黒褐色粘質シルト 粘性強
しまり強 炭化物少量、炭褐色粘質シルト少量含む

16号土坑



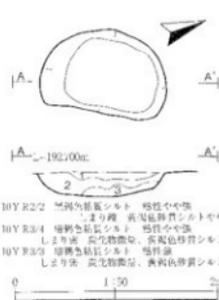
- 1 10Y R2-3 黒褐色粘質シルト 粘性やや強
しまりやや強 炭化物少量、炭褐色粘質シルト少量含む
- 2 10Y R3-3 黒褐色粘質シルト 粘性やや強
しまり強 炭化物少量含む
- 3 10Y R3-4 黒褐色粘質シルト 粘性強
しまり強 炭化物少量含む

19号土坑



- 1 10Y R4-4 黒褐色粘質シルト 粘性強
しまり強 炭化物少量、稀少含む

22号土坑



- 1 10Y R2-2 黒褐色粘質シルト 粘性やや強
しまり強 炭褐色粘質シルトやや多く含む
- 2 10Y R3-4 黒褐色粘質シルト 粘性やや強
しまり強 炭化物少量、炭褐色粘質シルト少量含む
- 3 10Y R3-3 黒褐色粘質シルト 粘性強
しまり強 炭化物少量、炭褐色粘質シルト少量含む

〈時期〉いずれの上坑も、出土遺物や埋土の様相から縄文時代中期後葉に比定される。ただし、623が出土した23号土坑は、それよりも新しい時期かもしれない。

24～31号土坑（第163図、写真図版54～56・103）

〈位置〉調査区中央、3B3hグリッド付近に位置する。周辺には5号住居跡や7号住居状遺構が分布し、また土坑群の東側には7号住居跡からはじまる住居群が分布する。

〈検出状況〉Ⅲ層上面で主に暗褐色のプランで検出した。またプランが不明瞭なものでも、炭化物が分布しており、掘り下げて壁や底面を確認し、遺構と判断した。

〈重複関係〉なし。

〈形態〉円形～楕円形を呈するものがほとんどである。

〈埋土〉黒褐色～暗褐色粘質シルトを主体とする。

〈用途〉形状などからは用途は不明である。ただし25、26号土坑は所謂「フラスコ状土坑」であり、貯蔵穴であると考えられる。竪穴住居跡や住居状遺構が分布する場所であり、住居群に伴う用途が考えられる。

〈出土遺物〉25号土坑で31.9g、28号土坑で82.4gの土器片が出土した。いずれも埋土中に混入した小片である。

25号土坑1点（624）、28号土坑2点（625、626）を図示した。625は深鉢の胴部片で、単節LRが施文されており、また縦位の沈線が認められるが、地文を磨り消してはいない。626も深鉢の胴部片で単節LRを地文とし、626は横位に沈線が施文され、区画文を形成する。

〈時期〉いずれの上坑も出土遺物や埋土の様相から縄文時代中期後葉に比定される。

32～38号土坑（第152・164図、写真図版56～58）

〈位置〉調査区中央、3B5l～3B13tグリッドに位置する。周辺には16～27号住居跡が位置し、その住居群の隙間に各土坑が分布するような状況である。ただし38号土坑だけはやや離れている。

〈検出状況〉Ⅲ層上面で主に暗褐色のプランで検出した。またプランが不明瞭なものでも、炭化物が分布しており、その範囲にトレンチを入れ、壁や底面を確認し遺構と判断した。

〈重複関係〉なし。

〈形態〉円形～楕円形を呈するものがほとんどである。

〈埋土〉黒褐色～暗褐色粘質シルトを主体とする。

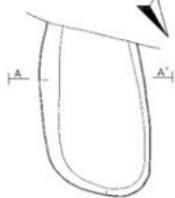
〈用途〉32・35・37号土坑は所謂「フラスコ状土坑」であり、用途としては貯蔵穴が考えられる。土坑は竪穴住居群の位置する場所に位置しており、それらの竪穴住居跡に伴うものと考えられる。3・33・34・36・38は形状などからも用途不明としか分からない。

〈出土遺物〉32号土坑で1802.2g、33号土坑で95.9g、34号土坑で836.9g、35号土坑で837.0g、36号土坑で18.0g、37号土坑で214.5g、38号土坑で22.9gの土器片が出土した。比較的多量の土器が出土しているが、いずれも埋土中に混入した小片で、出土状況に特徴がないので、遺構に伴うものかどうかは定かではない。

32号土坑3点（627～629）、33号土坑2点（630・631）、34号土坑7点（632～638）、35号土坑3点（642～644）、36号土坑1点（639）、37号土坑2点（640・641）を図示した。

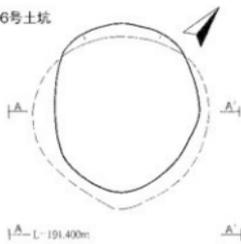
627は深鉢の口縁部片で、胴部上半でくびれ、口縁部は内湾しながら立ち上がる器形である。単節LRを地文とし、沈線による楕円形区画文が施文される。沈線はやや稚拙であるが、区画外は地文が

23号土坑



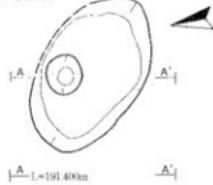
- 1 10Y R2/3 黒褐色粘質シルト 粘性强
しまりやや密 炭化物微量、炭屑片砂質シルト少量含む
- 2 10Y R4/4 黒色粘質シルト 粘性强
しまり密 炭化物微量、炭屑片砂質シルト中量含む

26号土坑



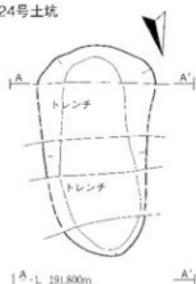
- 1 10Y R2/3 黒褐色粘質シルト 粘性やや強
しまり密 炭化物少量含む
- 2 10Y R2/3 黒褐色粘質シルト 粘性强
しまり密 炭化物微量、1層上ソフトロック少量含む
- 3 10Y R2/2 黒褐色粘質シルト 粘性强
しまりやや密 炭化物微量、1層上ソフトロック少量含む
- 4 10Y R3/3 黒褐色粘質シルト 粘性强
しまり密 炭化物微量含む
- 5 10Y R3/2 黒褐色粘質シルト 粘性やや強
しまりやや密 炭化物少量含む
- 6 10Y R4/6 黒褐色粘質シルト 粘性强
しまりやや密 炭化物微量、3層上ソフトロック少量含む
- 7 10Y R2/4 1.5M-黒褐色粘質シルト
しまり密 6層上少量含む

29号土坑



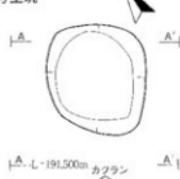
- 1 10Y R2/2 黒褐色粘質シルト 粘性强
しまり密 炭化物微量含む

24号土坑



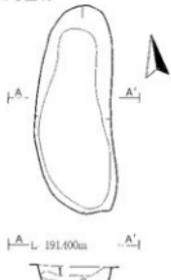
- 1 10Y R2/2 黒褐色粘質シルト 粘性强
しまりやや密 炭化物微量、黒褐色粘質シルト少量含む
- 2 10Y R2/3 黒褐色粘質シルト 粘性やや弱
しまりやや密 炭化物微量、少量含む
- 3 10Y R3/3 黒褐色粘質シルト 粘性强
しまり密 炭化物微量含む

27号土坑



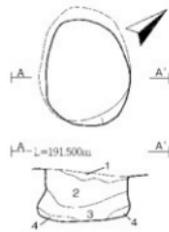
- 1 10Y R2/3 黒褐色粘質シルト 粘性强
しまり密
- 2 10Y R2/2 黒褐色粘質シルト 粘性强
しまり密 砂少量含む

30号土坑



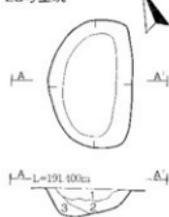
- 1 10Y R2/2 黒褐色粘質シルト 粘性やや弱
しまりやや密 炭化物微量、粘土層微量含む
- 2 10Y R2/3 黒褐色粘質シルト 粘性强
しまりやや密 炭化物微量、炭屑片砂質シルト少量含む
- 3 10Y R3/3 黒褐色粘質シルト 粘性强
しまりやや密 炭化物微量含む

25号土坑



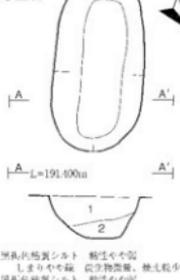
- 1 10Y R3/3 黒褐色粘質シルト 粘性强
しまりやや密 炭化物微量含む
- 2 10Y R3/3 黒褐色粘質シルト 粘性强
しまりやや密 炭化物微量、炭褐色粘質シルト少量含む
- 3 10Y R2/3 黒褐色粘質シルト 粘性强
しまり密 炭化物微量含む
- 4 10Y R4/4 黒褐色粘質シルト 粘性强
しまりやや密 炭化物微量含む

28号土坑



- 1 10Y R2/2 黒褐色粘質シルト 粘性强
しまりやや密 炭化物微量、炭褐色粘質シルト少量含む
- 2 10Y R4/4 黒褐色粘質シルト 粘性强
しまりやや密 炭化物微量、黒褐色粘質シルト中量含む
- 3 10Y R3/2 黒褐色粘質シルト 粘性やや強
しまりやや密 炭化物微量、黒褐色粘質シルト少量含む

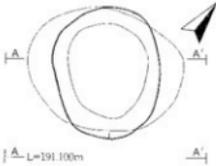
31号土坑



- 1 10Y R2/2 黒褐色粘質シルト 粘性やや弱
しまりやや密 炭化物微量、粘土層少量含む
- 2 10Y R2/3 黒褐色粘質シルト 粘性强
しまりやや密 炭化物少量、黒褐色粘質シルト少量含む

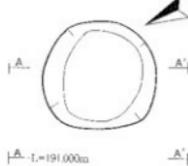


32号土坑



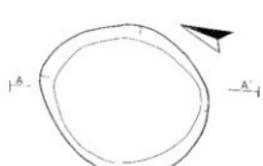
- 1 10Y R3-2 黒褐色粘質シルト 粘質ややね
- 2 10Y R3-4 黒褐色粘質シルト しまりややね 炭化物微塵、礫少量含む
- 3 10Y R2-4 黒褐色粘質シルト 粘質ややね 炭化物やね
- 4 10Y R3-2 黒褐色粘質シルト 粘質ややね
- 5 10Y R2-3 黒褐色粘質シルト 粘質ややね
- 6 10Y R4-4 褐色粘質シルト 粘質ややね
- 7 10Y R4-6 黒褐色粘質シルト 粘質ややね
- 8 10Y R2-2 黒褐色粘質シルト 粘質ややね
- 9 10Y R4-7 黒褐色粘質シルト 粘質ややね
- 10 10Y R3-4 黒褐色粘質シルト 粘質ややね

33号土坑



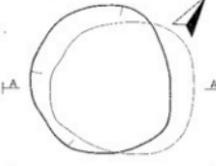
- 1 10Y R3-2 黒褐色粘質シルト 粘質ややね
- 2 10Y R3-2 黒褐色粘質シルト 粘質ややね
- 3 10Y R3-2 黒褐色粘質シルト 粘質ややね
- 4 10Y R3-2 黒褐色粘質シルト 粘質ややね
- 5 10Y R3-2 黒褐色粘質シルト 粘質ややね
- 6 10Y R3-2 黒褐色粘質シルト 粘質ややね

34号土坑



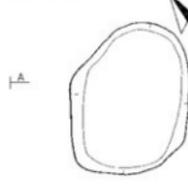
- 1 10Y R2-3 黒褐色粘質シルト 粘質ややね
- 2 10Y R3-2 黒褐色粘質シルト 粘質ややね
- 3 10Y R3-2 黒褐色粘質シルト 粘質ややね
- 4 10Y R3-1 黒褐色粘質シルト 粘質ややね
- 5 10Y R3-2 黒褐色粘質シルト 粘質ややね
- 6 10Y R3-2 黒褐色粘質シルト 粘質ややね
- 7 10Y R3-1 黒褐色粘質シルト 粘質ややね
- 8 10Y R4-4 褐色粘質シルト 粘質ややね

35号土坑



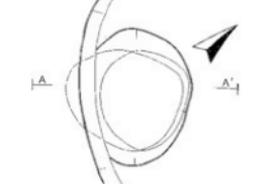
- 1 10Y R2-2 黒褐色粘質シルト 粘質ややね
- 2 10Y R3-2 黒褐色粘質シルト 粘質ややね

36号土坑



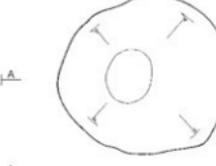
- 1 10Y R2-2 黒褐色粘質シルト 粘質ややね
- 2 10Y R3-2 黒褐色粘質シルト 粘質ややね

37号土坑



- 1 10Y R3-4 黒褐色粘質シルト 粘質ややね
- 2 10Y R4-6 褐色粘質シルト 粘質ややね
- 3 10Y R3-1 黒褐色粘質シルト 粘質ややね
- 4 10Y R2-3 黒褐色粘質シルト 粘質ややね
- 5 10Y R3-3 黒褐色粘質シルト 粘質ややね
- 6 10Y R3-4 黒褐色粘質シルト 粘質ややね
- 7 10Y R2-3 黒褐色粘質シルト 粘質ややね
- 8 10Y R3-1 黒褐色粘質シルト 粘質ややね

38号土坑



- 1 10Y R2-1 黒褐色粘質シルト 粘質ややね
- 2 10Y R2-2 黒褐色粘質シルト 粘質ややね
- 3 10Y R3-2 黒褐色粘質シルト 粘質ややね

第164図 32～38号土坑

磨消される。628は深鉢の胴部片で、627と同様な文様が施文されている。629は深鉢の口縁部片でやや内湾して立ち上がる器形である。沈線による楕円形区画文を施し、区画内には刺突文を充填する。630は深鉢の胴部片で、単節R Lのみが施文される。631は底部片で、無文である。大きさからみてミニチュア土器の可能性がある。632～634は深鉢の胴部片でいずれもⅢ群3類に相当し、沈線による区画と縄文が施文される。635～638はⅢ群6類に相当する深鉢の口縁部片である。いずれも縄文が施文されるが、638は無文である。639は深鉢の胴部片で複節R L Rが施文される。640、641は深鉢の胴部片で縄文を地文とし、沈線による区画が施文される。641は区画文のモチーフが曲線的なモチーフである可能性が高い。642は深鉢の胴部下半のみで胴部上半にむかい、外へと広がる器形である。単節L Rを地文とし、沈線による区画文が施文される。区画外は無文となるが、磨り消しがあまく、やや地文が残る。643は深鉢の口縁部片で口縁部が外反する器形である。単節R Lを地文とし、沈線による楕円形区画文が施文され、区画外は地文を磨り消した上で棒状工具による刺突文を充填する。644は深鉢の胴部片で沈線による区画文が施文される。

〈時期〉いずれの土坑も出土遺物や埋土の様相から縄文時代中期後葉に比定される。

39～48号土坑（第165図、写真図版58～60）

〈位置〉調査区東隅、3 C 21 i～3 C 24 j グリッドに位置する。周辺に28～34号住居跡や1号掘立柱建物位置するが、それらの遺構群とはやや離れている。

〈検出状況〉Ⅲ層上面で主に、黒褐色～暗褐色のプランで検出した。またプランが不明瞭なものでも、炭化物が分布しており、その範囲にトレンチを入れ、遺構と判断した。

〈重複関係〉39号土坑は29号住居跡、30号住居跡と重複する。29号住居跡より古く、30号住居跡よりは新しい。40号土坑は31号住居跡と重複し、31号住居跡より古い。また46号と47号土坑が重複し、46号土坑の方が新しい。

〈形態〉円形～楕円形を呈するものがほとんどである。

〈埋土〉黒褐色～暗褐色粘質シルトを主体とする。

〈用途〉39号土坑は所謂「フラスコ状土坑」であり、用途としては貯蔵穴が考えられる。その他は形態などに特徴がなく、不明である。

〈出土遺物〉40号土坑で30.8 gの土器片が出土した。埋土中に混入した小片で、出土状況に特徴がなく、遺構に伴うものかどうかは定かではない。したがって図示していない。

〈時期〉いずれの土坑も出土遺物や埋土の様相から縄文時代中期後葉に比定される。

49～64号土坑（第166・167図、写真図版60～64・103・104）

〈位置〉調査区東側、3 C 25 n～4 C 2 u グリッドに位置する。49～60号土坑は31～37号住居跡が位置する場所の南側で、他の遺構が認められない場所である。62～64号土坑は調査区東端に位置し、13・14号住居状遺構が位置する。

〈検出状況〉Ⅲ層上面で主に、黒褐色～暗褐色のプランで検出した。またプランが不明瞭なものでも、炭化物が分布しており、掘り下げて、壁や底面を確認し遺構と判断した。

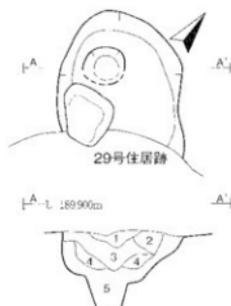
〈重複関係〉なし

〈形態〉円形～楕円形を呈するものがほとんどである。

〈埋土〉黒褐色～暗褐色粘質シルトを主体とする。

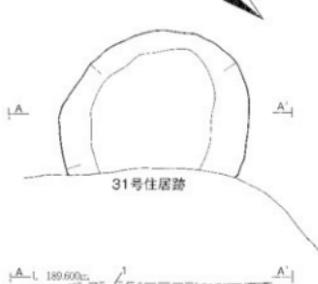
〈用途〉形状からは不明である。

39号土坑



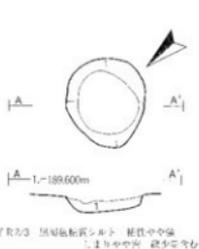
- 1 10Y R2② 赤褐色粘質シルト 粘土や中砂
しまりや中砂 炭化植物残片含む
- 2 10Y R3③ 赤褐色粘質シルト 粘土や中砂
しまりや中砂 炭化植物残片やコップ片を含む
- 3 10Y R4④ 赤褐色粘質シルト 粘土や中砂
しまりや中砂 炭化植物残片を含む
- 4 10Y R5⑤ 赤褐色粘質シルト 粘土や中砂
しまりや中砂 炭化植物残片やコップ片を含む
- 5 10Y R2③ 赤褐色粘質シルト 粘土や中砂
しまりや中砂 炭化植物残片やコップ片を含む

40号土坑



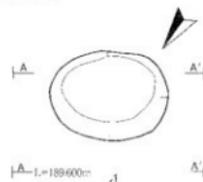
- 1 10Y R2① 赤褐色粘質シルト 粘土質
しまりや中砂 炭化植物残片やコップ片を含む
- 2 10Y R2② 赤褐色粘質シルト 粘土質 しまりや中砂
- 3 10Y R2③ 赤褐色粘質シルト 粘土質
しまりや中砂 炭化植物残片を含む

41号土坑



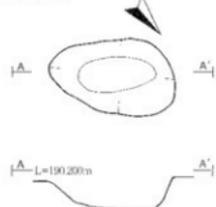
- 1 10Y R2③ 赤褐色粘質シルト 粘土や中砂
しまりや中砂 炭化植物残片を含む

42号土坑

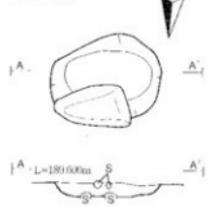


- 1 10Y R2③ 赤褐色粘質シルト 粘土や中砂
しまりや中砂 炭化植物残片を含む
- 2 10Y R3④ 赤褐色粘質シルト 粘土質
しまりや中砂 炭化植物残片やコップ片を含む

43号土坑

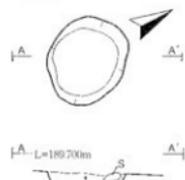


44号土坑



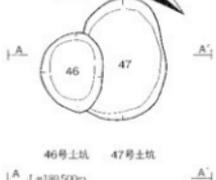
- 1 10Y R2② 赤褐色粘質シルト 粘土や中砂
しまりや中砂 炭化植物残片を含む
- 2 10Y R2③ 赤褐色粘質シルト 粘土や中砂
しまりや中砂 炭化植物残片を含む

45号土坑



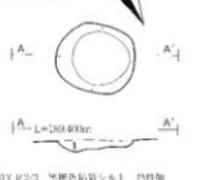
- 1 10Y R2② 赤褐色粘質シルト 粘土質
しまりや中砂 炭化植物残片を含む

46・47号土坑

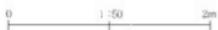


- 1 10Y R2② 赤褐色粘質シルト 粘土質
しまりや中砂 炭化植物残片を含む
- 2 10Y R2③ 赤褐色粘質シルト 粘土や中砂
しまりや中砂 炭化植物残片、赤褐色粘質シルト片を含む

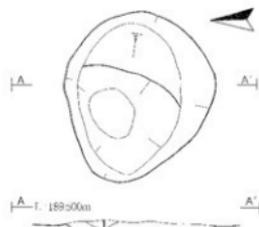
48号土坑



- 1 10Y R2③ 赤褐色粘質シルト 粘土質
しまりや中砂 炭化植物残片、種籾を含む

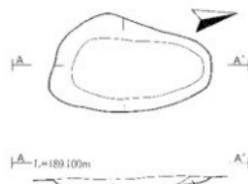


49号土坑



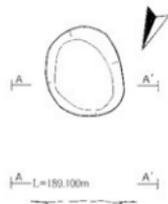
- 1 10Y R17/1 黒色粘質シルト 粘性强し、しまり密
- 2 10Y R2/3 赤褐色粘質シルト 粘性强し、しまり密 炭化樹皮、骨質粘質シルト散見、埋みや多く含む

50号土坑



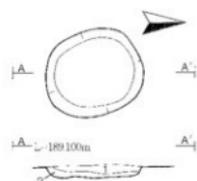
- 1 10Y R2/2 黒褐色粘質シルト 粘性强し、しまり密 炭化樹皮シルト散見、炭化物散見含む
- 2 10Y R2/3 黒褐色粘質シルト 粘性强し、しまり密

51号土坑



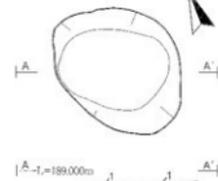
- 1 10Y R2/2 黒褐色粘質シルト 粘性强し、しまり密 炭化樹皮シルト散見、骨質粘質シルト散見、埋みや多く含む

52号土坑



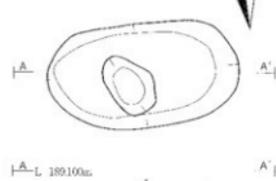
- 1 10Y R2/2 赤褐色粘質シルト 粘性强し、しまり密 埋みや含む
- 2 10Y R2/3 赤褐色粘質シルト 粘性强し、しまり密 炭化樹皮粘質シルトごく少量含む

53号土坑



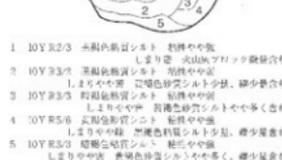
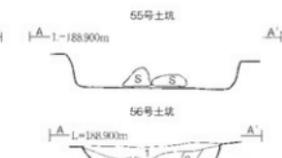
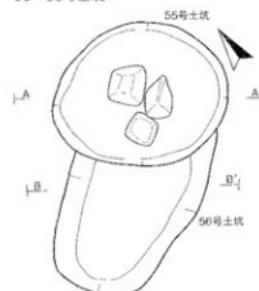
- 1 10Y R3/2 黒褐色粘質シルト 粘性强し、しまり密 炭少量含む
- 2 10Y R3/4 黒褐色粘質シルト 粘性强し、しまり密 炭少量含む

54号土坑



- 1 10Y R3/3 赤褐色粘質シルト 粘性强し、しまり密 炭化物散見、炭化粘質シルト少量、炭少量含む

55・56号土坑

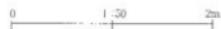


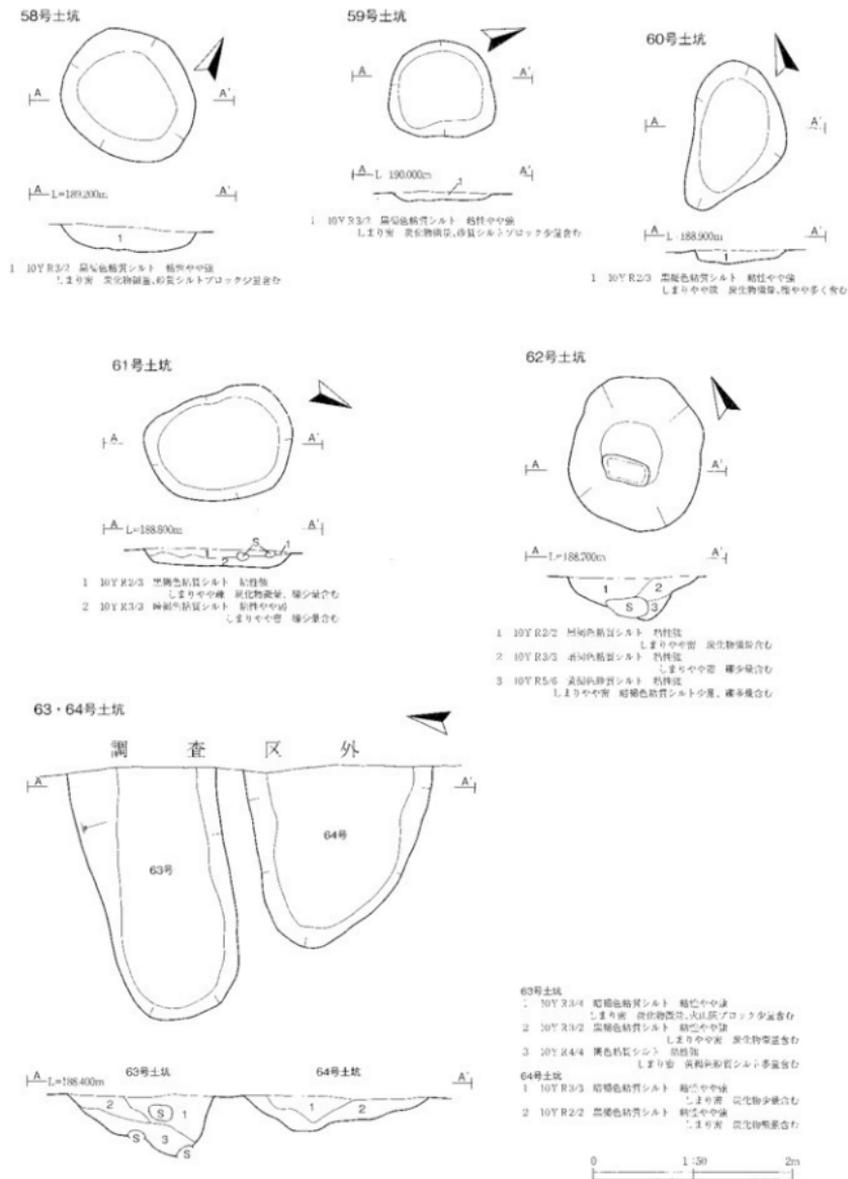
- 1 10Y R2/3 赤褐色粘質シルト 粘性强し、しまり密 炭化樹皮シルト散見含む
- 2 10Y R3/2 赤褐色粘質シルト 粘性强し、しまり密 炭化物散見、炭化物散見含む
- 3 10Y R3/3 赤褐色粘質シルト 粘性强し、しまり密 炭化物散見、炭化物散見含む
- 4 10Y R5/6 赤褐色粘質シルト 粘性强し、しまり密 炭化物散見、炭化物散見含む
- 5 10Y R3/3 赤褐色粘質シルト 粘性强し、しまり密 炭化物散見、炭化物散見含む

57号土坑



- 1 10Y R3/2 赤褐色粘質シルト 粘性强し、しまり密 炭化物散見、炭少量含む





第167図 58～64号土坑

13号土坑



埋土中
620

21号土坑



埋土中
621



埋土中
622

23号土坑



埋土中
623

25号土坑

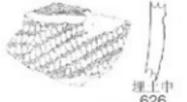


埋土中
624

28号土坑



埋土中
625



埋土中
626

32号土坑



埋土中位
627



埋土中位
628



埋土中位
629

33号土坑



埋土中
630



埋土上位
631

34号土坑



埋土上位
632



埋土中
633



埋土中
634



埋土中
635



埋土中
636

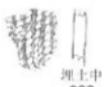
36号土坑



埋土中
637



埋土中
638



埋土中
639

37号土坑



埋土中位
640



埋土中
641

35号土坑



埋土中
642



埋土中
643



埋土中
644

56号土坑



埋土中
645



埋土中
646



埋土中
647



埋土中
648



埋土中
649

57号土坑

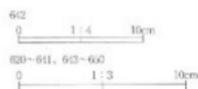


埋土中
650

62号土坑



埋土中
651



第168図 土坑出土遺物

第5表 土坑一覧(1)

| 遺 構 名 | 位置(グリッド) | 重複関係 | 渾土の土質土 | 開口部 (cm) | 深さ (cm) | 出土土器 (重量・g) | 備 考 |
|-------|----------|--------|------------|--------------|---------|----------------|-----|
| 01号土坑 | 4 C 1 t | | 黒褐色粘質シルト | 250×185 | 33 | | |
| 02号土坑 | 2 A 1 s | 3号土層跡 | 暗～黒褐色粘質シルト | 300×220 | 48 | | |
| 37号土坑 | 3 B 9 t | 11号土層状 | 暗～黒褐色粘質シルト | 140×105 | 85 | 214.5 | |
| 04号土坑 | 2 A 1 l | | 暗褐色粘質シルト | 187×141 | 22 | | |
| 05号土坑 | 2 A 1 l | | 黒褐色粘質シルト | 192×95 | 24 | | |
| 06号土坑 | 2 A 2 m | | 黒褐色粘質シルト | 126×80 | 17 | | |
| 07号土坑 | 2 A 5 n | | 黒褐色粘質シルト | 200×91 | 38 | | |
| 08号土坑 | 2 A 5 n | | 黒褐色粘質シルト | 161×80 | 31 | | |
| 09号土坑 | 2 A 5 o | | 黒褐色粘質シルト | 114×72 | 22 | | |
| 10号土坑 | 2 A 5 p | | 黒褐色粘質シルト | 134×72 | 23 | | |
| 11号土坑 | 2 A 5 p | | 黒褐色粘質シルト | (208) × 190 | 21 | | |
| 12号土坑 | 2 A 6 q | | 黒褐色粘質シルト | 96×75 | 24 | 9.9 | |
| 13号土坑 | 2 A 7 p | | 黒褐色粘質シルト | 135×91 | 14 | 51.7 | |
| 14号土坑 | 2 A 7 r | | 黒褐色粘質シルト | 258×150 | 22 | | |
| 15号土坑 | 2 A 1 u | | 暗褐色粘質シルト | 75×75 | 46 | | 貯蔵穴 |
| 16号土坑 | 2 A 1 t | | 暗褐色粘質シルト | (139) × (68) | 34 | | |
| 17号土坑 | 2 A 12 t | | 暗褐色粘質シルト | 169×125 | 51 | | |
| 18号土坑 | 2 A 12 t | | 暗褐色粘質シルト | 197×181 | 52 | | |
| 19号土坑 | 2 A 12 s | 4号土層跡 | 褐色粘質シルト | 167×141 | 24 | | |
| 20号土坑 | 2 A 13 t | | 褐色粘質シルト | 115×75 | 33 | | |
| 21号土坑 | 2 A 13 t | | 黒褐色粘質シルト | 228×114 | 11 | 35.6 | |
| 22号土坑 | 2 A 14 t | | 暗褐色粘質シルト | 122×85 | 25 | | |
| 23号土坑 | 2 A 15 t | | 暗褐色粘質シルト | (160) × 107 | 25 | 42 | |
| 24号土坑 | 3 B 3 h | | 黒褐色粘質シルト | 216×116 | 43 | | |
| 25号土坑 | 3 B 1 g | | 黒褐色粘質シルト | 108×82 | 52 | 31.9 | 貯蔵穴 |
| 26号土坑 | 3 B 2 g | | 暗～黒褐色粘質シルト | 152×143 | 75 | | 貯蔵穴 |
| 27号土坑 | 3 B 1 j | | 黒褐色粘質シルト | 125×110 | 35 | | |
| 28号土坑 | 3 B 2 h | | 褐色粘質シルト | 130×85 | 28 | 82.4 | |
| 29号土坑 | 3 B 2 h | | 黒褐色粘質シルト | 168 × (100) | 42 | | |
| 30号土坑 | 3 B 3 i | | 黒褐色粘質シルト | 171×90 | 43 | | |
| 31号土坑 | 3 B 3 h | | 黒褐色粘質シルト | 212×77 | 45 | | |
| 32号土坑 | 3 B 5 l | | 暗～黒褐色粘質シルト | 133×103 | 140 | 1802.2 | 貯蔵穴 |
| 33号土坑 | 3 B 5 m | | 暗褐色粘質シルト | 112×109 | 128 | 95.9 | 貯蔵穴 |

〈出土遺物〉49号土坑で9.7g、51号土坑で0.9g、54号土坑で11.2g、56号土坑で575.8g、57号土坑で47.7gの上器片が出土した。いずれも埋土中に混入した小片である。

56号土坑出土5点(645～649)、57号土坑1点(650)、62号土坑1点(651)を図示した。645は深鉢口縁部片で襷筋RLRを地文とし、沈線による区画文が施文される。区画外は地文が磨り消されず残る。646・647は沈線による区画文と縄文が施文される。646は曲線的なモチーフでIV群に相当する。

第6表 土坑一覧(2)

| 遺 構 名 | 位置(クワッド) | 産物関係 | 坑上の主体土 | 開口部 (cm) | 深さ (cm) | 出土土器 (重量 - g) | 備 考 |
|-------|----------|-------|------------|-------------|---------|------------------|-----|
| 34号土坑 | 3 B 7 p | | 黒褐色粘質シルト | 158×140 | 60 | 806.9 | 貯蔵穴 |
| 35号土坑 | 3 B 6 q | | 不明 | 153×137 | 132 | 837 | |
| 36号土坑 | 3 B 7 p | | 暗褐色粘質シルト | 156×116 | 38 | 18 | |
| 37号土坑 | 3 B 13 t | | 黒褐色粘質シルト | 170×170 | 65 | 22.9 | |
| 38号土坑 | 3 C 21 i | | 黒褐色粘質シルト | (120) × 125 | 77 | | 貯蔵穴 |
| 39号土坑 | 3 C 22 h | | 黒褐色粘質シルト | 185 × (148) | 15 | 30.8 | |
| 40号土坑 | 3 C 21 h | | 黒褐色粘質シルト | 92×77 | 15 | | |
| 41号土坑 | 3 C 22 h | | 黒褐色粘質シルト | 117×91 | 10 | | |
| 42号土坑 | 3 C 22 g | | 不明 | 126×77 | 33 | | |
| 43号土坑 | 3 C 22 g | | 黒褐色粘質シルト | 105×85 | 13 | | |
| 44号土坑 | 3 B 23 g | | 黒褐色粘質シルト | 92×77 | 13 | | |
| 45号土坑 | 3 C 23 i | 46号土坑 | 黒褐色粘質シルト | 80×61 | 9 | | |
| 46号土坑 | 3 C 23 i | 45号土坑 | 黒褐色粘質シルト | 124 × (77) | 13 | | |
| 47号土坑 | 3 C 24 j | | 黒褐色粘質シルト | 75×68 | 12 | | |
| 48号土坑 | 3 C 25 n | | 黒褐色粘質シルト | 176×150 | 18 | 9.7 | |
| 49号土坑 | 3 C 22 m | | 黒褐色粘質シルト | 164×100 | 16 | | |
| 50号土坑 | 4 C 1 n | | 黒褐色粘質シルト | 91×75 | 14 | 0.9 | |
| 51号土坑 | 4 C 1 n | | 黒褐色粘質シルト | 98×88 | 13 | | |
| 52号土坑 | 3 C 25 o | | 暗褐色粘質シルト | 150×114 | 21 | | |
| 53号土坑 | 4 C 1 n | | 暗褐色粘質シルト | 190×105 | 9 | 11.2 | |
| 54号土坑 | 4 C 1 p | 55号土坑 | 不明 | 175×147 | 32 | | |
| 55号土坑 | 4 C 1 p | 54号土坑 | 黒褐色粘質シルト | (200) × 134 | 44 | 575.8 | |
| 56号土坑 | 4 C 1 o | | 黒褐色粘質シルト | 168×116 | 16 | 47.7 | |
| 57号土坑 | 4 C 2 o | | 黒褐色粘質シルト | 145×125 | 21 | | |
| 58号土坑 | 4 C 2 o | | 黒褐色粘質シルト | 107×100 | 8 | | |
| 59号土坑 | 4 C 2 p | | 黒褐色粘質シルト | 156×95 | 12 | | |
| 60号土坑 | 3 C 25 s | | 暗～黒褐色粘質シルト | 145×110 | 15 | | |
| 61号土坑 | 3 C 24 t | | 黒褐色粘質シルト | 155×127 | 43 | | |
| 62号土坑 | 4 C 2 u | | 黒褐色粘質シルト | (260) × 146 | 62 | | |
| 63号土坑 | 4 C 2 u | | 暗～黒褐色粘質シルト | (185) × 187 | 36 | | |

648は破損が激しいが、単節LRを地文とし、その上から隆帯が付く。649は深鉢の胴部片で無節Lが施文される。650は複節RLRを地文とし、沈線による楕円形文が描かれる。区画外の地文は磨り消されていない。651は深鉢の胴部片で単節LRのみが施文される。

(時期) いずれの上坑も出土遺物や埋土の様相から縄文時代中期後葉に比定される。

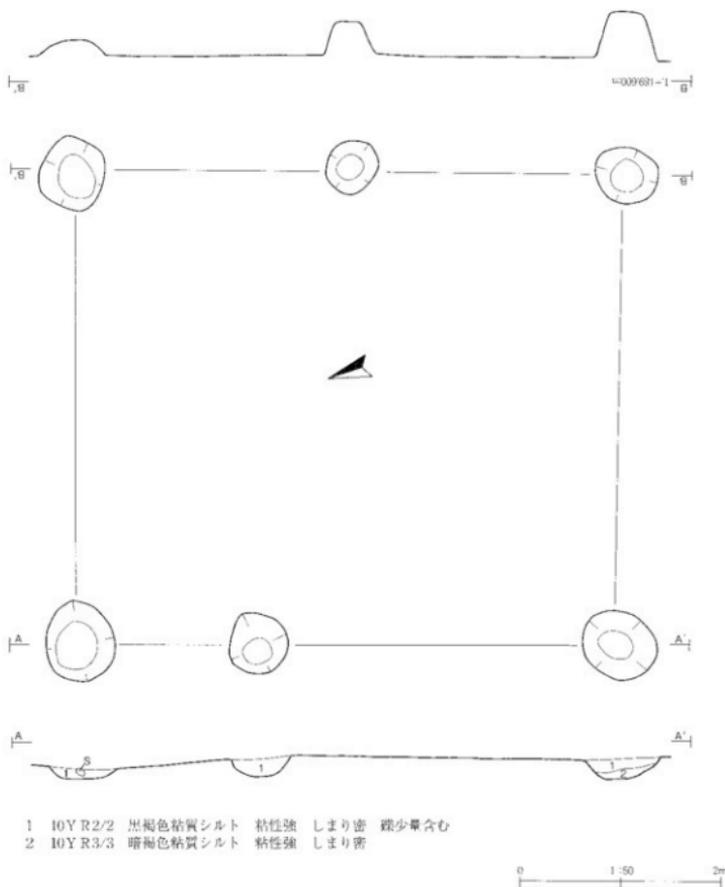
④ 掘立柱建物

3棟検出した。Ⅶ層（砂礫層）で検出しており、比較的、柱穴は明瞭であった。3棟のうち2棟は調査区外に及んでおり、遺構の全容は不明であるが、埋土の様相や柱穴埋上から縄文中期後葉に比定される土器片が出土していることから、縄文時代中期後葉の遺構と判断した。

1号掘立柱建物（第169・172図、写真図版65・104）

〈位置〉調査区東側、3 C 22 h グリッドに位置する。1 m 北東側には34号住居跡が隣接する。

〈検出状況〉Ⅶ層上面で黒褐色を呈する柱穴のプランを検出し、それが複数2.7 m 間隔で並び、またその西側でさらに同じプランが同一方向に並ぶのを確認し、掘立柱建物と判断した。



第169図 1号掘立柱建物

〈重複関係〉柱穴の重複関係はないが、範囲内に46号、47号土坑が重複する。新旧関係は不明である。

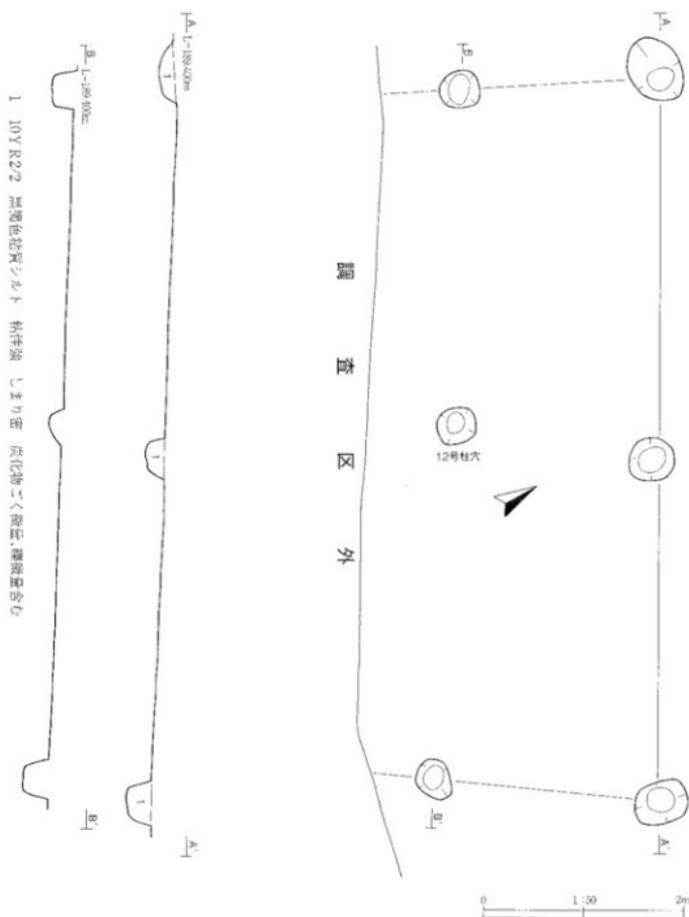
〈平面形〉梁間5.5 m、桁行き4.8 mを測る。面積は26.4㎡である。柱穴は6本である。

〈方位〉長軸方向からN-18° -Wを測る。

〈柱穴埋土〉黒褐色粘質シルトを主体とする。柱痕跡は認められない。深さは浅く、10～40cmである。

〈出土遺物〉柱穴から土器片2点(652・653)が出土している。652は深鉢の胴部片で、Ⅲ群1類に相当する。隆帯による渦巻き文がつく。隆帯向脇は沈線により、地文が磨り消されている。653は深鉢の胴部片で単筋R1を地文とし、沈線文が描かれる。

〈時期〉出土遺物から縄文時代中期後葉に比定される。



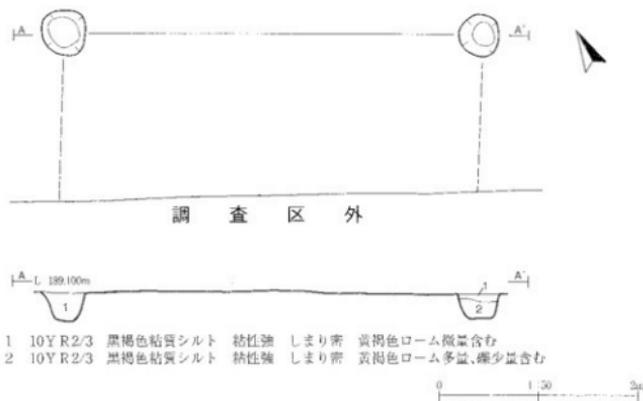
第170図 2号掘立柱建物

2号掘立柱建物 (第170・172図、写真図版65)

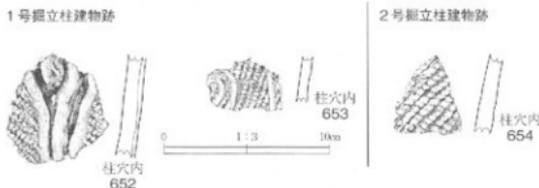
- 〈位置〉調査区東側、3 C 25 j グリッドに位置する。1 m 南東側に3号掘立柱建物が隣接する。
- 〈検出状況〉Ⅶ層上面で黒褐色のプランの柱穴3個が3.5 m 間隔で直線上に並んでいるのを確認した。またこれらの柱穴群に平行して3個の柱穴が並んでいるのを確認し、掘立柱建物であると判断した。平行する2列の柱穴群は間隔が2.2 m と狭く、これらの柱穴群のみで構成されるとは考えられず、南側の調査区外に及ぶものと思われる。
- 〈重複関係〉柱穴の重複関係はないが、範囲内に48号土坑が重複する。新旧関係は不明である。
- 〈平面形〉本遺構は調査区外に及ぶものと思われる。検出した柱穴から、平面形は長方形を呈すると思われ、梁間7.3 m を測り、桁行きは2.8 m 以上と推定される。
- 〈方位〉長軸方向からN-60° -Wである。
- 〈柱穴埋土〉黒褐色粘質シルトを主体とする単層である。柱痕跡は認められない。深さは浅く、検出面から最深20 cm である。
- 〈出土遺物〉柱穴から土器片1点(654)が出土している。深鉢の胴部片でⅢ群6類に含まれる。単節RLが施文される。
- 〈時期〉柱穴から出土した土器と柱穴埋土の様相から縄文時代中期後葉に比定される。

3号掘立柱建物 (第171図、写真図版65)

- 〈位置〉調査区東側、4 C 1 k グリッドに位置する。1 m 北西側に2号掘立柱建物跡、2 m 東側に50号土坑が隣接する
- 〈検出状況〉Ⅶ層上面で黒褐色を呈する柱穴状のプラン2個を確認した。ただし、この2個以外に検出しなかったため、調査区外に及ぶ、掘立柱建物であると判断した。
- 〈重複関係〉なし。
- 〈平面形〉調査区外に及ぶものと思われるので、不明である。柱間は4.2 m を測る。
- 〈方位〉柱穴2個を結んだ線は、N-63° -Wである。
- 〈柱穴埋土〉黒褐色粘質シルトを主体とする。柱痕跡は認められない。深さは検出面から30 cm を測る。
- 〈出土遺物〉なし
- 〈時期〉出土遺物がないが、埋土の様相から縄文時代中期後葉に比定される。



第171図 3号掘立柱建物



第172図 掘立柱建物出土遺物

⑤ 柱穴状土坑 (第173図)

形態が円形基調を呈し、径20cm以下の遺構の中が、調査区全域から14基見つかっている。ただし、位置はそれぞればらばらであり、前述の掘立柱建物のように列状に並んでいるわけではない。これらについて便宜的に「柱穴状土坑」とし、まとめて記述する。なお、図面は特別作成していないので、第6～8図の遺構配置図を参照していただきたい。

各柱穴状土坑の位置は、1～3号柱穴状は調査区北側の7～9号土坑や13号土坑と隣接する。4～9号土坑は、調査区中央に位置し、特に25～31号土坑と隣接する。10～13号土坑は、調査区東側に位置し、特に土坑群や掘立柱建物跡群と同じ場所に分布する。

埋土の様相は、いずれも暗～黒褐色粘質シルトを主体とする単層であった。最も深いものは3号土坑で35.6cmを測る。

埋土中から土器片が出土している。ただしいずれも小片であり、遺構に伴うものではない。655は縄文のみが施文される深鉢の胴部片である。656は深鉢の口縁部片で、Ⅲ群6類に相当する。657は深鉢の口縁部片でⅢ群3類に相当する。658・669は深鉢の胴部片で658は単節LRを、659は複節RLRを施文する。

いずれの遺構も位置関係を考えると、単発的で、それぞれの機能が推定できない。また出土遺物も少なく、時期の特定も難しいが、埋土中から出土した土器片や周辺の遺構と埋土の様相が類似することから、縄文時代中期に比定されるものと推定できる。

第7表 柱穴状土坑一覧

| 遺構内 | 位置(グリッド名) | 深さ(cm) | 検出面標高(m) | 底面標高(m) |
|----------|-----------|--------|----------|---------|
| 1号柱穴状土坑 | 2A 6 o | 30.5 | 193.620 | 193.315 |
| 2号柱穴状土坑 | 2A 7 p | 19.5 | 193.510 | 193.315 |
| 3号柱穴状土坑 | 2A 7 r | 50.2 | 193.230 | 192.728 |
| 4号柱穴状土坑 | 2B 24 e | 35.6 | 191.538 | 191.228 |
| 5号柱穴状土坑 | 3B 2 f | 31.0 | 191.214 | 190.987 |
| 6号柱穴状土坑 | 3B 3 h | 22.7 | 191.220 | 191.094 |
| 7号柱穴状土坑 | 3B 3 h | 12.6 | 191.190 | 191.011 |
| 8号柱穴状土坑 | 3B 3 h | 24.5 | 191.232 | 190.987 |
| 9号柱穴状土坑 | 3B 5 o | 26.0 | 190.690 | 190.430 |
| 10号柱穴状土坑 | 3C 21 f | 23.5 | 189.477 | 189.242 |
| 11号柱穴状土坑 | 3C 2 2 f | 18.0 | 189.463 | 189.283 |
| 12号柱穴状土坑 | 3C 25 k | 19.8 | 188.991 | 188.189 |
| 13号柱穴状土坑 | 4C 1 1 | 27.7 | 188.977 | 188.700 |
| 14号柱穴状土坑 | 4C q | 19.4 | 189.622 | 189.428 |



第173図 柱穴状土坑出土遺物

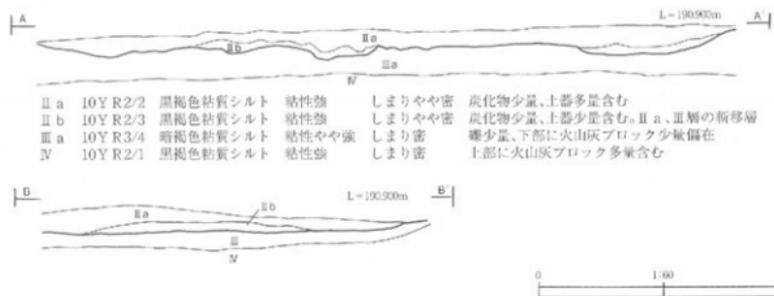
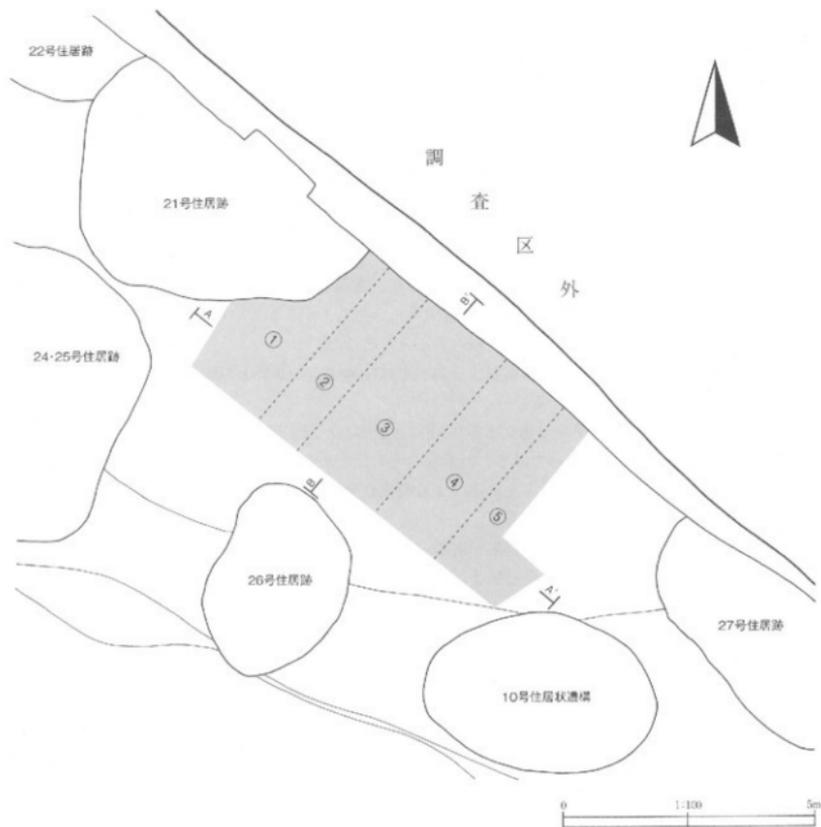
⑥ 包含層 (第174・175図、写真図版104・105)

〈位置・検出状況〉調査区中央3B8r～3B9sグリッド付近でⅡ層土が堆積する場所が確認できた。調査区内でⅡ層土が堆積するのはこの範囲のみであり、遺物を多量に包含する。数カ所に渡り、トレンチを入れ、遺構の有無などを確認したが、遺構らしき立ち上がり認められず、灰や焼土範囲が検出することもないので、「包含層」として報告することとした。

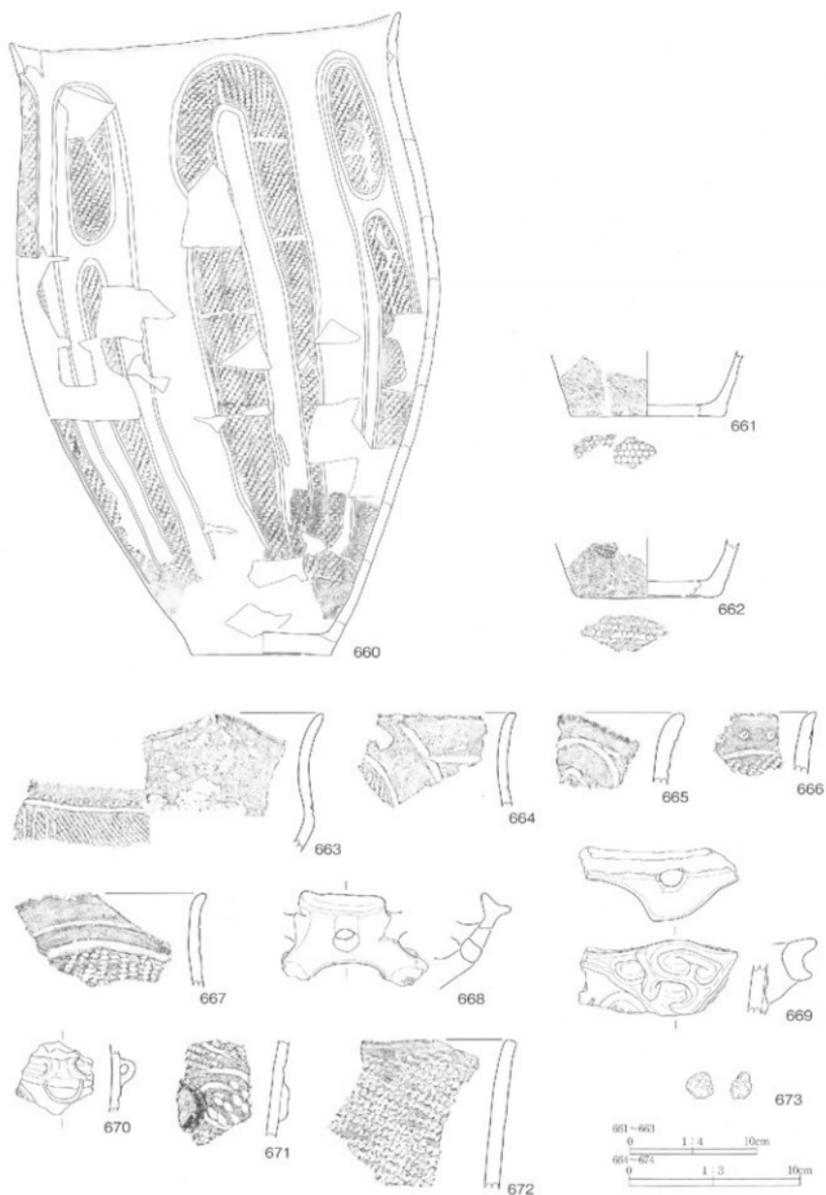
〈規模〉包含層は南から北に緩やかに傾斜する地形上に位置する。Ⅱ層土の堆積は20cmを測り、範囲全体から、土器片がみつかった。

〈遺物〉包含層範囲内のⅡ層中から縄文土器19900.8gが出土した。遺物の取り上げは、包含層の範囲を便宜的に5箇所に分割して行っている。出土量の内訳は①が2181.5g、②が1802.3g、③が7120.0g、④が6040.9g、⑤が2756.1gで、③・④に集中する傾向が窺えた。出土した土器は、小片がほとんどで器形が復元できたものは660のみである。

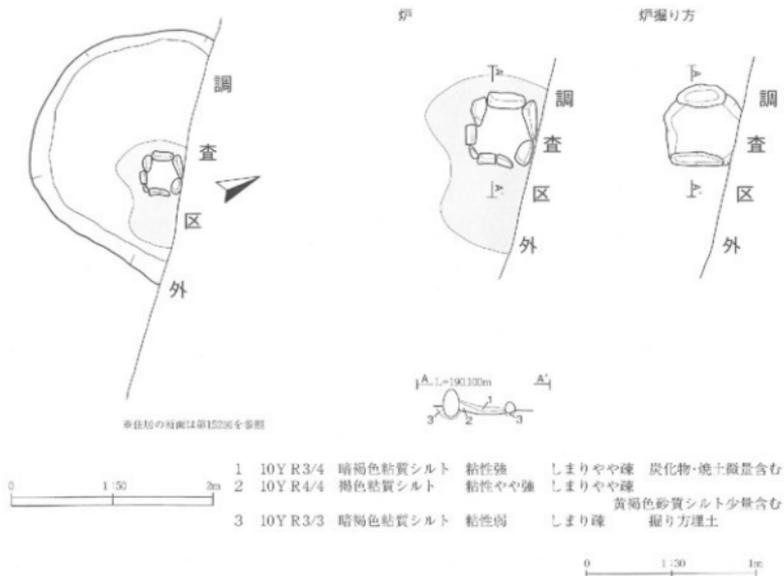
660は深鉢で、全体的に傾いている器形である。Ⅲ群4類に相当し、文様は口縁部から胴部にかけて、沈線による楕円形区画文が縦に並び一部、並び合う区画文どうしが口縁部付近で連結する。区画内は、単節RLを充填手法で施文している。661・662は底部片である。底面には圧痕文が見受けられる。663は深鉢の口縁部片で、波状口縁を呈する。口縁部は無文であり、胴部とは横位の沈線と刺突文とで区画される。胴部は沈線で方形の区画文を施文する。664・665は深鉢の口縁部片で沈線による曲線文と縄文が施文される。666も同様な文様が施文され、刺突文が横位に連続する。668・669は橋状把手で縦位に円形の穿孔が施される。670は深鉢胴部片で横位の把手が付く。胴部には沈線による区画文が施文される。671は深鉢の胴部片で円形の突起が付き、縄文を地文とし、刺突と沈線が施文される。672はⅢ群6類の深鉢の口縁部片で複節LRLが施文される。



第174図 包含層範囲図



第175図 包含層出土遺物

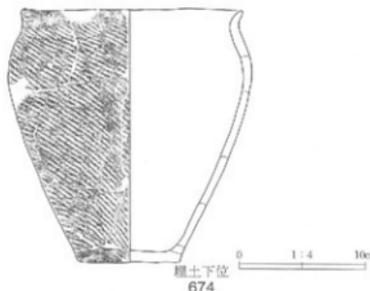


第176図 37号住居跡

(3) 縄文時代晩期の遺構

① 竪穴住居跡

37号住居跡（第176・177図、写真図版40・41・105）
 〈位置〉調査区中央、3 B 8 t グリッドに位置する。
 〈検出状況〉11号住居状遺構の遺構底面上で円形のプランを検出した。接している調査区壁を再度観察したところ、11号住居状遺構を切るプランであることが分かり、掘り下げたところ、深鉢（674）と石間が検出したので、竪穴住居跡と判断した。
 〈重複関係〉11号住居状遺構、15号土坑と重複する。本遺構が最も新しい。
 〈形態・規模〉本遺構は東側が調査区外に及んでおり、住居の全容が分からないものの、径2.5 m前後の円



第177図 37号住居跡出土遺物

形を呈するものと思われる。深さは検出できた部分で最深38cmを測る。

〈埋土〉黒褐色粘質シルトを主体とし、3層に分けられる。埋土中には炭化物や焼土粒が混入する。

〈床面・壁〉炉が検出したVI層面を床面とする。ほぼ水平である。炉の周辺で硬化面が認められた。

壁は緩やかに外へと広がりながら立ち上がる。

〈柱穴・壁溝〉なし。

〈炉〉床面の中央より東側に位置する。石囲炉である。方形を呈し、規模は4.6×4.2cm、深さは床面から3cmを測る。炉石は偏平な自然礫を用いる。北西、南東側の大きい炉石は深く差し込んで据えられ、他の炉石は握り方上に据えるのみである。炉内は埋土中に炭化物や焼土粒が混入する程度である。また炉を囲うように、その周辺約1.1mの範囲が硬化している。

〈出土遺物〉埋土下位から深鉢(674)1点のみが出土した。674は横倒しの状態で出土しており、ほぼ完形である。胴部上半に最大径をもち、口縁部でくびれて外傾しながら立ち上がる。口縁部が無文であるが、胴部は底部まで単節R Lが施文される。

〈時期〉出土した土器(674)から縄文時代晩期と思われる。

(4) 遺構外から出土した遺物(第178～183図、写真図版105～108・114)

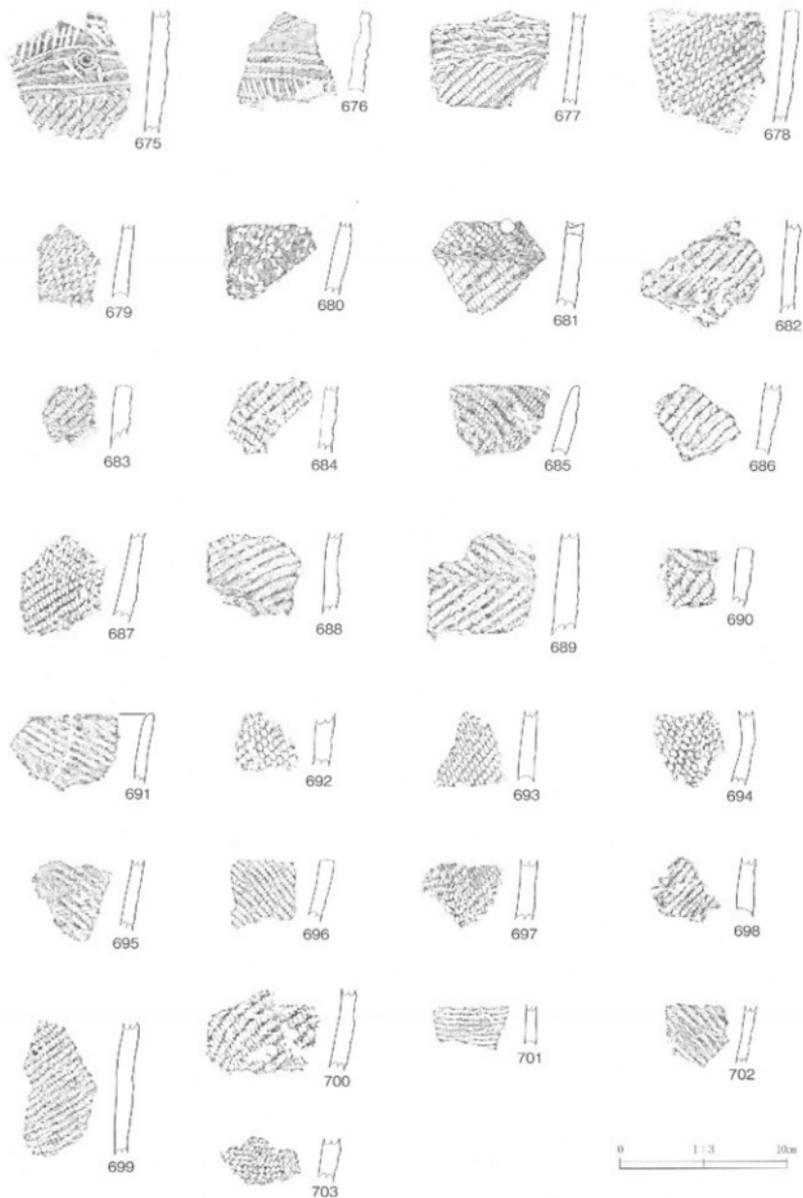
本遺跡では遺構外からも遺物が見ついている。いずれも遺構検出面であるⅢ層上面から出土している。出土量は縄文土器40143.3g、石器8点、土製品11点である。多くは竪穴住居跡が密集する場所から出土している。土器は出土量だけ見ると多く感じるが、ほとんどが小片であり、また集中して見つかることもなく調査区内に散在していたものである。器形が復元できたものも715のみで、あとは小片である。また遺構外からは、前期初頭、後期前葉の土器も破片資料ではあるが見ついている。見つかったのはⅢ層上面であり、出土遺物にかなりの時間幅があるが、それらを層位的に取り上げることは出来なかった。なお、晩期前葉の土器片が1点(765)が出土したが、これは中・近世葉である1号墓からの埋土上位から出土している。流れ込みであることが分かっているので、765については、遺構外として扱い、この項で記載した。また出土状況の目立った傾向としては、縄文時代前期に比定される土器群(675～704)が調査区東側から多く出土していることが挙げられる。

土器・土製品

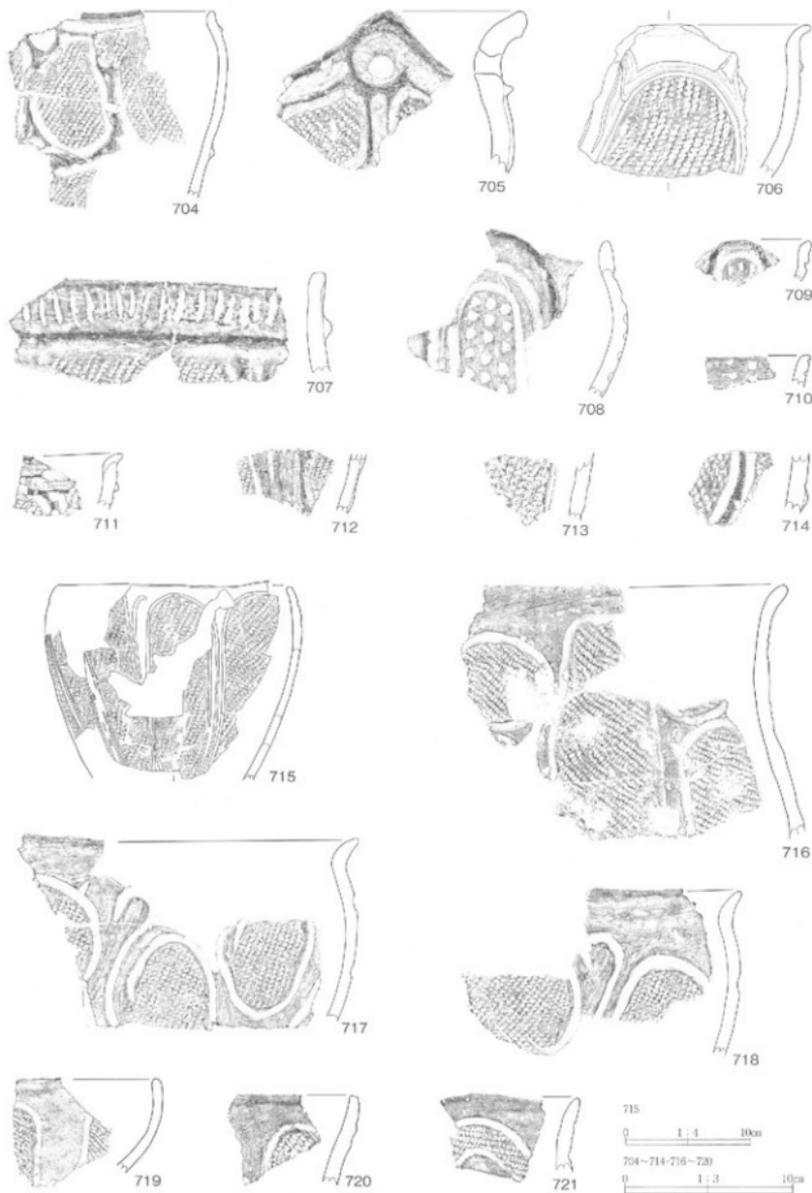
675～704はⅡ群に比定される土器群で、いずれも小片である。土器の時期は、縄文時代前期前葉に相当する。胎土に繊維が混入されているものが多い。

675は口縁部片で口唇部が欠損している。口縁部文様帯には押圧縄文により渦巻き文を描き、その両脇には横位の押圧縄文が4段に巡る。胴部には単節L Rが施文される。676は横位の押圧縄文が3段に巡り、その下には縦位の短い刻みが巡る。677は口縁部文様帯には押圧縄文が施文され、その下には単節L Rが施文される。678～703は縄文のみが施文される。無節の縄文が施文されるもの(686・691・695・696・701・702)、単節縄文のみが施文されるもの(678・679・692・693・697～700)、非結束の羽状縄文が施文されるもの(681～690)、組紐?が施文されるもの(680・694)が見受けられる。

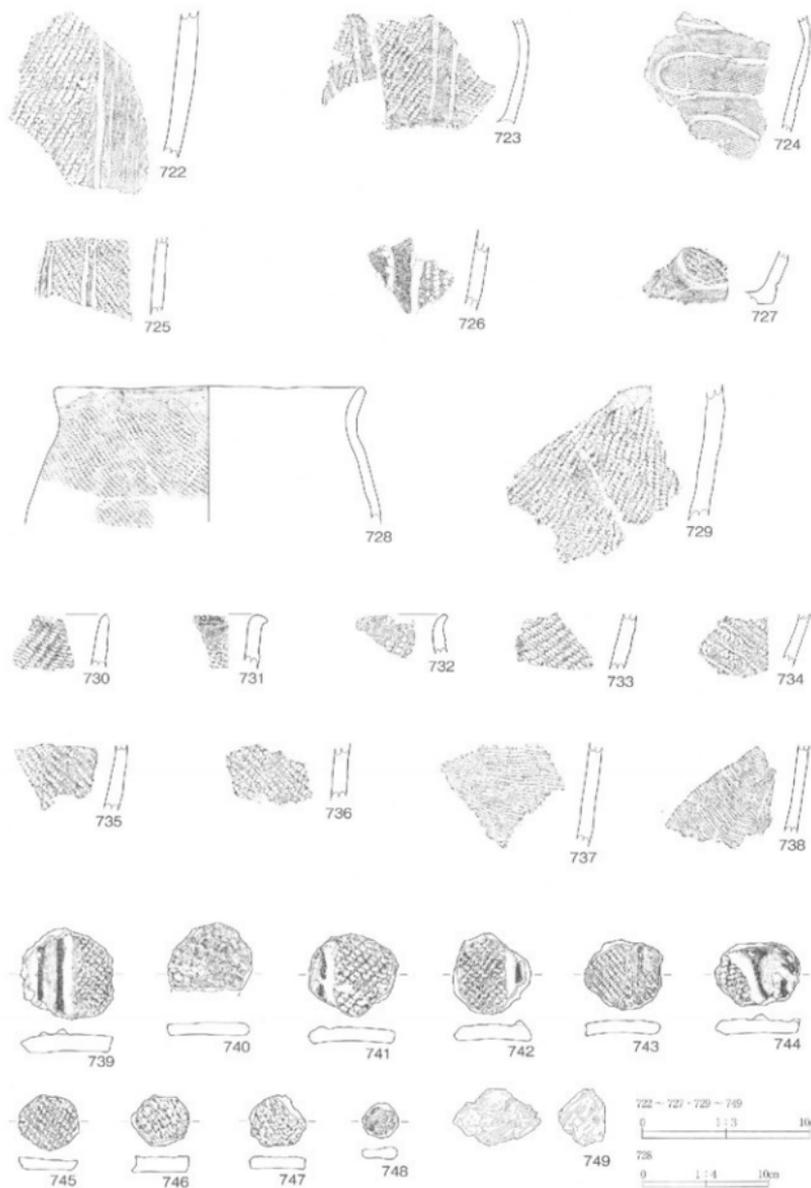
704～738はⅢ群に比定されるものである。715、728以外は、破片資料である。土器の時期は中期後葉～末葉に相当する。704は口縁部から胴部の大形破片である。複節R L Rを地文とし、その上から隆帯により区画文が描かれる。705は深鉢の口縁部片で、波状口縁を呈する。波頂部に隆帯による横位の渦巻き文が描かれ、その中心に円孔が施される。隆帯は胴部へと垂下し、区画文を形成する。706は口縁部片で、外へと屈曲する器形を呈する。複節R L Rを地文とし、隆帯による楕円形区画文が施される。区画の隆帯は、口唇部へ向かい、突出している。707は口縁部文様帯を横位の隆帯で区画し、口縁部には縦位のやや粗い刻みが巡る。708は口縁部に楕円形の隆帯がつき、区画内には沈線による楕円形区画文が描かれ、区画内には棒状工具による刺突文が充填される。710は深鉢の口縁部



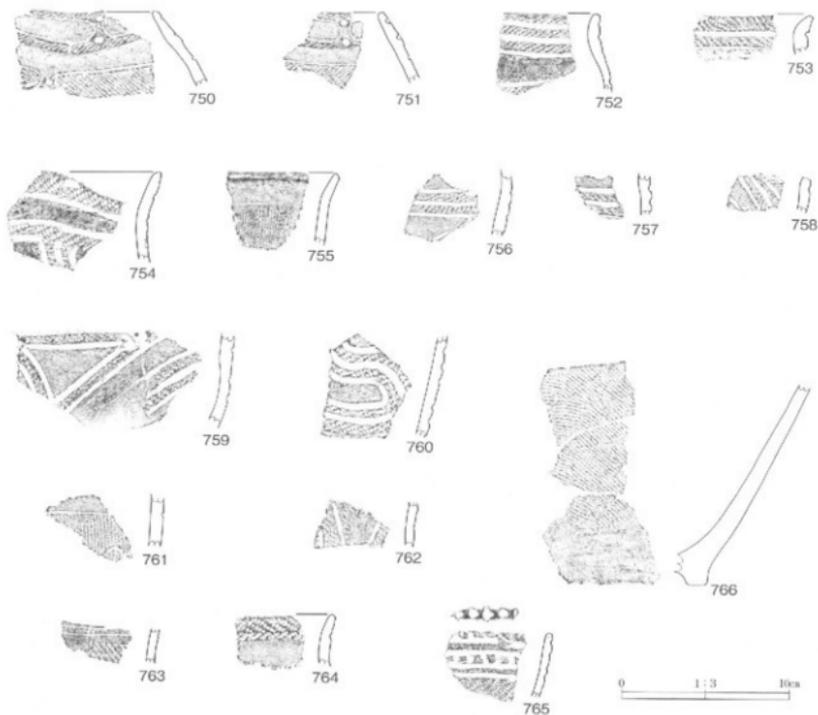
第178回 遺構外出土遺物・前期



第179図 遺構外出土遺物・中期(1)



第180図 遺構外出土遺物・中期(2)

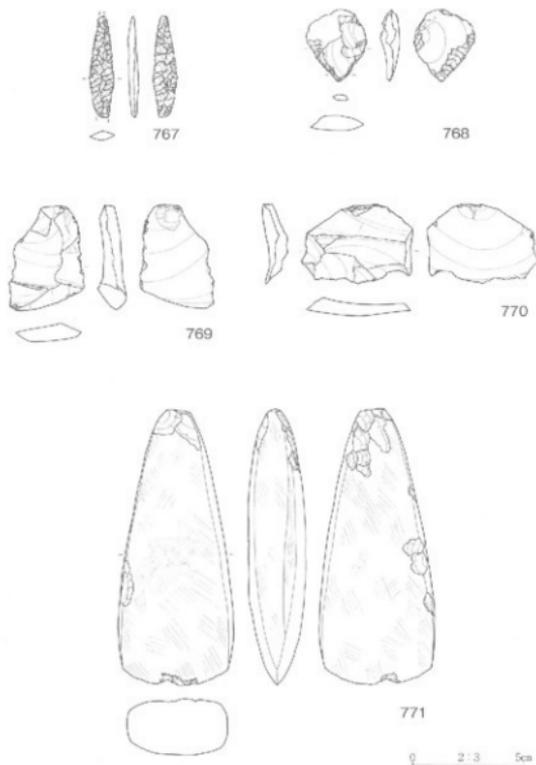


第181図 遺構外出土遺物・後晩期

片で押し引き状の刺突文が連続する。715～727はⅢ群3類に相当する土器群である。715は沈線がやや稚拙で二重になっている箇所がある。716は口縁部から胴部の大形破片で、胴部上半でくびれ、口縁部が外反する器形である。胴部には沈線による方形区画文と円形区画文が並ぶ。717・718は深鉢の口縁部片で、口縁部が屈曲し、外へと開く器形である。口縁部は無文である。いずれも複節RLRを地文とし、胴部にはやや太い沈線で楕円形区画文が描かれる。また区画間には沈線による渦巻文が描かれる。721は口縁部片で沈線により曲線的なモチーフの区画文が描かれ、区画内には充填手法により単節LRが施文される。724も同様に曲線的な区画文が施文される。

728～738はⅢ群6類に相当する土器群である。728は胴部が膨らみ、口縁部が外傾する器形の深鉢で、口縁部が無文で、胴部には単節LRが施文される。他に複節の縄文が施文されるものが1点(731)があるが、単節の縄文を施文するものが多い(729・730・732～736)。少ないが無節の縄文が施文されるもの(737・738)がある。

739～740は土製円板である。いずれも深鉢などの土器片を転用している。739・741・742・736は隆帯が付いており、Ⅲ群1か2類に相当する深鉢の転用であることが窺える。749は粘土塊である。棒状工具により刺した痕跡が数カ所に渡り確認できる。



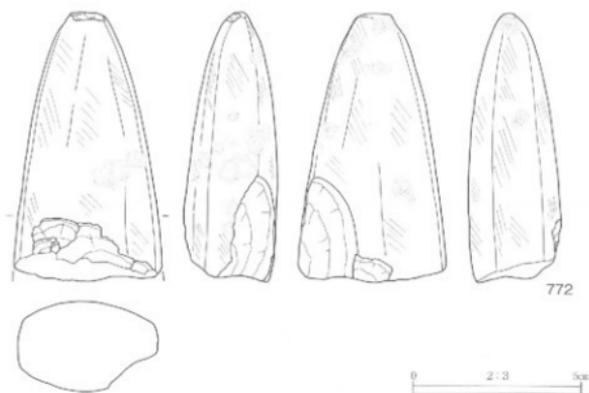
第182図 遺構外出土遺物・石器(1)

750～763はIV群に比定される土器群である。いずれも小片である。750・751は口縁部がすはまる器形で細い沈線により、「工」字状のモチーフに区画文が描かれ、区画内には縄文と円形の刺突が施文される。752・753は2段の帯縄文が横位に巡る。756～760・762は胴部片で三角形や曲線的なモチーフの帯縄文が施文される。761は縄文施文後に横位に直線と曲線の沈線の沈線が施文される。

765は縄文晩期に比定される土器片で、本遺跡からはこれ1点であった。口唇部に押印文が施され、波状を呈する。口縁部には羊歯状文が施文される。

石器

767～772は石器である。767は石鏃で先端部と基部を欠損する。768はスクレイパーで、縁辺部の両面から刃部を作出するための押圧剥離を施している。縁辺部の縁が鋭角に尖っており、石鏃に類似するが鏃部には二次加工が拙いので、スクレイパーとしている。769・770はフレイクである。いずれも自然面は残らない。771・772は磨製石斧で、771は刃部の一部が欠けており、772は刃部そのものが折れて欠損している。



第183図 遺構外出土遺物・石器（2）

コハク

遺構外からもコハクが出土している（写真図版115⑥～116⑩）。多くは調査区南側の土坑や掘立柱建物が分布する場所から見つかっており、これらの遺構と関連するものと思われる。出土したコハクはいずれも非成品であり、人の手が増えられた痕跡は認められない。また大きさも様々である。

（須原）

3 中・近世の遺構と遺物

（1）中・近世墓

本遺跡から5基確認し、そのうち1・3・5号墓から人骨が出土している。調査区中央3 B10 r グリッドから調査区南側3 B19 d グリッド付近に分布する（第184図）。1号墓は調査区中央に1基で、他の墓よりも離れている。2～4号墓は調査区東側に密集して位置するが、5号はそれよりやや離れている。したがって、これらは所謂墓地ではないと考えられる。

1・3・5号墓からは古銭が出土しているが、1・3号墓からは黒寧元寶が出土しているので、中世墓の可能性もある。5号墓は、寛永通宝であり近世墓と考えられ、したがって、全てが同時期に構築されたものではないことが窺える。

1号墓（第185図、写真図版66・114）

〈位置〉調査区中央の3 B10 r グリッドに所在する。

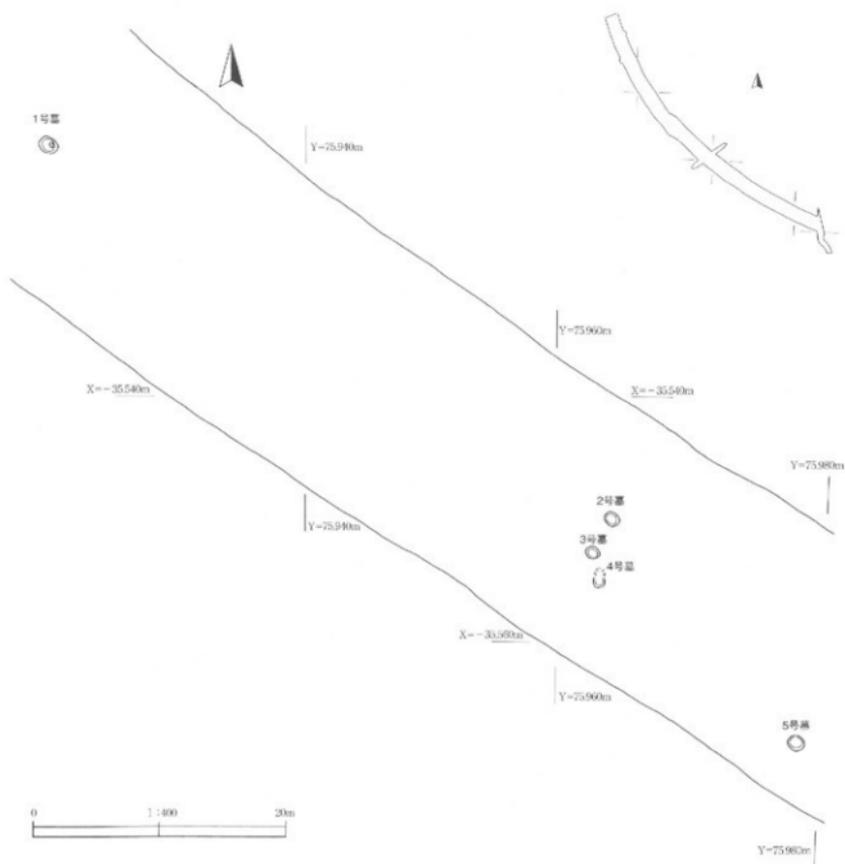
〈検出状況〉Ⅲ層上面で、黒褐色の広がりで確認した。

〈重複関係〉なし。

〈形態・規模〉開口部は不整な円形を呈する。規模は径140cm、深さは検出面から32cmを測る。

〈埋土〉黒褐色粘質シルトを主体とする単層である。

3 近世の遺構と遺物

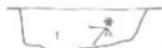


第184図 中、近世墓位置図

1号墓

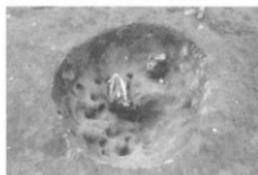


1 A-L=191.200m

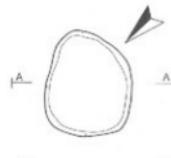


1 10Y R2/2 加齢色鉄質シルト 粘付強
しまりやや硬 炭化跡少量、黄褐色砂質シルト少量混む

1号墓 骨 出土状況



2号墓



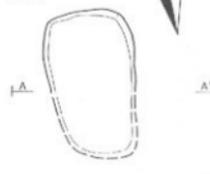
1 A-L=130.400m

1 10Y R2/2 加齢色鉄質シルト 粘付強
しまり弱 炭化跡少

3号墓 骨 出土状況



4号墓



1 A-L=190.400m

1 10Y R2/2 加齢色鉄質シルト 粘付強 しまり

3号墓



1 A-L=130.300m

1 10Y R2/2 黄褐色鉄質シルト 粘付強
しまりやや弱 骨片、古銭混む

5号墓 骨 出土状況



5号墓

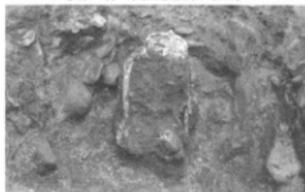


1 A-L=189.700m

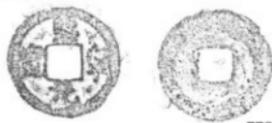


0 1:50 2m

5号墓 骨 出土状況(アップ)



1号墓出土



773

3号墓出土



774

5号墓出土



775



776

第186図 中、近世墓出土古銭

〈出土遺物〉埋土中から熙寧元寶（1068年初鑄）が1点出土した。

〈時期〉出土遺物から中世後半～近世と判断される。（須原）

2号墓（第185図、写真図版66）

〈位置〉調査区南側の3 B 19 d グリッドに所在する。

〈検出状況〉Ⅲ層上面で、楕円形状の黒褐色シルトの鮮明な広がりを確認した。

〈重複関係〉なし。

〈形態・規模〉楕円形を呈する。規模は長軸108cm×短軸87cm、深さ7cmである。削平を受けており、残存状況は不良である。

〈埋土〉小礫をわずかに含む黒褐色粘質シルトの単層である。〈出土遺物〉なし。

〈時期〉出土遺物がないので詳細は不明だが、後述する3号墓の埋土と特徴が酷似していることから、中世後半～近世の可能性が高い。

3号墓（第185図、写真図版66・114）

〈位置〉調査区南側の3 B 18 e グリッドに所在する。

〈検出状況〉暗褐色粘質シルトの上面で、楕円形状の黒褐色シルトの鮮明な広がりを確認した。

〈重複関係〉なし。

〈形態・規模〉隅丸方形を呈する。規模は長軸135cm×短軸98cm、深さ8cmである。2号墓同様削平を受けており、残存状況は不良である。

〈埋土〉黒褐色粘質シルトの単層である。埋土中に骨片、古銭を含む。

〈出土遺物〉人骨、古銭、少量の土器片が出土している。人骨は頭骨と足と見られる。出土状況から、北西に頭を向けて横向きに屈んだ状態で埋葬されていたものと考えられる。古銭は北宋銭の1つである熙寧元寶（1068年初鑄）である。文字の輪郭がはっきりしていないことから、模鑄銭の可能性もある。土器片には縄文土器も含まれているが、墓坑構築時の流れ込みの可能性が高い。

〈時期〉出土遺物から中世後半～近世と判断される。

4号墓（第185図、写真図版66）

〈位置〉調査区南側の3 B 19 d グリッドに所在する。

〈検出状況〉Ⅲ層上面で、楕円形状の黒褐色シルトの鮮明な広がりを確認した。

〈重複関係〉なし。

〈形態・規模〉楕円形を呈する。規模は長軸150cm前後×短軸92cm、深さ6cmである。2、3号墓同様削平を受けており、残存状況は良くない。また、北側は掘りすぎたため、規模は推定である。

〈埋土〉黒褐色粘質シルトの単層である。

〈出土遺物〉土器片が少量出土している。出土量は2、3号墓と比べると多いが、墓坑構築時の流れ

込みの可能性が高い。

〈時期〉3号墓の埋土と特徴が酷似していることから、中世後半～近世の可能性が高い。

5号墓（第185図、写真図版66・114）

〈位置〉調査区南側の3 B 19 d グリッドに所在する。

〈検出状況〉Ⅶ層上面で、略円形の黒色シルトの鮮明な広がりを確認した。

〈重複関係〉なし。

〈形態・規模〉略円形を呈する。規模は長軸130cm×短軸123cm、深さ60cmである。

〈埋土〉黒色粘質シルトの単層である。南西側に小礫を多量に含む。

〈出土遺物〉人骨、古銭が出土している。人骨は南東向きに屈んだ状態で埋葬されていた。頸部と頭部が別々の状態で出土している。古銭は1636～1659年の間に铸造された寛永通宝（古寛永）と、1668年～1683年の間に铸造された寛永通宝（新寛永）の2枚が埋土下位から重なった状態で出土している。

〈時期〉出土遺物から、近世と判断される。

(戸根)

Ⅶ 自然科学分析

(株) 加速器分析研究所

1 放射性炭素年代測定結果報告書 (AMS測定)

(1) 遺跡の位置と立地

袋帯遺跡は、岩手県宮古市和井内第21地割三十刈30-4ほか(北緯39° 41' 50"、東経141° 43' 20")に位置する。袋帯遺跡は閉伊川の支流、刈屋川によって形成された河岸段丘上に立地する。遺跡は刈屋川から10mほどの距離にあり、比高差は約20mである。

(2) 測定 の 意 義

竪穴住居の構築年代と、住居跡に伴う縄文土器の年代を推定する。

(3) 測定対象試料

測定対象試料は、竪穴住居跡30号住居跡の複式炉前庭部埋土内から出土した炭化物(No.1: IAAA-62263)、28号住居跡炉直上の2層から出土した炭化物(No.2: IAAA-62264)の2点である。

(4) 化学処理工程

- 1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- 2) AAA (Acid Alkali Acid) 処理。酸処理、アルカリ処理、酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸(80℃)を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001~1Nの水酸化ナトリウム水溶液(80℃)を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸(80℃)を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90℃で乾燥する。
- 3) 試料を酸化銅1gと共に石英管に詰め、真空ドで封じ切り、500℃で30分、850℃で2時間加熱する。
- 4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素(CO₂)を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出(還元)し、グラファイトを作製する。
- 6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着し測定する。

(5) 測定方法

測定機器は、3MVタンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。134個の試料が装填できる。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシェウ酸(HOxII)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また、加速器により¹³C/¹²Cの測定も同時に行う。

(6) 算出方法

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。

2) BP年代値は、過去において大気中の炭素¹⁴濃度が一定であったと仮定して測定された、1950年を基準年として遡る放射性炭素年代である。

3) 付記した誤差は、次のように算出した。

複数回の測定値について、 χ^2 検定を行い測定値が1つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、みなせない場合には標準誤差を用いる。

4) $\delta^{13}\text{C}$ の値は、通常は質量分析計を用いて測定するが、AMS測定の場合に同時に測定される $\delta^{13}\text{C}$ の値を用いることもある。

$\delta^{13}\text{C}$ 補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差 (‰:パーミル) で表した。

$$\delta^{14}\text{C} = [(^{14}\text{A}_S - ^{14}\text{A}_R) / ^{14}\text{A}_S] \times 1000 \quad (1)$$

$$\delta^{13}\text{C} = [(^{13}\text{A}_S - ^{13}\text{A}_{\text{PDB}}) / ^{13}\text{A}_{\text{PDB}}] \times 1000 \quad (2)$$

ここで、 $^{14}\text{A}_S$: 試料炭素の¹⁴C濃度: (¹⁴C/¹²C)_Sまたは (¹⁴C/¹³C)_S

$^{14}\text{A}_R$: 標準現代炭素の¹⁴C濃度: (¹⁴C/¹²C)_Rまたは (¹⁴C/¹³C)_R

$\delta^{13}\text{C}$ は、質量分析計を用いて試料炭素の¹³C濃度 ($^{13}\text{A}_S = ^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、PDB (白亜紀のペレムナイト (矢石) 類の化石) の値を基準として、それからのずれを計算した。但し、加速器により測定中に同時に¹³C/¹²Cを測定し、標準試料の測定値との比較から算出した $\delta^{13}\text{C}$ を用いることもある。この場合には表中に〔加速器〕と注記する。

また、 $\Delta^{14}\text{C}$ は、試料炭素が $\delta^{13}\text{C} = -25.0$ (‰) であるとしたときの¹⁴C濃度 ($^{14}\text{A}_R$) に換算した上で計算した値である。(1) 式の¹⁴C濃度を、 $\delta^{13}\text{C}$ の測定値をもとに次式のように換算する。

$$^{14}\text{A}_R = ^{14}\text{A}_S \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000))^2 \quad (^{14}\text{A}_S \text{として} ^{14}\text{C}/^{12}\text{C} \text{を使用するとき})$$

または

$$= ^{14}\text{A}_S \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000)) \quad (^{14}\text{A}_S \text{として} ^{13}\text{C}/^{12}\text{C} \text{を使用するとき})$$

$$\Delta^{14}\text{C} = [(^{14}\text{A}_R - ^{14}\text{A}_S) / ^{14}\text{A}_S] \times 1000 \text{ (‰)}$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気中の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしない $\delta^{14}\text{C}$ に相当するBP年代値が比較的良好でその只と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

¹⁴C濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC (percent Modern Carbon) がよく使われており、 $\Delta^{14}\text{C}$ との関係は次のようになる。

$$\Delta^{14}\text{C} = (\text{pMC} / 100 - 1) \times 1000 \text{ (‰)}$$

$$\text{pMC} = \Delta^{14}\text{C} / 10 + 100 \text{ (‰)}$$

国際的な取り決めにより、この $\Delta^{14}\text{C}$ あるいはpMCにより、放射性炭素年代 (Conventional Radiocarbon Age: yrBP) が次のように計算される。

$$T = -8033 \times \ln [(\Delta^{14}\text{C} / 1000) + 1]$$

$$= -8033 \times \ln (\text{pMC} / 100)$$

5) ^{14}C 年代値と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。

6) 校正暦年代の計算では、IntCal04データベース (Reimer et al 2004) を用い、OxCalv3.10校正プログラム (Bronk Ransley1995 Bronk Ransley 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger2001) を使用した。

(7) 測定結果

竪穴住居跡30号住居跡の複式か前庭部の炭化物 (No.1 : IAAA-62263) が4210 \pm 40yrBP (縄文時代中期中葉から後葉)、28号住居跡炉直上の炭化物 (No.2 : IAAA-62264) が4070 \pm 40yrBP (縄文時代中期後葉) の ^{14}C 年代である。暦年校正年代 ($1\sigma = 68.2\%$) は、No.1が2890BC ~ 2860BC (23.0%)・2810BC ~ 2750BC (38.0%)・2720BC ~ 2700BC (7.2%)、No.2が2840BC ~ 2810BC (9.1%)・2670BC ~ 2560BC (51.8%)・2520BC ~ 2490BC (7.4%) である。化学処理および測定内容に問題は無く、妥当な年代と考えられる。

(8) 調査者のコメント

今回、分析を依頼した意義・目的は(2)項にも述べられているとおりである。本遺跡は縄文時代中期後葉、大木9式期を中心とした集落遺跡であり、竪穴住居跡内から出土した炭化物の年代測定を試みることで県内でも出土事例の少ない、大木9式土器の実年代を示すことができるものと考え、実施した。測定対象とした、28号、30号住居跡はどちらも大木9式土器が多量に出土した竪穴住居跡であり、また床面上から埋土上位までの出土土器から推測される埋没時期の幅が狭く、そういった点での誤差は少ないものと思われる。ただし、床面上から出土した土器群などを概観すると、大木9式土器のなかでも、古い段階に相当するものと思われ、該期にみられる磨消縄文を伴う楕円形区画文などが出現する前の段階のものであることをお断りしておく。

(7)項に示された測定結果については、どちらの測定結果も妥当な数値と考える。当センターが行った発掘調査の中で、多くの炭素年代測定が行われているが、大木9式土器が検出した竪穴住居跡を対象とした盛岡市南の又遺跡(岩埋文第13集)では4370 \pm 90yrBPの結果が得られており、また大木10式土器を検出した竪穴住居跡を対象とした長者塚敷遺跡では4040 \pm 75yrBP、4390 \pm 120yrBP、4030 \pm 120yrBP、3980 \pm 110yrBPの結果が出ている。これらを参考としても、今回得られた結果が妥当なものであることが窺える。

参考文献

- Stuiver, M. and Polash, H.A. (1977) Discussion: Reporting of ^{14}C data. Radiocarbon, 19: 355-363
- Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program. Radiocarbon, 37 (2) 425-430
- Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43 (2A) 355-363
- Bronk Ramsey C., J. van der Plicht and B. Weninger (2001) 'Wiggle Matching' radiocarbon dates. Radiocarbon, 43 (2A) 381-389
- Reimer et al. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP. Radiocarbon 46, 1029-1058

第8表 放射性炭素年代測定結果

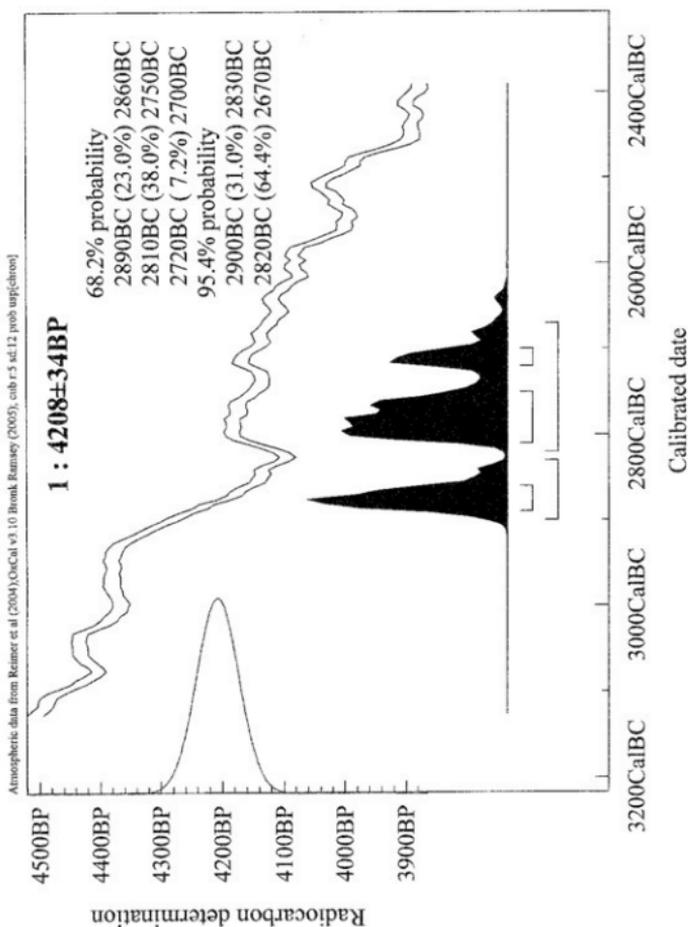
| IAA Code No. | 試料 | BP年代および炭素の同位体比 | |
|----------------------------------|---|----------------------------------|-----------------|
| IAAA-62263 | 試料採取場所 : 岩手県宮古市和井内第21地割 三上町30-4ほか 築新築跡 | Libby Age (yrBP) | : 4210 ± 40 |
| | | $\delta^{13}\text{C}$ (‰), (加速器) | = 22.88 ± 0.62 |
| | 試料形態 : 炭化物 | $\Delta^{14}\text{C}$ (‰) | = -407.8 ± 2.6 |
| | | pMC (%) | = 59.22 ± 0.26 |
| | 試料名 (番号) : 1 | $\delta^{13}\text{C}$ (‰) | = -10.52 ± 2.4 |
| (参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し | pMC (%) | = 59.48 ± 0.24 | |
| #1357-1 | | Age (yrBP) | : 4170 ± 30 |
| IAAA-62264 | 試料採取場所 : 岩手県宮古市和井内第21地割 三上町30-4ほか 築新築跡 | Libby Age (yrBP) | : 4070 ± 40 |
| | | $\delta^{13}\text{C}$ (‰), (加速器) | = -26.55 ± 0.58 |
| | 試料形態 : 炭化物 | $\Delta^{14}\text{C}$ (‰) | = -397.8 ± 2.6 |
| | | pMC (%) | = 60.22 ± 0.26 |
| | 試料名 (番号) : 2 | $\delta^{13}\text{C}$ (‰) | = 399.7 ± 2.5 |
| pMC (%) | | = 60.03 ± 0.25 | |
| (参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し | Age (yrBP) | : 4100 ± 30 | |
| #1657-2 | | | |

第9表 参考資料：暦年較正用年代

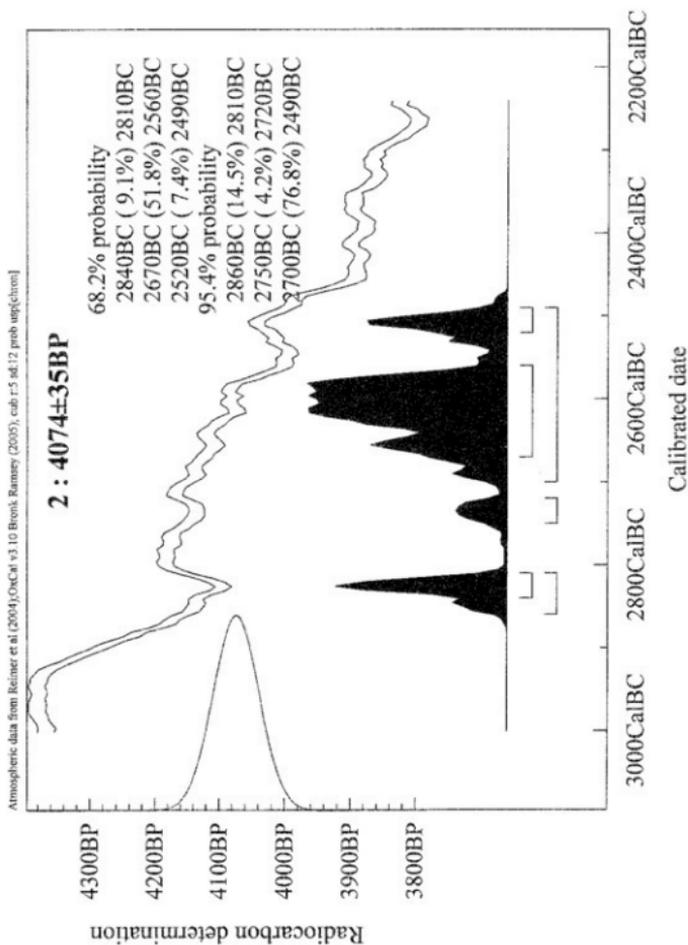
| IAA Code No. | 試料番号 | Libby Age (yrBP) |
|--------------|------|------------------|
| IAAA 62263 | 1 | 4208 ± 34 |
| IAAA 62264 | 2 | 4074 ± 35 |

ここに記載するLibby Age (年代値) と誤差は下1桁をえめない例です。

【参考値：暦年補正 Radiocarbon determination】



【参考値：暦年補正 Radiocarbon determination】



使用プログラム・OxCal v3.10

2 火山灰分析

バリノ・サーヴェイ株式会社

(1) はじめに

岩手県宮古市巖帯遺跡は、北上山地中部を流れる刈屋川の右岸に分布する、狭小な段丘平坦面上に位置する。今回の発掘調査では、縄文時代中期後葉とされる時期の竪穴住居跡や土坑などの遺構、およびそれらに伴う土器や石器などの遺物が多数確認されている。

今回の分析調査では、遺構検出面よりも下位の土層に認められた火山灰（テフラ）とされるブロック状の堆積物について、その碎屑物の性状を明らかにし、テフラである場合には、既知のテフラとの対比を行う。

(2) 試料

試料は、発掘調査区内に作成された基本層序4の土層断面より採取された。この土層断面は、発掘調査所見により、上位よりⅠ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵの各層に分層されている。Ⅰ層は厚さ30～40cmの黒褐色を呈する耕作土、Ⅰ層は厚さ10～20cmの暗褐色土であり、上面より縄文時代中期の遺構が検出されている。Ⅳ層は厚さ10～20cmの黒色土、Ⅴ層は厚さ10cmほどの褐色土とされ、Ⅵ層は砂質の黄褐色土とされている。

火山灰はⅢ層下部からⅣ層上部にかけての層位に、厚さ5cm程度のブロック状堆積物として散在している。試料は、Ⅲ層下部の火山灰から採取された1点である。採取されたブロックは、やや明るい褐色を呈する砂質シルトである。

(3) 分析方法

試料は、その外見上の特徴から、火山ガラス質テフラのブロックと考えられるため、ここでは、試料の重鉱物組成と火山ガラス比を求める。処理手順は以下の通りである。

試料約40gに水を加え超音波洗浄装置により分散、250メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた粒径1/4mm-1/8mmの砂分をポリタングステン酸ナトリウム（比重約2.96に調整）により重液分離、重鉱物を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定する。重鉱物同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とする。

火山ガラス比は、重液分離した軽鉱物分における砂粒を250粒数え、その中の火山ガラスの量比を求める。火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。また、軽鉱物においても変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とする。

さらに火山ガラスについては、その屈折率を測定することにより、テフラを特定するための指標とする。屈折率の測定は、古澤（1995）のMAIOTを使用した温度変化法を用いた。

(4) 結 果

結果を表1、図1に示す。重鉱物組成では、斜方輝石が多く約40%を占め、次いで単斜輝石、不透明鉱物の順に多く、それぞれ20%程度と10数%を占める。さらに、数%程度の角閃石と微量の緑レン石が含まれる。なお、鏡下の観察では、斜方輝石、単斜輝石、不透明鉱物の各鉱物は新鮮な結晶が多く、火山ガラスの付着した結晶も比較的多く認められる。一方、角閃石と緑レン石は、いずれも結晶の表面が風化しており、新鮮なものは認められない。

火山ガラス比は、軽石型火山ガラスが比較的多く認められ、軽鉱物中の20%を占める。他に数%の中間型と極めて微量のバブル型を伴う。火山ガラスは、いずれも無色透明である。

また、火山ガラスの屈折率測定結果を図2に示す。n1.504-1.510のレンジに入り、n1.506-1.508にモードがある。

さらに、処理後に得られた中粒砂径以上の砂分には、最大径約0.8mm、白色を呈し、発泡はやや不良～やや良好の軽石が少量含まれていることが確認された。

(5) 考 察

試料は、細粒の軽石および軽石型火山ガラスを主体とするテフラであると考えられる。ただし、処理後に得られた中粒砂径以上の砂分には、チャートや泥岩、花崗岩類等の岩石片および、石英片や風化した黒雲母片などのテフラ由来とは考えられない碎屑物も多く含まれている。これらは、吉田ほか(1984)に記載されている、刈屋川流域の山地を構成する北部北上帯の堆積岩や刈屋川支流の平片沢流域に分布する花崗岩類に由来するものであろう。したがって、今回分析試料としたブロック状堆積物は、テフラの降下堆積層が、その後の攪乱や土壌化作用を経て残存したものであると考えられる。

今回得られた試料の重鉱物組成のうち、上述した鏡下の観察から、テフラの本質物質とされる重鉱物は斜方輝石と単斜輝石および不透明鉱物であり、角閃石と緑レン石は上述した岩石片などと同様に、テフラとは由来の異なる碎屑物であると考えられる。したがって、テフラの重鉱物組成は、斜方輝石を主体とする輝石安山岩質の組成であると考えられる。また、テフラを構成する火山ガラスは、無色透明の軽石型火山ガラスを主体として考えて良い。

これまでに研究された東北地方におけるテフラの産状については、町田ほか(1984)、Arai et al.(1986)、町田・新井(2003)などにより概観することができる。これらの記載を参照すると、上述したテフラを構成する碎屑物の特徴と本遺跡の地理的位置、および縄文時代中期の遺構換出面の直下に近い層位であることなどの条件を満たすテフラは、更新世末から縄文時代前期頃までに噴出した十和田カルデラを給源とするテフラのいずれかに相当すると考えることができる。その中で、火山ガラスの屈折率から対比を考えれば、十和田人不動テフラ(To-Of Hayakawa, 1985)の屈折率とはほぼ一致する。To-Ofは、東北地方北部における広域テフラとされているが、その噴出年代は32,000年前よりやや古いとされており(町田・新井, 2003)、層位の逆転はないものの、縄文時代中期の遺構面直下に近い層位と上記の噴出年代とは乖離した感が否めない。上述したようにこの試料中にはテフラ由来しない碎屑物も含まれることから、本遺跡の立地する段丘背後の山地斜面表層土壌の流れ込みによる二次堆積テフラ層と考えることもできるが、それには山地斜面におけるテフラの産状を確認する必要があると考える。

一方、発掘調査所見では、岩手県内各地の縄文時代の遺跡でも今回の試料と同様のテフラが認められており、遺構と層位関係と土器型式の年代観等から、To-Cuとして捉えられている。今回のテフラが、

To-Cuとは火山ガラスの屈折率において一致しない(町田・新井(2003)による記載では $n_{1.510-1.514}$ である)ことはすでに述べた通りであるが、To-Cuを噴出した噴火時のある段階において、化学組成の異なるマグマに由来する碎屑物が噴出されるなどの可能性もあり、今回の分析結果のみによって、To-Cuに対比される可能性を否定することもできない。

現状では、上記のような2つの可能性を併記せざるを得ないが、今後の源洋調査を含めた周辺遺跡における分析事例を蓄積することによって、テフラ同定の検証を進めることがのぞまれる。なお、十和田カルデラのテフラにおける火山ガラスの化学組成についても、柴ほか(2001)などの分析例があることから、今後蛍光X線分析などによる化学組成からの検討も必要と考えられる。

(6) 調査者のコメント

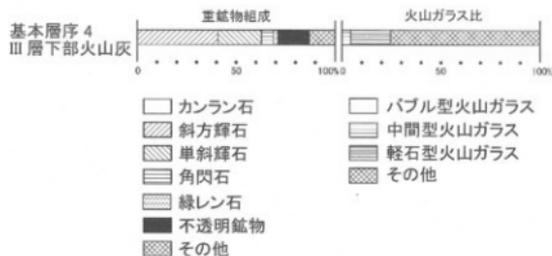
基本層序Ⅲ～Ⅳ層中にブロック状に堆積する火山灰の同定を依頼した。Ⅲ～Ⅳ層は本遺跡で見つかった遺構はⅢ層上面で検出しており、従って基本層序Ⅲ～Ⅳ層は、所謂地山土に相当し、遺構はこの火山灰を含んだ層を切り込んで構築されている。したがって火山灰と遺構のものとの直接的な関係はないものの、地山土の堆積年代などを知らう上で、必要なことと考えた。

(5)項にみられるように、分析の結果、本遺跡から見つかった火山灰の産状については十和田大不動テフラ(To-Of)と十和田中振テフラ(To-Cu)の2つの可能性があり、特に火山灰ガラス屈折率などからは十和田大不動テフラの可能性が高いことが示唆されている。出土遺物などから考えられる遺構の時期と比較した場合、確かに層序的な矛盾はないと思われるが、火山灰は遺構検出面上からも見つかっており、32,000年以上前に降した十和田大不動テフラがそのまま、4,000年前と推測される縄文時代中期の生活面付近にまで残存していたとは考えがたく、また二次堆積だとしても、時間の幅が大きすぎる気がする。少なくとも、調査の時に火山灰を検出した感じでは、十和田大不動テフラであるとは考えにくい。

とは言え、断定もできないので、今後の資料の増加を待ちたい。

引用文献

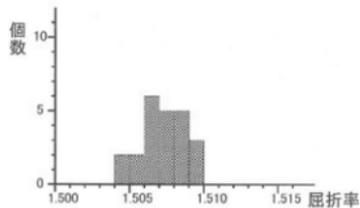
- Arai,F.・Machida,H.・Okumura,K.・Miyachi,T.・Soda,T.・Yamagata,K.1986,Catalog for late quaternary marker-tephras in Japan II -Tephras occurring in Northeast Honshu and Hokkaido-Geographical reports of Tokyo Metropolitan University No.21.223-250.
- 古澤 明,1995,火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別.地質学雑誌,101,123-133.
- Hayakawa,Y.,1985,Pyroclastic Geology of Towada Volcano. Bulletin of The Earthquake Research Institute University of Tokyo.vol.60.507-502.
- 町田 洋・新井房夫,2003,新編 火山灰アトラス.東京大学出版会,336p.
- 町田 洋・新井房夫・森脇 広,1981,日本海を渡ってきたテフラ.科学,51,562-569.
- 町田 洋・新井房夫・杉原重夫・小出静夫・遠藤邦彦,1984,テフラと日本考古学-考古学研究と関連するテフラのカタログ-.渡辺直経(編)古文化財に関する保存科学と人文・自然科学.同朋舎,863-928.
- 柴 正敏・中瀬哲郎・佐々木 実,2001,十和田火山,降下軽石の化学組成変化-中層部の一露頭を例として,弘前大学理工学部紀要,4,11-17.
- 吉田 尚・大沢 操・片岡正人・須田房郎,1984,20万分の1地質図幅「盛岡」,地質調査所.



火山灰試料の重鉱物組成および火山ガラス比

重鉱物・火山ガラス比分析結果

| 試料名 | 斜方輝石 | 単斜輝石 | 角閃石 | 緑レン石 | 不透明鉱物 | その他 | 合計 | 山バブル型火山ガラス | 山中間型火山ガラス | 山軽石型火山ガラス | その他 | 合計 |
|-------------------|------|------|-----|------|-------|-----|-----|------------|-----------|-----------|-----|-----|
| 基本層序 4 Ⅲ層下部火山灰 | 102 | 55 | 15 | 6 | 40 | 32 | 250 | 1 | 11 | 50 | 188 | 250 |



基本層序 4 Ⅲ層下部火山灰

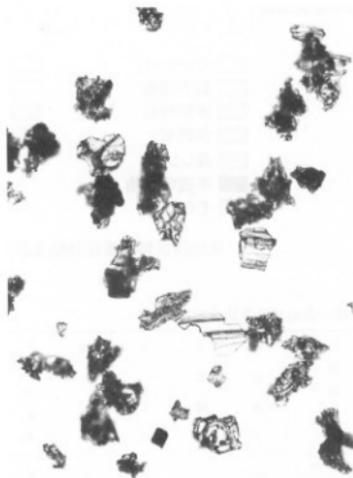
火山ガラスの屈折率測定結果

図版1 重鉱物・火山ガラス



1. 重鉱物(基本層序 ④)Ⅲ層下部火山灰

Orp:斜方輝石 Cpx:単斜輝石 Ho:角閃石



2. 火山ガラス(基本層序 ④)Ⅲ層下部火山灰



第190図 火山灰同定分析結果 (2)

Ⅷ ま と め

1 はじめに

今回の調査で縄文時代早期から近世に至るまでの遺構、遺物が検出された。特に縄文時代前期前葉の竪穴状遺構1棟、中期後葉～末葉の竪穴住居跡36棟、晩期の竪穴住居跡1棟の検出は当初の予定を超える発見であった。宮古市では新里地区に腹帯A遺跡、腹帯配石遺構群があり、宮古市域には近内中村遺跡や崎山貝塚、小平Ⅳ遺跡など縄文時代を主体とする遺跡が多数分布している。また本遺跡から北方には縄文時代中期の大集落である岩泉町森の越遺跡が位置している。こういった周辺遺跡との関連を考えるため、今回の調査結果を踏まえ、出土遺物や遺構から、特に腹帯遺跡における縄文時代の景観について簡単にまとめてみる。

2 出土土器の変遷について（第189～192図）

腹帯遺跡からは縄文時代早期から晩期までの土器が出土している。細かく時期別にみていくと、早期後葉、前期初頭、前期前葉、中期後葉、中期末葉、後期前葉、晩期前葉に相当する土器群である。出土量の主体は、中期後葉から末葉が出土量全体の9割以上を占める。そして検出した遺構群もほとんどが中期後葉～末葉に比定される。

出土した縄文土器については、第Ⅳ章に示した分類基準に従い、整理、報告を行った。次にそれらの分類を中心に、各土器群の時期的な様相を概観する。

早期（第191図上段）

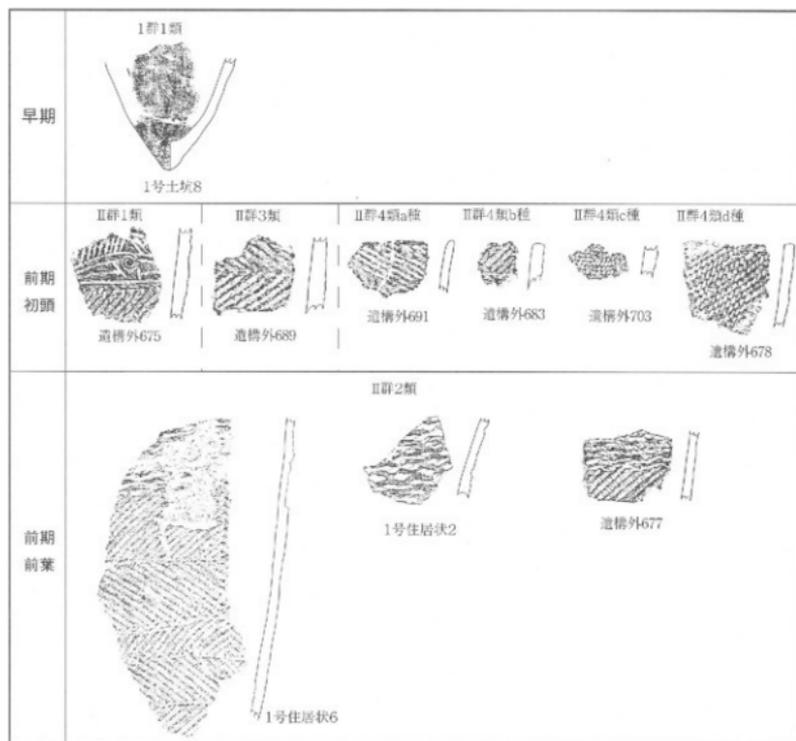
I群が相当する。1点のみである。1号土坑から出土したが、遺構に伴うものではなく、流れ込みにより、遺構に混入したものと思われる。尖底土器で器面には条痕文が施文される。底部片のみであり、詳細な時期などでは不明である。

前期初頭（第191図中段）

Ⅱ群1・3・4類が相当する。上川名Ⅱ式に比定されると思われる。全てⅢ層上面の遺構外から出土した。いずれも破片資料である。口縁部片には縄文押圧や竹管状工具による文様が施文される。胴部片には羽状縄文が施文され、いずれも非結束である。4類に含まれる、斜縄文を施文するものも、原体にバラエティーがみられる。4類については出土位置が1・3類とほぼ同じであり、前期前葉よりも前期初頭の方が妥当であろうと考えている。いずれも胎土に繊維を多く含む。

前期前葉（第191図下段）

Ⅱ群2類が相当する。文様の特徴から大木2a式に比定される。破片資料で出土量も少ないが、1号住居状遺構から出土している。第9図6を見ると、口縁部には横位の縦綫縄文が回り、胴部には非結束の羽状縄文が横位に施文される。胎土には繊維を多く含む。



縮尺1/4

第191図 早・前期土器

中期後葉

Ⅲ群が相当する。Ⅳ章に示した通り、Ⅲ群は文様を分類基準とし、6分類することができた。そのうち、斜縄文のみが施文される6類を除き、1～5類は大木9式、10式に比定される。

Ⅲ群の土器群はほとんどが遺構から出土している。そこで文様の特徴と遺構毎の一括性から1～5類の時期変遷を考えてみたい。

まず、1類は前時期の大木8b式の特徴でもある隆帯による渦巻き文が残るものが相当し、Ⅲ群の中でも最も古いと考えられる。28号・30号住居跡から出土している。28号・30号住居跡からは2類に相当する土器も多く出土しており、1類と2類とは時間幅があまりないものと思われる。2類は大木9式の特徴である、磨消縄文を伴う区画文がみられるが、隆帯により区画文が描かれ、また口縁部文様帯が残るので、文様の要素にも1類・2類は共通する。

そして3類は口縁部文様帯が消滅し、口縁部から胴部へと区画文が描かれる。基本的に隆帯は用いられなくなり、1・2類との違いが大きくなる。18号住居跡などから出土しており、これらの住居跡

からは1・2類が出土していないので、1・2類と3類とは時間差がみられると考えられる。ただし16号住居跡では埋上下位～床面上で2類と3類とが混在して出土している。こういった出土状況は、16号住居跡のみであるが、1・2類と3類との時間差はそれほど長いものではないと思われる。したがって、ここでは便宜的に1・2類を大木9式の古段階に、3類以降を新段階に位置づける。

また4類は3類にみられた区画文が横へと連結する文様で、次の大木10式にみられる曲線的モチーフの区画文を想起させる。包含層から1点、10・18号住居跡から1点ずつ出土しており、出土量は少ない。3類と混在しており、3類と時期幅はみられないと考えられるが、10・18号住居跡は埋土上位出土であるので、3類とは時期幅がある可能性が高い。

5類は曲線的な区画文を特徴とし、区画内の縄文も磨消手法のほか、充填手法によっても施文されており、大木10式に相当する。5類は18号住居跡の埋土上位から出土しており、層位時にも3・4類との時間差が認められる。

したがって各分群は

- Ⅲ群 1・2類→大木9式（古段階）
- Ⅲ群 3・4類→大木9式（新段階）
- Ⅲ群 5類→大木10式 となる。

以下、各土器群について詳しく見ていく。

大木9式古段階（第192・193図上段）

Ⅲ群1・2類が相当する。主に28・30号住居跡からまとまって出土している。28号住居跡にはⅢ群3・4類は含まれず、また30号住居跡には3・4類は主に埋土上位からのみ出土するので、3・4類の土器群とはやや時間差があることが窺える。

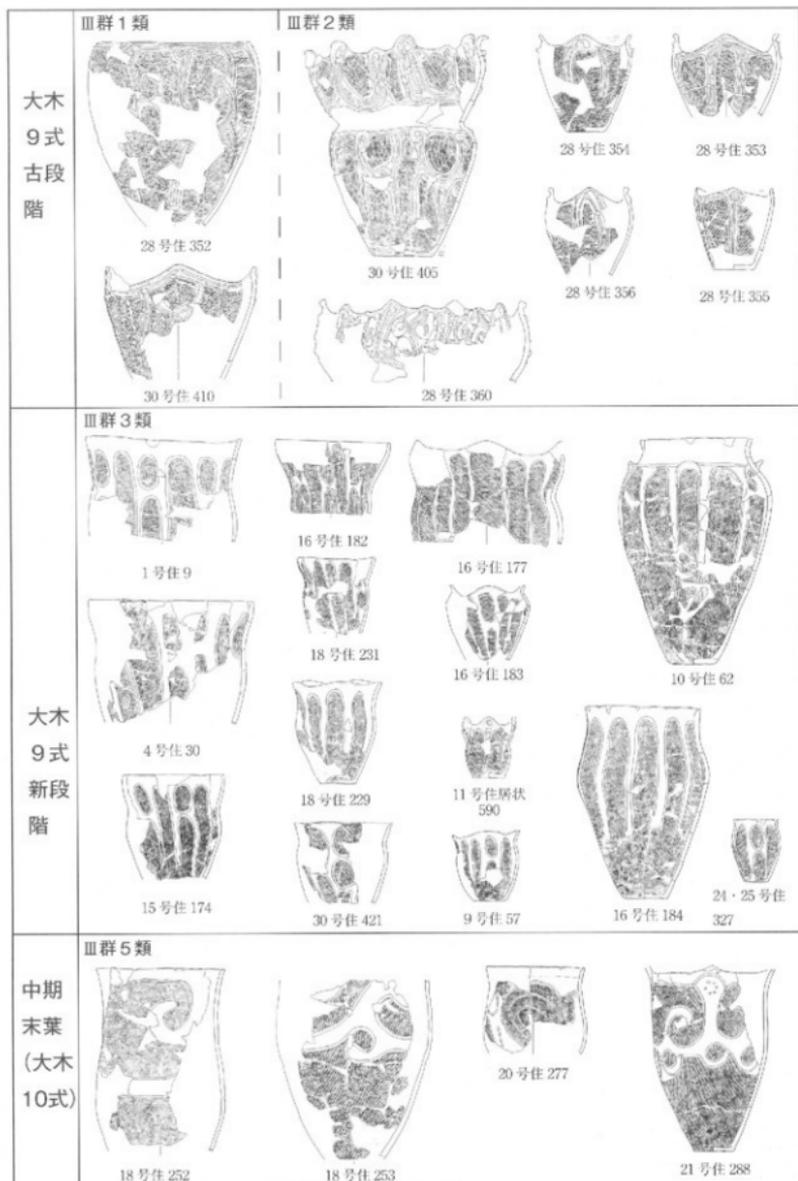
器種は本遺跡からは深鉢のみがほとんどを占めている。ただし、台付の鉢形（16号住居跡186）もある。器種が深鉢が多いのは袋帯遺跡出土土器の特徴であるかもしれない。

深鉢の形態はバラエティーに富み、樽形（28号住居跡352～356、30号住居跡406～408）、キャリバー形（30号住居跡405）、壺のような形態のもの（28号住居跡357、30号住居跡556）も見受けられる。樽形は平縁（28号住居跡352）と波状口縁（28号住居跡353～356、30号住居跡406～408）とがある。いずれも口唇部下には隆帯が横位に巡り、口縁部の隆帯による渦巻き文に連結する。隆帯は胴部へと垂下し、胴部には隆帯あるいは沈線による区画文が施文されるが、次の新段階に比べると、区画が方形気味であったり、やや未発達のものが多いのが特徴である。また4単位の波状口縁を呈し、胴部上半が膨らむ形態（28号住居跡353～356、30号住居跡406～408・410）は次の新段階には見いだせないのが、この古段階の特徴的な形態と思われる。

35号住居跡から出土した小形の深鉢（556）はやや器形に特徴がある。胴部は球状に膨らみ、口縁部で屈曲してからほぼ直立気味に立ち上がる。胴部には、隆帯による区画文が描かれ、隆帯には沈線による渦巻き文が施文されるので、Ⅲ群2類に比定されるが、口縁部は無文である。このように広く口縁部が無文となる深鉢はこれ1点のみであった。

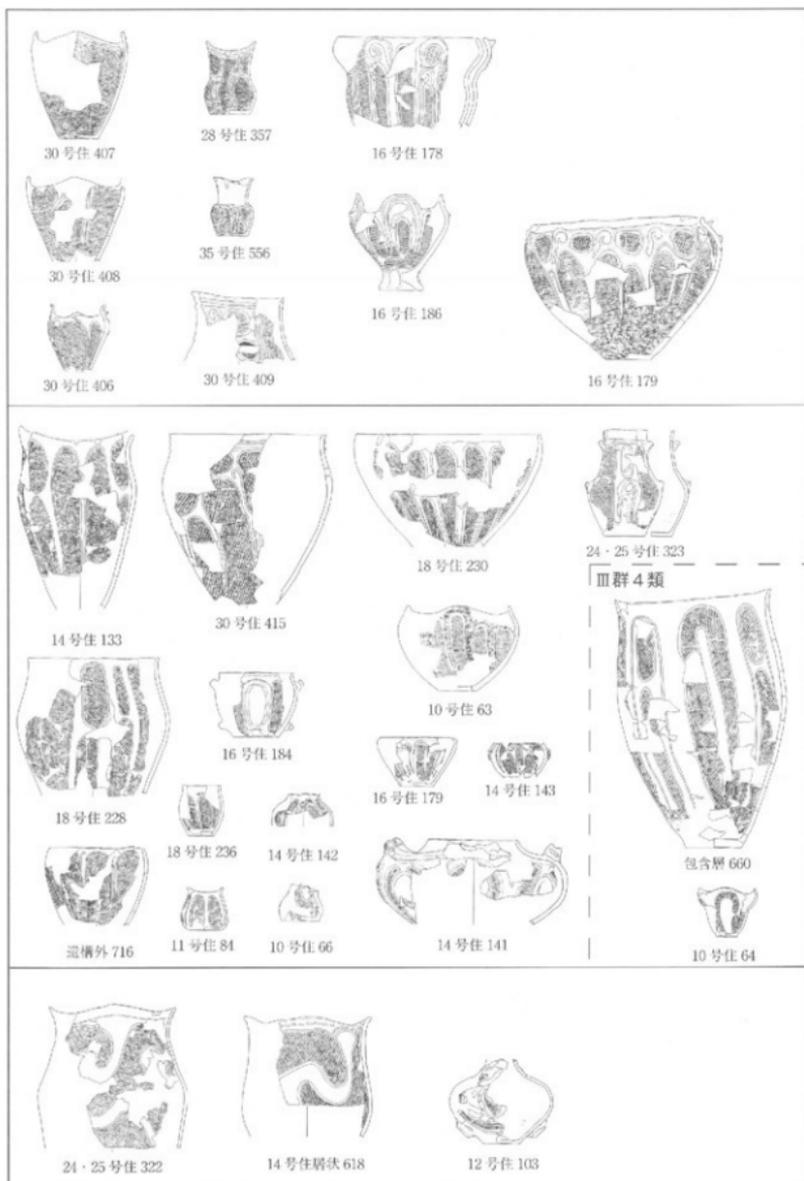
大木9式新段階（第192・193図中段）

Ⅲ群2・3・4類が相当する。16・18・14号住居跡などでまとまって出土している。これらの住居跡からは、1・2類の土器群がほとんど含まれないので、1・2類との時間差が窺える。ただし16号住居跡では2類が伴う。178・179・186がそれにあたる。



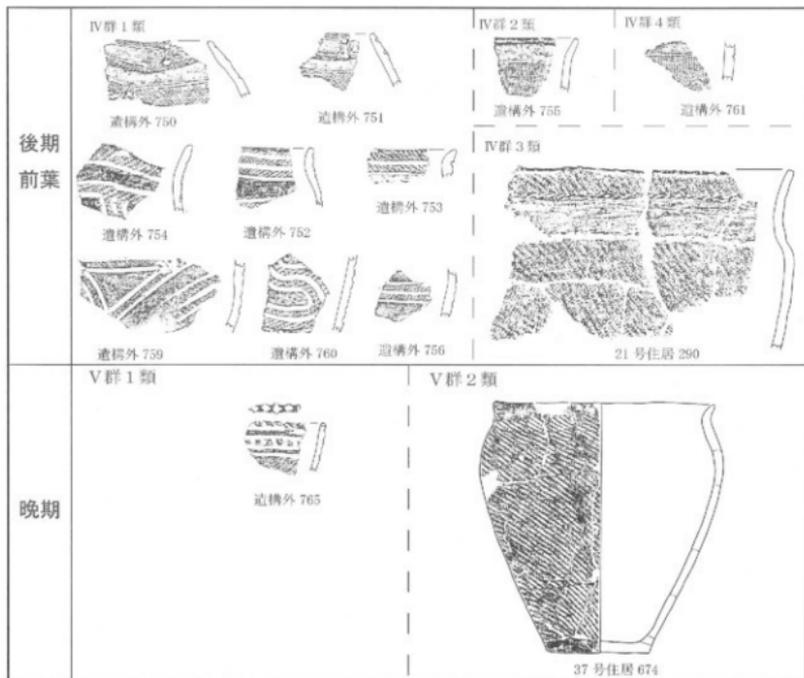
縮尺1/10

第192図 中期後葉～末葉土器(1)



第193図 中期後葉～末葉土器（2）

縮尺1/10



縮尺1/4

第194図 後・晩期土器

3類が主体となり、1・2類にみられた隆帯による渦巻き文は口縁部からも胴部からも姿を消す。古段階の2類で見られた口縁部文様帯が意識されなくなり、2類でも見られた胴部の沈線による区画文様が口縁部へと引き上げられている。また4類は楕円形区画文が横に連結する文様で、次の大木10式の曲線的なモチーフの区画文に影響があるのではないかと予想したが、10号住居跡の埋土上位から小形の深鉢が出土している他、3類などとの明確な時期差を示す出土状態は見いだせない。4類に相当する大形の深鉢(660)は包含層から出土したものであり、包含層からは2・3類の土器が多量に出土していることから時間差が見い出せない。ただし10号住居跡64は、埋土上位から出土した土器であるが、10号住居跡の埋土下位～中位からは3類に相当する土器が多く出土しており、この点を踏まえれば3類と4類とで若干の時期差が見いだせる可能性がある。

器種は深鉢と鉢、壺が認められる。深鉢は口縁部下でくびれ、胴部上半が胴部中央で最大径を有するものや、口縁部がひらき、胴部でくびれるもの、また口縁部径と器高がほぼ同じの寸胴形で把手がつくもの(16号住居跡184)、胴部下半が膨らむ下ぶくれ状で把手が付くもの(10号住居跡66)などが見受けられる。また10号住居跡62は、胴部上半が内湾し、口縁部は外反しながら立ち上がる器形で、口縁部と胴部は横位の隆帯によって区画されている。そして、口縁部は無文となる。この特徴をもつ

深鉢はこの1点のみである。他に小形のもので、コップ状(11号住居跡84)や口縁部がすぼまるもの(14号住居跡142)などの形態が認められた。鉢は胴部上半が大きく膨らみ、口縁部で内湾する形態があり(10号住居63、18号住居230)、また他に14号住居跡141のように口縁部下で急にすぼまり口縁部でまた直立するものも認められた。壺は胴部下半が膨らみ、胴部上半から口縁部にかけて直立する器形(12号住居跡103)で、胴部に把手や隆帯が付く。

中期末葉(第192・193図下段)

Ⅲ群5類が相当する。曲線的なモチーフの区画文と区画内に縄文が施文される。大木10式に相当する。本遺跡では、Ⅲ群1～4類までと比べると出土量は少なく、遺構に伴うものとしては、288が21号住居跡から出土し、618が14号住居状遺構の底面から出土しているが、その他は3類の土器群などが主体となって出土する堅穴住居跡の埋土中位や上位から出土している。

深鉢と壺が見つかっている。深鉢は、胴部中央が膨らみ口縁部付近で一度くびれてから外反して立ち上がる器形で、口唇部は波状を呈するもの(21号住居288、24・25号住居322、14号住居状遺構618)と平縁のもの(18号住居252、20号住居277)がある。幅の狭い口縁部文様帯をもつものが多く、文様帯は無文がほとんどであるが、刺突文が巡るもの(14号住居618)が見受けられる。口縁部から胴部上半にかけて沈線による曲線的なモチーフの区画文が横位に展開し、区画内には磨消技法か充填技法により縄文が施文される。胴部下半とは波状を呈する沈線により区画され、底部にかけ、斜縄文が施文される。

壺は、12号住居跡103のみである。残存部が少なく、全容が定かではないが、胴部中央が大きく膨らみ、口縁部が小さくすぼまる器形で胴部には把手と細い曲線的な区画文が施文される。

後期前葉(第194図上段)

Ⅳ群1～4類が相当する。出土量は少ない。遺構外から出土したもののがほぼ全てである。調査区中央に集中する傾向がある。

小片なので全体のモチーフが定かではないが、十腰内Ⅰ式に比定される。帯縄文が施文され、施文される縄文は中期の土器よりも細かい原体が使用されている。

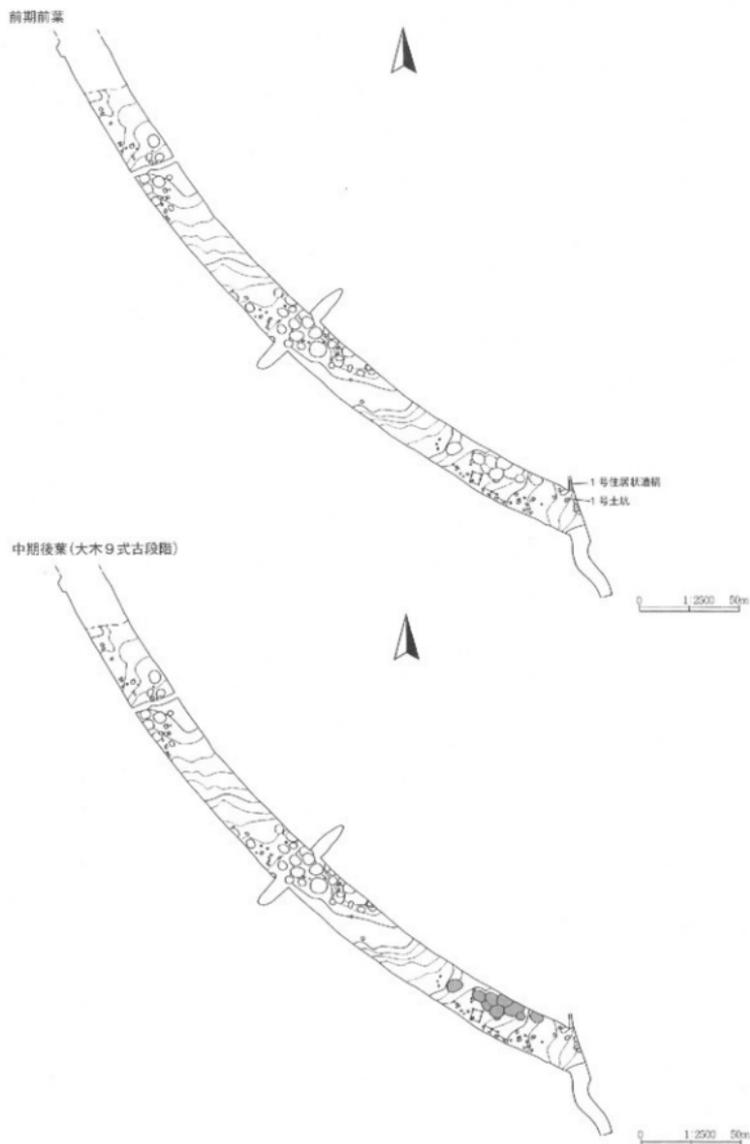
766は斜縄文のみの深鉢底部片であるが、縄文原体が他の後期の土器に類似しており、後期のものと判断した。

晩期(第194図下段)

V群1、2類が相当する。2点のみである。1類は口縁部片で半皿状文から大洞B C式に比定される。2類は胴部に斜縄文のみが施文される深鉢で、詳細な時期は定かではないが、前葉～中葉に比定されるものと思われる。

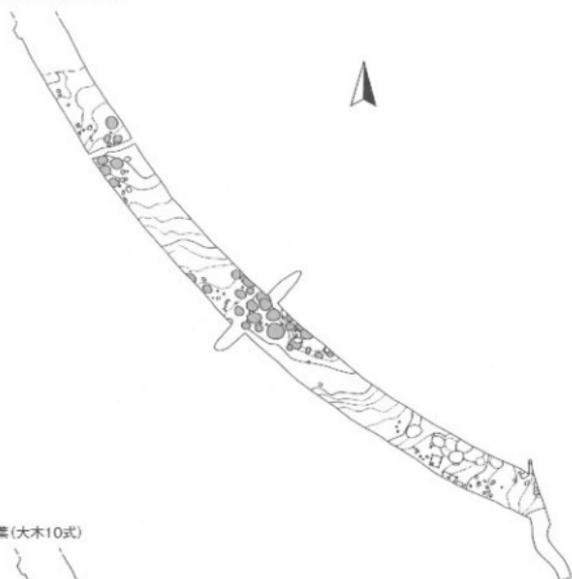
3 裳帯遺跡にみる集落変遷の特徴

裳帯遺跡からは前期前葉、中期後葉、中期末葉、晩期の遺構が検出している。次にこれらの遺構群の位置などをみていく。



第195図 遺構変遷図(1)

中期後葉(大木9式新段階)



中期末葉(大木10式)



第196図 遺構変遷図(2)



第197図 遺構変遷図(3)

前期前葉（第195図上）

調査区の東南端に位置する。1号住居状遺構、1号土坑は近隣している。1号住居状遺構はほとんどが調査区外に及んでおり、どのような形態の遺構であるか定かではなく、また該期の遺構の広がりも不明である。ただし、遺構が位置する周辺の遺構外からは該期の土器片が出土しているため、後述する中期の遺構群と比べ、本遺跡の東南側、より刈屋川に近い場所に該期の遺構群が分布するものと推定される。

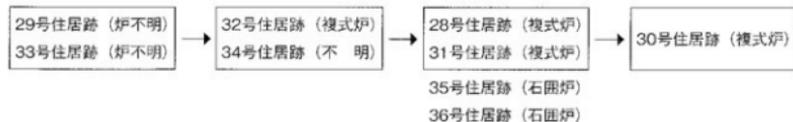
中期後葉（大木9式古段階・第195図下）

28号～36号住居跡が相当する。調査区の東南側に分布する。住居跡の一部は北側の調査区外に及んでおり、該期の遺構群はそちら側に広がるものと思われる。

住居群は28号、37号住居跡を除き、全て重複している。その様相は後述する大木9式新段階の住居群の重複関係とはやや様相が異なり、比較的狭い場所に密集した状態で分布する。

住居群はそれぞれの重複関係から4時期であったと推測できる。最も古い時期の住居跡は29号(?)、33号住居跡、次いで32・34号住居跡、そして28・31号住居跡が続き、最も新しい時期に相当するのは30号住居跡である。なお28号住居跡は遺構の新旧関係上は30号住居跡同様、最も新しい住居跡であるが、30号住居跡とは、炉の上軸方向が大きく異なり、むしろ31号住居跡の炉のものと同様であるので、1時期古いものと推定される。35号住居跡は34号住居跡と重複し、34号住居跡より新しいので、28号、31号住居跡と同じ時期か、最も新しい30号住居跡と同じ時期に属すると思われる。

古 ←—————→ 新



住居群は第V章で述べた通り、砂礫を主体とする場所をわざわざ掘り込んで住居群は構築されている。そのためか30号住居跡の埋土上位中には大量の礫（総重量は800kgを超える）が投げ込まれていた。これは別の住居跡を構築する際、掘り出された礫を、廃絶され埋没段階にあった31号住居跡に投げ入れたためではないかと推定される。

このように、該期に属する竪穴住居跡は11棟みつかったが、時期毎にみていくと、一時期2～3棟で構成されていることが窺える。ただし、遺構は調査区外にも広がるので、さらに増えることも考えられる。

中期後葉（大木9式新段階・第196図上）

1号～27号住居跡、2～11号住居状遺構が相当し、またこれらの周辺に位置する土坑群も含まれるものと思われる。本遺跡の中で最も遺構数が多く、集落としては最盛期にあたる時期と言える。

遺構群は調査区の北西側から中央側に分布する。大木9式古段階の遺構群が調査区東側に分布しており、そこから西側へと移行していることが窺える。北西側には1～4号住居跡や2・3号住居状遺構が北東から南西方向へと列状をなして分布しており、2A12q～13rグリッド付近で調査区外へと及んでいる。調査区中央側では2B24cグリッド付近から3B9tグリッド付近まで住居跡、住居

状遺構群が密集する。その間は遺構のみられない空白域が半円状にひろがっている。当該期に属する遺構群の分布域全体を概観すると、空白域を中心として、遺構群が弧状に展開するようにもみえる。

住居群は密集するものの、大木9式古段階の住居群にみられたように、多くの住居跡が重複するような状態はみられず、2棟の住居跡が重複する程度である。したがって古段階のように該期をさらに細分することは難しいが、住居数が多いことから1時期にみられる住居跡の数はやはり多い可能性が考えられる。

竪穴住居跡は複式炉を伴う住居と石囲炉を伴う住居とに二分できる。そしてそれらは、住居の構造そのものにも差違がみられる。

まず、複式炉を伴う住居跡は形態は円形あるいは楕円形を呈し、規模が直径（あるいは長軸）6mを超える。付属施設として支柱穴が規則的に並び、壁溝が巡る住居跡も見つかっている（18・31号住居跡）。対して、石囲炉を伴う住居跡は形態がやや不整形で、規模も6m以下のものが多い。また支柱穴も見つからない住居がほとんどである。この他、遺物の出土量にも両者に差異がみられる。複式炉を伴う住居跡からは多量の遺物が出土しており、特に器形の復元できる縄文土器が多く見つまっている。これに対し、石囲炉を伴う住居跡からは小片が見つかる程度であることが多い。

複式炉を伴う住居跡と石囲炉を伴う住居跡では出土する土器群を比べてみても、時期差は読み取れず、したがって、この両者の住居群はほぼ同時に存在していたものと思われ、この両者の住居群にみられる差違が何を意味するかは定かではない。

また他の遺構では住居状遺構が多くみられる。形態や規模は竪穴住居跡に類似するが、炉や支柱穴はみられず、遺構底面に硬化面も認められない。また遺物もほとんど出土しないので、遺構そのものの性格は分かりづらいが、立地する場所は竪穴住居跡と同じ場所であり、住居群に伴う何らかの施設の可能性が考えられる。土坑も多く住居群に密集するが、特に調査区中央側に立地する土坑の中には断面形がフラスコ状や袋状を呈するものがみられる。これらは貯蔵穴と考えられ、中には遺構埋土中から出土した遺物が竪穴住居から出土したものと接合しており、竪穴住居跡と同時期のものであると考えられる。また貯蔵穴はほとんどが竪穴住居跡に隣接して立地しており、したがって本遺跡においては貯蔵穴はどこか一定のエリアに密集するのではなく、竪穴住居跡に隣接した伴うものと考えられる。ただし、住居群に対して、見つかった土坑群が少ないので、断言はできない。

中期末葉（大木10式段階・第196図下）

21、24号住居跡、14号住居状遺構が相当する（24号住居跡は大木9式新段階の土器群も混在しているので、推定である）。21、21号住居跡は大木9式新段階の住居群とほぼ同じ場所の、調査区中央部に位置し、隣り合う。14号住居状遺構は21、24号住居跡から140mほど離れた、調査区東端に位置している。このように、この段階での遺構分布はやや散在した状態であった。ただし21号住居跡も14号住居状遺構も調査区外に及ぶ遺構であり、この段階での集落がどのように広がるかは定かではない。予想としては調査区外の北東側に展開するのではないだろうか。

竪穴住居跡の属性については、21、24号住居跡いずれもきちんと精査できたわけではないので、定かでない点が多いが、規模については21号住居跡では径6m弱で、前段階までの複式炉を伴う竪穴住居跡の規模と比べるとやや小さい。また21号住居跡からは炉とは別の場所から埋設土器が見つまっている。埋設土器については、大木9式新段階に相当する13号住居跡にも認められるが、13号住居跡の場合は炉に伴う可能性がある埋設土器であるが、21号住居跡のものは炉から離れており、意味合いが異なる可能性が考えられる。

如は21号住居跡が複式炉、24号住居跡が石囲炉であるので、前時期までと同様、ひとつの時期に2系統の炉が存在していることになる。21号住居跡でみられる複式炉は前時期までのものと比べると、炉石の並びなどの構造に変化はないが、石囲部の規模がやや小さく、そのわりに炉石が大きい。また前庭部には炉の主軸方向に大きな礫が設置されており、そのため前庭部がかなり狭小である。こうした点は前段階からやや変化を遂げたものである可能性が考えられる。また24号住居跡の石囲炉も同様で、炉の形態や規模は前段階と変わらないものの、使用されている炉石は全て、破砕した礫であり、角の丸い自然礫を炉石とする前段階までの石囲炉とは異っている。

14号住居状遺構は、径約35mの円形を呈する遺構で、炉や竈穴などの付属施設が伴わない。大木9式新段階でも多くみられた遺構であり、この時期にも継続して構築される遺構であったことが窺える。14号住居状遺構は、その形態からも居住施設とは考えづらく、本来、前段階の住居状遺構と同様に竈穴住居跡に隣接して位置すれば、何らかの用途で竈穴住居跡に付随するものと考えられるが、周辺には同時期の遺構が他に無いので定かではない。

晩期（第19図）

37号住居跡が相当する。調査区の中央部に位置し、中期後葉（大木9式新段階）に比定される11号住居状遺構を切り込んで構築されている。竈穴住居跡の規模は直径2.5mと中期後葉の住居跡に比べ小さく、また中央に石囲炉を有するが若干中期のものとは形態が異なる。本遺跡からは37号住居跡のみが検出され、該期の遺構の広がりは定かではない。

4 出土土器の特徴について

土器の胎土について

報告書掲載土器について、胎土への混入物を観察し、土器観察表に記載した。それらを集計したものが、第200図である。ここではその集計結果を基に、本遺跡出土縄文土器の胎土について、概観する。

まず、早期・前期である。早期の土器は尖底土器1点のみで、胎土に砂粒、石英が混入する。前期は前葉に比定される土器群であり、繊維が混入されるものが多い。他に砂粒、雲母の混入が目立つ。

中期後葉～末葉の土器は土器量が多いので、胎土にみられる混入物もバラエティーに富む。中でも多いのは砂粒である。砂粒はそれだけが混入するものと雲母を伴うものが特に多い。また器種別にその混入物の差は見受けられないので、器種毎に胎土を変えるという作り分けは土器の胎土の観察からは認められない。胎土混入物の混入量は多くなく表面上にも目立たないものが多い。

後期は砂粒と雲母が混入するのみである。また晩期は2点のみであるが、砂粒、石英、雲母の混入が認められた。

土器の焼成について

報告書掲載土器について、その焼成を、主に土器の断面を観察し、土器観察表に記載した。観察基準については凡例に記載したとおりである。またそれらを集計したものが第200図である。ここではその集計結果を基に、本遺跡出土縄文土器の焼成について概観する。

早期・前期では、早期の尖底土器はAで焼成が良好であった。対して前期初頭から前葉の土器群はB、Cが多く、全体的に焼成具合が良くないことが窺える。

中期後葉～末葉では、焼成が良好なAが最も多いが、不良に相当するBやCも合わせると、Aとほ

4 出土土器の特徴について

胎土 早・前期 (I・II群)

| | 雲母 | 砂粒 | 石英 | 白色粒 | 雲・石 | 砂・雲 | 砂・石 | 砂・白 | 白・雲 | 白・砂 | 白・石 | 砂・石・雲 | 砂・雲・繊維 | 砂・繊維 | 砂・石・繊維 |
|----|----|----|----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-------|--------|------|--------|
| 深鉢 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 5 | 3 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 20 | 3 | 3 |
| 尖底 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |

胎土 中期 (III群)

| | 雲母 | 砂粒 | 石英 | 白色粒 | 雲・石 | 砂・雲 | 砂・石 | 砂・白 | 白・雲 | 白・砂 | 白・石 | 砂・石・雲 |
|-------|----|-----|----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-------|
| 深鉢 | 1 | 260 | 0 | 14 | 1 | 145 | 76 | 11 | 7 | 2 | 3 | 2 |
| 鉢 | 0 | 9 | 0 | 2 | 0 | 1 | 3 | 0 | 1 | 0 | 3 | 0 |
| 壺 | 0 | 6 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| ミニチュア | 0 | 10 | 0 | 1 | 0 | 5 | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 |
| 灰土土器 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |

胎土 後期 (IV群)

| | 雲母 | 砂粒 | 石英 | 白色粒 | 雲・石 | 砂・雲 | 砂・石 | 砂・白 | 白・雲 | 白・砂 | 白・石 | 砂・石・雲 |
|----|----|----|----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-------|
| 深鉢 | 0 | 12 | 0 | 0 | 0 | 10 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |

焼成 早・前期 (I・II群)

| | A | B | C |
|------|---|----|----|
| 深鉢 | 7 | 15 | 13 |
| 尖底土器 | 1 | 0 | 0 |

焼成 中期 (III群)

| | A | B | C |
|-------|-----|----|-----|
| 深鉢 | 229 | 79 | 178 |
| 鉢 | 11 | 2 | 4 |
| 壺 | 5 | 0 | 2 |
| ミニチュア | 11 | 1 | 6 |

焼成 後期

| | A | B | C |
|----|----|---|---|
| 深鉢 | 11 | 2 | 9 |

ほぼ同点数になる。したがって焼成具合については意識的に操作しているかは定かではない。またどの器種をみてもこの傾向は変わらず、器種別に焼成具合を調整することも無かったことが窺える。

後期の土器も中期のものと同様で、焼成が良好なAと、不良なB、Cはほぼ同点数で、焼成具合の意識的な操作が行われているか定かではない。

5 出土石器の特徴について

器種組成について (第199図上)

今回の調査で、出土した石器は212点を数える。土器の出土量と比較すると、かなり少ない。

出土した212点のうち、ツール類は69点で、スクレイパーが最も多く24点を数え、磨石がそれに次ぐ。用途別にみえていくと、狩猟具はスクレイパーの他、石鏃も13点出土している。また調理具では磨石、石皿、石匙が合わせて21点を数え、狩猟具とはほぼ同等の比率で出土していることが窺える。また採集加工具では石錐や磨製石斧が見つかり、本遺跡の東西両脇に連なる北上山地系の山々での営みを想起させる。対して、漁労具と捉えられる石器(石鎌など)は見つからない。本遺跡の東側に隣接して刈屋川が流れており、本遺跡の集落との関連が強かったものと思われるが、それを裏付けることは石器からは見いだせない。

またフレイク類は最も多く、刃部以外の二次加工を施されたRフレイクを含め143点を数える。ただし、石核が見つからなかった。後述するが、出土したフレイク類のほとんどが自然面の残らない剥離作業の進んだものであること、また石材では奥羽山脈産が多いことから、産地付近である程度、剥離作業を施したものを本遺跡に運んできている可能性が考えられる。

石器に利用された石材組成について (第199図中)

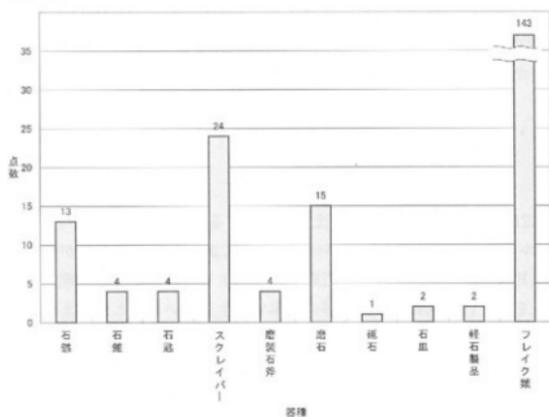
出土した石器の石材毎に分類すると、第199図のようになる。これによれば剥片石器は全て頁岩製であり、またこれらの剥片石器を製作する際に排出されるフレイク類なども頁岩のみが見つかりている。これに対し、磨石や磨製石斧は安山岩や花崗岩、細粒閃緑岩、蛇紋岩など複数の石材を利用している。

各石材を産地毎にみえていくと(第199図)、剥片石器にみられた頁岩は全部奥羽山脈産である。また出土したフレイク類も80%が奥羽山脈産であるという。したがって剥片石器に利用する石材をそれらの山々から採取してきたことになる。これに対し、磨石や磨製石斧は北上山地系である。磨石に使われた石材は、30号住居跡付近の礫層からもみつかっており、本遺跡周辺地から採集した石材を利用したものと思われる。ただし、軽石製品、石皿、砥石の石材は奥羽山脈産であり、周辺地ではなく、遠路を運ばれてきたことが窺える。

本遺跡から出土したフレイク類について (第199図下)

本遺跡から121点のフレイクが出土している。ツール類製作途中に排出されたものと推測され、中には11号、13号住居跡の床面上から集中して見つかるものもある。第IV章で示したように、本遺跡出土のフレイクは打面、背面を基準に11分類している。第200図はそれらの集計結果である(報告書不掲載資料も含む)。3 a類が見つからなかった他は全ての分類に複数点見つかりている。それらについてみえていくと分類不能とした4 a、4 b類を除くと、2 c類が最も多く、3 c類がそれに次ぐ。これらは石器製作がある程度進んだ段階で排出されるものと考えられる。対して1 a、2 a類は少な

石器集計グラフ



石器石材別統計

| 器種/石材 | 安山岩 | 花崗岩 | 輝石 | 砂岩 | 粗粒黒緑岩 | 総状岩 | 赤色頁岩 | 頁岩 | 総計 |
|-------------|-----|-----|----|----|-------|-----|------|-----|-----|
| 石器 | | | | | | | | 13 | 13 |
| 石鏃 | | | | | | | | 3 | 3 |
| スクレイパー (推?) | | | | | | | | 1 | 1 |
| 石冠 | | | | | | | | 4 | 4 |
| スクレイパー | | | | | | | | 21 | 21 |
| 磨石 | 2 | 9 | | | 4 | | | | 15 |
| 磨製石斧 | | | | | 2 | 2 | | | 4 |
| 軽石製基 | 1 | | 1 | | | | | | 2 |
| 石皿 | 1 | | | 1 | | | | | 2 |
| 砥石 | | | | 1 | | | | | 1 |
| フレイク | | | | | | | 9 | 112 | 121 |
| Rフレイク | | | | | | | 3 | 19 | 22 |
| 総計 | 4 | 9 | 1 | 2 | 6 | 2 | 12 | 176 | 212 |

フレイク分類集計表

| 分類 | 点数(点) | 重量(g) |
|------|-------|--------|
| 1 a類 | 2 | 27.75 |
| 1 b類 | 10 | 153.23 |
| 1 c類 | 10 | 75.78 |
| 2 a類 | 2 | 19.30 |
| 2 b類 | 9 | 100.40 |
| 2 c類 | 26 | 184.78 |
| 3 a類 | 0 | 0.00 |
| 3 b類 | 4 | 48.03 |
| 3 c類 | 14 | 130.06 |
| 4 a類 | 14 | 97.22 |
| 4 b類 | 30 | 125.01 |

い。これらは背面が自然面であり、石器製作の初段階で排出されるものと考えられる。このような傾向は、石器となる石材が、産地周辺（あるいは遺跡の外のどこか）である程度荒削りされた状態で、本遺跡に運ばれてきている可能性が考えられる。特に分類不能としたフレイクのなかで自然面の残らない4b類の方が、自然面の残る4a類より圧倒的に多くみつかっていることや本遺跡からは石核がみつかっていないこともこのことを裏付けているのではないだろうか。

6 周辺地形と遺跡群の分布からみた縄文時代中期後葉の集落景観について

裳帯遺跡が立地する場所は刈屋川によって形成された河岸段丘面である。刈屋川の両岸には、すぐ近くまで標高550～900m前後の山々が連なっており、したがって刈屋川を挟んで形成する河岸段丘は幅約500mほどの狭いものであり、まるで谷底平野のような様相を呈している。

宮古市新里地区で確認できる遺跡群は、主にこの刈屋川沿いに形成された河岸段丘面に分布している。特に縄文時代の遺跡が多く、出土する土器は中期から後期が主体のようである。このような狭小な段丘面でありながら、いくつもの遺跡が点在し、また裳帯遺跡のような大規模な集落が存在することは、食料調達や湧水などに必要な手頃な山や川が近くにあるという、生活活動を背景とする自然環境の豊かさに影響されてのことと考えられる。

また裳帯遺跡から南東約9kmには腹帯配石遺構群や腹帯A遺跡が位置している。これらの遺跡群は剛伊川沿いに立地するものであるが、特に配石遺構群は縄文時代中期後葉の大木9式の所産であるものと確認されており、隣接して大きな集落遺跡があることが予想されている（新里村2005）。ほかにも遺跡名が不明であるが、裳帯遺跡より北側の和井内地区において、壺峯の大珠が見つかっており（安藤1981）、これも恐らく裳帯遺跡とおぼ同時期のものと思われる。周辺には大珠を所有した集落遺跡があることが考えられよう。したがって、新里地区においては、縄文時代中期後葉に大規模な集落がいくつか展開していたものと思われる。

今後、こういった遺跡間でのさらなる分析が必要となってくるであろう。

(引用・参考文献)

- 安藤文 1981 『鶴塚大塚』 1981 『縄文文化の研究』 9 (雄山閣)
- 岩手県教育委員会 2006 『岩手県遺跡情報検索システム』
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 『新山権現社遺跡発掘調査報告書』平成5年
(岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第188集)
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2003
『(45) 水田町遺跡』平成14年度発掘調査略報 (岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第123集)
- 大迫町教育委員会 1986 『観音堂遺跡発掘調査報告書』(大迫町埋蔵文化財報告第11集)
- 小間好音麿 1985 『岩手県新里村和井内東遺跡出土の土器』
『H高見国一岩池野治郎学兄遺曆記念論集-』
- 新里村 2001 『新里村史』
- 新里村 2005 『新里村地域学 やんもうどの大地から』
- 新里村教育委員会 2001 『和井内東遺跡発掘調査報告書 (新里村文化財調査報告書第4集)』
- 新里村教育委員会 2003 『水田』遺跡発掘調査報告書 (新里村文化財調査報告書第5集)
- 村羽 茂 1981 『大木式土器』『縄文文化の研究』 4 (雄山閣)
- 宮古市教育委員会 1989 『千鶴遺跡-昭和62年度発掘調査報告書-』 (宮古市埋蔵文化財調査報告書16)

觀 察 表

第10表 土器観察表

| 図録番号 | 2次図録 | 出土位置 | 土器部位 | 器種 | 分類 | 地層 | 器 種 | | | | 外装・表面内装・内装 | 胎土 | 焼成 | 備 考 |
|------|------|-------------|-------|-----|-------|-----|----------------|-------|-----|----------------|------------------|--------|----|--------|
| | | | | | | | 文 様 | 施 文 | 手 法 | 内 装 | | | | |
| 1 | 67 | 1号区図録 遺跡 | 甕土片 | 胴体 | T 2 | 口縁部 | 施線施文 約文 | - | - | ナア | 原赤褐色 明赤褐色 | 砂・石 | C | |
| 2 | 67 | 1号区図録 遺跡 | 甕土片 | 胴体 | T 2 | 口縁部 | 施線施文 約文 | - | - | ナア | 浅褐色 に赤い黄褐色 | 砂・石・磁鉄 | D | |
| 3 | 67 | 1号区図録 遺跡 | 甕土片 | 胴体 | T 4 5 | 胴体 | 約文 | L 3 斜 | - | ナア | に赤い黄褐色 明赤褐色 | 砂・磁鉄 | B | |
| 4 | 67 | 1号区図録 遺跡 | 甕土片 | 胴体 | T 4 b | 胴体 | 約文 | L 3 斜 | - | ナア | に赤い黄褐色 に赤い黄褐色 | 砂・雲・磁鉄 | C | |
| 5 | 67 | 1号区図録 遺跡 | 甕土片 | 胴体 | T 4 b | 胴体 | 約文 | L 3 斜 | - | ナア | に赤い黄褐色 赤褐色 | 砂・磁鉄 | C | |
| 6 | 67 | 1号区 | 甕土上位 | 胴体 | T 2 | 胴体 | 約文・施文 約文、施文 | L 3 斜 | 赤褐色 | ナア | 赤褐色 | 砂・雲・磁鉄 | B | |
| 7 | 67 | 1号区 | 甕土上位 | 胴体 | T 3 | 胴体 | 約文・施文 | L 3 斜 | 赤褐色 | ナア | 赤褐色 | 砂・雲・磁鉄 | B | |
| 8 | 67 | 1号区 | 甕土上位 | 胴体 | T | 胴体 | 約文・施文 | - | - | - | - | 砂・石 | A | |
| 9 | 68 | 1号区 | 甕土下位 | 胴体 | T 3 | 口縁部 | 約文、施文 | R 1 直 | 約文 | 白・黒上 ミガキ、ナア | 施文 | 砂 | A | 外周部にナア |
| 10 | 68 | 1号区 | 甕土下位 | 胴体 | T 3 | 口縁部 | 約文、施文、施文 | R 1 直 | 約文 | ナア | に赤い黄褐色 に赤い黄褐色 | 砂 | A | 外周に赤 |
| 11 | 68 | 1号区 | 甕土上位 | 胴体 | T 2、3 | 胴体 | 約文、施文 | R 1 直 | 約文 | ナア | に赤い黄褐色 明赤褐色 | 砂・石 | B | |
| 12 | 68 | 1号区 | 甕土上位 | 胴体 | T 2 | 胴体 | 約文 | L 3 斜 | - | 赤・ナア | 赤褐色 | 砂 | A | |
| 13 | 68 | 2号区 | 甕土上位 | 胴体 | T 2、3 | 胴体 | 約文、施文 | R 1 斜 | 約文 | ナア | 赤褐色 | 砂 | B | 内面にナア |
| 16 | 68 | 2号区 | 甕土上位 | 胴体 | T 3 | 胴体 | 約文、施文 | R 1 直 | 約文 | ナア | 赤褐色 | 砂・石 | B | |
| 17 | 68 | 2号区 | 甕土中位 | 胴体 | T 2、3 | 胴体 | 約文、施文 | R 1 直 | 約文 | ミガキ | 赤褐色 | 砂 | A | |
| 18 | 68 | 2号区 | 伊前遺跡内 | 口縁部 | T 6 | 口縁部 | 約文 | R 1 直 | - | 口縁部 ナア | に赤い黄褐色 に赤い黄褐色 | 砂・石 | C | |
| 20 | 68 | 3号区 | 甕土下位 | 胴体 | T 6 | 口縁部 | 約文 | R 1 直 | - | 口縁部上 ナア | 明赤褐色 に赤い黄褐色 | 砂 | C | |
| 21 | 68 | 3号区 | 甕土上位 | 胴体 | T 2、3 | 胴体 | 約文、施文 | R 1 直 | 赤褐色 | 胴体・口縁部 ナア | 赤褐色 | 砂 | C | 内面赤褐色 |
| 22 | 68 | 3号区 | 甕土上位 | 胴体 | T 2 | 口縁部 | 約文、施文、施文 | L 3 斜 | 赤褐色 | ミガキ | 赤褐色 | 白・砂 | A | 外周にナア |
| 23 | 68 | 3号区 | 甕土上位 | 胴体 | T 6 | 口縁部 | 約文 | L 3 斜 | - | ミガキ | に赤い黄褐色 | 白 | A | 外周に黄褐色 |
| 24 | 68 | 3号区 | 甕土上位 | 胴体 | T 1、2 | 胴体 | 約文、施文、施文 | R 1 直 | 約文 | ミガキ | に赤い黄褐色 | 白・砂 | A | |
| 25 | 68 | 3号区 | 甕土上位 | 胴体 | T 2 | 胴体 | 約文 | - | - | - | 赤褐色 | 砂 | A | |
| 26 | 68 | 3号区 | 甕土上位 | 胴体 | T 6 | 口縁部 | 約文 | L 3 斜 | - | ミガキ | に赤い黄褐色 に赤い黄褐色 | 砂 | A | |
| 30 | 69 | 1号区 | 床土上 | 胴体 | T 3 | 口縁部 | 約文、ナア | R 1 直 | 約文 | 口縁部 | に赤い黄褐色 に赤い黄褐色 | 砂 | A | |
| 31 | 69 | 1号区 | 床土上 | 胴体 | T 3 | 口縁部 | 約文、施文 | L 3 斜 | 約文 | ナア | 明赤褐色 | 砂 | A | |
| 32 | 69 | 4号区 | 床土上 | 胴体 | T 2 | 口縁部 | 約文、約文 | R 1 斜 | - | ミガキ | に赤い黄褐色 に赤い黄褐色 | 砂・雲 | B | 内面に黄褐色 |
| 33 | 69 | 4号区 | 甕土上位 | 胴体 | T 3 | 口縁部 | 約文、ナア | R 1 斜 | 約文 | ナア | 赤褐色 | 砂・石 | A | |
| 34 | 69 | 4号区 | 甕土上位 | 胴体 | T 3 | 口縁部 | 約文、施文 | L 3 斜 | 約文 | ナア | に赤い黄褐色 明赤褐色 | 砂 | A | 外周にナア |
| 35 | 69 | 5号区 | 甕土上位 | 胴体 | T 2 | 口縁部 | 約文、施文 | R 1 斜 | 約文 | ナア | 赤褐色 | 砂・雲 | A | |
| 37 | 69 | 5号区 | 甕土上位 | 胴体 | T 6 | 口縁部 | 約文 | R 1 直 | - | ナア | 赤褐色 | 砂・雲 | A | 赤褐色にナア |
| 38 | 69 | 5号区 | 甕土中位 | 胴体 | T 6 | 口縁部 | 約文 | L 3 斜 | - | ナア | 明赤褐色 に赤い黄褐色 | 砂・雲 | B | |
| 39 | 69 | 6号区 | 床土上 | 胴体 | T 6 | 口縁部 | 約文 | L 3 斜 | - | 口縁部上 ナア | に赤い黄褐色 に赤い黄褐色 | 砂・雲 | C | 外周部にナア |

| 図録番号 | 登録国 | 所在地 | 出土層位 | 図録 | 分類 | 発見年代 | 外 国 | | | 内 国 | 外国発掘内出物 | 出土 | 年代 | 備考 |
|------|-----|-------|------|----|-------|--------------|---------------|--------|-----|---------------|----------------|-----|----|-----------------------------|
| | | | | | | | 文 種 | 語 文 | 手 法 | | | | | |
| 79 | 72 | 10号住居 | 堀土上段 | 漆器 | Ⅱ 6 | 1日部片 | 縄文 | R.L.R横 | - | ナブ | にぶい遺物 にぶい遺物 | 砂・土 | B | |
| 83 | 72 | 11号住居 | 堀土上段 | 漆器 | Ⅱ 6 | 胴下一定 1/3 | 縄文 | R.L.R横 | - | 胴下:ナブ | 胴 にぶい遺物 | 砂 | A | 15号住居堀土上 段と組合 |
| 86 | 72 | 11号住居 | 堀土上段 | 漆器 | Ⅱ 3 | 胴部片 | 縄文、比叡 | L.R横 | 酒持 | 胴下一定 2/3以下 | 流紋類 遺物 | 砂・石 | A | |
| 87 | 72 | 11号住居 | 堀土上段 | 漆器 | Ⅱ 6 | 胴下一定 1/4 | 縄文 | - | - | ミガキ | にぶい遺物 流紋類 | 砂 | C | 流紋に帯状物 |
| 86 | 72 | 11号住居 | 堀土上段 | 漆器 | Ⅱ 3 | 1日部片 | 縄文、比叡 | L.R横 | - | ナブ | 流紋類 流紋類 | 砂・土 | C | 外面に炭化物 |
| 87 | 72 | 11号住居 | 堀土上段 | 漆器 | Ⅱ 3 | 1日部片 | 縄文、比叡 | R.L.縦 | 祭酒 | ナブ | にぶい遺物 にぶい遺物 | 砂・土 | C | |
| 88 | 72 | 11号住居 | 堀土上段 | 漆器 | Ⅱ 6 | 1日部片 | 縄文 | R.L.横 | - | ナブ | にぶい遺物 流紋類 | 砂・土 | A | |
| 89 | 72 | 11号住居 | 堀土上段 | 漆器 | Ⅱ 6 | 1日部片 | 縄文 | R.L.R横 | - | ミガキ | 明 明物 | 砂・石 | A | |
| 90 | 72 | 11号住居 | 堀土上段 | 漆器 | Ⅱ 6 | 1日部片 | 縄文 | R.L.横 | - | ミガキ | 流紋 流紋 | 砂・石 | A | 外国におこげ |
| 91 | 72 | 11号住居 | 堀土上段 | 漆器 | Ⅱ 2、3 | 胴部片 | 縄文、比叡 | L.R縦 | 祭酒 | ナブ | にぶい遺物 流紋類 | 砂・土 | B | |
| 92 | 72 | 11号住居 | 堀土上段 | 漆器 | Ⅱ 2、3 | 胴部片 | 縄文、比叡 | L.R縦 | 祭酒 | ナブ | 流紋 にぶい遺物 | 砂・石 | A | |
| 92 | 72 | 11号住居 | 堀土上段 | 漆器 | - | 流紋のみ (残片) | 不明 | - | - | ナブ | 流紋 にぶい遺物 | 砂・土 | A | 外面に炭化物 |
| 103 | 73 | 12号住居 | 堀土上段 | 漆器 | Ⅱ 3 | 胴下一定 1/3 | 器子、良 縄文、比叡 | R.L.横 | - | 胴下一定 1/3 | 流紋 流紋 | 砂・土 | C | 部に朱 |
| 104 | 73 | 12号住居 | 堀土中 | 漆器 | Ⅱ 6 | 胴下一定 1/2 | 縄文 | L.R横 | - | 胴下一定 1/2 | 流紋 にぶい遺物 | 砂 | A | 外面に炭化物 |
| 105 | 73 | 12号住居 | 堀土下段 | 漆器 | Ⅱ 6 | 胴部片 | 縄文 | - | - | - | にぶい遺物 流紋類 | 砂 | A | 外面に木炭物 |
| 106 | 73 | 12号住居 | 堀土下段 | 漆器 | - | 胴部片 | 縄文 | - | - | 胴下一定 1/2 | 流紋類 流紋類 | 砂・石 | C | 外国におこげ 有物 (アスファルト) |
| 107 | 73 | 12号住居 | 堀土下段 | 漆器 | Ⅱ 3 | 口部片 | 縄文、比叡 | L.R縦 | - | ナブ | にぶい遺物 流紋類 | 砂・土 | C | |
| 108 | 73 | 12号住居 | 堀土下段 | 漆器 | Ⅱ 3 | 口部片 | 縄文、比叡 | L.R縦 | 酒持 | ナブ | にぶい遺物 にぶい遺物 | 砂 | C | |
| 109 | 73 | 12号住居 | 堀土下段 | 漆器 | Ⅱ 6 | 1日部片 | 縄文 | R.L.R横 | - | ナブ | 明物 明物 | 砂・土 | A | |
| 110 | 73 | 12号住居 | 堀土下段 | 漆器 | Ⅱ 6 | 1日部片 | 縄文 | R.L.R横 | - | ナブ | にぶい遺物 にぶい遺物 | 砂・土 | C | |
| 111 | 73 | 12号住居 | 堀土下段 | 漆器 | Ⅱ 6 | 1日部片 | 縄文 | R.L.R横 | - | ナブ | にぶい遺物 にぶい遺物 | 砂 | A | |
| 112 | 73 | 12号住居 | 堀土下段 | 漆器 | Ⅱ 2、3 | 胴部片 | 縄文、比叡 | L.S.縦 | 祭酒 | ナブ | 流紋 流紋 | 砂・土 | A | |
| 112 | 73 | 12号住居 | 堀土下段 | 漆器 | Ⅱ 2、3 | 胴部片 | 縄文、比叡 | L.R縦 | - | ナブ | 流紋類 流紋類 | 砂・土 | C | |
| 114 | 73 | 12号住居 | 堀土上段 | 漆器 | Ⅱ 3 | 胴部片 | 縄文、比叡 | L.R縦 | 器持 | ミガキ | 流紋 流紋 | 砂・土 | B | |
| 115 | 73 | 12号住居 | 堀土上段 | 漆器 | Ⅱ 3 | 胴部片 | 縄文、比叡 | R.L.横 | 器持 | ミガキ | にぶい遺物 にぶい遺物 | 砂・石 | B | 外国におこげ |
| 116 | 73 | 12号住居 | 堀土中 | 漆器 | - | 胴部片 | 縄文 | R.L.横 | - | ナブ | にぶい遺物 にぶい遺物 | 砂 | A | |
| 117 | 73 | 12号住居 | 堀土中 | 漆器 | - | 胴部片 | 縄文 | - | - | ナブ | 流紋 流紋 | 砂 | A | 流紋に炭化物 |
| 128 | 74 | 13号住居 | 堀土中 | 漆器 | Ⅱ 2 | 1日部片 | 縄文、比叡、 比叡 | - | - | ナブ | 流紋類 流紋類 | 砂 | A | 外面に炭化物、12 号住居堀土上段と 組合 |
| 129 | 74 | 13号住居 | 堀土上段 | 漆器 | Ⅱ 2 | 1日部片 | 縄文、比叡、 比叡 | R.L.R横 | - | ナブ | 流紋類 流紋類 | 砂 | A | |
| 130 | 74 | 13号住居 | 堀土下段 | 漆器 | Ⅱ 3 | 1日部片 | 縄文、比叡 | L.R横 | 器持 | ミガキ | 流紋 流紋 | 砂・石 | A | 外国に炭化物 |
| 131 | 74 | 13号住居 | 堀土下段 | 漆器 | - | 胴部片 | 縄文 | R.L.横 | 器持 | 胴下一定 1/2以下 | 流紋類 流紋類 | 砂・土 | A | |
| 133 | 74 | 14号住居 | 堀土上段 | 漆器 | Ⅱ 3 | 口部片 | 縄文、比叡、 比叡 | L.R横 | 器持 | 胴下一定 1/2以上 | 流紋類 流紋類 | 砂・石 | C | 15号住居堀土中 段と組合 |
| 134 | 74 | 14号住居 | 堀土上段 | 漆器 | Ⅱ 2、3 | 胴部片 | 縄文、比叡 | L.R横 | 器持 | 胴下一定 1/2 | にぶい遺物 流紋類 | 砂 | C | 11号住居堀土下段 と組合 |

| 延岡 台号 | 延岡 国図 | 出土位置 | 出土層位 | 器種 | 分類 | 形状 寸法 | 外 形 | | 学 法 | 内 容 | 存在状況 位置 | 出土 | 状況 | 備考 |
|----------|----------|-------|------|----|------|----------|--------|--------|--------|--------|------------|-----|----|----------------------|
| | | | | | | | 文 様 | 縄 文 | | | | | | |
| 125 | 74 | 14号住居 | 伊A内 | 深鉢 | Ⅱ2、3 | 口径 10 | 縄文、沈線 | R.L.線 | 香酒 | 灰・ナガ | 土に多い | 砂 | C | |
| 136 | 75 | 14号住居 | 埴土中位 | 深鉢 | Ⅱ | 底径 12 | 縄文 | R.L.線 | | 灰・ナガ | 土に多い | 砂・石 | A | 埴土に灰混 |
| 137 | 74 | 14号住居 | 埴土上 | 深鉢 | Ⅱ6 | 口径 12 | 縄文 | R.L.線 | | 灰・ナガ | 土に多い | 砂・石 | B | |
| 138 | 74 | 14号住居 | 埴土中位 | 深鉢 | Ⅱ6 | 口径 13 | 縄文 | R.L.線 | | 灰・ナガ | 土に多い | 砂 | A | |
| 139 | 75 | 14号住居 | 埴土中位 | 深鉢 | Ⅱ6 | 口径 12 | 縄文 | R.L.線 | | 灰・ナガ | 土に多い | 砂 | A | |
| 140 | 75 | 14号住居 | 埴土上 | 鉢 | Ⅱ6 | 口径 12 | 縄文 | R.L.線 | | 灰・ナガ | 土に多い | 砂 | A | |
| 141 | 75 | 14号住居 | 埴土中位 | 鉢 | Ⅱ5 | 口径 12 | 縄文、沈線 | R.L.線 | 香酒 | 灰・ナガ | 土に多い | 砂 | A | 埴土、内面灰に 土に多い |
| 142 | 75 | 14号住居 | 埴土中位 | 鉢 | Ⅱ3 | 口径 12 | 縄文、沈線 | R.L.線 | 香酒 | 灰・ナガ | 土に多い | 砂 | C | 17号住居内出土 物と類似 |
| 143 | 75 | 14号住居 | 埴土上 | 鉢 | Ⅱ3 | 底径 14 | 縄文、沈線 | R.L.線 | 香酒 | 灰・ナガ | 土に多い | 砂 | A | 埴土に灰。20号住 居出土物と類似 |
| 144 | 75 | 14号住居 | 埴土上 | 深鉢 | Ⅱ3 | 口径 12 | 縄文、沈線 | R.L.線 | 香酒 | 灰・ナガ | 土に多い | 砂 | B | 内外面に灰化物 |
| 145 | 75 | 14号住居 | 埴土上 | 深鉢 | Ⅱ3 | 口径 12 | 縄文、沈線 | R.L.線 | 香酒 | 灰・ナガ | 土に多い | 砂 | C | |
| 146 | 75 | 14号住居 | 埴土上 | 深鉢 | Ⅱ3 | 口径 12 | 縄文、沈線 | R.L.線 | 香酒 | 灰・ナガ | 土に多い | 砂 | A | 外側に灰化物 |
| 147 | 75 | 14号住居 | 伊A内 | 盆 | Ⅱ3 | 口径 12 | 縄文、沈線 | R.L.線 | 香酒 | 灰・ナガ | 土に多い | 砂 | A | |
| 148 | 75 | 14号住居 | 埴土中 | 盆 | Ⅱ3 | 口径 14 | 縄文、沈線 | R.L.線 | 香酒 | 灰・ナガ | 土に多い | 砂 | A | 外側に灰 |
| 149 | 75 | 14号住居 | 埴土中位 | 深鉢 | Ⅱ2、3 | 底径 12 | 縄文、沈線 | R.L.線 | | 灰・ナガ | 土に多い | 砂・石 | B | |
| 150 | 75 | 14号住居 | 埴土上 | 深鉢 | Ⅱ3 | 底径 12 | 縄文、沈線 | R.L.線 | 香酒 | 灰・ナガ | 土に多い | 砂 | C | 内面に灰化物 |
| 151 | 75 | 14号住居 | 伊A内 | 深鉢 | Ⅱ2、3 | 底径 12 | 縄文、沈線 | R.L.線 | 香酒 | 灰・ナガ | 土に多い | 砂 | B | 内面にケール灰の 付着物 |
| 152 | 75 | 14号住居 | 埴土上 | 深鉢 | Ⅱ2、3 | 底径 12 | 縄文、沈線 | R.L.線 | 香酒 | 灰・ナガ | 土に多い | 砂・石 | C | 内外面に灰化物 |
| 153 | 75 | 14号住居 | 埴土下位 | 深鉢 | Ⅱ2、3 | 底径 12 | 縄文、沈線 | R.L.線 | 香酒 | 灰・ナガ | 土に多い | 砂 | B | |
| 154 | 76 | 14号住居 | 埴土上 | 盆 | Ⅱ | 底径 12 | 縄文 | R.L.線 | | 灰・ナガ | 土に多い | 砂 | A | |
| 155 | 76 | 14号住居 | 埴土中位 | 盆 | Ⅱ | 底径 12 | 縄文 | R.L.線 | | 灰・ナガ | 土に多い | 砂 | A | |
| 156 | 76 | 14号住居 | 埴土上 | 深鉢 | Ⅱ6 | 口径 12 | 縄文 | R.L.線 | | 灰・ナガ | 土に多い | 砂・石 | B | |
| 157 | 76 | 14号住居 | 伊A内 | 深鉢 | Ⅱ6 | 口径 12 | 縄文 | R.L.線 | | 灰・ナガ | 土に多い | 砂 | A | |
| 158 | 76 | 14号住居 | 埴土上 | 深鉢 | Ⅱ6 | 口径 12 | 縄文 | R.L.線 | | 灰・ナガ | 土に多い | 砂 | A | |
| 159 | 76 | 14号住居 | 埴土上 | 深鉢 | Ⅱ6 | 口径 12 | 縄文 | R.L.線 | | 灰・ナガ | 土に多い | 砂 | A | |
| 160 | 76 | 14号住居 | 埴土上 | 深鉢 | Ⅱ6 | 口径 12 | 縄文 | R.L.線 | | 灰・ナガ | 土に多い | 砂 | A | |
| 161 | 76 | 14号住居 | 埴土下位 | 深鉢 | Ⅱ6 | 口径 12 | 縄文 | R.L.線 | | 灰・ナガ | 土に多い | 砂 | A | |
| 162 | 76 | 14号住居 | 埴土上 | 深鉢 | Ⅱ6 | 口径 12 | 縄文 | R.L.線 | | 灰・ナガ | 土に多い | 砂 | B | 18号住居内出土物 と類似 |
| 174 | 76 | 15号住居 | 埴土中 | 深鉢 | Ⅱ3 | 口径 12 | 縄文、沈線 | R.L.線 | 香酒 | 灰・ナガ | 土に多い | 砂・石 | C | 16号住居内出土物 と類似 |
| 175 | 76 | 15号住居 | 埴土上 | 深鉢 | Ⅱ6 | 口径 12 | 縄文 | R.L.線 | | 灰・ナガ | 土に多い | 砂 | A | 外側に灰化物 |
| 176 | 76 | 15号住居 | 埴土上 | 深鉢 | Ⅱ3 | 口径 12 | 縄文、沈線 | R.L.線 | | 灰・ナガ | 土に多い | 砂・石 | A | |
| 177 | 77 | 16号住居 | 埴土下 | 深鉢 | Ⅱ3 | 口径 12 | 縄文、沈線 | R.L.線 | 香酒 | 灰・ナガ | 土に多い | 砂 | A | 20号住居出土物 と類似 |
| 178 | 77 | 16号住居 | 埴土下 | 深鉢 | Ⅱ2 | 口径 14 | 縄文、沈線 | R.L.線 | 香酒 | 灰・ナガ | 土に多い | 砂 | C | 外側に灰化物 |

| 採掘番号 | 立坑名称 | 坑上位置 | 出土層位 | 器種 | 分類 | 器 形 | | | 内 容 | 外面位置 内面位置 | 出土 | 集成 | 備考 | |
|------|------|-------|------|---------|-------|-------------|----------------|-------|-----|--------------|----------------|-----|----|----------------------------------|
| | | | | | | 胎 体 | 支 柱 | 手 法 | | | | | | |
| 179 | 77 | 16号住居 | 常面上 | 鉢 | Ⅱ-2 | 口一底 4.5 | 泥質、 沈着 | 土系磁 | 磨削 | 口一底上 5.0 | 胎 にない 内面 | 砂 | A | 23号土層に伴って 出た。14号住居出土 土器と連絡 |
| 180 | 78 | 16号住居 | 坑上中位 | 盆 | Ⅲ-3 | 横縁片 | 縄文、沈着 | 土系磁 | 磨削 | 口一底 5.0 | 胎 にない 内面 | 砂・石 | A | |
| 181 | 77 | 16号住居 | 坑上中位 | 深鉢 | Ⅲ-3 | 横縁片 | 縄文 | — | — | 胎一底上 5.0 | 胎 にない 内面 | 白・石 | B | 9号西面出土。18号 住居出土土器と連絡 |
| 182 | 77 | 16号住居 | 坑上中位 | 深鉢 | Ⅲ-3 | 口一底上 5.2 | 縄文、沈着 | 土系磁 | 磨削 | 口一底上 5.0 | 胎 にない 内面 | 砂・白 | C | 12号土層出土。土器 と連絡 |
| 183 | 77 | 16号住居 | 坑上中 | 深鉢 | Ⅲ-3 | 口一底上 5.4 | 縄文、沈着 | 土系磁 | 磨削 | 口一底上 5.0 | 胎 にない 内面 | 砂 | A | 9号住居に属し 土器と連絡 |
| 184 | 77 | 16号住居 | 坑上中位 | 鉢 | Ⅲ-3 | 口一底 5.4 | 花土、沈着 縄文、沈着 | 土系磁 | — | 口一底上 5.0 | 胎 にない 内面 | 白 | C | 内面ににおこげ |
| 185 | 78 | 16号住居 | 坑上中 | 深鉢 | Ⅲ-3 | 底縁のみ | 花土、縄文 | 土系磁 | 磨削 | 胎一底上 5.0 | 胎 にない 内面 | 砂 | C | 18号住居の坑上中 位土器と連絡 |
| 186 | 78 | 16号住居 | 坑上中 | 子付 鉢 | Ⅱ-2 | 口一底 5.0 | 花土、縄文 | 土系磁 | 磨削 | 胎一底上 5.0 | 胎 にない 内面 | 砂・石 | C | 内面ににおこげ |
| 187 | 78 | 16号住居 | 坑上上 | 深鉢 | Ⅲ-4 | 口一底 5.5 | 縄文、沈着 | 土系磁 | 磨削 | 胎一底上 5.0 | 胎 にない 内面 | 砂 | A | |
| 188 | 78 | 16号住居 | 常面上 | 深鉢 | Ⅲ-3 | 口一底上 5.5 | 縄文、沈着 | 土系磁 | 磨削 | 口一底上 5.0 | 胎 にない 内面 | 砂・石 | A | |
| 189 | 78 | 16号住居 | 坑上上位 | 深鉢 | Ⅲ-3 | 口一底 5.5 | 縄文、沈着 | 土系磁 | 磨削 | 胎一底上 5.0 | 胎 にない 内面 | 砂・白 | A | |
| 190 | 78 | 16号住居 | 坑上上位 | 深鉢 | Ⅲ-6 | 口一底上 5.5 | 縄文 | 土系磁 | — | 口一底上 5.0 | 胎 にない 内面 | 砂・白 | A | |
| 191 | 78 | 16号住居 | 坑上中位 | 深鉢 | Ⅲ-6 | 口一底 4.5 | 縄文 | 土系磁、新 | — | 口一底上 5.0 | 胎 にない 内面 | 白・石 | A | |
| 192 | 78 | 16号住居 | 坑上上 | 深鉢 | Ⅲ-6 | 口一底上 5.2 | 縄文 | 土系磁 | — | 口一底上 5.0 | 胎 にない 内面 | 砂 | A | |
| 193 | 78 | 16号住居 | 坑上上 | 深鉢 | Ⅲ-6 | 口一底 5.2 | 縄文 | 土系磁 | — | 口一底上 5.0 | 胎 にない 内面 | 白・石 | B | |
| 194 | 79 | 16号住居 | 坑上上位 | 深鉢 | Ⅲ-6 | 口一底 5.2 | 縄文 | 土系磁 | — | 口一底上 5.0 | 胎 にない 内面 | 砂・白 | A | 18号住居の坑上中 位土器と連絡 |
| 195 | 79 | 16号住居 | 坑上上位 | 深鉢 | Ⅲ-2、3 | 底縁のみ | 縄文 | 土系磁 | — | 胎一底上 5.0 | 胎 にない 内面 | 砂・白 | C | |
| 196 | 79 | 16号住居 | 坑上中位 | 深鉢 | Ⅲ-2、3 | 底縁のみ | 縄文 | 土系磁 | — | 胎一底上 5.0 | 胎 にない 内面 | 砂・白 | C | |
| 197 | 79 | 16号住居 | 坑上中位 | 深鉢 | Ⅲ-2 | 口一底 5.4 | 花土、沈着 縄文、沈着 | 土系磁 | 磨削 | 胎一底上 5.0 | 胎 にない 内面 | 砂・白 | C | 外面に灰化跡 |
| 198 | 79 | 16号住居 | 坑上中位 | 深鉢 | Ⅲ-3 | 口一底上 5.5 | 縄文、沈着 | 土系磁 | 磨削 | 胎一底上 5.0 | 胎 にない 内面 | 砂 | B | 外面に灰化跡 |
| 199 | 79 | 16号住居 | 坑上上位 | 深鉢 | Ⅲ-2 | 口一底上 5.5 | 縄文、沈着 | 土系磁 | — | 胎一底上 5.0 | 胎 にない 内面 | 砂・白 | A | |
| 200 | 79 | 16号住居 | 坑上上位 | 深鉢 | Ⅲ-1 | 口一底上 5.5 | 縄文、沈着 | 土系磁 | 磨削 | 胎一底上 5.0 | 胎 にない 内面 | 砂・白 | A | |
| 201 | 79 | 16号住居 | 坑上上位 | 深鉢 | Ⅲ-4 | 口一底上 5.5 | 縄文、沈着 | 土系磁 | 磨削 | 胎一底上 5.0 | 胎 にない 内面 | 砂・白 | A | 外面に灰化跡 |
| 202 | 79 | 16号住居 | 坑上中位 | 深鉢 | Ⅲ-3 | 口一底上 5.5 | 縄文、沈着 | 土系磁 | 磨削 | 胎一底上 5.0 | 胎 にない 内面 | 砂・白 | C | 外面に灰化跡 |
| 203 | 79 | 16号住居 | 坑上中位 | 深鉢 | Ⅲ-2 | 口一底上 5.5 | 花土、沈着 縄文、沈着 | 土系磁 | 磨削 | 胎一底上 5.0 | 胎 にない 内面 | 砂・白 | A | 外面に灰化跡 |
| 204 | 79 | 16号住居 | 坑上中位 | 深鉢 | Ⅲ-6 | 口一底上 5.5 | 縄文 | 土系磁 | — | 胎一底上 5.0 | 胎 にない 内面 | 砂・白 | A | 外面に灰化跡 |
| 205 | 79 | 16号住居 | 坑上中位 | 深鉢 | Ⅲ-6 | 口一底上 5.5 | 縄文 | 土系磁 | — | 胎一底上 5.0 | 胎 にない 内面 | 砂・白 | C | 外面ににおこげ |
| 206 | 79 | 16号住居 | 坑上中位 | 深鉢 | Ⅲ-2、3 | 口一底上 5.5 | 縄文、沈着 | 土系磁 | 磨削 | 胎一底上 5.0 | 胎 にない 内面 | 砂 | C | 外面に灰化跡 |
| 207 | 79 | 16号住居 | 坑上上位 | 深鉢 | Ⅲ-5 | 口一底上 5.5 | 縄文、沈着 | 土系磁 | 磨削 | 胎一底上 5.0 | 胎 にない 内面 | 砂 | B | 208と同一 |
| 208 | 79 | 16号住居 | 坑上中 | 深鉢 | Ⅲ-5 | 口一底上 5.5 | 縄文、沈着 | 土系磁 | 磨削 | 胎一底上 5.0 | 胎 にない 内面 | 砂 | B | 207と同一 |
| 209 | 79 | 16号住居 | 坑上中位 | 深鉢 | Ⅲ-2、3 | 口一底上 5.5 | 縄文、沈着 | 土系磁 | 磨削 | 胎一底上 5.0 | 胎 にない 内面 | 砂・白 | B | 外面に灰化跡 |
| 210 | 79 | 16号住居 | 坑上上位 | 深鉢 | Ⅲ-2、3 | 口一底上 5.5 | 縄文、沈着 | 土系磁 | 磨削 | 胎一底上 5.0 | 胎 にない 内面 | 砂・石 | A | |
| 211 | 79 | 16号住居 | 坑上上位 | 深鉢 | Ⅲ-2 | 口一底上 5.5 | 底縁のみ | 縄文 | 土系磁 | 胎一底上 5.0 | 胎 にない 内面 | 砂 | A | |

| 年度 学年 | 学内 種別 | 出立位置 | 出立種別 | 要領 | 分譲 | 編者 地位 | 外 題 | | | 内 題 | 外資共同 刊行状況 | 紙 種 | 成 果 | 備 考 |
|----------|----------|-------|-------|-------------------|----|-------------|-------|-------|-----|--------|----------------|-----|-----|--------|
| | | | | | | | 支 題 | 著 文 | 平 添 | | | | | |
| 217 | 79 | 16号在席 | 理士中位 | 理士中位 E1 ナユア | | 島原内 | 論文、小説 | T.R.坂 | 岩間 | 紙→ナヤ | 自費 にない書類 | 抄 | A | |
| 220 | 80 | 17号在席 | 理士上 | 理士上 B4 | | 村上～成 | 論文、小説 | T.R.坂 | 岩間 | 紙→ナヤ | 自費 にない書類 | 抄 | A | |
| 221 | 80 | 17号在席 | 理士中位 | 理士上 B1 | | 編部片 | 論文、小説 | T.R.坂 | — | ナヤ | 加藤 実業社 | 抄・空 | A | 内題に炭化物 |
| 222 | 80 | 17号在席 | 理士中 | 理士上 B2、3 | | 編部片 | 小説、小説 | — | — | ナヤ | 加藤 実業社 | 抄 | A | |
| 223 | 80 | 17号在席 | 理士上位 | 理士上 B2、3 | | 編部片 | 論文、小説 | T.R.坂 | 岩間 | 紙→ナヤ | 加藤 実業社 | 抄・空 | C | |
| 224 | 80 | 17号在席 | 理士上位 | 理士上 B6 | | 口勝部片 | 論文 | T.R.坂 | — | 口→紙→ナヤ | にない書類 にない書類 | 抄・空 | A | |
| 227 | 80 | 18号在席 | 理士中位内 | 理士上 B3 | | 船定形 | 論文、小説 | T.R.坂 | 岩間 | 紙→ナヤ | にない書類 にない書類 | 抄 | A | 外題に炭化物 |
| 228 | 80 | 18号在席 | 理士上 | 理士上 B3 | | 口→紙上 1/4 | 論文、小説 | T.R.坂 | 岩間 | 口→紙→ナヤ | 自費 | 抄 | C | |
| 229 | 80 | 18号在席 | 理士下位 | 理士上 B3 | | 口→紙 2/3 | 論文、小説 | T.R.坂 | 岩間 | ナヤ | 明業社 印刷 | 抄・空 | C | |
| 230 | 80 | 18号在席 | 理士中位 | 理士上 B3 | | 口→紙下 1/3 | 論文、小説 | T.R.坂 | — | 口→紙→ナヤ | にない書類 にない書類 | 抄 | A | |
| 231 | 81 | 18号在席 | 理士中位 | 理士上 B3 | | 口→紙下 2/3 | 論文、小説 | T.R.坂 | — | 口→紙→ナヤ | 加藤 実業社 | 抄・空 | C | 内題に炭化物 |
| 232 | 81 | 18号在席 | 理士中位 | 理士上 B2、3 | | 口→紙 2/3 | 論文、小説 | T.R.坂 | 岩間 | 紙→ナヤ | 加藤 実業社 | 抄 | A | |
| 233 | 81 | 18号在席 | 理士下位 | 理士上 B2、3 | | 口→紙 1/3 | 論文、小説 | T.R.坂 | 岩間 | 紙→ナヤ | 加藤 実業社 | 抄 | A | |
| 234 | 81 | 18号在席 | 理士下位 | 理士上 B2、3 | | 口→紙下 2/3 | 論文、小説 | T.R.坂 | 岩間 | 紙→ナヤ | 加藤 実業社 | 抄・空 | C | |
| 235 | 81 | 18号在席 | 理士中位 | 理士上 B2、3 | | 編部片 | 論文、小説 | T.R.坂 | 岩間 | 紙→ナヤ | 加藤 実業社 | 抄・空 | A | |
| 236 | 81 | 18号在席 | 理士上位内 | 理士上 B3 | | 口→紙 1/3 | 論文、小説 | T.R.坂 | 岩間 | 紙→ナヤ | 加藤 実業社 | 抄 | A | |
| 237 | 81 | 18号在席 | 理士中位 | 理士上 B6 | | 口→紙 | 論文 | T.R.坂 | — | 口→紙→ナヤ | にない書類 | 抄 | A | |
| 238 | 81 | 18号在席 | 理士中位 | 理士上 B6 | | 紙→紙 1/2 | 論文 | T.R.坂 | — | 紙→ナヤ | にない書類 加藤実業社 | 抄・空 | C | |
| 239 | 81 | 18号在席 | 理士上 | 理士上 B6 | | 紙→紙 | 論文 | T.R.坂 | — | 紙→ナヤ | にない書類 加藤実業社 | 抄・空 | A | |
| 240 | 81 | 18号在席 | 理士下位 | 理士上 B3 | | 口→紙 1/3 | 論文、小説 | T.R.坂 | 岩間 | 紙→ナヤ | にない書類 加藤実業社 | 抄 | A | |
| 241 | 81 | 18号在席 | 理士上 | 理士上 B3 | | 口勝部片 | 論文、小説 | T.R.坂 | 岩間 | 紙→ナヤ | 加藤 実業社 | 抄・空 | A | 内題に炭化物 |
| 242 | 81 | 18号在席 | 理士中位 | 理士上 B3 | | 口→紙 1/3 | 論文、小説 | T.R.坂 | 岩間 | ナヤ | 加藤 実業社 | 抄 | C | 外題に炭化物 |
| 243 | 81 | 18号在席 | 理士上位 | 理士上 B3 | | 口→紙上 1/4 | 論文、小説 | T.R.坂 | 岩間 | 紙→ナヤ | 加藤 実業社 | 抄・空 | B | |
| 244 | 81 | 18号在席 | 理士下位 | 理士上 B3 | | 口勝部片 | 論文、小説 | T.R.坂 | 岩間 | 紙→ナヤ | 加藤 実業社 | 抄 | B | 内題に炭化物 |
| 245 | 81 | 18号在席 | 理士中位 | 理士上 B3 | | 口→紙上 1/4 | 論文、小説 | T.R.坂 | 岩間 | 紙→ナヤ | 加藤 実業社 | 抄・空 | B | |
| 246 | 82 | 18号在席 | 理士上位 | 理士上 B2、3 | | 編部片 | 論文、小説 | T.R.坂 | 岩間 | ナヤ | 加藤 実業社 | 抄 | A | |
| 247 | 82 | 18号在席 | 理士上位 | 理士上 B2、3 | | 編部片 | 論文、小説 | T.R.坂 | 岩間 | ナヤ | 加藤 実業社 | 抄・空 | B | 内題に炭化物 |
| 248 | 82 | 18号在席 | 理士中位 | 理士上 B2、3 | | 編部片 | 論文、小説 | T.R.坂 | 岩間 | ナヤ | 加藤 実業社 | 抄・空 | C | 外題に炭化物 |
| 249 | 82 | 18号在席 | 理士下位 | 理士上 B2、3 | | 編部片 | 論文、小説 | T.R.坂 | 岩間 | 紙→ナヤ | 加藤 実業社 | 抄 | A | |
| 250 | 82 | 18号在席 | 理士中位 | 理士上 B2 | | 編部片 | 陸軍 | — | — | 紙→ナヤ | 加藤 実業社 | 抄・空 | A | 外題に炭 |
| 251 | 82 | 18号在席 | 理士上位 | 理士上 B2 | | 編部片 | 陸軍 | — | — | 紙→ナヤ | 加藤 実業社 | 抄・空 | B | 外題に炭 |
| 252 | 82 | 18号在席 | 理士中位 | 理士上 B5 | | 口→紙下 1/3 | 論文、小説 | T.R.坂 | 岩間 | 口→紙→ナヤ | 加藤 実業社 | 抄 | A | |
| 253 | 82 | 18号在席 | 理士中位 | 理士上 B5 | | 編部片 | 論文、小説 | T.R.坂 | 岩間 | 紙→ナヤ | 加藤 実業社 | 抄・空 | C | |

| RIN 番号 | 登録 番号 | 品上位置 | 品上部位 | 部材 | 分類 | 外 装 | | | 内 付 | 外装色調 内装色調 | 取 手 | 式 号 | 備 考 | |
|-----------|----------|-------|------|----|-------|--------------|-------|------|-----|--------------|------------------------|-----|-----|---------------|
| | | | | | | 文 様 | 観 文 | 手 法 | | | | | | |
| 254 | 82 | 18号作原 | 座面上位 | 漆床 | Ⅱ 6 | 11-扉上 2/3 | 縄文 | L・L線 | | 口+扉上 ナグ | にじい色 緑 | 紗 | C | |
| 255 | 82 | 18号作原 | 座上下位 | 漆床 | Ⅱ 6 | 11-扉下 2/3 | 縄文 | R・L線 | | 口+ナグ | にじい色 緑 にじい色 緑 | 紗・白 | A | 縫布孔あり |
| 256 | 82 | 18号作原 | 座土上位 | 漆床 | Ⅱ 6 | 11-扉 2/3 | 縄文 | L・L線 | | 口+扉上 ナグ | 海苔色 茶 | 紗 | C | |
| 257 | 83 | 18号作原 | 座土上位 | 漆床 | Ⅱ 6 | 11-扉 2/3 | 縄文 | R・L線 | | ミガキ | 無 色 | 紗・雲 | A | 外装に炭化物 |
| 258 | 83 | 18号作原 | 座土中位 | 漆床 | - | 11-扉 2/3 | 縄文 | | | ナグ | 無 色 | 紗・石 | C | |
| 259 | 83 | 18号作原 | 木面上 | 漆床 | Ⅱ 5 | 11-扉 2/3 | 縄文 | | | ナグ | にじい色 緑 海苔色 | 紗・雲 | A | 外装に炭化物 |
| 260 | 83 | 18号作原 | 座土上位 | 漆床 | Ⅱ 6 | 11-扉 2/3 | 縄文 | L・L線 | | ナグ | 海苔色 海苔色 | 紗 | A | |
| 262 | 83 | 18号作原 | 座土上位 | 漆床 | - | 11-扉 2/3 | 縄文 | R・L線 | | ナグ | にじい色 緑 にじい色 緑 | 白 | A | |
| 270 | 83 | 19号作原 | 座面上 | 漆床 | Ⅱ 6 | 11-扉上 1/2 | 縄文 | R・L線 | | 口+ナグ | にじい色 緑 無 色 | 紗・新 | C | |
| 271 | 83 | 19号作原 | 座土中 | 漆床 | Ⅱ 3 | 11-扉 1/2 | 縄文、沈線 | R・L線 | 硝子 | ナグ | 無 色 | 白 | C | 内装におこげ |
| 272 | 83 | 19号作原 | 座土上 | 漆床 | Ⅱ 2、3 | 11-扉 1/2 | 縄文、沈線 | L・L線 | 硝子 | ミガキ | にじい色 緑 無 色 | 紗・石 | D | 外装に炭化物 |
| 273 | 83 | 19号作原 | 座土中 | 漆床 | Ⅱ 2、3 | 11-扉 1/2 | 縄文、沈線 | L・L線 | 硝子 | ナグ | にじい色 緑 無 色 | 紗・新 | A | |
| 274 | 83 | 19号作原 | 座土中 | 漆床 | Ⅱ 6 | 11-扉 1/2 | 縄文 | R・L線 | | ナグ | にじい色 緑 無 色 | 紗・新 | A | |
| 275 | 83 | 19号作原 | 座土上位 | 漆床 | Ⅱ 6 | 11-扉 1/2 | 縄文 | R・L線 | | ナグ | にじい色 緑 無 色 | 白 | C | |
| 277 | 83 | 20号作原 | 座土上位 | 漆床 | Ⅱ 5 | 11-扉上 1/3 | 縄文、沈線 | R・L線 | 硝子 | 11-扉上 ナグ | 海苔色 海苔色 | 紗・雲 | A | |
| 278 | 83 | 20号作原 | 2部 | 漆床 | Ⅱ 6 | 11-扉 2/3 | 縄文 | R・L線 | | 11-扉上 ナグ | にじい色 緑 にじい色 緑 | 紗 | C | |
| 279 | 84 | 20号作原 | 座土上位 | 漆床 | Ⅱ 6 | 11-扉上 1/3 | 縄文、沈線 | L・L線 | | 口+扉上 ナグ | 無 色 | 紗 | C | 外装におこげ |
| 280 | 84 | 20号作原 | 座土上位 | 漆床 | Ⅱ 5 | 11-扉 1/2 | 縄文、沈線 | L・L線 | 硝子 | 11-扉 ナグ | にじい色 緑 無 色 | 白 | A | 280と同一、外装に炭化物 |
| 281 | 84 | 20号作原 | 座土上位 | 漆床 | Ⅱ 5 | 11-扉 1/2 | 縄文、沈線 | L・L線 | 硝子 | 11-扉 ナグ | にじい色 緑 無 色 | 白 | A | 280と同一、外装に炭化物 |
| 282 | 84 | 20号作原 | 座土上位 | 漆床 | Ⅱ 2 | 11-扉 1/2 | 縄文、沈線 | R・L線 | 硝子 | ナグ | 無 色 | 紗 | A | 内装におこげ |
| 283 | 84 | 20号作原 | 座土中 | 漆床 | Ⅱ 2 | 11-扉 1/2 | 縄文、沈線 | R・L線 | | ミガキ | にじい色 緑 無 色 | 紗 | C | |
| 284 | 84 | 20号作原 | 座土上位 | 漆床 | Ⅱ 6 | 11-扉 1/2 | 縄文 | R・L線 | | ナグ | 無 色 | 白・新 | A | 外装に炭化物 |
| 285 | 84 | 20号作原 | 座土上位 | 漆床 | Ⅱ 6 | 11-扉 1/2 | 縄文 | R・L線 | | ミガキ | 無 色 | 紗 | A | |
| 286 | 81 | 20号作原 | 座土上位 | 漆床 | Ⅱ 2、3 | 11-扉 1/2 | 縄文、沈線 | L・L線 | 硝子 | ミガキ | にじい色 緑 無 色 | 紗・新 | C | 内装に炭化物 |
| 288 | 81 | 21号作原 | 座土上位 | 漆床 | Ⅱ 5 | 11-扉 1/2 | 縄文、沈線 | R・L線 | 硝子 | 11-扉 ナグ | にじい色 緑 無 色 | 紗 | C | 外装におこげ |
| 289 | 81 | 21号作原 | 座土上位 | 漆床 | Ⅱ 6 | 11-扉上 1/4 | 縄文 | R・L線 | | ナグ | にじい色 緑 にじい色 緑 | 紗 | C | |
| 290 | 81 | 21号作原 | 座土上位 | 漆床 | Ⅱ 3 | 11-扉 1/2 | 縄文 | R・L線 | | ナグ | 無 色 | 紗 | C | |
| 291 | 84 | 21号作原 | 座土中位 | 漆床 | Ⅱ 1 | 11-扉 1/2 | 縄文、沈線 | R・L線 | 硝子 | ミガキ | にじい色 緑 無 色 | 紗・雲 | D | |
| 292 | 84 | 21号作原 | 座土上位 | 漆床 | Ⅱ 2、3 | 11-扉 1/2 | 縄文、沈線 | R・L線 | 硝子 | ミガキ | にじい色 緑 にじい色 緑 | 紗 | A | |
| 293 | 84 | 21号作原 | 座土中位 | 漆床 | Ⅱ 2、3 | 11-扉 1/2 | 縄文、沈線 | R・L線 | 硝子 | ミガキ | にじい色 緑 にじい色 緑 | 白・新 | A | |
| 294 | 84 | 21号作原 | 座土上位 | 漆床 | Ⅱ 2、3 | 11-扉 1/2 | 縄文、沈線 | R・L線 | 硝子 | ナグ | 無 色 | 紗 | C | |
| 295 | 84 | 21号作原 | 座土中位 | 漆床 | Ⅱ 6 | 11-扉 1/2 | 縄文 | R・L線 | | ナグ | にじい色 緑 にじい色 緑 | 紗 | A | |
| 296 | 84 | 21号作原 | 座土上位 | 漆床 | Ⅱ 6 | 11-扉 1/2 | 縄文 | R・L線 | | ナグ | にじい色 緑 にじい色 緑 | 紗 | A | |

| 国番号 | 大西等級 | 出土地名 | 出土部位 | 器種 | 分期 | 形状・文様 | 外 装 | | | 内 装 | 外国色調 内装色調 | 胎 土 | 産地 | 備 考 |
|-----|------|-------|-------|-----------------|-------|-------|--------------|-------|----|----------------|--------------|-----|--------|--------|
| | | | | | | | 文様 | 綴文 | 手法 | | | | | |
| 297 | 84 | 21号住居 | 礎上10位 | 漆鉢 | Ⅱ 6 | 1段彫片 | 縄文 | R.L.縦 | ナテ | 明赤褐色 | 砂 | C | | |
| 298 | 84 | 21号住居 | 礎上7位 | 土器 ヒメ チュア | Ⅱ 1 | 1段彫片 | 縄文 | L.縦 | ナテ | 土赤・黄褐色 灰青褐色 | 砂・雲 | A | | |
| 299 | 84 | 21号住居 | 礎上7位 | 漆鉢 | Ⅱ 3 | 彫削片 | 縄文・縄文、 縄文 | R.L.縦 | ナテ | 褐色 | 砂 | C | | |
| 300 | 84 | 21号住居 | 礎上9位 | 漆鉢 | Ⅱ 6 | 1段彫片 | 縄文 | - | ナテ | 褐色 土赤・黄褐色 | 砂 | A | | |
| 301 | 84 | 21号住居 | 礎上10位 | 漆鉢 | Ⅱ 6 | 1段彫片 | 縄文 | - | ナテ | 灰青褐色 | 砂・石 | C | | |
| 302 | 84 | 21号住居 | 礎上10位 | 漆鉢 | Ⅱ 2 | 彫削片 | 縄文 | R.L.縦 | ナテ | 褐色 土赤・黄褐色 | 砂・石 | A | 断面に灰化 | |
| 303 | 84 | 21号住居 | 礎上10位 | 土器 ヒメ チュア | Ⅱ 1 | 1段彫片 | 縄文 | - | ナテ | 褐色 土赤・黄褐色 | 砂 | A | | |
| 306 | 85 | 22号住居 | 礎上10位 | 漆鉢 | Ⅱ 3 | 1段彫片 | 縄文、縄文 | R.L.縦 | 漆酒 | ナテ | 褐色 土赤・黄褐色 | 砂 | A | 内面に灰化物 |
| 309 | 85 | 22号住居 | 礎上10位 | 漆鉢 | Ⅱ 2、3 | 彫削片 | 縄文、縄文 | R.L.縦 | 漆酒 | ナテ | 褐色 土赤・黄褐色 | 砂・石 | C | |
| 310 | 85 | 22号住居 | 礎上10位 | 漆鉢 | Ⅱ 2、3 | 彫削片 | 縄文、縄文、 縄文 | R.L.縦 | 漆酒 | ナテ | 褐色 土赤・黄褐色 | 砂 | C | |
| 311 | 85 | 22号住居 | 礎上10位 | 漆鉢 | Ⅱ 2、3 | 彫削片 | 縄文、縄文 | R.L.縦 | 漆酒 | ナテ | 褐色 土赤・黄褐色 | 砂・雲 | A | |
| 312 | 85 | 22号住居 | 礎上10位 | 漆鉢 | Ⅱ 2、3 | 彫削片 | 縄文、縄文 | R.L.縦 | 漆酒 | ナテ | 褐色 土赤・黄褐色 | 砂・雲 | C | 外面に灰化物 |
| 313 | 85 | 22号住居 | 礎上10位 | 漆鉢 | Ⅱ 2 | 彫削片 | 縄文、縄文、 縄文 | R.L.縦 | 漆酒 | ナテ | 褐色 土赤・黄褐色 | 砂 | A | |
| 314 | 85 | 22号住居 | 礎上10位 | 漆鉢 | Ⅱ 6 | 彫削片 | 縄文 | R.L.縦 | - | ナテ | 褐色 土赤・黄褐色 | 砂・石 | C | |
| 316 | 85 | 22号住居 | 礎上10位 | 漆鉢 | Ⅱ 2、3 | 彫削片 | 縄文、縄文 | R.L.縦 | 漆酒 | ナテ | 褐色 土赤・黄褐色 | 砂・石 | B | 内面に灰化物 |
| 317 | 85 | 22号住居 | 礎上10位 | 漆鉢 | Ⅱ 6 | 彫削片 | 縄文 | R.L.縦 | - | ナテ | 褐色 土赤・黄褐色 | 砂 | A | |
| 318 | 85 | 22号住居 | 礎上10位 | 漆鉢 | Ⅱ 2、3 | 彫削片 | 縄文、縄文、 縄文 | R.L.縦 | 漆酒 | ナテ | 褐色 土赤・黄褐色 | 砂 | A | |
| 319 | 85 | 22号住居 | 礎上10位 | 漆鉢 | Ⅱ 3 | 彫削片 | 縄文、縄文 | R.L.縦 | 漆酒 | ナテ | 褐色 土赤・黄褐色 | 白 | C | |
| 320 | 85 | 22号住居 | 礎上10位 | 漆鉢 | Ⅱ 2、3 | 彫削片 | 縄文、縄文 | R.L.縦 | 漆酒 | ナテ | 褐色 土赤・黄褐色 | 砂 | A | 内面に灰化物 |
| 321 | 85 | 22号住居 | 礎上10位 | 漆鉢 | Ⅱ 2 | 彫削片 | 縄文 | - | ナテ | 褐色 土赤・黄褐色 | 砂 | B | 断面に灰化物 | |
| 322 | 86 | 24号住居 | 礎上10位 | 漆鉢 | Ⅱ 5 | 1段彫片 | 縄文、縄文 | R.L.縦 | 漆酒 | ナテ | 褐色 土赤・黄褐色 | 砂・雲 | C | 大木10次 |
| 323 | 86 | 24号住居 | 礎上10位 | 漆鉢 | Ⅱ 3 | 1段彫片 | 縄文、縄文、 縄文 | R.L.縦 | 漆酒 | ナテ | 褐色 土赤・黄褐色 | 砂 | A | |
| 324 | 86 | 24号住居 | 礎上10位 | 漆鉢 | Ⅱ 6 | 1段彫片 | 縄文 | R.L.縦 | - | ナテ | 褐色 土赤・黄褐色 | 砂 | A | |
| 325 | 86 | 24号住居 | 礎上10位 | 漆鉢 | Ⅱ 3 | 1段彫片 | 縄文、縄文 | R.L.縦 | 漆酒 | ナテ | 褐色 土赤・黄褐色 | 砂 | A | |
| 326 | 86 | 24号住居 | 礎上10位 | 漆鉢 | Ⅱ 3 | 1段彫片 | 縄文、縄文 | R.L.縦 | 漆酒 | ナテ | 褐色 土赤・黄褐色 | 砂・石 | A | |
| 327 | 86 | 24号住居 | 礎上10位 | 漆鉢 | Ⅱ 3 | 1段彫片 | 縄文、縄文 | R.L.縦 | 漆酒 | ナテ | 褐色 土赤・黄褐色 | 砂 | A | |
| 328 | 86 | 24号住居 | 礎上10位 | 漆鉢 | Ⅱ 3 | 1段彫片 | 縄文、縄文 | R.L.縦 | 漆酒 | ナテ | 褐色 土赤・黄褐色 | 砂・石 | A | 内面に灰化物 |
| 329 | 87 | 21号住居 | 礎上10位 | 漆鉢 | Ⅱ 2、3 | 彫削片 | 縄文、縄文 | R.L.縦 | 漆酒 | ナテ | 褐色 土赤・黄褐色 | 砂・石 | C | 外面に灰化物 |
| 330 | 87 | 21号住居 | 礎上10位 | 漆鉢 | Ⅱ 3 | 1段彫片 | 縄文、縄文 | R.L.縦 | 漆酒 | ナテ | 褐色 土赤・黄褐色 | 砂・石 | A | |
| 331 | 87 | 21号住居 | 礎上10位 | 漆鉢 | Ⅱ 2、3 | 彫削片 | 縄文、縄文 | R.L.縦 | 漆酒 | ナテ | 褐色 土赤・黄褐色 | 砂・石 | C | 外面に灰化物 |
| 332 | 87 | 21号住居 | 礎上10位 | 漆鉢 | Ⅱ 2、3 | 彫削片 | 縄文、縄文 | R.L.縦 | 漆酒 | ナテ | 褐色 土赤・黄褐色 | 砂 | A | |
| 333 | 87 | 24号住居 | 礎上10位 | 漆鉢 | Ⅱ 2 | 彫削片 | 縄文、縄文 | R.L.縦 | 漆酒 | ナテ | 褐色 土赤・黄褐色 | 砂・雲 | A | 外面に灰化物 |
| 334 | 87 | 24号住居 | 礎上10位 | 漆鉢 | Ⅱ 3 | 彫削片 | 縄文、縄文 | R.L.縦 | 漆酒 | ナテ | 褐色 土赤・黄褐色 | 砂 | A | |

| 国名 番号 | 言葉 所属 | 出上位置 | 出上呼び | 部数 | 分組 | 発音 | | | 音 | | | 内語 | 外国語訳 内語訳 | 加 1 | 巻数 | 備考 |
|----------|----------|----------|------|----|-------|----------|----------|--------------|---------|----|------|----------------|-------------|-----|----|--------|
| | | | | | | 発音 文種 | 存在 文種 | 外 文種 | 綴文 | 活法 | 綴文 | | | | | |
| 335 | 87 | 24・25号作局 | 机上中 | 漢語 | Ⅱ 3 | 1 | 漢語片 | 漢文、比類 | R.L.R.順 | 巻語 | ナテ | 比類・漢語 比類・漢語 | 抄・書 | C | | |
| 336 | 87 | 24・25号作局 | 机上中 | 漢語 | Ⅱ 6 | 1 | 漢語片 | 漢文 | R.L.R.順 | - | ナテ | 漢語片 | 抄・書 | B | | |
| 337 | 87 | 24・25号作局 | 机上中 | 漢語 | Ⅱ 6 | 1 | 漢語片 | 漢文 | R.L.R.順 | - | ナテ | 漢語片 | 抄・書、書 | A | | |
| 338 | 87 | 24・25号作局 | 机上中 | 漢語 | Ⅱ 2 | 1 | 漢語片 | 綜合、漢文、 比類 | R.L.R.順 | 巻語 | ミガキ | 漢語片 | 抄・書 | C | | |
| 339 | 87 | 24・25号作局 | 机上中 | 漢語 | Ⅱ 3 | 1 | 漢語片 | 綜合、漢文、 比類 | R.L.R.順 | 巻語 | ナテ | 比類・漢語 比類・漢語 | 抄 | C | | |
| 340 | 87 | 24・25号作局 | 机上中 | 漢語 | Ⅱ 2、3 | 1 | 漢語片 | 綴文、比類 | R.L.R.順 | 巻語 | ミガキ | 漢語片 | 抄 | A | | |
| 341 | 87 | 24・25号作局 | 机上中 | 漢語 | Ⅱ 2、3 | 1 | 漢語片 | 綴文、比類 | R.L.R.順 | 巻語 | ナテ | 比類・漢語 綴 | 抄・書 | A | | |
| 342 | 87 | 24・25号作局 | 机上中 | 漢語 | - | 1 | 漢語片 | 綴文、比類 | R.L.R.順 | 巻語 | ナテ | 綴 綴 | 抄 | B | | |
| 343 | 87 | 26号作局 | 机上中 | 漢語 | Ⅱ 3 | 1 | 漢語片 | 綴文、比類 | R.L.R.順 | 巻語 | ナテ | 綴 綴 | 抄 | C | | |
| 344 | 87 | 26号作局 | 机上中 | 漢語 | Ⅱ 2、3 | 1 | 漢語片 | 綴文、比類 | R.L.R.順 | 巻語 | ナテ | 比類・漢語 綴 | 抄 | C | | |
| 345 | 87 | 26号作局 | 机上中 | 漢語 | Ⅱ 2、3 | 1 | 漢語片 | 綴文、比類 | R.L.R.順 | 巻語 | ナテ | 比類・漢語 綴 | 抄 | C | | |
| 346 | 87 | 26号作局 | 机上中 | 漢語 | Ⅱ 2、3 | 1 | 漢語片 | 綴文、比類 | R.L.R.順 | 巻語 | ナテ | 綴 綴 | 抄・書 | A | | |
| 349 | 89 | 27号作局 | 机上中 | 漢語 | Ⅱ 3 | 1 | 漢語片 | 漢文、比類 | R.L.R.順 | 巻語 | ナテ | 比類・漢語 比類・漢語 | 抄 | C | | 外題に漢化語 |
| 350 | 89 | 27号作局 | 机上中 | 漢語 | Ⅱ 6 | 1 | 漢語片 | 漢文 | R.L.R.順 | - | ナテ | 比類・漢語 綴 | 抄 | A | | 巻語あり |
| 351 | 89 | 27号作局 | 机上中 | 漢語 | Ⅱ 3 | 1 | 漢語片 | 綴文 | R.L.R.順 | - | ナテ | 綴 綴 | 抄・書 | C | | 巻語に漢化語 |
| 352 | 89 | 28号作局 | 机上中 | 漢語 | Ⅱ 1 | 1 | 漢語片 | 綜合、漢文、 比類 | R.L.R.順 | 巻語 | Ⅱ・ナテ | 漢語片 | 抄 | C | | |
| 353 | 89 | 28号作局 | 机上中 | 漢語 | Ⅱ 2 | 1 | 漢語片 | 綜合、漢文、 比類 | R.L.R.順 | 巻語 | Ⅱ・ナテ | 比類・漢語 綴 | 抄・書 | C | | 内題に漢化語 |
| 354 | 89 | 28号作局 | 机上中 | 漢語 | Ⅱ 2 | 1 | 漢語片 | 綜合、漢文、 比類 | R.L.R.順 | 巻語 | Ⅱ・ナテ | 綴 綴 | 抄 | B | | 内題に漢化語 |
| 355 | 89 | 28号作局 | 机上中 | 漢語 | Ⅱ 2 | 1 | 漢語片 | 綴文、漢文、 比類 | R.L.R.順 | 巻語 | Ⅱ・ナテ | 漢語片 | 白・書 | C | | |
| 356 | 89 | 28号作局 | 机上中 | 漢語 | Ⅱ 2 | 1 | 漢語片 | 綴文、漢文、 比類 | R.L.R.順 | 巻語 | Ⅱ・ナテ | 漢語片 | 抄 | A | | |
| 357 | 90 | 28号作局 | 机上中 | 漢語 | Ⅱ 2 | 1 | 漢語片 | 綜合、漢文、 比類 | R.L.R.順 | 巻語 | Ⅱ・ナテ | 比類・漢語 綴 | 抄・書 | C | | |
| 358 | 89 | 28号作局 | 机上中 | 漢語 | Ⅱ 1 | 1 | 漢語片 | 綴文、漢文、 比類 | R.L.R.順 | 巻語 | Ⅱ・ナテ | 漢語片 | 抄 | A | | 外題に漢 |
| 359 | 90 | 28号作局 | 机上中 | 漢語 | Ⅱ 1 | 1 | 漢語片 | 綴文、漢文、 比類 | R.L.R.順 | 巻語 | Ⅱ・ナテ | 漢語片 | 抄 | A | | 外題に漢 |
| 360 | 90 | 28号作局 | 机上中 | 漢語 | Ⅱ 2 | 1 | 漢語片 | 綴文、ナテ | R.L.R.順 | 巻語 | Ⅱ・ナテ | 漢語片 | 抄 | C | | 内題に漢化語 |
| 361 | 90 | 28号作局 | 机上中 | 漢語 | Ⅱ 2 | 1 | 漢語片 | 綴文、漢文、 比類 | R.L.R.順 | 巻語 | Ⅱ・ナテ | 漢語片 | 抄・白 | C | | |
| 362 | 90 | 28号作局 | 机上中 | 漢語 | Ⅱ 1 | 1 | 漢語片 | 綴文、漢文、 比類 | R.L.R.順 | 巻語 | Ⅱ・ナテ | 漢語片 | 抄 | A | | 外題に漢化語 |
| 363 | 90 | 28号作局 | 机上中 | 漢語 | Ⅱ 2 | 1 | 漢語片 | 綴文、漢文、 比類 | R.L.R.順 | 巻語 | Ⅱ・ナテ | 漢語片 | 抄 | B | | 外題に漢化語 |
| 364 | 90 | 28号作局 | 机上中 | 漢語 | Ⅱ 2 | 1 | 漢語片 | 綴文、漢文、 比類 | R.L.R.順 | 巻語 | Ⅱ・ナテ | 漢語片 | 抄・書 | C | | |
| 365 | 90 | 28号作局 | 机上中 | 漢語 | Ⅱ 2 | 1 | 漢語片 | 綴文、漢文、 比類 | R.L.R.順 | 巻語 | Ⅱ・ナテ | 漢語片 | 抄 | A | | 外題に漢 |
| 366 | 90 | 28号作局 | 机上中 | 漢語 | Ⅱ 3 | 1 | 漢語片 | 綴文、漢文、 比類 | R.L.R.順 | 巻語 | Ⅱ・ナテ | 漢語片 | 抄 | C | | |
| 367 | 90 | 28号作局 | 机上中 | 漢語 | Ⅱ 2、3 | 1 | 漢語片 | 綴文、比類 | R.L.R.順 | 巻語 | Ⅱ・ナテ | 漢語片 | 抄 | C | | |
| 368 | 91 | 28号作局 | 机上中 | 漢語 | Ⅱ 6 | 1 | 漢語片 | 綴文、漢文 | R.L.R.順 | - | Ⅱ・ナテ | 漢語片 | 抄 | A | | |
| 369 | 91 | 28号作局 | 机上中 | 漢語 | Ⅱ 6 | 1 | 漢語片 | 綴文 | R.L.R.順 | - | Ⅱ・ナテ | 漢語片 | 抄・書 | C | | |
| 370 | 90 | 28号作局 | 机上中 | 漢語 | Ⅱ 6 | 1 | 漢語片 | 綴文 | R.L.R.順 | - | Ⅱ・ナテ | 漢語片 | 抄・書 | A | | |

| 国定 番号 | 母体 区域 | 世一遺産 | 出土部位 | 器種 | 分類 | 発 見 時 期 | 外 観 | | | 内 容 | 外装色紙 内装色紙 | 胎土 | 構成 | 備考 |
|----------|----------|-------|------|----|----|-------------------|-----------|--------|-------|--------|----------------|-----|---------|---------|
| | | | | | | | 文様 | 構文 | 手法 | | | | | |
| 371 | 90 | 28号生器 | 瓶土中位 | 深鉢 | Ⅱ | 口一割 1/2 | 純文 | R.L.R線 | — | 口一割十ナ | 透青釉 灰青釉 | 砂・白 | A | 外装面に白こぼ |
| 372 | 91 | 28号生器 | 瓶土上位 | 深鉢 | Ⅱ | 口縁部片 | 染付、 純文 | R.L.R線 | 染付 | ミガキ | 口一割青釉 口一割灰青 | 砂 | A | |
| 373 | 91 | 28号生器 | 瓶土中位 | 深鉢 | Ⅱ | 口縁部片 | 染付、 純文 | R.L.R線 | 染付 | ナナ | 透青 口一割青釉 | 砂・赤 | C | 内装面に染付 |
| 374 | 91 | 28号生器 | 瓶土中位 | 深鉢 | Ⅱ | 口縁部片 | 染付、 純文 | R.L.R線 | 染付 | ミガキ | 黒色 灰青釉 | 砂・赤 | C | |
| 375 | 91 | 28号生器 | 瓶土中位 | 深鉢 | Ⅱ | 口縁部片 | 染付、 純文 | — | — | ナナ | 口一割青釉 口一割灰青 | 砂 | B | |
| 376 | 91 | 28号生器 | 瓶土中位 | 深鉢 | Ⅱ | 口一割 1/2 | 染付、 純文 | R.L.R線 | 染付 | ナナ | 透青 黒色 | 砂 | B | 内装面に染付 |
| 377 | 91 | 28号生器 | 瓶土上位 | 浅鉢 | — | 口縁部片 | 染付、 純文 | — | — | ミガキ | 口一割 黒色 | 砂 | A | 外装面に染 |
| 378 | 91 | 28号生器 | 瓶土中位 | 深鉢 | Ⅱ | 口縁部片 | 染付、 純文 | R.L.R線 | 染付 | ミガキ | 透青 黒色 | 砂・赤 | A | |
| 379 | 91 | 28号生器 | 瓶土中位 | 深鉢 | Ⅱ | 口縁部片 | 純文 | R.L.R線 | — | ミガキ | 口一割青釉 黒色 | 砂・赤 | C | 外装面に染付 |
| 380 | 91 | 28号生器 | 瓶土中位 | 深鉢 | Ⅱ | 口縁部片 | 染付、 純文 | R.L.R線 | 染付 | ミガキ | 透青 | 砂・白 | A | |
| 381 | 91 | 28号生器 | 瓶土中位 | 深鉢 | Ⅱ | 口縁部片 | 染付、 純文 | — | — | ナナ | 口一割青釉 黒色 | 砂 | B | 内装面に染付 |
| 382 | 91 | 28号生器 | 瓶土上位 | 深鉢 | Ⅱ | 口縁部片 | 染付、 純文 | R.L.R線 | 染付 | ナナ | 透青 | 砂 | A | 外装面に染付 |
| 383 | 91 | 28号生器 | 瓶土上位 | 深鉢 | Ⅱ | 口縁部片 | 染付、 純文 | R.L.R線 | 染付 | ナナ | 透青 | 砂 | A | 頸部に染付 |
| 384 | 91 | 28号生器 | 瓶土上位 | 深鉢 | Ⅱ | 口縁部片 | 染付、 純文 | R.L.R線 | 染付 | ミガキ | 透青 黒色 | 砂・赤 | C | |
| 385 | 91 | 28号生器 | 瓶土中位 | 深鉢 | Ⅱ | 口縁部片 | 染付、 純文 | R.L.R線 | 染付 | ミガキ | 透青 | 砂・赤 | C | 内装面に染付 |
| 386 | 91 | 28号生器 | 瓶土上位 | 深鉢 | Ⅱ | 口縁部片 | 染付、 純文 | — | — | ナナ | 透青 | 砂 | C | |
| 387 | 91 | 28号生器 | 瓶土上位 | 深鉢 | Ⅱ | 口縁部片 | 染付、 純文 | — | — | 口一割十ナ | 透青 | 砂 | C | |
| 400 | 92 | 29号生器 | 瓶土下位 | 深鉢 | Ⅱ | 口縁部片 | 染付、 純文 | R.L.R線 | 染付 | ミガキ | 透青 灰青釉 | 砂 | D | |
| 401 | 92 | 29号生器 | 瓶土下位 | 深鉢 | Ⅱ | 口縁部片 | 染付、 純文 | — | — | ナナ | 透青 | 砂・石 | B | |
| 402 | 92 | 29号生器 | 瓶土下位 | 深鉢 | Ⅱ | 口縁部片 | 染付、 純文 | R.L.R線 | 染付 | ナナ | 口一割青釉 口一割灰青 | 砂 | C | 外装面に白こぼ |
| 403 | 92 | 29号生器 | 瓶土下位 | 深鉢 | Ⅱ | 口縁部片 | 染付、 純文 | R.L.R線 | 染付 | ナナ | 透青 | 砂 | C | 外装面に染付 |
| 404 | 92 | 29号生器 | 瓶土下位 | 深鉢 | Ⅱ | 口縁部片 | 染付、 純文 | R.L.R線 | 染付 | ナナ | 透青 | 砂・赤 | C | 外装面に染付 |
| 405 | 92 | 29号生器 | 瓶土上位 | 深鉢 | Ⅱ | 口縁部片 | 染付、 純文 | R.L.R線 | 染付 | 口一割十ナ | 透青 口一割灰青 | 砂 | C | 外装面に白こぼ |
| 406 | 92 | 29号生器 | 瓶土上位 | 深鉢 | Ⅱ | 口縁部片 | 染付、 純文 | R.L.R線 | 染付 | 口一割十ナ | 透青 透青 | 白・石 | B | 内装面に白こぼ |
| 407 | 92 | 29号生器 | 瓶土中位 | 深鉢 | Ⅱ | 口一割 透青、 純文 | R.L.R線 | 染付 | 口一割十ナ | 透青 | 砂 | A | 外装面に白こぼ | |
| 408 | 92 | 29号生器 | 瓶土下位 | 深鉢 | Ⅱ | 口一割下 透青、 純文 | R.L.R線 | 染付 | ミガキ | 透青 | 口一割青釉 透青 | 砂 | C | 外装面に染付 |
| 409 | 92 | 29号生器 | 瓶土上位 | 深鉢 | Ⅱ | 口一割 透青、 純文 | R.L.R線 | 染付 | 口一割十ナ | 透青 | 口一割青釉 透青 | 砂 | A | 外装面に白こぼ |
| 410 | 93 | 30号生器 | 瓶土中位 | 深鉢 | Ⅱ | 口一割上 透青、 純文 | R.L.R線 | 染付 | ナナ | 透青 | 透青 | 砂・石 | C | |
| 411 | 93 | 30号生器 | 瓶土上位 | 深鉢 | Ⅱ | 口一割下 透青、 純文 | R.L.R線 | 染付 | 口一割十ナ | 透青 | 透青 黒色 | 砂・石 | A | 外装面に白こぼ |
| 412 | 93 | 30号生器 | 瓶土上位 | 深鉢 | Ⅱ | 口一割下 透青、 純文 | R.L.R線 | 染付 | ナナ | 透青 | 透青 透青 | 砂 | C | 内装面に白こぼ |
| 413 | 93 | 30号生器 | 瓶土中位 | 深鉢 | Ⅱ | 口一割 透青、 純文 | R.L.R線 | 染付 | 口一割十ナ | 透青 | 透青 透青 | 砂・石 | A | |
| 414 | 93 | 30号生器 | 瓶土中位 | 深鉢 | Ⅱ | 口一割 透青、 純文 | R.L.R線 | 染付 | 口一割十ナ | 透青 | 透青 透青 | 砂 | A | |
| 415 | 93 | 30号生器 | 瓶土中位 | 深鉢 | Ⅱ | 口一割下 透青、 純文 | R.L.R線 | 染付 | ナナ | 透青 | 透青 透青 | 砂・石 | A | |

| 品名 品名 品名 | 品名 | 品名 | 品名 | 品名 | 品名 | 品名 | | | 品名 | 品名 | 品名 | 品名 | 品名 | |
|----------------|----|-------|------|----|-----|------------|-------|--------|----|------------|------------|-----|----|-----------------|
| | | | | | | 品名 | 品名 | 品名 | | | | | | |
| 416 | 93 | 30号位片 | 理士上位 | 深鉢 | Ⅱ-3 | Ⅱ-1 1/4 | 漢文、沈澱 | R.L.R様 | — | 白・タズリ | 明赤釉 明赤釉 | 砂 | C | 外圍面におこげ |
| 417 | 93 | 30号位片 | 理士上位 | 深鉢 | Ⅱ-3 | Ⅱ-1 1/2 | 漢文、沈澱 | R.L.R様 | 赤酒 | Ⅱ-1 1/2 | 比叺い 赤釉 | 砂 | A | |
| 418 | 93 | 30号位片 | 理士上位 | 深鉢 | Ⅱ-3 | Ⅱ-1 1/2 | 漢文、沈澱 | R.L.R様 | 赤酒 | Ⅱ-1 1/2 | 比叺い 赤釉 | 砂 | C | 外圍面、外圍の 一部に赤 |
| 419 | 94 | 30号位片 | 理士上位 | 深鉢 | Ⅱ-3 | Ⅱ-1 1/2 | 漢文、沈澱 | R.L.R様 | 赤酒 | Ⅱ-1 1/2 | 比叺い 赤釉 | 砂・石 | A | |
| 420 | 94 | 30号位片 | 理士上位 | 深鉢 | Ⅱ-3 | Ⅱ-1 1/2 | 漢文、沈澱 | R.L.R様 | 赤酒 | ナデ | 比叺い 赤釉 | 砂・石 | A | 外圍におこげ |
| 421 | 94 | 30号位片 | 理士上位 | 深鉢 | Ⅱ-3 | Ⅱ-1 1/2 | 漢文、沈澱 | R.L.R様 | 赤酒 | ナデ | 比叺い 赤釉 | 砂 | C | |
| 422 | 94 | 30号位片 | 理士上位 | 深鉢 | Ⅱ-3 | Ⅱ-1 1/2 | 漢文、沈澱 | R.L.R様 | 赤酒 | Ⅱ-1 1/2 | 比叺い 赤釉 | 砂・石 | C | |
| 423 | 94 | 30号位片 | 理士上位 | 深鉢 | Ⅱ-3 | Ⅱ-1 1/2 | 漢文、沈澱 | R.L.R様 | 赤酒 | Ⅱ-1 1/2 | 比叺い 赤釉 | 砂・石 | B | |
| 424 | 94 | 30号位片 | 理士上位 | 深鉢 | Ⅱ-3 | Ⅱ-1 1/2 | 漢文、沈澱 | R.L.R様 | 赤酒 | ナデ | 比叺い 赤釉 | 砂・石 | A | |
| 425 | 94 | 30号位片 | 理士上位 | 深鉢 | Ⅱ-2 | Ⅱ-1 1/2 | 漢文、沈澱 | R.L.R様 | 赤酒 | Ⅱ-1 1/2 | 比叺い 赤釉 | 砂・石 | C | |
| 426 | 94 | 30号位片 | 理士上位 | 深鉢 | Ⅱ-2 | Ⅱ-1 1/2 | 漢文、沈澱 | R.L.R様 | 赤酒 | ナデ | 比叺い 赤釉 | 砂・石 | C | |
| 427 | 94 | 30号位片 | 理士上位 | 深鉢 | Ⅱ-2 | Ⅱ-1 1/2 | 漢文、沈澱 | R.L.R様 | 赤酒 | ナデ | 比叺い 赤釉 | 砂 | A | 外圍におこげ |
| 428 | 96 | 30号位片 | 理士上位 | 深鉢 | Ⅱ-2 | Ⅱ-1 1/2 | 漢文、沈澱 | R.L.R様 | 赤酒 | ナデ | 比叺い 赤釉 | 砂 | B | |
| 429 | 94 | 30号位片 | 理士上位 | 深鉢 | Ⅱ-2 | Ⅱ-1 1/2 | 漢文、沈澱 | R.L.R様 | 赤酒 | Ⅱ-1 1/2 | 比叺い 赤釉 | 砂 | C | |
| 430 | 94 | 30号位片 | 理士上位 | 深鉢 | Ⅱ-2 | Ⅱ-1 1/2 | 漢文、沈澱 | R.L.R様 | 赤酒 | Ⅱ-1 1/2 | 比叺い 赤釉 | 砂・石 | B | 外圍に灰化物 |
| 431 | 95 | 30号位片 | 理士上位 | 深鉢 | Ⅱ-2 | Ⅱ-1 1/2 | 漢文、沈澱 | R.L.R様 | 赤酒 | Ⅱ-1 1/2 | 比叺い 赤釉 | 砂 | C | |
| 432 | 95 | 30号位片 | 理士上位 | 深鉢 | Ⅱ-2 | Ⅱ-1 1/2 | 漢文、沈澱 | R.L.R様 | 赤酒 | Ⅱ-1 1/2 | 比叺い 赤釉 | 砂 | B | 外圍に灰化物 |
| 433 | 95 | 30号位片 | 理士上位 | 深鉢 | Ⅱ-2 | Ⅱ-1 1/2 | 漢文、沈澱 | R.L.R様 | 赤酒 | ナデ | 比叺い 赤釉 | 砂 | C | |
| 434 | 95 | 30号位片 | 理士上位 | 深鉢 | Ⅱ-2 | Ⅱ-1 1/2 | 漢文、沈澱 | R.L.R様 | 赤酒 | Ⅱ-1 1/2 | 比叺い 赤釉 | 砂 | A | 遺蹟に内孔あり |
| 435 | 95 | 30号位片 | 理士上位 | 深鉢 | Ⅱ-2 | Ⅱ-1 1/2 | 漢文、沈澱 | R.L.R様 | 赤酒 | ナデ | 比叺い 赤釉 | 砂 | A | |
| 436 | 95 | 30号位片 | 理士上位 | 深鉢 | Ⅱ-2 | Ⅱ-1 1/2 | 漢文、沈澱 | R.L.R様 | 赤酒 | Ⅱ-1 1/2 | 比叺い 赤釉 | 砂 | C | |
| 437 | 95 | 30号位片 | 理士上位 | 深鉢 | Ⅱ-2 | Ⅱ-1 1/2 | 漢文、沈澱 | R.L.R様 | 赤酒 | ナデ | 比叺い 赤釉 | 砂 | C | |
| 438 | 95 | 30号位片 | 理士上位 | 深鉢 | Ⅱ-2 | Ⅱ-1 1/2 | 漢文、沈澱 | R.L.R様 | 赤酒 | ナデ | 比叺い 赤釉 | 砂・石 | A | |
| 439 | 95 | 30号位片 | 理士上位 | 深鉢 | Ⅱ-1 | Ⅱ-1 1/2 | 漢文、沈澱 | R.L.R様 | 赤酒 | Ⅱ-1 1/2 | 比叺い 赤釉 | 砂 | C | |
| 440 | 95 | 30号位片 | 理士上位 | 深鉢 | Ⅱ-2 | Ⅱ-1 1/2 | 漢文、沈澱 | R.L.R様 | 赤酒 | Ⅱ-1 1/2 | 比叺い 赤釉 | 砂 | C | 内圍におこげ |
| 441 | 95 | 30号位片 | 理士上位 | 深鉢 | Ⅱ-2 | Ⅱ-1 1/2 | 漢文、沈澱 | R.L.R様 | 赤酒 | ナデ | 比叺い 赤釉 | 砂 | C | |
| 442 | 95 | 30号位片 | 理士上位 | 深鉢 | Ⅱ-3 | Ⅱ-1 1/2 | 漢文、沈澱 | R.L.R様 | 赤酒 | ナデ | 比叺い 赤釉 | 砂・石 | B | 外圍に灰化物 |
| 443 | 95 | 30号位片 | 理士上位 | 深鉢 | Ⅱ-2 | Ⅱ-1 1/2 | 漢文、沈澱 | R.L.R様 | 赤酒 | Ⅱ-1 1/2 | 比叺い 赤釉 | 砂 | D | |
| 444 | 95 | 30号位片 | 理士上位 | 深鉢 | Ⅱ-2 | Ⅱ-1 1/2 | 漢文、沈澱 | R.L.R様 | 赤酒 | Ⅱ-1 1/2 | 比叺い 赤釉 | 砂・石 | C | |
| 445 | 95 | 30号位片 | 理士上位 | 深鉢 | Ⅱ-2 | Ⅱ-1 1/2 | 漢文、沈澱 | R.L.R様 | 赤酒 | ナデ | 比叺い 赤釉 | 砂 | B | |
| 446 | 95 | 30号位片 | 理士上位 | 深鉢 | Ⅱ-3 | Ⅱ-1 1/2 | 漢文、沈澱 | R.L.R様 | 赤酒 | ナデ | 比叺い 赤釉 | 砂・石 | B | |
| 447 | 95 | 30号位片 | 理士上位 | 深鉢 | Ⅱ-3 | Ⅱ-1 1/2 | 漢文、沈澱 | R.L.R様 | 赤酒 | Ⅱ-1 1/2 | 比叺い 赤釉 | 砂・石 | C | |
| 448 | 95 | 30号位片 | 理士上位 | 深鉢 | Ⅱ-1 | Ⅱ-1 1/2 | 漢文、沈澱 | R.L.R様 | 赤酒 | ナデ | 比叺い 赤釉 | 砂 | C | |

| 図録番号 | 写真 図版 | 出土位置 | 出土層位 | 図録 | 分類 | 原 名 | 外 文 | | | 内 容 | 外国産品 中国産品 | 出土 | 構成 | 備考 |
|------|----------|-------|------|----|-------|------------|--------------|---------------|-----|------------|-----------------|-----|----|--------|
| | | | | | | | 天 標 | 西 文 | 手 注 | | | | | |
| 439 | 95 | 30号住居 | 堀土上位 | 漆鉢 | Ⅱ-2 | 製部片 | 陸奥、縄文、 沈線 | R.L.R.模 | 磨削 | ミガキ | 手標 に深い溝 | 砂、土 | A | |
| 440 | 95 | 30号住居 | 堀土上位 | 漆鉢 | Ⅱ-2 | 製部片 | 陸奥、縄文、 ナナ | R.L.R.模 | 磨削 | ナナ | に深い溝 明細 | 砂 | C | |
| 451 | 95 | 30号住居 | 堀土上位 | 漆鉢 | Ⅱ-2 | 製部片 | 陸奥、縄文、 沈線 | R.L.R.模 | 磨削 | ナナ | に深い溝 に深い溝 | 砂 | A | 外面に灰化跡 |
| 457 | 96 | 30号住居 | 堀土上位 | 漆鉢 | Ⅱ-2 | 製部片 | 陸奥、縄文、 沈線 | R.L.R.模 | 磨削 | ミガキ | に深い溝 灰化跡 | 白 | A | 外面に灰化跡 |
| 453 | 96 | 30号住居 | 堀土上位 | 漆鉢 | Ⅱ-2 | 製部片 | 陸奥、縄文、 ナナ | R.L.R.模 | 磨削 | ナナ | に深い溝 研製跡 | 砂 | A | |
| 454 | 96 | 30号住居 | 堀土上位 | 漆鉢 | Ⅱ-2 | 製部片 | 陸奥、縄文、 沈線 | L.R.模 | 磨削 | ミガキ | 研 製 | 白 | C | |
| 456 | 96 | 30号住居 | 堀土上位 | 漆鉢 | Ⅱ-2 | 製部片 | 陸奥、縄文、 ナナ | R.L.R.模 | 磨削 | ミガキ | に深い溝 に深い溝 | 砂 | A | |
| 456 | 96 | 30号住居 | 堀土上位 | 漆鉢 | Ⅱ-2 | 製部片 | 陸奥、縄文、 沈線 | R.L.R.模 | 磨削 | ナナ | に深い溝 灰化跡 | 砂 | A | |
| 457 | 96 | 30号住居 | 堀土上位 | 漆鉢 | Ⅱ-1 | 製部片 | 陸奥、縄文、 ナナ | L.R.模 | 磨削 | ナナ | 研 製 | 砂 | A | |
| 458 | 96 | 30号住居 | 堀土上位 | 漆鉢 | Ⅱ-1 | 製部片 | 縄文、沈線 | R.L.R.模 | 磨削 | ミガキ | に深い溝 研製 跡 | 白 | C | 外面に灰化跡 |
| 459 | 96 | 30号住居 | 堀土上位 | 漆鉢 | Ⅱ-1 | 製部片 | 陸奥、縄文、 沈線 | R.L.R.模 | 磨削 | ナナ | に深い溝 に深い溝 | 砂 | A | 外面に灰化跡 |
| 460 | 96 | 30号住居 | 堀土上位 | 漆鉢 | Ⅱ-2 | 製部片 | 陸奥、縄文、 沈線 | R.L.R.模 | 磨削 | ナナ | に深い溝 に深い溝 | 砂 | A | 外面に灰化跡 |
| 461 | 96 | 30号住居 | 堀土上位 | 漆鉢 | Ⅱ-3 | 製部片 | 縄文、沈線 | R.L.R.模 | 磨削 | ミガキ | に深い溝 に深い溝 | 砂、土 | A | 外面に灰化跡 |
| 462 | 96 | 30号住居 | 堀土上位 | 漆鉢 | Ⅱ-2、3 | 製部片 | 縄文、沈線 | R.L.R.模 | 磨削 | ナナ | に深い溝 に深い溝 | 砂、土 | C | |
| 463 | 96 | 30号住居 | 堀土上位 | 漆鉢 | Ⅱ-2、3 | 製部片 | 縄文、沈線 | R.L.R.模 | 磨削 | ナナ | に深い溝 に深い溝 | 砂、土 | C | |
| 464 | 96 | 30号住居 | 堀土上位 | 漆鉢 | Ⅱ-2、3 | 製部片 | 縄文、沈線 | R.L.R.模 | 磨削 | ナナ | に深い溝 に深い溝 | 砂、土 | C | 外面におこじ |
| 465 | 96 | 30号住居 | 堀土上位 | 漆鉢 | Ⅱ-2、3 | 製部片 | 縄文、沈線 | R.L.R.模 | 磨削 | ナナ | 灰化 跡 | 砂 | B | |
| 466 | 96 | 30号住居 | 堀土上位 | 漆鉢 | Ⅱ-2、3 | 製部片 | 縄文、沈線 | R.L.R.模 | 磨削 | ミガキ | に深い溝 灰化跡 | 砂 | A | |
| 467 | 96 | 30号住居 | 堀土上位 | 漆鉢 | Ⅱ-1 | 製部片 | 縄文、沈線 | L.R.模 | 磨削 | ナナ | 透孔位 に深い溝 | 砂 | C | |
| 468 | 96 | 30号住居 | 堀土上位 | 漆鉢 | Ⅱ-1 | 製部片 | 縄文、沈線 | R.L.R.模 | 磨削 | ナナ | 研 製 | 砂、土 | C | 後期 |
| 469 | 96 | 30号住居 | 堀土上位 | 漆鉢 | Ⅱ-1 | 製部片 | 縄文、沈線 | L.R.模 | 磨削 | ナナ | 研 製 | 砂 | A | 後期 |
| 470 | 96 | 30号住居 | 堀土上位 | 漆鉢 | Ⅱ-6 | 口縁部片 | 縄文 | L.R.模 | | ナナ | に深い溝 | 砂 | C | |
| 471 | 96 | 30号住居 | 堀土上位 | 漆鉢 | - | 頸部片 | 把手、陸奥、 縄文 | - | - | ミガキ | に深い溝 に深い溝 | 砂 | C | 把手に孔あり |
| 472 | 96 | 30号住居 | 堀土中位 | 漆鉢 | Ⅱ-2 | 頸部片 | 陸奥、縄文、 沈線 | R.L.R.模 | 磨削 | ミガキ | 灰化跡 に深い溝 | 砂 | A | |
| 473 | 96 | 30号住居 | 堀土上位 | 漆鉢 | - | 頸部片 | 陸奥、陸奥 | - | - | ナナ | に深い溝 に深い溝 | 砂 | A | |
| 474 | 96 | 30号住居 | 堀土中 | 漆鉢 | Ⅱ-6 | 口縁部片 | 縄文 | R.L.R.模 | - | ナナ | に深い溝 明細 | 砂 | A | |
| 475 | 97 | 30号住居 | 堀土中位 | 漆鉢 | Ⅱ-6 | 口縁部片 | 縄文 | R.L.R.模 | - | ナナ | に深い溝 に深い溝 | 砂 | C | |
| 476 | 97 | 30号住居 | 堀土中位 | 漆鉢 | Ⅱ-6 | 口一帯上 | 陸奥、縄文 | L.R.模 | | ナナ | に深い溝 に深い溝 | 砂 | A | |
| 477 | 97 | 30号住居 | 堀土中位 | 漆鉢 | Ⅱ-6 | 口一帯 2/3 | 縄文 | R.L.R.模 | | 口一帯上 ナナ | に深い溝 に深い溝 | 砂 | A | 口縁部灰化跡 |
| 478 | 97 | 30号住居 | 堀土上位 | 漆鉢 | Ⅱ-6 | 口一帯 1/4 | 縄文 | R.L.R.模 | | 口一帯 ナナ | に深い溝 に深い溝 | 砂 | C | |
| 479 | 97 | 30号住居 | 堀土中位 | 漆鉢 | Ⅱ-6 | 口一帯 1/4 | 縄文 | R.L.R.模 | | 口一帯 ナナ | 磨削 明細 | 砂 | A | |
| 480 | 97 | 30号住居 | 堀土中位 | 漆鉢 | Ⅱ-6 | 口一帯 1/2 | 縄文 | R.L.R.模、 研 | | 研一帯 ナナ | に深い溝 に深い溝 | 砂、土 | C | |
| 481 | 97 | 30号住居 | 堀土上位 | 漆鉢 | Ⅱ-6 | 口一帯 | 縄文 | L.R.模 | | 底一帯 ナナ | に深い溝 研 | 砂、土 | A | 底面に灰化跡 |

| 国誌 番号 | 専攻 国名 | 出立卒業 | 出立編修 | 名称 | 分類 | 成 立 年 次 | 外 題 | | | 内 題 | 外国語製 作 言語 | 新 刊 | 他 記 | 備 考 |
|----------|----------|-------|------|-------|--------------|------------------|---------|--------|--------|--------|-----------------|--------|--------|--------|
| | | | | | | | 文 種 | 漢 文 | 活 字 | | | | | |
| 482 | 98 | 30号在学 | 堀上正位 | 三上チユウ | 漢文 | 二一 一三 | 納文 | 1. 漢 | - | ナテ | 経 緯 | 砂 | A | |
| 483 | 98 | 30号在学 | 堀上正位 | 三上チユウ | 口授部片 | 漢文、比論 | 1. 聖 | 巻語 | - | ナテ | 比論、聖 巻語 | 砂・赤 | A | |
| 484 | 98 | 30号在学 | 堀上正位 | 三上チユウ | 口授部片 | 漢文、比論 | 1. 株 | 巻語 | - | ナテ | 比論、株 巻語 | 砂・赤 | C | |
| 485 | 98 | 30号在学 | 堀上正位 | 三上チユウ | 口授部片 | 漢文、比論 | 1. 3. 聖 | 巻語? | - | ナテ | 比論、聖 巻語? | 砂 | A | |
| 486 | 98 | 30号在学 | 堀上正位 | 三上チユウ | 口授部片 | 漢文、比論 | 1. 編 | 巻語 | - | ナテ | 比論、編 巻語 | 砂 | C | |
| 487 | 98 | 30号在学 | 堀上正位 | 三上チユウ | 口一断下 1. 3 | 漢文 | - | チヅク | ナテ? | ナテ? | 比論、チ ヅク | 白・赤 | C | |
| 509 | 98 | 31号在学 | 如前正位 | 深井 直二 | 口授部片 | 漢文、漢文、 比論 | R. L. 株 | 新語 | 口・ミガキ | ナテ | 比論、株 比論 | 砂 | C | |
| 510 | 99 | 31号在学 | 如前正位 | 深井 直二 | 新部片 | 漢文、漢文、 比論 | R. L. 株 | 新語 | 口・ナテ | ナテ | 漢文 比論 | 砂・赤 | B | |
| 511 | 96 | 31号在学 | 堀上正位 | 深井 直二 | 口一断下 1. 2 | 漢文、漢文、 比論 | R. L. 株 | 新語 | 口下・ナテ | ナテ | 比論、新 語 | 砂・石 | A | |
| 512 | 99 | 31号在学 | 堀上正位 | 深井 直二 | 口一断下 1. 2 | 漢文、漢文、 比論 | R. L. 株 | 新語 | 口・ナテ | ナテ | 漢文 比論 | 砂 | A | |
| 513 | 99 | 31号在学 | 堀上正位 | 深井 直二 | 口一断下 1. 2 | 漢文 | - | - | ナテ | ナテ | 比論、新 語 | 砂 | A | |
| 514 | 99 | 31号在学 | 堀上正位 | 深井 直二 | 口授部片 | 漢文、漢文、 比論 | R. L. 株 | 新語 | ナテ | ナテ | 漢文 比論 | 砂 | B | |
| 515 | 99 | 31号在学 | 如前正位 | 深井 直二 | 口授部片 | 漢文、比論 | L. 3. 株 | 新語 | ミガキ | ナテ | 比論、株 比論 | 砂 | A | |
| 516 | 99 | 31号在学 | 堀上正位 | 深井 直二 | 口授部片 | 漢文、比論 | L. 3. 株 | 新語 | ナテ | ナテ | 比論、株 比論 | 砂 | C | |
| 517 | 99 | 31号在学 | 堀上正位 | 深井 直二 | 口授部片 | 漢文、比論 | R. L. 株 | 新語 | ナテ | ナテ | 比論、株 比論 | 砂・赤 | A | |
| 518 | 99 | 31号在学 | 堀上正位 | 深井 直二 | 口授部片 | 漢文、比論 | R. L. 株 | 新語 | ナテ | ナテ | 比論、株 比論 | 砂 | A | |
| 519 | 99 | 31号在学 | 堀上正位 | 深井 直二 | 口授部片 | 漢文、比論 | R. L. 株 | 新語 | ナテ | ナテ | 比論、株 比論 | 砂 | C | |
| 520 | 99 | 31号在学 | 堀上正位 | 深井 直二 | 口授部片 | 漢文、漢文、 比論 | R. L. 株 | 新語 | ナテ | ナテ | 比論、株 比論 | 砂 | C | 内題におおげ |
| 521 | 99 | 31号在学 | 堀上正位 | 深井 直二 | 口授部片 | 漢文、漢文、 比論 | R. L. 株 | 新語 | ミガキ | ナテ | 比論、株 比論 | 砂・赤 | C | |
| 522 | 99 | 31号在学 | 堀上正位 | 深井 直二 | 口授部片 | 漢文、比論 | R. L. 株 | 新語 | ナテ | ナテ | 比論、株 比論 | 砂 | B | |
| 523 | 99 | 31号在学 | 如前正位 | 深井 直二 | 口授部片 | 漢文、比論 | R. L. 株 | 新語 | ナテ | ナテ | 比論、株 比論 | 砂・赤 | D | |
| 524 | 99 | 31号在学 | 堀上正位 | 深井 直二 | 口授部片 | 漢文 | R. L. 株 | - | ナテ | ナテ | 比論、株 比論 | 砂・赤 | D | |
| 525 | 99 | 31号在学 | 堀上正位 | 深井 直二 | 口授部片 | 漢文 | R. L. 株 | - | ナテ | ナテ | 比論、株 比論 | 砂 | B | |
| 526 | 99 | 31号在学 | 堀上正位 | 深井 直二 | 口授部片 | 漢文 | R. L. 株 | - | ナテ | ナテ | 比論、株 比論 | 砂 | C | |
| 530 | 100 | 32号在学 | 堀上正位 | 深井 直二 | 口授部片 | 漢文、比論 | R. L. 株 | 新語 | ナテ | ナテ | 比論、株 比論 | 砂 | A | |
| 531 | 100 | 32号在学 | 堀上正位 | 深井 直二 | 口授部片 | 漢文、比論 | R. L. 株 | 新語 | ナテ | ナテ | 比論、株 比論 | 砂・赤 | A | |
| 534 | 100 | 32号在学 | 堀上正位 | 深井 直二 | 口授部片 | 漢文、比論 | R. L. 株 | 新語 | ナテ | ナテ | 比論、株 比論 | 砂 | A | 内題に赤 |
| 535 | 100 | 32号在学 | 堀上正位 | 深井 直二 | 口授部片 | 漢文 | R. L. 株 | - | ナテ | ナテ | 比論、株 比論 | 砂・石 | C | |
| 536 | 100 | 32号在学 | 堀上正位 | 深井 直二 | 口授部片 | 漢文 | - | - | ナテ | ナテ | 比論、株 比論 | 砂 | D | |
| 537 | 100 | 32号在学 | 堀上正位 | 深井 直二 | 口授部片 | 漢文、比論 | R. L. 株 | 新語 | ナテ | ナテ | 比論、株 比論 | 砂 | C | |
| 538 | 100 | 32号在学 | 堀上正位 | 深井 直二 | 口授部片 | 漢文、比論 | R. L. 株 | 新語 | ナテ | ナテ | 比論、株 比論 | 砂・赤 | A | 内題に比文化 |
| 539 | 100 | 32号在学 | 堀上正位 | 深井 直二 | 口授部片 | 漢文、比論 | R. L. 株 | 新語 | ナテ | ナテ | 比論、株 比論 | 砂 | A | 内題に赤 |
| 543 | 100 | 32号在学 | 堀上正位 | 深井 直二 | 口授部片 | 漢文 | R. L. 株 | - | ナテ | ナテ | 比論、株 比論 | 砂 | B | |

| 国番号 | 分類 | 品名 | 品名 | 品名 | 分類 | 製法 | 製法 | 外 国 | | | | 外産品 内産品 | 品上 | 品上 | 備考 |
|-----|-----|--------------|-----|----|----|-----|-------|--------|-----|------|--------------|------------|----|--------|----|
| | | | | | | | | 文 名 | 漢 文 | 平 漢 | 内 産 | | | | |
| 582 | 102 | 7号位座敷 透縁 | 襦土中 | 深鉢 | 皿6 | 刷部片 | 和文 | L・S横 | - | 透・ナブ | にんい・陶 明赤成 | 砂・赤 | A | | |
| 583 | 102 | 8号位座敷 透縁 | 襦土中 | 深鉢 | 皿6 | 刷部片 | 和文 | L・S横 | - | 透・ナブ | にんい・陶 明赤成 | 砂・赤 | A | 内外面に灰 | |
| 585 | 102 | 10号位座敷 透縁 | 襦土中 | 深鉢 | 皿6 | 刷部片 | 和文 | L・S横 | - | 透・ナブ | にんい・陶 明赤成 | 砂・赤 | A | | |
| 586 | 102 | 10号位座敷 透縁 | 襦土中 | 深鉢 | 皿6 | 刷部片 | 和文、沈泥 | L・S横、刷 | 変泥 | ナブ | にんい・陶 明赤成 | 砂・赤 | C | | |
| 587 | 87 | 11号位座敷 透縁 | 襦土中 | 深鉢 | 皿6 | 刷部片 | 和文 | R・L斜 | - | 透・ナブ | にんい・陶 明赤成 | 砂 | A | | |
| 588 | 87 | 11号位座敷 透縁 | 襦土中 | 深鉢 | 皿6 | 刷部片 | 和文 | R・L横 | - | 透・ナブ | にんい・陶 明赤成 | 砂 | C | | |
| 589 | 87 | 11号位座敷 透縁 | 襦土中 | 深鉢 | 皿6 | 刷部片 | 和文、沈泥 | R・L横 | 赤泥 | ミガキ | にんい・陶 明赤成 | 砂・赤 | C | 外面に灰化物 | |
| 590 | 88 | 11号位座敷 透縁 | 襦土中 | 深鉢 | 皿6 | 刷部片 | 和文、沈泥 | R・L横 | 赤泥 | 透・ナブ | にんい・陶 明赤成 | 砂 | A | 表面に孔あり | |
| 591 | 88 | 11号位座敷 透縁 | 襦土中 | 深鉢 | 皿6 | 刷部片 | 和文 | L・R斜、縦 | - | 透・ナブ | にんい・陶 明赤成 | 砂 | A | | |
| 592 | 88 | 11号位座敷 透縁 | 襦土中 | 深鉢 | 皿6 | 刷部片 | 和文、沈泥 | R・L横 | 赤泥 | 透・ナブ | にんい・陶 明赤成 | 砂 | A | | |
| 593 | 88 | 11号位座敷 透縁 | 襦土中 | 深鉢 | 皿6 | 刷部片 | 和文 | R・L横 | - | 透・ナブ | にんい・陶 明赤成 | 砂・赤 | A | 外面に灰化物 | |
| 594 | 88 | 11号位座敷 透縁 | 襦土中 | 深鉢 | 皿6 | 刷部片 | 和文、沈泥 | L・R斜 | 赤泥 | 透・ナブ | にんい・陶 明赤成 | 砂 | A | | |
| 595 | 88 | 11号位座敷 透縁 | 襦土中 | 深鉢 | 皿6 | 刷部片 | 和文、沈泥 | R・L斜 | 赤泥 | 透・ナブ | にんい・陶 明赤成 | 砂・赤 | A | | |
| 596 | 88 | 11号位座敷 透縁 | 襦土中 | 深鉢 | 皿6 | 刷部片 | 和文、沈泥 | R・L横 | 赤泥 | 透・ナブ | にんい・陶 明赤成 | 砂 | C | | |
| 597 | 88 | 11号位座敷 透縁 | 襦土中 | 深鉢 | 皿6 | 刷部片 | 和文、沈泥 | L・R斜 | 赤泥 | 透・ナブ | にんい・陶 明赤成 | 砂・赤 | A | | |
| 598 | 88 | 11号位座敷 透縁 | 襦土中 | 深鉢 | 皿6 | 刷部片 | 和文、沈泥 | R・L斜 | 赤泥 | 透・ナブ | にんい・陶 明赤成 | 砂 | B | | |
| 599 | 88 | 11号位座敷 透縁 | 襦土中 | 深鉢 | 皿6 | 刷部片 | 和文、沈泥 | L・R斜 | 赤泥 | 透・ナブ | にんい・陶 明赤成 | 砂・赤 | A | 内外面に灰 | |
| 600 | 88 | 11号位座敷 透縁 | 襦土中 | 深鉢 | 皿6 | 刷部片 | 和文、沈泥 | R・L横 | 赤泥 | 透・ナブ | にんい・陶 明赤成 | 砂 | A | | |
| 601 | 88 | 11号位座敷 透縁 | 襦土中 | 深鉢 | 皿6 | 刷部片 | 和文、沈泥 | L・R斜 | - | 透・ナブ | にんい・陶 明赤成 | 砂 | A | | |
| 602 | 88 | 11号位座敷 透縁 | 襦土中 | 深鉢 | 皿6 | 刷部片 | 和文、沈泥 | R・L横 | 赤泥 | 透・ナブ | にんい・陶 明赤成 | 砂 | B | | |
| 603 | 88 | 11号位座敷 透縁 | 襦土中 | 深鉢 | 皿6 | 刷部片 | 和文、沈泥 | R・L横 | 赤泥 | 透・ナブ | にんい・陶 明赤成 | 砂 | C | | |
| 604 | 89 | 11号位座敷 透縁 | 襦土中 | 深鉢 | 皿6 | 刷部片 | 和文、沈泥 | R・L斜 | 赤泥 | 透・ナブ | にんい・陶 明赤成 | 砂 | C | | |
| 605 | 89 | 11号位座敷 透縁 | 襦土中 | 深鉢 | 皿6 | 刷部片 | 和文、沈泥 | R・L横 | 赤泥 | 透・ナブ | にんい・陶 明赤成 | 砂 | C | | |
| 606 | 89 | 11号位座敷 透縁 | 襦土中 | 深鉢 | 皿6 | 刷部片 | 和文、沈泥 | R・L横 | 赤泥 | 透・ナブ | にんい・陶 明赤成 | 砂 | D | | |
| 607 | 89 | 11号位座敷 透縁 | 襦土中 | 深鉢 | 皿6 | 刷部片 | 和文、沈泥 | - | - | 透・ナブ | にんい・陶 明赤成 | 砂 | A | | |
| 608 | 89 | 11号位座敷 透縁 | 襦土中 | 深鉢 | 皿6 | 刷部片 | 和文、沈泥 | R・L横 | - | 透・ナブ | にんい・陶 明赤成 | 砂 | A | | |
| 609 | 89 | 11号位座敷 透縁 | 襦土中 | 深鉢 | 皿6 | 刷部片 | 和文、沈泥 | R・L横 | - | 透・ナブ | にんい・陶 明赤成 | 砂 | B | | |
| 610 | 89 | 11号位座敷 透縁 | 襦土中 | 深鉢 | 皿6 | 刷部片 | 和文、沈泥 | - | - | 透・ナブ | にんい・陶 明赤成 | 砂 | A | | |
| 611 | 89 | 11号位座敷 透縁 | 襦土中 | 深鉢 | 皿6 | 刷部片 | 和文、沈泥 | - | - | 透・ナブ | にんい・陶 明赤成 | 砂・赤 | A | | |
| 612 | 89 | 11号位座敷 透縁 | 襦土中 | 深鉢 | 皿6 | 刷部片 | 和文、沈泥 | L・R斜 | 赤泥 | 透・ナブ | にんい・陶 明赤成 | 砂 | A | | |
| 615 | 102 | 12号位座敷 透縁 | 襦土中 | 深鉢 | 皿6 | 刷部片 | 和文、沈泥 | R・L横 | - | 透・ナブ | にんい・陶 明赤成 | 砂 | D | 内外面に灰 | |
| 616 | 102 | 12号位座敷 透縁 | 襦土中 | 深鉢 | 皿6 | 刷部片 | 和文、沈泥 | R・L横 | - | 透・ナブ | にんい・陶 明赤成 | 砂・赤 | A | | |
| 617 | 102 | 12号位座敷 透縁 | 襦土中 | 深鉢 | 皿6 | 刷部片 | 和文、沈泥 | L | - | 透・ナブ | にんい・陶 明赤成 | 砂 | A | | |
| 618 | 102 | 14号位座敷 透縁 | 襦土中 | 深鉢 | 皿6 | 刷部片 | 和文、沈泥 | R・L横 | 赤泥 | 透・ナブ | にんい・陶 明赤成 | 砂・赤 | A | | |

| 図 番 号 | 写 真 部 類 | 出土位置 | 出土層位 | 容 器 | 分 類 | 発 見 地 点 | 内 容 | | | 外装色調 内装色調 | 胎 土 | 構成 | 備 考 |
|-------------|------------------|-------|------|--------|--------|------------------|--------------|--------|-----|--------------|-----|-----|----------|
| | | | | | | | 文 字 | 機 文 | 書 法 | | | | |
| 619 | 102 | 14号土坑 | Ⅱ土中 | 漆鉢 | Ⅱ 5 | 口縁部片 | 刺文、沈線 | - | - | ナテ | 茶褐色 | 赤 | B |
| 620 | 103 | 13号土坑 | Ⅱ土中 | 漆鉢 | Ⅱ 2、3 | 胴部片 | 刺文、ナテ | R.L.R線 | 沈線 | ナテ | 茶褐色 | 赤・白 | C |
| 621 | 103 | 21号土坑 | Ⅱ土中 | 漆鉢 | Ⅱ 3 | 胴部片 | 刺文、沈線 | R.L.R線 | 沈線 | ナテ | 茶褐色 | 赤 | C |
| 622 | 103 | 21号土坑 | Ⅱ土中 | 漆鉢 | Ⅱ 2、3 | 胴部片 | 刺文、沈線 | R.L.R線 | 沈線 | ナテ | 茶褐色 | 赤 | A |
| 623 | 103 | 23号土坑 | Ⅱ土中 | 漆鉢 | Ⅱ 5 | 胴部片 | 刺文 | L.R線 | - | ナテ | 茶褐色 | 赤・白 | A 外面に炭化物 |
| 624 | 103 | 23号土坑 | Ⅱ土中 | 漆鉢 | - | 胴部片 | 刺文 | L.R線 | - | ナテ | 茶褐色 | 赤・白 | C |
| 625 | 103 | 28号土坑 | Ⅱ土中 | 漆鉢 | Ⅱ 3 | 胴部片 | 刺文、沈線 | L.R線 | - | ナテ | 茶褐色 | 赤・白 | A |
| 626 | 103 | 28号土坑 | Ⅱ土中 | 漆鉢 | Ⅱ 3 | 胴部片 | 刺文、沈線 | L.R線 | 沈線 | ナテ | 茶褐色 | 赤・白 | A |
| 627 | 103 | 32号土坑 | Ⅱ土中位 | 漆鉢 | Ⅱ 3 | 口縁部片 | 沈線、機文 | L.R線 | 沈線 | ナテ | 茶褐色 | 赤・白 | C |
| 628 | 103 | 32号土坑 | Ⅱ土中位 | 漆鉢 | Ⅱ 2、3 | 胴部片 | 刺文、沈線 | L.R線 | 沈線 | ナテ | 茶褐色 | 赤・白 | B |
| 629 | 103 | 32号土坑 | Ⅱ土中位 | 漆鉢 | Ⅱ 2、3 | 口縁部片 | 刺文、沈線、 機文 | - | - | ナテ | 茶褐色 | 赤 | C 外面に炭化物 |
| 630 | 103 | 33号土坑 | Ⅱ土中 | 漆鉢 | - | 胴部片 | 機文 | R.L.R線 | 沈線 | ナテ | 茶褐色 | 赤 | C |
| 631 | 103 | 33号土坑 | Ⅱ土中 | 漆鉢 | Ⅱ 2 | 胴部片 | 機文 | - | ナテ | ナテ | 茶褐色 | 赤・白 | B |
| 632 | 103 | 34号土坑 | Ⅱ土中位 | 漆鉢 | Ⅱ 2、3 | 胴部片 | 刺文、沈線 | R.L.R線 | 沈線 | ナテ | 茶褐色 | 赤・白 | A |
| 633 | 103 | 34号土坑 | Ⅱ土中 | 漆鉢 | Ⅱ 2、3 | 胴部片 | 刺文、沈線 | R.L.R線 | 沈線 | ナテ | 茶褐色 | 赤・白 | C |
| 634 | 103 | 34号土坑 | Ⅱ土中 | 漆鉢 | Ⅱ 2、3 | 胴部片 | 刺文、沈線 | R.L.R線 | 沈線 | ナテ | 茶褐色 | 赤・白 | C |
| 635 | 103 | 34号土坑 | Ⅱ土中 | 漆鉢 | Ⅱ 6 | 口縁部片 | 刺文 | R.L.R線 | - | ナテ | 茶褐色 | 赤 | A |
| 636 | 103 | 34号土坑 | Ⅱ土中位 | 漆鉢 | Ⅱ 6 | 口縁部片 | 刺文 | L.R線 | - | ナテ | 茶褐色 | 赤・白 | A 外面に炭化物 |
| 637 | 103 | 34号土坑 | Ⅱ土中 | 漆鉢 | Ⅱ 6 | 口縁部片 | 刺文 | L.R線 | - | ナテ | 茶褐色 | 赤・白 | C 外面ににおけ |
| 638 | 103 | 34号土坑 | Ⅱ土中 | 漆鉢 | Ⅱ 6 | 口縁部片 | 刺文 | - | - | ナテ | 茶褐色 | 赤・白 | B 外面に炭化物 |
| 639 | 103 | 36号土坑 | Ⅱ土中 | 漆鉢 | - | 胴部片 | 刺文 | R.L.R線 | - | ナテ | 茶褐色 | 赤 | C |
| 640 | 103 | 37号土坑 | Ⅱ土中位 | 漆鉢 | Ⅱ 2、3 | 胴部片 | 刺文、沈線 | R.L.R線 | 沈線 | ナテ | 茶褐色 | 赤・白 | C |
| 641 | 103 | 37号土坑 | Ⅱ土中 | 漆鉢 | Ⅱ 5 | 胴部片 | 刺文、沈線 | L.R線 | 沈線 | ミザキ | 茶褐色 | 赤・白 | A |
| 642 | 103 | 35号土坑 | Ⅱ土中 | 漆鉢 | Ⅱ 2、3 | 胴部片 | 刺文、沈線 | L.R線 | 沈線 | 茶褐色 | 茶褐色 | 赤 | B |
| 643 | 103 | 36号土坑 | Ⅱ土中 | 漆鉢 | Ⅱ 3 | 口縁部片 | 刺文、沈線、 機文 | R.L.R線 | 沈線 | ナテ | 茶褐色 | 赤・白 | C |
| 644 | 104 | 25号土坑 | Ⅱ土中 | 漆鉢 | Ⅱ 2、3 | 胴部片 | 刺文、沈線 | L.R線 | 沈線 | ナテ | 茶褐色 | 赤・白 | B 外面に炭化物 |
| 645 | 104 | 26号土坑 | Ⅱ土中 | 漆鉢 | Ⅱ 3 | 口縁部片 | 刺文、沈線 | R.L.R線 | 沈線 | ナテ | 茶褐色 | 赤・白 | A |
| 646 | 104 | 26号土坑 | Ⅱ土中 | 漆鉢 | Ⅱ 5 | 口縁部片 | 刺文 | R.L.R線 | - | ナテ | 茶褐色 | 赤 | C |
| 647 | 104 | 26号土坑 | Ⅱ土中 | 漆鉢 | Ⅱ 2、3 | 胴部片 | 刺文、沈線 | R.L.R線 | 沈線 | ナテ | 茶褐色 | 赤 | A |
| 648 | 104 | 26号土坑 | Ⅱ土中 | 漆鉢 | Ⅱ 1 | 胴部片 | 刺文、沈線 | L.R線 | 沈線 | ナテ | 茶褐色 | 赤・白 | A |
| 649 | 104 | 26号土坑 | Ⅱ土中 | 漆鉢 | - | 胴部片 | 刺文 | L.R線 | - | ナテ | 茶褐色 | 赤 | A |
| 650 | 104 | 27号土坑 | Ⅱ土中 | 漆鉢 | Ⅱ 3 | 口縁部片 | 刺文、沈線 | R.L.R線 | - | ナテ | 茶褐色 | 赤 | C 外面ににおけ |
| 651 | 104 | 42号土坑 | Ⅱ土中 | 漆鉢 | - | 胴部片 | 刺文 | L.R線 | - | ナテ | 茶褐色 | 赤 | A |

| 国語 番号 | 与書 種別 | 出上位置 | 出上種別 | 基礎 | 今紙 | 写本 種別 | 外 部 | | | 内 書 | 外書抄録 内書抄録 | 貼 上 | 備考 | |
|----------|----------|-----------|------|----|-------|----------|------------------|---------------|-----|----------------|----------------------|-------------|----------------------|---|
| | | | | | | | 文 種 | 書 文 | 手 法 | | | | | |
| 602 | 104 | 1号扉左 | 左内 | 活字 | Ⅱ 1 | 刷部片 | 写本、補文、 正書 | L 支版 | 納書 | ナア | 墨箱 にない書箱 | 砂・石 | A 外面におこげ | |
| 603 | 104 | 1号扉右 | 右内 | 活字 | Ⅱ 3 | 刷部片 | 漢文、沈殿 | R L 支版 | 納書 | ミガキ | 墨箱 にない書箱 | 砂・石 | C | |
| 604 | 104 | 2号扉左 | 左内 | 活字 | - | 刷部片 | 漢文 | R L 支版 | - | ナア | にない書箱 裏箱 | 砂・石 | A | |
| 605 | 104 | 1号扉右 | 右内 | 活字 | - | 刷部片 | 漢文 | R L 支版 | - | ナア | にない書箱 | 砂・石 | B | |
| 606 | 104 | 6号扉左 | 左中 | 活字 | Ⅱ 6 | 口縁部片 | 漢文 | L 支版 | - | ナア | 同永御印本箱 | 砂・石 | C | |
| 607 | 104 | 8号扉左 | 左中 | 活字 | Ⅱ 2 | 口縁部片 | 漢文、沈殿 | R L 支版 | 納書 | ミガキ | 墨箱裏面 | 砂・石 | A | |
| 608 | 104 | 3号扉右 | 右中 | 活字 | - | 刷部片 | 漢文 | L 支版 | - | ナア | 墨箱裏面 | 砂・石 | B | |
| 609 | 104 | 10号扉左 | 左中 | 活字 | - | 刷部片 | 漢文 | R L 支版 | - | ナア | にない書箱 裏箱 | 砂・石 | A | |
| 660 | 104 | 丸合部① | Ⅱ部 | 活字 | Ⅱ 4 | 端空部 | 漢文、沈殿 | R L 支版 | - | 口ナア | にない書箱 前永箱 | 砂・石 | C 内書口に穿孔箇中で めめている | |
| 661 | 104 | 丸合部② | Ⅱ部 | 活字 | - | 端空のみ | 漢文 | L 支版 | - | 口ナア | 同内書 にない書箱 | 砂 | A 成造時代後 | |
| 662 | 104 | 丸合部③ | Ⅱ部 | 活字 | - | 端空のみ | 漢文 | L 支版 | - | - | にない書箱 裏箱 | 砂 | A 成造時代後 | |
| 663 | 104 | 丸合部④ | Ⅱ部 | 活字 | Ⅱ 3 | 口縁部片 | 写本、補文、 沈殿 | L 支版 | 納書 | ナア | 墨 にない書箱 | 砂・石 | A | |
| 664 | 104 | 丸合部⑤ | Ⅱ部 | 活字 | Ⅱ 5 | 口縁部片 | 沈殿、補文 | R L 支版 | 納書 | ナア | 墨 前永箱 | 砂・石 | C 外面に炭化物 | |
| 665 | 104 | 丸合部⑥ | Ⅱ部 | 活字 | Ⅱ 5 | 口縁部片 | 沈殿 | - | - | ナア | にない書箱 裏箱 | 砂・石 | C | |
| 666 | 104 | 丸合部⑦ | Ⅱ部 | 活字 | Ⅱ 4 | 口縁部片 | 前永、補文、 沈殿 | R L 支版 | 納書 | ナア | にない書箱 にない書箱 | 砂・石 | A | |
| 667 | 104 | 丸合部⑧ | Ⅱ部 | 活字 | Ⅱ 5 | 口縁部片 | 沈殿、漢文 | R L 支版 | 納書 | ナア | にない書箱 裏箱 | 砂・石 | C | |
| 668 | 104 | 丸合部⑨ | Ⅱ部 | 活字 | - | 口縁部片 | - | - | - | ナア | にない書箱 にない書箱 | 砂 | C | |
| 669 | 105 | 丸合部⑩ | Ⅱ部 | 活字 | - | 口縁部片 | 写本、補文、 沈殿 | R L 支版 | 納書 | ミガキ | にない書箱 裏箱 | 砂・石 | A | |
| 670 | 105 | 丸合部⑪ | Ⅱ部 | 活字 | - | 口縁部片 | 写本、補文、 沈殿 | R L 支版 | 納書 | ナア | にない書箱 にない書箱 | 砂 | B | |
| 671 | 105 | 丸合部⑫ | Ⅱ部 | 活字 | - | 口縁部片 | 写本、補文、 沈殿 | R L 支版 | 納書 | ナア | にない書箱 裏箱 | 砂・石 | C 内面におこげ | |
| 672 | 105 | 丸合部⑬ | Ⅱ部 | 活字 | Ⅱ 6 | 口縁部片 | 漢文 | L 支版 | - | ナア | 墨 前永箱 | 砂・石 | C | |
| 674 | 86 | 37号位紙 | 扉上下段 | 活字 | V 2 | 略記部 | 約文 | R L 支版 | - | 口一割上 少ズリーナア | にない書箱 にない書箱 | 砂・石 | C | |
| 675 | 103 | 4 C 5 u | 扉裏上面 | 活字 | Ⅱ 1 | 刷部片 | 写本約文(墨 金丸)、補文 | R 支版、 L 支版 | - | ナア | にない書箱 裏箱 | 砂・石・繊維 | A | |
| 676 | 103 | 4 C 4 u | 扉裏上面 | 活字 | Ⅱ 1 | 刷部片 | 写本、補文、 漢文 | R 支版、 L 支版 | - | ナア | 欠損により にない書箱 不明 | 砂・石 | B | |
| 677 | 103 | 3 C 2 v | 扉裏上面 | 活字 | Ⅱ 2 | 刷部片 | 写本、補文、 漢文 | R 支版、 L 支版 | - | ナア | にない書箱 にない書箱 | 砂・石・繊維 | B | |
| 678 | 103 | 4 C 1 v | 扉裏上面 | 活字 | Ⅱ 4 d | 刷部片 | 漢文 | R 支版 | - | ナア | 墨 裏箱 | 砂・石・繊維 | C | |
| 679 | 103 | 3 C 2 v u | 扉裏上面 | 活字 | Ⅱ 4 d | 刷部片 | 漢文 | R 支版 | - | ナア | 墨箱 にない書箱 | 砂・石・繊維 | B | |
| 680 | 103 | 3 B 1 v | 扉裏上面 | 活字 | Ⅱ 5 | 刷部片 | 漢文 | 繊維? | - | ナア | にない書箱 裏箱 | 砂・石 | A | |
| 681 | 103 | 3 C 3 a | 扉裏上面 | 活字 | Ⅱ 3 | 刷部片 | 写本約文 | L 支・R L | 糸結葉 | ナア | にない書箱 にない書箱 | 砂・石・繊維 | B | |
| 682 | 103 | 4 C 1 l | 扉裏上面 | 活字 | Ⅱ 4 b | 刷部片 | 約文 | L 支版 | - | ナア | 墨 裏箱 | 砂・繊維 | C | |
| 683 | 103 | 4 C 2 u | 扉裏上面 | 活字 | Ⅱ 4 b | 刷部片 | 約文 | L 支版 | - | ナア | 式書 裏箱 | 砂・石・繊維 | C | |
| 684 | 103 | 4 C 1 v | 扉裏上面 | 活字 | Ⅱ 3 | 刷部片 | 写本約文 | L 支・R L | 糸結葉 | ナア | 欠損により 不明 | にない書箱 不明 | 砂・石・繊維 | C |
| 685 | 103 | 3 C 2 v u | 扉裏上面 | 活字 | Ⅱ 3 | 口縁部片 | 写本約文 | L 支・R L | 糸結葉 | ナア? | にない書箱 裏箱 | 砂・石 | C 外面に炭化物 | |

| 国番号 区分 | 号 区分 | 品上区分 | 出土状況 | 器種 | 分類 | 発 見 地 | 写 真 | | | 内 容 | 外装・色 澤・文様 | 出 土 地 名 | 出土 状況 | 備考 | |
|-----------|---------|----------|------|----|-------|-------------|-------------------|---------|--------|--------|--|--|----------|----------|--------|
| | | | | | | | 文 種 | 地 文 | 字 表 | | | | | | |
| 685 | 105 | 4 C 1 e | 王塚上層 | 漆鉢 | L 4 a | 朝野片 | 和文 | L 縦 | - | ナテ | 紀 に い い 書 | 跡・赤・黒線 | B | | |
| 687 | 105 | 4 C 11 x | 王塚上層 | 漆鉢 | B 3 | 朝野片 | 引換和文 | L R・R L | 赤黒点 | ナテ | 紀 に い い 書 | 跡・赤・黒線 | B | | |
| 688 | 105 | 3 C 25 u | 王塚上層 | 漆鉢 | B 3 | 朝野片 | 引換和文 | L R・R L | 赤黒点 | ナテ | 明 成 箱 に い い 書 | 跡・赤・黒線 | B | | |
| 689 | 105 | 4 C 7 w | 王塚上層 | 漆鉢 | B 3 | 朝野片 | 引換和文 | L・R | 赤黒点 | ナテ | 紀 に い い 書 | 跡・赤 | A | | |
| 690 | 105 | 3 C 25 u | 王塚上層 | 漆鉢 | B 3 | 朝野片 | 引換和文 | L R・R L | 赤黒点 | ? | 墨 に い い 書 | 跡・赤・黒線 | C | | |
| 691 | 105 | 2 B 21 c | 王塚上層 | 漆鉢 | T 4 c | 1段部片 | 和文 | L 縦 | - | ナテ | 紀 に い い 書 紀 に い い 書 | 跡 | A | | |
| 692 | 105 | 3 C 24 m | 王塚上層 | 漆鉢 | T 4 b | 朝野片 | 和文 | L 縦 | - | ナテ | 明 成 箱 明 成 | 跡・赤・黒線 | C | | |
| 693 | 105 | 4 C 11 x | 王塚上層 | 漆鉢 | T 4 b | 朝野片 | 和文 | L 又折 | - | ナテ | 紀 に い い 書 紀 に い い 書 | 跡・赤・黒線 | B | | |
| 694 | 105 | 3 C 25 n | 王塚上層 | 漆鉢 | B 3 | 朝野片 | 和文? | 尾紐? | - | ナテ | 明 成 箱 紀 に い い 書 | 跡・赤・黒線 | A | | |
| 695 | 106 | 2 B 24 c | 王塚上層 | 漆鉢 | T 4 a | 朝野片 | 和文 | L 折 | - | ナテ | 出 土 地 名 不 詳 | 跡・赤 | A | | |
| 696 | 106 | 3 B 11 u | 王塚上層 | 漆鉢 | T 4 e | 朝野片 | 和文 | L 折 | - | ナテ | 紀 に い い 書 紀 に い い 書 | 跡・赤 | A | | |
| 697 | 106 | 4 C 11 x | 王塚上層 | 漆鉢 | T 4 b | 朝野片 | 和文 | L 縦、折 | - | ナテ | 紀 に い い 書 紀 に い い 書 | 跡・赤・黒線 | B | | |
| 698 | 106 | 3 C 25 u | 王塚上層 | 漆鉢 | T 4 b | 朝野片 | 和文 | R L 横 | - | ナテ | 墨 に い い 書 紀 に い い 書 | 跡・赤・黒線 | C | 外面に炭化跡 | |
| 699 | 106 | 4 C 3 u | 王塚上層 | 漆鉢 | T 4 b | 朝野片 | 和文 | R L 折 | - | ナテ | 紀 に い い 書 外 装 不 詳 | 跡・赤・黒線 | B | | |
| 700 | 106 | 3 C 25 u | 王塚上層 | 漆鉢 | T 4 b | 朝野片 | 和文 | L R 折 | - | ナテ | 墨 成 書 | 跡・赤・黒線 | C | | |
| 701 | 106 | 3 C 23 j | 王塚上層 | 漆鉢 | T 4 a | 朝野片 | 和文 | L 横 | - | ナテ | 紀 に い い 書 紀 に い い 書 | 跡 | C | | |
| 702 | 106 | 2 B 24 c | 王塚上層 | 漆鉢 | T 4 a | 朝野片 | 和文 | L 折 | - | ナテ | 朝 野 書 紀 に い い 書 | 跡・赤 | A | | |
| 703 | 106 | 3 C 24 v | 王塚上層 | 漆鉢 | T 4 c | 朝野片 | 和文 | L R L 折 | - | ナテ | 紀 に い い 書 | 跡・赤・黒線 | B | | |
| 704 | 106 | 3 C 23 p | 王塚上層 | 漆鉢 | B 1 | 1段部片 | 墨書、和文、 沈線 | R L 又折 | 赤消 | ナテ | 紀 に い い 書 | 跡 | A | | |
| 705 | 106 | 3 C 20 i | 王塚上層 | 漆鉢 | B 1 | 1段部片 | 墨書、和文、 沈線 (ナテ) | L R L 折 | 赤消 | ナテ | 明 成 箱 明 成 | 跡 | C | 外面に炭化跡 | |
| 706 | 106 | 3 C 23 a | 王塚上層 | 漆鉢 | B 1 | 1段部片 | 墨書、和文、 沈線 | R L 又折 | 赤消 | ナテ | 紀 に い い 書 外 装 不 詳 | 跡 | B | | |
| 707 | 106 | 3 B 3 j | 王塚上層 | 漆鉢 | B 1 | 1段部片 | 和文、墨書、 沈線、沈線 | R L 又折 | 赤消 | ナテ | 明 成 箱 明 成 | 跡 | C | | |
| 708 | 106 | 3 B 4 k | 王塚上層 | 漆鉢 | B 2 | 1段部片 | 墨書、沈線、 刺突 | - | - | ミヤギ | 外 装 不 詳 | 跡・赤 | B | 外面に炭化跡 | |
| 709 | 106 | 2 B 25 k | 王塚上層 | 漆鉢 | B 2 | 口縁部片 | 墨書、沈線、 刺突 | - | - | ナテ | 紀 に い い 書 紀 に い い 書 | 跡 | A | | |
| 710 | 106 | 3 B 11 u | 王塚上層 | 漆鉢 | - | 口縁部片 | 刺突 | - | - | ナテ | 外 装 不 詳 | 跡 | A | | |
| 711 | 106 | 3 C 24 m | 王塚上層 | 漆鉢 | B 1 | 口縁部片 | 墨書、和文、 沈線 | R L 又折 | 赤消 | ナテ | 紀 に い い 書 紀 に い い 書 | 跡 | A | | |
| 712 | 106 | 2 A 15 s | 王塚上層 | 漆鉢 | B 2 | 朝野片 | 和文、 沈線 | R L 又折 | 赤消 | ナテ | 紀 に い い 書 | 跡 | B | | |
| 713 | 106 | 3 C 25 q | 王塚上層 | 漆鉢 | B 1 | 朝野片 | 和文、沈線 | R L 又折 | 赤消 | ナテ | 紀 に い い 書 紀 に い い 書 | 跡 | C | | |
| 714 | 106 | 3 C 21 n | 王塚上層 | 漆鉢 | B 2 | 1段部片 | 墨書、和文、 沈線 | R L 又折 | 赤消 | ナテ | 外 装 不 詳 | 跡 | C | | |
| 715 | 107 | 2 D 23 b | 王塚上層 | 漆鉢 | B 3 | 11-1 1/2 | 和文、沈線 | R L 又折 | 赤消 | ナテ | 11-1 2 ナテ | 紀 に い い 書 紀 に い い 書 | 跡 | B | 外箱に炭化跡 |
| 716 | 107 | 3 B 11 u | 王塚上層 | 漆鉢 | B 3 | 11-1 1/5 | 和文、沈線 | L R 縦 | 赤消 | ナテ | 11-1 ナテ | 紀 に い い 書 紀 に い い 書 | 跡 | C | |
| 717 | 107 | 3 C 21 p | 王塚上層 | 漆鉢 | B 3 | 1段部片 | 和文、沈線 | R L 又折 | 赤消 | ミヤギ | 紀 に い い 書 外 装 不 詳 | 跡・赤 | A | 718ナテ・刺突 | |
| 718 | 107 | 3 C 21 q | 王塚上層 | 漆鉢 | B 3 | 1段部片 | 和文、沈線 | R L 又折 | 赤消 | ミヤギ | 紀 に い い 書 外 装 不 詳 | 跡・赤 | A | 717ナテ・刺突 | |

| 国名 番号 | 寄託 区分 | 品名 | 種別 | 分類 | 収 容 部 位 | 書 | | | 内 容 | 外国産 内国産 | 部 号 | 注 文 | 備 考 | |
|----------|----------|----------|------|----|------------------|--------|--------|--------|--------|------------|-------------|--------|--------|--------------|
| | | | | | | 文 種 | 種 文 | 手 法 | | | | | | |
| 719 | 107 | 3 C 21 a | 直轄上面 | 深鉢 | Ⅱ 3 | 白磁器片 | 縄文、化装 | L Ⅱ 履 | 磨消 | ミガキ | 黒 漆 陶 | 砂・漆 | B | 内面に灰化物 |
| 720 | 107 | 3 B 2 m | 直轄上面 | 深鉢 | Ⅱ 3 | 白磁器片 | 縄文、化装 | L Ⅱ 履 | 磨消 | ナデ | 黒 漆 陶 | 砂 | B | 内面に灰化物 |
| 721 | 107 | 3 B 1 d | 直轄上面 | 深鉢 | Ⅱ 3 | 白磁器片 | 縄文、化装 | L Ⅱ 履 | 光磨 | ナデ | 黒 漆 陶 | 砂・石 | A | |
| 722 | 107 | 3 B 3 k | 直轄上面 | 深鉢 | Ⅱ 2、3 | 白磁器片 | 縄文、化装 | L Ⅱ 履 | 磨消 | ナデ | 黒 漆 陶 | 砂・漆 | B | |
| 723 | 107 | 3 C 18 f | 直轄上面 | 深鉢 | Ⅱ 2、3 | 白磁器片 | 縄文、化装 | L Ⅱ 履 | 磨消 | ナズリ→ナデ | 黒 漆 陶 | 砂 | B | |
| 724 | 107 | 2 A D v | 直轄上面 | 深鉢 | Ⅱ 5 | 白磁器片 | 縄文、化装 | L Ⅱ 履 | 磨消 | ナデ | 黒 漆 陶 | 砂 | A | |
| 725 | 107 | 3 B 1 j | 直轄上面 | 深鉢 | Ⅱ 2、3 | 白磁器片 | 縄文、化装 | L Ⅱ 履 | 磨消 | ナデ | 黒 漆 陶 | 砂・漆 | C | 内面に灰化物 |
| 726 | 107 | 3 C 20 i | 直轄上面 | 深鉢 | Ⅱ 2、3 | 白磁器片 | 縄文、化装 | L Ⅱ 履 | 磨消 | ナデ | 黒 漆 陶 | 砂 | C | |
| 727 | 107 | 3 B 13 c | 直轄上面 | 深鉢 | Ⅱ 2、3 | 白磁器片 | 縄文、化装 | L Ⅱ 履 | 磨消 | ナデ | 黒 漆 陶 | 砂 | A | |
| 728 | 107 | 3 B 11 u | 直轄上面 | 深鉢 | Ⅱ 6 | 白磁器片 | 縄文 | L Ⅱ 履 | 磨消 | ナデ | 黒 漆 陶 | 砂・白 | C | |
| 729 | 107 | 3 C 18 i | 直轄上面 | 深鉢 | Ⅱ 6 | 白磁器片 | 縄文 | L Ⅱ 履 | 磨消 | ナデ | 黒 漆 陶 | 砂 | A | |
| 730 | 107 | 3 C 21 h | 直轄上面 | 深鉢 | Ⅱ 6 | 白磁器片 | 縄文 | L Ⅱ 履 | 磨消 | ナデ | 黒 漆 陶 | 砂 | A | |
| 731 | 107 | 3 C 21 h | 直轄上面 | 深鉢 | Ⅱ 6 | 白磁器片 | 縄文 | L Ⅱ 履 | 磨消 | ナデ | 黒 漆 陶 | 砂 | C | |
| 732 | 107 | 3 C 21 h | 直轄上面 | 深鉢 | Ⅱ 6 | 白磁器片 | 縄文 | L Ⅱ 履 | 磨消 | ナデ | 黒 漆 陶 | 砂 | C | |
| 733 | 107 | 3 C 21 h | 直轄上面 | 深鉢 | - | 白磁器片 | 縄文 | L Ⅱ 履 | 磨消 | ナデ | 黒 漆 陶 | 砂 | A | |
| 734 | 107 | 3 D 16 s | 直轄上面 | 深鉢 | - | 白磁器片 | 縄文 | L Ⅱ 履 | 磨消 | ナデ | 黒 漆 陶 | 砂・漆 | C | |
| 735 | 108 | 3 C 23 n | 直轄上面 | 深鉢 | - | 白磁器片 | 縄文 | L Ⅱ 履 | 磨消 | ナデ | 黒 漆 陶 | 砂・漆 | B | 内面に灰化物 |
| 736 | 108 | 3 C 23 n | 直轄上面 | 深鉢 | - | 白磁器片 | 縄文 | L Ⅱ 履 | 磨消 | ナデ | 黒 漆 陶 | 砂 | A | |
| 737 | 108 | 3 B 1 c | 直轄上面 | 深鉢 | - | 白磁器片 | 縄文 | L Ⅱ 履 | 磨消 | ナデ | 黒 漆 陶 | 砂・漆 | B | 619、620、623H |
| 738 | 108 | 3 C 18 d | 直轄上面 | 深鉢 | - | 白磁器片 | 縄文 | L Ⅱ 履 | 磨消 | ナデ | 黒 漆 陶 | 砂・漆 | B | 618 - 620H |
| 750 | 108 | 3 B 3 f | 直轄上面 | 深鉢 | Ⅳ 1 | 白磁器片 | 縄文、化装 | L Ⅱ 履 | 磨消 | ナデ | 黒 漆 陶 | 砂・漆 | C | |
| 751 | 108 | 3 B 1 e | 直轄上面 | 深鉢 | Ⅳ 1 | 白磁器片 | 縄文、化装 | L Ⅱ 履 | 磨消 | ナデ | 黒 漆 陶 | 砂・漆 | C | |
| 752 | 108 | 3 C 23 p | 直轄上面 | 深鉢 | Ⅳ 1 | 白磁器片 | 縄文、化装 | L Ⅱ 履 | 磨消 | ナデ | 黒 漆 陶 | 砂・漆 | A | |
| 753 | 108 | 3 C 24 m | 直轄上面 | 深鉢 | Ⅳ 1 | 白磁器片 | 縄文、化装 | L Ⅱ 履 | 磨消 | ナデ | 黒 漆 陶 | 砂・漆 | A | |
| 754 | 108 | 3 C 23 p | 直轄上面 | 深鉢 | Ⅳ 1 | 白磁器片 | 縄文、化装 | L Ⅱ 履 | 磨消 | ナデ | 黒 漆 陶 | 砂 | C | |
| 755 | 108 | 3 D 7 o | 直轄上面 | 深鉢 | Ⅳ 1 | 白磁器片 | 縄文、化装 | L Ⅱ 履 | 磨消 | ナデ | 黒 漆 陶 | 砂 | A | |
| 756 | 108 | 3 B 3 i | 直轄上面 | 深鉢 | Ⅳ 1 | 白磁器片 | 縄文、化装 | L Ⅱ 履 | 磨消 | ナデ | 黒 漆 陶 | 砂 | B | |
| 757 | 108 | 4 C 2 r | 直轄上面 | 深鉢 | Ⅳ 1 | 白磁器片 | 縄文、化装 | L Ⅱ 履 | 磨消 | ミガキ | 黒 漆 陶 | 砂・漆 | A | |
| 758 | 108 | 3 C 25 j | 直轄上面 | 深鉢 | Ⅳ 1 | 白磁器片 | 縄文、化装 | L Ⅱ 履 | 磨消 | ミガキ | 黒 漆 陶 | 砂・漆 | B | 内面に灰化物 |
| 759 | 108 | 3 C 29 x | 直轄上面 | 深鉢 | Ⅳ 1 | 白磁器片 | 縄文、化装 | L Ⅱ 履 | 磨消 | ミガキ | 黒 漆 陶 | 砂 | A | |
| 760 | 108 | 3 C 23 j | 直轄上面 | 深鉢 | Ⅳ 1 | 白磁器片 | 縄文、化装 | L Ⅱ 履 | 磨消 | ナデ | 黒 漆 陶 | 砂・漆 | A | |
| 761 | 108 | 3 D 3 f | 直轄上面 | 深鉢 | Ⅳ 1 | 白磁器片 | 縄文、化装 | L Ⅱ 履 | 磨消 | ミガキ | 黒 漆 陶 | 砂 | A | |
| 762 | 108 | 3 B 18 g | 直轄上面 | 深鉢 | Ⅳ 1 | 白磁器片 | 縄文、化装 | L Ⅱ 履 | 磨消 | ナデ | 黒 漆 陶 | 砂 | A | |

| 図録番号 | 号数 | 出土位置 | 出土層位 | 形制・分類 | 発見・年代 | 特 徴 | | | 内 容 | 外面装飾 内面装飾 | 胎 土 | 成 色 | 備 考 |
|------|-----|----------|------|-------|-------|---------------|----------------|-----|-----|--------------|-------|-----|--------|
| | | | | | | 文 様 | 画 文 | 手 法 | | | | | |
| 763 | 108 | 3 C 19 a | 甕蓋上面 | 直線 | IV 4 | 蓮花文 | 縄文、波線 | なし | ナア | にぶい青 黄褐色 | 砂 | C | |
| 764 | 106 | 3 C 20 m | 甕蓋上面 | 直線 | | 口部細所 縄文 | 縄文、波線 R L 波 | なし | ナア | にぶい青 黄褐色 | 砂・石・雲 | A | |
| 765 | 108 | 1号墓 | 甕土上段 | 直線 | V 1 | 口部細所 波線、縄文 | R L 波 | なし | ナア | 暗灰青 黄褐色 | 砂・石 | A | 内外面に凹凸 |
| 766 | 106 | 3 B 2 f | 甕蓋上面 | 直線 | IV 5 | 親子一致 縄文 | T, R 波、斜 | なし | ナア | 滑石質 青褐色 | 砂 | C | |

第11表 土製品観察表

| 図録番号 | 号数 | 品 名 | 出土層位 | 形 態 | 発見状況 | 文 様 | 色相(表・裏) | 胎 土 | 成 色 | 備 考 |
|------|----|-------|------|-------|--------|-------------------|---------------------|-----|-----|---------------------|
| 19 | 68 | 2号灰坑 | 埋土中 | 鉢土塊 | - | - | 黄褐色 | - | - | |
| 52 | 70 | 8号灰坑 | 埋土上段 | 穿穴土製品 | 1/2欠損 | 穿孔(側面)、縄文(L R)、波線 | にぶい青 黄褐色 | 砂 | A | |
| 53 | 70 | 8号灰坑 | 埋土上 | 穿穴土製品 | 先端部欠損 | 穿孔(側面)、縄文(L R)、波線 | 明黄褐色 黄褐色 | 砂 | A | |
| 118 | 73 | 12号灰坑 | 埋土中位 | 土製円板 | 完整 | 無文 | 黄褐色 黄褐色 | 砂 | A | 表面に炭化物 |
| 163 | 76 | 14号灰坑 | 埋土下位 | 土製円板 | 完整 | 縄文(L R) | 藍 黄褐色 | 砂 | C | 表面に炭化物 |
| 164 | 76 | 14号灰坑 | 埋土中位 | 穿穴土製品 | 完整 | 穿孔(正面)、縄文(L R)、波線 | 黄褐色 黄褐色 | 砂・石 | A | 片面に付着物 (アスファルト?) |
| 165 | 76 | 14号灰坑 | 埋土上位 | 穿穴土製品 | 先端部欠損 | 穿孔(側面)、縄文(L R)、波線 | 明黄褐色 黄褐色 | 砂・黄 | A | |
| 213 | 79 | 16号色層 | 埋土中位 | 土製円板 | 完整 | 縄文(R L) | 黄 黄褐色 | 砂 | A | |
| 214 | 79 | 16号色層 | 埋土上位 | 不明 | 先端部欠損? | 無文 | 赤褐色 赤褐色 | 砂・黄 | A | |
| 267 | 83 | 18号色層 | 埋土上 | 穿穴土製品 | 先端部欠損 | 無文、穿孔(正面) | にぶい青 にぶい青 黄褐色 | 砂・石 | C | |
| 268 | 83 | 18号色層 | 埋土中位 | 不明 | 一部欠損 | 無文 | にぶい青 にぶい青 | 白 | A | |
| 264 | 83 | 18号色層 | 埋土上位 | 土製円板 | 表面剥落 | 縄文(R L) | にぶい青 黄褐色 | 砂 | C | |
| 226 | 83 | 19号灰坑 | 埋土中 | 土製円板 | 完整 | 無文 | にぶい青 にぶい青 | 砂 | C | |
| 287 | 84 | 20号灰坑 | 埋土上位 | 土製円板 | 一部欠損 | 波線 | 黄褐色 黄褐色 | 砂 | A | |
| 315 | 85 | 22号灰坑 | 埋土中位 | 土製円板 | 完整 | 縄文(L R) | にぶい青 にぶい青 黄褐色 | 砂・石 | A | |
| 288 | 91 | 28号灰坑 | 埋土上位 | 穿穴土製品 | 先端部欠損 | 縄文(L R) | にぶい青 にぶい青 黄褐色 | 砂 | C | 表面に炭化物 |
| 280 | 91 | 28号灰坑 | 埋土上位 | 土製円板 | 3/4欠損 | 無文 | にぶい青 | 砂 | A | |
| 280 | 91 | 28号灰坑 | 埋土上位 | 土製円板 | 完整 | 波線、縄文(R L)、波線 | 黄褐色 黄褐色 | 砂 | C | |
| 301 | 91 | 28号色層 | 埋土中位 | 土製円板 | 完整 | 縄文(R L R) | 黄 明黄褐色 | 砂 | C | |
| 302 | 91 | 28号色層 | 埋土上位 | 土製円板 | 完整 | 縄文(R L R) | にぶい青 にぶい青 黄褐色 | 砂 | B | |
| 303 | 91 | 28号色層 | 埋土上位 | 土製円板 | 完整 | 縄文(L R) | 黄褐色 にぶい青 | 砂 | A | |
| 488 | 98 | 30号灰坑 | 埋土中位 | 土製円板 | 1/2欠損 | 波線、縄文(R L)、ナア | 黄褐色 黄褐色 | 砂・雲 | A | |
| 489 | 98 | 30号灰坑 | 埋土上位 | 土製円板 | 完整 | 波線 | にぶい青 にぶい青 | 砂・石 | C | |
| 490 | 98 | 30号灰坑 | 埋土上位 | 土製円板 | 完整 | 縄文(R L R) | にぶい青 黄褐色 | 砂・雲 | C | |
| 491 | 98 | 30号灰坑 | 埋土上位 | 土製円板 | 完整 | 縄文(R L) | 黄褐色 黄褐色 | 砂・黄 | B | |
| 492 | 98 | 30号灰坑 | 埋土中位 | 土製円板 | 完整 | 縄文(R L R) | にぶい青 黄褐色 | 砂 | C | |

| 図式番号 | 学級 | 図式 | 書名 | 内容 | 種 | 保存状態 | 文 | 様 | 尺貫(長・高) | 冊 | 士 | 成 | 備 | 等 |
|------|-----|----------|------|------|-------|------------|----|----|---------|---|---|---|---|---------|
| 493 | 98 | 30号保存 | 蓮土上位 | 土製円板 | 完形 | 縄文(LR) | 縄文 | 縄文 | 約10cm | 1 | 古 | C | | |
| 494 | 98 | 30号保存 | 蓮土上位 | 土製円板 | 一部欠損 | 縄文(LR) | 縄文 | 縄文 | 約10cm | 1 | 古 | C | | |
| 495 | 98 | 30号保存 | 蓮土上位 | 土製円板 | 完形 | 縄文(LR) | 縄文 | 縄文 | 約10cm | 1 | 古 | A | | |
| 496 | 98 | 30号保存 | 蓮土上位 | 土製円板 | 完形 | 縄文(LR) | 縄文 | 縄文 | 約10cm | 1 | 古 | C | | |
| 497 | 98 | 30号保存 | 蓮土上位 | 土製円板 | 完形 | 縄文(LR) | 縄文 | 縄文 | 約10cm | 1 | 古 | C | | |
| 498 | 98 | 30号保存 | 蓮土上位 | 土製円板 | 完形 | 縄文(LR) | 縄文 | 縄文 | 約10cm | 1 | 古 | B | | |
| 499 | 98 | 30号保存 | 蓮土上位 | 土製円板 | 完形 | 縄文、縄文(SLR) | 縄文 | 縄文 | 約10cm | 1 | 古 | C | | |
| 500 | 98 | 30号保存 | 蓮土上位 | 土製円板 | 完形 | 縄文(LR) | 縄文 | 縄文 | 約10cm | 1 | 古 | B | | |
| 501 | 98 | 30号保存 | 蓮土上位 | 土製円板 | 完形 | 縄文(LR) | 縄文 | 縄文 | 約10cm | 1 | 古 | B | | |
| 502 | 98 | 30号保存 | 蓮土上位 | 土製円板 | 一部欠損 | 縄文(LR) | 縄文 | 縄文 | 約10cm | 1 | 古 | C | | 表面に炭化物 |
| 503 | 98 | 30号保存 | 蓮土上位 | 土製円板 | 1/2欠損 | 縄文(LR) | 縄文 | 縄文 | 約10cm | 1 | 古 | C | | |
| 504 | 98 | 30号保存 | 蓮土上位 | 土製円板 | 完形 | 縄文(LR) | 縄文 | 縄文 | 約10cm | 1 | 古 | A | | 表面に炭化物 |
| 505 | 98 | 30号保存 | 蓮土上位 | 土製円板 | 完形 | 縄文(LR) | 縄文 | 縄文 | 約10cm | 1 | 古 | A | | |
| 506 | 98 | 30号保存 | 蓮土上位 | 土製円板 | 完形 | 縄文(LR) | 縄文 | 縄文 | 約10cm | 1 | 古 | C | | |
| 507 | 99 | 31号保存 | 蓮土上位 | 土製円板 | 1/2欠損 | 縄文(LR) | 縄文 | 縄文 | 約10cm | 1 | 古 | C | | |
| 508 | 99 | 31号保存 | 蓮土上位 | 土製円板 | 1/2欠損 | 縄文(LR) | 縄文 | 縄文 | 約10cm | 1 | 古 | B | | 表面に炭化物? |
| 509 | 99 | 31号保存 | 蓮土上位 | 土製円板 | 完形 | 縄文(LR) | 縄文 | 縄文 | 約10cm | 1 | 古 | B | | |
| 510 | 99 | 31号保存 | 蓮土上位 | 土製円板 | 完形 | 縄文(LR) | 縄文 | 縄文 | 約10cm | 1 | 古 | C | | |
| 540 | 100 | 32号保存 | 蓮土上位 | 土製円板 | 完形 | 縄文(LR) | 縄文 | 縄文 | 約10cm | 1 | 古 | C | | |
| 541 | 100 | 32号保存 | 蓮土上位 | 土製円板 | 完形 | 縄文 | 縄文 | 縄文 | 約10cm | 1 | 古 | A | | |
| 542 | 100 | 32号保存 | 蓮土上位 | 土製円板 | 完形 | 縄文、縄文(SLR) | 縄文 | 縄文 | 約10cm | 1 | 古 | C | | |
| 550 | 100 | 34号保存 | 蓮土上位 | 粘土塊 | - | - | - | - | 約10cm | 1 | 古 | - | | 片断あり |
| 551 | 100 | 34号保存 | 蓮土上位 | 土製円板 | 1/2欠損 | 縄文(LR) | 縄文 | 縄文 | 約10cm | 1 | 古 | A | | |
| 552 | 100 | 34号保存 | 蓮土上位 | 土製円板 | 完形 | 縄文、縄文(LR) | 縄文 | 縄文 | 約10cm | 1 | 古 | A | | |
| 553 | 100 | 35号保存 | 蓮土上位 | 土製円板 | 1/2欠損 | 縄文(LR) | 縄文 | 縄文 | 約10cm | 1 | 古 | C | | |
| 613 | 89 | 11号保存 | 蓮土上位 | 土製円板 | 完形 | 縄文(LR) | 縄文 | 縄文 | 約10cm | 1 | 古 | C | | |
| 674 | 105 | 36号保存 | 土製 | 粘土塊 | - | - | - | - | 約10cm | 1 | 古 | - | | |
| 740 | 108 | 3 C 23 m | 土製 | 土製円板 | 完形 | 縄文、縄文(SLR) | 縄文 | 縄文 | 約10cm | 1 | 古 | C | | |
| 741 | 108 | 3 B 2 m | 土製 | 土製円板 | 1/3欠損 | 縄文(LR) | 縄文 | 縄文 | 約10cm | 1 | 古 | A | | |
| 742 | 108 | 3 C 25 1 | 土製 | 土製円板 | 完形 | 縄文、縄文、縄文 | 縄文 | 縄文 | 約10cm | 1 | 古 | A | | |
| 743 | 108 | 3 C 23 m | 土製 | 土製円板 | 完形 | 縄文、縄文(SLR) | 縄文 | 縄文 | 約10cm | 1 | 古 | B | | |
| 751 | 108 | 3 B 7 0 | 土製 | 土製円板 | 完形 | 縄文(LR) | 縄文 | 縄文 | 約10cm | 1 | 古 | B | | |
| 765 | 108 | 3 C 23 m | 土製 | 土製円板 | 完形 | 縄文、縄文(SLR) | 縄文 | 縄文 | 約10cm | 1 | 古 | A | | |

| 図録番号 | 写真図版 | 遺構名 | 出土層位 | 器種 | 残存状態 | 文様 | 色調(表・裏) | 胎土 | 底足 | 備考 |
|------|------|---------|------|------|------|------------|------------|-----|--------|----|
| 746 | 108 | 3 C 23m | E層 | 土師瓦板 | 完整 | 梵文 (R.L.R) | に濃い黄褐色 | 砂・石 | A | |
| 747 | 108 | 3 C 20 | E層 | 土師瓦板 | 完整 | 梵文 (R.L.R) | 明黄褐色に濃い黄褐色 | 砂 | A | |
| 748 | 108 | 3 C 24p | E層 | 土師瓦板 | 一部欠損 | 梵文 (L.R.L) | に濃い黄褐色 | 砂 | A | |
| 749 | 108 | 表録 | | 土師瓦板 | 完整 | 梵文 | に黄褐色に濃い黄褐色 | 砂 | A | |
| 750 | 108 | 3 C 25 | E層 | 粘土板 | - | - | 黄褐色 | C | 二片組みあり | |

第12表 石器観察表

| 図録番号 | 写真図版 | 器種 | 出土層位 | 出土層位 | 石質 | 産地 | 分類 | 残存状態 | 長さ(mm) | 幅(mm) | 厚さ(mm) | 重量(g) | 備考 |
|------|------|--------|-------|---------------|-----|----------------|-----|--------|--------|--------|--------|--------|---------|
| 13 | 109 | 岩製石片 | 1号住居 | 崖土下位 | 結核岩 | 北上山地 (高野川沿) | - | 一部欠損 | 131.25 | 37.06 | 24.98 | 369.59 | |
| 14 | 109 | 礫石 | 1号住居 | 崖土下位 | 砂岩 | 奥羽山脈 | - | 1/2以上欠 | 92.13 | 90.38 | 29.27 | 297.34 | 石胆の被膜あり |
| 27 | 109 | フリイク | 3号住居 | 崖面露土 | 頁岩 | 奥羽山脈 | 3c類 | - | 35.0 | 43.70 | 10.35 | 11.82 | |
| 58 | 109 | フリイク | 3号住居 | 崖面露土 | 頁岩 | 奥羽山脈 | 2a類 | - | 36.92 | 44.98 | 9.56 | 9.22 | |
| 59 | 109 | 礫石 | 3号住居 | 崖面露土 | 凝灰岩 | 北上山地 | - | 欠損 | 116.33 | 73.78 | 49.87 | 708.35 | |
| 33 | 109 | スクレイパー | 4号住居 | 崖面露土 | 頁岩 | 奥羽山脈 | 1a類 | 欠損 | 36.32 | 26.70 | 11.31 | 6.7 | |
| 54 | 109 | スクレイパー | 8号住居 | 崖土下位 | 頁岩 | 奥羽山脈 | 2c類 | 欠損 | 77.32 | 23.38 | 9.65 | 15.64 | |
| 55 | 109 | スクレイパー | 8号住居 | 崖土下位 | 頁岩 | 奥羽山脈 | 1c類 | 欠損 | 54.33 | 37.69 | 10.88 | 21.76 | |
| 56 | 109 | スクレイパー | 8号住居 | 崖土中位 | 頁岩 | 奥羽山脈 | 1d類 | 完整 | 33.65 | 22.96 | 8.18 | 3.91 | 百部未成山か |
| 61 | 109 | スクレイパー | 9号住居 | 崖土中位 | 頁岩 | 奥羽山脈 | 2d類 | 一部欠損 | 42.27 | 24.21 | 11.20 | 14.58 | |
| 80 | 110 | 石鏝 | 10号住居 | 崖土上位 | 頁岩 | 奥羽山脈 | | 先端欠 | 25.18 | 14.74 | 3.64 | 0.76 | |
| 81 | 110 | 石鏝 | 10号住居 | 伊内 | 頁岩 | 奥羽山脈 | | 先端欠 | 21.23 | 14.73 | 5.28 | 1.09 | |
| 82 | 110 | スクレイパー | 10号住居 | 崖土中 | 頁岩 | 奥羽山脈 | 1a類 | 完整 | 64.09 | 64.09 | 64.09 | 20.48 | |
| 94 | 110 | 石鏝 | 11号住居 | 崖面露土 | 頁岩 | 奥羽山脈 | | 完整 | 26.81 | 25.70 | 3.75 | 1.22 | |
| 95 | 110 | 石鏝 | 11号住居 | 崖土上位 | 頁岩 | 奥羽山脈 | | 先端欠 | 23.78 | 16.25 | 3.31 | 1.01 | |
| 96 | 110 | 石鏝 | 11号住居 | 崖面上 (露土集中) | 頁岩 | 奥羽山脈 | | 欠損 | 29.50 | 10.31 | 6.73 | 1.68 | |
| 97 | 110 | スクレイパー | 11号住居 | 崖土下位 | 頁岩 | 奥羽山脈 | 1c類 | 欠損 | 43.81 | 33.96 | 12.87 | 11.61 | 百部未成山か |
| 98 | 110 | フリイク | 11号住居 | 崖土下位 | 頁岩 | 奥羽山脈 | | | 41.30 | 29.35 | 12.32 | 13.91 | |
| 99 | 110 | フリイク | 11号住居 | 崖土下位 | 頁岩 | 奥羽山脈 | 2a類 | | 42.58 | 36.76 | 10.21 | 8.3 | |
| 100 | 110 | フリイク | 11号住居 | 崖面上 (露土集中) | 頁岩 | 奥羽山脈 | 1a類 | | 41.20 | 75.34 | 10.83 | 10.09 | |
| 101 | 110 | 石片 | 11号住居 | 崖土下位 | 砂岩 | 奥羽山脈 | | 2/3欠損 | 153.67 | 104.39 | 66.36 | 698.97 | |
| 102 | 110 | 燧石製石 | 11号住居 | 崖土下位 | 燧石 | 奥羽山脈 | | 完整 | 97.78 | 51.87 | 31.01 | 130.32 | |
| 119 | 111 | 石鏝 | 12号住居 | 崖土下位 | 頁岩 | 奥羽山脈 | | 欠損 | 19.23 | 12.98 | 3.03 | 0.43 | |
| 120 | 111 | 石鏝 | 12号住居 | 崖土下位 | 頁岩 | 奥羽山脈 | | 先端欠 | 21.97 | 14.23 | 3.13 | 0.57 | |
| 121 | 111 | 石鏝 | 12号住居 | 崖土中 | 頁岩 | 奥羽山脈 | | 先端欠 | 19.23 | 12.87 | 3.06 | 0.88 | |

| 完成 番号 | 分類 区分 | 品名 | 出土位置 | 出土層位 | 材質 | 産地 | 分類 | 形状 | 長さ(mm) | 幅(mm) | 厚さ(mm) | 重量(g) | 備考 |
|----------|----------|--------|----------|-------|-------|---------------|-----|--------|---------------------|-------|--------|---------|----------|
| 122 | 111 | 石鏃 | 12号住居 | 塚土下位 | 頁岩 | 美羽山脈 | 2類 | 基部欠 | 42.15 | 28.99 | 12.13 | 10.25 | |
| 123 | 111 | スクレイパー | 12号住居 | 塚土下位 | 頁岩 | 美羽山脈 | 1c類 | 尖形 | 54.92 | 28.33 | 8.27 | 17.25 | |
| 124 | 111 | Rフレイク | 12号住居 | 塚土下位 | 頁岩 | 美羽山脈 | - | - | 48.46 | 21.16 | 11.79 | 10.34 | |
| 125 | 111 | スクレイパー | 12号住居 | 塚土下位 | 頁岩 | 美羽山脈 | 1a類 | 尖形 | 34.23 | 28.91 | 5.97 | 4.38 | |
| 126 | 111 | 磨石 | 12号住居 | 塚土中 | 花崗岩 | 北上山地 | - | 1/2以上欠 | 40.35 ^a | 90.61 | 66.09 | 275.36 | |
| 127 | 111 | 石鏃 | 12号住居 | 塚土中 | 安山岩 | 美羽山脈 | - | 2/3欠損 | 123.42 ^b | 47.61 | 31.63 | 179.69 | |
| 132 | 111 | Rフレイク | 13号住居 | 柱穴内 | 頁岩 | 美羽山脈 | - | - | 42.50 | 34.26 | 10.19 | 9.07 | |
| 166 | 111 | 石鏃 | 14号住居 | 塚土下位 | 頁岩 | 美羽山脈 | - | 基部欠 | 24.38 | 18.02 | 5.16 | 1.29 | |
| 167 | 111 | スクレイパー | 14号住居 | 塚土下位 | 頁岩 | 美羽山脈 | 2d類 | 尖形 | 24.73 | 23.34 | 10.51 | 5.7 | |
| 168 | 111 | スクレイパー | 14号住居 | 塚土下位 | 頁岩 | 美羽山脈 | 1d類 | 尖形 | 23.89 | 24.07 | 6.47 | 2.69 | 石鏃+砥石小 |
| 169 | 112 | スクレイパー | 14号住居 | 塚土中 | 頁岩 | 美羽山脈 | 1c類 | 尖形 | 78.89 | 33.40 | 10.28 | 23.18 | |
| 170 | 112 | 石鏃 | 14号住居 | 塚土中 | 頁岩 | 美羽山脈 | 2類 | 尖形 | 59.04 | 44.08 | 11.72 | 25.54 | |
| 171 | 112 | スクレイパー | 14号住居 | 塚土下位 | 頁岩 | 美羽山脈 | 1c類 | 尖形 | 62.76 | 45.95 | 13.83 | 36.96 | |
| 172 | 112 | フレイク | 14号住居 | 塚土下位 | 頁岩 | 美羽山脈 | 2c類 | - | 31.09 | 30.38 | 8.27 | 3.67 | |
| 173 | 112 | 磨石 | 14号住居 | 塚土中位 | 細粒閃綠岩 | 北上山地 | - | 尖形 | 122.59 | 93.32 | 72.29 | 1345.78 | |
| 213 | 112 | 石鏃 | 16号住居 | 塚土下位 | 頁岩 | 美羽山脈 | 1類 | 尖形 | 60.07 | 12.64 | 9.37 | 5.43 | |
| 216 | 112 | 石鏃 | 16号住居 | 塚土下位 | 頁岩 | 美羽山脈 | 2類 | 尖形 | 62.92 | 31.40 | 6.18 | 12.92 | アスファルト付物 |
| 217 | 112 | Rフレイク | 16号住居 | 塚土上位 | 少色頁岩 | 美羽山脈 | - | - | 32.51 | 21.06 | 13.23 | 8.18 | |
| 218 | 112 | Rフレイク | 16号住居 | 塚土中位 | 頁岩 | 美羽山脈 | - | - | 33.96 | 20.27 | 15.07 | 4.72 | |
| 219 | 112 | 磨石 | 16号住居 | 塚土下位 | 砂岩 | 北上山地 早池峠付近 | - | 尖形 | 33.29 | 14.33 | 6.93 | 6.1 | |
| 225 | 112 | 石鏃 | 17号住居 | 塚土下位 | 頁岩 | 美羽山脈 | - | 基部欠 | 23.44 | 11.82 | 2.82 | 0.46 | |
| 226 | 112 | フレイク | 17号住居 | 塚土下位 | 頁岩 | 美羽山脈 | 3c類 | - | 36.26 | 25.89 | 7.09 | 1.68 | |
| 265 | 112 | 石鏃 | 28号住居 | 塚土上位 | 頁岩 | 美羽山脈 | 2類 | 尖形 | 79.12 | 28.13 | 13.43 | 28.46 | |
| 266 | 112 | フレイク | 28号住居 | 塚土上 | 頁岩 | 美羽山脈 | 2c類 | - | 34.50 | 47.29 | 11.66 | 10.37 | |
| 267 | 112 | 磨石 | 28号住居 | 塚土上端内 | 花崗岩 | 北上山地 | - | 尖形 | 112.79 | 89.76 | 59.80 | 875.54 | |
| 268 | 112 | 磨石 | 28号住居 | 塚土中位 | 細粒閃綠岩 | 北上山地 | - | 尖形 | 97.27 | 72.14 | 37.15 | 421.38 | |
| 269 | 112 | 柱石製法 | 28号住居 | 室内 | 砂岩 | 美羽山脈 | - | 尖形 | 65.89 | 41.53 | 41.52 | 14.95 | |
| 304 | 113 | スクレイパー | 21号住居 | 塚土下位 | 頁岩 | 美羽山脈 | 1a類 | 尖形 | 41.37 | 35.28 | 12.67 | 11.07 | |
| 305 | 113 | 磨石 | 21号住居 | 塚土中位 | 花崗岩 | 北上山地 | - | 尖形 | 66.89 | 69.71 | 25.71 | 179.45 | |
| 306 | 113 | 磨石 | 21号住居 | 塚土下位 | 安山岩 | 北上山地 | - | 尖形 | 132.46 | 90.35 | 59.01 | 1095.31 | |
| 307 | 113 | 磨石 | 21号住居 | 塚土中 | 花崗岩 | 北上山地 | - | 尖形 | 108.42 | 87.04 | 65.29 | 882.9 | |
| 343 | 113 | フレイク | 21-25号住居 | 塚土下位 | 頁岩 | 美羽山脈 | 2b類 | - | 38.14 | 46.30 | 12.68 | 18.84 | |
| 347 | 113 | 石鏃 | 26号住居 | 塚土上 | 頁岩 | 美羽山脈 | - | 尖形 | 33.45 | 29.46 | 8.51 | 3.75 | |

| 品名 番号 | 写真 図版 | 器 種 | 出土位置 | 出土層位 | 土質 | 産 地 | 分 類 | 残存状況 | 径φ(mm) | 幅(mm) | 厚さ(mm) | 重量(g) | 備 考 |
|----------|----------|----------------|----------------|------|-------|------|-------|------|--------|--------|--------|---------|--------|
| 348 | 113 | フレイク | 26号土層 | 床面上 | 頁岩 | 奥山山脈 | 1 b 類 | — | 25.84 | 26.02 | 11.37 | 9.1 | |
| 394 | 113 | スクレイパー | 28号土層 | 埋土上位 | 頁岩 | 奥山山脈 | 1 a 類 | 完形 | 31.09 | 32.25 | 7.89 | 12.23 | |
| 395 | 113 | スクレイパー | 28号土層 | 埋土中位 | 頁岩 | 奥山山脈 | 1 a 類 | 完形 | 70.26 | 24.92 | 13.38 | 19.1 | |
| 396 | 113 | 長フレイク | 28号土層 | 埋土上位 | 頁岩 | 奥山山脈 | — | — | 20.35 | 22.26 | 9.91 | 5.14 | |
| 397 | 113 | フレイク | 28号土層 | 埋土上位 | 頁岩 | 奥山山脈 | 3 b 類 | — | 32.12 | 33.95 | 6.82 | 8.33 | |
| 398 | 113 | 磨石 | 28号土層 | 埋土中位 | 花崗岩 | 北上山脈 | — | 完形 | 125.54 | 117.13 | 57.60 | 1296.17 | |
| 399 | 113 | 磨石 | 28号土層 | 埋土中位 | 花崗岩 | 北上山脈 | — | 完形 | 69.83 | 147.0 | 26.25 | 122.59 | |
| 507 | 113 | スクレイパー | 30号土層 | 埋土中 | 頁岩 | 奥山山脈 | 2 a 類 | 完形 | 47.30 | 56.62 | 13.54 | 29.04 | |
| 508 | 113 | スクレイパー | 30号土層 | 埋土中 | 頁岩 | 奥山山脈 | 1 a 類 | 完形 | 59.37 | 27.97 | 15.36 | 25.56 | |
| 531 | 113 | 石鏃 | 32号土層 | 床面上 | 頁岩 | 奥山山脈 | — | 完形 | 31.37 | 14.53 | 3.43 | 0.88 | |
| 565 | 113 | 石鏃 | 35号土層 | 床面上 | 頁岩 | 奥山山脈 | 3 類 | 完形 | 58.46 | 19.47 | 5.14 | 6.52 | |
| 584 | 113 | スクレイパー | 5号土層(枕 溝部) | 埋土上位 | 頁岩 | 奥山山脈 | 1 c 類 | 破欠片 | 21.25 | 17.06 | 2.89 | 1.15 | |
| 614 | 113 | スクレイパー | 11号土層(枕 溝部) | 埋土下位 | 頁岩 | 奥山山脈 | 1 c 類 | 完形 | 28.13 | 18.41 | 6.97 | 3.25 | |
| 767 | 114 | 石鏃 | 4 C 2 u | 埋土上面 | 頁岩 | 奥山山脈 | — | 2 破欠 | 46.64 | 10.98 | 4.74 | 1.87 | |
| 768 | 114 | スクレイパー (種下) | 3 B 6 m | 埋土上面 | 頁岩 | 奥山山脈 | 1 d 類 | 完形 | 26.35 | 29.74 | 8.86 | 6.04 | 石鏃兼成器か |
| 769 | 114 | フレイク | 3 B 4 m | 埋土上面 | 頁岩 | 奥山山脈 | 1 c 類 | — | 47.68 | 33.87 | 12.79 | 3.04 | |
| 770 | 114 | フレイク | 3 B 4 m | 埋土上面 | 頁岩 | 奥山山脈 | 2 c 類 | — | 26.19 | 49.60 | 13.38 | 14.32 | |
| 771 | 114 | 燧石片 | 3 B 17 x | 3 類 | 埋土面緑石 | 北上山脈 | — | 時定形 | 128.89 | >195 | 26.09 | 271.2 | |
| 772 | 114 | 燧石片 | 3 C 23 u | 埋土上面 | 埋土面緑石 | 北上山脈 | — | 片断欠損 | 81.94 | 43.96 | 28.0 | 142.26 | |

第13表 コハク観察表

| 写真図版番号 | 品 上 位 器 (器種名) | 出 土 位 置 | 重量 (g) |
|--------|---------------|---------|--------|
| 115C | 14号石鏃 | 埋土上位 | 0.26 |
| 115D | 14号石鏃(片) | 埋土中 | 0.91 |
| 115E | 16号石鏃 | 埋土中位 | 0.26 |
| 115G | 36号石鏃 | 埋土上位 | 5.73 |
| 115H | 54号石鏃 | 埋土下位 | 1.13 |
| 116A | 3 C 22 i | 埋土上面 | 1.27 |
| 116C | 3 C 24 j | 埋土上面 | 1.61 |
| 116E | 3 C 24 j | 埋土上面 | 0.09 |
| 116F | 3 C 25 k | 埋土上面 | 0.59 |
| 116G | 3 C 25 k | 埋土上面 | 0.29 |

第14表 古銭観察表

| 古銭 品名 | 出土位置 | 出土層位 | 銭 質 名 | 備 考 | 発行年 (発行年) | 材質 | 径φ (mm) | よこ (mm) | 厚さ (mm) | 径厚 (mm) | 重量 (g) |
|-------------|------|------|-------|------------|-----------|----|---------|---------|--------------|---------|--------|
| 773 114 1号銭 | 埋土中 | 埋土中 | 崇寧元貨 | | 1068 | 銅 | 23.71 | 23.71 | 1.41 | 6.80 | 2.31 |
| 774 114 3号銭 | 埋土中 | 埋土中 | 崇寧元貨 | | 1068 | 銅 | 28.83 | 24.47 | 1.28 | 7.05 | 2.92 |
| 775 114 5号銭 | 埋土下位 | 埋土下位 | 咸寧通宝 | 背背文・背文・2枚定 | 1068 | 銅 | 24.13 | 23.85 | 2.76 (2枚) | 6.14 | 6.72 |
| 776 114 5号銭 | 埋土下位 | 埋土下位 | 咸寧通宝 | 大背文 | 1068 | 銅 | 21.35 | 21.22 | 1.39 | 5.38 | 2.05 |

写 真 图 版



調査区北部（南東から）



調査区中央（北西から）



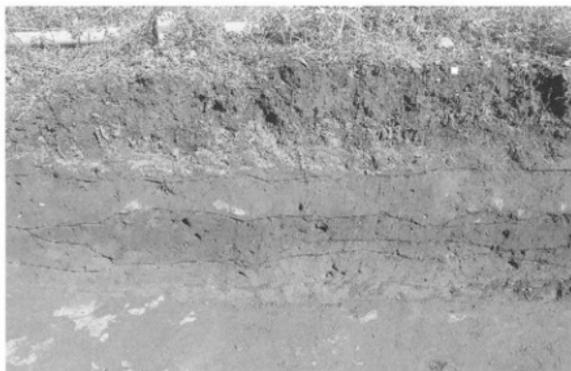
調査区南東部（東から）

写真図版 1 調査区全景

基本層序②（南西から）



基本層序④（南西から）



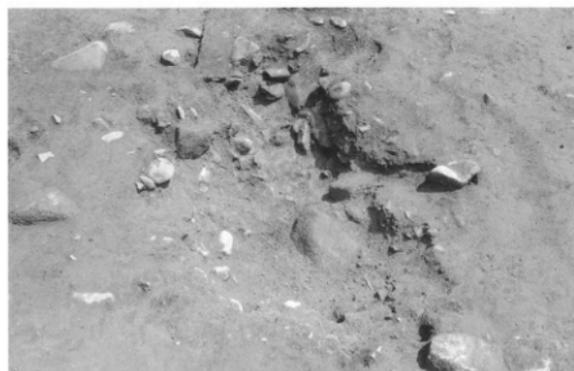
1号住居状遺構（北から）



写真図版2 基本層序、1号住居状遺構



1号住居状遺構断面（東から）



1号土坑（南西から）



1号土坑断面（南東から）

写真図版3 1号住居状遺構、1号土坑

1号住居跡（南東から）



1号住居跡断面（南東から）



1号住居跡炉（南東から）



写真図版 4 1号住居跡



2号住居跡（南東から）

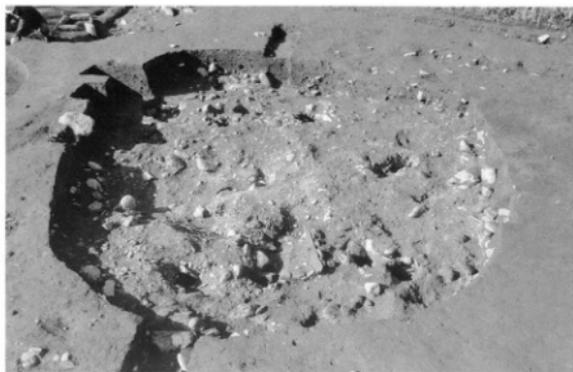


2号住居跡断面（西から）



2号住居跡炉

写真図版5 2号住居跡



3号住居跡・2号土坑（南東から）

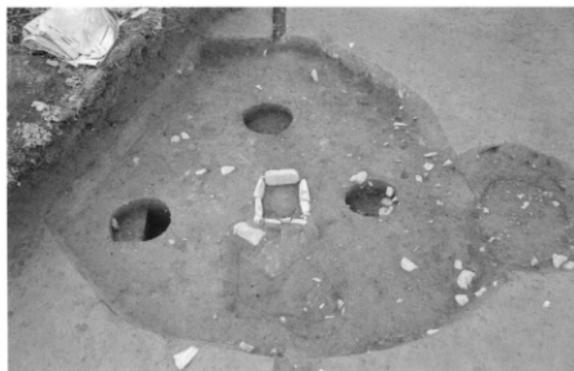


3号住居跡断面（北東から）



3号住居跡炉（南東から）

写真図版6 3号住居跡・2号土坑



4号住居跡（南東から）



4号住居跡断面（北西から）



4号住居跡炉（南東から）

写真図版7 4号住居跡

5号住居跡（東から）



5号住居跡断面（北東から）



5号住居炉（東から）





6号住居跡（南東から）



6号住居跡炉（南東から）



6号住居跡土器出土状況（南東から）

写真図版9 6号住居跡

7号住居跡断面（南東から）



7号住居跡炉断面（南から）



7号住居跡炉断面（東から）



写真図版10 7号住居跡



8号住居跡 (南東から)



8号住居跡断面 (南西から)



8号住居跡炉 (南東から)

写真図版11 8号住居跡

9号住居炉（南から）



9号住居跡断面（北東から）



9号住居跡炉（南から）



写真図版12 9号住居跡



10号住居跡（南東から）



10号住居跡断面（北西から）



10号住居跡炉（南東から）

写真図版13 10号住居跡

11号住居跡（南東から）



11号住居跡断面



11号住居跡炉（南東から）



写真図版14 11号住居跡



12A号住居跡（南から）



12B号住居跡



12A・B号住居跡断面（北東から）

写真図版15 12A・B号住居跡

12A号住居跡炉 (南から)



12B号住居跡炉 (南東から)



13号住居跡 (南から)





13号住居跡断面（東から）



13号住居跡掘り込み（東から）



13号住居跡埋設土器（南西から）

写真図版17 13号住居跡

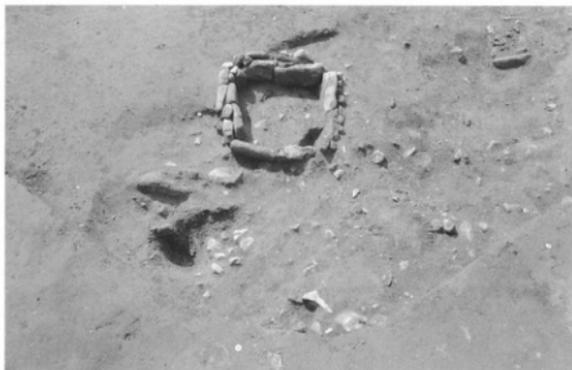
14号住居跡（東から）



14号住居跡断面（東から）

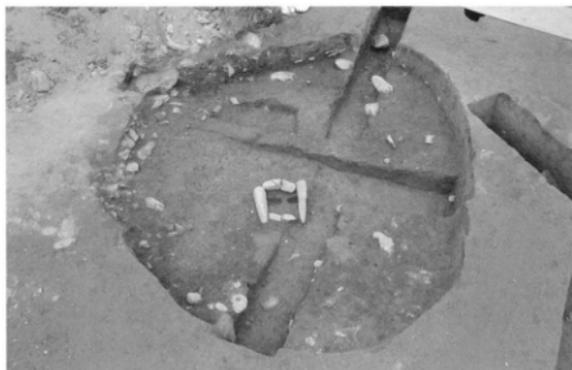


14号住居跡炉A（東から）





14号住居跡炉B (南から)

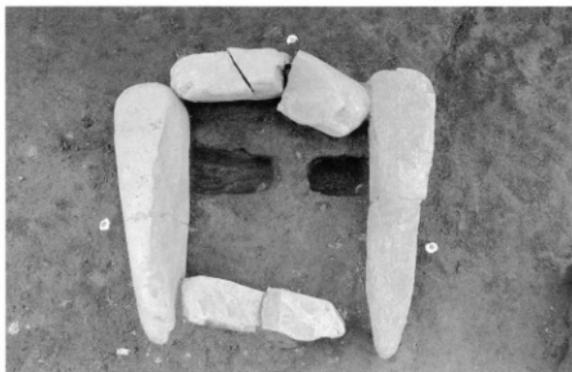


15号住居跡 (南東から)



15号住居跡断面 (南東から)

15号住居跡炉（東から）



16号住居跡（東から）



16号住居跡断面（南東から）

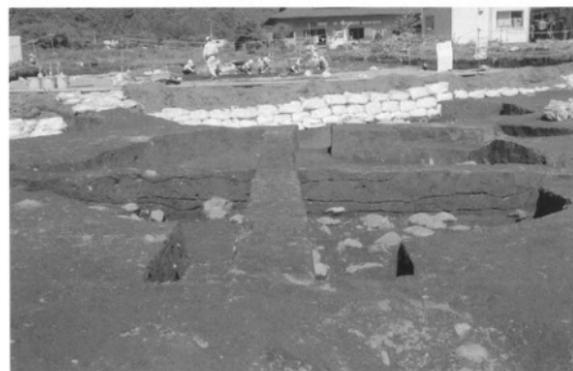




16号住居跡炉（東から）



17号住居跡（北西から）



17号住居跡断面（南東から）

17号住居跡炉（北西から）



18号住居跡（東から）



18号住居跡断面（南から）



写真図版22 17・18号住居跡



18号住居跡炉（東から）



18号住居跡炉断面（東から）



18号住居跡床下土坑土器出土状況
（南東から）

19号住居跡（南西から）



19号住居跡断面（南西から）



19号住居跡炉（南西から）





20号住居跡 (南東から)

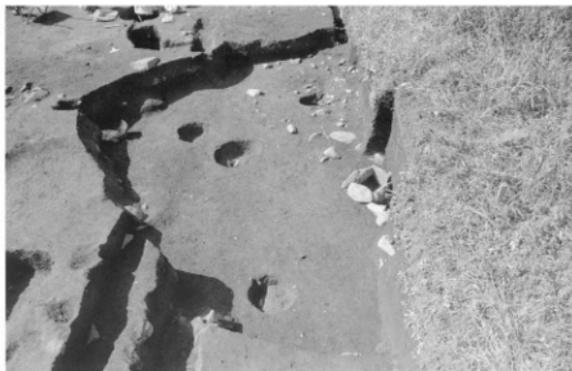


20号住居跡断面 (南から)



20号住居跡炉 (南東から)

21号住居跡（南東から）



21号住居跡断面（南西から）



21号住居跡炉（東から）





22号住居跡（南東から）



22号住居跡断面（南東から）



22号住居跡坪（南東から）

23号住居跡（北から）



23号住居跡断面（南から）



23号住居跡炉（北から）





24号住居跡 (東から)



24号住居跡炉 (東から)



25号住居跡 (東から)

25号住居跡炉（東から）



24・25号住居跡断面（東から）



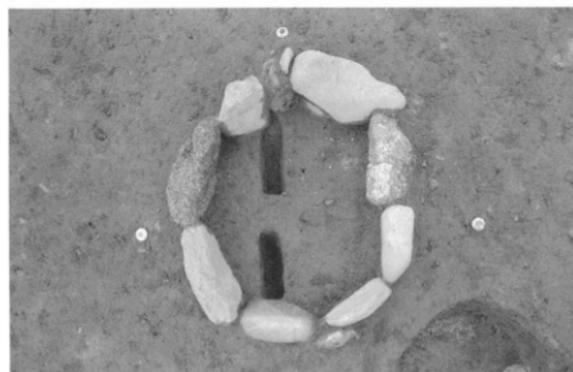
26号住居跡（北から）



写真図版30 25・26号住居跡



26号住居跡断面（南東から）



26号住居跡炉（北から）

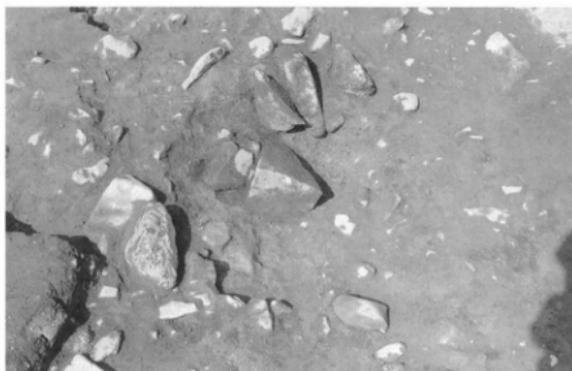


27号住居跡（南から）

27号住居跡断面（南西から）



27号住居跡掘り込み（北から）



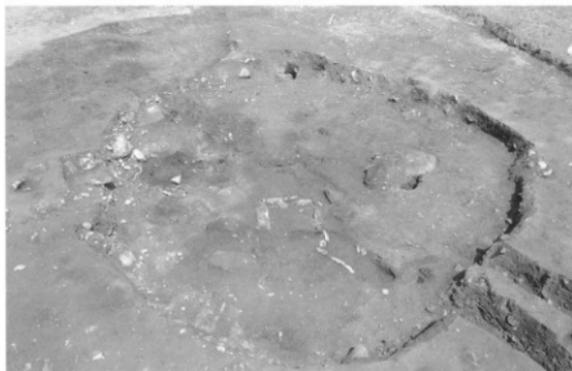
28号住居跡（南東から）



写真図版32 27・28号住居跡



28号住居跡断面（南西から）

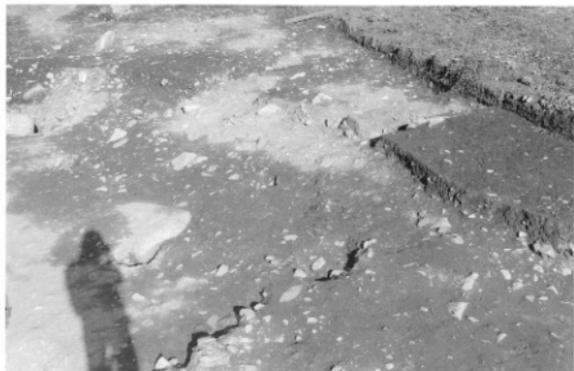


28号住居跡炭化物検出状態
（南東から）



28号住居跡炉（南東から）

29号住居跡（南東から）



29号住居跡断面（西から）



30号住居跡（北東から）





30号住居跡断面（東から）



30号住居跡炉（北東から）



30号住居跡柱穴（根固め石）
（北から）

31号住居跡（南東から）



31号住居跡（南西から）



31号住居跡炉（南東から）





32号住居跡（南東から）

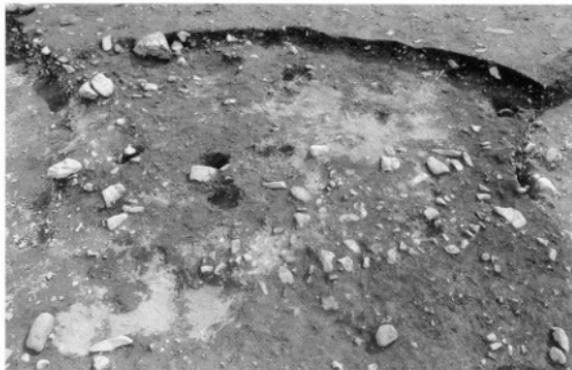


32号住居跡断面（南東から）



32号住居跡炉（南東から）

33号住居跡（北東から）



34号住居跡（南東から）



35号住居跡（北から）





35号住居跡断面 (南西から)



35号住居跡炉 (東から)



36号住居跡 (南西から)

36号住居跡断面（南西から）



36号住居跡炉（南西から）



37号住居跡（南西から）



写真図版40 36・37号住居跡



37号住居跡断面（南西から）



37号住居跡炉（南東から）



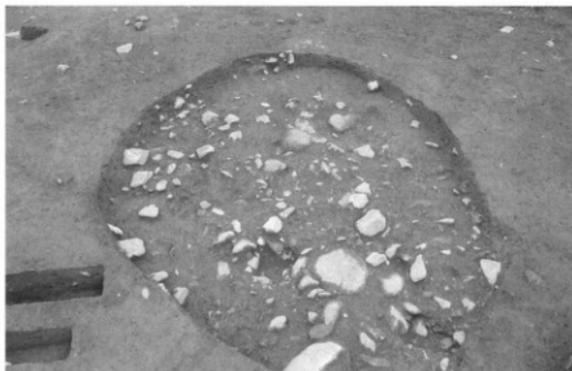
2号住居状遺構（北西から）

写真図版41 37号住居跡、2号住居状遺構

2号住居状遺構断面（北東から）



3号住居状遺構（南から）



3号住居状遺構断面（西から）

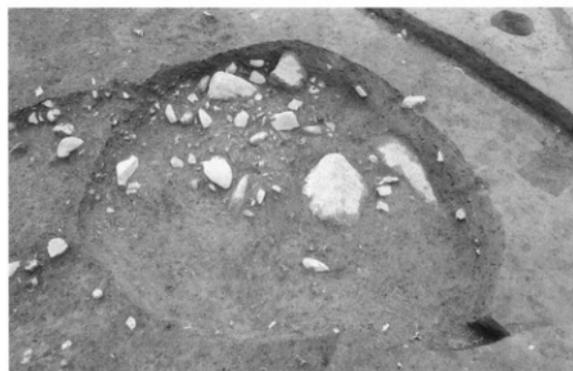




4号住居状遺構 (北東から)



4号住居状遺構断面 (北から)



5号住居状遺構 (北西から)

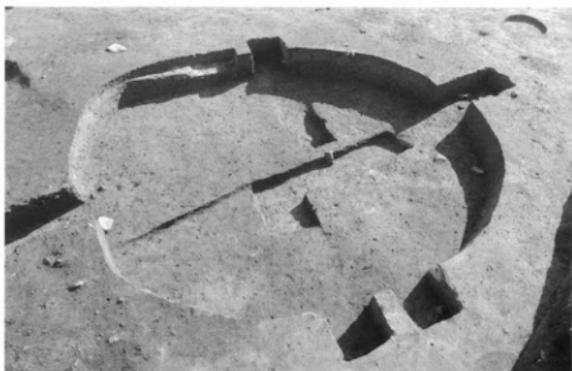
6号住居状遺構（北西から）



6号住居状遺構断面（北東から）

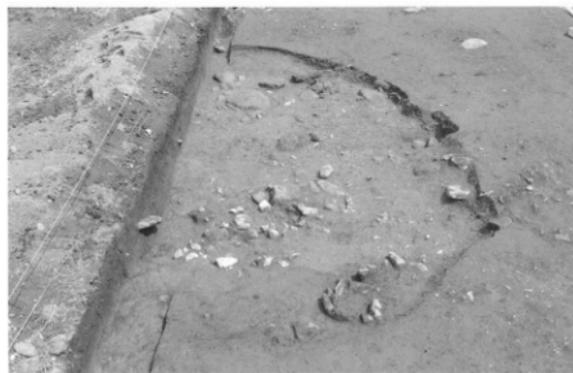


7号住居状遺構（北西から）





7号住居状遺構断面 (東から)



8号住居状遺構 (北西から)

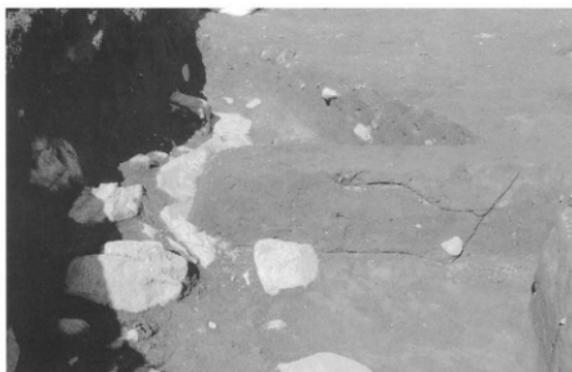


8号住居状遺構断面 (南西から)

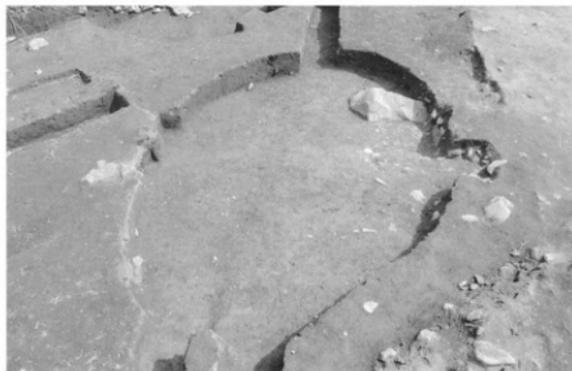
9号住居状遺構（北東から）



9号住居状遺構断面（南東から）



10号住居状遺構（西から）





10号住居状遺構断面（西から）



11号住居状遺構・3号土坑
（南東から）



11号住居状遺構断面（南西から）

12号住居状遺構（西から）



12号住居状遺構断面（西から）



13号住居状遺構（北から）





13号住居状遺構断面 (南から)



14号住居状遺構 (北から)



14号住居状遺構断面 (西から)



4号土坑 (南東から)



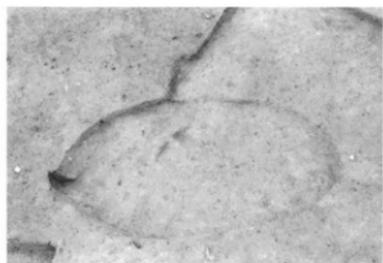
4号土坑断面 (北東から)



5号土坑 (南東から)



5号土坑断面 (南東から)



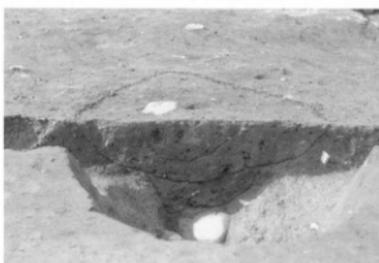
6号土坑 (南東から)



6号土坑断面 (南東から)



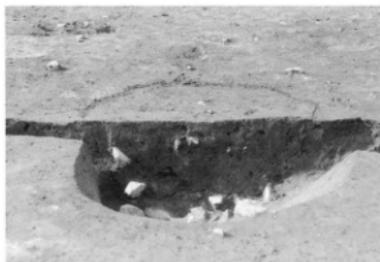
7号土坑 (東から)



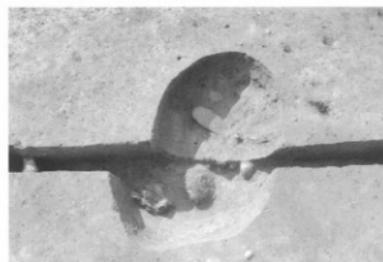
7号土坑断面 (東から)



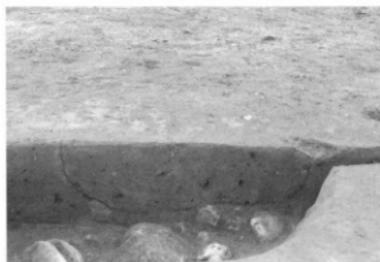
8号土坑（東から）



8号土坑断面（東から）



9号土坑（北東から）



9号土坑断面（北東から）



10・11号土坑（北西から）



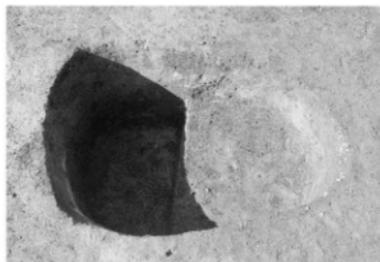
11号土坑断面（南西から）



12号土坑（西から）



12号土坑断面（東から）



13号土坑 (南西から)



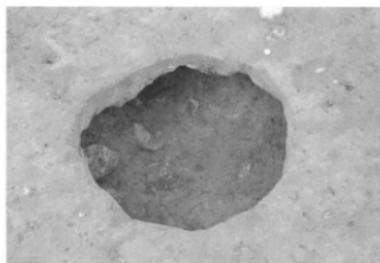
13号土坑断面 (南西から)



作業風景



14号土坑断面 (東から)



15号土坑 (南東から)



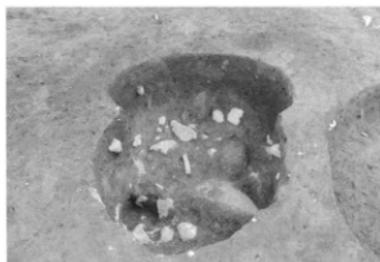
15号土坑断面 (東から)



16号土坑 (北西から)



16号土坑断面 (北東から)



17号土坑 (北西から)



17号土坑 (南から)



18号土坑 (北から)



18号土坑断面 (南から)



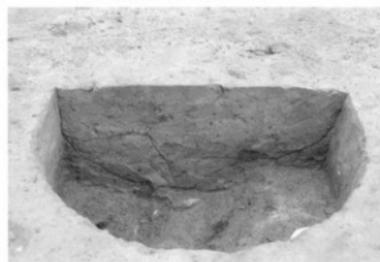
19号土坑 (北から)



19号土坑断面 (南西から)



20号土坑 (北から)



20号土坑断面 (南から)



21号土坑 (南西から)



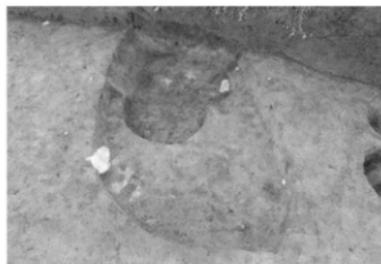
21号土坑断面 (南から)



22号土坑 (北から)



作業風景



23号土坑 (北東から)



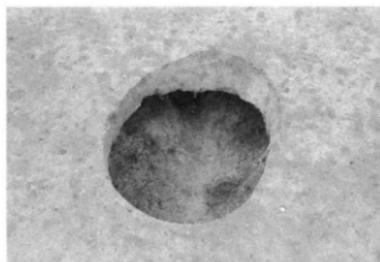
23号土坑断面 (北東から)



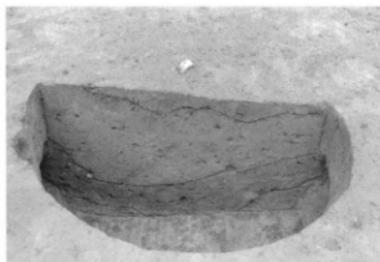
24号土坑 (北東から)



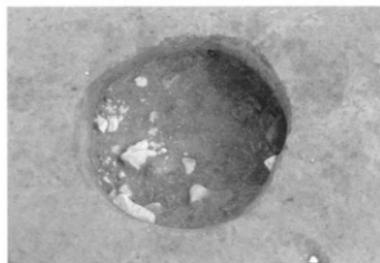
24号土坑断面 (北から)



25号土坑 (南東から)



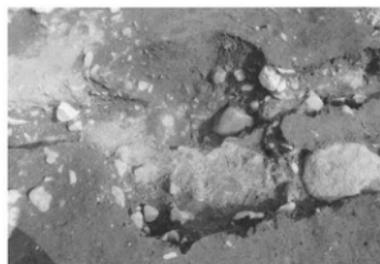
25号土坑断面 (南西から)



26号土坑 (北から)



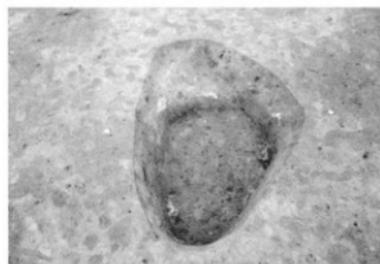
26号土坑断面 (南東から)



27号土坑 (南西から)



27号土坑断面 (南西から)



28号土坑 (北東から)



28号土坑断面 (南西から)



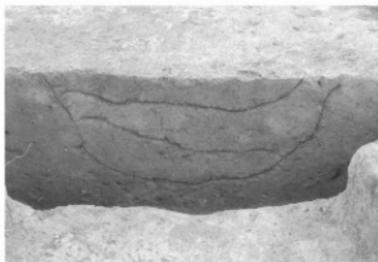
29号土坑 (北西から)



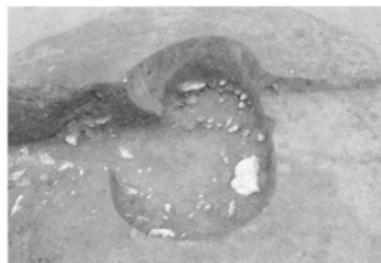
29号土坑断面 (西から)



30号土坑 (北西から)



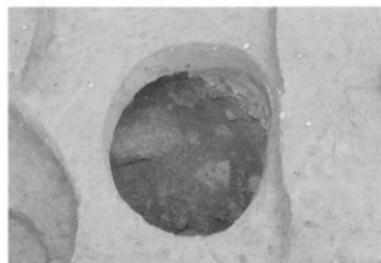
30号土坑断面 (北西から)



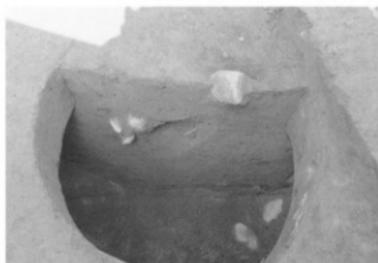
31号土坑 (南西から)



31号土坑断面 (北東から)



32号土坑 (南から)



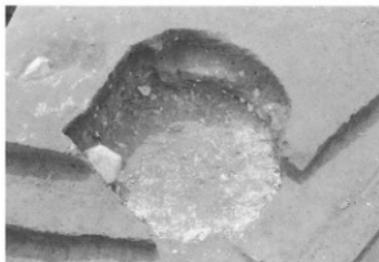
32号土坑断面 (南東から)



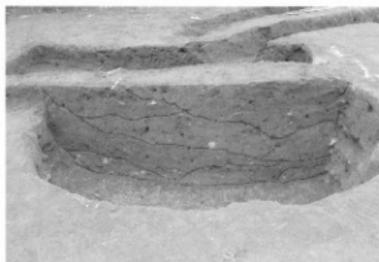
作業風景



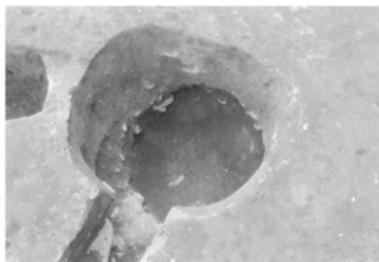
33号土坑断面 (北西から)



34号土坑 (南から)



34号土坑断面 (西から)



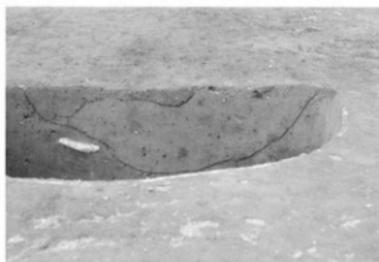
35号土坑 (南東から)



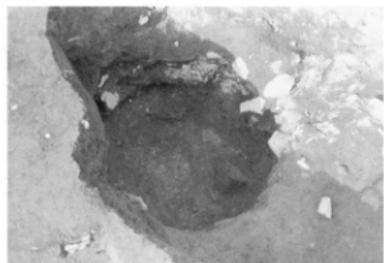
発掘体験



36号土坑 (南西から)



36号土坑断面 (南西から)



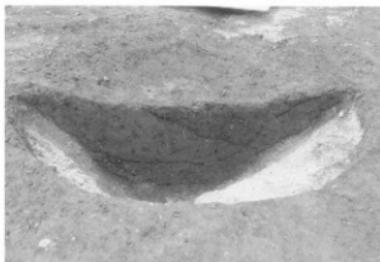
37号土坑 (東から)



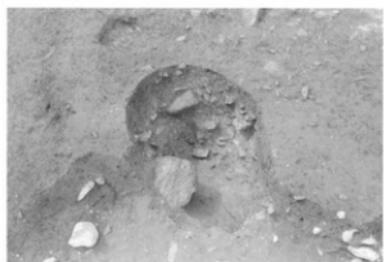
37号土坑断面 (南東から)



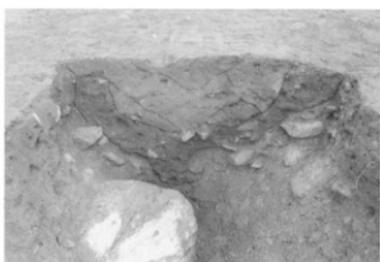
38号土坑 (北西から)



38号土坑断面 (南から)



39号土坑 (南東から)



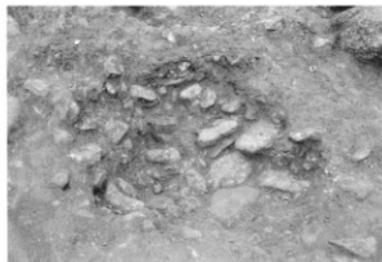
39号土坑断面 (南東から)



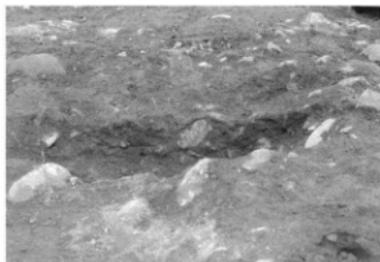
40号土坑 (北東から)



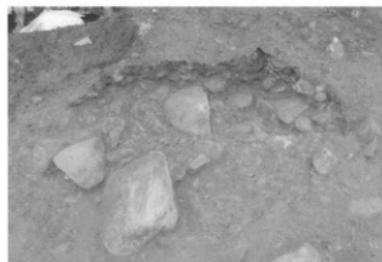
40号土坑断面 (東から)



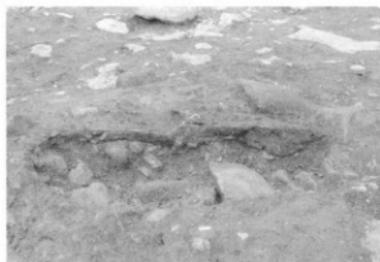
41号土坑 (東から)



41号土坑断面 (北東から)



42号土坑 (南東から)



42号土坑断面 (北東から)



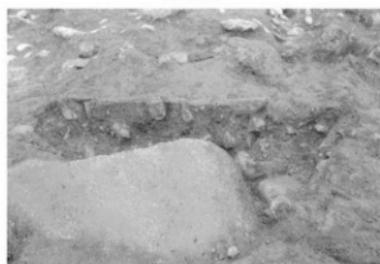
43号土坑 (南西から)



発掘体積



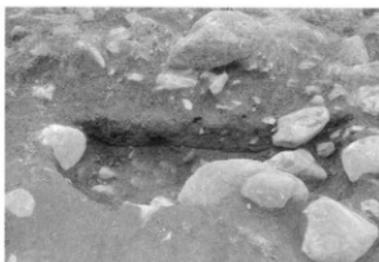
44号土坑 (南から)



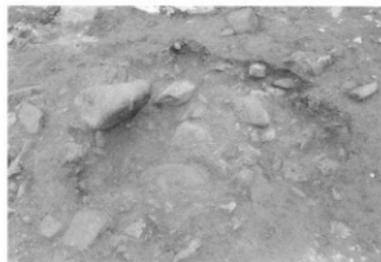
44号土坑断面 (北から)



45号土坑（北東から）



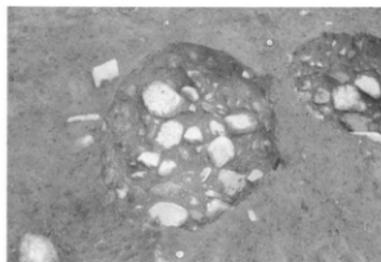
45号土坑断面（南東から）



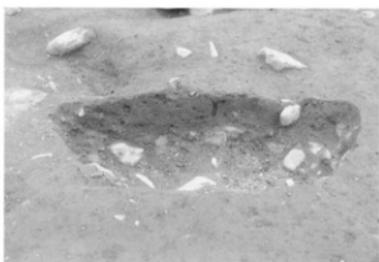
46・47号土坑（南西から）



46・47号土坑断面（北東から）



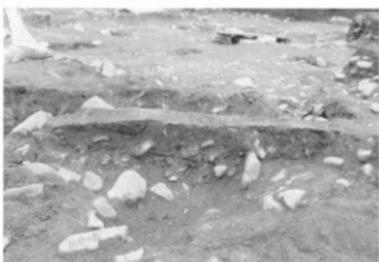
48号土坑（南東から）



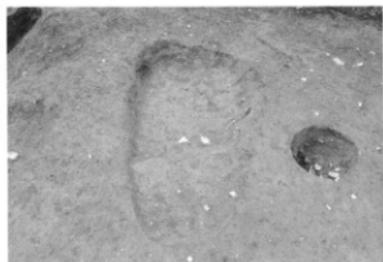
48号土坑断面（北東から）



49号土坑（北から）



49号土坑断面（西から）



50号土坑 (北から)



50号土坑断面 (東から)



作業風景



51号土坑断面 (北東から)



52号土坑 (北から)



52号土坑 (東から)



53号土坑 (南東から)



53号土坑断面 (南西から)



54号土坑 (東から)



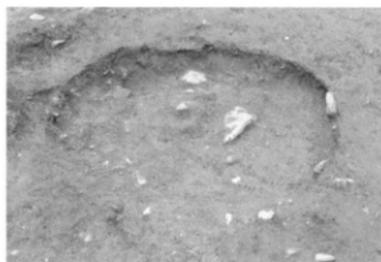
54号土坑断面 (北から)



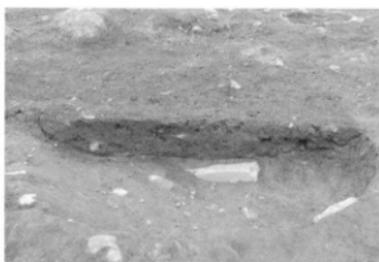
55・56号土坑 (北西から)



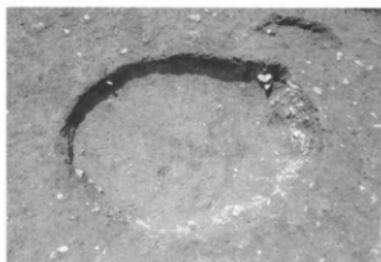
56号土坑断面 (南西から)



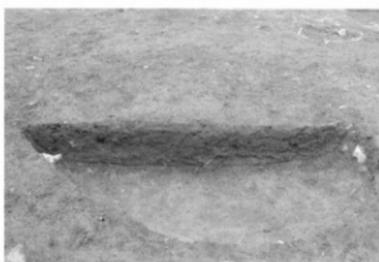
57号土坑 (北東から)



57号土坑断面 (北から)



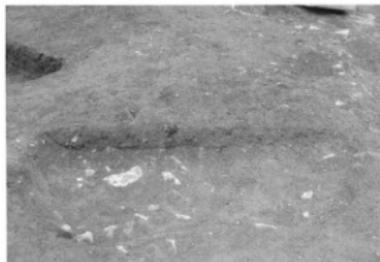
58号土坑 (東から)



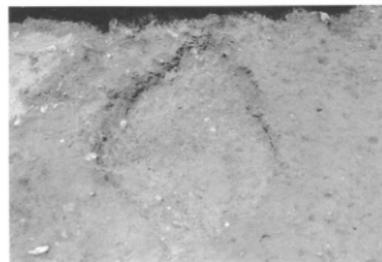
58号土坑断面 (南東から)



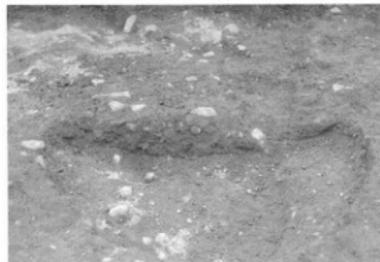
59号土坑 (南東から)



59号土坑断面 (東から)



60号土坑 (北から)



60号土坑断面 (南から)



61号土坑 (北から)



61号土坑断面 (東から)



62号土坑 (北から)



62号土坑断面 (南西から)

63号土坑断面（西から）



64号土坑（西から）



64号土坑断面（西から）





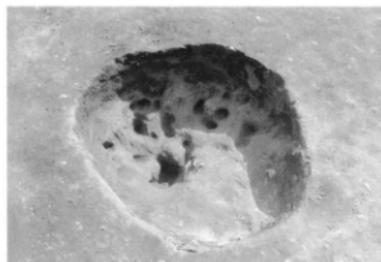
1号掘立柱建物跡（北から）



2号掘立柱建物跡（南東から）



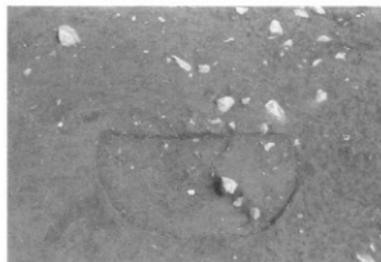
3号掘立柱建物跡（北東から）



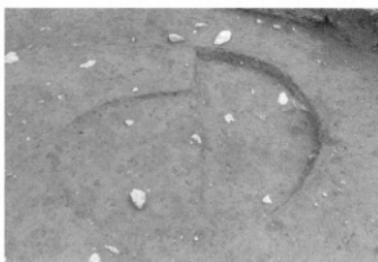
1号墓 (北東から)



1号墓断面 (北東から)



2号墓 (北東から)



4号墓 (東から)



3号墓 (北西から)



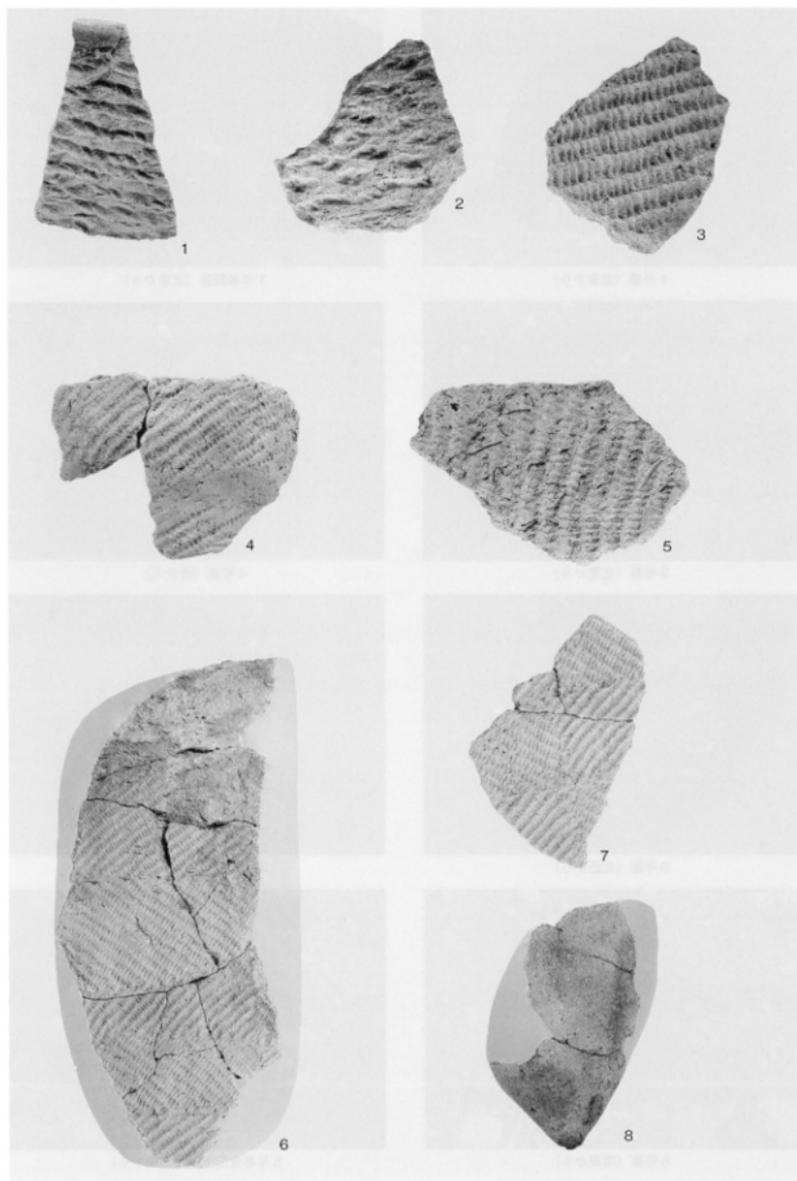
3号墓断面 (北西から)



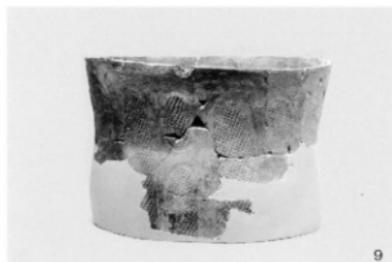
5号墓 (南東から)



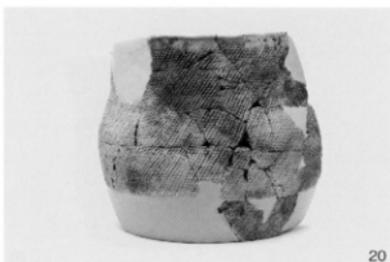
5号墓骨出土状況 (南から)



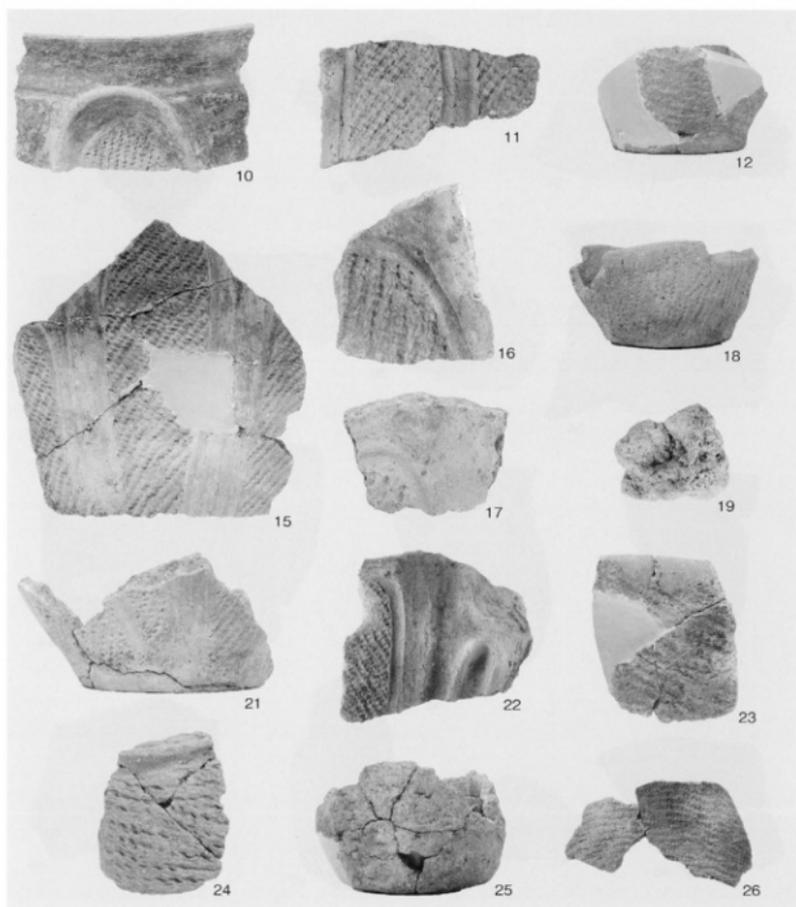
写真图版67 1号住居状遺構、1号土坑出土土器



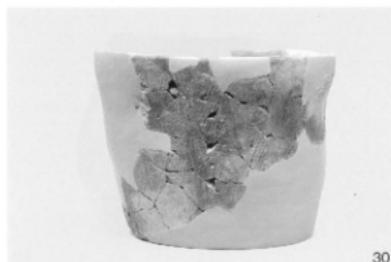
9



20



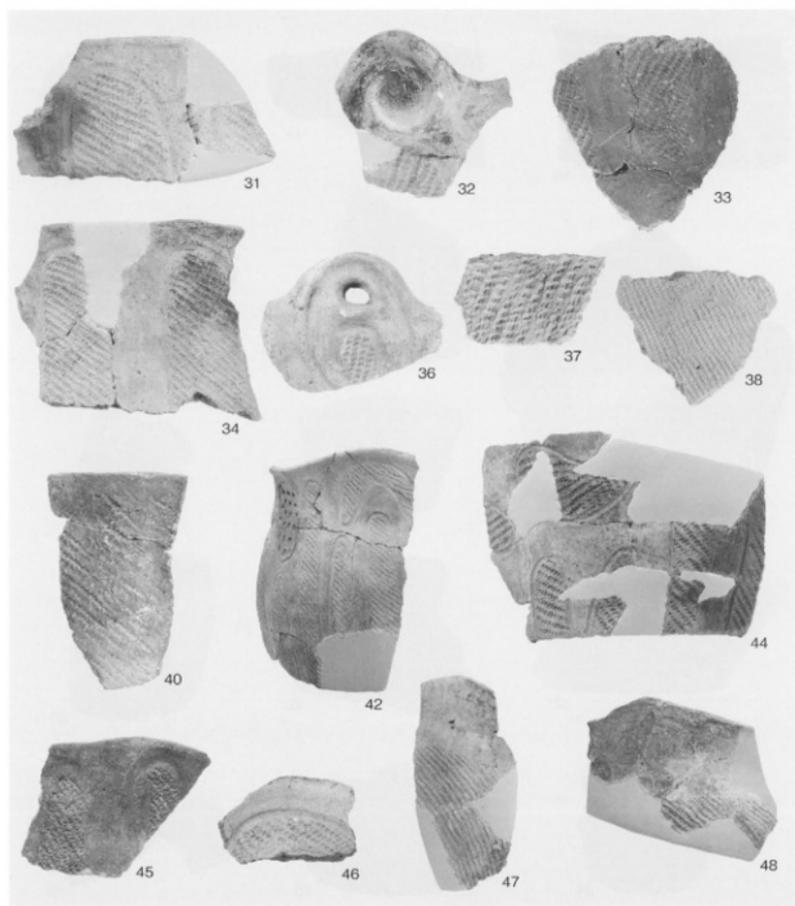
写真図版68 1～3号住居跡出土土器



30



39



写真図版69 3～8号住居跡出土土器



41



43



49

50

52



51

53

58

59

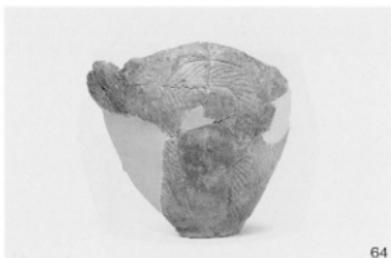
60



57



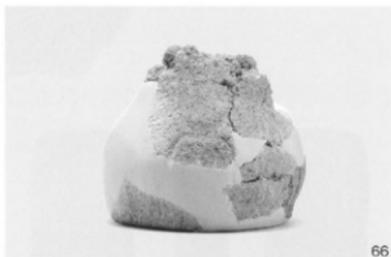
62



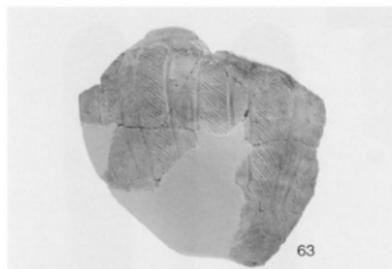
64



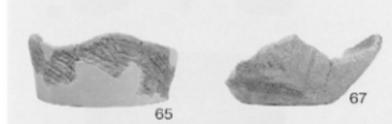
66



66



63



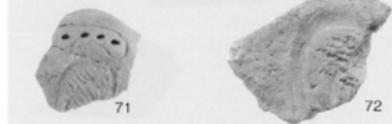
65

67



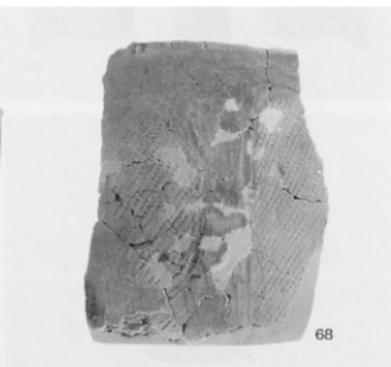
69

70



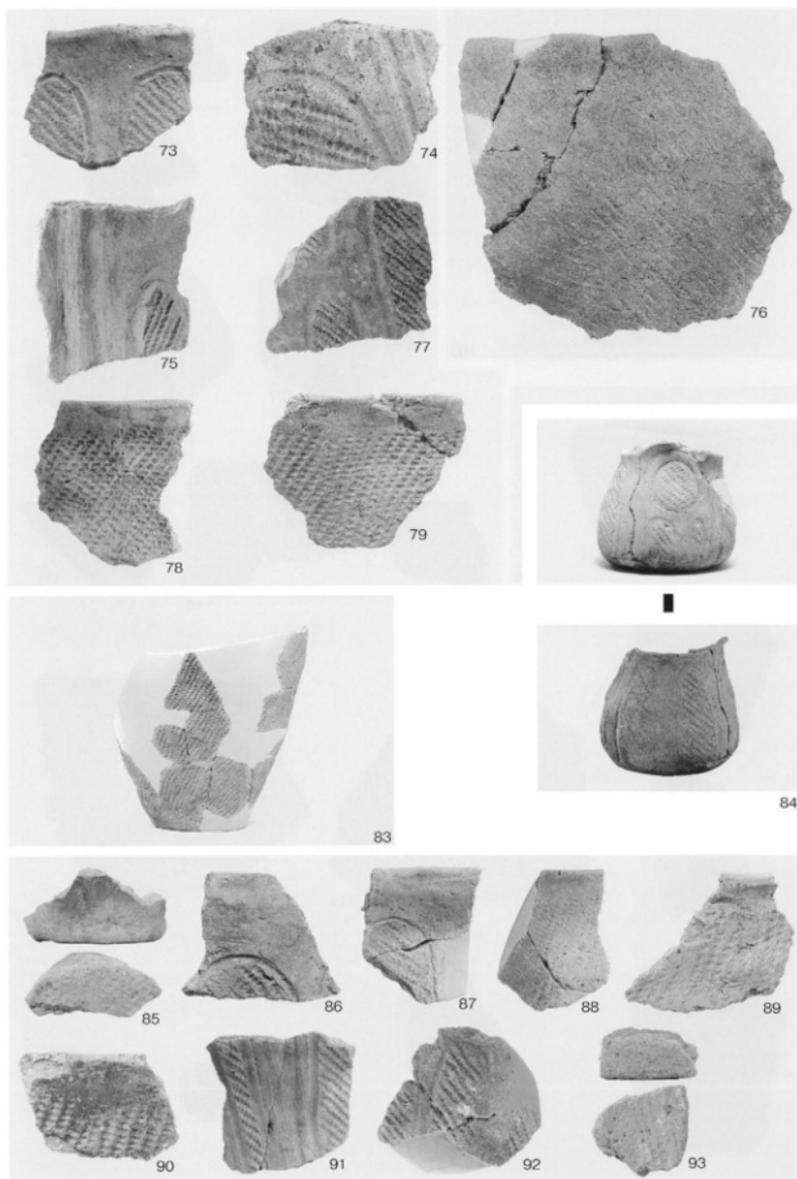
71

72

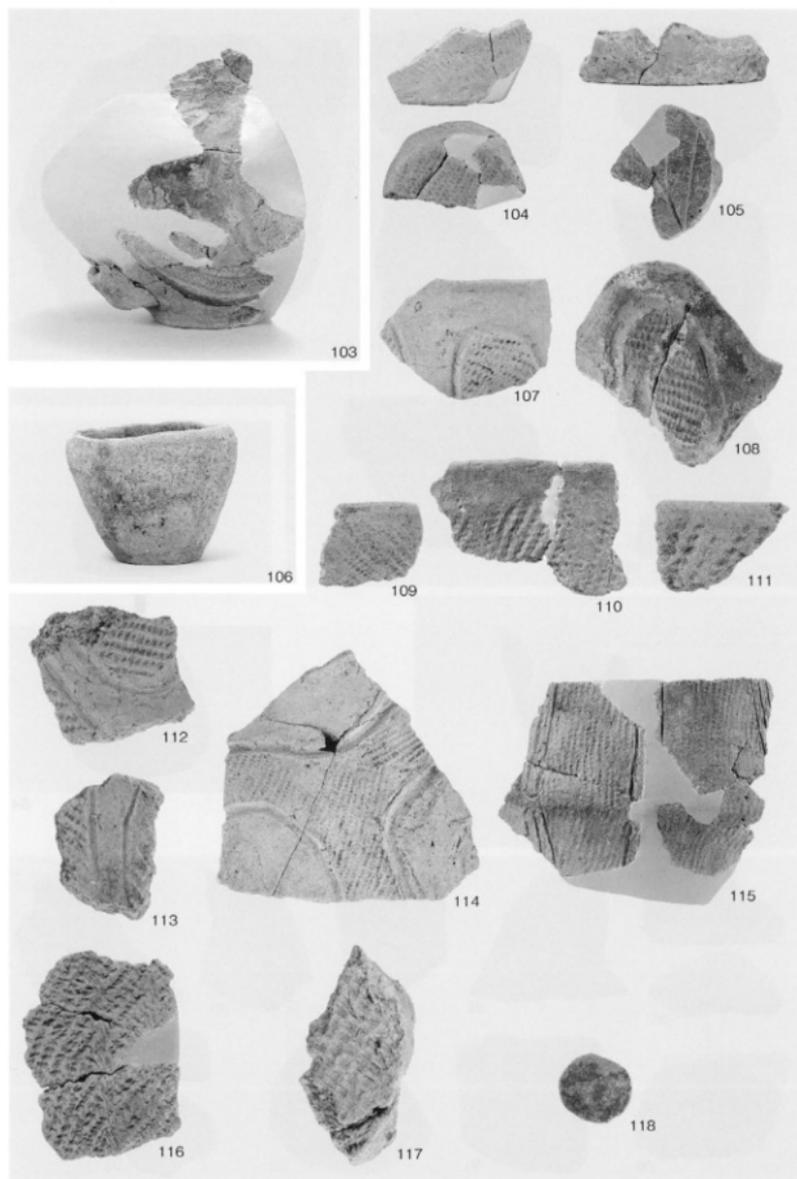


68

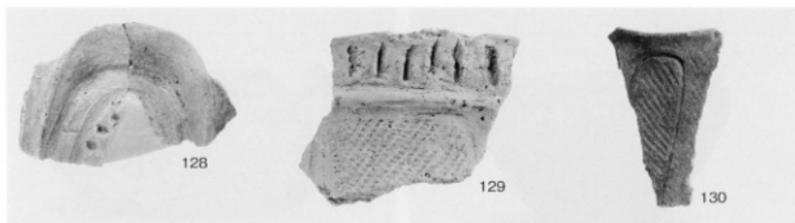
写真図版71 10号住居跡出土土器



写真图版72 10·11号住居跡出土土器



写真图版73 12号住居跡出土土器



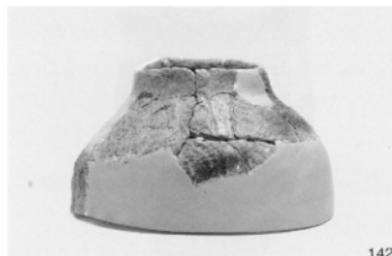
写真図版74 13・14号住居跡出土土器



140



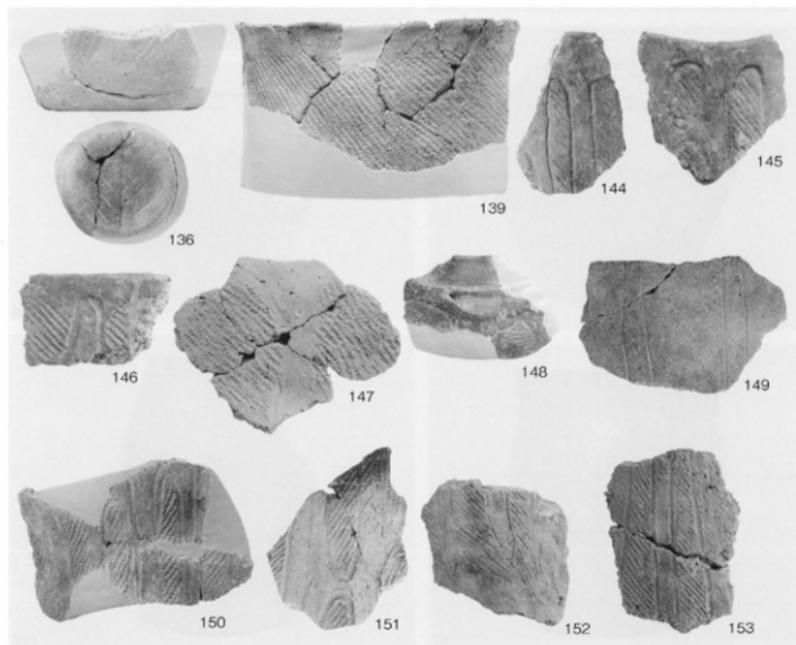
141



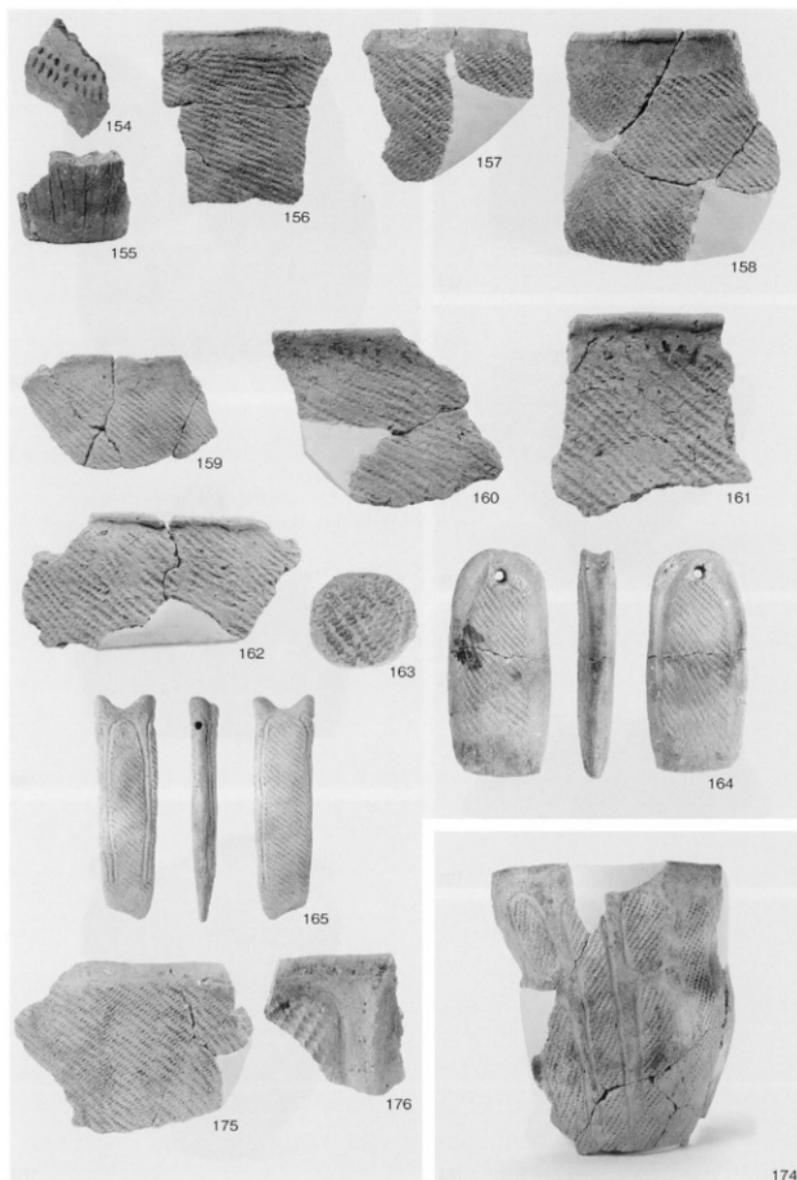
142



143



写真図版75 14号住居跡出土土器



写真図版76 14・15号住居跡出土土器



177



178



179



182



181

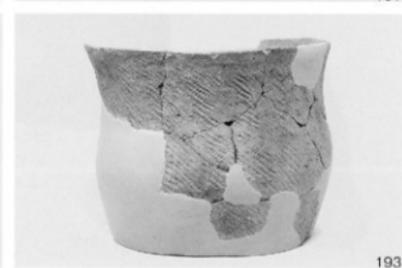
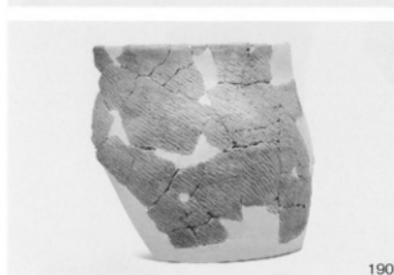
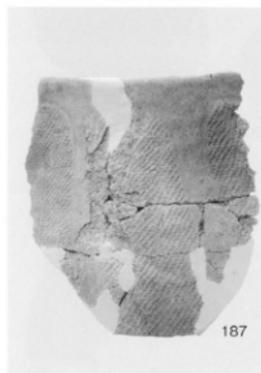
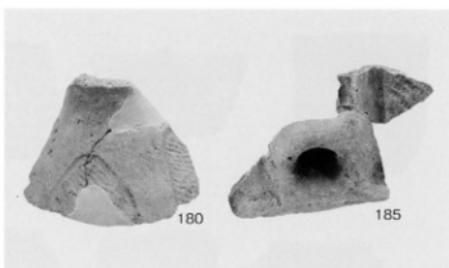


184

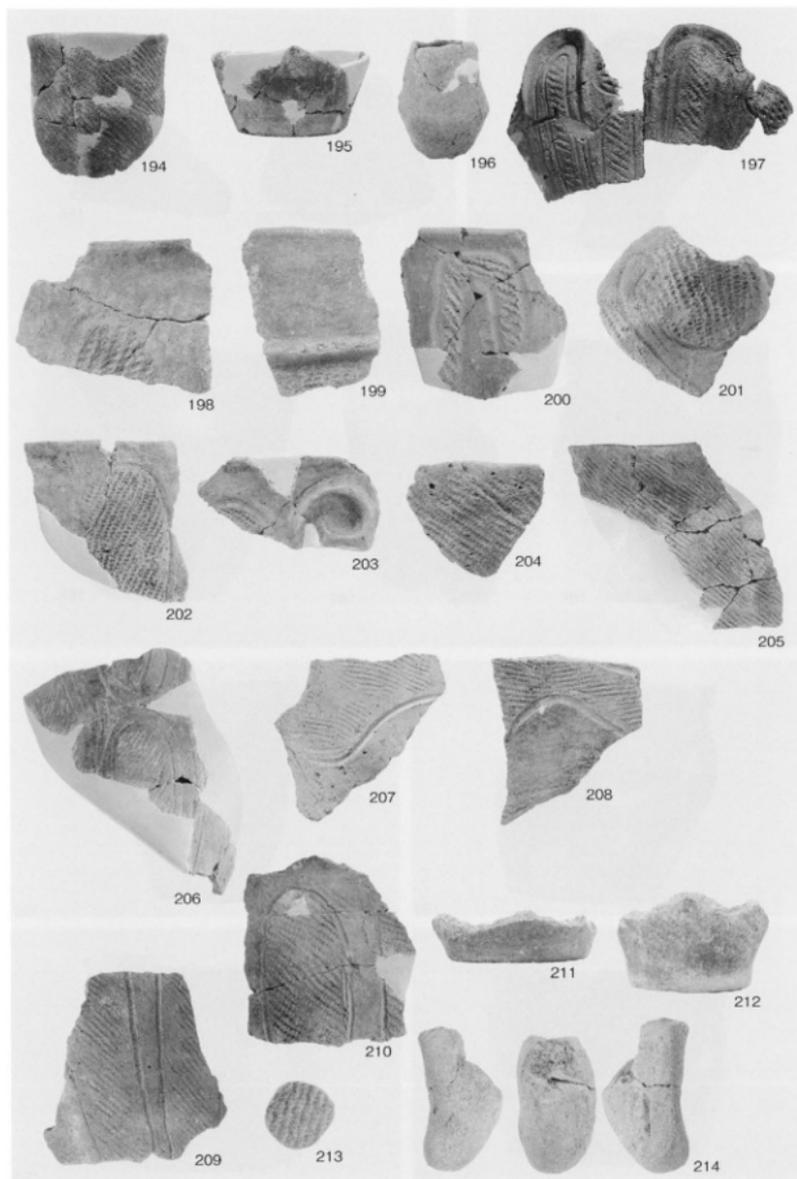


183

写真図版77 16号住居跡出土土器(1)



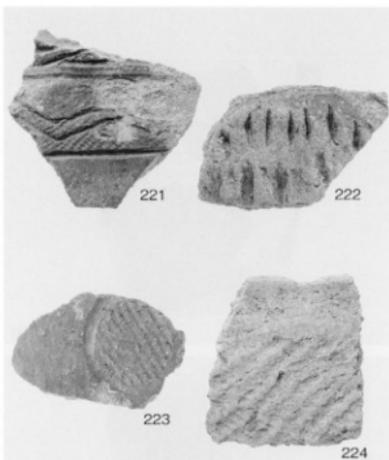
写真図版78 16号住居跡出土土器(2)



写真図版79 16号住居跡出土土器(3)



220



221

222

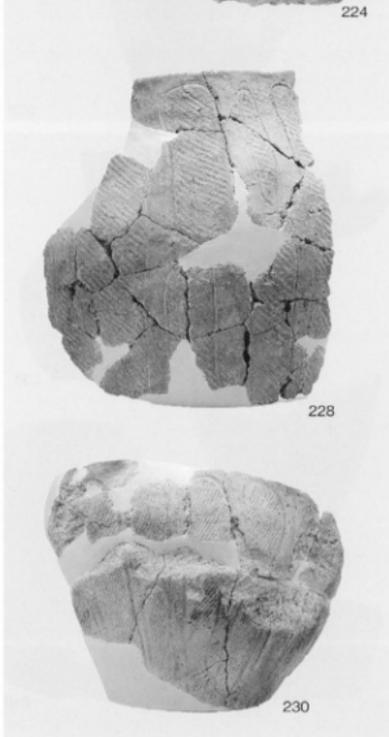


223

224



227



228



229



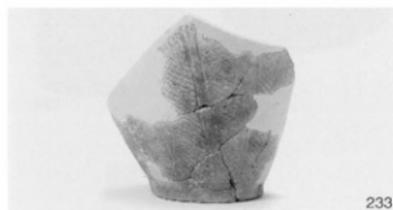
230



231



232



233



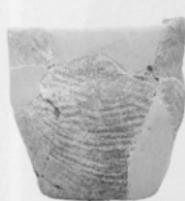
234



235



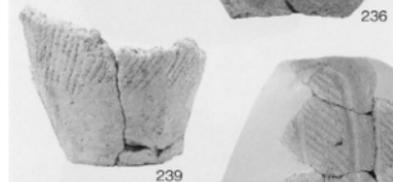
236



237



238



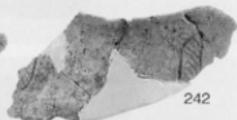
239



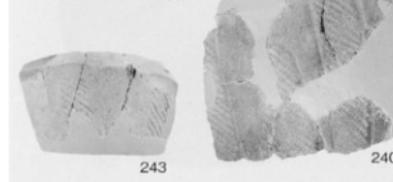
240



241



242



243

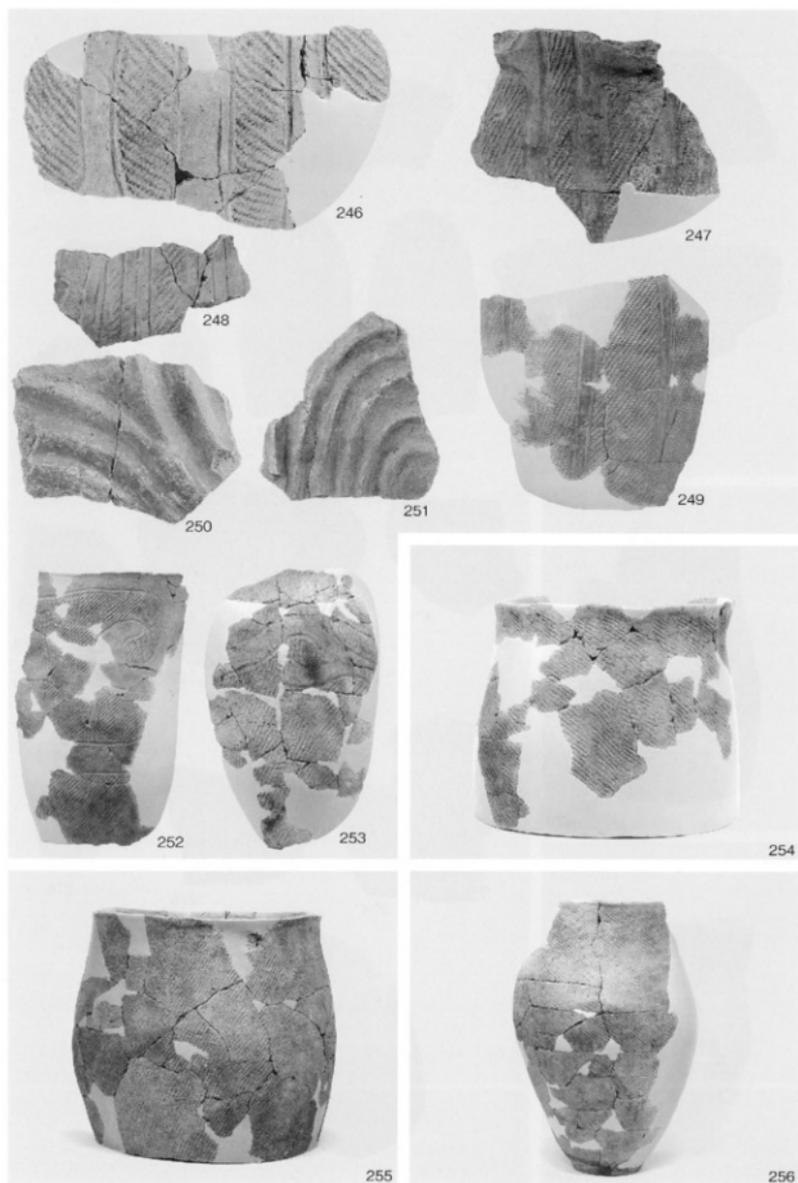


244

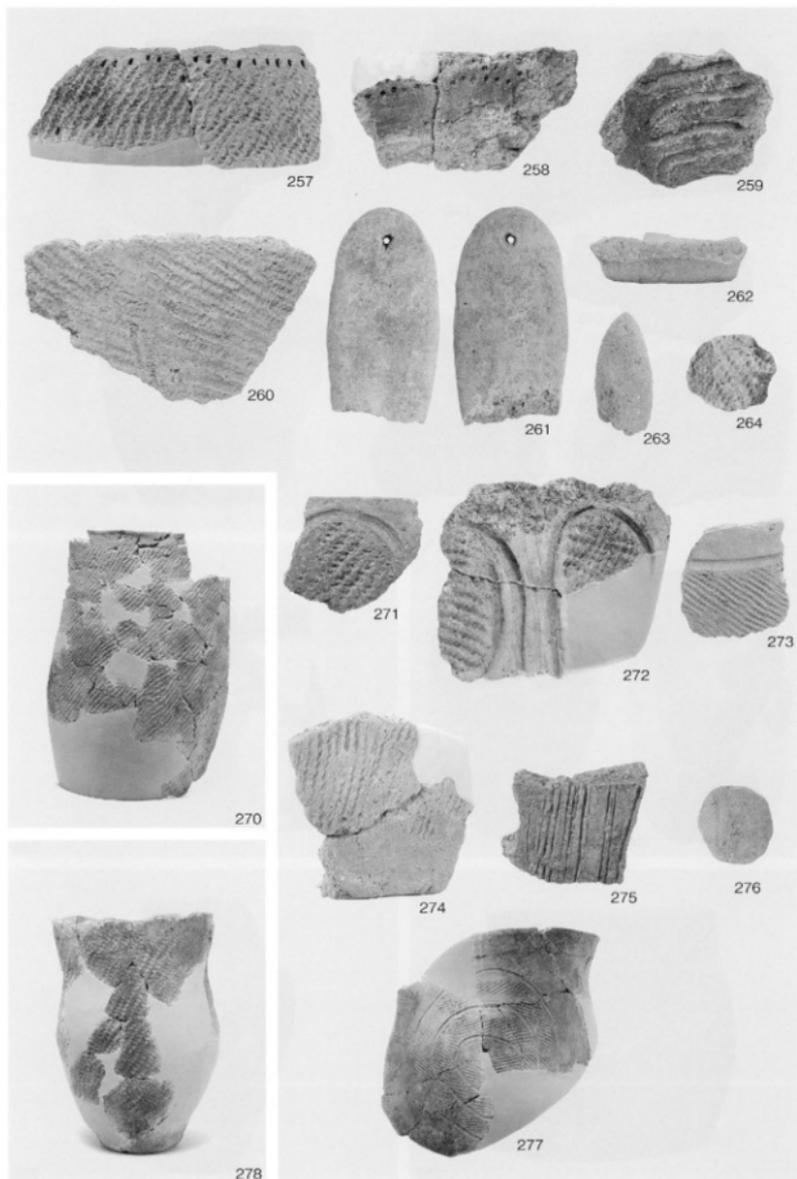


245

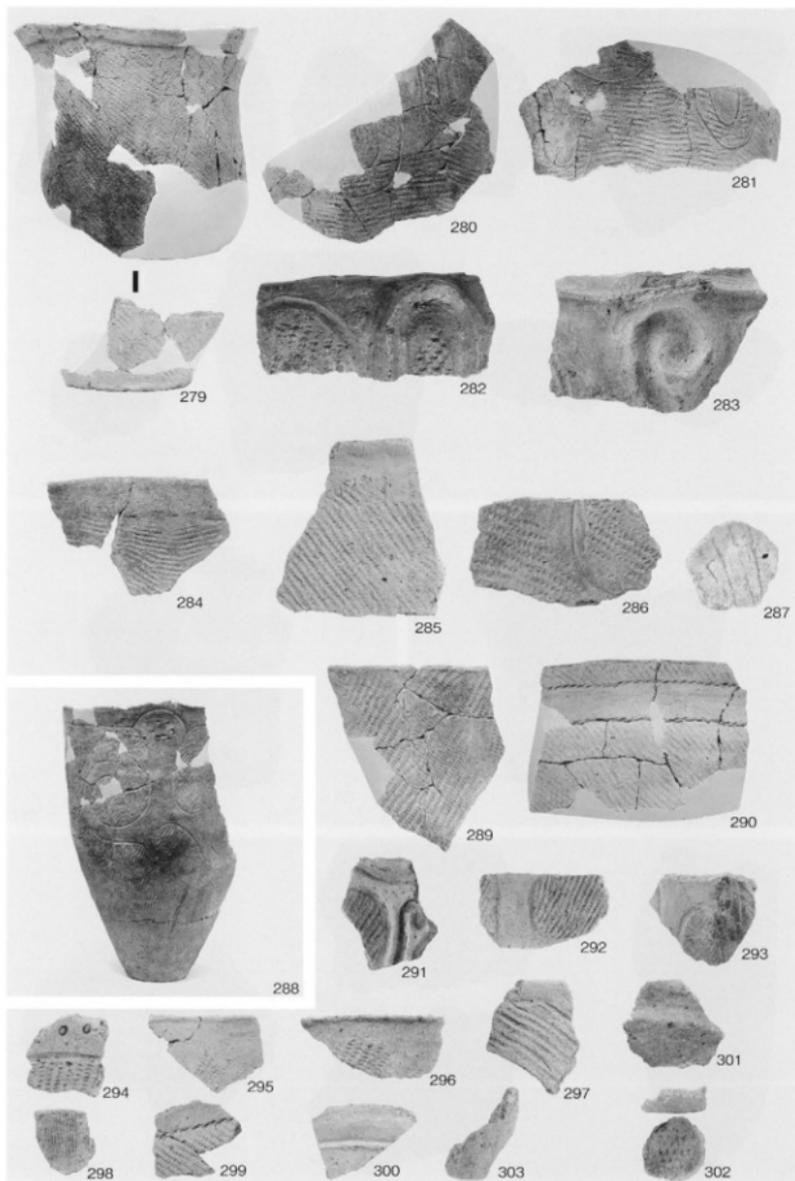
写真図版81 18号住居跡出土土器(1)



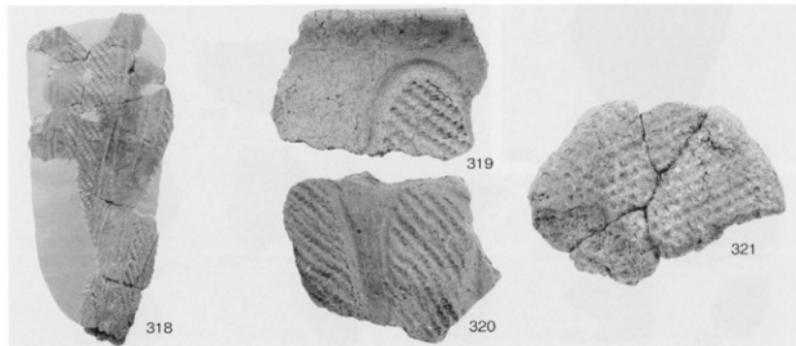
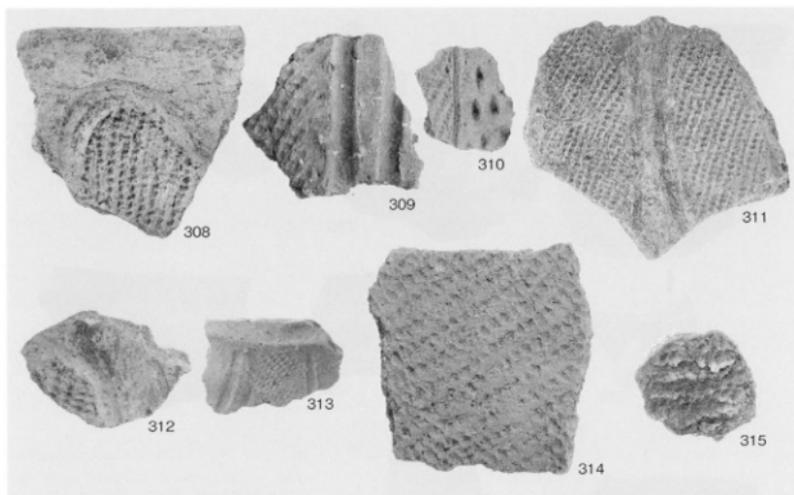
写真図版82 18号住居跡出土土器(2)



写真図版83 18～20号住居跡出土土器



写真図版84 20・21号住居跡出土土器



写真图版85 22·23号住居跡出土土器



322



323



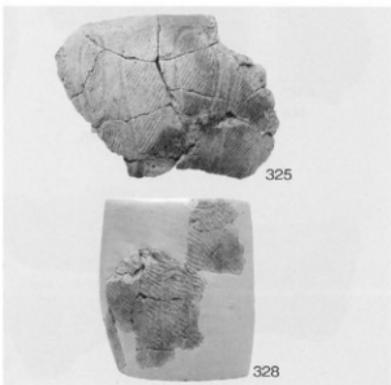
324



326

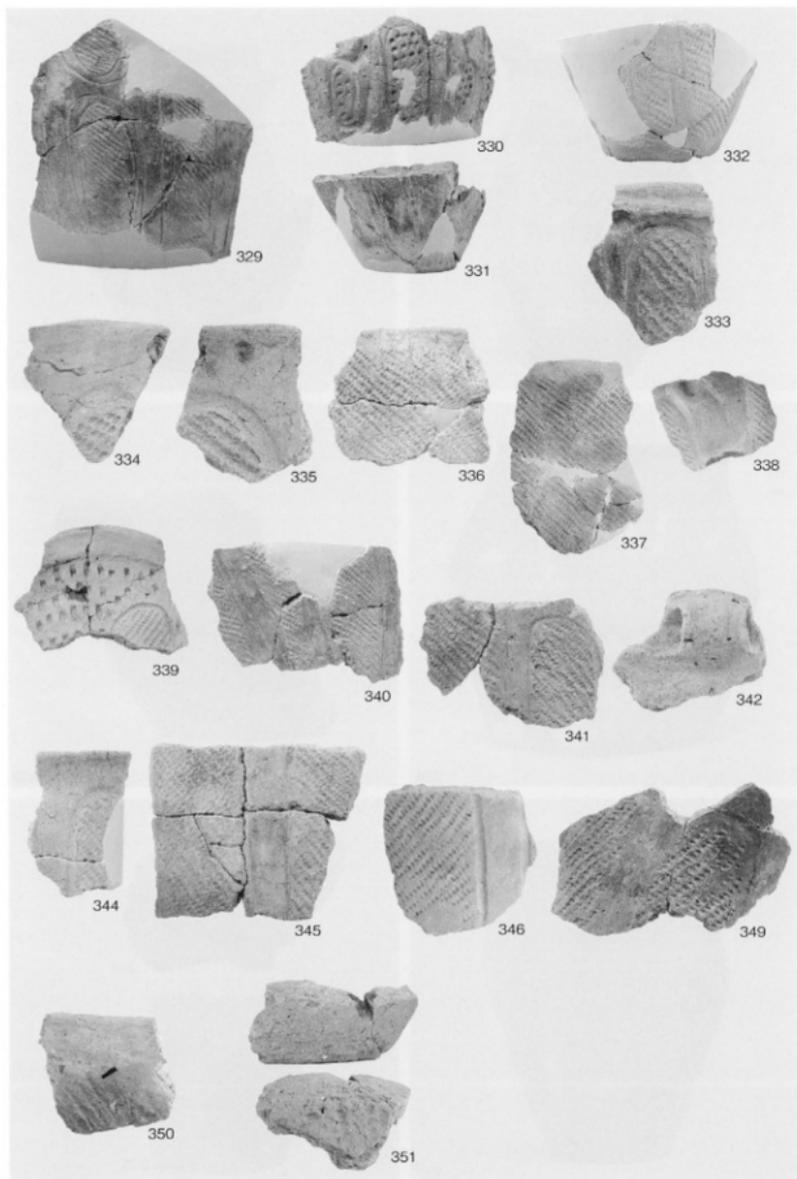


327



325

328



写真図版87 24～27号住居跡出土遺物



360



357



352



353



354



355



356



358

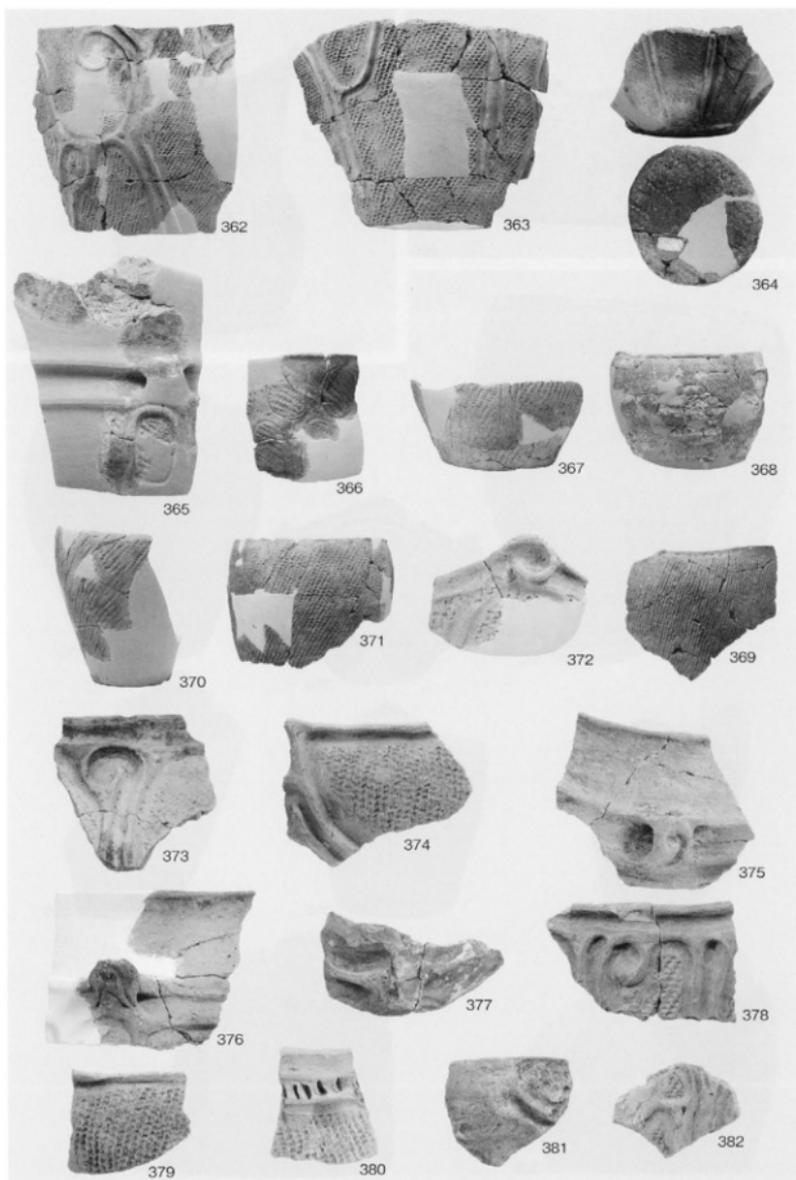


359

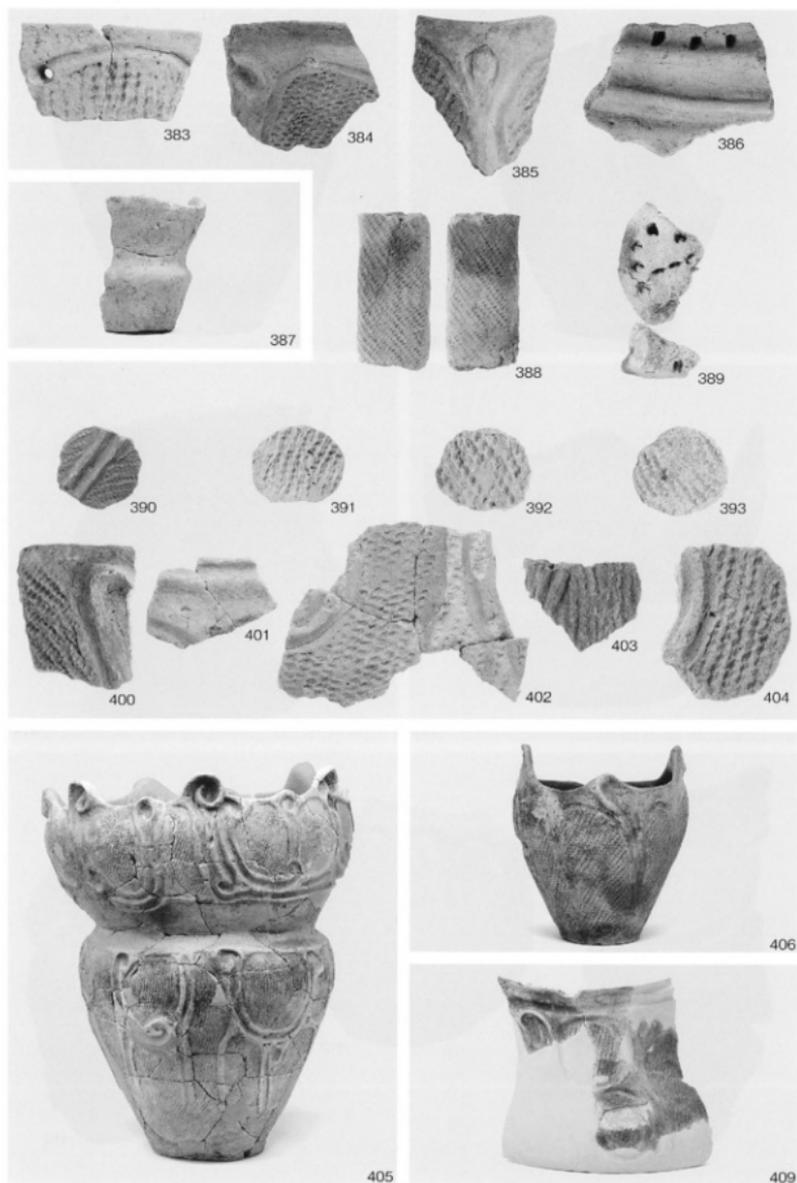


361

写真図版88 28号住居跡出土遺物(1)



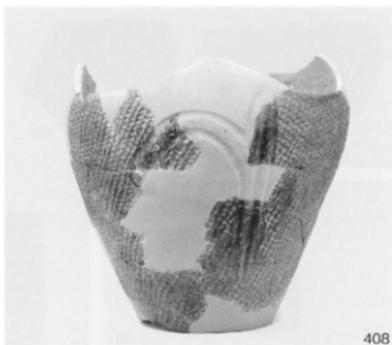
写真图版89 28号住居跡出土遺物(2)



写真図版90 28～30号住居跡出土遺物



407



408



410



414



411

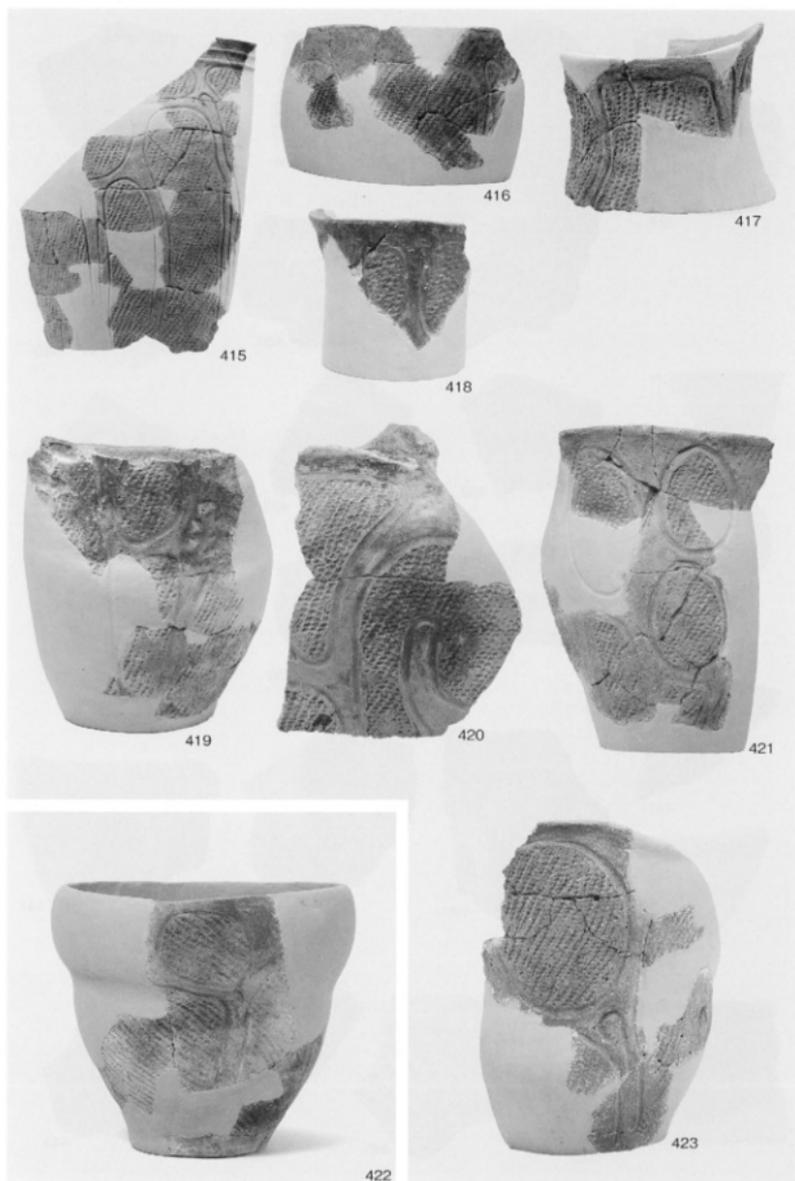


412

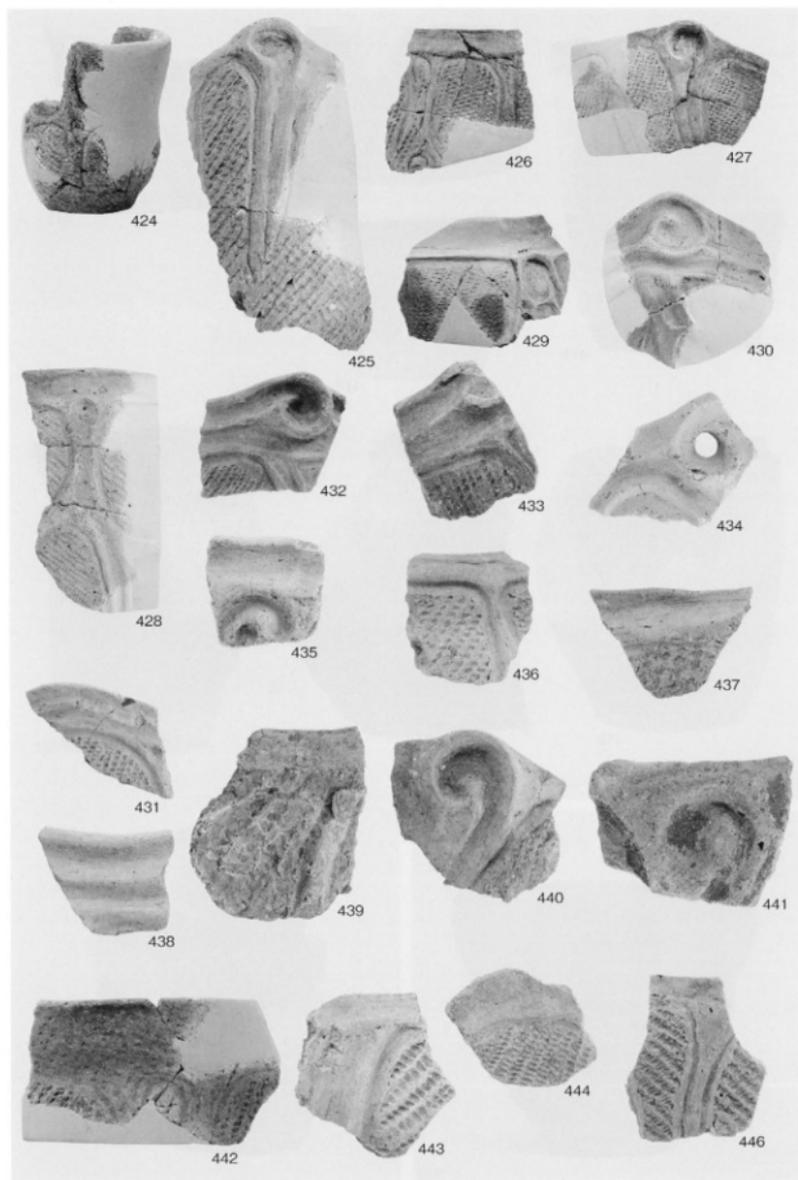


413

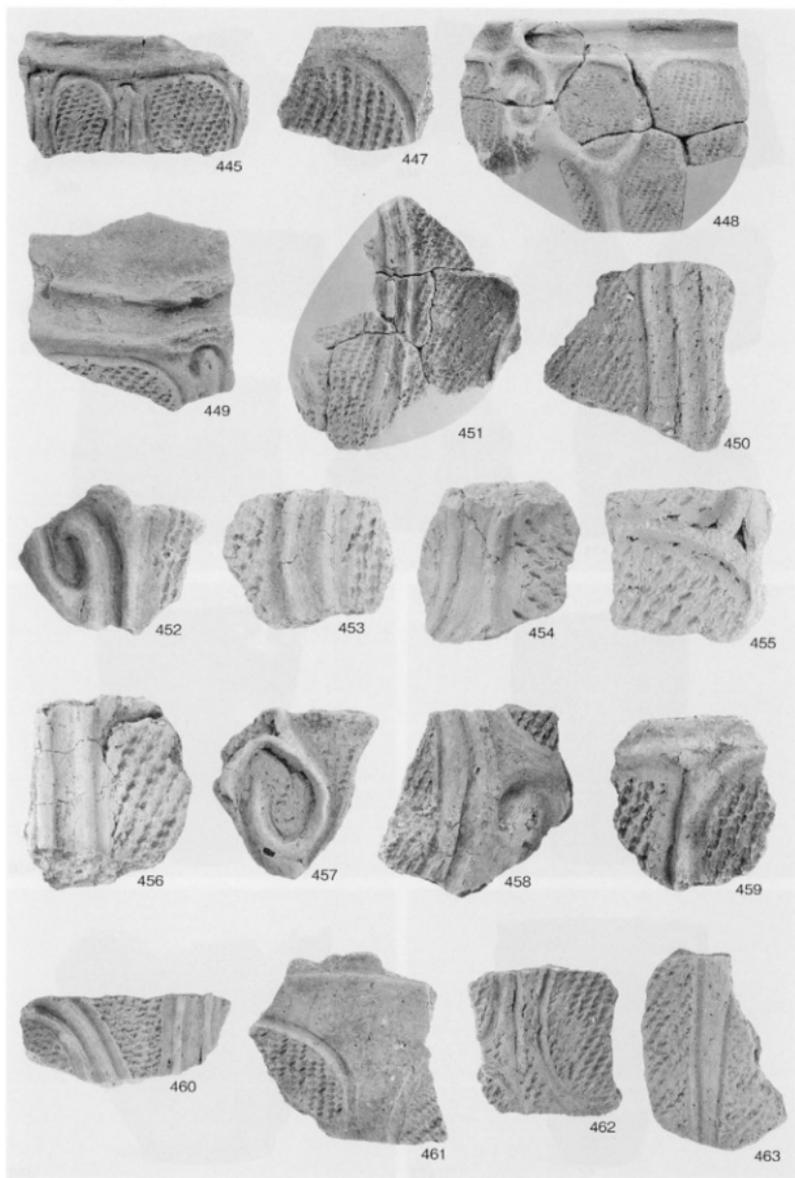
写真図版91 30号住居跡出土遺物(1)



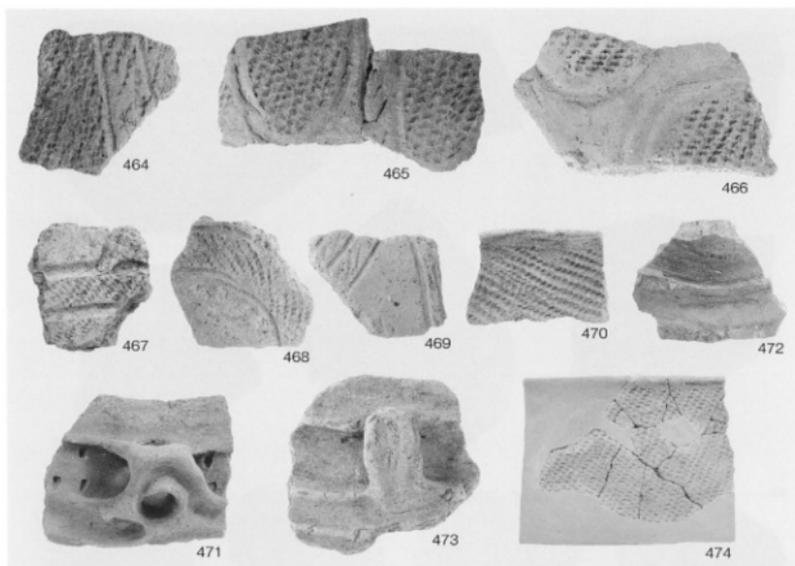
写真図版92 30号住居跡出土遺物（2）



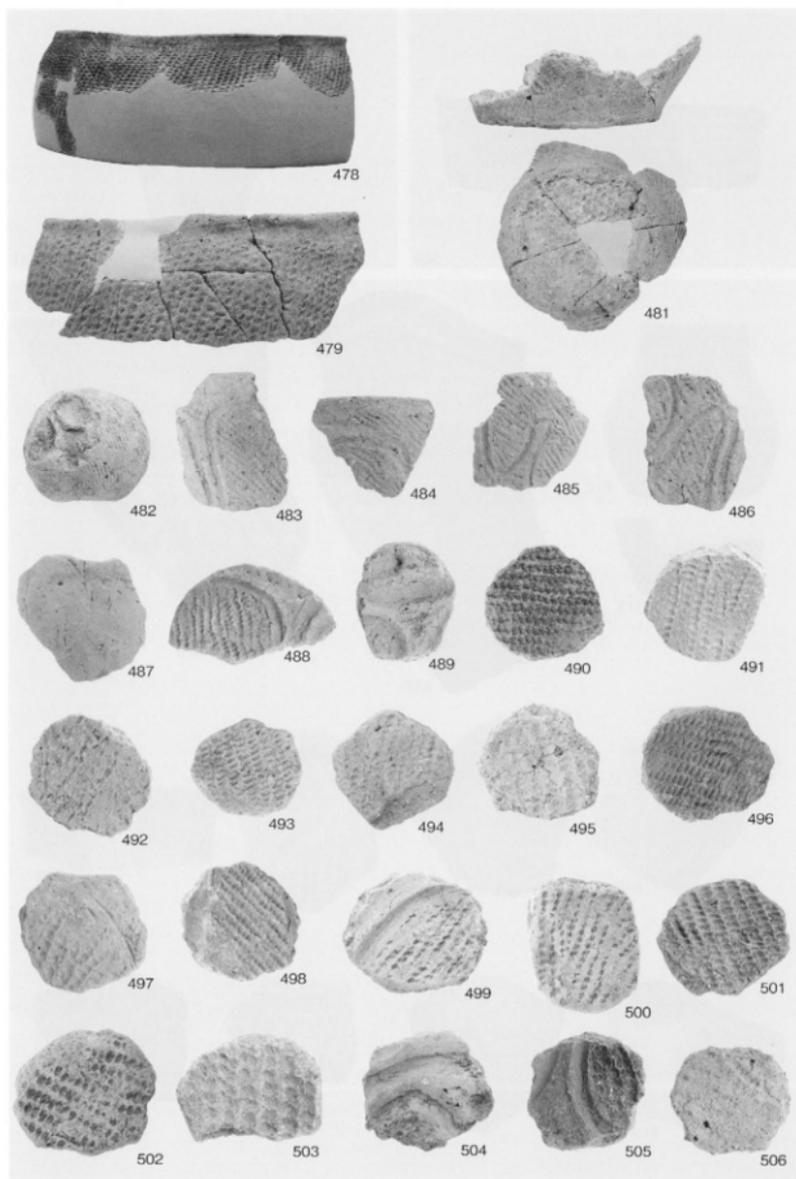
写真図版93 30号住居跡出土遺物(3)



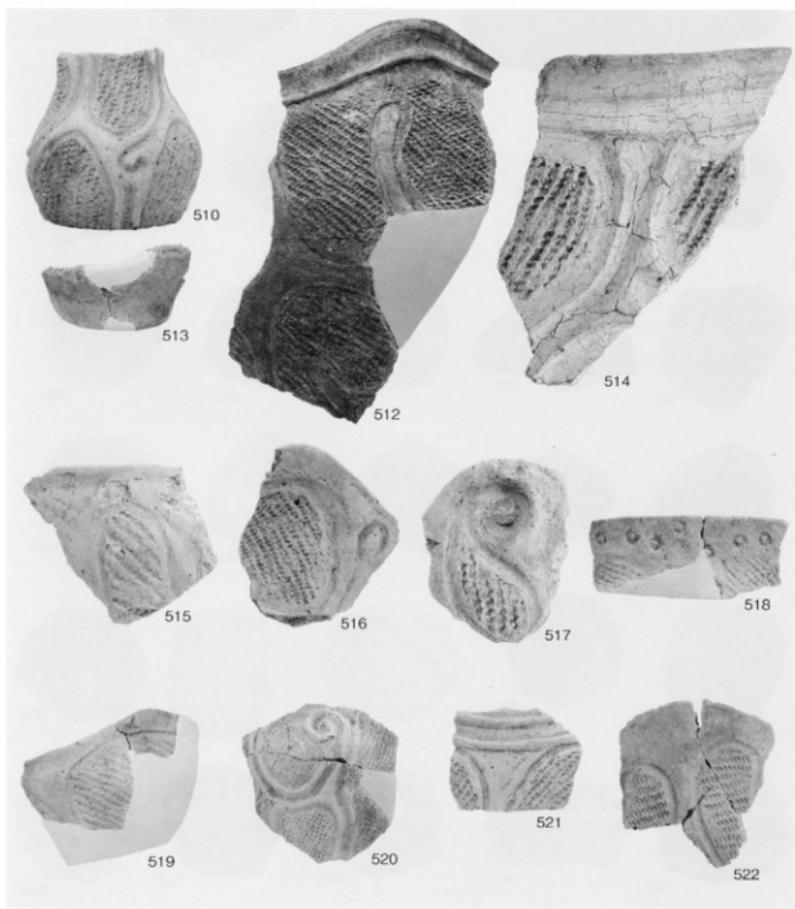
写真図版94 30号住居跡出土土器(4)



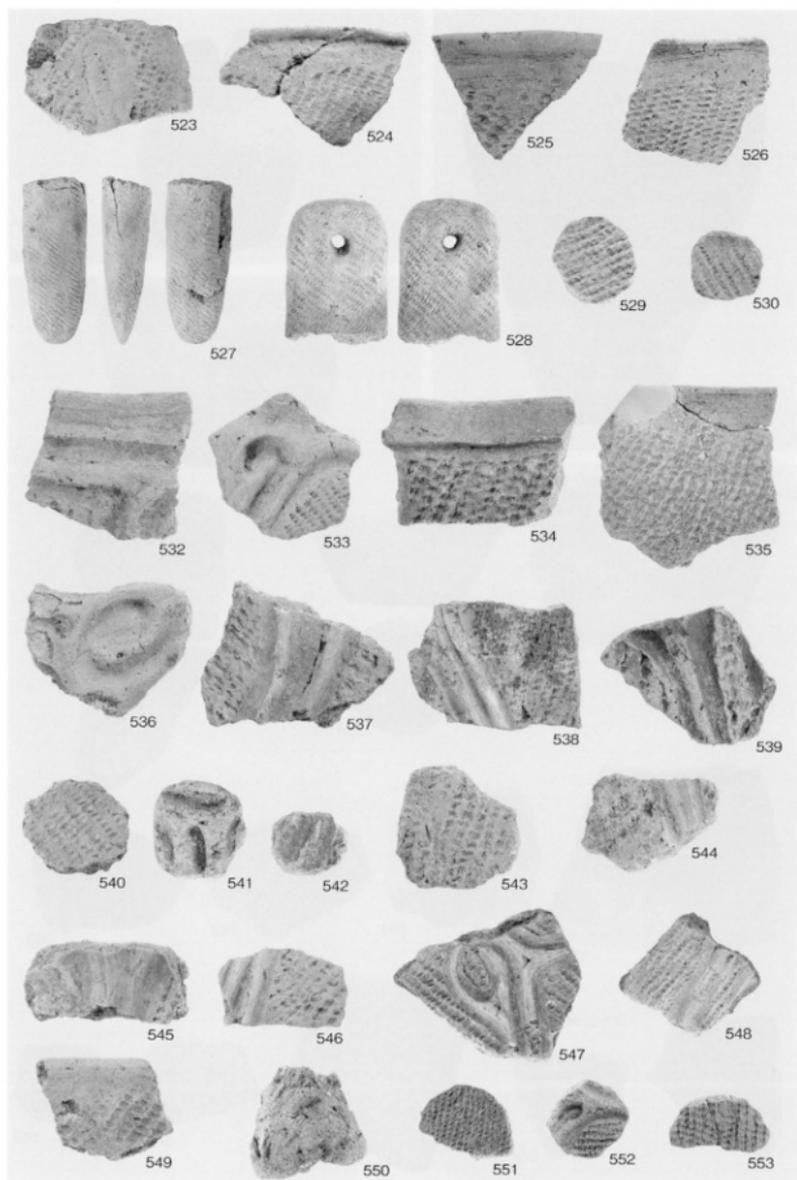
写真図版95 30号住居跡出土土器(5)



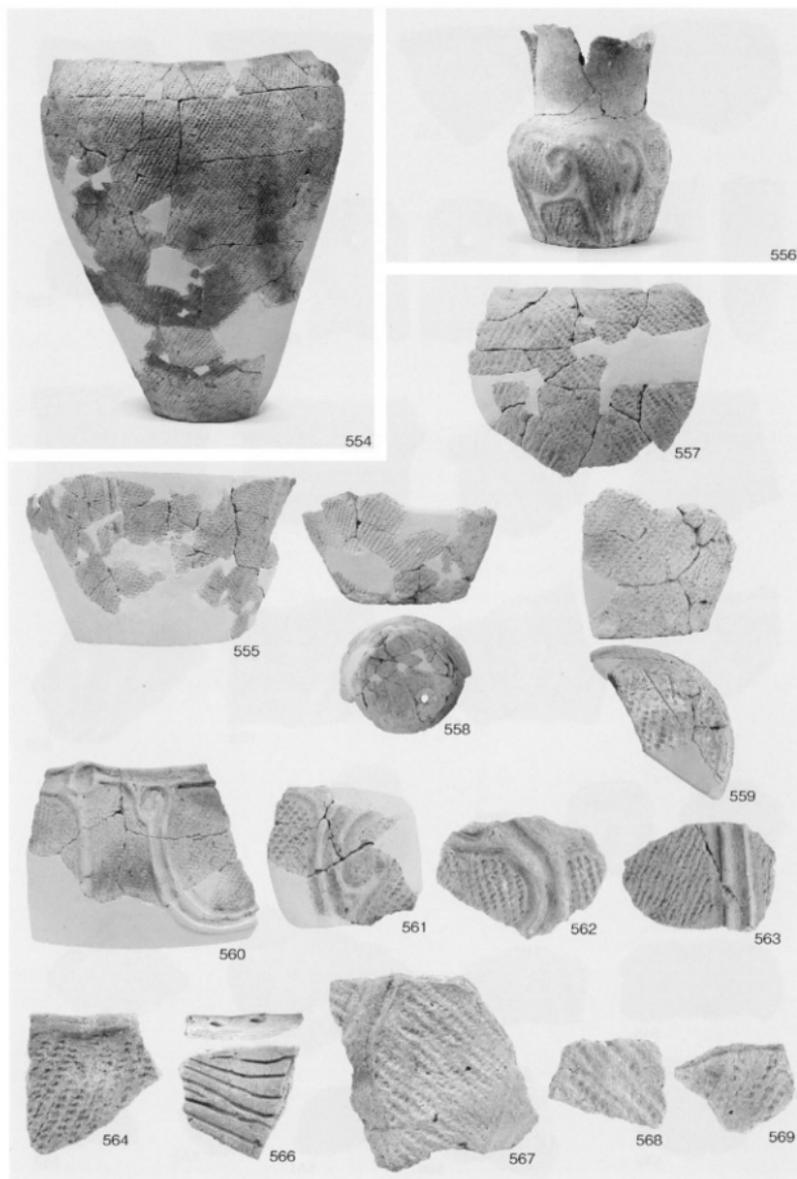
写真図版96 30号住居跡出土土器(6)



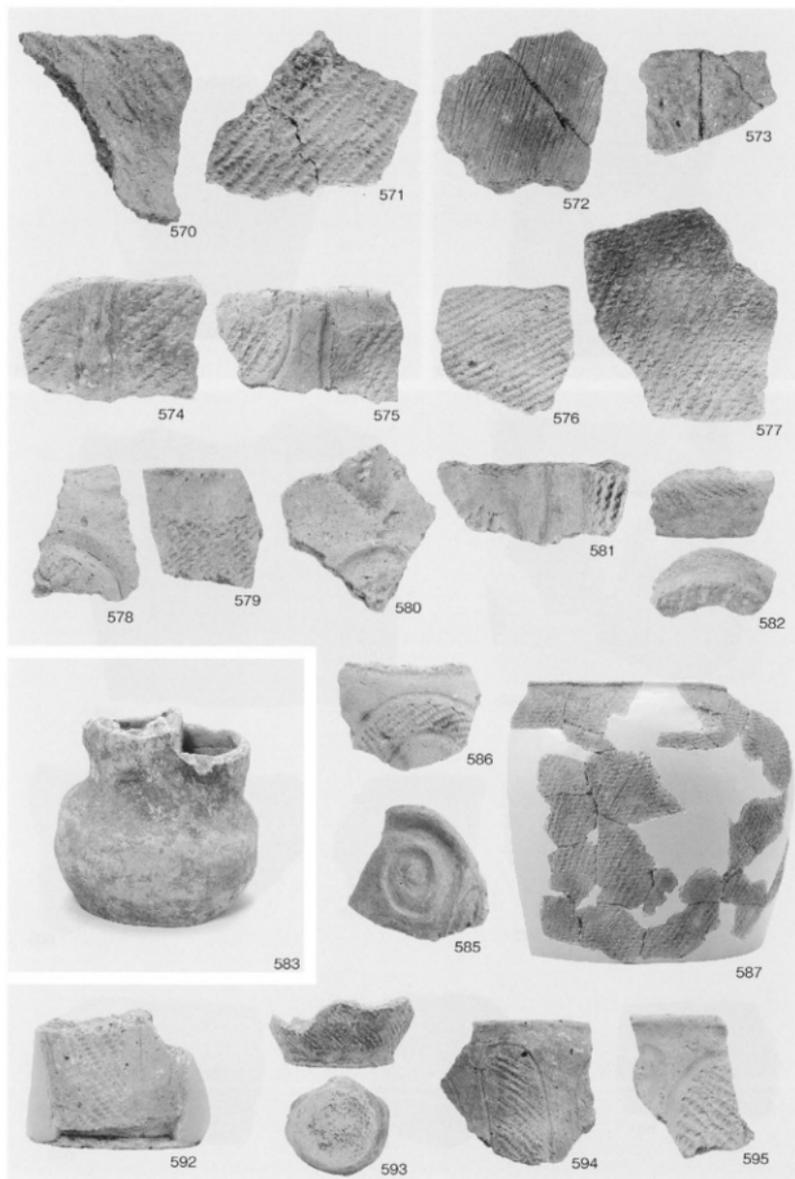
写真图版97 31号住居跡出土土器



写真図版98 31～34号住居跡出土土器



写真図版99 35・36号住居跡出土土器



写真図版100 1～11号住居状遺構出土遺物



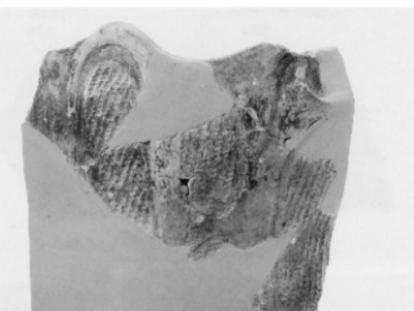
590



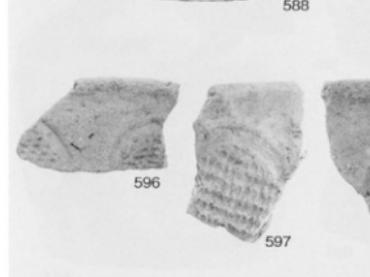
591



588



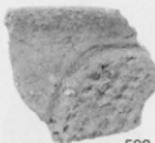
589



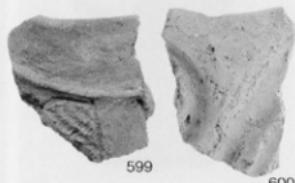
596



597

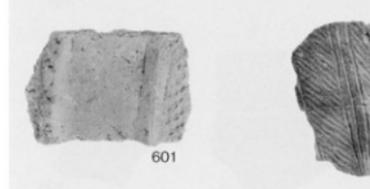


598



599

600



601

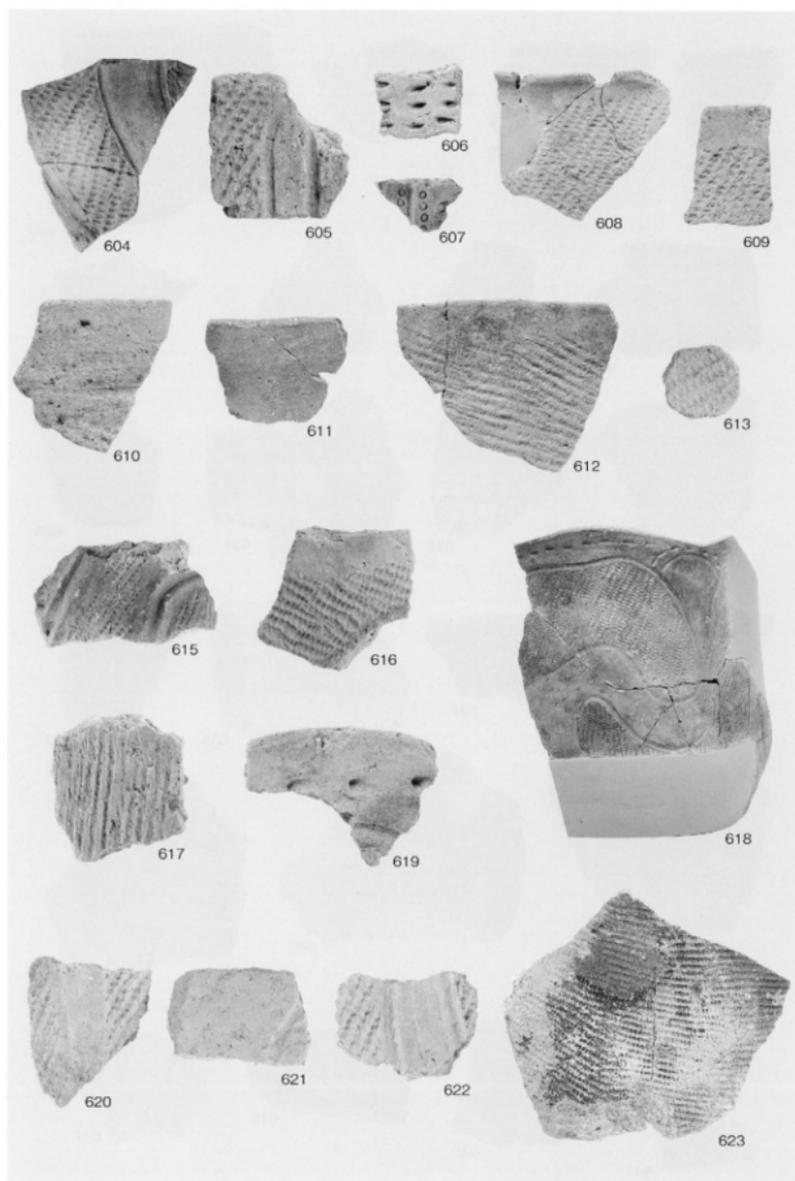


602

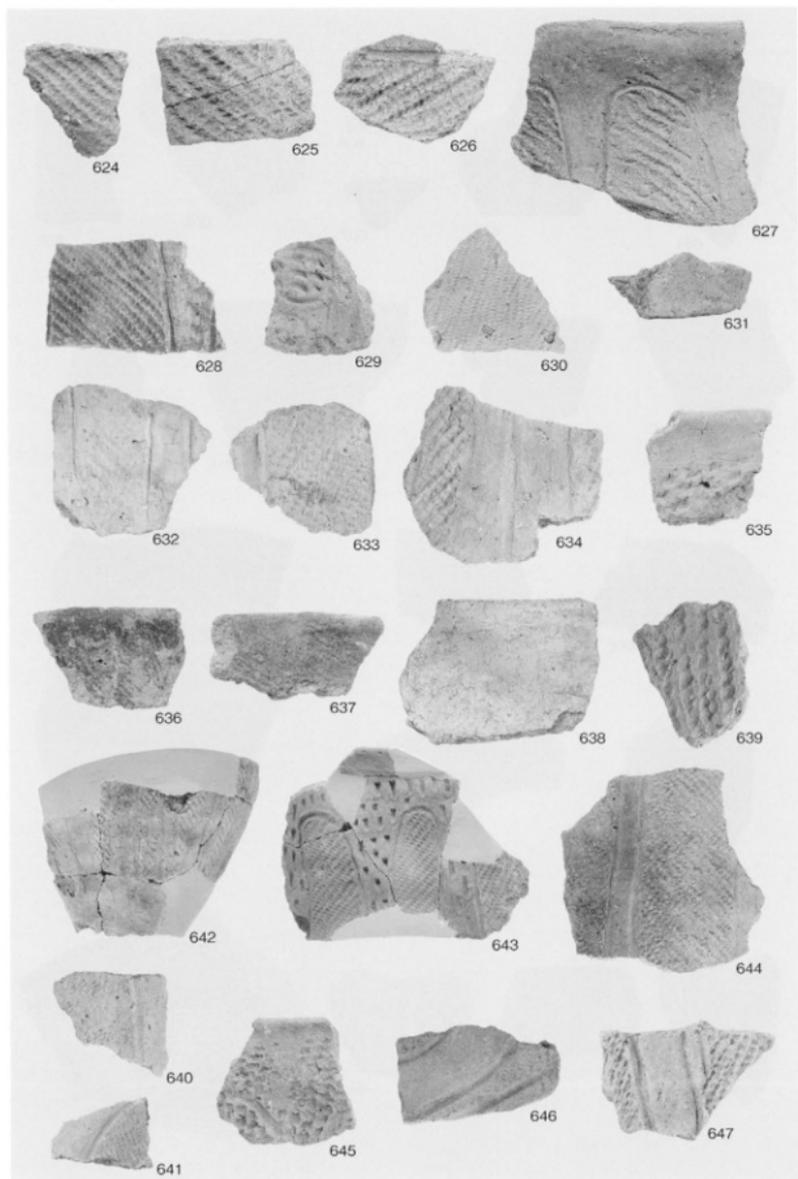


603

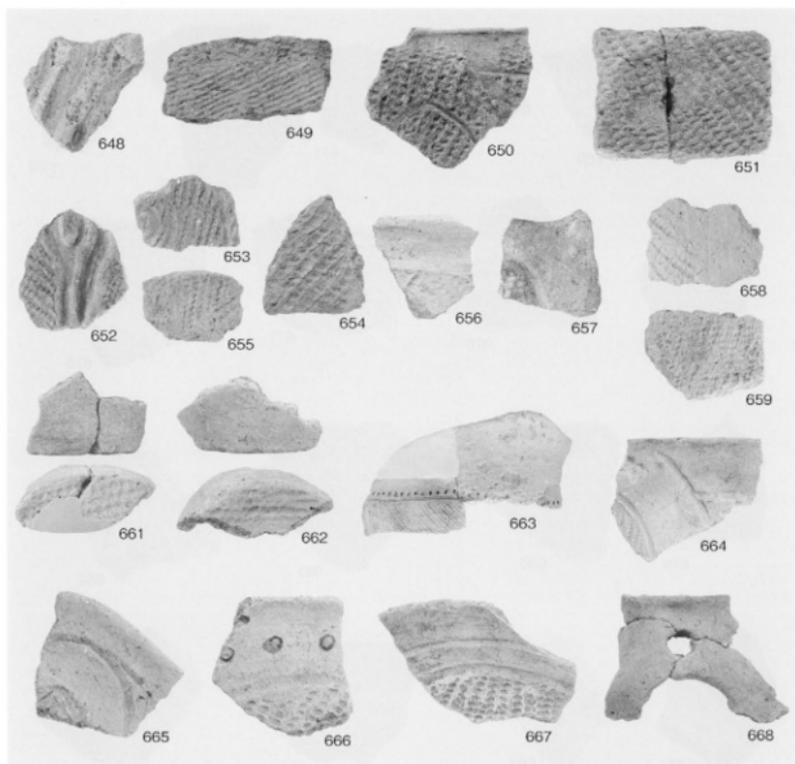
写真図版101 11号住居状遺構出土土器



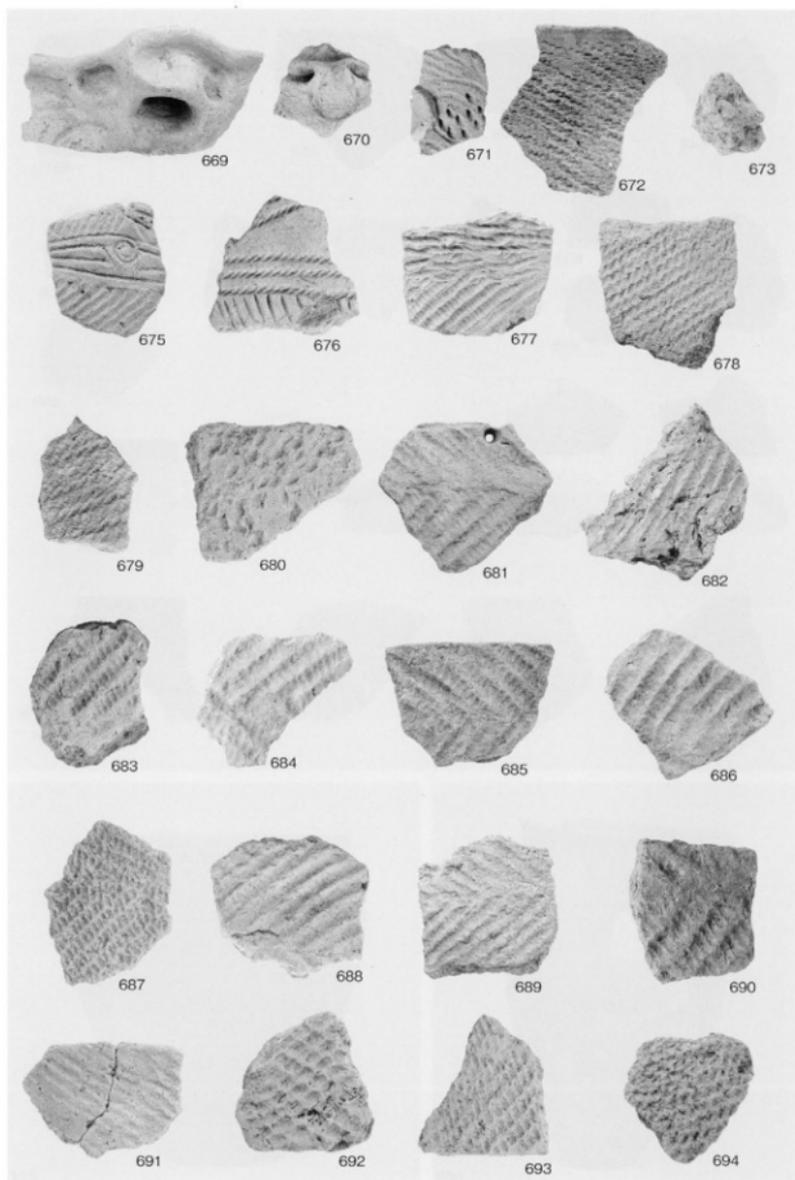
写真図版102 11～14号住居状遺構・土坑出土土器



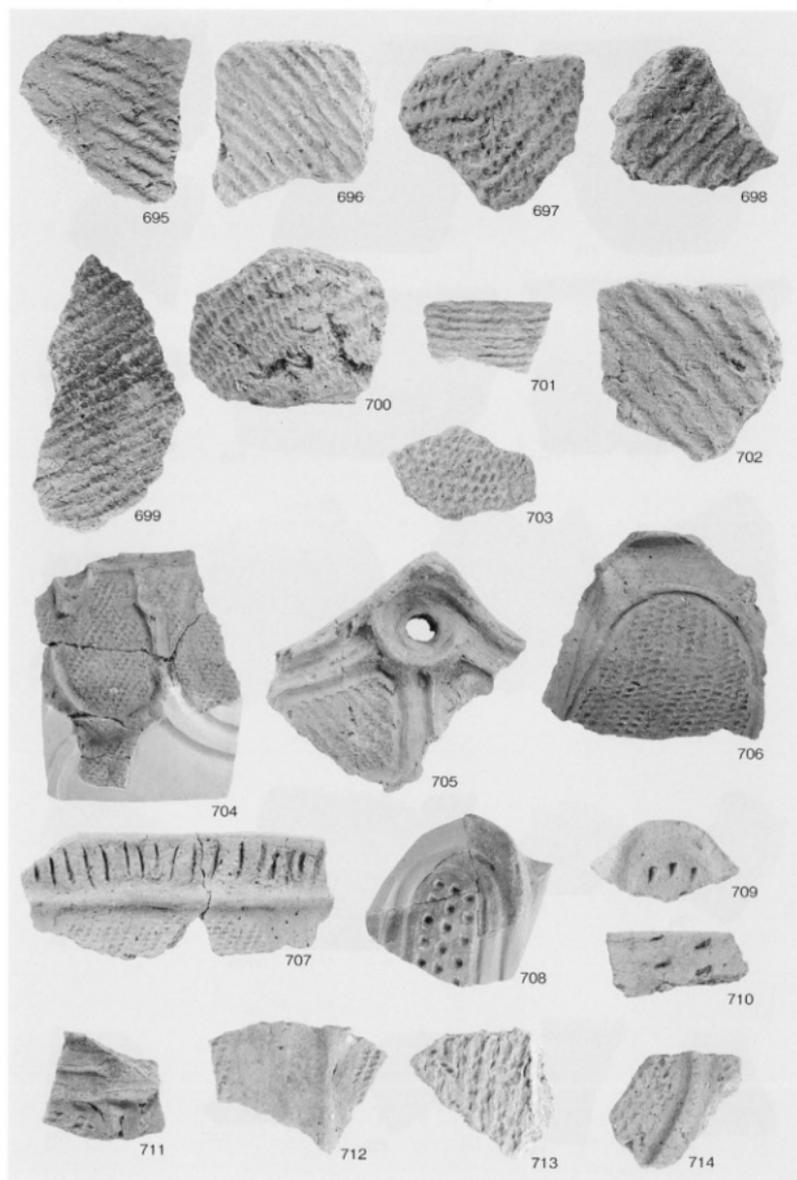
写真图版103 土坑出土土器



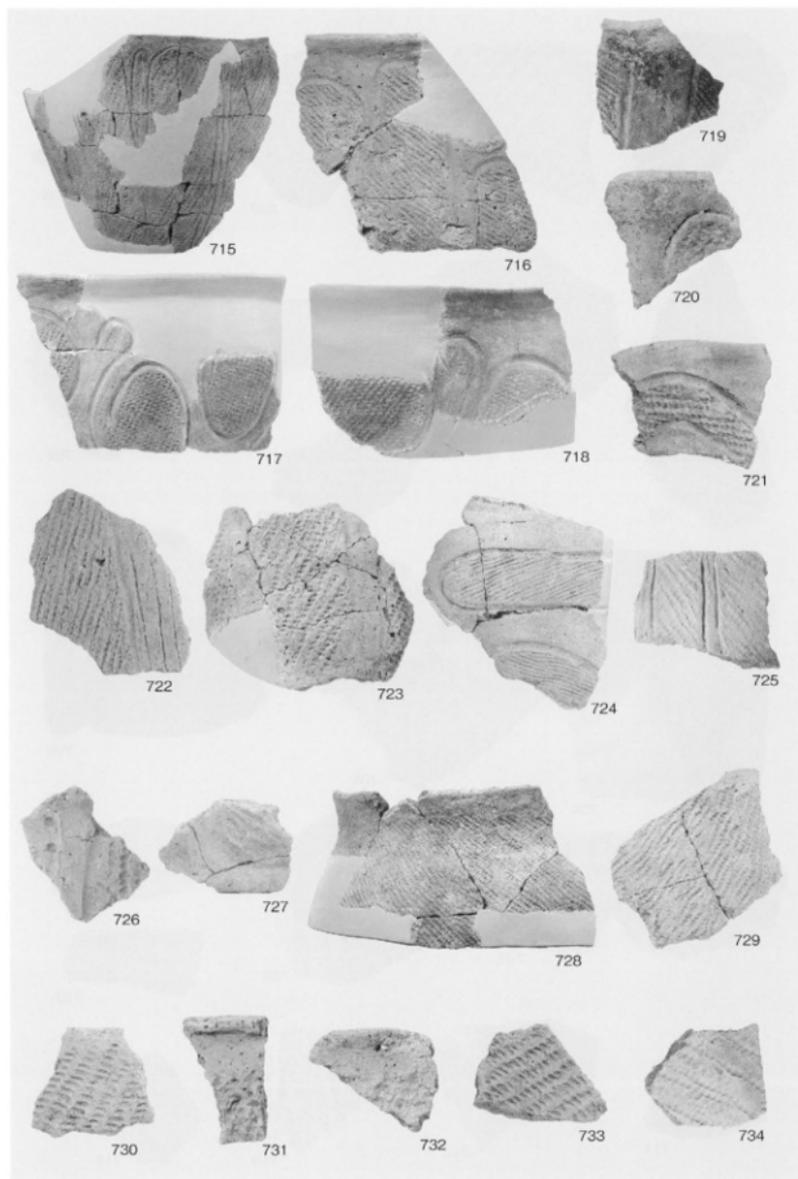
写真图版104 土坑、掘立柱建物、包含層、37号住居跡出土土器



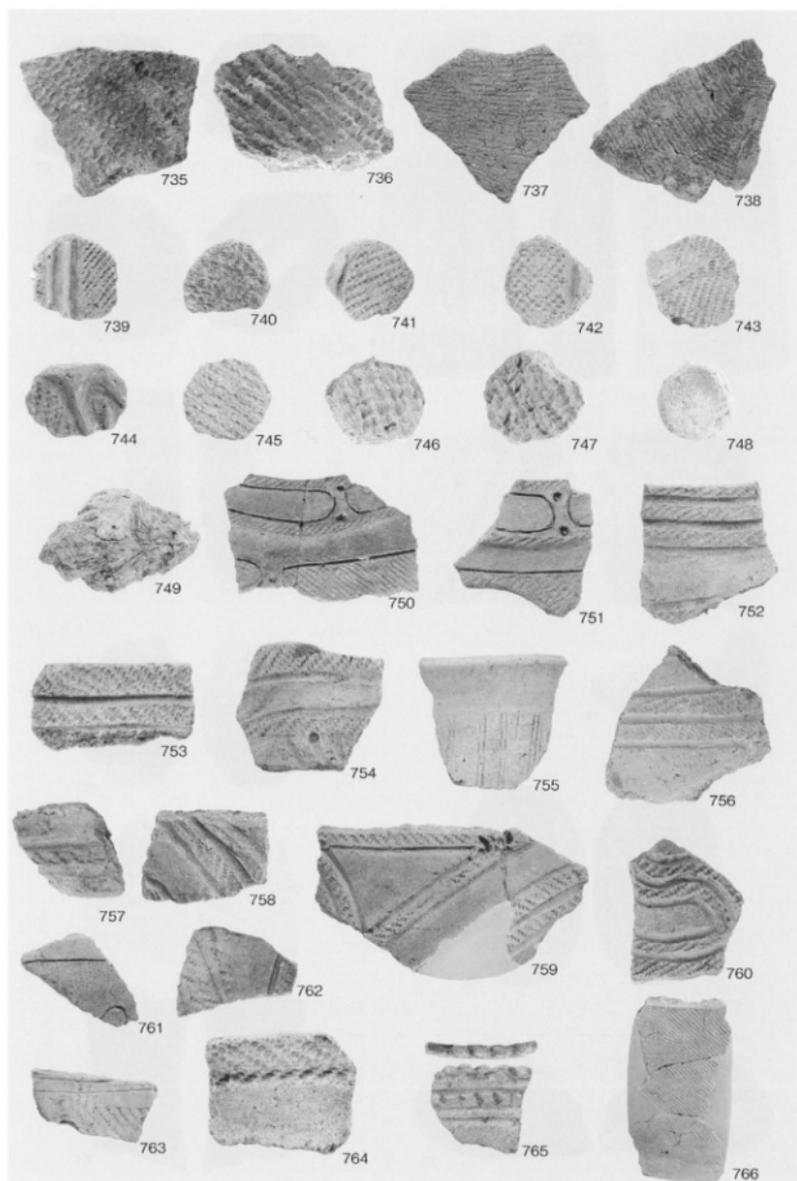
写真図版105 包含層、遺構外出土土器



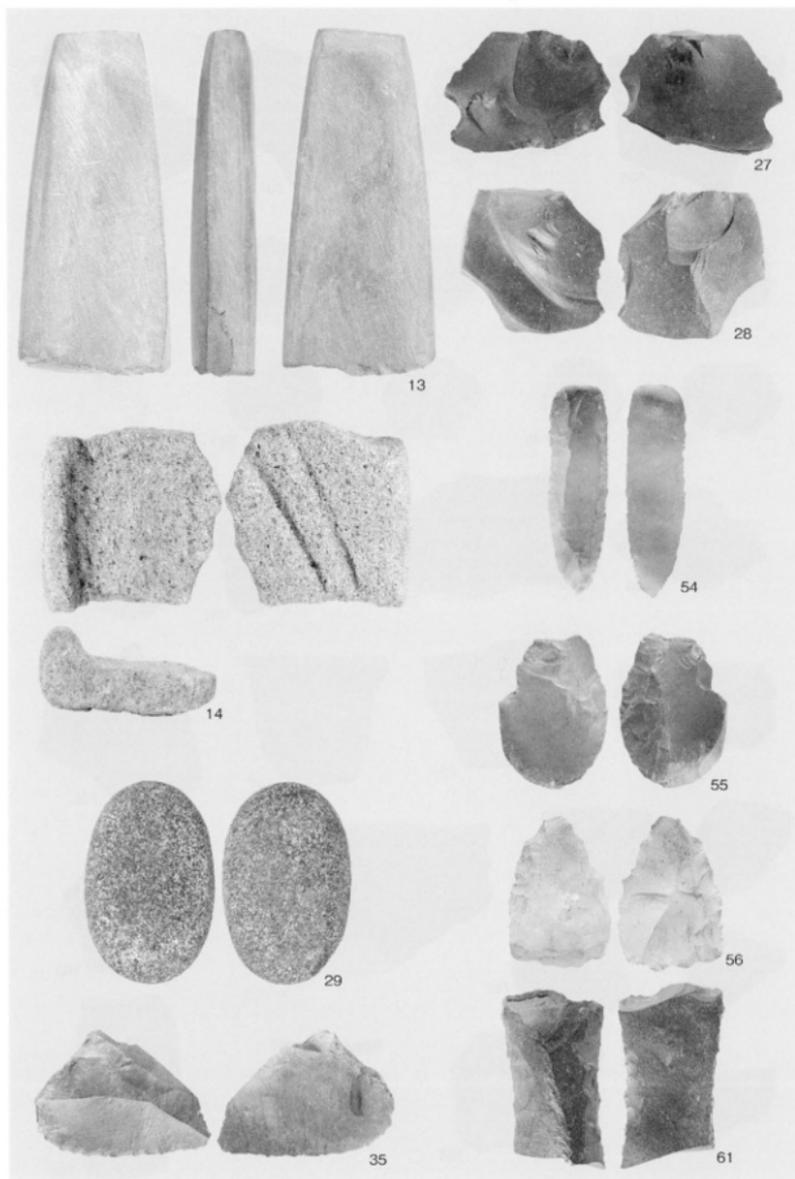
写真図版106 遺構外出土土器(1)



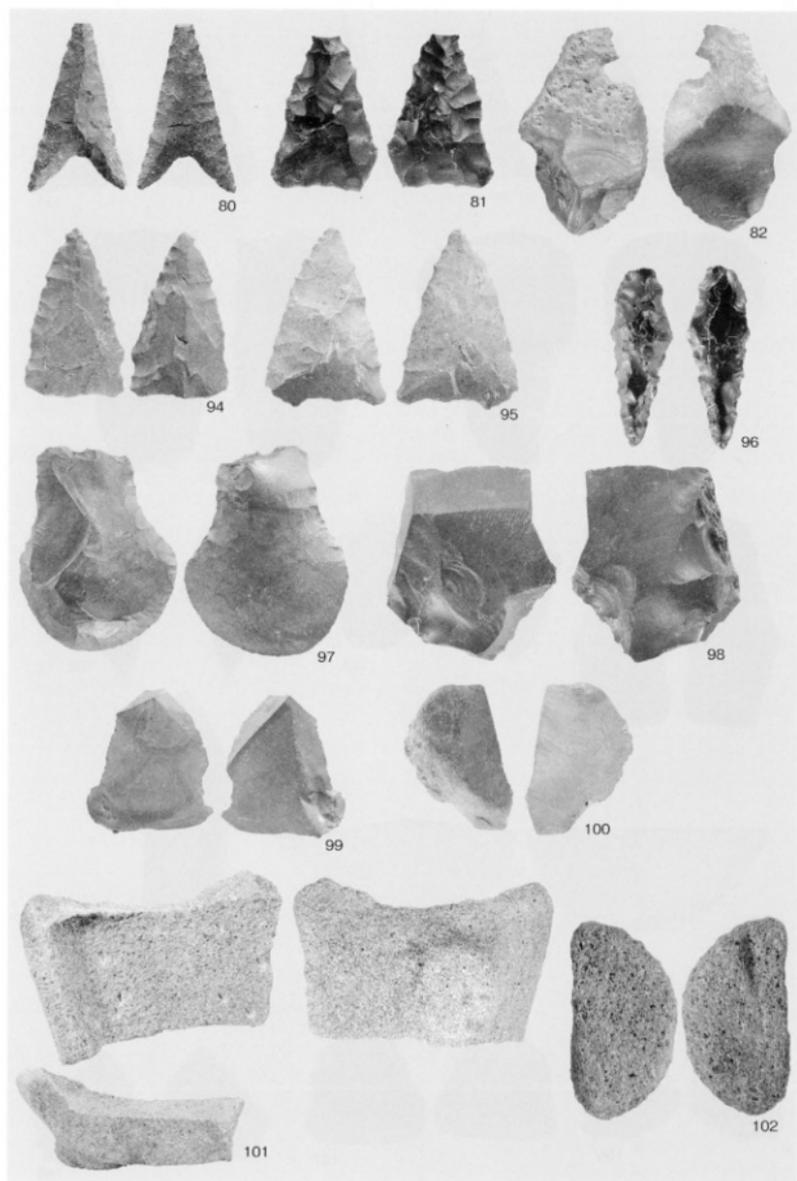
写真図版107 遺構外出土土器（2）



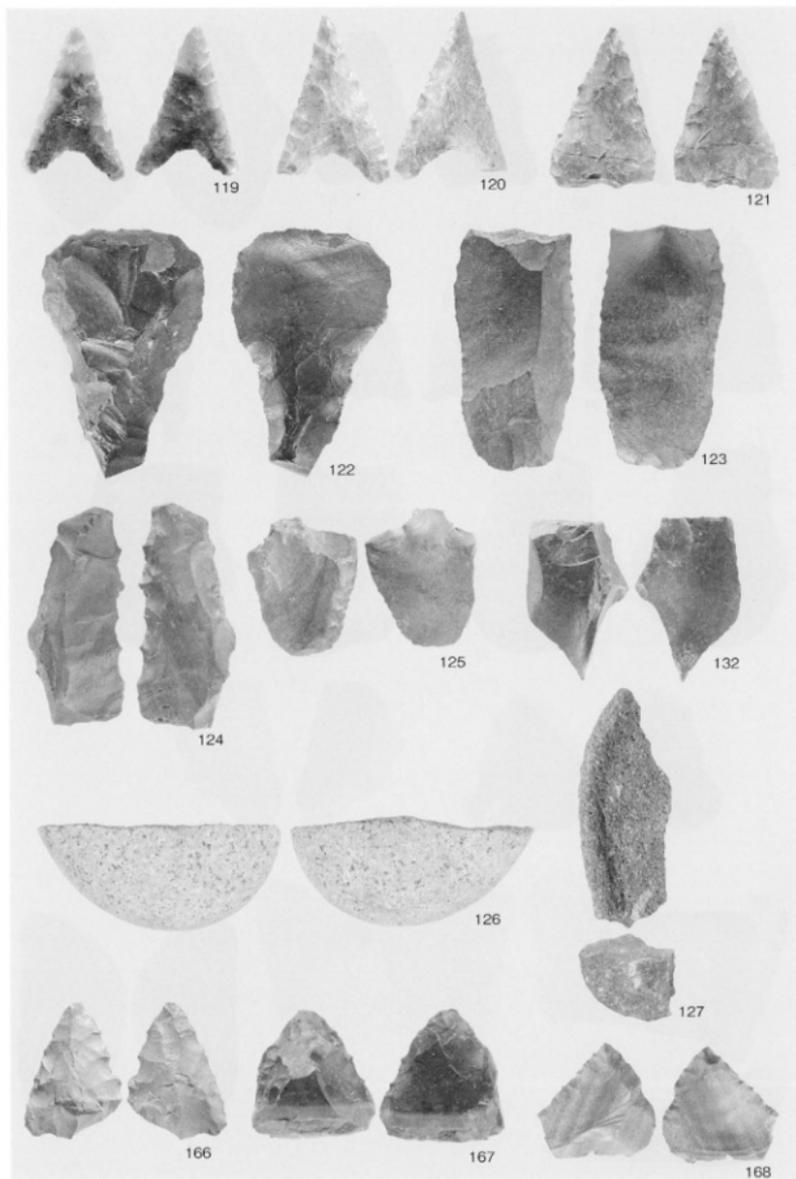
写真図版108 遺構外出土土器(3)



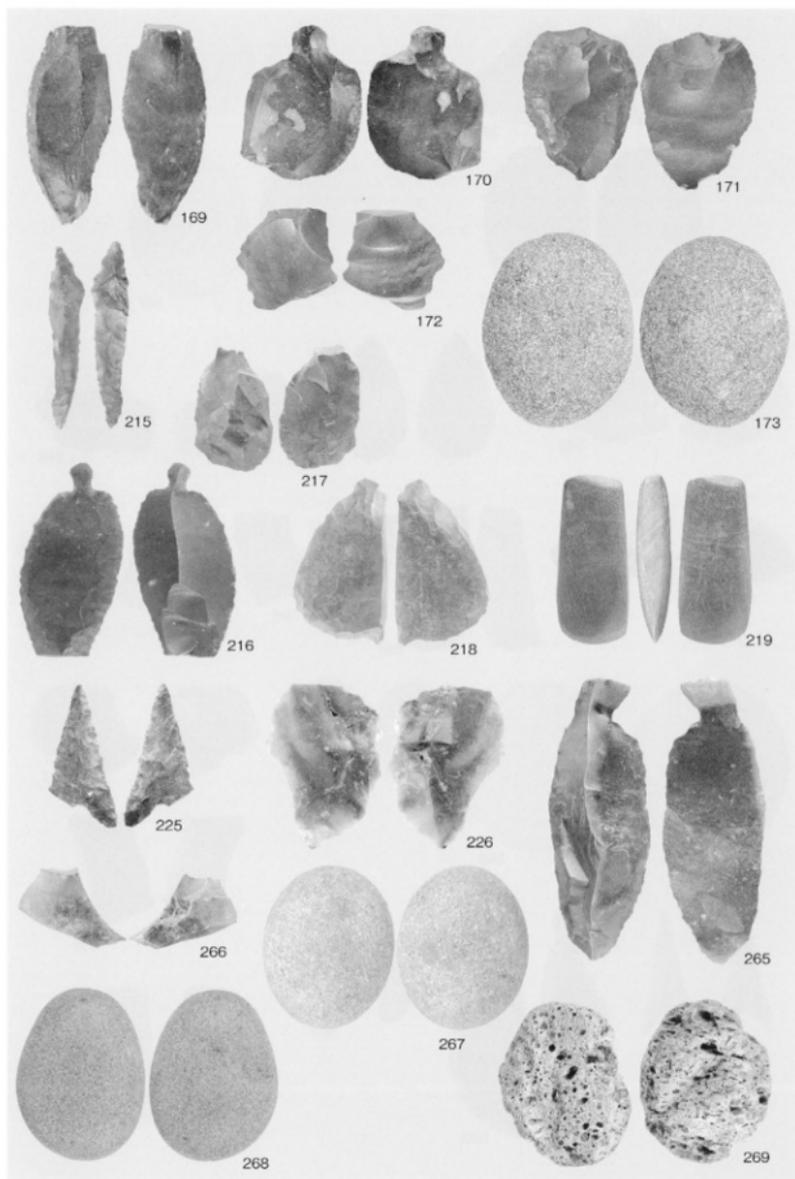
写真図版109 1～9号住居跡出土石器



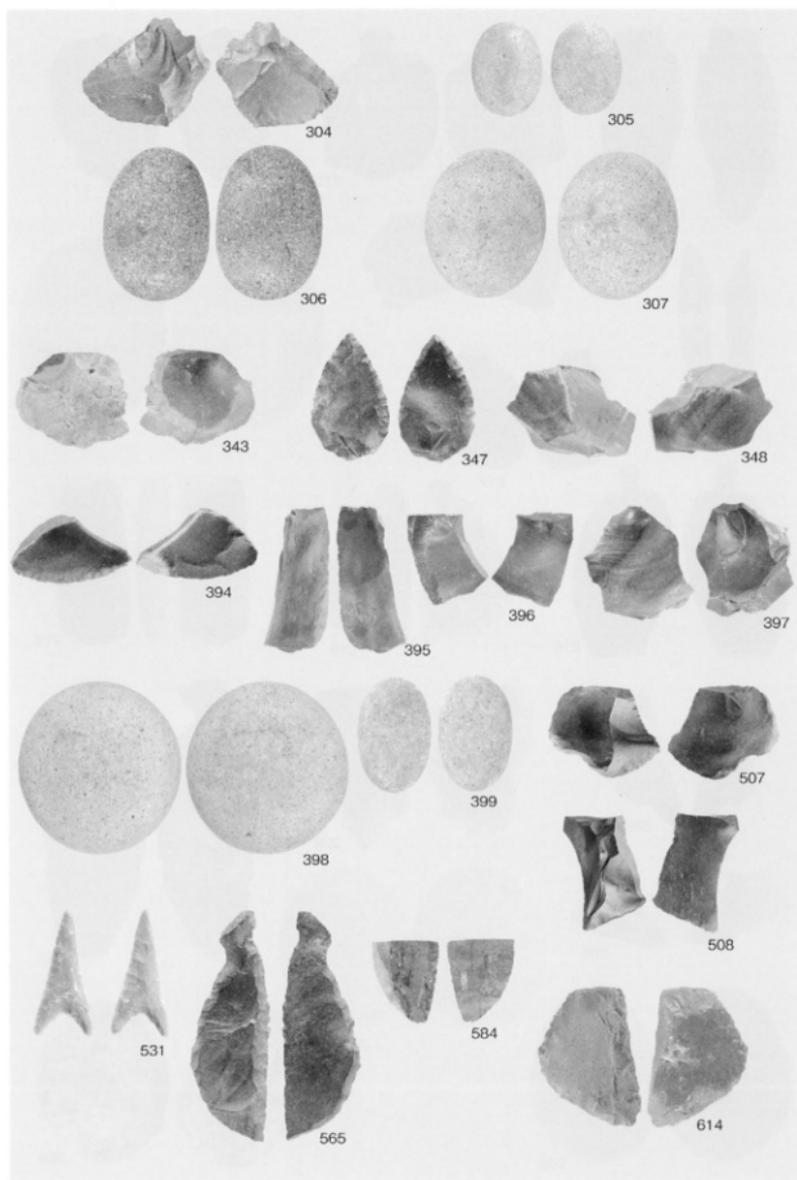
写真图版110 10·11号住居跡出土石器



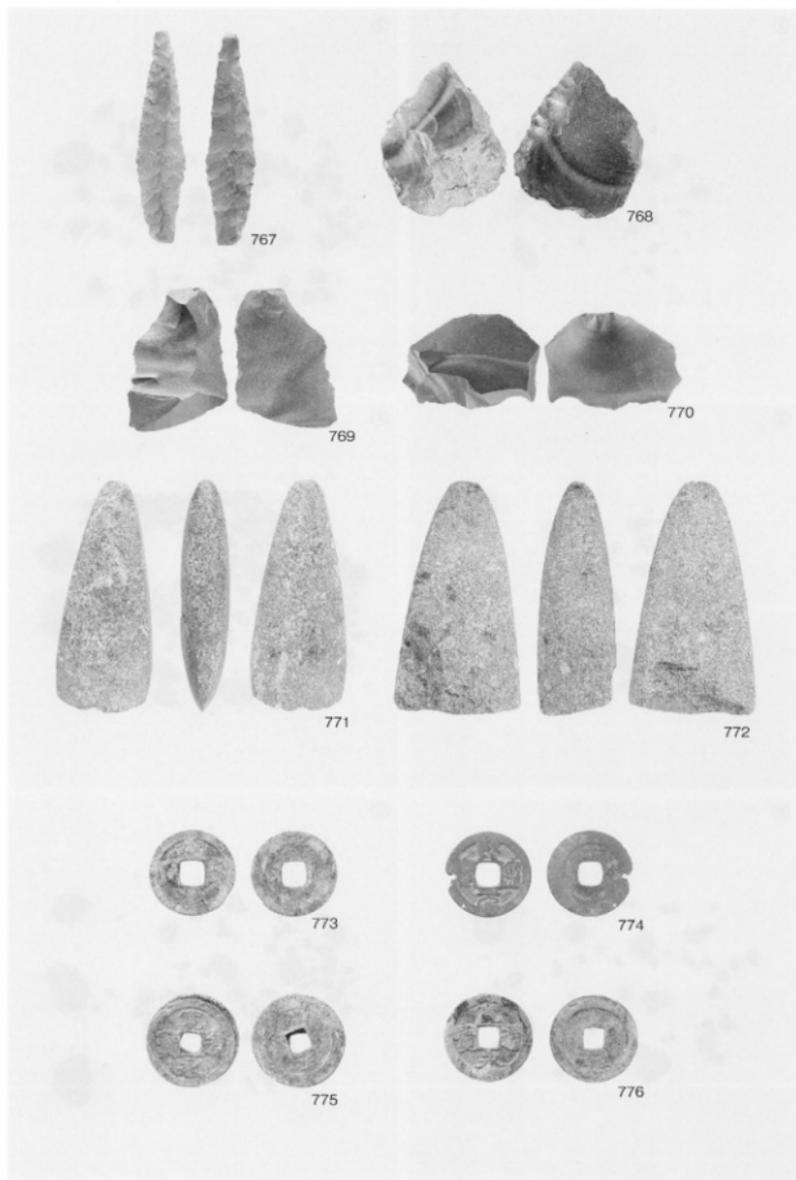
写真図版111 12～14号住居跡出土石器



写真図版112 14～18号住居跡出土石器

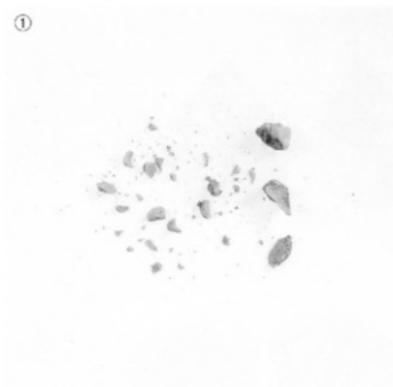


写真図版113 21～36号住居跡、8・11号住居状遺構出土石器



写真図版114 遺構外出土石器、中・近世墓出土古銭

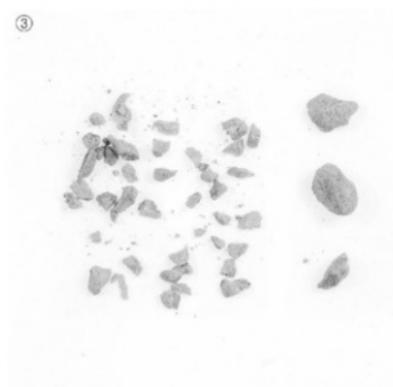
①



②



③



④



⑤

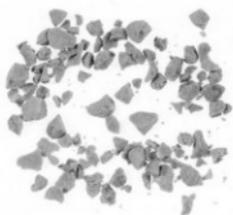


⑥

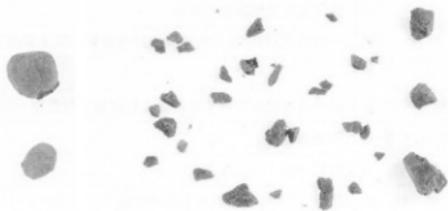


写真図版115 コハク(1)

⑦



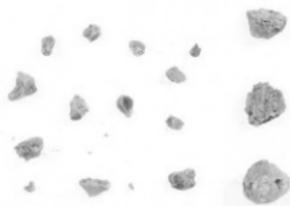
⑧



⑨



⑩



報告書抄録

| | | | | | | | | |
|---------------|--|------------------------|--------------------------------------|-------------------------------|--|-------------------------------|--------|---------------------|
| ふりがな | ほろたいいせきほくつちようさほうこくしょ | | | | | | | |
| 書名 | 袈帯遺跡発掘調査報告書 | | | | | | | |
| 副書名 | 一般国道340号和井内地区道路改築事業関連発掘調査 | | | | | | | |
| 巻次 | | | | | | | | |
| シリーズ名 | 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第522集 | | | | | | | |
| 編著者名 | 須原 拓・戸根貴之 | | | | | | | |
| 編集機関 | (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター | | | | | | | |
| 所在地 | 〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 2008年2月15日 | | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード 市町村 遺跡番号 | | 北緯 ° ° ' " | 東経 ° ° ' " | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
| 袈帯遺跡 | 岩手県宮古市 和井内第21 地割字三十一割 30-4ほか | 032026 | LF19-2060 | 39度 41分 50秒 | 141度 43分 20秒 | 2006.05.01 ～ 2006.11.10 | 8,698㎡ | 一般国道340号和井内地区道路改築事業 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | | 主な遺物 | 特記事項 | | |
| 袈帯遺跡 | 集落跡 | 縄文時代 中期後葉 近世 | 竪穴住居跡 住居状遺構 土坑 掘立柱建物 近世墓 | 37棟 14棟 64基 3棟 5基 | 縄文土器（早期～ 晩期、主体は中期 後葉、大木9式）、 土製品（斧状土製 品、土製耳飾り、 土製円板など）、石 器、コハク（非成 品）、古銭（寛永通 宝、熙寧元寶） | 縄文時代中期後葉～ 末葉の集落遺跡 | | |
| 要約 | 縄文時代中期後葉～末葉（大木9～10式期）の集落遺跡で見つかった36棟の竪穴住居跡からは、複式かや石囲炉が検出している。竪穴住居数は多いものの、出土した土器からは時期幅がみられないので、比較的短時期に営まれた集落と考えられる。出土遺物で多いのは、大木9～10式に比定される土器群である。他に斧状土製品が8点、土製耳飾り1点などが出土している。石器は石鏃などのツール類がみつかったが、多くはない。またコハク（非成品）が出土している。他に前期前葉の住居状遺構、土坑各1基、晩期前葉の竪穴住居跡1棟がある。また中・近世墓も見つかり、墓からは人骨と共に古銭が出土した。 | | | | | | | |

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第522集

袈帯遺跡発掘調査報告書

一般国道340号和井内地区道路改築事業関連発掘調査

印刷 平成20年2月12日

発行 平成20年2月15日

発行 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電話 (019) 638-9001
FAX (019) 638-8563

印刷 トーバン印刷株式会社
〒020-0823 岩手県盛岡市門二丁目2-3
電話 (019) 653-6333(代)

